

ガンダムビルドダイ  
バーズ・スピリッツイ  
ンテンション

さくらおにぎり

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『ELダイバー動乱』

『ファーストELダイバー・サラ』を名乗る電子生命体ELダイバーによる、GBNの運営権のハッキング事件の総称。

サラ某は『ルビスシステム』と名付けられたコンピュータウイルスをネットワーク上に拡散、増殖させることで、非常に強固なプロテクトを備えるGBN運営をいとも簡単に乗っ取った。

しかしその24時間後に、有志のフォースによって電撃的にサラ某を打倒、その直後に月周辺のルビスシステムの暴走が発生、これを前に一千万人以上ものプレイヤーが立

ち上がり、GBNは崩壊を免れた。

有志のフォースから事情を聴取した運営は、プレイヤーの意見をよく聞いては汲み取り、三日間のメンテナンスの後にGBNは一新された。

これが、約一年前に起きた事件の一連であった。

そして今現在、運営は頻繁にメンテナンスやアップデートによるデータの更新を繰り返し、ELダイバーの過剰な誕生を抑制していた。

結果、ELダイバーの誕生数は減少したものの、同時にその存在を運営が事細かく保護、管理下に置くことで、第二第三の動乱事件を未然に防止していた。

その一方で、動乱の一件から運営の中でもELダイバーの存在を危険視する者が現れ、ELダイバーの保護を優先する穏健派と、ELダイバーの排除を推し進める強硬派と二分することになる。

さらに、ELダイバーの排除を積極的に行う過激派のプレイヤーが現れ始め、その中にはELダイバーの排除を名目に悪質な行為に走る者も少なく無く、今やGBNの治安は悪化の一途を辿っていた。

しかし、そんな時代の渦中であつても関係なく、マイペースにプレイするダイバー達もまた存在するのだった。

これは、己の正義と信念を貫く、”意思”の物語――。

※この小説は『ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツ』の続編です。

同様に p i x i v にも投稿しておりますが、ハーメルンではやっぱり挿絵が投稿出来ないもので、こちらでは挿絵無しです。

挿絵アリが読みたい方は p i x i v の方へどうぞ。

# 目次

1 話	迅雷の如く	1
2 話	偶然と必然と	42
3 話	連撃のオデッサ作戦	89
4 話	ガイドポストは紅く染まる	
5 話	錆び付いた刃	170
6 話	Wild wing girl	
7 話	己の正義を貫いて	252
8 話	迷い解き放つ時	295
9 話	七星エクリプス	340
10 話	デートコースはありふれた街の	

1 話	初陣！フォース・リヴェルタ	
2 話	Cold moon	478
3 話	傷痕	519
4 話	大地は雨に打たれて	563
5 話	鴉野神社へようこそ	609
6 話	撃進のアドラスティア	650
7 話	彼女の見た世界	699
8 話	悪意の矛先	745
9 話	百花繚乱！乙女達の戦い	
10 話	それぞれの時間	834
中で		382

1041	2 5 話	D i v e r , s h i g h	994
	2 4 話	ジル	957
	2 3 話	裁きの閃光、 根絶の業火	918
	2 2 話	意思の名の元に	878
	2 1 話	叛乱	

# 1話 迅雷の如く

夜の星明りさえ霞むほどのネオンライトが、夜道をきらびやかに照らし、街を眠らせない。

とは言うものの、この街明かりは本当に消えることはない。

それは、この街ー世界が、そもそも現実のものではないのだから。

ガン普拉バトル・ネクサスオンライン。通称、『GBN』と呼ばれる、世界規模のオンラインゲームだ。

そのオンラインゲームの中で再現される、真昼のように明るい中道を、ジオン軍の佐官クラスの軍服を着こなした、一人の男が歩く。

目的の場所へ到着したのか、男はその右手側にある、『ADAMS APPL』と言う看板の掲げられた、クラシカルな木造建築の建物へと入る。

作りは古いものの、特に老朽化の目立たないドアが開くと同時にランコロン、と分厚いベルが鳴り、来客が告げられる。

カウンターの向こうに立つ、やたらと奇抜な格好をしたバーテンダーはその音色を聞いて、玄関口を見やる。

すると、やって来たのは見慣れた相手だと気付いて、上機嫌な声で出迎えた。

「あつらー! トラちゃん” じゃなーい!」

”トラちゃん”と呼ばれた来客の男も、バーテンダーの反応に忌避感を示すこともなく、堂々とカウンターの席に着くなり挨拶を返すと同時にオーダーする。

「これはこれは姐さん、ご息災で何よりだ。ああ、いつもで頼む」

鼻につくような、胡散臭さが音になったような声色の男。

バーテンダーもトラちゃんの「いつもの」で通ったようでも領いてから、近くにいて、『フリフリのエプロンを着用する筋骨隆々としたマツチョな”男”』にオーダーを掛けた。

この『ADAMS APPEL』と言う場所は、酒場と言えば酒場ではあるが、従業員は男性のみで、なおかつオネエ言葉で話す、所謂『ゲイバー』である。

バーテンダーも含め、独特な趣味嗜好を持つ彼らは、それら奇抜かつマツチョな見た目とは裏腹に、GBN初心者に優しく親身になってアドバイザを務め、そして不正や悪質行為を許さぬ、正義感の強い者達である。

実際、彼らの手助けを受けたダイバー達は皆、強く正しいプレイヤーとしてGBNを楽しんでるのだから。

オーダーした飲み物を待つ間、バーテンダーから差し出されたお冷で喉を潤すトラちゃん。



「それで？今日はどうしたの？」

バーテンダーは表にこそ出さないが、緊張の糸を張った。

トラちゃんがここに来る時は大抵、何かしらの話があるとバーテンダーは読み取っている。

「いいや、今日は何か問題が起きたと言うわけではない。ただ、良い酒を飲みつつ、良い話し相手と昔語りでもしようと、な」

「あら、そうなの？去年の夏みたいに、『エル』ちゃんがGBNを乗っ取ろうとしている、なんて話が来るのかとばかり」

大したことを話すのではないと分かるなり、バーテンダーは緊張を解いた。

「フツ、いつから俺は厄介事引受の仲介人になったのだ？」

まあ似たようなものだから否定はせんがな、と軽く流すトラちゃん。

「さて、何から話そうか。そうだな、まずは……」

数秒の物思いの後に、記憶を遡っていく……

鈍色の雲から、涙が零れ落ちた。

一滴、二滴、三滴、四滴五滴六滴七滴八滴九滴……

やがてそれらは零れ落ちるのではなく、思い切りぶちまけるような勢いで垂れ流しになる。

雲の涙——雨は、焼き払われへし折られた木々の隙間から立ち昇る黒煙へと降り注ぎ、“破壊”をすすぎ流していく。

その“破壊”によるものなのか、巨大な鋼鉄の兵士——ガンプラが何機も平伏していた。

平伏している者は皆、首を落とされ、手足をもぎ取られ、心臓を焼かれており、もう二度と動き出すことはないだろう。

死屍累々と重なるガンプラの中で、二機だけが立っていた。

ひとつは青灰の戦士。

もうひとつは白銀の騎士。

「……おーい『トーシロー』、生きてるかー?」

青灰の戦士を操る創造主——ビルダーは、白銀の騎士を操るビルダーへと声を繋いだ。

「ああ、何とか。……『ハバキリ』も生きてそうだな」

トーシローと呼ばれたビルダーは返事を返す。

もう一方の、ハバキリと呼ばれたビルダーは小さく溜息をついた。

「……」ダメ”、だな」

ハバキリのそれは、半ば諦念を含んだ呟きだった。

「……」ダメ”、か。考え直してはくれないのか」

トーシローの呟きは、口惜しきの滲んだものだった。

「考え直してはくれないのか、だって？」

ハバキリはその言葉をオウム返しにすると、青灰の戦士は左手に握っているその刀を肩に担いだ。

「そんなモン、百回考え直したから」ダメ”って答えたんだろ」

たった百回だけかもな、と付け足してから、決意を言葉にした。

「今回の件で決心がついた。……やっぱ、オレはフォースを抜けるべきだな」

ハバキリはコンソールパネルを開き、数回の入力を行う。

『フォース・アルディナから脱退しますか？』

『YES』と『NO』二択の表示に対して、ハバキリは迷いなく前者を人差し指で触れようとして、

「待つてくれつ、ハバキリッ！」

それを制止するように、白銀の騎士の手が青灰色の戦士の肩を掴む。

「もっと他に方法があるはずだつ。君が皆の前から去ることはないだろう!」

「その台詞は聞き飽きたぜ、トーシロー」

引き留めようとするトーシローに対して、ハバキリは何でも無いかのように言い、青灰の戦士は白銀の騎士の手を払い除けた。

「ちよつと顔を合わせる回数が減るだけだつて。別にこれが今生の別れつてわけじゃねーんだし」

「だが……っ」

「お前一人が良くてゾーすんだよ。俺に巻き込まれる奴らのことも考えてやれつて。

……今更引き留めるなんて、やめろよ」

ハバキリは押し損ねていた『YES』ボタンを押した。

一拍を置いてから、トーシローのコンソールに『ハバキリがフォース・アルディナから脱退しました』と言う通知が届いた。

「……ハバキリ」

「じゃーな、トーシロー。これで少しは、まともなバトルが出来るぜ」

ハバキリはアームレイカーを押し込み、青灰の戦士は背中への推進力を噴射して飛び去った。

雨の滴る中に残されたのは、白銀の騎士だけ。

そのコクピットの中でトーシローは、青灰の戦士の飛び去った方向を、ただ見ていた。

見ていることしか、出来なかった。

「うーつと……」

GBNからのログアウト完了、自意識がデイメンションから現実世界に戻って来たことを確認するように、彼ー『アメノ・ハバキリ』は筐体のシートの上でヘッドギアを取り外し、大きく背伸びをした。

ボサついた鉛色の髪を掻き上げて、首を軽く回すとコキキ、と骨の擦る音が聴覚に届く。

状態確認を終えたところで、ハバキリはすぐ目の前にセットしているダイバーギアと、青灰色のガンプラを手元に戻し、席を立った。

ガンダムベースの店内にあるダブルルームから退室、そのまま真っ直ぐに店を後にした。

「……お前の気持ちだつて分かつてるつもりだよ、トーシロー」

デイメンションの向こう側にいる、親友とさえ呼べる少年を脳裏に思い浮かべ、一人呟いた。

「(けど、こうするしかねーんだよなあ……)」

確かに他の方法だってあったかもしれない。

だが、それが見つかるか、あるいはそれが最的確かどうかは、また別だ。

そんな、いつになるか分からない先のことなど、待ってられない。

さてこれからどうするか、とハバキリは軽く考える。

とりあえず、ほどぼりが冷めるまでGBNへログインはしない方が良さだろう。

適当な頃合いを見て、パーソナルデータ等を書き換えて別人を装ってから、またふらつとログインすればいい。

そんな吹く風のように、ハバキリは学生鞆を担ぎ直して、自宅への帰路を辿る。

——その選択が、自身の運命を流転させることに気付くこともなく——。

ハバキリが、自分のフォース『アルディナ』から脱退して三日が過ぎた。

何気も無く自分が通う中高一貫校へ行き、何気もなく授業を終えて、終礼も終えてきて帰ろうかと言う時だった。

「おーい、ハバキリー!!」

軽く頭を掻きながら鞆を肩に担ごうとしていたハバキリは、クラスメートの無駄に大きな声に反応してそちらの方へ向く。

同じ中学生とは思えない、身長180cmはあるだろう体軀の男子生徒が、どこかとハバキリの席に向かってくる。

「おーコウダイ、相変わらず背も声もでけーな」

「まあな！俺は身も心も”広大”なのさ!!」

なつはつはつはつ、と笑う男子生徒『オオヤマ・コウダイ』は、ハバキリの前の席の机に腰掛けると、その笑いを止めた。

「……なあハバキリ。お前、ホントにもうフォースに戻らないってのか？」

コウダイは声のトーンを落として、身を案じるようにハバキリに問い掛ける。

「トーシローの奴も心配してるぞ」

この二人は、三日前まで同じフォースに加入していたのだが、”ある事件”を切っ掛けに始まったことから、ハバキリはフォースを辞退した。

「心配性だなトーシローは。それに、別に戻らないとは言ってねーよ。ほとぼりが冷めるまでのちよつとの間、抜けるだけだつて」

なんのことはない、とハバキリは軽く笑ってみせた。

「あ、なんだいつかは戻つて来るのな。トーシローの口ぶりから、もう二度とフォースに戻らないみたいなき感じだったから、マジで心配したぜ」

それなら大丈夫だな、とコウダイは安堵する。

「それで、コウダイは今日もGBNか？」

ハバキリはコウダイの今日の放課後の予定を訊ねてみたが、その彼は「いんや」と首を横に振った。

「俺は今日はさっさと帰るわ、完成途中のガンプラがあるからな」

「そっか。んじゃ今日のところも」、オレも帰るとしますかね」

行こうぜ、とハバキリは鞆を担ぎ直して教室を出て、コウダイもその後が続く。

コウダイとは、いつもの分かれ道でまた明日を告げる。

海沿いの団地に、ハバキリーもとい、アメノ家が住むマンションはある。

「ただいまーっと」

靴を脱いだ後は、足先を使って丁寧に揃え直す。ずぼらなのか几帳面なのかよく分からない行動だろう。

真つ直ぐ自室には向かわずに、まずはリビングを經由。

平日のこの時間帯でハバキリよりも先に帰宅しているのは、一人だけだ。

「あつ、おかえりなさい、兄さん」



テーブルに着いてスマートフォンを触っていた妹『アメノ・テラス』は、兄ハバキリの帰宅を見て、出入り口へ向き直る。

「今日も早いんですね？ 私の知らない間に彼女でも出来ましたか？」

「おいこら、さり気なく嫌味なこと言ってるじゃねーぞ。仮にも実兄に対して言う台詞がそれか？」

「何を言ってるんですか兄さん。もし兄さんが義理の兄だったら、私が兄さんの彼女になってますよ。実兄だからこそその台詞です」

「妹がヒロインなんてのはマンガとゲームの世界だけにしとけよ」

「まあ兄さんの色恋沙汰なんて置いといて……」

置いとくんじゃねー、と言うハバキリのツッコミを無視して、本題を切り出す。

「……もしかして、フォースの人達と喧嘩した、とかですか？」

不意に神妙な顔つきになって窺うテラス。

テラスも、ハバキリがGBNのプレイヤーであることは知っているし、放課後すぐに地元のガンダムベースに赴いてはGBNにどっぷりなのも知っている。

そんな兄が、この三日近くはガンダムベースへは向かわずに真っ直ぐ帰宅しているのだ。

何かあったのかと、こうしてテラスは兄に事情を訊ねている。

「(……さすがに何かあったと思われたか)」

不自然過ぎたな、とハバキリは心底で呟くと、即座にいつものあつけらかなとした感じを装って答えた。

「喧嘩じゃねーって。トーシローの奴に言われたんだよ、「妹さんがいるなら、たまには家族サービスしてやれ」ってな」

「ふーん？ただ早くに帰ってくるのが、家族サービスなんですか？」

テラスの目が疑わしいものになる。

だが、これでいい。話題をGBNから遠ざけることが出来れば良いのだから。

「普段はお前が全部やってくれる家事を代わってやってるんだ、十分サービスだろ」

ここアメノ家は、兄のハバキリと妹のテラスの二人だけで暮らしている。

何か複雑な事情あったり、不幸なことが起きたのではない、単に両親共々それぞれ単身赴任で、帰ってこれないだけである。

「まあ、普段を考えればサービスなんでしょうけど……」

「そー言うことだよ、そーなんだよ」

テラスの疑念は晴れないままであったが、ハバキリは強引に話を終わらせて、荷物を置きに自室へ向かった。

学生鞆を勉強機の椅子の上に置き、さて制服から私服に着替えようとして、充電器に差したままにしている、GBN用の情報端末、ダイバーギアにメールが届いていた。

「まあたくつだらねーガチャメールだなぁ」と

どうせ大した当たりなどないガチャの案内か何かだろうと決めつけて、開きもせず削除しようとしたところで、メールの差出人がフレンドからのものだったことに気付く。

差出人：Mitsuki

「ん、ミツキからか？」

その名前は、GBNにおける最上位ランクのフォースの一角『トレイルブレイザー』の一員であるダイバーのもの。

ハバキリとミツキはフレンド同士ではあるが、お互いに顔を知っているだけで、特別仲が良いわけでもない。

知り合い以上、友達未満と言ったところだが、そのミツキが自分に何のメールを送ってきたのか、とハバキリはつい数分前に届いていたソレを開いてみた。

Mitsuki：お久しぶりです。

実は、明日の午後にGBN初心者への指導を依頼されていたのですが、訳あってそれを受けられなくなってしまったのです。

なので、私の代行者を探しているのですが、すぐに相談出来そうな相手がハバキリしか思い当たらず、こうしてメールを送りました。

もし明日の予定が空いているのであれば、私の代行を引き受けていただけますか？  
返事は可能な限り早くにお願いします。

17:00を過ぎた時点でメールの返信を確認出来なかった場合は、お引き受け出来ないとして判断しますので、ご了承を。

「……よっぽど急ぎの用らしいな」

刻限付きの『依頼受諾の依頼』とは、また急な話だ。

その依頼の内容も『初心者 の 指導』で、つまるところ、GBNの簡単なシステム説明と、チュートリアルミッションを案内してやれと言うことだろう、無理無茶なことではない。

ハバキリ自身、ここ数日ログインしていないと言うだけで、予定そのものはフリーだ。ハバキリは、右手に持っていたダイバーギアを左手に持ち直すと、リズムカルにタツチパネルに文字を打ち込み、送信する。

Habakiri: 任された。詳しい時間帯とかを頼むわ。  
すると、ほんの数秒後に返信が送られてきた。

Mitsuki: ありがとうございます、助かりました。

時間帯は、明日の16:00にエントランスロビーの、ミッションカウンターの前で待ち合わせを。

件の初心者には『麗しき蒼銀の騎士が、あなたをお待ちしております』とお伝えしましょう。

では明日、よろしくお願いします。

「……『麗しき蒼銀の』までは分からんでもないが、”騎士”ってのは返上してー称号だな」

それはむしろ”アイツ”の方がお似合いだ、と呟いてから、ハバキリは再度了解のメッセージを送信し、テラスにも日曜日の予定を伝えるために再度リビングへ赴いた。

翌日の放課後。

今日は四日ぶりの放課後プレイだ。

コウダイには急ぎの用があるからとだけ伝えて、ハバキリは足早地元のガンダムベースへと向かった。

現在時刻は15:45。

約束の時間まで15分も無ければ、のんびりもしてられない、ハバキリはダツシユ

に近い速度で通学路を駆ける。

普段ならこころも急がずとも、16時までには余裕で間に合うのだが……

「帰りのホームルームにまで喰い込む授業って、明らかに時間外業務だよな……ッ！」

訴訟して裁判沙汰にしてやろうか、などとぼやいてから、ガンダムベースに入店する前に呼吸を整えて、ついでに自販機で飲み物を買ったその場で飲み干して、それからダイブルームの使用許可を得る。

シートに腰を降ろし、ダイバーギアを筐体にセット、備え付けのヘッドギアを装着する。

「……初心者の指導、か」

一瞬だけ思考を働かせてから、自分の愛機を読み込ませ、同時に自意識がデイモンシヨンへと飛び込んだ。

少しだけ、回り道をしてから。

「……地面を抉り、草木を蒸発させる雨から逃れて、もうどれだけの時間が過ぎたのか分からない。」

「どうして”わたし”は彼らから狙われているのだろう。」

目が覚めたらよく分からない場所について、しばらくぼーっとしていたら、”わたし”の何倍もある巨人が何人も現れて、突然近づいて来て、何かを向けてきた。

それらが何なのかは”わたし”には分からなかった。

それでも、逃げなければならぬと感じられたのは良かった。

あれを浴びたら、”わたし”は地面や草木と同じような目に遭うから。

『いたぞー！』

『絶対に逃がすな、確実に仕留めろー！』

『証拠ひとつ残すんじゃねえぞー！』

『ゲームマスターに見つかったらアウトだ、逃げよー！』

『ログデータの偽造更新、忘れるなよー！』

彼らは口々にそんなことを言っていた。

”えるだいなばー”と言うのは、”わたし”のことを言っているのだろう。

呼び方なんてどうでもいい。

このままでは、わたしは殺されるのだから。

逃げて、逃げて、逃げ続けて、ようやく隠れられそうな場所に着いたのがついさつき。

薄暗いけど、狭くない。

身を隠せそうなものもたくさんある。

さつきまで”わたし”を殺そうとしていた巨人によく似たモノが並んでいたけど、動かないみたいだ。

とりあえずここに隠れよう。

見えにくそうな四角いそれに入り込み、腰を下ろす。

「ん……、ふあ……」

座り込んだ途端、耐え難い眠気が”わたし”を包み込んだ。

眠い……

そう感じた時には、”わたし”の意識は沈んでいた――

本名と同じ『ハバキリ』は、リアルの容姿よりも長く伸ばした銀髪を無造作に揺らす。軽装の上から金属製のアクセサリを複数身に着けた出で立ちだ。

「さて、ミッシヨンカウンター前だったな」

待ち人は既に来ているだろうか、とミッシヨンカウンターに足を向けようとしたところで、「あ」と何かを思い出した。

「(オレ、相手さんのアバター知らねーや……)」

完全に失敗した、とハバキリは自分の確認不足を嘆いた。



名前も顔も知らされていないのは、こちらも向こうも同じだ。

ミッションカウンターの前に立って、やって来るダイバーに片っ端から声を掛けるわけにもいかないだろう。

さてどうしたものか、とハバキリはとりあえずミッションカウンターの近くまで移動する。

ミッションカウンターの側に、誰かを待っているような様子の少年のダイバーを見かける。

ハバキリはひと呼吸を入れ換えてから、声を掛けてみた。

「あー、えーと、オレに初心者の指導を頼んでくれた人かな？」

「……？俺、フォース仲間待ってるんだけど」

早速人違いをやらかしたようだ。

「悪い悪い、人違いだったわ。すまん」

軽く会釈してから、ハバキリはこそこそとそこから離れる。

先程の位置とは反対側で、ハバキリは頭を抱えなくなった。

ミツキのことなら、キャンセルの連絡があればすぐに伝達してくれるはずだが、今のところは何の連絡もない。

そうでなくとも、向こうもハバキリのアバタールックを知らないのだ。すれ違っていたとしても気付かずに素通りしてしまっただけかもしれない。

「(やべーな、このままじゃ骨折り損じやねーか)」

せつかくの四日ぶりのGBNで、何もしいままログアウトなんてやってられない。何食わぬ顔で悩むこと数分。

「あの一、初心者指導の方ですか？」

不意に、ハバキリの背中に声を掛ける者がいた。

「へあ？」

思わず間抜けな声を出してしまいつつ、ハバキリは背後へ振り返った。

ハバキリに初心者指導の者かと訊ねてきたところ、どうやら件の初心者らしい。

その容姿を見て、ハバキリは咄嗟にしかけた言葉を呑み込んだ。

「(こいつ、ネカマか?)」

最初に目についたのは、腰まで伸びた黒髪。それも、ハバキリのような無造作なものではなく、綺麗に切り揃えられたものだ。

意志の強そうな鳶色の双瞳が、真っ直ぐにハバキリに向けられている。

道行く人を振り向かせるには一否、実際に振り向かせている美貌を持った、ハバキリより一つか二つ目上の少女型のダイバーだった。

服装も、白を基調にしたファンタジーの剣士のような、派手過ぎない可愛らしいものだ。

耳が尖っているのも、同じくファンタジーのエルフを意識したのだろう。

しかし、ここはGBNと言うアバターを通じたオンラインゲーム。

女性を騙った男性などいて当たり前、その逆も然りだ。

その老若男女隔たりなく受けの良い、出来過ぎな容姿を見て、「恐らくネカマだろう」と即断。

故にハバキリは、その彼女（便宜的に女性とする）には男性的に扱うことにした。

「あーはいはい、初心者指導さんの方ですよーっと」

「あ、良かった。『麗しき蒼銀の騎士がお待ちしております』なんて言われたから、誰のことなのか分からなかったの」

そう言えばミツキがそんなことをメールに書いていたな、とハバキリは思い返す。

髪の色で判断されたのかと思うと少し複雑な気分になるが、気を取り直し、まずは自己紹介から始める。

「えーと、オレはハバキリつて言います。ちょつと言いくらいなら好きな呼び方でどうぞ」

ハバキリはコンソールパネルを呼び出すと、公開許可範囲でのプロフィールデータを

見せる。

「じゃあ、ハバキリくん、でいいかな?」

「(その呼び方が尚更ネカマ臭いな……) どぞどぞ」

さりげ無く失礼なことを脳裏に浮かべつつ、ハバキリは話を進めさせる。

ここでムウ・ラ・フラガのように「君、コーディネイター(ネカマ)だろ?」なんて藪を突く必要はないのだから。

「えーと……こう、かな」

少女ダイバーは先程のハバキリの真似をするように、覚束ない手付きでコンソールパネルを呼び出し、ほぼ初期設定状態のプロフィールデータを見せてくる。

「私は『セア』。聖なるの”聖”と、愛って書いて『聖愛(セア)』です」

「はいはい、セアさんね。とりあえずフレンド登録だけでもしときましょーかね」

やって損するもんじゃねーから、とハバキリはフレンド登録の画面を開き、公開許可範囲のプロフィールデータを少女ダイバー『セア』へと送信する。

対するセアも同様に、ハバキリの真似をしてプロフィールデータを送信してくる。

双方のフレンド交換が完了したところで、早速ハバキリは話を切り出す。

「んじゃまずは、ミッションの受け方から」

セアと並んでミッションカウンターにいる受付嬢に話しかけるハバキリ。

「セアさんには最初に、チュートリアルミッションつてのをやってもらいま……あ、ちよつと待って、ログインする前にガン普拉を読み込ませてますか？」

ガン普拉を読み込ませなくともログインすることは可能なので、その可能性も考慮して質問し直す。

「あ、うん。自分のガン普拉じゃなくて、お店のレンタルだけど」

ガンダムベースのダイブルームの受付所には、ガン普拉の完成品のレンタルも行っており、ガン普拉を持っていないGBN初心者などが利用するケースが多い。

「オーケーです。それだけ確認したかったんで」

それを確認してから、ハバキリは改めてチュートリアルミッションについて説明する。

「GBNでは、ここでミッションを受けて、ガン普拉に搭乗して出撃、依頼を達成したら帰還、最後にここに帰って来て報酬……つまり、GBN内での仮想通貨やアイテム、バッジ、リアルガン普拉に使えるパーツデータとかが受け取れます」

この辺は一般的なオンラインゲームと同じです、と付け足してから次の説明へ。

「じゃーセアさん、自分でチュートリアルミッションを受けてみてください」

「うん」

ハバキリに諭されて、セアは受付嬢に話しかけて、二言三言交わすと、スムーズに

チュートリアルミツシヨンの受注が完了される。

チュートリアルミツシヨン 『怒れるモノアイ』

工廠地帯を模した場所でのミツシヨンで、達成条件は『NPDリーオー三機の撃墜』。

NPDリーオー三機との戦闘は、チュートリアルミツシヨンの多くの共通点だ。

「次に、出撃するためのシーケンスです。さっきみたいにコンソールを開いて、移動コマンドから格納庫を選んでください」

「えーと……」

セアはハバキリの言う通りにコンソールパネルを呼び出し、移動コマンドを何度か押してみ、『Mobile Suit Deck』を選択、ダイバー達が行き交うエントランスロビーから一転、無機質なスチールグレイトに囲まれた場所に切り替わる。

格納庫のハンガーには、セアのレンタル品らしいガンプラが一機だけ待機してくれている。

白い四肢に黒灰色の胴体、足回りにバーニアが集中した脚部。

武装はビームライフルにシールド、ビームサーベルが二基に加えて、外付けされたバルカンポッド言うオーソドックスな構成。

ロボットアニメの主役級のメカでありながら、リアル寄りの配色が施された、ガンダムタイプのガンプラだ。

それを見たハバキリは『何故か』一瞬だけ顔を顰めて、その機体銘を呟く。

「……………、『ガンダムMK-II』か」

『Z』に登場する、物語前半までは主人公『カミーユ・ビダン』の搭乗機として活躍し、後半からは『エマ・シーン』が、続編の『ZZ』では『エル・ビアンノ』がメインパイロットを務めたガンダムだ。

単なるハイエンド試作機と言う立場ではなく、その優秀な機体設計が後の百式やZガンダムを生み、さらにその後のバーザムやジムⅢ、ジェガンにも影響を齎しており、連邦軍のMS開発に一石を投じることとなった、今なお高い人気を持つ名機である。

「お店の人に、「初心者向けのガンプラってどれですか」って訊いたら、これがオススメだって」

顔を顰めたハバキリの表情には気付かず、セアは自分が使うガンプラである、白いガンダムMK-IIを見上げる。

「まー、確かに初心者向けっちゃ初心者向けですね」

他作品の主人公ガンダムと比べると耐弾性はやや低いものの、その代わりに軽量な装甲は優れた機動性と柔軟な運動力を生み、武装も扱いやすくそれなりに強力だ。

「ところで、ハバキリくんのガンプラは？」

セアはキョロキョロと格納庫内を見回す。

この格納庫に鎮座されているのは、セアのガンダムMK-IIだけで、他のガンプラは見当たらない。

「オレは今回、セアさんのMK-IIに乗せてもらうつもり。不測の事態が起きた時は、オレが操縦を代わるってことで」

「なるほどね」

だから彼のガンプラは無いのかと納得するセア。

「ほんじゃ、機体の確認も済んだところで、お待ちかねの出撃タイムへ」

ハバキリは、ガンダムMK-IIのコクピットへ伸びるキャットウォークを指す。

最初にハバキリがコクピットに乗って見せて、後からセアも続く。

コンソール類が起動を始め、スタンバイモードに切り替わる。

セアが『Mission Start』の項目を入力し、ガンダムMK-IIがハンガーから降ろされ、リニアカタパルトへ乗せられる。

「出撃の合図は音声入力です。行きまーすってアレ」

「……………よし」



アームレイカーを握り締めて、深呼吸をして、口を開く。

「セア、ガンダムMK-II、行きます！」

音声入力を認証、リニアカタパルトが勢いよく打ち出され、ガンダムMK-IIは蒼空へと放たれる。

「すごい……本物のガンダムに乗ってるみたい！」

機体にかかるG、空気抵抗、ガンダムMK-IIの挙動に合わせて上下左右する視界、推進剤の燃焼音、リアルだと錯覚するほどその全てが、セアにとっては真新しく物珍しいものだ。

「オレにもこんな時期があったなー」

そんなセアの様子を盗み見つつ、ハバキリはGBNを始めたばかりの頃の自分を思い出していた。

アニメのキャラクター達のような気分で、出撃する度、出撃するだけで舞い上がっていたものだ。

その楽しい楽しい出撃シーケンスが、ただの単純作業と化してしまったのは一体いつからだったのか。

それは一旦記憶の片隅に追いやることにして、ハバキリはセアのナビゲートに専念することにした。

「まずはこのまま真っ直ぐ進んでください。その内境界線が見えてくるんで、そこを通過したらミツシヨンスターで」

ハバキリの言う通り、出撃して間もなくドーム状のラインが見えてくる。

そこを通過すると、すぐ目下に工廠地帯が見える。

「んじや、着地しましょうかね。ゆっくり減速しつつ、機体と地面が垂直になるように」  
「うん」

セアはアームレイカーを少しずつ引き下げ、それに呼応してガンダムMK-IIも減速、徐々に高度を落としていく。

やや膝に反動を残しながらも、無事に着地。

チュートリアルミツシヨン、スタート。

直後、格納庫がビームによって突き破られた。

『SEED DESTINY』の1話を再現するように、それぞれ『カオスガンダム』『アビスガンダム』『ガイアガンダム』のカラーリングに似せられた、緑、青、黒のNPDリーオーが三機、格納庫から現れる。

「あの三機を撃破すればミツシヨンクリアです。まー、初心者向けに弱く設定されてるんで大丈夫ですよ」

さーどうぞ、とハバキリはセアに操縦を促す。

「ようし……」

セアは緊張しつつも、モニターに映る三機のNPDリーオーを見据え、ガンダムMK―IIを前進させる。

NPDリーオー達は那场から歩き回りつつ、遠巻きにガンダムMK―IIの様子を見ている。

ウエボンセレクターからビームライフルを選択、しっかりと照準をNPDリーオーに合わせてから、一射。

確実にロックオンされてから放たれたビームは、大気の流れもあつてゼロコンマ以下のブレこそあるものの、青のNPDリーオーの胴体を撃ち抜くには十分な精度だ。

NPDリーオー（青）、撃墜。

三機の一機が撃墜されたことで、NPDリーオーの動きが変わる。

遠巻きに様子を見ているだけの状態から、移動しながら105mmマシンガンやビームライフルを持って射撃してくる。

「撃つてきた……っ」

「慌てずに回避。それとシールドも」

ハバキリの冷静な助言を聞き取り、セアはアームレイカーを捻る。

ガンダムMK―IIは脚部のバーニアを活かし、その場から飛び退く。

その回避運動がビームを躲し、遅れてやって来た銃弾は胴体を守るシールドによって呆気なく弾かれる。

攻撃をやり過ごしてから着地、ガンダムMK-IIはすぐにビームライフルを撃ち返し、105mmライフルを装備している緑のNPDリーオーを正確に撃ち抜く。

NPDリーオー（緑）、撃墜。

「いい感じですよ」

初めての割には的確な操縦だ。

同じようなゲームに慣れているのかもしれない。

最後の一機になった黒のNPDリーオーは、ビームライフルを捨てて、シールドからビームサーベルを抜き放ち、ガンダムMK-IIに接近してくる。

とは言えそれは、のしのしと歩くような速度だ、セアがそのまま射撃を継続するか、近接攻撃へ移行するかどうかを判断するくらいの余裕はある。

「次は、ビームサーベル……」

セアはウエポンセレクターを回転させ、ビームライフルからビームサーベルへと切り替える。

ガンダムMK-IIはビームライフルをリアスカートへ納め、バックパックからビームサーベルを抜く。

ようやく接近してきたNPDリーオーはビームサーベルを振り下ろして来るが、ガンダムMK-IIはビームサーベルを寝かせるように構え、ビームの斬撃を受け止めてみせる。

数秒の鏖迫り合いが続いて、セアのガンダムMK-IIが押し上げるようにしてNPDリーオーのビームサーベルを弾き返した。

体勢を崩したNPDリーオーは、一歩二歩と後ずさる。

「やあッー」

一歩踏み込んで間合いを詰め、ガンダムMK-IIのビームサーベルが横薙ぎに振り抜かれた。

胴体を真っ二つに斬り裂かれ、NPDリーオーの上半身がアスファルトの上に転がり、残された下半身共々爆散していった。

NPDリーオー（黒）、撃墜。

『Mission Clear!』

クリア条件を達成し、セアのコンソールにファンファーレが表示される。

「ふう、これでクリアだね」

安堵に一息つくセア。

「お疲れ様です。まーこんな感じでミッションをクリアするってことで、後はベース基

地に戻……、……？」

戻るだけです、と言いかけたハバキリは、コンソールが小さく映している”何か”を  
発見する。

「……」

一瞬、気付かなかったフリをしようと考えた。

今の自分はセアを指導しているところだと、それ以外を考える必要はないのだから  
と、自分に言い訳を重ねるが――

――そんな自分が気に食わなかった。

「ハバキリくん？」

ガンダムMK-IIのビームサーベルのエネルギーを切って、バックパックにマウント  
させようとしていたセアは、ハバキリの様子を見てその手を止めた。

「セアさんちよつと失礼……」

セアの横からコンソールを操作し、NPDリーオー達が現れた格納庫を映す画面を拡  
大、その一部に目を向ける。

「(オレって奴は、なんでこんなにお人好しなんだろーな)」

先程NPDリーオー達と戦闘を行っていたところに、ボロボロのスモックのような衣服を纏った、薄桃色の髪の少女が倒れている様子が映し出されている。

「つ、どうしてあんなところに人が!？」

ガンプラ同士の戦闘が起きていた場所に、自分達以外の誰かがいたことに驚くセアだが、対するハバキリは至極冷静に判断する。

「とりあえず、救助しときますか。セアさんはちよいと待つてて」

ハバキリは慣れた手付きでガンダムMK-IIをアスファルトに跪かせ、コクピットハッチを開けるなり左手を伝って機体から降りて、倒れているダイバーへと駆け寄る。

「おーい、生きてるか?……いや、生きてなかったら”消えてる”か」

少女を軽く揺すりながら抱き起こすハバキリ。

「う……………」

気を失っていたらしい少女は、ハバキリの介抱によって閉じられていた瞳を開いた。

「お、気が付いたか。こんなところで昼寝してちゃ危ねーぞ。……好きでこんなところに来たわけじゃなさそーだが」

とは言えここには、いつ格納庫が倒壊するか分からないので、ひとまずセアの待つガンダムMK-IIのコクピットへ連れて行こうとするが、

ハバキリのダイバーとしての聴覚に、風切り音が届く。

「今度は何だ？」

その風切り音が聞こえる方向へ目を向ければ、遠方から複数のガンプラが飛来、工廠地帯へと次々に着陸する。

ゼフィランサス、リックディアス、ギラ・ドーガ、カラミティガンダム、ユニオンフラッグと、いずれもタイプも原典作品もバラバラな五機が揃う。

「オレを狙っている……わけねーな、ここにあるのはMK-IIだけだ」

ハバキリが思考を回す最中、ゼフィランサスからスピーカーを通じた音声が続く。

『その銀髪のダイバー、君が抱えている彼女をこちらに引き渡してほしい』

ゼフィランサス一ひいては周りには四機に目的は、今ハバキリが抱えている少女らしい。

それだけを聞いて、ハバキリは舌打ちした。

「(やつぱりこいつら、”強硬派”の連中か。となると、このピンク髪は……)」  
引き渡せば、きつと気に入らないことになるだろう。

ハバキリは敢えて声を上げて応じた。

「おーなんだアンタらー！いきなりやつて来ていきなり引き渡せつてのはどーゆー見だー!？」

何も知らないフリを通しつつ、さり気なく少女を抱えながらガンダムMK-IIの左手



近くへと戻っていく。

『いきなりで申し訳無いのは承知の上だ。すまないが、早急に引き渡してくれ』

「大体なー！ここは初心者用のチュートリアルミツシヨンのフィールドだぞー！何勝手に入ってきてんだよー！」

初心者用のフィールドに無断進入してきたことを言及するハバキリ。

ついでにコンソールパネルを開いて手早く何かを入力していく。

「あ、セアさん。コクピットに乗せて」

「え？う、うん」

ハバキリの指示に従い、セアはガンダムMK-IIを動かして、ハバキリと少女を乗せた左手をコクピットハッチへ近付ける。

『さっさとその女を寄越せって言っただよ！撃ち殺すぞ！』

カラミティガンダムが右手のバズーカ砲『トードスブロック』の砲口を向けて威嚇してくる。

その間にもガンダムMK-IIのコクピットに戻ったハバキリは、「ちよつと代わりますよ」と一言断ってから、セアに少女を押し付けて代わりにアームレイカーを奪い取り、通信回線をオープンにする。

「はいはい、サルみてーにウキヤウキヤ喚かなくても聞こえてるっつーの」

ハバキリの操縦に従い、ガンダムMK-IIは左手をコクピットハッチに近付けながら、カラミティガンダムの方へ歩み寄る。

向こうからは、シールドが陰になって胴体周りが見えない。

「ハバキリくん、一体何を……」

セアは不安げにハバキリを見つめるが、その彼は無表情だ。

『最初つからそうすりゃいいんだよ』

カラミティガンダムはトードスブロックを下げて、左手を差し出す。

「それじゃー、しっかりと受け取ってくれよ」

ガンダムMK-IIは左腕をカラミティガンダムへ差し出す、

と同時に右腕も差し出した。

「ビームサーベルをな」

『はっ。』

ズヴッ、と言う音が聞こえた時には、カラミティガンダムのコクピットは蛍光ピンク

の光束に焼かれていた。

ダイバーを失ったカラミティガンダムは、その場で崩れ落ちて小爆発の後に動かなくなつた。

カラミティガンダム、撃墜。

そこにいるのは、左手には何も持つておらず、ビーム刃を発振させたビームサーベルを突き出しているガンダムMK-II。

「こんな罠ですらねー罠に掛かるなんぎ、やっぱサル……いや、警戒出来るサルの方がまだ賢いな」

しよーもねー連中だ、と『オープン回線で』呟くハバキリ。

『ぎ、貴様！』

次の瞬間、撃破されたカラミティガンダムを除いた四機が、一斉にライフルやマシンガンに向けて放ってきた。

「よっ」と」

しかしハバキリは慌てることなくアームレイカーを一気に引き下げて、ガンダムMK-IIをその場から跳躍させて銃火器からの射撃を回避する。

初撃を回避してからは、ハバキリは目まぐるしくアームレイカーを振り回しながらもウエボンセレクターからバルカンポッドを選択、銃弾を速射させて牽制しつつ距離を離

して行く。

「えつとなセアさん、悪いけどちよつとオレ、”乗り換え”ます」

「の、乗り換えるって？」

「このMK-IIのスペックであいつらの相手は出来ねーから、別の機体に乗りに換えます。オレがコクピットから降りたら、出来るだけ遠くに逃げてください」

「え、え？」

もはや何が何だか分からずに困惑するだけのセア。

「そろそろ、”来る”はずだから……」

バルカンポッドを全弾撃ちきった後、ガンダムMK-IIは踵を返して、ゼフィランサス達から背を向けるようにして加速する。

『逃がすなつ、撃ちまくれ！』

再び襲いかかる、ビームと銃弾の嵐。

それらを往なしつつ、ハバキリはリーダー反応を見て、ニヤリと笑う。

アームレイカーを押し上げて、ガンダムMK-IIはその場から飛び上がる。

ある程度の高度にまで到達したところで、ハバキリはコクピットハッチを開けた。

「じゃ、また後で」

アームレイカーをセアに押し付け返して……そのままコクピットから飛び降

りた。

「ハバキリくんっ!？」

しかし、ハバキリがコクピットから飛び降りたと同時に、ガンダムMK-IIと向かい合う形で、“何か”が凄まじいスピードで飛んでくるのが見えた。

「来い、『ジンライ』!!」

その声に応じたかのように、『ジンライ』と呼ばれた青灰色のガンプラのモノアイが力強く輝き、落下中のハバキリの下に回り込み、自動的にコクピットハッチが開いた。

ハバキリは開かれたハッチの縁に手を引っ掛け、落下の反動を活かしながらコクピットの中へ飛び込む。

1G以下の重力下の中、時速100km以上で高速移動している物体に対し、自由落下中の状態からどこかへ身体を引っ掛ける。

これを現実で行おうものなら、相対速度の問題から身体がミンチになる。

GBNと言う仮想現実だからこそ出来る、とんでもない荒業と言えるだろう。

そのとんでもない荒業をさも当たり前のようにやってのけたハバキリは、コクピットハッチを閉じて、アームレイカーを握り締めてスロットルを開き、その速度をさらに加

速させる。

ゼファイランサスは突如として彼方から現れた機体を目視で捉えた。

『なっ!?あの“青いジン”は、まさか……!』

そこまで言いかけた時、“青いジン”はその速度のままゼファイランサスに肉迫、抜き放った細長い鉄塊を振り上げ、兜割りのように頭部から叩き付けてやった。

青き機体が放った強烈な一撃は、頭部を粉碎するだけでは済まされない、そのまま機体ごと地面へ叩き伏せて陥没させた。

「つたく、四日ぶりのGBNで、何でこんな奴らの相手しなきゃなんねーんだか……」

ゼファイランサス、撃墜。

「とりあえず、お前ら全員スクラップな」

機体銘『ジンライ』。

かつて、フォース・アルディナで双壁を誇った『白き聖騎士（ホワイトパラディン）』と対を成す、『青き狂戦士（ブルーバーサーカー）』が、今ここに舞い戻った……。

【次回予告】

ハバキリ「まー、アレだわ。ちよつかい出してきた連中は置いて、と」  
セア「この女の子、どうしよう……?」

ハバキリ「説明がめんどいな……とりあえずあいつらをミンチよりひでえやにして、それから考えるかー」

セア「……ハバキリくんって、何者?」

ハバキリ「次回、ガンダムビルドダイバース・スピリッツインテンション

『偶然と必然と』

ただの中学生ですが、何か?」

## 2話 偶然と必然と

「姐さんよ、『フォース・アルディナ』のことはご存知か？」

『ADAMS APPLE』の一席に着いた”トラちゃん”の昔語りは、ある特定のフォースの名前を挙げるところから始まった。

その問い掛けに対して、バーテンダーは人差し指を頬に当てて考え込むような顔を見せた。

「ん〜フォース・アルディナねえ。ここ二、三年で一気に名を上げていたフォースで、腕利きのメンバーちゃん達の中でも『白き聖騎士』と『青き狂戦士』が双璧を誇っていた……ぐらいかしらね、アタシが知ってるのは」

「うむ。その勢いは飛ぶ鳥をも落とす……勢いだけなら、かつての『獄炎のオーガ』のフォース『百鬼』にも匹敵するほどだとも噂されていたが……」

その途中で、バーテンダーはグラスにワインを注いでいく。

「今年の9月……ちようど、”エル”ちゃんの反乱から一年が過ぎた頃だったかしら？」  
バーテンダーの目が細まり、それに答えるようにトラちゃんは頷いた。

「ある時、『青き狂戦士』の音沙汰が消えた」



ワインの水面から一滴撥ねて、グラスから零れ落ちた。

何故ハバキリの青いジンソージンライが、ダイバーの操縦もなしに突然現れたのか。ハバキリはログインしてすぐに格納庫へ向かい、ある設定を調整していた。

それは、『ダイバーの任意によってガンプラを自動でベース基地から発進させる』というものだ。

ダイバーの間ではあまり活用されていないが『補給輸送システム』というコマンドが存在しており、ミッションを開始する前に予め武装の追加などを設定しておくことで、ミッション中に好きなタイミングで装備を換装することが出来る、というものだ。

連戦ミッションなど長期戦が想定される場合や、複数の敵機が出現するミッションなどに活用すれば、出撃時の積載量を減らしつつ、現地で武器を交換、様々な戦況に対応出来るようになる。

例を挙げるのなら、連戦ミッション中に大型MAと戦闘を行う際、戦闘前に対艦装備に換装する、と言うことが可能になるのだ。

この『補給輸送システム』だが、実はガンプラの輸送も可能である。

とは言えこの場合は制約があり、プレイヤー個人が複数のガンプラをGBNに読み込

めないように、ミッション中に他のガンプラに乗り換える、と言うことも当然出来ない。しかし、コレクトミッションのようにガンプラに乗りなくともミッションを受けられるような場合には、何かしらの要因で急にガンプラに乗る必要がある際に役立つ。

ハバキリはセアに初心者者の指導を行うに当たって、『トラブルに巻き込まれる可能性』を考慮したのだ。

昨今、『E.L.ダイバー狩り』、或いはそれを名目とした悪質行為が散見されるため、もし仮にそれに巻き込まれた時、ハバキリが操縦を代わるだけでは対処しきれない場合がある。

「(ま、何も無ければ良しとするかー)」

ちよーつと徒労が無駄になるだけだ、と言い聞かせつつ、ハバキリは約束の16時ギリギリまで調整を急ぐ。

ーその結果、ハバキリの想定通りになったわけだが。

突如として現れた、ハバキリのジンライ。

その大剣をゼフィランサスから引き抜くと、残るリック・ディアス、ギラ・ドーガ、ユニオンフラッグの三機にゆらりと向き直る。

『ハッ……『青き狂戦士』だか何だか知らんが、三対一で何が出来る！』

リック・ディアスは鼻で笑いながら、即座にクレイバズーカの引き金を引いた。放たれた砲弾は、真っ直ぐにジンライをぶち抜かんと迫る。

それに対してジンライは僅かに屈むと、

次の瞬間にはリック・ディアスの視界からジンライが”消える”。

『は？』

当然、クレイバズーカの砲弾は誰もいない所を通り過ぎる。

「よつと」

『え、ちよつ』

それとほぼ同時に、リック・ディアスの近くにいたユニオンフラッグが、バラバラに砕け散りながら吹っ飛ばされる。

なんのことはない、単にジンライがクレイバズーカの砲弾を躲し、その回避した先にユニオンフラッグがいたので『ついでに』一撃を入れてやっただけ。

”消えた”と誤認するくらいのスピードで、だ。

ユニオンフラッグ、撃墜。

『(……)こんのつ、バケモンがああああ!!』

ギラ・ドーガがヤケになってジンライにビームマシンガンを撃ちまくる。

自分達とて素人ではない。

数的有利の状態でも慢心するようなヘマはしていない。

それを自覚できる程度の腕前はあるはずだ。

なのに。

だと言うのに。

「おいおい、人をバケモン呼ばわりとは失礼な奴だな」

たった一機に、たった一機の、ガンダムタイプですらない量産型のカスタム機に翻弄されている。

その事実が、現在進行形になって冷静さを失わせる。

撃ち出されるビーム弾に対して、ジンライはその大剣を寝かせるように構えると、それを盾にしながら猛スピードで突撃してきた。

ジンライのその機動を可能にしているのは、機体各部に増設されたスラストー群。

単一のパーツを上乗せするのではなく、複数の小型パーツを埋め込むことで出力を事細かく調整可能にし、さらにそれを戦況に合わせてマニュアルでリアルタイムに最適化することで、少量のエネルギーで最大出力を瞬間的に叩き出す。

何発、何十発ものビーム弾が当てられてもビクともしない、大剣の黒鉄色が見る内に迫り来る。

『うわ、うわつ、うわツ……あ』

一度失った冷静さは、そう簡単に戻らない。

だから残弾管理を忘れ、ビームマシンガンの残弾がゼロになって空撃ちをしてから、弾切れだと気付く。

「残弾管理も出来ねーのかよ」

それに気付いたときにはもう遅過ぎる、既に間に合いに踏み込んできたジンライは大剣を横薙ぎに振り抜き、ギラ・ドーガはユニオンフラッグと同じ末路を辿る。ギラ・ドーガの方が装甲が厚い分、機体がバラバラになるようなことはなかったものの、バイタルバートが原型を留めていないのでは結果も変わらない。

ギラ・ドーガ、撃墜。

『ふ……ふざけるなアツ!!』

一番最初に攻撃しておきながら、結局相手にもされていなかったリツク・ディアスは、なけなしのプライドを怒りに変えてジンライへ襲いかかる。

頭部のバルカンファランクスを速射しながらも、クレイバズーカを撃ちまくる。

しかし、その程度の攻撃が通じるような相手ではない、ジンライは最低限の挙動だけで砲弾を往なし、バルカンファランクスの銃弾は大剣の腹に弾かれる。

『貴様につ、貴様ごときにつ、GBNを守る俺達が、負けるはずなど……ッ』

「へー、正義を掲げりゃジャンケンでも必ず勝てるってのか？ あっそうか、正しいなら後出しだって反則じゃねーもんなんー？」

弾の切れたクレイバズーカを捨てようとして——その一瞬の間を正確に突いて来るジンライ。

リック・ディアスのマニピュレーターからクレイバズーカが離れた時には、もう大剣が振り下ろされている。

だが、辛うじて冷静な部分が生きていたリック・ディアスは、左腕を盾にするようにして大剣を受けた。

「おっと、防がれたか？」

リック・ディアスとは元々、シールドを装備しない代わりに分厚く頑強な装甲が持ち味の機体だ、受ける力を逸らすことで大剣の刃を食い止めることに成功する。

『もっ、もらったア！』

動きを止めることが出来た、と確信したリック・ディアスは空いた右手にビームサーベルを抜き放ち、それをジンライに振り抜こうとするが、

『シースズンバー』、抜刀！

ハバキリのその眩きと共に、ガチャンと何かが外れる音が届く。

同時に、大剣の刃から柄が切り離され——否、何かが引き抜かれていく。

金属同士の摩擦音を鳴らしながら、抜き放たれた。

それは、一振りの大刀。

『シースザンバー』と銘打たれたその大剣は、その名の通り『鞘（シース）』

つまり、鞘そのものがひとつの武器であり、そしてその中に仕込まれた大刀もまた武器である。

『ア、アスタロトのスレッズジハンマーだとも言うのか!?!』

「違うけど、似たようなもんだ」

シースザンバーから抜き放つと同時にリック・ディアスのビームサーベルを躲したジンライは、空振りしたリック・ディアスにその大刀『斬鋼刀』を一閃する。

頭部から股関節に切り目が入り、

「オレに喧嘩を売ったのが、運の尽きな」

二つに割られたリック・ディアスは、一瞬のズレと共に爆ぜ散った。

リック・ディアス、撃墜。

五機いたはずのガンプラは、ものの数分でたった一人によって全滅された。

黒煙が立ち昇る工廠地帯の中、ジンライは斬鋼刀の鞘（シースザンバー）を拾い納めた。

セアは、ガンダムMK―IIのコクピットからその始終をただ呆然と見ているしか出来なかった。

「すげい……」

その三文字を、無意識の内に口にして。

シースザンバーを肩に担いだジンライは、ゆっくりガンダムMK―IIの元へ歩み寄ってくると、接触通信を行う。

「悪いねセアさん。いきなり変なことになってさ」

「う、ううん、私は大丈夫」

それよりも、とセアは自分のすぐ側にいる桜色の髪の少女と、モニター越しのハバキリの顔を見比べる。

「この娘、どうしよう?」

「んー……まさかこんなところでこんな拾い物をする事になるとはなー」

参った参った、とハバキリはポリポリと頬を搔く。

「立ち話もなんだし、ひとまず帰還しますか。チュートリアルミッションも終わってることだし」

「あ、うん」

セアはガンダムMK―IIを飛び立たせ、その後にはバキリのジンライも続く。



ベース基地に帰還、ガンダムMK-IIとジンライがメンテナンスハンガーへ収容される。

「さてと、セアさん」

格納庫からエントランスロビーに移動したハバキリとセアと少女の三人。

「さつき拾ったそのピンク髪なんだけど……」

「……わたし？」

ピンク髪と言われて、自分のことかと指を自分に向ける少女。

「こそ、君のことね。で、だ。その君に質問」

ハバキリは少女にいくつかの質疑応答を求める。

「君、名前は？」

「……んーと、えーと、……『ジル』」

まず、ダイバーネームは『ジル』と言うらしい。

「どこからログインしてる？」

「ログイン？……分らない」

現実世界のどこからログインしているのかが分らないのか、（それが分らないの

もおかしな話だが) そもそもログインと言うカタカナ四文字の意味がわからないのか。どちらにせよ、ハバキリの予想通りの答えに変わりなかった。

「よし分かったありがとう」

それだけを聞いてハバキリは即決、再びセアに向き直った。

「セアさん。このジルって言う娘は、『ELダイバー』だな」

ハバキリの言う『ELダイバー』と言う単語を聞いて、セアは考え込むような顔を見せる。

「ELダイバー……確か、去年の今ぐらいの時期に、GBNがELダイバーに乗っ取られたとかって、ニュースで見たことあるけど……」

GBNをプレイしていない人間でも、社会的な関心として『ELダイバー』と言う単語は世に出回っている。

「そうです。言ってみれば、ジルはそいつの仲間……って言うか、同胞ですね。ELダイバー全員が全員、GBNに乗っ取ろうなんて考えないので」

何でこんなボロボロなカツコしてるのは知りませんがね、と付け足すハバキリ。

ハバキリとセアの会話を聞いていて、自分のことを話しているのに、その本人が置いてけぼりにされていることに、ジルはキョトンとした顔をしている。

「それで、ジルちゃんはどすするの?」

ログアウトする先が無いジルは、これからどうする、どうなるのかとセアはハバキリに訊ねる。

「GBNの利用規約の『電子生命体（ELダイバー）らしきプレイヤーを発見した場合、『ELダイバー保護管理局』にまでご連絡をお願い致します』に従って、運営に連絡しますね」

ハバキリはGBN運営の中でも最近新たに発足された局番である、ELダイバー保護管理局に通話を繋いだ。

「あ、もしもし？GBNプレイヤーのハバキリと言う者ですが。はい、はいそうです、多分野良のELダイバーです。ミッション中に見つけたんで、エントランスロビーに連れ帰りました」

それからいくつか言葉を交わしてから、ハバキリは通話を切った。

ものの数分後に、女性の運営のダイバーが数人、エントランスロビーへ駆け寄ってきたのを見て、ハバキリは軽く手を振る。

「お待たせしました、ELダイバー保護管理局の者です」

このデイメンション内での身分証とも言うべき、ダイバーデータを見せてくる運営ダイバー。

「どもども、お忙しいところありがとうございます」

ハバキリが応対し、その一步後ろにセアとジルが着く。

「それで、保護対象のE.L.ダイバーは……」

運営ダイバーは、セアの隣にいるジルに目を向ける。

「あ、この娘です、はい。ほれ、ジル」

ハバキリはジルに、前に出るように諭す。

ジルはこくりと頷くと、運営ダイバーの前に歩み出る。

それを確認して、その場で屈んでジルと目線を合わせると、優しく頭を撫でてやった。

「もう大丈夫だよ、ここなら安全だからね」

「安全？ 死なないでいいの？」

「そっだよ。もう怖がらなくていいからね」

怯えさせないように優しく接し、ジルの警戒を解かせていく運営ダイバー。

ジルの方は何がなんだかと小首を傾げるだけ。

とは言え、暴れて抵抗されるよりはずっと良い。

「では、彼女は我々が責任を持って保護致します。ご協力、ありがとうございました」

深々と一礼してから運営ダイバーはジルの手を取って、その場から移動していった。

それを見送ってから、ハバキリはセアに向き直る。

「あー、セアさん。一応言っとくけど、ミッションに出る度にこんなことがあるわけじゃ

ないですからね？今回ののはたまりにあるイレギュラーで……」

「それは分かっているつもりだよ」

言い訳を捲し立てるハバキリに、セアは小さく笑って頷く。

「それよりも、さつきはありがとうね。私一人だったら、どうしたらいいか分からなかったから」

「へあ？あーはい、どういたしまして」

今回の件で、セアのGBNへの警戒を強めてしまっただろうと思いついていたハバキリだったが、それは杞憂だったようだ。

GBNデビューの初ミッションでいきなり初心者狩りに遭って、楽しむよりも先に諦めてしまうダイバーも少なからずいる。

ハバキリとしては、せっかくの初心者にそんな思いはさせたくない。

セアは時刻を確認すると、「あ」と何かに気付いて眉の端を落とす。

「思ったより時間掛かっちゃうんだね、もうこんな時間」

つられてハバキリも時刻を確認する。

「あ、もう17時過ぎてるのか。説明やら何やらしていると時間喰うな」  
「うーん、もうちよつとしてたいけど、この後は用事があるから……」

セアは時刻を閉じると、ログアウトのコマンドを探る。

「じゃあ、ハバキリくん。今日はありがとう」

「いえいえ、大したことしたわけでもなし」

軽く言葉を交わして一礼してから、セアはログアウトしていった。

「さてと、オレはどうするか……」

まだクリアしていない軽めのミッションでもこなそうかと思つた時、メッセージの着信が届いた。

メッセージの送信者のダイバーネームを確認する。

「ん、テラスからか」

GBNをプレイしていると、現実での通知に気付けないのがネックだ。

なので、ハバキリは連絡に困らないように、テラス用のアカウントとダイバーギアも用意している。

ダイバーギアを通じてのメッセージなら、現実側にいるテラスと、デイメンション内にいる自分とでリアルタイムにやり取りが可能だ。さすがにバトル中にメッセージの確認は出来ないが、それは双方で了承している。

とは言え、テラスは基本的にハバキリとの連絡としか使わず、デイメンションにダイブした回数は、片手の指で足りるほどしかない。

表示をタップ、テラスとのやり取りを確認する。

Terrace：今日はGBNですか？晩ごはんは遅い時間にしますか？

夕食の時間はいつにするのかと訊いているようだ。

「……オレも帰るか」

特にやりたいことも無いため、ハバキリもログアウトすることにした。

Habakiri：今からログアウトして帰る、だから早い時間でもダイジョーブ。

テラスに返信だけして、セーブデータを保存、ログアウトのコマンドを入力した。

ログアウトした後は寄り道せずに真っ直ぐ帰宅する。

「ただいまー」

ダイニングキッチンには、エプロンを着用したテラスが夕食を作っているところだった。

「お帰りなさい、兄さん。もうすぐご飯出来ますから、ちよつと待つててくださいね」

「おー、んじゃ食器とか出しとこうかね」

一度自室に戻って荷物を置き、部屋着に着替えてから、ハバキリはリビングに戻る。

「いただきます」

アメノ家の今日の食卓。

炊きたてのご飯に味噌汁、焼魚、添え付けの野菜炒めと、シンプルでオーソドックスな献立だ。

味噌汁を一口啜って、ハバキリは味を確かめる。

「はー、美味しい。ほんとに料理上手くなったなー」

「中学に入ってからほぼ毎日作ってますからね」

素直に美味しいと言うハバキリに、テラスは嬉しそうに小さく笑みを浮かべる。

「いやはや、家庭的な妹がいて、お兄ちゃんは大助かりだわー」

「兄さんもたまには作ったらどうですか？」

「やめとけやめとけ、俺が味噌汁を作ろうとしたらいつの間にかおでんを作ったりするからな」

「何をしたら味噌汁が突然おでんになるんですか。しかも、味噌汁よりもおでんの方が手間かかるのに」

ハバキリが面白おかしく話を切り出し、テラスがそれに的確にツツコミを入れる。

いつもの二人の光景だ。

「そう言えば兄さん」



「ん、どうした？」

「今日はGBNに行っていたのに、早く帰ってきたんですね」

テラスの知る限りでは、デイメンションにダイブしているハバキリは、ガンプラに乗って戦闘を行っている時間の方が長く、メッセージを送ってもすぐに返信出来ないことが多々ある。

今日は珍しくメッセージの送信から間もなく既読、返信が返ってきたのを不思議に思ったようだ。

「あー、区切りの良いところでメッセージが来たからな、やりたいことも済んでいたし、ダラダラして行くくらいなら、帰って晩飯の準備でも手伝うかーってな」

「そうでしたか」

特に取り繕うこともなく、ありのままを話すハバキリに、テラスは疑うこともなく頷く。

話の方向を変えようと、ハバキリは学校のことを話題に切り出す。

「テラスが入学してから、もう半年だよな。中学生活はどうだ？」

兄のハバキリは中学三年生、妹のテラスは一年生だ。

三年生であるハバキリは、一般的には受験生と呼ばれる学年ではあるのだが、通っている学校が中高一貫校なので、このままエスカレーターで高等部へ上がるため、受験を

行う必要がない。

そうでなければ、毎日のようにGBNに通えるはずがない。

「特に不便とかは感じませんよ。友達も何人かいますし、クラスに馴染めていないってことはないです」

「そっか。ま、何か困ったらオレのクラスに來いよ。イジメに遭ってたりしたら、授業中だろうがそいつのクラスに殴り込んでやるからな」

「そんなことしたら、兄さん停学になっちゃいますよ」

「それで済むんなら安いモンだ、テラスに手を出すならどうなるか思い知らせられるなら、何度だって停学になってやろうじゃねーか」

「そしたら今度は出席日数足りなくなりますよ？」

「おっと、そりやマズい。オレだって後腐れなく進学したいからな」

冗談めかして言っているハバキリだが、テラスが虐められているようなことを知れば、本気でそのような連中をやるつもりだった。

アメノ兄妹の晩は、今日も穏やかだ。

入浴を終えて、後はもう寝るだけと言う状態を整えてから、ハバキリはダイバーギアを近くに置きつつ、ジンライに手を加えていた。

ダイバーギアを近くに置いているのは、元フォースメンバーであるコウダイー基『コーダイ』とのメッセージのやり取りを行うためだ。

K o o d a i : ウイツツ・スー。

H a b a k i r i : 天国なんてあるのかな。

『ガンダムX』劇中のやり取りから始まったメッセージは、様々なガンダム作品のネタを織り混ぜながら繰り広げられ、同時に今日のハバキリのプレイログが再生される。

K o o d a i : 見せてもらおうか、ハバキリの四日ぶりのGBNのプレイとやらを

H a b a k i r i : や、やってやる！相手がガンプラなら、人間じゃないんだ！僕だって！

K o o d a i : ハバキリ少佐！自分は、あのMK-IIを見ておりません！

H a b a k i r i : 分からなければどうと言うことはない、『いいね！』しろ！

コーダイの言うMK-IIとは、セアと共に乗り込んだガンプラのことを指しているよ  
うだ。

チュートリアルミッションの『怒れるモノアイ』が開始されるところまで再生されていく。

K o o d a i : 初心者 of 動きじやない、コーデイネイターなのか!?

H a b a k i r i : 邪魔すんなコーデイ!

K o o d a i : 邪魔はテメーだよ!

H a b a k i r i : すげえよキラは

K o o d a i : 鉄華団団長さんチーッスwww

そんなやり取りをしている内に、セアの操縦するガンダムMK-IIがNPDRリーオーを全機撃墜、ハバキリがジルの救助を行っている場面に移る。

K o o d a i : 女……の子?

H a b a k i r i : 何だと思ってたんだ! (カガリ感)

K o o d a i : ステラ (サブタイ)

H a b a k i r i : つまり、この後カミーユがアムロのガンダムを倒そうと躍起になつてるところをクワトロ大尉に咎められると見た

K o o d a i : いいよカツ、負けの経験なんて参考にならない

H a b a k i r i : これが若さか…… (涙)

そこから、ゼフィランサス達五機が現れ、ハバキリがジルを引き渡すと見せかけて、カ  
ラミティガンダムを騙し討ちする。

K o o d a i : ノオウ!!

H a b a k i r i : 【悲報】 運営の強硬派の中にイオク様（笑）レベルの人がいた件について

K o - d a i : お前ら頭あるんなら使えよ！

H a b a k i r i : ジオング 「頭だけで白い悪魔さんを戦闘不能に追い込みましたが、何か？」

K o - d a i : 違う、そうじゃない

ガンダムM K - II がゼフィランサス達の攻撃を捌きつつ、ハバキリがコクピットから飛び降りてジンライへと乗り換え、そのついでにゼフィランサスをシースザンバーの一撃で撃墜する。

H a b a k i r i : 相対速度を（現実的に）考えろよ、身体がミンチになるだろうが  
K o - d a i : 奴はハバキリだ！それくらいは平気でやってくる！

H a b a k i r i : マルバならギャラホのパトロール艦隊を率いてそうだったのに  
な、マツキーが来るまで保たなさそうだけど

K o - d a i : ドレン大尉のことか、中の人的なアレ

ジンライが瞬く間に残った全機を撃墜、ガンダムM K - II と共に帰還したところで、  
動画は停止する。

H a b a k i r i : 四日ぶりのG B N で運営の強硬派の相手とかマジで萎える。つて

か萎えた。過去形

K o o d a i : 萎えるとか言いながら容赦なく叩つ斬つていくハバキリさんマジリス  
ペクトwww

H a b a k i r i : で、話を変えろとだ。今度の日曜日って空いてる？

K o o d a i : おう、ガラ空きガラ空き。久々に二人でやるか？

H a b a k i r i : オケーオケー。んじやオレはそろそろ寝るわ。また学校でなー

K o o d a i : 止まるんじやねえぞ……

コーダイとのやり取りに区切りをつけて、ハバキリは消灯して眠りにつくことにした。

アメノ・ハバキリと言う中学生は、有り体に言えば「変わっている」少年だった。

制服を着崩したりするなど、素行は良いとは言えないが、不良のように無闇に嘯み付いたり突つ張っているわけでもない。

真つ当な注意を受ければ素直に返事をして従うが、それが間違つたものだと捉えれば真つ向から反論する。

学生同士の喧嘩には無関心だが、弱者が虐げられるような“イジメ”を見掛ければ、

相手が何人だろうと暴力を以って介入し、それに対する男女の別はない。

負けん気も強ければ腕っ節も強く、何人もの生徒を返り討ちにさせたこともある。

それでいながら、学年十指に折られるほどの成績を当たり前のように叩き出している。

その素行の良くなさに反比例して高い成績は、彼のことを遠巻きに見ているだけの人間の多くのやつかみの対象になっている。

しかし、彼と言葉を交わしたことのある者は言う。

「イイ奴だし、面白い奴だし、何が悪いのか分からない」

「あいつと喧嘩したことはあるが、その翌日は面倒ごと最後まで付き合ってくれた」

「イジメられていたところを助けてくれたけど、イジメていた奴らに仕返ししようとしたら殴られた」

読み取れるとすれば彼は気分屋なのではなく、正しいと思うことに味方し、悪いと思うことに敵に回る、“正義の味方”なのだろう。

しかし、普段の素行は真面目とは言えず、喧嘩は当たり前のように発生し、そこには必ずと言って良いほど暴力で解決される。

このようなアウトローな側面も見られることから、正義の味方とも悪党とも程遠い。教師達からのハバキリの認識は、そのようなものだ。

そんなハバキリの普段の学校生活と云えば……

「待たせたなーハバキリ」

「おー、待ちくたびれて背が腹に代わるところだったぜ」

至って普通だ。

昼休み。

多くの生徒で賑わう学生食堂の中、きつねうどんを購入してきたコウダイがやつて来ると、ハバキリは鞆の中から巾着袋に包まれた弁当箱を取り出した。

コウダイが帰ってくるまで席を陣取り、先に食わずに律儀に待っていたのだ。

「ハバキリは今日も弁当なのな」

一味唐辛子を汁の中に振りかけながら、コウダイはハバキリの弁当を見下ろす。

「基本はテラスが作ってくれるからな。我が妹ながら頭が上がりな〜な」

昨夜の余り物である、焼魚の小骨を器用に取り除いていくハバキリ。

「つたくよお、家庭的な妹ちゃんがいるとか、羨まし過ぎか!」

「それ聞くの65回目。いい加減耳にタコどころかイカが出来るわ」

そんなどうでもいい会話を交わしながら昼食を食べ終えた時、ハバキリの鞆の中にあるダイバーギアから、メッセージの着信を告げるバイブが発される。

「ん?」



「フォースの連中からか？」

コウダイも気付いたようで、視線がハバキリの鞆に向けられる。

「どうだろうな……つと！」

ハバキリは足元に置いてある鞆を蹴り上げ、宙を舞った鞆をキャッチすると、流れるようにダイバーギアを取り出し、西部劇のガンマンのようにクルクルと遊ばせながら起動する。

コウダイが「無駄にスタイリッシュな取り出し方だな」と笑っているのを尻目に、ハバキリは送信者のダイバーネームを確認する。

「……セアさんから？」

昨日にフレンド登録を交換した初心者ダイバーのネームである『Sea』のそれだった。

「で、誰からなんだ？」

「昨日の初心者さんからだな」

そう答えつつ、メッセージ内容を確認する。

Sea：昨日はありがとう！

ところで、今週の日曜日って空いてるかな？

もし良ければ、一緒にミッションを受けてほしいの。

一人だとまだちよつと不安で……（汗）

「うーむ」

予定が重なった。

日曜日はコウダイと約束していた。

しかし、目的自体はセアと同じ『GBNでプレイすること』だ。

ハバキリはダイバーギアから目を離して、コウダイに向き直る。

「コウダイ、初心者さんがミツシヨン手伝ってほしいって言ってるんだけど、良かったら一緒に混ぜていいか？」

「お、初心者さんも来るのか？俺は全然構わないぜ」

目的が同じGBNと来れば、コウダイも了承してくれた。

「わりーな、急に予定変えて」

「気にすんな気にすんな」

コウダイの了承を確かめて、ハバキリはセアからのメッセージを手早く打ち込んでいく。

「ところでよ、初心者さんってどんな感じのダイバーだ？フレンド交換してるんならさ、プロフィール見せてくれよ」

「ちよい待ってくれ、……っつと」

H a b a k i r i? オレは大丈夫ですよ。友達のGBN仲間が一人加えわるんですけど、セアさんは大丈夫ですか?

返信を完了してからメツセージを閉じて、フレンド登録画面を呼び出す。

最終更新に近い、セアの名前を選択する。

「まー、まだ初心者だから全然初期設定だな」

そう言いつつ、ハバキリはセアのプロフィールデータをコウダイに見せた。

すると、途端にコウダイの挙動が固まった。

「……な、なあ、ハバキリ。この、セアって初心者さんなんだけだよ」

「ん?もしかしてコウダイも知ってたか?」

「一応、一応訊いておきたい。もしかしてこの人の名前って、聖なる愛って書いて、セアって読んだりする?」

「あー、確かそう言ってた気がするな。聖なる愛って、なかなかのキラキラネー……」

何気なく言っているハバキリだが、それを聞いたコウダイはガタツと椅子を蹴り倒した。

「おまつ!何そんな落ち着いてんだよ!?!」

コウダイの声の音量が無駄に大きいせいで、周りが何事かと振り向く。

「逆に何でそんなに慌てんだよって訊いていいか?」

あ、返信きた、とハバキリはメッセージに目を向け直す。

Sea? 私は大丈夫だよ。お友達に迷惑とかじゃなければ、お願いしてもいいかな。

「で、セアさんが何だつて?」

何故にコウダイがそこまで取り乱しているのか、本気で分からないハバキリ。

「お前な! セアさんって言ったら、この学園の人気No.1アイドルだろ!? 今年の春、彗星のごとく現れては全校男子生徒の人気を掻つ攫つていった、あの『ホシザキ・セア』さんだぞ!」

唾を飛ばさん勢いで迫るコウダイだが、

「あ、セアさんつてこの学園にいるのか」

対するハバキリは「そっかそっか」と頷くのみ。

そんな淡白な反応するハバキリを前に、コウダイは大袈裟に手で顔を覆って天井を仰ぐ。

「かーっ!! この学園でセアさんのこと知らないとか抜かしだすアホはお前くらいだぞ!」

「そんなに有名ならさすがのオレでも知らなくはないんだらうけどな……まさか、高等部の人か?」

「そうだよ! 高等部の人だよ! 知ってるじゃねえか!」

「高等部のことなんか知らんがな。つーか、高等部のことを知ってるコウダイの方がよっぽど……」

「だーもー！これだからハバキリってヤツはよ!!」

するとコウダイはかつ食らうようにうどんと油揚げを口の中に放り込んで飲み込む。

「ごちそうさんでした。……ハバキリ！ちよつと来い！」

ちゃんと「ご馳走様でした」を告げて食器を返却棚に戻し、ハバキリの襟首を掴むとそのまま教室の外へ連れ出していく。

「おいおいオレまだ弁当食ってる途中だけ」

弁当箱と箸を手にしたまま引き摺られていく。

「呑気にメシなんざ食ってる場合か！ほれ行くぞ！」

コウダイがハバキリを連れてどこへ向かうのかと思えば、案の定と言うべきか、高等部の一年生の階層だった。

セアのクラスだろろう教室の出入り口から覗き見るコウダイ。

「よし、いるな……」

視線の先に、席について雑談を交わす女子生徒が二人。

「つたく、校内で食べ歩きしてるとか、先生に見つかつたらどーするつもりだったんだ

「よ」

もりよもりよとふりかけの掛かったご飯を食べるハバキリ。

そんな彼の抗議を無視するように、コウダイはハバキリの襟首を掴んだまま「ういーツス、失礼しまーす」と堂々と踏み込み、真っ直ぐにその方向へ向かう。

「あのっ、ホシザキ・セアさんつすよね？」

通称、学園人気No.1アイドルを前に緊張しつつも、コウダイはセアだろう女子生徒に話し掛けた。

「……………？そうですけど」

コウダイに向き直るセアらしき女子生徒。

「ハバキリっ、いつまでもメシ食ってねえで、お前も挨拶くらいしろー！」

コウダイは、自分の後ろで尚も弁当を食べているハバキリを前に引っ張り出す。

「しゃーねーな……………」

箸の手を止めてコウダイの隣に立つハバキリ。

「えっ？ハバキリって……………」

その名前を聞いて、セアは跳ね返ったようにハバキリの顔を見る。

ハバキリとセアの目が合う。

「どーも、リアルでは初めまして。ハバキリこと、アメノ・ハバキリです」

とりあえずまずは、ダイバーネームの方で名乗る。

「あつ、もしかして、昨日のハバキリくん!？」

セアの方も合点が入ったらしく、ハバキリを『昨日に初心者自分を守ってくれたダイバー』だと認識したようだ。

「そーですそーです。昨日のハバキリくんです」

「同じ学園だったんだ……」

信じられない、とセアは目をぱちくりとしている。

「あつ、えーつと、昨日はありがとうね」

「いえいえ、お気になさらず」

微妙に緊張しているコウダイとは対照的に、ハバキリはマイペースだ。

「ねえセア。この二人とは知り合い? って言うか、知り合いだよね?」

セアとは向かいの席にいた女子生徒が、どう言うことかと視線を左右させている。

「そーだよカナちゃん。昨日、初心者私を指導してくれた人」

「ふーん」

『カナちゃん』と呼ばれたもう一人の女子生徒が、品定めでもするように訝しげにハバキリへ視線を向ける。

そのハバキリは訝しげな視線など気にせずに、弁当の残りを箸で突いている。

「……ま、セアが良いって言うんなら、良い奴なんだろうね」

何かに納得したのか、品定めを止める。

次にセアの視線が、ハバキリの隣にいるコウダイに向けられる。

「ハバキリくんのお友達かな？」

セアに話しかけられてか、コウダイはテンションを爆上げして答えた。

「ハイそうです！ハバキリのダチやつてます！オオヤマです！コウダイです！合わせ  
てオオヤマ・コウダイです!!」

コンビ漫才のような自己紹介をするコウダイ。

セアはそれを見てクスリと笑った。

「もう知ってるかもだけど、ホシザキ・セアです」

「一応、名乗っていた方がいいよね。高等部一年の『クラサカ・カナダ』だよ」

えーっと、とセアはハバキリとコウダイを見比べる。

「ハバキリくんのGBN仲間って言うのが、オオヤマくんなのかな？」

そう尋ねられ、ハバキリは頷いた。

「うるせー奴ですいません、セアさん。でも大丈夫、コウダイはうるせー奴ですけど実力は確かですよ。うるせー奴ですけど」

「うるせー奴うるせー奴うるせえ奴だなハバキリ！」



ナチュラルにどつき漫才に発展するハバキリとコウダイを見て、「なんだか楽しそう」と笑うセア。

それを傍から見ている立場であるカナデは「変な後輩達だな」と溜め息をついていた。一頻りどつき漫才をし終えてから、コウダイの方から話し掛けた。

「つとですねセアさん。クラサカ先輩とは友達つすか?」

「そうだよ。私とカナちゃんは親友同士。ね?」

そう答えつつ、セアはカナデに同意を求めるように視線を向ける。

しかし、対するカナデは斜に構えたような答え方をした。

「んー、親友と普通の友達ってどう違うのかな。セアと親友同士だったら、世の中親友だらけだと思う」

「カナちゃんひどいっ!?間違いない親友だよね!」

親友かどうかはともかく、この様子ならセアとカナデの仲は良いのだろう。

ちようど弁当を残さず食べ終えたハバキリは、自分の要件ーダイバーギアのメツセージのことを話すことにした。

「仲のいいところすいませんけど、セアさん。日曜日にGBNしに行くって話ですよね」

「あつ、そうそう。えつと、日曜日に、私とハバキリくん、それとオオヤマくんも来るってことだったね。うん、私は大丈夫」

セアの方に問題が無いのなら、後は万事解決だ。

ハバキリはその日の時間帯も指定していく。

「なら、日曜の午後13時くらいに、GBNのエントランスで待ち合わせ……でいいですか?」

「うん、それでお願い」

「じゃー、決まりですね。よし」

予定が決定したことに頷いてから、ハバキリは「失礼しましたー」と『コウダイの襟首を掴んで』教室を出ようとする。

「つておいハバキリ!?!どこ行くんだよ!?!」

コウダイは慌てて抵抗しようとするが、襟首を掴まれた時点で体勢が悪く、ズルズルとハバキリに引き摺られる。

「自分のクラスに戻るだけだろ。いつまでもよそのクラスの教室にいたら迷惑だからな」

「ちよ待てつて!せつかくだからセアさんともうちよい話を……はっ、離せ!はあなせコラああああアアアア……!!」

高等部の校舎に、コウダイの情けない悲鳴が響き渡った。

昼休みが過ぎて、放課後。

今日は金曜日で、日曜日までにはまだ一日空いている。

「コーダイ、日曜日はセアさんの手伝いになるだろうし、二人プレイは今日にするか？」  
終礼が終わってすぐに、ハバキリはコウダイに話し掛けたが、そのコウダイはそれを訊かれて申し訳なさそうな顔をした。

「ああ、悪いハバキリ。今日はちよいと野暮用があつてさ」

「野暮用？……ああ、前にスマホの修理がどうか言つてたな」

「そうそう、その受け取りが今日だからな。つーわけで、また日曜日にな」

それだけ告げると、コウダイは足早に教室を後にしていった。

「さて、オレはどうするかねー」

久々にソロプレイするのもよし、真つ直ぐ帰つて自宅で家族サービスするのもよし、特に何も無くても道草しに行くのもよし。

そんな風にのんびりぼんやりしていると、不意に廊下の方が騒がしくなる。

「あつ、まだいてくれた。ハバキリくん！」

周囲を騒がしくしていたのは、他ならぬ学園人気No. 1、ホシザキ・セアだった。そのセアが、特定の男子の名前を口にしようものなら、当然ざわめきは大きくなる。

「んー？あれ、セアさん？」

ハバキリは何気なく反応するが、その反応が周囲のー特に男子生徒の声が聞こえてくる。

「お、おい、今ホシザキ先輩、アメノのことを下の名前で呼んだぞ」

「アメノもホシザキ先輩のことを下の名前で呼んだし……」

「えー、あの二人ってどう言うカンケイ？」

「まさか、だって相手はあのホシザキ先輩だよ？」

「ファツ!?ウツソだろお前、有り得ねえ……」

そんな周りの声など完全に無視しつつ、ハバキリはいつもの調子でセアに話し掛ける。

「どーしたんです？」

「ハバキリくんって、今日は予定空いてるかな？」

「空いてますよー。これからどうするか暇してたくらいですし」

「！ じゃあ、今日もだけど、ちよつと私に”付き合つて”くれないかな？」

「「「「「」」」」」」

!?!?!?

セアの「私に付き合ってくれないかな？」発言によって、周囲の空気がさらに激変するが、発言者であるセア本人は自分が事の原因であることへの自覚はない。

ハバキリはハバキリでこの空気を瞬時に読み取り、「あ、これ以上はヤバイかもしれない」と即断した。

「ああー、ガンプラのことですか？いいですよー、オレで良ければ」

敢えてガンプラと言う単語を挙げることで、周囲には「セアとは”お付き合い”の関係ではありません」をアピール。

それで何人かの興味を逸らすことは出来たようだが、効果は今ひとつ。

こう言う時は逃げるが勝ちだ。

「んじやー、善は急げです。行きましょー行きましょー」

「あつ、うん。行こっか」

ハバキリはそそくさと逃げるような早足で、セアと共に学園を後にしていく。

校門の外へ出ても、しばらくは周囲からの視線を感じつつ、ハバキリとセアは通学路を歩む。

「それでセアさん、オレに用ってことは、やっぱりガンプラ関連？」

「うん。ほら、昨日は私、レンタルのガンダムMK-IIを使っていたでしょ？これからGBNをしていくなら、自分のガンプラがあった方がいいかなって」

ハバキリの予想通り、セアは自分のガンプラを作りたがっていた。

レンタル品も、いつも同じガンプラが使えらるとは限らない。

そのレンタルガンプラも、自分ではないこの誰かが作ったものだ。

細かい機体の特徴や癖などは、直に触って見てみなければ分からない。

「でも、ガンプラ作るのは初めてだから、分かる人に付けてほしいけど、周りの友達でガンプラ作ってる人っていないし……」

「ん？ってことは、クラサカ先輩はGBNをやってないんですか？」

ハバキリは脳裏に、セアと一緒にいた女子生徒の顔を思い浮かべた。

「カナちゃんもGBN友達じゃないよ。普通の親友」

「ああなるほど。それで、同じ学園にオレがいたのは渡りに船だった、と」

「うん。ハバキリくんなら、お願いしても安心かなって」

「過大な期待に、答えられるか分かりませんがね」

謙遜するハバキリだが、頼られると言うのは悪いものではない。

その頼られる相手が美少女ならば、男冥利につきると言うもの。

「とりあえずは、ガンダムベースに行きますか」

ガンダムベースに到着して、早速物販コーナーへと足を運ぶ二人。

「ガンダムMK―IIのガンプラってあるかな?」

セアのお目当てのガンプラは、昨日に使用していたものと同じキットだ。

「売り切れてなけりやありますよ。……あ、これです」

ハバキリがHGUC REVIIVEのガンダムMK―II「エウーゴカラー」を発見して手に取るものの、その彼女は別の方向へ視線を向けている。

「ねえハバキリくん。あれもガンダムMK―IIみたいだけど、でもなんか……『スーパーガンダム』って名前だね?」

あれはどう言うことかと、セアは問いかける。

「あー、あれは旧HGのキットですね。同じHG 1/144のキットでも、可動範囲とかパーツの数、色分け……ようするに、組み立てた時の完成度が違うつてことです。あの青い背負いモノは、『Gディフェンサー』つて言う戦闘機で、MK―IIと合体してこうなるんです」

それとついでに、とハバキリはもうひとつ別のエウーゴカラーのガンダムMK―IIを手取る。

「こっちは、Gディフェンサーじゃなくて、『フライングアーマー』が附属してるキットです。合体とかはしませんけど、これに乗ることで単独で大気圏に突入出来たり、空を飛べたり出来るってマシんです。あと、大気の摩擦熱にも耐えられる関係上、けっこう丈夫なんで攻撃喰らっても簡単に壊れません」

「へ、へえー……?」

スラスラペラペラと解説するハバキリだが、当のセアはよく分かっていない模様。

「まー、こっちのREVIEW版のキットが、昨日セアさんが使ってたのと同じヤツです」

そう言いつつ、ハバキリは最初に手にしたそれをセアに手渡す。

セアはパッケージの側面の写真などを見て回して「うん、これだと思う」と頷く。

「……あ、ニツパーとかも要るよね?」

「道具に関しては、今日はここの工作室で借りるとしましよ。セアさんが今度、自分でガンプラを作る時についてことで」

ガンダムベースの工作ブースでは、ニツパーやヤスリなどの工具を無料で貸し出している。ガンプラを買ったその場で作れる、と言うわけだ。

とりあえずガンダムMK-IIだけを購入、その足で工作ブースへ向かう。

座席の一角を占拠し、ハバキリとセアは向かい合わせて座る。



「それじゃー、オレに出来る範囲でのガンプラ製作のレクチャーを始めまーす」  
「よろしくお願いします、先生っ」

セアは姿勢を正して、ハバキリに対する呼び方も変える。

「先生呼ばわりはしなくていいです……で、とりあえずは説明書通りに組み立てれば問題なしです。マニュアル通りにやってもアホじゃありません」

「……うん、そうだよね？」

さり気無くギム・ギンガナムの「マニュアル通りにやってますと言うのはアホのやることだ」と言う台詞を掛け合わせたのだが、ガンダム初心者であるセアには通じなかった模様。

それを気にすることもなく、ハバキリはレクチャーを続けていく。

「まずはランナー……つまりパーツがたくさんくつついた」コレ」の切り取り方から」

ハバキリはビニール袋に包まれたまま未開封のそれを手に取ると封を破き、その中身を取り出す。

流れるようにニッパーも手に取れば、セアも一步遅れてそれに続き、ハバキリの真似をしようとする。

「いきなりパーツの根本から切ろうとすると、切り取った表面に余計な傷がついたり、キレイにカット出来ない場合があります」

なので、とハバキリはパーツとランナーを繋ぐ部分から、少しだけ離れたところを切り取ってみせる。

「こんな風に、最初はわざとはみ出して切り取ります。で、この状態からもう一度ニッパを当てて切り取ります」

パチパチパチ、と手慣れたように手早く切り取ってみせるハバキリ。

「んでもって、仕上げに紙ヤスリで切り取った部分を軽く削って形を整えます。これを、ゲート処理って言います」

ランナーから切り取った後は、ニッパから紙ヤスリに持ち替えて、つい先程に切り取られた部分に紙ヤスリを当てていく。

「ふむ、うん……」

セアは真剣にハバキリの話を聞きつつ、その彼の真似をしていく。

細かいパーツはハバキリが手を掛け、それ以外をセアが自分で行っていく。

セアもすぐにコツを掴んだようで、ゲート処理の速度も徐々に早くなっていく。

組み立て図の半分が過ぎた頃には、ハバキリの手助けも必要なくなつたようで、ハバキリ自身は自分のガンプラであるジンライを取り出して手直しに掛かった。

そうして二時間ほどが経過すれば、バックパックが背中に取り付けられ、ハイパーバズーカはリアスカートに、ビームライフルは右手に握らせる。

「……うん、よし。これで完成！」

セアは達成感と共に、完成したガンダムMK-IIをテーブルに置いた。

その隣には、ハバキリのジンライも置かれている。

「お疲れ様です。初めて作ったにしては、良く出来てますよ」

ハバキリの細かいアドバイスやセーフによつて、セアが組み上げたガンダムMK-IIは、元々のキットの完成度の高さも合わさつて、目立った綻びもなく完成した。

「ハバキリくんが手伝つてくれたおかげだよ。私一人だったら、もつと何時間も掛かつてたと思う」

さすがに疲れちゃつた、とセアは軽く目を擦る側で、ハバキリはスマートフォンを開いて時刻を確かめる。

16時辺りから始まつて、約二時間ともなれば、18時が過ぎた頃だ。

「お疲れのところすいませんけど、もうすぐ暗くなる時間帯ですから、早いとこ帰宅しますか」

「あ、集中してて気付かなかつたけど、もうそんなに経つてたんだね」

セアは作り上げたばかりのガンダムMK-IIをパッケージに戻すと、レジ袋へ入れ直

す。

ハバキリもジンライをケースに収めて鞆の中に戻して、鞆を担ぐ。

レンタルしていた工具もちゃんと所定の場所にまで返却、テール周りも軽く掃除してから、二人はガンダムベースを後にした。

昨今、日本各地のガンダムベースは、基本的に多数の交通機関が行き交う、広大な一等地に建造される。

施設だけではない、1/1スケールの主人公ガンダムも同時に建造されるからだ。

初代、ファースト、或いはRX-78と呼ばれる最初のガンダムから始まり、それ以外で特に有名なものはユニコーンガンダムやエールストライクガンダムなど。

この地に聳え立つガンダムは『Gガンダム』に登場する『シャイニングガンダム』だ。日中はノーマルモードとバトルモードの二形態を数時間おきに変形するのみだが、日没後はスーパーモードに変形し、各部が金色に発光するという。

現在時刻ではまだノーマルモードのままだが、あと数十分もすればスーパーモードに変形するだろう。

そのシャイニングガンダムを背に、ハバキリとセアは歩幅を合わせて歩く。

「へー、セアさんは電通なんですね」

「そうなの。普通電車で15分くらいの距離から」

セアの通学手段が電車であるため、その駅前までハバキリが送っていると言う形だ。

「つてことは、GBNにログインする時は地元からですか？」

「うん。家の近くのショッピングモールの中の、ゲームセンターからログインしてるの。」

「……あ、ここまでいいよ」

ガンダムベースからの最寄り駅に到着し、セアは鞆から学生定期を取り出す。

「それじゃあハバキリくん、また日曜日にGBNでね」

「はい。セアさんも、お疲れ様でした」

「うん、お疲れ様」

軽く手を振り返してから、セアは改札を潜っていく。

それを見送って、ハバキリも踵を返して自宅への帰路へ足を向ける。

明後日の日曜日を、少し楽しみにしながら――

### 【次回予告】

コウダイ「あの学園のアイドルのセアさんとGBNプレイだなんて、イヤッフォー  
イツ!!」

ハバキリ「マチルダさんの写真貰ったアムロかてめーは」

コウダイ「いやはや、ハバキリと親友で良かったって心の底から感謝だぜ」

ハバキリ「微妙に嬉しくねー感謝の形だなおい」

コウダイ「まあそれは置いてだ。何のミツシオンをやるんだ？」

ハバキリ「セアさんがバトル慣れするのが目的だからな、難易度低めでザコ多めのミツシオンつてとこか」

コウダイ「次回、ガンダムビルドダイバース・スピリッツインテンション

『連撃のオデッサ作戦』

つておいハバキリ！誰だあのピンク髪の娘！可愛いじゃねえかチクショー！！」

### 3話 連撃のオデツサ作戦

注がれたワインを口にして、トラちゃんは言葉を選んだ。

「まあ……音沙汰が消えたと言っても、フォース・アルディナ内での活動が見られなくなっただけで、彼奴自身は細々とログインしていたらしいがな」

バーテンダーはテーブルに零れ落ちたワインの雫をサツと拭き取って頷く。

「そうねえ。フォースを脱退して数日後には、初心者ちゃんを指導していたとも聞くわ」  
「ふむ、当時のホシザキ……セア嬢のことだな」

手にしたグラスをテーブルの上に置くトラちゃん。

「ああそうそう、セアちゃんと言えば……えーと……、確か、ステラちゃんだったかしら？ああのELダイバーの」

「違う、そつちはアメノの妹君だ。ジル嬢のことを言っているのだろうか？」

「あらん、ごめんなさいね」

うっかりしてたわ、とバーテンダーは苦笑する。

「ジルちゃんが、ハバキリ君に拾われて保護されたのも、ちょうどその時だったわね」

「うむ。とは言え、ELダイバーの存在自体は昨今珍しいものでもないからな。数年以

内には、Eシダイバーにも人権が定められ、法が適応されるようになるだとか」

「電子生命体達も、だいぶ社会に馴染んで来たわねえ」

ふと、カランコロンと来客を告げるベルが再び鳴る。

バーテンダーが出入り口を見やれば、来店してきたのは見覚えのある顔、

否、仮面だった。

「あーら……珍しい。久しぶりじゃない?」

目元を覆う銀色のマスク。

モスグリーンのミリタリージャケット。

人間型ではない、焦げ茶色の毛並みをした、犬のシェパード型の獣人のアバター。

「半年ぶりだったな?この店も、代わり映えしていないように何よりだ」

片耳に掛けるような形で被る軍帽を取ると、バーテンダーに軽く頭を下げる。

「ほほう、久しいな。こうして貴殿と顔を合わせるのは……一年前のあの戦い以来か」

トラちゃん仮面の獣人を見てニヤリと口の端を曲げると、自分の隣の席を空けてや

る。

「すまないね」

一言返してから、仮面の獣人はトラちゃんが空けてくれた席に座ると、バーテンダーに注文を頼む。



「マスター、美味しいコーヒーを頼む。今日はローストを割り増しでな」

「ローストを多めにね、了解よ」

バーテンダーは頷くと、一度トラちゃんの前から離れてコーヒーメーカーに豆を注ぐ。

ガーガーとコーヒー豆が挽かれていく音をバックに、トラちゃんは仮面の獣人に話し掛ける。

「進捗はどうだ？」

「ふむ……早々上手くは集まらないものだな。やはり、SSランクと言う格が大き過ぎるのかもしれない」

この仮面の獣人は、以前までは無人機——MD（モビルドール）を主戦力としたフォースを率いていたのだが、今ではMDの使用を止め、現在ではフォースメンバーを募っていた。

しかし、彼自身を含む元のフォースのランクはSSランクであるため、初心者やビギナーはおろか、中堅クラスのダイバーにも敷居が高いと思われるっており、それよりも上の上級者は既に他のフォースに加入しているか、単独でのプレイを好むソリストや傭兵ばかりだ。

結果的に、彼のフォースは人が集まりにくいのだ。

「一度フォースを解散し、戦術予報士のように他のフォースに自分を売り込む、と言うのはどうだ？」

トラちゃんは案を挙げてみたが、仮面の獣人はその案に首を横に振った。

「私もそうしようとは思ったのだが、自分のフォースに愛着があつてな……それに、せっかくここまで上げてきたランクも、そう簡単に捨てられん。恥ずかしい話だが……」

「そうか」

仮面の獣人の意見を否定も肯定もせず、ただ頷くトラちゃん。

自分の力をひけらかし、相手を見下すばかりだったこの男も、今では随分と丸くなったものだ。

自分の話などつまらないだろうと判断した仮面の獣人は、別の話題を振ることにした。

「ところで、マスターと何の話をしていたのだ？」

「うむ、姐さんを相手に昔語りを少しな。さて、どこまで話したか……そうそう、ELダイバー……」

そこまで言いかけたところで、トラちゃんは声を止めた。

「いやすまん、貴殿にこの話はよろしくなかった」

「ELダイバーについてか？確かにあまり良い思い出は無いが、興味はある」

気にせず話を続けてくれ、と仮面の獣人は諭す。

マスク越しでは表情は見えないが、少なくとも忌避感を覚えているわけでは無さそう  
だ。

「貴殿がそう言うのであれば。ELダイバーも社会に馴染み始めてきたと言う話だ」  
「……しかし、良くない噂も耳に届く。ELダイバーの存在を危険視し、強引にデリート  
を行おうとする者が、今でも運営の中にいると」

それは、世界初の電子生命体、『サラ』の存在が全ての始まりだった。

GBN崩壊の危機へ陥れたブレイクデカールを無効化させたまでは良かった。

しかしその結果、GBNの内部深くへと干渉するようになり、今度はサラの存在その  
ものがGBN崩壊の危機を招くこととなってしまった。

サラに関しては、彼女の感情や記憶などの膨大な情報を、別のハードであるGPデユ  
エルのシステムに移し替えることで解決した。

『第二次有志連合戦』以後、ELダイバーの数は急速に増加し、二年と言う時間で（確認  
されているだけで）87人にも及び、さらに五年が経過した時には既に100人を超え  
ており、一部のELダイバーはサラと同じように現実世界での活動を可能な処置を施さ  
れている。

だが、現在のようない派閥が形成される以前——ちようど一年前までは、運営の中でも

特にELダイバーの存在を危険であると誤認している者が、ゲームマスターを通さず断でELダイバーの排除を開始。

そうして数十人近いELダイバーがデリートされた頃、『ファーストELダイバー・サラ』を自称するELダイバーによる、新型ブレイクデカル『ルビスシステム』を用いてGBNの運営権のハッキング事件『ELダイバー動乱』が勃発。

これはすぐに収束したものの、この事件が残した爪痕は深く、ELダイバーのアンチ勢とも言えるべきダイバーが現れ始め、結果的にGBNの治安は悪化、ユーザー人口はこの一年で百万人以上も減少した。

「デラーズ紛争からのテイターズ発足のようだ」と、古参のダイバー達は口にしていった。

「ELダイバーはGBNにとって危険な存在だ」と、六年前の第二次有志連合戦で根付いてしまった面もある。その上から、昨年 of 動乱事件がトドメになったのだろう」

トラちゃんは両手を組んで両肘を突き、手の甲に顎を乗せた。

「世も末だとは、思いたくないものだな」

日曜日。

今日のハバキリの午後からの予定は、もちろんGBNだ。

夕方まではログインしているつもりだと、予めテラスには伝えておき、ハバキリは地元のガンダムベースへ向かった。

まずはコウダイと合流し、それからログインする。

ハバキリがガンダムベースに到着した時には、既に入入り口付近でコウダイが待つてくれていた。

それを見て、ハバキリは少しだけ駆け足になる。

「はえーなコウダイ。待たせたか？」

「ちよつとだけなつ。それよりつ、さっさとログインしてセアさんを待つとこうぜー！」

そのコウダイだが、何故かそわそわしている。

「コウダイ、お前なんでそんなにそわそわしてんだよ」

ハバキリが理由を訊ねれば、コウダイは興奮気味に「否、実際に興奮しながら答えてくれた。」

「そわそわしたくもなるっての！あの学園のアイドル、セアさんとGBNだなんて……ああー、生きてりやいいことあるもんだなあ！」

「あ、そー……」

訊ねるまでもない理由だった。

「超スーパーステージーでもいい」と吐き捨てて、ハバキリはさっさとダイブルームの使用許可を得る向かう。

「ちよつ、待つて!?!」

コウダイも慌ててその後を追う。

ログイン完了。

ハバキリはいつも通り長く伸ばした銀髪に、軽装の上から金属製アクセサリーをいくつも身に着けた出で立ち。

コウダイはダイバーネーム『コーダイ』としてログイン、黒髪は赤みを帯びた金髪へと変わり、タンクトップにカーゴパンツ、軍用ブーツを身に着け、腰には防刃性のジャケットを腰に巻いた、手練た傭兵を思わせる格好だ。ちなみに眼鏡はオプション。

「そー言えばコーダイ、この間に新しいガンプラ作ってるって言ってたけど、それってGNで使うヤツか?」

ハバキリはログイン完了したのを確認してからコーダイに話し掛ける。

「まあな。でも、その実態はお楽しみにな」

エントランスロビーに到着した二人は、ミッションカウンターの近くに移動する。

「セアさんはまだみたいだな」

コーダイはミツシヨンカウンターの周囲を見回して見るが、あの人目を振り向かせる美少女ダイバーの姿は見えない。

「そりやお前、13時の20分も前じゃいねーに決まってるだろーが」

ハバキリは溜息混じりにツツコミを入れる。

現在時刻、12:40。

五分や十分前の行動なら分かるが、さすがに20分前行動をする者はそういないだろう。

「なんだよハバキリ！ そう言うお前だって、結局早くにガンダムベースに来てるだろうが！」

同じ穴のムジナだ、とコーダイは文句を吹っ掛けてくるが、ハバキリは真っ向から抗議で返す。

「オレはログインする前に買い物するつもりだったんだよ。オレの作品はチマチマしたパーツが多いから、マメに買い足しておかねーとすぐに無くなるんだよ。今日のプレイが終わった後で売り切れてたら困るだろーが」

「そう言うことなら先に言えよ！」

「コーダイがログインしてセアさん待つところうぜとか抜かしだすからだろーが」

あーだこーだと言い争いになるハバキリとコーダイ。

そうこうしている内に、ログイン完了から10分近い時間が過ぎた時だった。

「ごめんなさい、待たせちゃったかな」

ミツシヨンカウンターにセアがやって来た。

「セアさんっ」

コーダイはパツと振り返って何事も無かったかのように振る舞う。

「いえいえお気になさらずっ、俺もハバキリもついさつき来たばっかですから！」

ゴマズリでもするかのように腰を低くするコーダイ。

いくらセアの覚えを良くしたいとは言え、露骨過ぎやしないだろうか。

ハバキリはコーダイのゴマズリを遮るように、話を持ち出す。

「こんにちはセアさん。早速ですけど、ミツシヨンを受けに行きますか？」

「うん。……あ、でも、簡単なのを選んでね？」

当然ながら、セアはまだまだ初心者だ。

最下位ランクの『F』ランクのダイバーでもクリア出来るものを選ばなくてはならないが、ハバキリはいくつかアテがあった。

「その辺は大丈夫ですよ。んじゃ、受注しましょー」

ハバキリが先導していく。



ミッションカウンターの受付嬢に話し掛けて、難易度レベル1の項目を開き、数回のスワイプとタップを繰り返して、目当てのミッションを選択する。

### ミッション名『オデッサの激戦』

原典作品は初代の『機動戦士ガンダム』であり、25話のサブタイトルから分かるように、ジオン公国軍によって占拠されたオデッサ鉱山基地での戦いになる。

原作設定では、地球上における一年戦争最大規模の戦いとされているが、GBNのミッショナーそれも難易度レベルの低さから見ても、初心者でも十分にクリア可能なものだ。

出現する主なエネミーは、F型やJ型のザクⅡ、グフ、ドム、MSを除けばマゼラ・アタックやドップと言った戦車、航空機、残るはダブデ級の陸戦挺やガウ攻撃空母ぐらいのもの。

敵機の数が多いものの、強さ自体は大したことはない。

『このミッションを受けますか?』と言う表示に、ハバキリは『YES』コマンドを押し込んだ。

「ミッションの受注が完了しました。作戦成功をお祈りしております」

受付嬢の営業スマイルを見流しつつ、ハバキリはフレンド交換を行っているコーダイとセアの元へ戻る。

「んじゃ、簡単にミッションの打ち合わせしますんで、『ブリーフィングルーム』に移動しますよ」

「ブリーフィングルーム？作戦会議？」

どこかに移動するのかと、セアはコンソールを開いて移動コマンドを選んでいる。

「ブリーフィングルーム、ブリーフィング……あ、これかな」

まだ数の少ない中から『Briefing room』と言う項目を見つけるとセア。

それを選択しようとして人差し指を伸ばそうとしたところで、

「ああ、ここにありましたか」

第三者の声が三人に届き、その方へ振り返る。

GBN運営の女性ダイバー、それも先日ハバキリがELダイバー保護管理局にコールした時に応対したスタッフだ。

「IDナンバー18420126、ハバキリさんですね。お時間少しよろしいでしょうか？」

どうやら、ハバキリに用があるらしい。

「少しつてのが何分か知りませんが、手短かに頼みますよ」

「ありがとうございます。それで、先日より保護させていただいている、ELダイバー・ジルについての件なのですが……」

運営ダイバーは、自分の一歩後ろを見せる。

ヒヨコと顔を覗かせたのはその本人、ジル。

しかし、ハバキリとセアが保護した時とは違い、傷だらけでポロポロのスモックを纏った姿ではない。

ボサボサだった桜色の髪は綺麗に整えられたショートヘアに、服装も保護管理局が用意したのだろう、白基調のワンピースに。

顔立ちの良さも合わさって、見違えるような可愛らしさだ。

「お、おいハバキリッ、誰だこの可愛……ほげっ!？」

「おい少し黙ってろ」

美少女を前にしてコーデイが興奮しかけるが、即座にハバキリが彼の脇腹を蹴り飛ばして黙らせる。

「よろしければ、彼女もミツシヨンに同行させていただけないでしょうか？」

「ジルちゃんを、ですか？」

セアが目を丸くする隣で、ハバキリは訝しげな表情を隠さない。

「それ、何でって訊いてもいいですかね」

そう問われることは承知していたのか、運営ダイバーはジルの方を指しながらも説明を始める。

「まず、保護管理下にあるELダイバーは、セーフティーが掛けられているのはご存知でしょうか？」

「知つてます。ライフが一定値を下回るダメージを受けた際、デリートされる前に強制的に管理局に呼び戻される……ですね？」

通常のダイバーならば強制ログアウトか、もしくは最後にセーブしたポイントまで戻されるのだが、ログアウトする先のないELダイバーの場合は、そのままデリート→死ぬことになる。

しかし、保護管理下にある者であれば、ライフが一定値を下回るとセーフティーが掛かり、強制的に保護管理局に帰還される。

これによって、管理下にあるELダイバーはデリートされる危険が激減し（保護管理局の監視の元ではあるが）GBNの中を自由に行動出来るようになったのだ。

「そうです。彼女……ジルは、ハバキリさん達と会いたいと」  
運営ダイバーはジルに目配せをした。

それを見て、ジルはハバキリと目を合わせ、彼の目の前に立つ。

「こんにちは」

ペコリとお辞儀するジル。

「はいこんにちは。自己紹介がまだだったよな、オレはハバキリ」

律儀に挨拶を返してから、ハバキリは名乗る。

「私はセアだよ」

「俺の名はコーダイ！良かったらコーちゃんでもいいからね！」

続いてセアが普通に、コーダイがテンションおかしく名乗る。

それをみて、ジルは三人を順番に確認する。

「えーつと……ハバキリ、セア、コー、こう？……こうちゃー！」

「ちよ、ジルちゃん!?俺飲み物かよー！」

紅茶呼ばわりされてコーダイは驚愕する。

普通にコーダイと名乗れば良かったものを、敢えてコーちゃん等と呼ばせようとする

から勘違いされるのだ。

「アトミックバズーカで艦隊もろとも吹っ飛ばされそうな紳士だな」

「ソロモンよ、私は帰ってきた……ってそれはシャレになってねえ!?!」

ごく自然に『0083』のネタを入れるハバキリとコーダイ。

間を見計らって、ジルは再度ハバキリに話し掛ける。

「ハバキリ。わたしも一緒に行っちゃダメ？」

「……………」

そこでハバキリは、一度目を閉じて思考した。

「ハバキリくん？」

彼が何を考えているのか、セアは声を掛けようとするが、その前にコーダイが「ちょっと待ってください」と遮る。

「あいつの意見が聞きたいんで、待ってもらっていいですか」  
「う、うん？」

いつになく真面目に言うコーダイに、セアは気圧される。  
もう数秒の時間の後に、ハバキリは目を開いた。

「……………いいぜ」

「ホント？ありがとう！」

ジルは喜んでいるようだが、そのハバキリの表情はあまり良いものではなかった。  
渋々、と言うよりは、何か押し殺したような顔。

「……………」

それを見て、コーダイはハバキリの肩を掴む。

そこから、セアとジルの二人から少し離れたところで耳打ちする。

「いいのかよ？あの娘、ELダイバーなんだろ」

「……………」あの時」とは状況が違う。「ELダイバーだから」なんて言い訳はしたくねーかな」

「けど、可能性だつて全くのゼロパーじゃ……」

「その時はその時だ、何とかなるだろ」

「……わーつたよ、しようがねえなあ」

耳打ちを終えて、ハバキリとコーダイは二人の元へ戻ってくる。

ハバキリが、ジルを連れてきた運営ダイバーに向き直る。

「んじゃ、ジルはオレ達で一旦預かりますんで」

「ありがとうございます。では、よろしくお願い致します」

一礼してから、運営ダイバーはその場から移動して姿を消す。

「さて、と。改めてブリーフィングルームに移動しますよつと。ジル、分かるか?」

「……んーと、これ?」

ジルはコンソールを開いて、移動コマンドをハバキリに見せる。

「俺らは先に行つとくからなー」

それだけ告げてから、コーダイは一足先にブリーフィングルームへ移動、その後でセアも続き、もう一歩遅れてからハバキリとジルも移動する。

ブリーフィングルーム。

フォースを結成していない者がミッションを受注して格納庫から出撃する前に、モニ

ター等を用いて綿密な作戦会議を行う時に利用される。

ハバキリとコーダイがモニターの前に立ち、残るセアとジルの二人が座席に座る。

このミッションを受けるのが前者二人だけだったなら、このような大々的にブリーフィングなどしなくとも、簡単な役割分担だけ最初に決めて、後はその場に応じて臨機応変に対応するだけで済む。元々は同じフォースに組んでいた者同士だ、戦闘中に呼吸を合わせるなど、文字通り呼吸するようなものだ。

しかし、今回は初心者であるセアもいるので、予めの打ち合わせも必要だ。

ハバキリが主導になって、ミッションの概要を説明する。

「今回のミッションは、エリアを移動しながらひたすらザコ敵を倒しまくるだけの簡単なお仕事です」

モニターに映し出されるのは、いくつかのエリアに赤く区切られた広大なマップ。その中に自軍の表示である青のマークが三つ。それぞれ、ハバキリ機、コーダイ機、セア機と割り振られる。

「基本は、スタート地点から道なりにエリアを順番に進んで、エリアごとに現れる敵機を順次撃破していきます」

青のマークがエリアに進入すると、赤のマークが複数現れては取り囲むが、青と赤のマークがぶつかりかると、赤のマークが消える。



赤のマーカーが全て消失すると、区切られているエリアが赤から青色に変わる。このエリアを制圧したと言う意味だ。

「たまりにグフカスタムみたいなエース級が現れますけど、そつちはオレかコーダイが処理します」

『Warning!!』と赤文字で表示されるのは、『グフカスタム』と呼ばれるグフの発展型。

「なので、セアさんは気にせず思い切り戦ってください。エリアとエリアの間にも、いくつかメンテナンスポイントがあるので、そこで修復や弾薬、エネルギーの補給も出来ます」

ハバキリの説明を読み取り、セアは頷く。

「つまり……互いにフォローし合える範囲内であれば、基本的には自由に動いて構わない、ってことだね」

「さすがセアさん、理解が早くて助かります」

それだけ分かればよし、とハバキリはモニターを消した。

「まー、細かいことは気にしなくて大丈夫です。それと、もーひとつ……」

ハバキリはジルへ目を向け、確認するように問い掛ける。

「野良のELダイバーってことは、ジルは自前のガンプラが無いんだよな」

「うん。わたし、ガンプラ持ってない」

こくりと頷くジル。

現実世界とを繋ぐ”器（ガンプラ）”を持っているELダイバーは、自分自身をGBNにスキャンすることで、自分の肉体であるガンプラにその自分が乗り込む、と言う奇妙な形で出撃することになる。

野良のELダイバー、ローつまり現実世界との”器”の無いジルは、ここでは一個体の電子生命体でしかない。

ガンプラ同士による戦闘で、ビームや銃弾、爆風が飛び交う中、生身で立たせるわけにはいかないのだ。

「ハバキリくん。確かこの間は、ゲストモードにしてジルちゃんをコクピットに入れたよね。それ、私が引き受けるよ」

セアが挙手しながら進言した。

「ハバキリくんとコーダイくんは、特別危険な相手の対処に回るでしょう？それなら、比較的危険が少ない私のところに乗せた方がいいと思うの」

彼女の進言に、コーダイも笑いながら肯定する。

「ハバキリは特攻隊長気質だからな。一緒にいたら、コクピットの中は軽くミキサード……いや、ジェットコースターだぜ？」

「オレの操縦ってそんなに荒っぽい？まーいつか。セアさん、ジルのお守りは任せましたよ」

「うん、任せられました」

セアのガンダムMk-IIにジルが同乗することが決定したところで、最後にハバキリが締める。

「よし。それじゃー出撃するとしますか」

ハバキリはコンソールを呼び出し、ブリーフィングルームから格納庫へと移動、続いてコーダイも、最後にセアとジルが一緒になって移動していく。

格納庫のハンガーに並ぶのは三機のガンプラ。

その内の二つは、ハバキリのジンライとセアのガンダムMk-II。

今回のジンライの装備は、リアスカートに懸架したシースズンバーではなく、本来のジンの武装であるアサルトライフル『76mm重突撃銃』二丁を両手に、実体剣の『重斬刀』を両サイドスカートに二丁装備している。

ハバキリ曰く「ザコ敵相手なら、シースズンバーよりこつちの方が楽」とのこと。

そして、もうひとつはコーダイのガンプラだ。

全身が濃い赤色に塗装され、両肩には大口径のキャノン砲が一对。

頭部のアイカメラはゴーグルのようにも見えるが、よくよく見ればその内部には複雑な内部構造が見え隠れしている。

胴体部の装甲は分厚く、キャノン砲が外付けされていることもあって、少々着太りしたような外観だ。

「お、『ガンキャノン』か」

それら特徴を目にしたハバキリは、原典作品『機動戦士ガンダム』における『V作戦』で試作されたRXナンバーの一機、ガンキャノンの名前を口にした。

「つても、脚部は別の機体のパーツ……『ガンダムレオパルド』か？」

「おう。ガンキャノンは足が遅いからな、一部をレオパルドのパーツに組み替えて、軽量化と陸戦での機動力の強化。つても、ペイロードにけっこう余裕があるから、武装はこれからもっと増やすつもりだぜ」

コーダイはハバキリの隣に立って自慢げに胸を張る。

「ガンキャノンとガンダムレオパルドを振って……名付けて『キャノパルド』だ！」

「キャノパルドかー、なかなか語呂のいい機体名だな」

ハバキリとコーダイがキャノパルドを見上げている隣に、セアとジルもやって来る。

「あ、これがコーダイくんのガンプラなんだね」

セアもキャノパルドの姿を見上げる。

「どうつすかセアさん！俺のキャノパ……」

「よし、出撃するかー」

コーダイがセアにキャノパルドを自慢しようとするが、言い終えるより先にハバキリが遮るように、コーダイの襟首を掴んでキャットウオークへ上がる。

「あつ、おいハバキリツ！ちよつとくらい自慢したっていいじゃねえかああああアアアア……」

ズルズルと引き摺られていくコーダイ。

セアがその様子を苦笑しつつ見送っていると、不意にジルの口が開かれた。

彼女の視線の先には、セアのガンダムMK-II。

「セアのガンプラ……」

「ジルちゃん？私のMK-IIがどうしたの？」

何を言い出すのかと思えば……

「なんか、弱そう」

辛辣な評価だった。

「うっ……ごめんね、ハバキリくんやコーダイくんみたいな強そうなガンプラじゃなくて……」

耳の痛い評価だが、少し丁寧に組み上げられただけの無改造無塗装のガンプラだ、否

定することも出来ない以上、セアはがっくりと肩を落とす。

だがジルはすぐに「でも」と言葉を紡いだ。

「あつたかい。優しいのかな」

「あつたかい？優しい？」

ジルの言葉に肩を落としていたセアは、今度は目を丸くする。

物を言わなければ、ただシステムに従って動くだけのガンプラに、心があるかなのような言葉だ。

「うん。なんか分かる」

ジルは続いてコーダイのキャノパルドに目を向ける。

「こうちやのガンプラは、なんかうるさい。早く早くして急かしてる」

「……出来たてのガンプラだから、早くバトルしたがってるのかな？」

セアはなんとなくながらも、ジルのことを読み取っている。

きつとジルには、他人には分からない“何か”を感じ取ることが出来るのだろう。

E.L.ダイバーと言う存在の、全員が全員がそうではないだろうが、少なくともジルにはそのような能力を持っているようだ。

最後に、ハバキリのジンライを見上げる。

「……………」

しばらく見上げたまま、ジルは難しい表情を浮かべながら瞬きを繰り返す。

「なんだろう、「これでいいんだ」って気持ちと、「嫌だ」って気持ちがあつて

……なんか、ぐちゃぐちゃ」

「ジルちゃん……？」

セアはジンライと、それに乗り込もうとキャットウオークを渡るハバキリを見上げる。

ジルの感性は、彼の相反する二つの感情を感じ取つたらしい。

それだけではなく、情報の断片のようなー何か、ジルの口から流れる。

「……えるだいたばー、うんえー、きよーこーは、あんちぜー、DELETE、あるでいな、こうちや、……トーシロー！」

「!？」

突如、ハバキリはバツと振り返って、床にいるセアとジルを見下ろす。

「……気のせいかな？」

ハバキリは小さく溜息をつくとき、セアに手を振る。

「何してんですセアさん、出撃しますよー」

「あ、すぐ行くね！」

セアは、なおも難しい顔をするジルの手を取る。

「ほらジルちゃん、行こっか」

「……ん」

ジルが小さく頷くのを確認してから、セアもキャットウオークを登り、ガンダムMK-IIのкокピットへと乗り込む。

「ハバキリ、ジンライ、出るッ！」

最初にハバキリのジンライがりニアカタパルトから撃ち出され、

「コーダイ、キャノパルド、行くぜ！」

次にコーダイのキャノパルドが続き、

「セア、ガンダムMK-II、行きます！」

最後にセアとジルが同乗するのガンダムMK-IIが発進、全機出撃完了だ。

ディメンションの蒼空を青、赤、白の三機が駆け抜けて行く。

出撃して間もなく、コーダイがハバキリに通信を繋ぐ。共通回線なので、セアとジルにも聞こえている。

「あー、テストス、マイクテスト……オデッサってことは、ヨーロッパアン・サーバーを経由するんだっけ？昔にやったつきりだから、あんまり覚えてなくてさ」



「そーだけど……あ、セアさんはサーバーゲート潜るの初めてか」

ハバキリはセアに呼び掛ける。

「セアさん、聞こえてますね？」

「うん、感度良好だよ」

「これから別のエリアにジャンプするんで、サーバーゲートつてのを経由します。とりあえず付いてきてください」

「了解」

セアの応答を確認して、ハバキリは前方に視界を向け直す。

前方に見えるのは、三角形の角を切り落とした、ダイバーギアの形状に似たゲート。

三機はその中心へ突入した。

イースト・エリア、山岳地帯。

この地の山林に囲まれたフォースネストは完全和風仕様であり、各所には破魔を意味する赤い布地飾りを取り付けられている。

何よりも一番の見どころは、設備の一つとして天然温泉があることだろう。

その天然温泉の女湯では、一人の女性ダイバーが湯船に浸かりながらサウンドオン

リーの通信を繋いでいた。

「……それで、強硬派の発言力や権力が日増しになっていってること？」

頭に結び巻いたタオルの隙間から、黄土とベージュが混ざったような色の髪が見え隠れする。

「……分かった。私は伝手を通じて表から動くから。……は、はあ!? ち、違うわよ! リヒターとはそんな関係じゃなくてっ、ただの男友達よ! ツルギとかサヤ先輩みたいなものだから!」

顔を赤くしながら慌てて否定する。

「……」裏のお姉ちゃんだっけそんなに暇じゃないんでしょ!? もういいからっ、切るわよ!」

乱暴に通話を切って、湯船から上がる。

湯気で曇った鏡には、藍色と董色の二色が写った。

青く見える数字の壁を飛び越えること数十秒。

ヨーロピアン・サーバーを通過、ジンライ、キャノパルド、ガンダムMK-IIの三機は、砂岩の大地へと降り立った。

連邦軍側として戦うことになるため、周囲の背景には61式戦車がずらりと整列し、その中に陸戦型ジムや陸戦強襲型ガンタンクと言ったMS隊、ビッグ・トレー級、ヘビィ・フォーク級の陸戦艇などが点在している。

現在地は、自軍拠点内。ここから敵軍エリアへと進撃するのだ。

「んじゃまー、サクツと終わらせますか」

76mm重突撃銃を構え直し、ハバキリのジンライが先頭になって前進する。

基本はハバキリが前衛、コーダイが後衛、セアは遊撃。

遊撃と言っても、二人からあまり離れず動き、積極的に前線へ飛び回るわけではないため、実質は後衛に近い。隙が見えれば前に入る、と言った感じだ。

拠点から出撃を開始してすぐに、敵エリアに進入する。

出現するエネミーは、F型とJ型が混在したザクⅡが二個小隊。

先頭に立つハバキリのジンライを捕捉すると、一斉にザクマシンガンを構えて連射してくる。

しかしその動作は緩慢で、ハバキリからすれば止まっているにも等しい。

「ま、セアさんの練習だし……」

ある程度は撃墜して数を減らし、残りをセアに戦わせるべきだと判断し、ハバキリはアームレイカーを軽く捻って120mmの銃弾を往なして距離を詰めつつも、

「おいコーダイ、セアさんの分的も残しとけよー」

普段の会話のようにコーダイに通信を繋ぐ。

「つと、そうだったな。ハバキリこそやり過ぎんなよ」

「大丈夫大丈夫、オレが本気だったらもうこのエリア終わってるから」

中距離と近距離の境目辺りまで接近すると、ジンライは76mm重突撃銃を連射、フルオートで放たれる鋭い銃弾が、ザクⅡ二機を立て続けに撃ち抜いた。

ザクⅡ（F型）、ザクⅡ（J型）、撃墜。

一瞬で二機も撃墜され、残る四機のザクⅡの注意がジンライに向けられる。

それを見て、ハバキリは即座に後退する。

ザクⅡの群れの注意が一斉に向けられたことへの警戒ではない。

ジンライがいた地点と入れ替わるように、一筋のビームが切り裂いた。

別方向からの攻撃に気付くザクⅡの一機だが、モノアイがその方向を捉えた時には、もう心臓部がビームで撃ち抜かれていた。

ザクⅡ（F型）、撃墜。

それは、スタート拠点とこのエリアの境目と言う長距離から、片膝を着きながらビームライフルを構えている、キャノパルドの姿だ。

「まずはひとっ—」

撃墜スコアがひとつ加算されるのを確認して、コーダイは意気揚々とウエポンセレクトターを回し、次は両肩の240mmキャノン砲をダブルセレクト、キャノパルドの体勢を変えてから即座に左右同時に発射。

タコオンキイインツ、と言う、重火器が放つにしては随分と甲高い砲声。

しかし、敵機のザクマシンガンの倍はある巨大な砲弾は高々と放物線を描き——ほんの二秒のタイムラグの後に大地を抉り飛ばさんほどの威力を以て炸裂した。

砲弾の炸裂によって混乱するザクIIの群れ。

残る三機の内の一機は不運にも着弾地点の至近距離にいたために、爆発に巻き込まれ大破した。

ザクII（F型）、撃墜。

後退しつつあるジンライと、キャノパルドからの長距離砲撃。

残るJ型のザクIIは、どちらを攻撃すべきなのかとモノアイを右往左往させているばかり。

そこへ、セアのガンダムMK-IIが接近する。

「ターゲットロック……そこっ」

ロックオンマーカ―が赤く点滅するのを見るなり、セアはトリガーを引き絞る。

しっかりと狙いを付けたビームライフルが一射、二射と放たれ、ザクⅡ二機は満足な反撃も出来ないままオデッサの地に平伏す。

ザクⅡ（J型）、撃墜、撃墜。

出現エネミーを全て撃破したことで、エリアを囲っていた赤いラインが消失する。このエリアの制圧に成功したのだ。

「エリア制圧完了。次、行きますよ」

次の進行方向を示す矢印のマークを視認しつつ、ハバキリはセアに呼び掛ける。

「……このくらいなら、私一人でも大丈夫だったかな？」

「二応、操縦に慣れてくれば初心者一人でもクリア出来る難易度ですけど、油断せずに」  
ハバキリの釘刺しを括りに、ジンライ、キャノパルド、ガンダムMKⅡの三機は、次のエリアへ突入していく。

次のエリアは、高低差の激しい岸壁が連なっており、一度崖下まで降りると上に戻ってくるのは一苦労を掛ける。

遙か上空遠方より、紫色の太ったフクロウに似た大型の航空機——ガウ攻撃空母が、艦載機であるドップを次々に発進させてくる。

それだけではない、地上からは戦闘車両のマゼラ・アタックが隊列を組みつつ砂煙を巻き上げながら向かってくる。

このエリアはザクⅡのようなMSが登場しない代わりに、大量のドップとマゼラ・アタックと戦いつつ、さらに空母であるガウを撃沈しなくてはならない。

数だけを見れば大群ではあるが、ハバキリは眉ひとつ動かさずに、コーダイとセアに簡単な指示を与える。

「コーダイは地上、オレとセアさんと空中。ガウは後回しで」

「おう、任せられたー」

彼の指示を受けて、コーダイのキャノパルドはその場から前進、マゼラ・アタック隊の迎撃に向かう。

それを見送ってから、ハバキリはセアと再度通信を繋ぐ。

「セアさん、ビームライフルからハイパーバズーカに切り替えてください。カートリッジは散弾で」

「ハイパーバズーカだね。つと……」

ハバキリの指示通り、セアはウエポンセレクターからハイパーバズーカを選択、さらにカートリッジは散弾を設定。

ガンダムMK―Ⅱは一度左手にビームライフルを持ち替え、空いた左手をリアスカー

トへ伸ばし、ハイパーバズーカを空いた右手で取り出し、それと入れ替えるようにビームライフルをリアスカートへ懸架させる。

その一通りの作業を終えて、一呼吸を入れ替えるくらいの余裕の後に、ドップの群れが編隊飛行を維持したまま二機へ攻撃を仕掛けてくる。

とは言え、対MSには大した威力を期待出来ない、それも大まかにしか狙いの付けられないミサイルランチャーだ。

ミサイルのシャワーを前にしても、ハバキリはマイペースを崩さない。

「ミサイルのシャワーくらいでビビるな」つと……」

ハバキリがサウス・バニングのセリフを口にしつつ、ジンライは76mm重突撃銃を上空へとばら撒くように連射する。

「散弾ってことは……しっぴかり狙わなくてもいいよね」

弾種の性質を確認しつつ、セアはロックオンメーカーを使わずにハイパーバズーカを発射する。

砲口から放たれた弾頭は間もなく炸裂、同時に内蔵された多数のベアリング弾が飛び散る。

弾の一発一発が小さいとは言え、それは対MSから見たサイズだ。

戦闘機からすれば、そんな小さい一発でも喰らえば主翼が砕け散るかコクピットが潰



されるかの二択しか無い。

その上から、76mmの銃弾が間断なく飛んでくるのだ、ドツプの群れは戦果を挙げられず、被害ばかりが徒に積み重なっていく。

一方、マゼラ・アタック隊の迎撃に向かったコーダイのキャノパルドだが、こちらはこちらで一方的な蹂躪だった。

まず、マゼラ・アタックの射程外から、匍匐（ほふく）する体勢でビームライフルを発射。

マゼラ・アタックは、マゼラ・トップとマゼラ・ベースの二つから構成されているため、緊急時にはマゼラ・トップを切り離しての脱出装置としても機能する。

しかし、MSの装甲を吹き飛ばすほどの出力のビームライフルの前には脱出をする間もなくトップもベースも消え失せる。

ビームライフルで数を減らしてからは、キャノパルドは立ち上がって今度は左右のキャノン砲をマゼラ・アタック隊目掛けて撃ちまくる。

それらは決して正確な射撃ではないものの、240mmの砲弾が地面に炸裂する都度に、マゼラ・アタック隊は次々に爆発に巻き込まれ、直撃して跡形なく消滅したり、爆風で吹っ飛んで横転したりと、大惨事である。

それでも奇跡的に何機かのマゼラ・アタックが突破、健気に175mmキャノン砲や三連装35mm機関砲で抵抗するものの、キャノパルドの重装甲の前にはまるで歯が立たず、最終的には蹴り飛ばされ、踏み潰されていくのみ。

コーダイがマゼラ・アタック隊を壊滅させてから少しの間を置いてから、ハバキリとセアの方もトップの編隊を殲滅させた。

残るは、艦載機を全て吐き出し終えただろうガウだけ。

「ガウはメガ粒子砲の射角の正面と、爆撃の真下に立たなきゃ、ただなのでかいです。遠慮なくやっちゃいましょう」

ハバキリはそう言いつつウエボンセレクトターを回し、二丁ある重斬刀の内のひとつを左手で抜き放つ。懐に飛び込んで肉迫攻撃をするつもりのようなのだ。

「じゃあ、ハイパーバズーカのカートリッジを、通常弾に切り替えて……」

セアはウエボンセレクトターのハイパーバズーカを再度選択、今度は通常弾頭に切り替えようとしたところで、

彼女の隣にいるジルがぴくりと挙動した。

「……なんか、嫌な感じがする」

ジルの溢した「嫌な感じがする」にセアは耳を傾けた。

「ジルちゃん？嫌な感じがするって……」  
「アレ」

セアの問い掛けに、ジルは正面モニターに小さく映るガウを「アレ」と指した。

マゼラ・アタック隊を殲滅させたコーダイは、ビームライフルとキャノン砲の弾数を確認してから、一度ハバキリとセアの元に合流しようとしていた。

だが、不意にセアからの通信が届く。無論、ハバキリにもだ。

「二人とも、ちよつといいかな」

彼女の神妙な声に、ハバキリが先に応答する。

「どーしましたセアさん？」

「なんかね、ジルちゃんがガウ攻撃空母を見て、”嫌な感じがする” って……」

それを聞いて、思わずコーダイはオウム返しに反応する。

「嫌な感じがする？ニュータイプみたいなのに、何か感じたってことつすか？」

ジルがガウを見て何かを感じた……それはつまり、このエリアに接近しているガウは通常のモノとは違うと言うことだろうか？

一瞬の思案、ハバキリはコーダイに様子見を頼む。

「……コーダイ」

「あいよ、今やってる……」

考えることは同じだったか、ハバキリから言われるよりも先に、コーダイはウエポンセレクトターからビームムライフルを選択し、スコープを覗き込む。

倍率を最大にまで引き伸ばし、ガウ全体を睨むように観察する。

「んー、見たところはただのガウだな。ガルマ様みたいに特攻してくる気配もなし……」  
「ジルは一体ガウのどこから”嫌な感じ”を感じ取ったのか？」

訝しみつつも、コーダイはガウの様子を観察し続ける。

ハバキリは、ジルの言う『嫌な感じ』とは恐らく別の意味で嫌な予感——と言うよりは既視感（デジャヴ）を覚えていた。

あの時もこんな風に、何事も無く成功するはずのミツシオンが、『嫌な感じ』の一言がトリガーとなって——

「……ん、んん!? おいハバキリ! セアさん! 気を付けろ!!」

——脳裏に浮かびかけた過去の意識は、コーダイの怒鳴り声によってGBNに呼び戻された。

「ガウから敵機……MSが出てくるぞ!」

このミツシオンが、原作のオデッサ作戦に忠実であるなら、ガウからMSが出現しても別段おかしいことではない。

だが、

「ドムに、グフ、イグナイテッド?……って、なんでザフト系が?」

そのガウからジオン系以外のMSまで出てくるなら、話は別だ。

そればかりか、

「エ、エアマスター!? スローネツヴァイに、スタークジエガンまで……ちよつと待てつ、

こいつら絶対NPDじゃねえだろ!」

NPD機ではない、ダイバーの搭乗したガンブラ。

コーダイからの通信を聞き取っていく内に、ハバキリはジルの言う「嫌な感じ」の意味を悟った。

奴らは自分達を狙っていると……。

### 【次回予告】

コーダイ「おいハバキリッ、こいつらまさか……!」

ハバキリ「連中の狙いは……オレ達みたいだな」

セア「どうして私達が狙われているの!」

ハバキリ「心当たりはあるけど、話は後です。このままじゃなぶり殺しだ」

コーダイ「クソツタレっ、やるしかねえのか!？」

セア「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション

『ガイドポストは紅く染まる』」

ジル「……わたしのせい？」

## 4話 ガイドポスは紅く染まる

少しの沈黙が店内に流れると、バーテンダーはカップとソーサーを取り出し、コポポと挽きたてのコーヒーを注いでいく。

「はい、ホットコーヒーお待ちどう様。ローストを多めに、だったわね?」

バーテンダーは仮面の獣人の前に、コーヒーの注がれたカップとソーサーを置く。「うむ。ありがとう」

仮面の獣人は小さく頷くと静かにカップを手に取り、香りを楽しむ。

「フー……」

それを見て、トラちゃんはワイングラスを手にして、仮面の獣人に近付けた。

「貴殿とここでこうして会ったのも、何かの縁だ。付き合わせていただこう」

「……コーヒーとワインで乾杯と言うのは、些か奇妙ではないか?」

仮面の獣人は苦笑しつつもカップを持ち上げる。

「フツ、それこそ”奇縁”と言うものだな」

トラちゃんが胡散臭い笑みで返すと、ワイングラスとコーヒーカップがカチンと音を鳴らし合った。

互いに一口してから、仮面の獣人から話を切り出した。

「少し、別の話をしてても良いだろうか？」

「ああ、良いとも。貴殿からの話というのも、有意義な時間だ」

「大した話でも無いぞ？……彼ら、『フォース・スピリッツ』のことだ」

フォース・スピリッツ。

かつての伝説のフォース『ビルドダイバーズ』の再来とさえ囁かれ、一年前の『ELダイバー動乱』の事件解決の第一人者でもあり、今やGBNプレイヤーの中で、その名を知らぬ者はいないとまで言われる、現在での最上位フォースの一角。

仮面の獣人がMDを率いていた頃にフォースバトルを行ったことが幾度かあり、刃を交える都度に苦杯を飲まされた相手でもあった。

「ほっほう？その名を聞くのは久方ぶりだな」

「久方ぶりも何も、君とてスピリッツの一員だろう」

何を言っているんだね、と仮面の獣人は苦笑するものの、その発現を聞いて、トラちゃん目は目を丸くした。

「……何を勘違いしているのだ？確かに俺はスピリッツとの連中と顔を合わせることは多いが、スピリッツのメンバーであったことなど、過去に一度も無い」

「む？そうなのか？彼らと行動していることが多いのだから、てつきりそうなのかとば



かり」

そう。

トラちゃんは確かにフォース・スピリッツと行動を共にすることは多々あったが、実際にフォースに加入したことはない。

「学び舎が同じなのだな。まあ否応なく顔を合わせることになる」

「そうか。……それで、その彼らについてだ」

仮面の獣人は、マスクのフィルタの奥から思案するように目を細める。

「今、彼らはフォースに所属こそしているが、その足取りは皆バラバラだと聞く。……単にそれぞれがソロプレイに集中しているだけ、とは思えなくてな。君なら何か知っているか？」

その問い掛けに対して、トラちゃんもまた目を細めて口を閉じる。

「ふむ……」

間をおいたのはほんの数秒。

「とは言え、俺としてもどこまで答えて良いものか……、そうだな、話は少しだけ戻るが、E.L.ダイバーの排除を推進させていた、運営の強硬派に関する件だ」

「やはりそうか……」

仮面の獣人はコーヒーをもう一口して、言葉を選び直す。

「やはり」と言うことは、貴殿には貴殿なりの目星が付いていたのではないか？」

「私個人での推測、憶測だけでは、どうしても確証が得られなくてな。だからこうして、彼らの知り合いである君に話を持ちかけた。……実際のところはどうかのただ？」

その答えとして、トラちゃんはニヤリと、人を疑わせる胡散臭い笑みで返した。

――肯定。

オデッサ鉾山基地に飛来してきたガウ攻撃空母。

艦載機のドップを吐き出して後は終わりのはずが、何故かNPD機ではないガンプラがそのガウから出撃してくる。

それを聞き取って、ハバキリは自身の頭の回転速度を速める。

「コーダイツ、敵の数は!？」

彼が何を言わんとしているかを瞬時に読み取ったコーダイは視界内に見えるガンプラを数えていく。

「にー、しー、ろー、はー、……10機だ!数は10機!」

見えているだけでも、Zガンダム、ヴェルデバスター、ガンダムエアマスター、ガン

ダムスローネツヴァイ、バイアラン、グフイグナイトッド、ジム・カスタム、ドム、バーザム、スタークジェガンがいる。

「じゅ、10機も!?!」

コーダイの復唱を聞いてセアは驚愕し、ハバキリはあくまでも冷静さを保つ。

すると、ガウから発進してきたガンプラの群れのリーダーだろう、Zガンダムからオープン回線で通信が届く。

『警告する。諸君らが保護しているELダイバーをこちらに引き渡してもらおう。要求を受け入れられない場合、諸君らを即座に撃墜する。繰り返す……』

口にし慣れているのだろう、無機質な警告。

それを聞いて、コーダイのキャノパルドはすぐに踵を返して、ジンライとガンダムK-IIの元へ合流、ハバキリと接触通信を行う。

「おいおいハバキリ、連中やっぱ……」

「分かつてる……こうなるような気もしてたんけどな」

何故にこうも嫌な予感に限って当たるものか。

ともかく、ここで素直にジルを引き渡すと言う選択肢は最初から無い。あつたとしても選ぶつもりは毛頭ない。

ハバキリはコーダイとの接触通信を継続しつつ、自分達と相手との戦力差を客観的に

見比べる。

「敵の数が多いな。こーも多いと、騙し討ちは返って危険か……」

この間の場合は、敵の数がそれほど多く無かったことと、ガンダムMK-IIからジンライに乗り換えて強襲すると言う芸当があったからこそ、騙し討ちが行えたのだ。

だが、今回の相手はその倍の戦力。

騙し討ちを狙って近付けば、囲まれて逃げ道を塞がれる恐れもある。

「それに、このエリアの地形……偶然の出会いにはあつちの都合が良過ぎる」

つまるところ、敵は最初からハバキリ達の動向を把握しており、逃げにくい地形のエリアに踏み込んできたところで襲撃を仕掛けてきた、と言うことだ。

それが何を意味しているかを、コーダイは悪態をつくように溢した。

「つてことは、俺達の『お尋ね者 扱い』は、まだ続いてるつてのか……クソツ、強硬派の奴らめ！」

「お尋ね者 扱い?……いや、それは後で訊く」

今はこの状況をどうにかするのが先決だ。

『聞こえているのか! E.L.ダイバーを引き渡せと言っている!』

Zガンダムからの警告を聞き流しつつ、コーダイは意見を進言する。

「とにかく、足の速い可変機二機を墜さなきゃならねえ。じゃなきゃセアさんとジルを

逃しても追い付かれちゃう」

セアのガンダムMK-IIを離脱させるなら実質、2対10と言う圧倒的な戦力差。

そして、Zガンダムとガンダムエアマスターの二機は変形することでMS形態を凌駕する空中機動性を得るガンプラだ。空中機動性と言う一点であれば、バイアランも十二分危険な相手だろう。

コーダイの進言を聞いてほんの3秒の思考の末、ハバキリは下した。

『殺られる前に殺る』しかない、と。

「……好きじゃねーけどやるしか。オレが突撃するから、コーダイはセアさんのMK-IIを頼む」

「あいよ……」

”いつも通り”、打ち合わせはごく簡潔かつ単純に済ませて、後は出たとこ勝負。

『これが最後通告だ。三つ数える間にE.L.ダイバーを引き渡す意志を見せろ』

すると、Zガンダムが一步前に出てビームライフルをジンライに向けてくる。

『ひと……』

ひとつ目のカウントを取ろうとした瞬間、ハバキリは思いきり殴るようにアームレイカーを押し上げ、ジンライを瞬間的に最高速度まで叩き出して突撃した。

『なっ、ちよっ待……』

それを言い終える前に、ドムの胴体に重斬刀を一閃、真つ二つに斬り裂いた。

「よしジャイバズもーらいつと」

爆散する前に、ジンライはドムの右手からジャイアントバズを奪い取って急速離脱、一拍を置いてから爆発が生じた。

ドム、撃墜。

『抵抗するか……殺れ!』

不意討ち同然にドムを撃墜されたものの、指揮官だろうZガンダムは冷静に攻撃開始を指示する。

上方と正面から、多数のビームや銃弾が一斉にジンライに襲いかかるが、ハバキリはジャイアントバズを奪い取った時点ですぐに回避に専念しているため、掠めこそすれど直撃してしまうことはない。

「数の暴力に頼ってるのにまともに当てられねーとかマジウケるんですけどー!なに? お前ら下手なの? あそつか! オレが強いのか! そーかそーか……」

先程からハバキリがオープン回線でのような発言を繰り返しているのは、挑発しているからだ。

「ごめんねー! 強くってきー!!」

こうして敵のヘイトを自分に向けさせることで、コーダイの行動に余裕を持たせるた

めに。

ハバキリのジンライが陽動を継続するその一方で、コーダイは今度はセアと接触通信を行う。

「ちよい失礼……セアさんは、俺とハバキリの奴が暴れてる内にこのエリアから離脱してください」

「え、でも……あんな人数相手に、二人だけで戦うの？」

「まあ、そうっすけど」

「……だったら、私も戦うー！」

自らも抗戦の意志を見せるセアに、コーダイは慌てて制止させようとする。

「ちよちよっセアさんっ、待ってくださいよ！あいつらは多分、運営の強硬派の連中……いくらなんでも、初心者が倒せるような相手じゃねえ！」

コーダイが遠目から見たガンプラの完成度だけでも一朝一夕で出来上がるようなシロモノではない。

そんな相手を前に、昨日今日GBNを始めて、ガンプラを作ったのもこの間と言う初心者が、どれほど戦えるものか。

「だって、二人を見捨てて自分だけ逃げるなんて……そんなこと出来ないよ！」

「いや、だから……ああもうしょうがねえな！」

このままでは無駄な言い争いになりかねないと判断して、コーダイはセアの説得を即座に諦める。

「下手に攻撃とかしなくていいつすから、とにかく生き残ることだけ考えてくださいよ!?」

「うん、分かったっ」

それだけセアに言い付けてから、コーダイはウエポンセクターを回転させ、左右のキャノン砲を選択、上空からバスターライフルをジンライに浴びせ付けている、MS形態のガンダムエアマスターをロックオンする。

「まずはテメエからだ、吹っ飛べ！」

引き絞られたトリガーと共に、キャノパルドの大口径の砲弾が、真っ直ぐにガンダムエアマスター目掛けて放たれた。

ジンライへの攻撃に集中していたガンダムエアマスターは、キャノパルドからの砲撃に気付かず、胴体部に240mmの砲弾が炸裂、そのまま墜落していく。

ガンダムエアマスター、撃墜。

次はこのまま立て続けにバイアランも……と言いたるところだが、キャノパルドからの砲撃だと気付いたらしい敵機の群れは、すぐに散開する。



『アルファー、ブラボー両小隊は『青き狂戦士』を叩け。残りはガンキャンノンとMK-IIを撃ち落とせ!』

Zガンダムからの指示を受けた敵機達は、小隊ごとに纏まって戦力を二分させる。

その動きを見て、ハバキリは僚機のモニターに目を向ける。

ガンダムMK-IIが撤退していないところ、セアも戦うと言ったのだろう。コーダイも说得しようとして、早々に見切りを付けたらしい。

『ヴェルデバスターは向こうに行っただか。PS(フェイズシフト)装甲持ちの相手はしたくないから、正直助か……』

『余所見するか!』

斜め背後からビームサーベルを振り翳そうとするバーザム。

しかし、蛍光イエローの光刃が装甲を捉える寸前に、ジンライはその場でくるりと一回転して躲し、

「余所見してやったんだよ、つと!」

振り向き様、流れるように重斬刀を振るい、バーザムの露出したムーバブルフレームを切断する。

バーザム、撃墜。

『いただきイー!』

崖の上から身を伏せて機を窺っていたジム・カスタムが、ジンライの死角からジムライフルの照準を合わせていた。

が、

「視えてねーわけあるか」

ジンライは不意にジャイアントバズを逆さまに構え直して、振り向きもせず背後へジャイアントバズを発射した。

それは、決してジム・カスタムへの直撃コースではない。

だが、ジム・カスタムが顔を覗かせていた岩盤に360mmのロケット弾頭が炸裂、口径の大きさに見合った爆発力は、大自然の壁をも容易に吹き飛ばす。

『おっ、おわあああああ……!?!』

結果、身を伏せていたジム・カスタムは、突然足場が崩れたことで崖の下へ転がり落ちていく。

高所からの落下だ、ジム・カスタムが立て直すまでには時間がかかる。

今、ジンライをターゲットにしているだろう敵機は、ガンダムスローネツヴァイ、スタークジェガン、グファイグナイテッドの三機。

「ま、何とかなるだろ」

ハバキリはそう呟いてアームレイカーのトリガーボタンを押し込み、それに連動してジンライの持つジャイアントバズがスタークジェガンへ放たれる。

『踏み込みすぎるなつ、連携して確実に仕留めるぞ！』

スタークジェガンはハイパーバズーカを発射、時限信管によるそれはベアリング散弾となつて飛び散り、ジャイアントバズの砲弾にぶつかつて爆発させる。

弾頭の炸裂によつて爆煙が巻き起こり、その中を突つ切るようにジンライが再び加速する。

一方のコーダイとセアは、乙ガンダム、ヴェルデバスター、バイアランの三機を相手に奮戦していた。

コーダイのキャノパルドは、フット裏のローラーを駆動させて、上空のバイアランからのメガ粒子砲と、ヴェルデバスターからのバヨネットビームライフルによる射撃を躲しつ、反撃を行っている。

「つたくよ、こつちはまだ完成したばつかだつてのによー！」

ちつとは手加減しろよ、と文句をぼやくものの、それを聞いた向こうが手加減してくれるとは思わない。

万全でないまま引っ張り出してきたのだから、仕方無いと言えば仕方無いのだが、どうしたってタイミングの悪さに悪態をつきたくもなる。

その上、万全でない状態で初心者セアも守らなくてはならないとなれば、難易度は一気に跳ね上がる……と腹積もりを決め込んでいたコーダイだったが、それは良い意味で裏切られていた。

「(つてかセアさん、ほんとに初心者なのか?)」

コーダイは、自機の操縦に集中しつつも、セアの操縦するガンダムMK-IIの動向を逐一確認している。

彼の目線から見ても、セアの操縦技術は昨日今日GBNを始めた者のそれではない。確かにコーダイが「下手に攻撃とかしなくていい」と言っただけのために、攻撃回数は少ない。

だが、ヴェルデバスターやバイアランからの射撃を的確に回避し、自分からターゲットロックが外れれば、すぐにビームライフルによる射撃を行う。

ハバキリやコーダイがごく自然に行っている『攻撃しながら回避、回避しながら攻撃』と言う複雑で素早い操縦を強いるようなことは出来ない。

だがその反面、『回避』か『攻撃』かのどちらかに意識を傾けているのだろう。

同時には出来ない、しかしどちらか——特に回避に専念すれば、敵からの攻撃を捌け

るようだ。

「(自衛くらいは出来るってか、嬉しい誤算だぜ)」

それなら後背の憂いは無用、とコーダイは目の前の敵機に集中する。

——実は、セアの異様に高い回避率には理由があった。

ただ単にセアの操縦技術が優れているわけではない。

その要因は、彼女のガンダムMK—IIに同乗しているジルにあった。

「上から来る、左に避けて」

ジルがそう口にして、

「うん」

セアがそれに従う。

すると、0・5秒前までガンダムMK—IIがいた地点を、バイアランのメガ粒子砲の火線が降って来た。

『また外れた……何だって言うんだ!』

目標のガンダムMK—IIはほぼ素組み、性能で言えばジンライやキャノパルドと比べ物にならない。

だと言うのに、いくらロックオンしても、何発撃つても当たらない。

「これならば直撃だ」と思える攻撃に限って、憎たらしいほどに躲してしまふのだ。

どういいうわけか、ジルにはガンプラの“心”を感じ取るだけでなく、敵機からの攻撃を先読みする力も秘めているらしい。

ふと、遠距離からキャノパルドへ砲撃を行っていたヴェルデバスターが、二丁のバヨネットビームライフルを連結させてのバスターモードで、ガンダムMK-IIへと狙いを変えてきた。

が、

「正面」

「なら、横に避けて、と」

照射される熱プラズマの荷電粒子が、ガンプレー機ぶんの余裕を持って通り過ぎる。

「今なら」

「よっし……い！」

セアは即座にビームライフルを構え直し、バスターモードの射撃による反動で動けないヴェルデバスターへ向けてトリガーを引き放つ。

反撃のビームが、ヴェルデバスターの連結されたバヨネットビームライフルを焼き切り、暴発させた。

『ぐっ……今のが気付かれるのかよ!?!』

ヴェルデバスターはバヨネットチームライフルと連結していたフレキシブルアームを切り離し、慌てて後退しようとするが、

「はいそーおー！」

上空のバイアランの相手をしながらも、虎視眈々と好機を窺い続けていたコーダイのキャノパルドが、ヴェルデバスターをロックオン、チームライフルの火線が心臓部を正確に撃ち抜いた。

ヴェルデバスター、撃墜。

乙ガンダムは二手に分かれた部隊の戦況を冷静に読み取っていた。

ジンライの相手には精鋭部隊を向かわせているのだ、初手こそ先手を取られたが、じっくり追い込めば確実に倒せるはずだ。

もう片方の、キャノパルドとガンダムMK-IIの方も、ヴェルデバスターこそ撃墜されたものの、そこに至るまでの過程で推測出来たことがある。

ガンダムMK-IIの異様なまでの回避力だ。

ガンプラの完成度だけを見れば、使い手のダイバーは恐らくデビューして間もない初心者。

ゲームが得意なダイバーである可能性もあるが、だとしても動きそのものは二次元的

で単調なものだ。

そこから何が分かるか？

ELダイバーの中には、ニュータイプのように敵機からの攻撃を先読みしたりする者もいる。

それと照らし合わせてみれば。

あのガンダムMK-IIは、ELダイバーが操縦、あるいはゲストモードで同乗している可能性が高い。

そして、自分達の目的はELダイバーの排除であつて、彼らの殲滅ではない。

言つてしまえば、ELダイバーの排除完了後はさつきと撤退するつもりだ。

肝心のターゲットのELダイバーは管理局によってサーフティが掛けられているだろうが、そんなものはこちらでブロックしてしまえばいい。

それが可能な運営権限も、こちらにあるのだから。

Zガンダムはウエイブライダー形態へ変形すると、ガンダムMK-IIへ向けて加速した。

ジルは、近付いてくる強い敵意を感じ取り、ぶるりと身を震わせた。

「……………来るっ」



それを聞いて、セアはレーザーに目を向ける。

ヴェルデバスターが狙撃してきた地点よりもさらに遠くから、Zガンダムが迫って来る。

その光景はコーダイにも見えており、セアに警戒を促す。

「セアさんっ、指揮官機がそっちに……」

『どこを見てんだよ!』

一瞬でもセアの方に意識を向けたせいで、バイアランの急速接近に対する反応が遅れてしまった。

バイアランは右肩からショルダータックルを仕掛け、キャノパルドはそのまま岩盤に激突させた。

「ぐわっ!?!」

背後から走る激しい震動にコーダイは顔を顰める。

『終わりだな!』

バイアランは左マニピュレーターでキャノパルドの頭部を押さえ付けると、逆のマニピュレーターにビームサーベルを抜刀、それをコクピットへ突き立てようと振り下ろすが、

「い、んのっ……」

コーダイは左のアームレイカーを押し上げる。

それに呼応するキャノパルドもまだ左腕を振り上げて、バイアランのビームサーベルを握る腕を押しえ付ける。

「野郎ツ!!」

続けてウエポンセレクトターを回し、肩のキャノン砲をダブルセレクト、砲口をバイアランの胴体に向けると、ほぼゼロ距離で左右同時に発射、バイアランを粉々に吹き飛ばした。

バイアラン、撃墜。

「やべっ、セアさんはっ!」

キャノパルドを立て直しながら、コーダイはリーダー反応を確認する。

乙ガンダム反応は既にセアのガンダムMK-IIに接近しており、赤のマーカークが青のマーカークに密着しているではないか。

だが、キャノパルドが点在する地点からは遠く、キャノン砲による狙撃を行おうにもセアに誤射する恐れもある。

そうなればその地点まで移動しなければならぬ。

「(連中、ただ単に攻撃してただけじゃねえ……ちよつとずつ俺とセアさんを遠ざけていたのか!)」

バイアランとヴェルデバスターは、ハッキリ言ってしまえば捨て駒だったのだ。

セアのガンダムMK-IIにELダイバーであるジルが同乗していることに、どうやって気付いたのかは計りかねるが、ハバキリとコーダイ、セアの三人を分断、孤立させたところでELダイバーが同乗しているだろう機体を割り出し、トドメはZガンダムが刺す……元よりそんな作戦なのかもしれない。

「間に合ってくれよ……ッ」

キャノパルドのフット裏のローラーをフル回転させて、コーダイはその地点へ急ぐ。

「……」が、キャノパルドよりも遙かに速い速度で、何かが通り過ぎて行った。

ウェイブライダー形態からMSへ変形したZガンダムは、一気にセアのガンダムMK-IIとの距離を詰め迫る。

「……」

ジルは怯えるようにセアのブラウスにしがみつく。

「大丈夫……私だって、やれるはずっ」

アームレイカーを握り直し、セアは迫るZガンダムと対峙する。

直後、Zガンダムは前進しながらビームライフルを連射してくる。

「これなら……」

先程のジルの導くような先読みには期待出来なくとも、この程度ならセアでも躲せる。

一発、二発、三発、と放たれるビームを回避していくガンダムMK-II。

だが、セアその回避運動こそがZガンダムの狙いであり、予想通りでもあった。

『フン……所詮は素人、マニユアル通りの回避しか出来ないな』

ビームライフル三発の次は、頭部のバルカンを速射、一对の60mmの銃弾が続けてガンダムMK-IIへ襲い掛かる。

それに対して、シールドで防御すべきかと判断しかけたセアだが、

「(狙いが甘い?)」

ならばこれも回避で対処すればいい、とセアは判断し直して、バルカンの銃弾を回避する。

が、

「……はッ、そつちはダメッ!!」

銃弾をやり過ぎた瞬間、ジルが悲鳴のような声を上げた。

『墜ちろー!』

その刹那、ガンダムMK-IIの回避した方向へ先回りするように、二つの弾頭が迫ってきていた。

Zガンダムの腕部に仕込まれている、グレネードランチャーだ。

「!?」

ジルの警告を耳にして、セアは咄嗟にガンダムMK-IIのシールドを身構えさせた。タツチの差、シールドが静止すると同時にグレネードランチャー二発が炸裂した。

しかし、グレネードランチャーの爆発はシールドの破壊に留まらず、ジョイントが接続されていた左腕すらも破壊していた。

「あぁッ!?!」

「はうッ……」

爆風はガンダムMK-IIごと吹き飛ばし、コクピット内が激しく震動すると同時に、コンソールからは左腕の反応消失をけたたましく通知してくる。

『チツ、仕留め損ねたか……まあいい』

地面に倒れ込んだガンダムMK-IIへ向けて、ビームライフルの銃口を向け直すZガンダム。

『今度こそ死ね、ELダイバー』

その言葉と共にトリガーが引き絞られ――

た瞬間、Zガンダムのビームライフルに何かがぶつかり、マニピュレーターから離れ、放たれたビームは明後日の方向へと飛んでいく。

『……何だどつ?』

Zガンダムの足元に転がったのは、76mm重突撃銃。

この戦場でその銃火器を持ち歩いているのは、ただ一機しかない。

「死ぬのはてめーの方だよ」

一拍を置いて、逆光と共に鉄塊が振り下ろされて来たが、Zガンダムはその場から跳躍して、その一撃を躲しつつ距離を置いた。

空振りした鉄塊は地面を砕き割り、それを気に留めることなく、Zガンダムを威嚇するようにモノアイを輝かせたのは、ハバキリのジンライ。

『そ、そんなバカなつ、あの精鋭の二個小隊を、こんな短時間でどうやって……!?!』

「おいおい、アレで精鋭なのか? あんなモン片付けるのに一分も要らなかつたぞ?」

鉄塊、ハバキリを担ぎ直しながら、ハバキリは何事も無かつたかのように返す。

「は、ハバキリく……」

撃墜寸前の所で救ってくれたハバキリに、セアは礼の言葉を言おうとするが、

「あー、セアさん。そこから動かないでくださいね。援護とかも、要らないん、でッ！」  
「で」の発音と共にハバキリはアームレイカーを殴り倒し、ジンライは瞬時に最高速度にまで加速、射撃の間合いからわずか一秒で近接格闘の間合いに踏み込み、下から振り上げるようにシースザンバーを振るう。

『なっ、ぐっ!?!』

Zガンダムは咄嗟にシールドでその一撃を受ける。

が、大気の摩擦熱に耐え、ガンダリウム合金の塊と称されたジ・Oの重装甲すら貫徹させるほど強固なシールドを、ただの一撃で粉碎した。

吹き飛ばされたZガンダムだが、どうにか踏ん張り直して左腕内部からグレネードランチャーを発射して牽制する。

『お前は何故ELダイバーなどの味方をする!』

「はっ。」

ジンライは即座に左手にもう一丁の76mm重突撃銃を持ち直し、グレネードランチャーを撃ち落とす。

炸薬が爆発し、その爆煙に紛れるようにZガンダムがビームサーベルを抜刀して突っ

込んで振りかざして来る。

それに対するハバキリの反応も速く、76mm重突撃銃をその場で捨てて両手でシースザンバーを握り直すと、寝かせるように構えてビームサーベルを受け止めてみせた。

蛍光ピンクの重金属粒子と、丹念にコーティングが施されたシースザンバーの腹が衝突し、スパークが迸る。

『一年前の動乱事件を知らないとは言わせんぞ！』

Zガンダムは一度バックステップで距離を取りつつ、頭部バルカンを速射する。

バルカンの銃弾もシースザンバーで弾き返すジンライだが、その間にもZガンダムは、今度は上から迫りくる。

ジンライは一步後ろに下げて、体勢を整え直し、再度のビームサーベルを受け止める。

『E.L.ダイバーなどがあるから、GBNはいつまでも脅かされる！』

一撃、二撃、三撃と、ビームサーベルとシースザンバーが交錯する。

一方的に攻め込んでいるのはZガンダムの方で、ジンライは防戦一方だ。

『俺達は、GBNを守るために戦っている……』

一見すればZガンダムの方が優勢、しかしその実、ジンライはそれら一撃一撃を全て危なげなく防ぎ切っている。

『それが分からんお前ではあるまい！』



ついに痺れを切らしたか、Zガンダムは強引にシースザンバーを突破しようと肉迫する。

だが、ビームサーベルがシースザンバーが叩き付けられる瞬間、

「シースザンバー、抜刀」

ハバキリはウエボンセレクターをコマンド入力し、シースザンバーから斬鋼刀を抜き放って飛び下がり、Zガンダムのビームサーベルは中身の無くなったシースザンバーを斬り飛ばして空振りする。

一度距離を置いたジンライは、斬鋼刀を構え直して対峙する。

「GBNを守るために戦っている、って？」

ハバキリは、Zガンダムのダイバーからの発言への回答を表した。

「E.L.ダイバーは有害だ、だから排除する。あーはいはい、ご立派なことだな、エライエライ。で、E.L.ダイバーと一緒にいるからオレ達も有害だって？」

一息を入れ替えてから、ハバキリは声のトーンを落とした。

「知らねーよそんなモン」

それは、「知らない」の一言で切り捨てられた。

「てめーのご高説なんざどーでもいいし……」

ジンライは再びフルスロットルで最高速度まで加速する。

「仮にELダイバーのせいでGBNが壊れて無くなったって構わねーよ」

一瞬でZガンダムへと接近し、斬鋼刀を振り抜くが、紙一重で躲される。

『バカな……お前はGBNに何の思い入れも無いと言うのか!』

「思い入れが無きや、『青き狂戦士』なんて呼ばれるほどやり込んでねーよ」

斬鋼刀が空振りしたと同時にジンライは、その場で重心を入れ換えて回し蹴り、Zガンダムを蹴り飛ばす。

『ぬぐっ……それなら、何故!?!』

蹴り飛ばしてすぐにまた距離を詰めていくジンライ。

「てめーらはな、自分の価値観を分かってくれなくて喚いてる。お子様」と変わらねーよ」

即座に斬鋼刀を振り翳し、

「寝言を言うんなら寝てる時にしとけ、あんぽんたん」

一閃。

ハバキリの算段では、今の一撃で仕留められたはずだが、辛うじて避けられたのか、Zガンダムは肩口から左腕と、背部のバインダーの左側を失いながらも、どうにか残されたバーニアを駆使してジンライイから距離を取る。

『クソツ、使いたくはなかったが……！』

コクピットの左半分が『Hazard』の赤い警告表示で埋め尽くされる中、Zガンダムのダイバーは何かを入力した。

すると、突如として何もな場所から『NPDリーオー』が出現した。

モニターカメラが赤く発光しているところ、ハードモードの機体のようだ。

その数、一個小隊である三機。

それを見て、ハバキリは心底から侮蔑するようにZガンダムを睨んだ。

「はー？ 負けそうになったからってイカサマ？ てめーこそGBNに思い入れもクソもねーじゃねーか」

『何とも言うがいい』

Zガンダムからのコマンドか、NPDリーオーはドーバーガンを一斉に構え、砲口をジンライイとガンダムMK-IIへと向けた。

『こうなった以上、こうする他に方法は……』

無い、と言いかけたところだった。

ズヴァアウツ、と言う音を立てながら、ドーバーガンを構えていたNPDリーオーの機体の頭部に、ライトグリーンに輝く何か貫いた。

頭部を破壊されたことよって機体制御を失ったNPDリーオーは、力無く倒れた。

NPDリーオー、撃墜。

『はっ!?ど、どこから撃たれた!?』

どこからの攻撃なのかとZガンダムが狼狽している間に、もう一度同じ攻撃が他のNPDリーオーの頭部を貫いた。

NPDリーオー、撃墜。

「コーダイくんの攻撃?」

セアはNPDリーオーが撃墜されていく攻撃を、コーダイのキャノパルドによる狙撃なのかと読んだが、ハバキリはそれを否定した。

「いや、あいつのライフルの火線はピンク色です」

つまりそれは、キャノパルドによる狙撃ではない、第三者による攻撃。

ふと、Zガンダムは撃墜されたNPDリーオーの頭部に目を向ける。

貫通してもう消失しているのビームが、まだ残っているのだ。

『ビーム……いや違うっ、『ビームサーベルの弓矢』だと……!?』

それは、”矢”の形を形成したままNPDリーオーの頭部に、”突き刺さっている”。

だが、それが分かったところで風向きが変わるはずもなく、最後のNPDリーオーも同じように『ビームの矢』が頭部に突き刺さり、機能停止した。

NPDリーオー、撃墜。

呼び出した増援も、僅か30秒もしない内に全滅した。

「……どこの誰のおかげかは知らんけどまーいや。……さて、万策尽きたところでどーするよ、小山の大将さん？」

ハバキリは声に怒気を孕ませながら、ジンライの斬鋼刀の切っ先を向ける。

『なっ、がっ、……くっ』

数の暴力もイカサマも引っくり返され、Zガンダムはついに踵を返して逃げ出した。

「ま……そりや逃げるよな」

ハバキリはそれを追うこともせずに見送る。

Zガンダムと入れ換わるように、コーダイのキャノパルドがようやく二人に合流した。

「お、おいハバキリ！あの野郎、追撃しなくていいのか？」

逃しても良いのかとコーダイは問い掛けてくるが、

「しなくていいよ」

その理由を答えるように、ジンライはZガンダムが逃げた方向へモノアイを向けた。

「……後始末を付けてくれる人がいるみてーだし、な」

命からがら逃げ出したZガンダム。

向こうが追撃して来なかったおかげで、どうにか戦闘エリアの外にまで退避出来たところだ。

「クソツ、『青き狂戦士』があそこまで強いなんて聞いてないぞつ、参謀本部もいい加減なことを！」

苛立ちのあまりにコクピットの壁を殴った。

「……とにかく、次はもつと戦力を増強してから攻撃を仕掛けなければ……」

そこまで言い掛けたところで、不意にモニターから敵機の反応を示すアラートが鳴り響く。

「何だ……?」

Zガンダムは前方を見やる。

ギリギリ目視可能な距離に、一機のガンプラがいた。

白灰色と董色のツートーンカラーをした『ケルデイルガンダム』の改造機。

目視で視認すると同時に、オープン回線での通信が届いてきた。

『GBNを守るために、何の関係もないプレイヤーを巻き込む……』

張り詰めた空気を射抜くような、女性の声。

『私達』は、こんなもの求めていない』

ケルデイルガンダムに備え付けられている装備を見る。

それは、小型の盾と一体化した“弓矢”のような武器。

間違いない、先程の攻撃を仕掛けてきたのは、コイツだ。

「貴様か！ 貴様が俺たちの邪魔を！」

『ええ、邪魔させてもらったわ。……それで？』

どうするのかと訊ねるように、ケルデイルガンダムは左腕の弓矢を折り畳んだ。

「貴様がアアアアアッ!!」

怒り心頭でもはや冷静な判断力すら失ったZガンダムは、ビームサーベルを抜き放つて、ケルデイルガンダムへ襲い掛かった。

しかし、対するケルデイルガンダムはその場から動くことなく、バックパックに懸架された二丁拳銃『GNビームピストルII』を抜き放ち、同時に右肩に備えられた分厚い盾――否、重火器を作動させた。

それは、フレキシブルアームと連結された、連装重機銃（ダブルガトリングガン）。

一拍を置いて、六本のシリンダーを束ねたような砲身、その左右一対が咆哮を上げた。

咆哮は銃弾の嵐――圧倒的かつ単純な暴力――となつて吹き荒び、バカ正直に真っ直ぐ正面から突撃してきたZガンダムを包み込み、

――ズタズタに喰い破っていく。

ダブルガトリングガンが空薬莖を吐き出していく最中、ケルデイルガンダム本体からもGNビームピストルIIが連射され、実弾が穿った所をビーム弾が流れ込む。

カタカタカタカタ……と、ダブルガトリングガンの回転が止まる頃には、Zガンダムは文字通りハチの巣と化し、バラバラと壊れていった。

Zガンダム、撃墜。

ケルデイルガンダムは再びフレキシブルアームを回転させて、硝煙を上げるダブルガトリングガンを右肩へ納め、両手のGNビームピストルIIも折り畳んでバックパックへ戻した。

周囲に他の敵機の反応が無いことを確認してから、ケルデイルガンダムのダイバーはコクピットを開いた。

藍色と董色のオツドアイ。

左側頭部でサイドポニーに束ねられた、黄土色とベージュの掛かった長髪。

首から下に纏うのは女武者を思わせる甲冑姿だが、上半身の右半分は露出させた、射手のもの。



「確かに、GBNは変わった……けど、『こんな世界』を一体誰が喜ぶのよ」

「デイメンションの地平線を見通しながら、ケルデイルガンダムのダイバー……『ユイ』は嘆息をついた。

世界中のダイバー達がひとつになった、『一年前のあの戦い』は何だったのだろうか。遣る瀬無い苛立ちが溶け消えるのを感じてから、ユイはコクピットの中へ戻り、ハッチを閉じた。

リアスカートに設置されたGNドライブから光粒子を放ち、ケルデイルガンダムの改造機——機体銘『ガンダムマナジュリカ』は、その場から飛び去った。

ガンダムマナジュリカがZガンダムを捕捉した時を同じくして。

その場で立ち尽くすジンライ、キャノパルド、ガンダムMK-IIの三機。

「……ま、まあ！変な乱入はあったけど、まだミッションは終わってねえんだし、気を取り直して行こうぜ！」

そんな中で、気丈そうに振る舞い、努めて元氣そうに声を張り上げるコーダイ。

「そ、そうだね！私のMK-IIも左腕無くなっちゃったけど、大丈夫！」

セアはセアで、コーダイが気遣って明るく振る舞ってくれているのだと読み取り、そ

れに便乗しようとする。

だが、肝心のハバキリからの応答が無い。

「……」お尋ね者、扱いつて、そーゆーことか」

一拍を置いてから、こんなことを言い出した。

「コーダイ、後はもうテキトーにやってくれ。オレは上がる」

上がるー即ちそれは、このミッションをリタイアしてログアウトする、と言う意味だった。

「えっ、おいハバキリ……」

「ついでに言うと、しばらくはソロプレイでやる」

そう言いながら、ハバキリはコンソールを開いて、ミッションリタイアの項目を選択しようとする。

「オレがいたら、セアさんにも迷惑が掛かるからな」

『このミッションをリタイアしますか?』と言う文字に対して、『Yes』を指先で押そうとしてー

「待つてよハバキリくんっ!」

セアの声に一步踏み留まった。

ー待つてくれっ、ハバキリッ!

ーその声が、誰かの声と重なったのは、気のせいだろうかー。

「私はハバキリくんのこと、迷惑だなんて思っただけ……って言うか、何でハバキリくんがいたら、私に迷惑が掛かるのっ？」

それが分からない、とセアは訴えかける。

彼女の問い掛けに対して、ハバキリは何事も無いように答えた。

「オレ……って言うか、『オレ達のフォース』はね、運営の連中がやってるELダイバー狩りの、マークにされてるんですよ」

「……………え？」

ハバキリが運営からマークされている？

セアは一瞬、それがどう言う意味なのかを理解出来なかった。

「だからオレと一緒にいたら、また今日みたいなことが起こるってことです」

もういいでしょ、と呟くとハバキリは躊躇いひとつ無くリタイアを選択した。

『Mission Retirement』

「んじゃセアさん、コーダイ、また学校でなー」

そのまま、ハバキリは強制ログアウトさせて、デイメンションから離脱した。

「ハバキリく……」

セアのその声は、ついにハバキリに届かなかった。

オデッサの地に残されたのは、キャノパルドとガンダムMK-IIの二機だけ。

「…………泣いてた」

セアにしがみついていたジルが、そう呟いた。

「今のハバキリ、泣いてた」

ログアウトを完了、ハバキリはヘッドギアを頭から外してラックにかけ直し、隣の筐体にいる、ログイン中のセアの姿を見やる。

「…………」

一瞥して、何も無かったかのように荷物を纏めてダイブルームを後にして、そのままガンダムベースも退店していった。

「(フォースを抜けて、時間を置いただけじゃダメか)」

その帰り道、ダイバーギアを睨みながらハバキリは思考を回す。

今のままでは、ミッションを受ける度に運営の強硬派による襲撃を受けるだろう。

自分一人だけならまだしも、他のダイバーやELダイバーであるジルにまで害が及ぶのは我慢ならない。

「(かくなる上は…………)」

出来るならこの方法は取りたくなかった。

だが、コードイヤー、ジルまで巻き込むわけにはいかない。

なら、躊躇う必要など無い。

ハバキリは、ダイバーギアの設定画面を立ち上げ、一番下にある項目を選択する。

『このダイバーデータを初期化しますか？』

一度『Yes』と入力して、

『【警告】これまでのポイントやアイテム、フレンド、フォースデータ等が全て消去されます。本当に初期化しますか？』

「あばよ、”ハバキリ”」

今ここにいる『アメノ・ハバキリ』とは別の、GBNダイバー『ハバキリ』との決別の言葉を吐き、すぐにもう一度『Yes』を入力した。

すると、画面に『コロニー落とし』の場面が再生され、地表に到着したコロニーが大爆発、画面が真っ白になり……ダイバー設定画面の、初期設定に戻されていた。

「(やっちゃった)」

そのままスリープモードにして画面を閉じ、自宅への帰路を辿った。

日が暮れ始める夕方時、テラスは自宅に帰ってきた。

「ただいまー」

ドアを開けると同時に、玄関の靴の数に目をやる。

今日は珍しく、兄のハバキリが先に帰ってきてきているようだ。

リビングへ向かう途中で、浴室の明かりが点いていることと、ザーザーと言うシャワーの音が届く。

「(兄さん、シャワー浴びてるのかな)」

そう思つて素通りしようとしたテラスだが、

不意に『ドガツ』と言う音が響き、テラスは身を竦ませた。

一拍を置いて、

「冗談じゃねー……」

唸るような声と、

「ふざけんな……」

絞り出すような声と、

「クソ野郎どもが……テメーの面子がそんなに大事かよ  
”ッ!!”」

妹のテラスでさえ聞いたことのない声が、浴室から響いた。

「兄、さん……?」

「怒り狂う」などと言う言い回しなど生ぬるい、激情の権化がドアの向こう側にいた……。

### 【次回予告】

ハバキリ「はー……データ消しちまったし、再設定とかめんどいなー。そもそも、GNを続ける意味も分からなくなってきたし、これからどうするかな……」

次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション

### 『錆び付いた刃』

溜め息をつくくと幸せが逃げらしーけど、どのくらいの速さで逃げるんだろーな?」

## 5話 錆び付いた刃

「ああ、E.L.ダイバーの話をしていて少し逸れてしまったか……」

ふと、トラちゃんはバーテンダーと最初に話していたことを思い出す。

「貴殿は、フォース・アルディナをご存知か？」

トラちゃんは仮面の獣人にアルディナの名前を訊ねる。

「うむ。ここ数年で一気に名を上げていた新進気鋭のフォースだと聞く。……最近、急にその名を聞かなくなったようだが？」

仮面の獣人も、バーテンダーと同じくらいには知っているようで、頷く。

「無理もない。何せ、『青き狂戦士』のログデータが抹消してから間もなく、示し合わせたかのように『フォースが解散になった』からな」

トラちゃんは何でもなくようにそれを言うが、仮面の獣人は驚いたように挙動する。

「抹消した？運営によって消されたのではなく、自らの手で初期化したと言うのか？」

「そうらしいな。当時、強硬派の中で『フォース・アルディナのメンバーをマークすればE.L.ダイバーを捕捉出来る』と言うデマが流されていてな。自分の名前やデータが足枷になると言うのなら、そんなもの捨ててしまえば良いと言わんばかりに、あっさり消し



た」

トラちゃんの見解を補足するようにバーテンダーも口を挟む。

「データを初期化してしまつたら、今までのランクやアイテム、フレンドデータがみんなパーになつちやうのよねえ。それを分かつてやってやつたんだから、アタシに言わせてみれば狂気の沙汰だわ」

「それも全て仲間を守るために、か……」

物悲しげに仮面の獣人はコーヒーカップを傾けた。

彼ですら、自分が積み重ねてきたランクを惜しんでフォースを解散しないのだ、むしろそれが普通の考え方だろう。

不意に、トラちゃんが低く笑った。

「まあ……『青き狂戦士』の思考は一見まともそうに見えて、その実かなりブツ飛んでいくからな」

いや、あんたがそれを言うか、あんたが。

言外に、バーテンダーと仮面の獣人はそう呟いた。

ふとまた、カランコロンとドアベルが鳴り、客が訪れる。

バーテンダーはドアの方を目を向けて、

「……あらあら、今日は何だか懐かしいお客さんがよく来るわね」

「……」

来客はバーテンダーを一瞥して、無言のままカウンター席のひとつに座る。

端正な顔立ちに、純白の肌、短く切り揃えられた銀髪が特徴的な女性ダイバーだ。

「久しぶり……って言いたいけど、何だかお疲れみたいね？」

バーテンダーは気遣うようにお冷をテーブルに置いてやる。

「はアーーーーー……」

差し出されたお冷には口を付けず、大きく溜め息をひとつ。

そして、

「あーあ、汗をかいたみくちゃんの脇の下がなめたい」

来客「ー否、”やべー奴”は、ここが酒場で無ければドン引かれるような爆弾発言を

洩らした。

紆余曲折のあった日曜日が明けた、月曜日。

昼休みになるや否や、セアことホシザキ・セアは教室を飛び出し、その足で中等部の校舎にまで向かう。

中等部の三年生の特定のクラスの教室にまで来ると、廊下から教室内を窺う。

周囲の人間が「ホシザキ先輩だ」「最近よくこっちに来るよな」「ウチのクラスに何か用かな」などとざわめいているが、セアの耳にそんな戯言は聞こえていない。

「……いない」

目当ての人物がいなかったことに、肩を落とすセア。

代わりに、その目当ての人物をよく知る男子生徒が駆け寄って来た。

「セアさん、どうしたんですか？」

コウダイこと、オオヤマ・コウダイだ。

「コウダイくん、お昼時なのに邪魔しちゃってごめんね」

「いやいや、別に構いやしませんが……ハバキリのヤツですよね？」

コウダイはコウダイで、セアがこの教室にやって来たことの原因を悟る。

いつもなら「セアさんが遊びに来たせひヤツハー」と狂喜乱舞しているところだろうが、そんなことをしている場合ではないと読み取れる程度には、彼は空気の読める人間であった。

「スイマセンけど、昼休みになるなりどっか行っちゃって……」

「そっか……」

「いきなりログデータ消しやがって。いちいちやるのが極端なんだよ、あいつは……」

コウダイは慥然とした表情で呟く。

「……………ねえ、コウダイくん」

ふと、セアは顔を上げて向き直った。

「お昼ごはん食べながらでいいから、聞かせてほしいことがあるの」

「ん、そりやまあいいつつけど、聞きたいことって？」

一呼吸を入れ替えてから、セアは意を決した。

「ハバキリくん達の、過去のこと」

時を同じくして、ハバキリは校舎の屋上で弁当を食べていた。

米の一粒残さず食べ終えたのはいいが、今ひとつ味が分からなかった。とりあえず腹に入れるものを突っ込んだような感覚だ。

「……………これからどうするかな」

ログデータは昨日に初期化して、再設定をしていないままだ。

昨日以降、セアはおろかコウダイにすら連絡を取っていない。

コウダイは教室に行けば否応なしに顔を合わせることになるので、何事も無かったかのように相槌を打っていた。

GBNを続ける理由が見つからない。

このままやめてしまうのも良いかもしれない。

だが同時に、それでは納得できない自分もいる。

考えが纏まらない。

ハバキリはコンクリートの床に背中を付けて、空を見上げる。

日の光は出ているが、青空には白灰色の雲がいくつも掛かり、今にも陰り出しそう  
な——

「……先客がいると思ったら何だ、君か」

否、実際に影が差した。

自分の陰になっっている顔を見て、ハバキリは上体を起こした。

「つと。クラサカ先輩？」

「どうもこんにちは、アメノくん」

ハバキリの隣に座り込むのは、先日知り合ったばかりのセアの親友——クラサカ・カナデだった。

「今日のセアは何だか様子が変わね、お昼を一緒しようと思ったたら逃げられた」

「あー……ウチのクラスに行ったんじゃないですかね」

多分そーだろーな、とハバキリはいつもの自分を取り繕う。

「……まあ、ちょうど君にも用事があったところなんだ、良しとしましよ、そうしましよ、べー」

「何故花いちもんめ?」

カナデは持つてきた昼食に手を付けることもなく、ハバキリに向き直った。

「単刀直入に聞くよ。……昨日、セアと何かあった?」

「……」

その件か、とハバキリは眉を顰めた。

「そこで言葉をすぐに返さないってことは、何かはあったのかな?」

心配するわけでも責めるわけでもない、抑揚に乏しい声は、自然とその場の空気を支配していく。

ほんの数秒の思考を回し、ハバキリは応えた。

「オレが……セアさんを見捨てたんですよ。弱くてつまらねーから」

嘘をついた。

そう言えばカナデは責めるだろう、『ハバキリが悪い』と言うことには出来る。

それでこの議題は終わりだと高を括っていたハバキリだが、

「それはウソだね」

バツサリと嘘だと切り捨てられ、ハバキリは舌打ちする。

「チツ、誤魔化せなかつたか」

「君がそんなくだらない人間なら、弱くてつまらない相手のために、ガンブラ製作をレクチャーしたりしないよね？」

「ご丁寧にも嘘をついていることに對する裏付けの理由まで言われる。」

それに、とカナデは不満げに鼻を鳴らす。

「私はセアが心配なんだよ、仮にも親友としてね。それに、あの娘の感じからすると、君に何かされたから様子がおかしくなった……とは思えなくてね」

「なんでそこまで分かるんです。先輩って実はニュータイプかスペシャルかサイキツカーかなんかですか？」

「別に。ただ状況の前後と、セアの性格を考えた結果だよ。あの娘がちよつと天然で分かりやすいって言うのもあるけど」

それは何となく分かるな、とハバキリは心底で呟く。

セアはきつと、人から何かを頼まれたら断れないタイプの人間だ。

付き合いの短いハバキリですらそれくらいは分かるのだから、カナデならばもはやセアの頭の中を見ているようなものだろう。

「……それより、早く話してくれないかな。昼休みは意外と短いんだから」

食べる時間無くなるよ、とカナデはマイペースに急かす。

「なんかこの人苦手だな……」

彼女に対する苦手意識を自覚しつつも、ハバキリは溜め息をひとつ置いてから、昨日に起きたことと、その後自分がどうしたのかを、包み隠さず話した。

ハバキリの言葉が止まるのを見計らってから、カナデは再び口を開いた。

「仲間のために自分すら捨てる、ね……カッコよく聞こえるけど、裏返してみればただの自己中だよ。それで他の仲間がどんな思いをするのか、考えなかったんだ」

「お言葉もつとも。返す言葉もございません」

取ってつけたような返し方をするハバキリを見て、カナデは少し思案する。

「何が君をそうさせたのかな？」

「……今度は何の話ですか？」

話の中身が見えない問い掛けに、ハバキリは訝しげに目を細める。

「君が、自分のセーブデータを消してまで仲間を守ろうとする、その理由。余程のことでも無い限り、せつかく進めてきたデータを全部パーにしようなんて思わないよ？」

「……、……」

ハバキリは瞬きを繰り返して思案する。

このクラサカ・カナデと言う人物、マイペースで何も考えてないような顔をしながら、僅かな発言から真意を手繰り寄せてくる。



とんだ狸ー否、雌狐とでも言うべきなのか。

下手な誤魔化しを通じないのは先程に理解している。

ここは素直に言ったほうが、自分自身のためにもなる。

そう判断したハバキリは、まずは前置きから始めた。

「少し長くなるんで、昼飯食べながらでいーですよ」

ー時 は二年前にまで遡る。

ハバキリとコーダイは『アルディナ』と言うフォースに加入していた。

フォースメンバーも十代半ばの少年達で構成された、新進気鋭のルーキーフォース。

しかしながらその実力は下位ランカー勢を飛び越し、数々のフォースを破竹の勢いで

破り続け、上位ランカー達からも一目置かれていた。

その噂を聞きつけ、自分も彼らと共に戦いたいと門を叩く者も現れ始め、着実に

フォーストーナメントに出場するための人数である10人が集まりつつあった。

フォースリーダーは『トーシロー』。

『白き聖騎士』と呼ばれる、ハバキリ達と歳の変わらない少年だった。

だが、後の世の伝説にもなるだろうと囁かれた彼らに、ひとつの事件が襲い掛かった。

今から一月ほど前のある日、フォース・アルディナの面々はいつものようにミツシヨンを受注し、何事もなく目標を達成、さて後はベース基地へ帰還するだけだと言う時。

帰還途中にハバキリが、野良のELダイバーを発見した。

野良のELダイバーをふと見かけるだけなら、珍しいことではない。

その時は無視してスルーしようとしていた。

けれど、当時はまだ表沙汰になっていなかった強硬派の運営ダイバーと遭遇。

強硬派ダイバー達は、アルディナの面々がELダイバーと接触したと誤認し、何の勸告も無しに攻撃を仕掛けてきたのだ。

攻撃された以上は反撃せざるを得ず、アルディナのメンバー達は徹底抗戦。

犠牲を払いながらも、どうにか撃退に成功したまでは良かった。

だが、その日を境にアルディナのメンバー達は、何者かー恐らく強硬派の連中から執拗な妨害行為を受けるようになった。

尤も向こうからすれば妨害などではなく、『ELダイバーと言う害悪を守ろうとする悪質なプレイヤー』などと認識されていたのだろうが。

この件を運営に通報するものの、運営側は了解を返すのみで、妨害行為の数は日増しになるばかり。

ついには、フォースを辞退する者まで現れる始末だ。

そこに至って、ハバキリは悟った。

「オレがE.L.ダイバーと接触したから、運営の奴らから目をつけられるようになったのか」と。

そんなことはない、ただ偶然が重なっているだけだ、と他のメンバーは言ってくれたものの、その言葉の尽くを裏切るように強硬派からの妨害は続いた。

そして、今から約一週間前。

この日に至るまで、散々悩んだもののついにハバキリはフォースの脱退を決意。

自分が去れば、全ては元通りになる……そう信じていた。

しかし、つい先日にもコーダイの口から出た『お尋ね者扱い』と言う言葉を聞いた。

その発言が意味するところは『強硬派の狙いはハバキリではなく、アルディナのメンバー全員である』と言うことと、『強硬派の連中は少しでも疑わしいと感じた者に無差別攻撃を仕掛けていく』ことの二つ。

つまり、『ハバキリ』と言うダイバーの存在そのものが疑わしいのだと理解出来てしまった。

それはハバキリだけに限らず、アルディナに所属していたメンバー全員がそうだろうとも読み取れる。

だったらデータを消してしまえばいい。

アルディナの仲間達と過ごしたことを、何もかも無かったことにすれば、強硬派から狙われることも無くなるだろう、と。

そう決め付けて、昨日の帰りに誰にも何も言わずにログデータを初期化した。

そこまでを語り終えて、コウダイは溜め息で締め括った。

「そんなことが……」

セアは箸の手を止めてコウダイの話聞き入っていた。

「信じられんでしょう？ELダイバーの近くにいただけで不正行為同然の扱い。……正直、今のGBNはどうかしてますよ」

どうかしてるのは今に始まったことじゃありませんけど、と皮肉るように吐き捨てるコウダイ。

「自分らが幅効かせてるから、GBNのユーザー人口が減りつつあるんだって知らねえんですよ、”アレ”は」

ついには”アレ”呼ばわりまでする。

「酷い話……って言うのは簡単だけど、いちプレイヤーでしかない私達じゃどうしようも……」

昼休みの終始、セアの表情は浮かないままだった。

「……とまあ、こんな感じですね」

ハバキリは語り終えたように、水筒の中身を喉に流し込む。

しかし聞き手であるカナデは、もぐもぐと自分の食事を続けているだけ。

「途中の反応も相槌も何も無かったんですが、オレの話聞いてました？」

話も聞かずに食べるのに夢中だったのかと疑うハバキリだが、

「ひうめひはべはわわえういういっえいっはおあういみべふお？」

「すいません飲み込んでからでいいです」

すぐに軽く頭を下げた。

「……………っん。昼飯食べながらでいいって言ったのは君でしょ？」

「だからって、人の顔も見ずに自分の弁当ばかり見てたら聞いてねーのかって勘違いもするでしょーが」

「大丈夫、ちゃんと聞いてたよ。それで、君達のチームが連日ストーカーに襲われて色んなものを卒業してしまっただって話だっけ？」

「……間違っただけーように話が明後日の方向にイッチまってるようで、一部の女子の皆

さんが発狂して鼻からバラ色の液体を吹き出しそうな表現ですネ？」

たまに女子の中にウホい男が混ざってそーな気もするが、とハバキリは露骨に嫌そうな顔をした。

「かなーり大雑把に纏めるとそーなります」

「うん。それで君は、ストーカーの皆さんから狙われないように、名前も姿も変えて、全くの別人になろうとしてるわけだ」

「そーしよーとは思ったんですけどね……」

大きく溜め息をついて再びコンクリートに背中を下ろすハバキリ。

「正直、今の環境下でGBNを続けたいとも思えないんですよ。やってられねーと言うか」

「まあ、やりたいことをやってもいいのに、動いた端からそれを邪魔されたんじや、やる気も何も起きないよ」

「分からないでもない、とカナデは食べ終えた弁当箱を仕舞う。

「じや、やめたらいいんじゃない？」

「さも当たり前のことを言うかのように、カナデはやめれば良いと勧める。

「えっらい簡単に言いますね」

「そりゃあ私は傍観者に過ぎないし、そこからの視点しか持てないから他人事だつて他

人事にしか思えない。だから他人事のようにしか言えない」

「クラサカ先輩って、相手に思ったことハッキリ言っただけで傷付けるタイプでしょ」

「そうかな？」

まあそれは置いて、とカナデは話を続ける。

「君がGBNを続けるかどうかは勝手だから、私は「頑張れ」とか「諦めるな」なんて無責任なこととは言わないよ。ただね……」

今まで感情が抜け落ちたようにしか話していなかったカナデが、不意に真剣な表情をハバキリに向けた。

「セアとは、友達でいてあげてね」

「……急にクソ真面目な顔して、何言うのかと思っただら」

何を当たり前のことを、とハバキリは呆気を取られるが、カナデの表情は真剣なままだ。

「ほら、あの娘って誰からでも好かれてるみたいなき感じ出してるけど、周りからチャホヤされてるのを快く思わないのも多いんだよ。顔やメンタルどころか存在そのものがブスいメスブタとか」

「あんたそれ下手するとブーメランになりかねねーから気を付けた方がいいぞ」

あまりにも酷い物言いをするカナデに、思わず素の反応を返すハバキリ。

「心配無用。私自身、綺麗だとは思ってないけどそこまでブスイ方じゃないと自覚するくらいには女の子だから」

「そーゆーことじゃなくて……ま、セアさんの方から「友達やめたい」なんて言われな限り、オレは裏切りませんよ」

それはハバキリの本心だった。

「うん、それが聞ければ良し。君が、セアに纏わりつこうとする烏合の衆と同じじゃなくて良かった」

ハバキリはセアを裏切らないと言うことを聞きたかつたらしく、カナデは軽く背伸びをして立ち上がる。

「さて、それじゃあ私はそろそろ教室に戻るとするよ。君と会えなくてしよげ返っているセアを慰めに行かないと。君も、うっかり遅刻しないようにね」

「へーい」

カナデが出入り口に入っていくのを見送ってから、ハバキリも背伸びしてから立ち上がる。

「……とりあえず誰かに吐き出してみるってのは、意外と有効なストレス解消法だな」  
十数分前と比べると、幾分か気分が軽くなっていたことを感じながら。



放課後。

帰りのホームルームが終了するや否や、コウダイがハバキリの席にやって来た。

「ハバキリ、お前は今日どうするんだ？」

「んー、そーだなー……」

とは言うものの、ハバキリ自身の今日の予定は決まっていた。

「今日は家族サービスでもするとしますかねー」

「家族サービス？ ああー、妹ちゃんに対してか」

コウダイも、ハバキリが妹のテラスと二人で暮らしていることは知っている。

「GBNのことについて訊きたかったけど、まあ今日のところはいいか」

「わりーなコウダイ。また気が向いたらログインするからさ」

「データ消しちゃったんなら、ランク上げでも手伝ってやろうと思ったんだけどな。

じゃ、またなー」

用件はそれだけだったようで、コウダイは鞆を担ぎ直して軽く手を振ると、教室を後にしていく。

「……」

ハバキリはコウダイが廊下に出るのを見送ってから、自分も席から立った。

家族サービスをするとは言ったものの、それは嘘だ。

「(試さなきゃいけないことがあるしな)」

玄関の靴の数から見て、テラスはまだ帰って来ていないようだ。

それを確認してから、ハバキリはスマートフォンを取り出し、メールで「GBNをしてくる。帰りは少し遅いかもしれん」と連絡しておく、自室に入る。

制服から私服に着替えて、本棚を改造したショーケースの戸棚を開く。

ここにずらりと並んでいるのは、全てハバキリが作り上げたガンプラだ。

「さて、どれにするか……」

今回持つていくのは、ジンライではない。

ジンライはハバキリの象徴的なガンプラだ、いくらデータを初期化したとしても、使っているガンプラがジンライでは、中の人”がバレる。

故に、ジンライではないガンプラを使うべきだとハバキリは考えている。

「ま、とりあえずシュヴァルベで……」

ハバキリは最初に目についた青い『シュヴァルベ・グレイズ』を手に取ろうとして、止めた。

いくらジンライとは違う機体とはいえ、見る人間が見れば、パーソナルカラーと機体の動きで、ダイバーが誰かを見破れる。

そうなる、青く塗装されたガンプラではダメと言うことで再考。

「……あ、そーだ」

ふと何かを思いついたハバキリは、視線を左右させて特定のガンプラを手に取った。彼が手に取ったのはSDガンダムの『シャア専用ザク』だった。

シャア専用ザクと言えば、ガンダムを知る者なら、否、例え知らずとも日本で生まれ育った者なら誰でも見聞きしたことはある、初代ガンダムこと『RX-78』と双璧の知名度と人気を誇る、歴史的な“ロボットアニメのメカ”だろう。

赤くて頭に一本角が生え、量産型ザクー通常の三倍速いと噂される、『シャア・アズナブル』の愛機のひとつ。

とは言え、マシンスペックそのものは量産型のザクIIの三割増程度なのだが、それでも通常の三倍速いと伝えられるのは、パイロットであるシャア自身の力量によるものだ。

120mmのマシンガンをほぼ無傷で跳ね返すルナ・チタニウムの装甲、戦艦の主砲並みの威力を持つビームライフルとバズーカ砲、あらゆる装甲を一刀の元に切断するビームサーベル、ザクIIと比較しても五倍以上の機体出力……と言う、規格外も規格外のスペックの『ガンダム』を相手に互角以上に健闘して見せたのも、ひとえにシャアの実力があつてのもの。

しかし、この時のガンダムのパイロットである『アムロ・レイ』がまだ未熟だったこともあり、事実アムロが戦闘経験を重ねるその都度に、シヤアとアムロの実力差は縮まるところか、逆にアムロがシヤアを引き離してしまう結果となる。

それは、装甲材質以外はガンダムとほぼ同様のスペックの『シヤア専用ゲルググ』を以てしてもシヤアが苦戦を強いられるばかりか、討ち取られる一歩手前にまで追い詰められたことが物語っている。

このSDガンダムのシヤア専用ザクだが、近年に発売された『CS（クロスシルエツト）フレーム』に対応したキットであり、組み合わせによつて、従来のSDガンダムと比べると等身が上がったり下がったり、可動範囲が追加される仕組みだ。

それだけでなく、往年のSDガンダムのキットと比べても色分けが細かく、組み立てるだけでもほぼ設定に近い配色となるのだ。

ハバキリは手に取ったシヤア専用ザクをいつものケースに入れて、昨晩から充電器に差しっぱなしのダイバーギアを鞆に放り込み、手荷物を軽く纏めて、自宅を出た。

最寄りのガンダムベースだと、コウダイと遭遇する可能性を考慮して、ハバキリは今日はガンダムベースではなく、自転車ですら十分ほどの距離にあるホビーショップからログ

インすることに決めた。

自転車を駐輪場に止めておき、入店する前にダイバーギアを起動、初期設定画面を立ち上げる。

「えーと、そーだな……」

ハバキリは少しだけ頭を働かせ、頭の中に書いた内容を設定画面に反映させていく。

ダイバーネーム：Charles（シャルル）

性別：女

年齢：15歳

身長：158cm

ダイバーギアの画面には、ややウェーブのかかった金髪のショートヘアと蒼い瞳をした、中性的な少女型のアバターがプレビューとして表示されている。

何せこのアバターの設定は『シャア・アズナブルの性別を変えて、年齢も15歳にまで落とした姿』をイメージしたものだ。

シャルルと言うダイバーネームも、シャア・アズナブルのフルネームの元になった、実在していた人物から取ったものだ。

「(これだけ元と違えば、簡単にバレやしないだろ)」

設定を完了させてから一旦スリープモードにしておき、ホビーショップへ入店、真つ直ぐに受付に向かつてダイブルームの使用許可を得る。

シートに腰を落ち着け、ダイバーギアとシヤア専用ザクを筐体にセット、読み込ませていく。

「(そーそー、今のオレは『ハバキリ』じゃなくて『シャルル』だったな……)」

今の自分が女の子であることを自覚しつつ、ハバキリーシャルルーは自意識がダイメンションへと飛び込んだ。

ベース基地エントランスロビーへ到着。

シャルルは、ダイバーとしての自分の身体を確認する。

「(……うん、男の時とそう変わらないな)」

これなら問題なさそうだ。

それだけ確認してから、シャルルはミッションカウンターへ向かう。

今回のシャルルの目的は、ランク上げを兼ねたシヤア専用ザクの慣らし運転だ。

それを見越した上で、どのミッションにするか。

難易度レベル2の項目を開き、スライドを繰り返す。

「んー……ま、これでいつか」

シャルルが選択したミツシヨンは『ジャブローの風』

原典作品は『Z』からで、地球連邦軍本部ジャブローを攻略せんとするエウーゴと、それを妨害するテイターンズとの戦闘を再現したミツシヨンだ。

登場するエネミーは、少数のハイザックにジムⅡ、ザクタンクや飛行型のグフと言った、低性能な機体ばかりだ。

ざっくりとミツシヨン概要を確認してから、シャルルは格納庫へ移動する。

いつもの見慣れたMSハンガーに鎮座しているのは、いつものジンライではなく、寸足らずなシヤア専用ザク。

そのことに違和感を覚えつつも、シャルルはキャットウオークを渡り、シヤア専用ザクのкокピットへ滑り込む。

コンソールを起動させ、システムオールグリーンを確認、ハンガーからシヤア専用ザクが降ろされ、カタパルト展開、ハッチが開かれる。

「ハバキ……んんっ、シャルル、ザク、出るぞー」

一瞬、自分のダイバーネームを間違えて、シャルルはシヤア専用ザクを発進させた。

ベース基地から発進してすぐに進路変更、南方へ向かう。

今回のバトルフィールドであるジャブローは、南米に点在するため、まずはそこまで移動するのだ。

移動すると言っても、それほど時間はかからない。

数十秒ほどそのまますすんでいくと、広大なジャングルが目下に広がりつつある。

境界線を潜り抜け、ミッシヨンスタートだ。

このミッシヨンの達成条件は敵機の殲滅ではなく、作戦進行に合わせることにある。

まず地表に着陸して、そこからジャブローの内部を目指して進撃していく。

「さて……」

降下中にも関わらず、シャルルのシャア専用ザクは徐にザクマシンガンを構えると、自機よりも下にいる、バリユート装備をパージして降下中のハイザックの背後へトリガーを引き絞った。

戦場とは非情であり、正々堂々と言う言葉など通じない。

撃たれ、墜とされる方が悪いのだ。

バックパック、背面装甲を立て続けに撃ち抜かれたハイザックは炎上しながら墜落、森の中へと突っ込むとそこに火の手が上がった。



ハイザック、撃墜。

「HGの120mmと比べても、銃身が短いぶん射程が落ちてるか」

シャルルはそれだけの射撃で、ザクマシンガンの性能がどれほどのものかを読み取った。

それならバズーカも一緒だな、と呟きながら重力に任せて高度を落としていく。

時折捕捉するハイザックを随時ザクマシンガンで排除しながら、シャルルのシヤア専用ザクは地表面ージャブローの滑走路に着陸する。

着陸すると同時にザクタンクと飛行型グフが機関砲やジャイアントバズで迎撃して来るが、シヤア専用ザクはその場から身を翻し、飛行型グフをザクマシンガンで撃ち抜き、ザクタンクは着陸するついでに踏み潰す。

飛行型グフ、ザクタンク、撃墜。

「第一関門突破。ここまでは順調だな」

ザクマシンガンの残弾にも余裕があることを確認しつつ、シャルルはジャブローの内  
部へと進行していく。

『妙だな、ジャブローの抵抗はこんなものではない』

雰囲気を出すためにか、クワトロ・バジーナの台詞が通信越しに聞こえてくる。

とは言え、原作を知っているシャルルは、今のジャブローがどんな状態にあるかを知っている。

そしてこの後に何が起るのかも。

『やはりおかしい……まるで空き家ではないか』

「実際、空き家同然だからな」

クワトロの台詞に応えるように呟くシャルル。

U・C・0087時点では型落ちして既に久しい、骨董品扱いされるのMSを排除しつつ、ジャブロー内部を悠々と突き進んでいくシャア専用ザク。とは言え、シャルルの駆るシャア専用――S型のザクIIでは骨董品どころかもはやガラクタレレベルの旧式だ  
が。

「MSの性能の違いが戦力の決定的差では無い」とは言うけど、ザクIIで恐竜進化世代の機体を相手にするのはさすがに無理だよな」

しかし、遙か先の未来であるU・C・0153では、その時代のワンオフ機、それも1対1000を想定された『サウザンド・カスタム（サーカス）』のMSを相手に予想外な形で善戦することになるのだが。

ドックの中枢辺りにまで到達した時点で、再びクワトロの通信が届く。

『総員脱出するぞ……このジャブローの地下に、核爆弾が仕掛けられている！外の滑走路

にガルダが待つている、そこまで急げ!』

「はいはい、知ってますつての……」

ミツシヨン達成条件の変更が告げられ、一応確認するシャルル。

達成条件：制限時間以内にアウドムラへ到達

失敗条件：自機の撃墜、または制限時間オーバー

「さて、早いところ脱出しましよーかね」

シャルルはアームレイカーを捻り返して押し出し、シヤア専用ザクは反転、元来た道に戻っていく。

ダイバーポイントを得るために、脱出を妨害してくるハイザック、ジムIIなどを可能な限り撃破しつつ、道程の半分辺りに差し掛かると、『WARNING!』の赤文字がコンソールに表示される。

『ここで会ったが百年目つてね。カクリコンの仇を取らせてもらおうぞー!』

目の前に立ち塞がるのは、マラサイとハイザック二機の一箇小隊。

エース機であるマラサイには、ジェリド・メサが搭乗している設定であり、原作におけるカミーユ・ビダンを狙うがごとく、執拗にプレイヤーを妨害してくるのだ。

「(ジェリドのマラサイはやたらと硬いからなー、120mmじゃなくてバズーカの方が早く済む)」

そろそろ残弾が心許ないザクマシンガン捨てて、リアスカートからザクバズーカを取り出すシヤア専用ザク。

一拍を置いて、マラサイと二機のハイザックがビームライフルを構えて、

「……突如、明後日の方向からのビームが、マラサイとハイザック二機を撃ち抜いた。」

「……何だ？」

マラサイ、ハイザック二機、撃墜。

『これからは自分の力で生き延びろ！運が良ければ生き残れる！』

ジェリドの台詞など聞いていない、シャルルはその攻撃が行われた方向へ、シヤア専用ザクのモノアイを向けさせる。

その方向……岩陰から現れたのは、ずんぐりむっくりとした青いガンプラだった。

ジオン系統を思わせる、丸みを帯びた太い脚部。

しかし腕部の形状は四角張っており、どちらかと言えばハイザックに近い。

胴体部もまた丸みを帯び、動力パイプが露出しているものの、コクピットハッチの位置や装甲の構成具合から、連邦のジム系列とも読み取れる。

頭部の形状も独特で、戦国武将の兜か陣笠のような形。近いもので言えばマラサイが当てはまるだろう。

「……『ゼク・アイン』、か？」

ジオン系の外観を思わせるモノアイ頭でありながら、各部に連邦系の意匠が見られるその機体銘を呟くシヤルル。

明確な原典作品は存在せず、元々は模型雑誌のフォトストーリーとして展開していた（今でこそ公式化されているが）『ガンダム・センチネル』と言う作品に登場するガンブラだ。

機体各部に設けられたハードポイントに装備を換装することで性能を特化させると言う、後に登場する『ストライカーパック』や『ウイザードシステム』の先駆者とも言える機体である。

現在ではHGブランドとして商品化されており、第三種兵装（要塞戦仕様）の機体が再現されているが、目の前にいるゼク・アインは、乗り手のカスタムによるものなのか、右手に装備されているのは、120mmのマシンガンではなく、リック・ディアスや百式と同じスネイルタイプのカートリッジを持つビームライフルだ。

しかし、ゼク・アインの登場する年代は、U.C. 0088における『ペズンの反乱』が起こった時代だ。

その一年前であるU.C. 0087には、そもそも存在すらしていないはずの機体。

それが何故、この『ジャブローの風』に現れたのか？

シャルルは気を引き締めて、目の前にいるゼク・アインにオープン回線で通信を送る。「そのゼク・アイン。援護のつもりだったんだろーが、余計なお世話だ。礼は言わねーぞ」

すると、シャルルの通信に応えることもなく、ゼク・アインはモノアイを光らせていきなり襲い掛かってきた。

ビームライフルを連射し、数筋のビームがシェア専用ザクを貫かんと迫る。

「……だんまりかよー」

シャルルはアームレイカーを引き下げて、ゼク・アインからのビームを躲すと同時に、シェア専用ザクのザクバズーカを構え直して発射する。

ザクバズーカの弾頭は胴体への直撃コースだが、対するゼク・アインは左手をシールド裏に手を伸ばし、ビームサーベルを抜き放ち様に振るい、弾頭を切り裂いて無力化させた。

「オレと殺り合うつもりか？ いーぜ、慣らし運転は十分だ……い！」

残り時間のタイマーを一瞥して、シャルルはもう一発ザクバズーカを放ち、その弾頭の後ろを追い掛けるようにゼク・アインとの距離を詰めていく。

ゼク・アインは二発目のザクバズーカもビームサーベルで斬り防ぐ。

すかさずシェア専用ザクはザクバズーカを捨てて左手にヒートホークを抜き放つて

斬り掛かり、同様にゼク・アインは防御に回って受け止める。

熱プラズマの斧刃と重金属粒子の剣が衝突し、日の光が遮られたジャブローの洞窟内を眩く照らし出す。

シヤア専用ザクはそのまま鏢迫り合いには持ち込まずにすぐにヒートホークを弾き引いた。

小柄なSDガンダムと、見るからに重そうなゼク・アインだ、正面からぶつかってどちらが競り勝つかなど、誰の目にも明らかだ。

無論、シャルルもそれを理解しているため、シヤア専用ザクはその場を蹴るようにして機動し、ゼク・アインの左側面を陣取ろうと動く。

振り抜かれるヒートホークと、それを迎え撃つビームサーベル。

一撃、二撃と交錯し、三撃目はまともに打ち合わずに受け流し、ゼク・アインのビームサーベルを空振りさせる。

「よっつとー」

受け流した勢いをそのまま活かすように、横薙ぎにヒートホークを振るうシヤア専用ザク。

カウンターの一撃は、ゼク・アインの胴体は捉えられなかったものの、左肩のシール

ドを真つ二つに溶断しー

たその斬り目の隙間から、ゼク・アインのビームライフルの銃口が覗いておりー

ー同時に、”何か”が瞼の裏に映ったー。

「ッ!？」

撃たれるその寸前に気付いたシャルルだが、肝心のシヤア専用ザクはヒートホークを振り切ったせいで隙を見せていた。

放たれるビーム。

シャルルは強引に機体を挙動させて、シオルダーシールドでビームを受けるが、表面に何の耐性もないシールドでは、ビームの一発を防ぐのが精一杯だ。

撃ち抜かれる寸前にシオルダーシールドを本体から切り離し、飛び下がってビームサーベルの間合いから逃れるシヤア専用ザク。

「チツ……こいつ、なかなかやるな」

シャルルは目の前の相手の実力に舌を巻く。

単純な操縦技術もそうだが、一対一における”殺陣”たてを知る相手だ。

先程に、仕方なくシールドでヒートホークを受けたように見えたが、恐らく違う。

「(あのヤロー……敢えてシールドを犠牲にして、ビームライフルで一撃必殺を狙ってや



がった……)」

平たく言えば『肉を斬らせて骨を断つ』だ。

シャルルがその意図に気付くのがもう0・2秒でも遅れていたら、シヤア専用ザクはこの場で撃墜されていただろう。

カウンターに対してカウンターを返すなど、どうやらこのゼク・アイン、相当腕のあ  
るダイバーが乗っているらしい。

「(それにしてもさっきのヤツの動き、どこかで……)」

すると、再びゼク・アインからのビームライフルが連射され、シヤア専用ザクは回避  
に徹しつつ、ザクバズーカを捨てた地点まで移動し、それを拾い上げる。

「(そろそろ時間がやべーな、こいつは無視して脱出を優先するか)」

シャルルとて引き際は弁えているつもりだ。

この強敵との戦いに時間をかけ過ぎて、肝心のミッションに失敗した、などと言う結  
果など目も当てられない。

さて、どうやってこのゼク・アインを突破しようかと頭の回転速度を早めるシャルル。

だが、今まで通信に応じてこなかったゼク・アインのダイバーからのオープン回線を通じた声が、シャルルの聴覚に届く。

『ワカラナイ』

「は…………？」

『ボクニハワカラナイ。キミハイツタイ、コンナトコロデナニヲシテイル？』

ノイズの掛かった、耳障りなボイス。

「それはこっちの台詞だ。てめーこそ、オレのミッションを妨害して、何のつもりだ」  
得体の知れない相手だろうが、売られた喧嘩はもれなく買い取るシャルル。  
しかし、次の相手の発言でそれも躊躇を覚えることになる。

『”ハバキリ”』

「ツ…………!？」

ゾクツ、とシャルルーハバキリの背筋が震えた。

本名を言い当てられた。

明らかに仮の姿を変えていると言うのに、しかもその相手は初対面のはずだ。

声が震えそうになるのを必死に堪えながら、シャルルは言葉を突き返す。

「…………人違いだ。オレはハバキリじゃない」

『ウゴキヲミレバワカル。ソレニ、ボクノウゴキニタイオウシテミセタ』

「おい…………」

冷や汗と悪寒が止まらない。

『データヲシヨキカシ、ヨウシトセイベツ、ナマエマデカエタヨウダケド、キミジシンノジツリヨクダケハカワラナイ。ダカラワカル』

「何なんだ……」

「こいつは一体何なのだ？」

『エルダイバーニカカワツテシマッタコトヲコウカイシタカラ、キミハフォーஸ்ヲヌケタンダロウ?』

「待て……」

「こいつは何をどこまで知っている？」

『キミハ、オナジアヤマチヲクリカエシテルジャンイカ』

「待てよ……ッ」

シャルルはついに堪え切れなくなって、吐き出すように質問を求めた。

「てめーはオレの何を知っている!?! てめーはオレの何だ!?! 何が目的だ!?! 答えるッ!!」

だが、返ってきたのは落胆したような気落ちした声だ。

『……ボクデスラワカルノニ、キミニハワカラナイノカ』

すると、不意にゼク・アインはシヤア専用ザクに背を向けると、

『ダカラ、ワカラナイ。ザンネンダ、トテモ』

ジャブローの出口へ向かって飛び去っていった。

シャルルは、ただそれを見送るしか出来ない。

「ハーツ、ハーツ、ハーツ……薄気味悪い。何だったんだ、今のは……」

本当なら少しだけへたり込んでいたところだが、ミツシヨンの制限時間は刻一刻と迫りつつある。

落ち着くのはまた後にして、シャルルはアームレイカーを押し出して、シヤア専用ザクをジャブローから脱出させた。

離陸を開始しているアウドムラの格納庫に飛び込み、その直後にジャブローの地下が盛り上がり、空に巨大なキノコ雲が浮かび上がった。

『Mission Clear!』

ミツシヨンをクリアし、そのままアウドムラに乗せられたままベース基地へ帰還、シヤア専用ザクはメンテナンスハンガーへ放り込まれる。

シヨルダーシールドを失った以外に大きな損害を被っていないため、シャルルはすぐに整備に取り掛かる。

シャルルーハバキリは先程まで鎬を削り合った相手である、ゼク・アインのダイ

バーの言葉を反芻する。

「何であいつが、オレ達の方オースのことを知ってやがる……」

アレも運営の強硬派だろうか？

否、仮にそうだとすれば、この間のオデッサ作戦の件を知らないはずがない。

それならばもつと大人数を以って攻め込んでくるはずであり、エース級一人だけをぶつけてくるはずがない。

仮定条件を組み立て直す。

ゼク・アインがシャルルのシャア専用ザクを捕捉したのは恐らく偶然だろう。

しかし、運営の強硬派の人間でないのなら、何故フォース・アルディナの内情を知っている？

シャルルは一瞬、コーダイがサブアカウントを使い、別人を騙って近付いてきたのかと勘繰ったが、

「いや、あいつはそんな回りくどい腹芸はしない」  
とすぐにその勘繰りを止めた。

コーダイとは、フォース・アルディナの結成以前からの付き合い。

故に、コーダイーコウダイの性格もよく知っているつもりだった。

お調子で声量的にうるさい奴ではあるが、悪意を持って誰かを陥れるようなことと

は無縁の男。

そもそも、仮にあのゼク・アインのダイバーがコーダイだとして、動きを見ただけでハバキリかどうか分かるのなら、いきなり攻撃を仕掛けたりせずには馴れ馴れしく話し掛けてくるはずだ。

だとしたら、であれば、ならば……

延々と”たられば”を頭の中に浮かばせては消すを繰り返して、ふと気が付けば整備の手が止まっていた。

「ゴチャゴチャ考えてもしゃーねーか」

意識を切り替えて、シャルルはシヤア専用ザクの整備に集中する。

その聴覚に、あのノイズ混じりの耳障りな声を残したまま……。

### 【次回予告】

シャルル「さて、ザクの整備も終わったし、次は何のミッションを受けるかなー。効率よくランクを上げるには、質のあるミッションをこなすしかないし……ん？ ミッションを手伝ってほしい？ オレ、ネカマだけどいーのか？

次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション

『Wild wing girl』

逃げも隠れもするし、嘘ぐらいついて当たり前だよな」

## 6話 Wild wing girl

銀髪の美女ダイバー……基、やべー奴の洩らした爆弾発言を聞いて、仮面の獣人は一瞬、コーヒーカーップを手から滑らせかけた。

「ああ、気にするな。いつものことだ」

仮面の獣人の心中の驚愕——と言うよりドン引きを察したのか、トラちゃんは諭すように声を掛けてやる。

一方のバーテンダーの方は、”相変わらず”の様子であるやべー奴を見流しつつ苦笑する。

「相変わらずま〜ちゃんは”彼”にゾッコンなのねえ」

その苦笑に対して、やべー奴はテーブルに俯いたまま応じる。

「そうなのだ……なのに、今のま〜ちゃんは私に振り向いてもくれない……」

が、不意にガバツと上体を起こしてバーテンダーに食い入るように顔を近づける。

「このままではっ、ま〜ちゃんは大人になって可愛くなくなってしまうッ！ そうなっは私のま〜ちゃんが私のま〜ちゃんではなくなってしまうのだ！ これは由々しき事態だ、一刻も早くま〜ちゃんをお持ち帰……ゲフンゲフンッ、ロシアへ連れ戻さなければ



ならないッ！」

「今なんだかよろしくない表現が聞こえたような気がしたけど気のせいかしら。それはそうと、ご注文は決まってる？」

このやべー奴、文字通りの”やべー奴”のようだが、バーテンダーもバーテンダーで付き合いが長いのか、まともに付き合わずに上手く躲しながら、流れの中で注文を取らせようとする。

「みくちゃんが浸かったお風呂の水と、爪切りで切ったみくちゃんの爪を頼む」

「お白湯と柿の種ね、了解よ」

やべー奴の無理難題を軽く受け流しながら、バーテンダーはコーヒーを淹れる際に一度沸かしたお湯をコップに注いでいく。

その様子を横目で見つつ、仮面の獣人はトラちゃんに耳打ちする。

「何とも無茶苦茶な客だな……」

「フツ、いつものことだからそうとしか言えん」

トラちゃんにとっては既に見慣れた光景であるらしく、特に何も気にすることなくワインを口に付ける。

「……コホン、話が脱線してしまったな」

敢えて咳払いをしてから、仮面の獣人はフォース・アルディナに関する話題を戻す。

「そう言えば、『青き狂戦士』が自分のログデータを消しても、結局はGBNを続けているのだろうか？その辺りはどうだったのだ？」

トラちゃんは少し思い出すような仕草を見せてから、口を開き直す。

「ふむ……奴は自分が『青き狂戦士』であることを周りから悟られぬよう、全くの別人を装ってダイブしていたらしいな。貴殿は、『シャルル』と言う金髪の少女ダイバーを聞いたことはないか？」

聞き覚えのない名前を耳にして、仮面の獣人は顎に肉球を置く。

「シャルルと言う名前は知らなかったが、噂の一片ぐらいは聞いたことがある。なんでも『トチ狂ったレベルでピーキーなSDのシヤア専用ザクを駆る初心者』がいたとか……」

「まあ、”中の人”がSランククラスのダイバーだからな」

”どこぞの”チャンピオン”も初心者を装いながら、全く正体を隠す気が無かった事だ  
しな、と、トラちゃんは脳裏に壮年の金髪男性の顔を思い浮かべる。

そもそもあの”チャンピオン”、初心者のフリをするのならせめて愛機ではない別のガンプラを使えば良かったものを、わざわざ擬装用のアウトターパーツを用意していたくらいだ。そんな大掛かりかつ極めて緻密な製作技術を持った初心者がいるはずなからうに。

それでもアウターパーツが破壊されるまで正体がバレなかったのは、相手もまた純朴な初心者だったからか、ダイバーのアバターオプションとして仮面を付けていたからか。

普通なら『素顔を隠す＝怪しい』はずなのだが、“ガンダム”における仮面キャラはむしろ『基本の格好である』と認識されているからこそ、素顔を隠すことを怪しまれなかったのかもしれない。

トラちゃんと仮面の獣人が話している隣で、バーテンダーはお白湯とおつまみの柿の種をやべー奴に用意していた。

「愛しのみくちゃんが恋しいのは分からなくないけど、これでも食べて落ち着きなさいな」

「ムウ……いただきます」

やべー奴と言えども、その一言を忘れずに唱えてから、ポリポリとそれをつまんでいく。

「みくちゃんと言えば、彼もフォース・スピリッツの一員だったわね」

ふと思いついたように、何気なく呟いたバーテンダーだが、

「スピリッツ!! そうだ……元はと言えばみくちゃんは奴らに洗脳されて、奴らの言うことしか聞けなくなってしまうんだ！なのに周りの大人は、あんな人を人とも思わない

非道な連中の味方ばかりイイイイ……ッ!!」

その名を聞いた瞬間、やべー奴は目尻をこれでもかと吊り上げてギリギリギリと歯を軋ませる。

これで顔に傷が付いておかつぱ頭なら、完全に『女体化したイザーク・ジュール』そのものになるだろう。

「ん〜もう、落ち着きなさいなつて言つた端から何怒つてるのよ……あとそれ、間違いないくアナタの勘違いでしょ」

頭が痛いとしても言いたげに片手で額を抱えるバーテンダー。

このやべー奴、”み〜ちゃん”の姿でも見なければ落ち着こうともしないだろう。

爆弾発言をしたと思えば落ち込んだりいきなり怒つたり忙しい奴である。

それを横目で聞いていた仮面の獣人は、再びトラちゃんに耳打ちする。

「……何だ、彼女はスピリッツの面々に恨みでもあるのか?」

「恨みと言えば恨みだが、彼奴が一方的に勘違いしているだけ……恨みとすら呼べんよ」  
これもいつものことだ、とトラちゃんはわざとらしく肩をすくめて苦笑する。

SDのシャア専用ザクの整備も終えて、シャルルは再びエントランスロビーを訪れて

いた。

「さつてと、次のミッションはどーすつかね」

先程のミッションの『ジャブローの嵐』で、結構なポイントを稼いだので、これだけでランクも『F』から『E』に上がっている。

シャルルー基、ハバキリとしては今日中に『D』ランクにまで上げたいと思つているところだ。

想定外ではあつたものの、あの正体不明のゼク・アインとの戦闘で、シャア専用ザクのスペック限界も推し量ることも出来た。

一度の慣らし運転だけであれだけ戦えるなら、もう少し難易度の高いミッションを受けても問題ないだろう。

それを踏まえた上で、どのミッションが効率よくポイントを稼げるかを思い起こしていく。

「(『イオの嵐』『ローエン格林を撃て!』『パラオ攻略戦』……『ガラスの王国(サンクキングダム)』でも……)」

今まで自分が受けてはクリアしてきたミッションを連々と脳内に挙げている時だった。

「……………ん?」

ふと、その光景が視界に映った。

「ねえその君、良かったら俺らと一緒にミッション受けない？」

「俺ら、そこそこ強いんだぜ？」

高校生くらいのダイバー二人が、シャルルと同じくらいの外見をした少女ダイバーに言い寄られている様子だ。

「(おー、ナンパだナンパ。頑張れー)」

シャルルは傍観者ーと言うよりは野次馬として、言い寄っている二人組を心中で(成功するとは微塵も思っていないが)応援してやる。

しかし、少女ダイバーの方は困ったような顔をしつつ、遠慮したがっているように見える。

「えー、あたし、連れを待つてるから……」

「(相手さんは乗り気じゃなさそーだけど……)」

ありや失敗だなー、と呑気に眺めているシャルルだが、

「まま、いいじゃんいいじゃん、すぐ終わるからさ」

ナンパ二人組の方も諦めが悪いのか、なおも絡むばかりか、さりげ無く手を取ろうとしている。

「ちよっと、しつこいんですけど!？」

少女の方も声を荒げて乱暴に手を振り払う。

「つ、てめえ下手に出てるからって調子に乗りやがって……」

「(あ、馬脚が出たな……)」

このまま放置していたら、きつと気に入らないことになりそうだと判断して、シャルルはその場に介入することにした。

「しつこい男は嫌われるって言葉知らないの!？」

「ああ!?! 喧嘩売ってん……」

いよいよ手が上がり始めるかと言う一触即発の瞬間へ、シャルルは何も恐れることなく堂々とやってきた。

「ごつめーん、待っちゃったかなー!」

わざとらしく高い声を出しつつ、シャルルは少女ダイバーの方へ話しかけ、その場の三人の視線が集中する。

「ミッシヨンの予約に手間取ってさー! ほら、行こ行こー!」

誰の有無も言わせない内に、シャルルは少女ダイバーの手を取って、その場を去ろうとする。

「……そつちから喧嘩売つといではいサヨナラ? ざけてんじやねえぞゴラア!」

二人組の内の一人がシャルルを殴ろうと拳を振り上げてー

「ほーん？」

シャルルは不敵な笑みを浮かべた。

だが、その振り下ろされる拳に対して迎え撃つことはない。

次の瞬間、シャルルの身体は床に叩きつけられ、転がるようにしてエントランスロビーの壁にぶつかった。

「え、は？」

拳を振り下ろし終えた男は、何故か呆気を取られたような顔をしていた。

「ちよっ、ちよっどっ!？」

庇われた側の少女ダイバーは、エントランスロビーの端で転がっているシャルルを助け起こす。

「いつつ……いくらGBNでも、殴られたら結構痛いね……」

シャルルは顔を歪ませて、左の頬を手で押さえる。

今度は少女ダイバーがシャルルを庇うように、キツと二人組に侮蔑を込めて睨みつける。

「最ツ低……!？」

「えっ、いや、ちよ、待って……」

すると、このやり取りに気付いた周囲のダイバー達——特に女性型のダイバーが、遠



巻きに見ながら口々にヒソヒソ話を始める。

「ねえ、見た？今の……」

「女の子を平気な顔して殴ってたし……」

「うーわ、キモッ……」

「自分が殴つたといて何とぼけてるのかしら……」

「男ってあんなのぼつかなのかな……」

傍から見ればこの状況、『ナンパ男が逆ギレして女の子を殴った』と言う事に他ならない。  
い。

だと言うのに、シャルルを殴った男は泡を喰ったように弁明しようとする。

「ち、ちげえつて！あ、あいつが勝手に吹っ飛んだだけで……い！」

しかしそれもそこまで、突然エントランスロビーに赤ランプが発光し、警報が鳴り響く。

一拍を置いて、防護服を纏った運営ダイバー数人が現れ、その現場に駆け寄って来た。シャルルが殴られたのを見て、誰かが通報したのだ。

「IDナンバー01531482、レーク。01429371、ガイル。利用規約三章十二条、十五条、『他プレイヤーに不快を与えるような行為を行ってはならない』『みだりに他プレイヤーに暴力を振るってはならない』、以上二項目を違反したものとして、24

時間の間、アカウントを停止させていただく」

「ええええええええ!?俺、殴ってねえんですけどお!?」

「つてか俺、巻き添え喰らつてる!?何で!?」

男二人は慌てて否認しようとするが、運営ダイバーは被害者二名を指しながら理由を言い渡す。

「君達二人は彼女をミッションに誘おうとして、断られてもなお迫ろうとした。これがひとつ。もうひとつは、言わずとも分かるだろう」

「いやっ、だからさあ……!」

そしてトドメと言わんばかりに、ナンパされていた少女ダイバーからの証言だ。

「こいつがあの子を殴ってました。あたし、目の前で見てました」

そう言いながら、なおも痛そうに頬を押さえているシャルルを指す。

「……だ、そうだ。言い訳があるなら、今から24時間後に受け付けよう」

アウト。

駆け付けてきた数人の運営ダイバーの内、二人がコンソールを開くと、即座に二人組を強制ログアウトさせ、さらにアカウントにロックを掛けた。

それを確認してから、運営ダイバーの代表がシャルルと少女ダイバーに向き直って一礼した。

「お騒がせして申し訳ございませんでした。引き続き、GBNをお楽しみくださいませ」  
謝罪を終えるなり、再びコンソールを開いてエントランスロビーから去っていった。  
少女ダイバーは溜息をひとつついてから、シャルルの方へ向き直る。

「ねえ、大丈夫……え？」

「お、どした？」

殴られて痛がつていたはずのシャルルは、もういつもの調子に戻ったかのようにケ  
ロツとしていた。

「あ、えーつと……その、大丈夫？痛かったよね？」

少女の心配をよそに、シャルルは特に痩せ我慢をしている風な様子は見せない。

「んー？これっぽっちも痛くねー……ってかそもそも殴られてねーしな」

「……え？殴られて、ない？」

あれだけ派手に殴り飛ばされていながら、殴られていないとはどう言うことか？

頭に疑問符を浮かべまくる少女を見て、シャルルはその疑問を説明する。

「簡単だつて。殴られる寸前に、わざと仰け反りながら床を転がっただけ。ま、一歩間  
違ったらマジで殴られてたけど」

「じ、じゃあ、痛そうにしてたのって……」

「もちろん演技。いやー、周りの皆さんがあっさり騙されてくれたおかげで、荒事しない

で済んで良かったぜ」

「……………」

「そりやな、あんなザコキャラ二人くらい力尽くでも良かったんだけどさ、喧嘩両成敗に巻き込まれたくなかったんだよな」

ケラケラ笑うシャルルを前に、少女は開いた口が閉じられなかった。

「つと、邪魔して悪かったね。じゃーな」

それ以上話しかけることなく、シャルルは軽く手を振って踵を返す。

さて、改めて次のミッションはどうしようかと、ミッションカウンターへ足を向け直す。

が、

「あつ、ちょっと待って!」

つい先程に自身が助けた少女ダイバーに呼び止められ、シャルルは足を止めて振り返った。

「あのさつ、手伝ってほしいミッションがあるの!あたし一人じゃどうしても……」

「んー?」

自称・そこそこ強い二人組ーどうせ大した実力も無いのだろうがーからの誘いは蹴っておきながら、シャルルには自ら声を掛けてきた少女ダイバー。

シャルルはその理由を瞬時に悟った。

「(……オレが”女キヤラ”、だからか)」

先程にあんなことが起きれば、男性に対する警戒心や不信任感が強まりもする。

その点、通りすがりなのに自分を助けてくれて、そして同性なら、と言う魂胆だろう。女の子だと思っていた相手が、実は男だった……と言うことが発覚すれば、相手にまた不快な思いをさせてしまうかもしれない。

そこまで考えついたシャルルーハバキリは、正直に答えることとした。

「気持ちがありがたいけど、オレ、ネカマ(笑)だぜ?」

「え?ネカマ……男の子……って、え、ええ……?」

何?どう言うこと?と表情に出ている。

「だから、このアバターは女だけど、リアルは男ってことだよ。ちよーつと面倒な訳あって性別を変えてるだけで、別に隠すつもりはねーよ」

だからドン引くなり嘲笑うなり罵るなりしてくれていーぜ、とシャルルはやや自嘲気味に笑う。

しかし、対する少女はー何故か笑った。

「ぷっ、ぷははははっ!自分で自分のこと「ネカマ(笑)だよ」って言う人とかっ、初めて見た……ッ!なっ、なんかおかしー!」

「……おいおい、嘲笑ってくれて良いとは言ったけど、爆笑されるとは思わなんだ」

予想外な反応をされて、シャルルは返しに困って声を濁す。

一頻り笑って、少女は落ち着いてからシャルルに向き直る。

「別にあたし、ネカマとかネナベとか気にしないよ。それに、君って良い人みたいだし」  
 「そこは気にせんのかい。いや気にしてほしくねーけどさ。……で、オレがネカマだつて分かった上で、ミッションを手伝ってくれって?」

「そうそう。それで、このミッションなんだけど……」

少女は頷きながら自分のコンソールパネルを開く。

切り替え早えーなおい、と心中でツツコミを入れつつ、何のミッションを手伝うのかと身構えるシャルル。

「まさか、難易度レベル10の『Awakening of the Trailblazer』とかじゃねーだろーな!?!」

劇場版の『00』のタイトルから取られたそのミッションは、ほぼ無制限に出現する地球外生命体『ELS（エルス）』を相手に30分間生存する、と言うものだ。

トップランカーが全力でスコア稼ぎをした結果、撃墜数がカンスト（カウントストッブ）（99999999）に達したと言う逸話を持つ曰く付きのミッションだが、さすがにこれをクリアするには、シヤア専用ザクではまず不可能だ。

「あった、これこれ」

少女は自分のコンソールパネルをシャルルに見せてくる。

シャルルはそれを目に通して——

「……コレクトミッションじゃねーか！」

拍子抜けした。

ミッション名『ピンクちゃん捜索任務』

このミッションは『コレクトミッション』と言うカテゴリに含まれるもので、敵機の撃墜ではなく、特定のアイテムを指定数集めて納品するのが主な達成条件だ。

『ピンクちゃん』と言うのは、『SEED』のヒロインの一人、ラクス・クラインのお気に入りピンク色のハロのことを指しており、その名の通りピンクちゃんを見つけ出し、指定ポイントまで運ぶと言うミッション。

難易度レベルも1であるため、初心者一人でもまず失敗しないはずだが……

「何でこんな簡単なミッションで失敗するんだよ……」

「いやだって、ピンクちゃんほんつとに見つからないんだから！どこ探してもいないし！」

少女の方は少女の方で、「難易度レベル間違ってるんじゃないのこれ!？」と頬を膨らませている。

「……とにかく、これを手伝ってほしーんだな。分かった」

何故クリア出来ないのかと疑問は絶えないが、難易度レベル10のミッションを頼まれるよりも、数字的に10倍はマシだ。

「ほんと？手伝ってくれるの？」

「バカにするわけじゃねーけど、こんなもん手伝いの内に入らねーよ。もつとヤバーミッションを頼まれるかと思つてたからな」

「やつたつ、ありがとー！」

パンツと手を打って喜ぶ少女。

「あ、そうそう、フレンド交換しようよ」

「おー、いーぜ」

互いにフレンドリストを開き、プロフィールデータを飛ばし合い、登録。

「……Eランク？つて言うか、え？ついさつきGBN始めたばかりなの!？」

シャルルのプレイ履歴を見て、少女は目を見開く。

「そーだけど」

本当は一度ログデータを初期化してやり直しているのだが、そこまで説明するつもりもないシャルルは、嘘をつかない程度に頷く。

「……あたしもしかして、凄い人を誘っちゃったかも」



頻りにプレイ履歴とシャルルの姿を見比べていた少女だが、気持ちを切替えて向き直る。

「あたし、『サツキー』って言うの。言っとくけど、ネカマとかじゃないからね？」

「オレはハバ……じゃなくて、シャルル。とりあえずよろしくな」

シャルルと少女——サツキーは自己紹介を交わし、早速ミツシヨンを受注、格納庫へ向かう。

「……ハバキリ？」

——シャルルのその後ろ姿を、誰かが見ていたことに気付くこともなく。

つい先程に整備完了されたばかりのシャア専用ザクの隣に、もう一機ガンプラが追加されている。

真つ先に目についたのは、暗緑色のガンプラが巨大な外套で身を覆う……と言うよりは、囲われているような外観。

「おー、エンドレスワルツのデスサイズへ……ん？」

シャルルはその機体が『ガンダムデスサイズヘル【EW】』をベースとしたガンプラだ

と読み取ったが、原典機とは明らかな相違点があることに気付く。

「なーんか、『アクティブクローク』がデカ過ぎるように見えるんだけど……」

ガンダムデスサイズヘルの特徴とも言うべき黒い外套『アクティブクローク』は、表面に耐ビームコーティングが施された増加装甲であり、通常はピツタリと覆うように本体に装着されるのだが、それを開いたその姿は蝙蝠の羽根か悪魔の翼を連想させる。

しかし、シャルルの視界に映るそのアクティブクロークは、異様に大きいのだ。

「……あー、これ1/100のキットのパーツ使ってるのか」

「あ、やつば分かる？」

シャルルの隣に立つサツキーは、悪戯っぽく口の端を曲げる。

「それに、よくよく見たらパーツの所々……ってか、本体の半分以上は『ステイニーガンダム』で構成されてるじゃねーか？」

アクティブクロークの隙間から見えるパーツの面影から、このガンプラが『ガンダムデスサイズヘル〔EW〕』の外見をした、ステイニーガンダムであることにも気付くシャルル。

しかし、待機状態にも関わらず装甲が有色であるところ、VPS（ヴァリアブルフェイズシフト）装甲ではないようだ。

「凄い、そこまで分かるんだ」

「そりやまー、ある程度ガンプラに詳しけりやそれくらいはな」

デステイニーガンダムなんかは特に有名な機体だしな、と口にしたところでシャルルは、あることを思い出した。

「（そー言えばあの『姐さん』は、ストライクフリーダムを”あんな風に”魔改造してた人だったな……）」

幻愛（ラヴファントム）と銘打たれた、シヨツキングピンクと黒で塗装されたガンプラを脳裏に思い浮かべる。

そのストライクフリーダムガンダムのライバル機とも言えるデステイニーガンダムがこのような改造を施されているとなれば、何かの因果関係があるのかと勘繰ってしまふ。

そのことは一度頭の片隅に置いておくことにして、早速出撃準備を行う二人。

今回のミッションの場所は『C・E・（コスミック・イラ）』の世界のひとつ、『ユニウスセブン』と呼ばれる、地球連合軍の核ミサイルによつて破壊された農業プラントーその周辺宙域だ。

そのため、まずはガンプラを搭載可能なシャトルかクルーザーで大気圏を離脱する必要があるのだ。

シャルルが手慣れたように格納庫からシャトルを準備し、シャア専用ザクとガンダム

デスサイズヘルーサツキーが言うには『ガンダムデスレイザー』をシャトルに積載し、マストライバーのレールへと誘導、乗り込むなりすぐにシャトルは発進、瞬く間に大気圏を離脱していく。

大気圏離脱から間もなく、真つ二つに別れてしまった砂時計のような形をしたその質量物体——その片割れが無惨にも破壊されてしまったプラントが見える。

これこそが、地球連合軍とザフト軍との本格的な開戦の引き金としまった、戦争の象徴——ユニウスセブんだ。

今回のミッシェンは『SEED』の時間軸で、ラクス・クラインがユニウスセブんで犠牲になった人間達への慰霊に訪れ、地球連合軍との諍いになった際に、ピンクちゃんを落としてしまったから見つけ出してほしい、と言うのが依頼文だ。

シャルルはミッシェンの内容を確認しつつ、サツキーと簡単な打ち合わせを行う。

「発見したハロは、近くにいますアークエンジェルに届ける……んだっただな」

「その見つけなきやいけないピンクちゃん、どこにもいないんだけどねえ……」

「いないことはねーだろ。たまたま見つけにくい場所にあっただけかもな」

サツキーはこのミッシェンに何度も挑んでは、時間切れで失敗し続けていると言う。

そんなに見つからねーもんなのか、とシャルルは少しだけ気を引き締める。

ユニウスセブンの周辺に近付いた辺りでシャトルを減速させ、ガンプラでの出撃に掛か

る。

ゼロGの船内を慣性運動しつつ、シャルルとサツキーはそれぞれのガンプラのкокピットへ乗り込んでいく。

だが、シャルルはкокピットの中に入ろうとして「ソレ」を見て思わずバランスを崩した。

「なっ……!?」

崩したと言っても、すぐに手足を振るって姿勢を取り戻し、シャア専用ザクの装甲を掴む。

目を見開くシャルルの目の前にいたのは、つい最近になって見覚えのあるピンク色。

当然だが、探索目標であるピンクちゃんではない。

「こんにちは」

シャア専用ザクのкокピットの中には、ジルがいた。

「ジ、ジル！なんでお前、こんなところにいるんだ!？」

「ハバキリが見えたから、付いてきちゃった」

「付いてきちゃったって……お前はベルナデットかよ」

シャルルの言うベルナデットとは、『クロスボーン・ガンダム』シリーズのヒロインの一人、『ベルナデット・ブリエツト（テテニス・ドウガチ）』のことだ。

物語の中で度々密航を行っており、貨物船の倉庫からMSのコクピットまで、どこにも潜り込み、その密航癖(?)は後の娘である『ベル・ドウガチ』にまで受け継がれてしまっている。

『どこも出っ張ってない(身体の凹凸がない)』とところまで同じじゃねーか、と言いかけて押し止める。

しかしその前に、シャルルは肝心なことに気付いていた。

「つーか、『何でオレがハバキリだって分かった』?」

そう。

ジルは「ハバキリが見えたから付いてきちゃった」と言った。

”ハバキリ”がログデータを初期化して、名前も容姿も性別も変えていると言うのに、彼女は『シャルルⅡハバキリ』であることを一目見ただけで見抜いた。

「? ハバキリでしょ?」

何を言っているのかと、ジルは小首を傾げている。

「いや、確かにオレはハバキリに違いねーけどき……」

ジルはこの金髪碧眼のスレンダーな女の子のどこを見て、「ハバキリ」だと認識しているのだろうか?

一説には、ログオフ中のプレイヤーのダイバーギアやガンプラを通じて、そのリアル

の居場所を突き止めたりすることも出来るらしいが、それが何か関係しているのだろうか。

つくづく、ELダイバーとはよく分からない存在だとシャルルは溜息をつく。

「シャルル、どうしたの?」

不意に、ガンダムデスレイザーに乗り込んだサツキーからの通信が届き、サイドモニターから彼女の顔が表示され、ジルの姿を視認して目を丸くした。

「あれ? そのピンク髪の娘、誰?」

当然サツキーはそれを訊ねるが、シャルルは少しばかり返答に困る。

フレンドだと答えれば「さつき始めたばかりの初心者じゃなかったのか?」と訊かれるだろう。

しかし、知り合いのELダイバーだと答えるにも不自然だろう。

なので、適当に誤魔化すことにした。

「拾った」

「……何言ってるの?」

そう答えたシャルルに、サツキーは奇妙なものでも見たかのような顔をする。

……少なくとも、嘘はついていない。

今はとりあえず有耶無耶にして、解決策を後で考えようと、シャルルは先行して格納

庫のエアロツクを開く。

「シャルル、ザク、出るぞー！」

「あ、ちよつと待つてよ……サツキー、ガンダムデスレイザー、出撃するよー！」

先にシヤア専用ザクがハッチから発進し、続いてガンダムデスレイザーが出撃、最後にシヤトルのハッチが自動的に閉じられる。

シヤトルからある程度距離を離してから、ガンダムデスレイザーは悪魔の翼（アクティブクローク）を広げ羽撃（はばた）く。

「なんつーか横に広いな、ソレ」

シャルルはガンダムデスレイザーの姿を見て、率直な感想を口にする。

横幅だけで言えば、アクティブクロークの左右でガンプラ四機分近くはあるだろう。

目に見えるものが大きいと、敵対者へ威圧感を与えろと言う副次効果が生じる。

況してや、生物が本能的に恐れる『死』の象徴である悪魔、もしくは死神を模した姿だ、ガンダムデスサイズと言う機体を知らない者が見れば、無意識に恐怖を覚えさせるだろう。

「カツコよくしたのはいいんだけど、背中が重いし場所も取るから、鑑賞するにも保管するにもちよつと難しいんだよね」

そう言つてサツキーは苦笑するものの、これだけ巨大な物体を背負いながら戦闘機動



を行うのだ。

ガンダムデスレイザーと言うこのガンプラ、ふざけたような見た目をしているがその性能はかなり高いのかもしれない。

シャルルの考察もそこまで、ユニウスセブン周辺に到着する。

「んじやー、二手に分かれて探しますかね」

「オツケー。見つけたらすぐ知らせてよ」

シヤア専用ザクとガンダムデスレイザーは左右に分かれて、スペースデブリの漂う中、ピンクちゃんの搜索を開始する。

デブリからデブリへと蹴るように飛び移りながら、シヤア専用ザクはモノアイをギョロギョロと左右させる。

「さて、どこにいるのやら……」

プレイヤー個人が何度も同じミッションを受けても見つかからないほどだ、それこそ難易度レベルを間違えたと錯覚するほど分かりにくいところにあるのか、それとも一周回って身近なところにあるのか。

「何探してるの？」

シャルルの隣にいるジルが、そう訊ねる。

「今回のミッションのターゲットのハロ。……ほら、このピンクの丸いの」

モニターから画像を呼び出し、それを見せてやる。

ジルはその画像を見て、目をぱちくり、ぱちくりと瞬きを繰り返し始めた。

「これ、さっき見た」

「なんじゃとて？」

シャルルは前進を止めて、手近にあったデブリを掴むようにして機体を静止させ、来た道を振り返る。

「どの辺で見たんだ？」

「ほら、あそこ」

ジルがモニターのひとつを指差した。

モニターを拡大表示してみると、暗礁となつているデブリベルトが映し出される。

しかし、このデブリベルトでは目立つはずのピンク色は見当たらない。

シャルルが見落としていたのか、それともジルが見間違えたのか。

目を凝らしながらデブリベルトの様子をじっくり観察していくと、不意にシャルルはそこでモニターを止めた。

「……ん、んん？アレ、脱出ポッドじゃねーか？」

モニターには、デブリベルトの中に埋まっているような形で、脱出ポッドローそれ、ラクス・クラインが詰め込まれたそれと同じ型ローが漂っている。

それを目にしてシャルルは、何故サツキーがこのミッションを達成出来ないのかを悟った。

「……ピンク色を目印にして探してたら、そりや見つからねーわけだ」

ピンクちゃんがそのまま放置されている、とはミッションに記載されていない。

つまるところこのミッション、デブリベルトの中から脱出ポッドを見つけて出すことが成功の条件だったのだ。

そー言うカラクリかよ、とぼやいてから、シャルルはアームレイカーを押し出して、再びデブリからデブリを蹴り移りながら、脱出ポッドの元へ向かう。

もしかするとハズレの可能性もあるので、シャルルはシヤア専用ザクのマニピュレーターを脱出ポッドに触れさせて、接触通信を試みる。

「おはようございます。今朝のモーニングコールでございます。本日のユニウスセブンの天気は核ミサイル後デブリ、と非常に危険ですので外出はお控えください……」

『アイヤマタレイ・テヤンデーバーロー・テヤンデーバーロー！』

シャルルのモーニングコール(?)を遮るように、機械音声が回線に届く。

「あ、これで間違いねーな」

この似非江戸っ子な喋り方をするハ口は、ラクスのピンクちゃんの他にいない。

シヤア専用ザクは右マニピュレーターで脱出ポッドを掴むと、デブリベルトから引き

上げる。

続いて、サツキーとの通信を繋ぐ。

『オヒケエナスッテ！オヒケエナスッテ！』

数秒のノイズの後に、サツキーとの回線が繋がる。

「もしもし、そっちの進捗はどう？」

「おー、見つかったぞ」

「えっ、嘘でしょ!?!もう見つかったの!?!」

何気なく言ったシャルルだが、それを聞いたサツキーは驚愕する。

「マジ。とりあえず、アークエンジェルに持って帰るから、そっちは帰還の準備しとい

くれ」

「う、うん、おっけー。シャトルに戻ってるね」

サツキーとの通信を終える。

何はともかく、これでミツシヨンはクリアだ。

『ドスコイデゴワス！ドスコイデゴワス！』

「てめーはいちいちうるせーぞ、音量下げろ」

『コノ、バカヤロー！コノ、バカヤロー！』

「江戸っ子からいきなり標準語になったなあい」

『トウツ！トウツ！ウオオツ！トウツ！ハヤアーツ！モウヤメルンダツ!!』

「別ゲーのヤツじゃねーか！いくら製作者がアスランだからってなんつーボイス吹き込んでやがる!？」

その内足からグリフオンビームブレイドでも生えてくるんじゃないだろーな、と半ば本気でそんなことを考えたところで、

「……ハバキリツ」

不意にジルが声を上げた。

「どーしたジル?」

「狙われてるっ」

一拍を置いてから、『WARNING!』の赤文字がモニターに表示される。

「……何だ、長距離強行偵察型のジンでもいたのか?」

少しだけ警戒心を強めて、モニターとレーダーを見比べるシャルル。

レーダーには、“4つ”の敵対反応がこちらに向かってくる。

シヤア専用ザクはモノアイをその方向に向けた。

鋭角な紅色のワントーン、スマートな青白色、ゴテゴテした緑と橙のツートン、左右非対称な目立ちにくい黒一色。

「おいおいおい……なんでXナンバー四機が、揃いも揃ってこんなところに来てんだよ」

イージスガンダム

デュエルガンダム

バスターガンダム

ブリッツガンダム

『ヘリオポリス』内で極秘に開発されていたが、ザフトによって強奪された『地球連合軍のガンダム』である。

それが、強奪された四機全てだ。

しかし、このようなシチュエーションは難易度レベル1のミッションとは思えない。

「(……これはアレか？一定の条件を満たすと出現する隠し要素ってヤツか)」

シャルルがそう呟くと同時に、四機分のターゲットロックがシャア専用ザクに集中、一斉にビームライフルによる射撃を行ってくる。

シャア専用ザクは攻撃を回避すべく、脱出ポッドから手を離して、四筋のビームを掻い潜る。

「チツ、ジンライならまだしも、この機体でPS装甲持ち四機はキツイな……ッ」

ビーム兵器を持たないシャア専用ザクで、PS装甲を持った機体を倒す手段は限られて  
ている。

ひとつは、実弾射撃による攻撃でPS装甲に必要な電力を消耗させて、バッテリー切

れーひいてはPSダウンを起こさせること。

PSダウンを起こして物理攻撃を無効化出来なくさえすれば、後はザクマシンガンを数発当てるだけで仕留められる。

もうひとつは、バイタルバートへ正確にヒートホークを叩き込んで、コクピット内のパイロットに直接ダメージを与えること。

PS装甲も完全無敵と言うわけではなく、通電された電量を上回る衝撃を一箇所に直撃させれば、少なからず破損させることが可能である。

それだけの一撃をコクピット周辺近くに与えれば、少なくとも中のパイロットを負傷させて戦闘不能状態にさせられる。

実際、ストライクガンダムが対装甲ナイフ『アーマーシュナイダー』をデュエルガンダムの腹部にフルスロットルで叩き込んだ結果、パイロットであったイザーク・ジュールは顔面に傷痕が残るほどの怪我を負っている。

だが、前者を行おうとしても、先にザクマシンガンの弾が切れるのが先。しかも今回はザクバズーカを装備していない。

後者の場合も、一対一ならそれも可能だが、相手は四機もいる。一人を狙えばその隙に他の三機がどう動くか。

いずれにせよ、シャルルがこの状況を巻き返すのは非常に困難であることは変わらな

い。

すると、イージスガンダムとデュエルガンダムが散開して左右から挟むように回り込み、その奥からバスターガンダムがさらに肩部のミサイルランチャーをばら撒き、ブリッツガンダムは『ミラージュコロイドステルス』を起動させ、この宇宙に溶け込むように”消える”。

「(イージスが支援射撃、デュエルが近接戦闘、バスターがその場で砲撃、ブリッツが死角から奇襲……つてとこか)」

シャルルは努めて冷静に戦況を読み取り、対処に回る。

シヤア専用ザクはデブリの密集地帯に飛び込むと、手当たり次第にデブリを蹴り飛ばし、バスターガンダムからのミサイルにぶつけていく。

続いてイージスガンダムからのビームライフルは、デブリに身を隠しながら凌ぎつつ、右手にはヒートホークを抜き放つ。

数秒の間を置くなり、ビームサーベルを抜いたデュエルガンダムが、デブリを飛び越えながら肉迫してくるが、シャルルはアームレイカーを巧妙に上下させ、デブリからデブリへ、三角跳びをするように高速移動しつつ、ビームサーベルを振り翳そうとしていたデュエルガンダムに飛び蹴りを喰らわせる。

しかし、波状攻撃の止んだその一瞬がシャルルの命取りだった。



「っ、ハバキリ後ろっ」

ジルの警戒の声、次にアラートが反応、それに続いてシャルルがそれに反応した時には、既にミラーージュコロイドを解除してPSを起動、複合防盾『トリケロス』のビームサーベルを振り翳すブリッツガンダムがいた。

「やつベツ……」

完全にシャア専用ザクの死角に回り込まれていた。

ビームサーベルがサーモンピンクの装甲を斬り裂く、ローロー

その寸前、黄緑色に輝く三日月がブリッツガンダムを真つ二つに斬り裂いた。

ブリッツガンダム、撃墜。

「ごめんっ、遅れちゃった!」

ブリッツガンダムを斬り裂いた三日月ロービームシザースを振り抜いていたのは、巨大な黒翼。

サツキーのガンダムデスレイザーだった。

「サツキーさん? わりー、助かった」

撃墜寸前のところを救ってくれたことへの感謝もそこそこに、シャア専用ザクはザクマシンガンを連射、イージスガンダムを牽制する。

「シャアザクでこの四機相手にしてたの? 無茶しすぎ……つてのッ!」

ガンダムデスレイザーは左半分のアクティブクロークを閉じて、バスターガンダムからの集束火線ライフルのビームを防ぐ。

シャア専用ザクとガンダムデスレイザーは背中合わせに立ち回り、残る三機を相手に死角をカバーし合う。

乱戦による誤射を警戒してか、バスターガンダムは砲撃の手を止めて、イージスガンダムと体勢を立て直したデュエルガンダムはそれぞれビームサーベルによる近接戦闘を仕掛けてくる。

シャア専用ザクがイージスガンダムと、ガンダムデスレイザーがデュエルガンダムと打ち合う中、シャルルは自分の中で何かを“噛み合う”感覚を感じていた。

「こいつ……オレの動きに合わせてくれてるのか？」

背中合わせの立ち回りでも、ピタリと合わせてくる。多少の齟齬はあっても、すぐに修正もしてくれる。

「いや、それだけじゃねー……オレもこいつの援護に回ってる……」

言葉無くとも、互いに互いをベストな位置でカバーし合える、絶好のポジショニング。

「オレとこいつの、歯車が合う！」

再三四度、イージスガンダムとデュエルガンダムが肉迫してくる。

「シャルル！」

「おーよー！」

いつの間にか、名前を呼ばれただけでその意図を読み取っていた。

同時に、ガンダムデスレイザーは上へ、シヤア専用ザクは下へそれぞれ散開した。

肉迫する寸前に目標が動いたために、イージスガンダムとデュエルガンダムは衝突、体勢を崩してしまふ。

「おら、よつとツッ！」

シヤア専用ザクはすぐさまイージスガンダムに接近すると、ヒートホークを両手で握り直し、バイタルバートへと思い切り叩き付けてやった。

PS装甲に阻まれるせいで真つ二つには出来なかつたものの、衝撃と熱プラズマを直撃したイージスガンダムの胴体はズタズタになり、動かなくなった。

イージスガンダム、撃墜。

それとほぼ同時に、ガンダムデスレイザーのビームシザースの一閃が、デュエルガンダムをシールドもろとも真つ二つに切断したところだった。

デュエルガンダム、撃墜。

残ったバスターガンダムは、集束火線ライフルとガンランチャーを撃ちまくって二機を迎え撃つが、そのほとんどがデブリを盾にされるか、アクティブクロークに弾かれるだけ。

悪あがきのつもりか、集束火線ライフルを前に、ガンランチャーを後ろに連結した、超高インパルス長射程狙撃ライフルをガンダムデスレイザーに向けて照射する。

しかし、その濁った金色の火線が触れるよりも前に、ガンダムデスレイザーが”消えた”。

ガンダムデスレイザーは、ガンダムデスサイズヘルのパーツを多分に含んでいるが、実際のベース機はデステイニーガンダムだ。

デステイニーガンダムには、ステルス迷彩機能こそオミットされているが、ブリッツガンダムと同様にミラージユコロイドシステムを搭載している機体である。

そして、ガンダムデスサイズヘルのパーツには、光学迷彩や攪乱物質の運用に適した性質を含む。

謂わば、『ハイパージャマーの代わりにミラージユコロイドを搭載したガンダムデスサイズヘル』である。

異なる世界観ながら、ミラージユコロイドとガンダムデスサイズヘルと言う組み合わせは、まさに水魚の交わり。

視覚的にも電子的にも消えたガンダムデスレイザーから、シヤア専用ザクへとターゲットロックを切り替えるバスターガンダムだが、そのシヤア専用ザクはデブリからデブリへ蹴り移る高速機動により、正確な照準を付けさせない。

不意に、超高インパルス長射程狙撃ライフルを構えたまま、右往左往するバスターガンダムの背後が”揺らぐ”。

すぐ背後に敵対反応があることに気付いたバスターガンダムだが、もう遅い。

三日月の形をしたビームが脇から生えたその瞬間には、バスターガンダムの半身は泣き別れてしまった。

バスターガンダム、撃墜。

周囲に他の敵機の反応はない。

「ふー……何とかなっただか」

シヤア専用ザクのヒートホークのエネルギーを切りながら、シャルルは安堵に一息つく。

同様に、サツキーのガンダムデスレイザーもビームシザースのエネルギーを消失させる。

「ねえっ、今なんか、すっごい上手く行ったっぽくない!？」

サイドモニターから、サツキーの笑顔が映し出される。

「つてか、あたしに合わせてくれてたんでしょ？」

「いや?むしろサツキーさんがオレに合わせてくれたんじゃねーのか?」

サツキーは「シャルルの方から合わせてくれた」と言い、シャルルは「サツキーの方

から合わせてくれた」と言う。

無意識の内に互いを互いに合わせていたのだろう。

「そうなの？とにかく上手く行っちゃったってことで！」

どちらがどうだったと言う褒め殺し合いもそこそこにして、サツキーは先程にシャルルが手放した脱出ポッドを改めて保持する。

アークエンジェルに到着するまでの間、申し訳程度にシャルルが周囲を警戒するものの、それ以上エネミーが出現することもなく、ピンクちゃんを乗せた脱出ポッドは無事にアークエンジェルーラクス・クラインの元へ届けられた。

『Mission clear!』

ミッシヨン達成を確認して、シヤア専用ザクとガンダムデスレイザーは、元々乱れ荒れていた上から戦闘の影響でさらにメチャクチャになったデブリベルトを渡って、自分達が乗っていたシヤトルへと帰還していた。

サツキーがデブリを避けるのに四苦八苦しているのを尻目に、シャルルはヒヨイヒヨイとデブリからデブリへ飛び移って行く。

「なんか、楽しそう」

ふと、シャルルの傍にいたジルがそう呟いた。

「楽しそうって、サツキーさんが？」

シャルルはジルが「サツキーがなんか楽しそう」と言ったのだろうかどと反応するが、そのジルは「ううん」と首を振る。

「ハバキリが、なんか楽しそうって」

「オレが？」

そんな顔していたか、とシャルルは首を傾げる。

「うん。あの人と一緒に戦ってるハバキリ、すごく楽しそうだった」

「……そーかもな」

否定はしなかった。

あの背中合わせの立ち回りは、シャルルーハバキリに確かな高揚感を与えてくれた。  
いた。

昔のフォース仲間達と戦っていた時を思い出す。

相手が格上だろうが何だろうが、負ける気がしないーそんな高揚感だ。

「もつと」

ふとまた、ジルが呟いた。

「楽しそうなハバキリを、もつと見たい」

いつもは感情が抜け落ちたかのような表情しか見せないジルの、嬉しそうな笑顔で。

「……」

シャルルは言葉を止めた。

ジルの笑顔に見惚れたわけではない。

しかしその笑顔は、今の自分が偽りの自分を演じていることへの罪悪感を問い詰めているようだった。

「(……どこかでケジメはつけねーとな)」

いずれまた、『シャルル』から『ハバキリ』に戻る時が来るだろう。

その時は……

「ねえシャルル、さつきから気になってることがあるんだけどさ……」

不意にまた、サツキーからの通信が届く。

「そのピンク髪の娘って、誰なの？」

「……」

いつか来るその時よりも、今はこの時だ。

もう有耶無耶には出来ねーな、とシャルルは誤魔化すかありのままを話すかを考え始めた……

【次回予告】



シャルル「サツキーさんと仲良くなったのはいいんだけど、コーダイとセアさんには何て説明すつかなー……今のオレがネカマであることも含めて」

サツキー「んー……やつぱりシャルルって初心者じゃないよね？昔にGBNやったことあるの？」

シャルル「しかもサツキーさんにはあつさりバレてるし……こりやもう隠し通せねーか？」

ジル「ねえハバキリ。セアとこうちやが、一緒にミッション受けようって」

シャルル「おいマジか」

サツキー「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション

『己の正義を貫いて』

……ちよつと、修羅場っぽい？」

## 7話 己の正義を貫いて

「みくちゃんとは神そのものであり、神が人の姿となって地上へと降り、母体を通じて現れた。それこそがみくちゃんなのである。私は神が産まれた瞬間にしてこう叫んだ。「天の子、神の子、奇跡の子が生まれた!!」と。神が同じ人間として誕生したことが奇跡そのものであり、我々『みくちゃんファンクラブ』、その初代名誉会長である私、まぐしや姉は神官としてみくちゃんの可愛らしさに感謝し、そしてそれを世に広く教え説かねばならない。この教えに叛き、反を示すことは許されざる大罪であり、例えそれが同胞であろうとも肅正されなければならない。しかし、みくちゃんが完全なる神として存在出来る時間は極めて短く、一生の内、誕生から僅か15年にも満たない。15年の歳月を過ぎれば、その可愛らしさは急速に失われ、やがて神として存在出来なくなってしまう。みくちゃんが神である内に私、まぐしや姉は彼との間に新たな生命——それも彼の生き写しを残さねばならない。もしもこの神の遺伝子を後世に残せなければ、我々は存在する意味を失う。そして、みくちゃんはもう15を迎えて既に半年以上もの時が過ぎてしまった。我々に残された時間はあと僅かしかない。一刻も早くみくちゃんを我が母国であるロシアへと凱旋させ、次の神となる命を胎に宿すための儀式を行わねばならな

い。みくちゃんが穢らわしい悪書を目に通し、結び付かせるための力を無為にしていなければ、儀式はほんの数回で完了される。これは全て、大いなるみくちゃんの意志であり、全世界で僅か数百人の我々みくちゃんファンクラブはそれを遂行する義務がある。義務の障害となる存在はいかなる手段を以てしても排除せねばならない。そして、現時点で我々の最大の障害であるフォース・スピリッツは、まさに不倶戴天。しかし、あの愚者の集団はあろうことか、私のみくちゃんの御身を捕えて洗脳し、奴らの盾になることを望まされている。みくちゃんの御身を盾にされては、我々は手出し出来ない。それは、我々自身が神に叛くことになるからだ。だが、好機がないわけではない。必ずやみくちゃんの御身を奪還し、洗脳を解いた暁には、フォース・スピリッツの愚者どもを血祭りに上げ、そしてみくちゃんと私は結ばれ、新たな神の子を育むために穢れ無き神聖なる我がスーシイヴァカ家にみくちゃんを迎え入……」

「なーーーーーに冒頭から1000文字以上も無駄使いして演説してるの。新規の読者が見たら、これが何の二次創作なのか分からなくなるところよ」

※この小説は『ガンダムビルドダイバース』の二次創作です。

一切の淀みなく流暢に舌を回すやべー奴に、バーテンダーはお白湯のおかわりを淹れながらそれ以上の演説を押し止める。ちなみに、この1000文字以上の中に15回も「みくちゃん」と口にしていたりする。

「……………」

仮面の獣人は、このメタ過ぎる状況を前に居た堪れなくなったのか、残りわずかのコーヒーを一気に喉へ流し込み、カップだけをカウンターへ返す。

「すまんマスター、コーヒーをもう一杯頼む。今度は『ネオアメリカン』でな」

「はい、ネオアメリカンね。少々お待ちを」

オーダーを承り、バーテンダーはもう一度コーヒーメーカーに豆を注いでいく。

「全く、まさかコーヒーでヤケ飲みをすることになるとは思わなんだ……」

「Gガンダムスのレイモンドは、コーヒーだけで一晚を明かしたことがあるわねえ」

再びコーヒー豆が挽かれていく音をバックに、トラちゃんは仮面の獣人へ話しかけ直す。

「おおそうだった、シャルルと聞いてもう一つ思い出したことがある。貴殿はサギミヤ

……いや、サツキーと言うダイバーをご存知か？」

一瞬、本名を言いかけて、すぐにダイバーネームの方へ言い換える。

「……確か、デスサイズヘルの使い手だったか？あの突飛な改造を施したガンプラは印象深いと記憶している」

仮面の獣人は、脳裏に巨大な黒翼を翻す暗緑の死神を浮かべる。

「まあデスサイズヘルのパーツは多数用いられているが、正確にはデステイニーガンダ

ムがベースだな」

それはそれとして、とトラちゃんは話を続ける。

「そのサツキー嬢が、少しの間シャルルと行動を共にしていたこと。それともうひとつ……」

ワイングラスに口を付けようとして、その中身が空になっていたことに気付くトラちゃん。

「……おっと、いつの間に飲み干していたか。姐さんよ、注文が重なって悪いが次は日本酒だ、『鉄ノ華』を頼む」

「はいはい、コーヒーから先に用意するわね」

コーヒー豆を挽き終え、粉末状となったそれに熱湯が注がれ、まずは蒸らしから。

「もうひとつ……なんだ？最後まで言ってくれんと後味が悪い」

「ハツハツハツ、めんごめんご。で、シャルルとサツキー嬢が行動を共にしていたところにな……」

その先を聞いた仮面の獣人は、マスクのフィルタ越しに瞬きを繰り返した。

「それは……アレか？」

「そう、修羅場　と言うアレだ」

フォン・ブラウン。

宇宙世紀における月面都市のひとつで、ガンダム作品の中でも度々その場所を拠点として利用されている。

そのフォン・ブラウン市周辺の広大な月面では、二つの機影が鎬を削り合っていた。ひとつは、ジルを乗せたシャルルのシャア専用ザク。

相対するのは、ザリガニに似た真紅の巨駆ーM A『ヴァル・ヴァロ』だ。

初出となるのは『0083』。

元ジオン軍のパイロットであつた隻腕の男『ケリイ・レズナー』が、自分がパイロットとして戦えることを証明するために、ガンダム試作1号機（フルバーニアン）のパイロットであるコウ・ウラキを名指しで決闘を行い、そして満足げに散つていったエピソードがある。

ミツシヨン名『蒼く輝く炎で』

同作品のサブタイトルから取られた、難易度レベル『4』のこれは、月面でヴァル・ヴァロを撃墜すればクリア、と言うシンプルなミツシヨンだが、その撃破目標のヴァル・ヴァロがかなり強く、レベル『5』、『6』のボスエネミーに匹敵するほどだ。

シャア専用ザクと同じ単眼（モノアイ）を輝かせながら、機首となる頭部からメガ粒

子砲が放たれ、シャルルとサツキーの二人を薙ぎ払わんとするが、両者は素早く散開して躲す。

「ズラッ！」

地球の重力の1/6と言う半端な重力下の中で、AMBACによる姿勢制御とスラストによる加速を同時に行う巧妙なマニューバを取りつつ、シャルルは照準をマニューアルで合わせ、ヴァル・ヴァロへ向けてザクマシンガンとザクバズーカのトリガーを同時に引き絞る。

放たれる銃弾が装甲を叩き、続いて砲弾がヴァル・ヴァロに炸裂するが、MAの重厚な装甲の前には大した痛手にはなっておらず、表面が僅かに傷付き、焦げ目が付いたくらいだ。

とは言えシャルルとて、これだけで倒せるとは思っていない。

ヴァル・ヴァロの注意がシャア専用ザクに向けられ、対空ビームガンとバルカン砲が一斉に火を噴く。

シャルルはアームレイカーを細かに振り回し、ビームガンとバルカンを確実に回避していき、そして隙が見えれば即座にザクマシンガンとザクバズーカを撃ち返してヴァル・ヴァロを被弾させていく。

当然ながらそれは先程と同じ、大した痛手にはならない……だが、そんな「大した痛

手にはならない」攻撃でさえ、一箇所かつ断続的に叩き込まれれば？

ザクバズーカの爆煙が晴れたそこには、明らかに『被弾した』と主張するほどに傷付いたヴァル・ヴァアの姿が。

如何に分厚く頑強であろうとも、集中的に衝撃を与え続ければ、やがては壊れていく。損傷によって動きを鈍らせるヴァル・ヴァアのすぐ側面が“ブレ”る。

「せえのつとツ！」

ミラージュコロイドを解除して姿を現した、サツキーのガンダムデスレイザーがビームシザーズを袈裟掛けに一閃、ヴァル・ヴァアの左のクローアームを斬り落とす。

「もう一撃……」

振り抜いた状態からもう一撃を与えようとビームシザーズを振りかぶるガンダムデスレイザーだが、不意にヴァル・ヴァアのモノアイがガンダムデスレイザーの方を向く。すかさずもう片方のクローアームを伸ばし、ガツチリとガンダムデスレイザーのボディを挟み込んだ。

「あつ、やつば……！」

深追いするんじゃないやなかった、とサツキーは慌ててヴァル・ヴァアの拘束から逃れようとするが、MAの臂力はMSの比ではない、むしろクローアームが挟む力は強まっている。



メギメギメギメギと嫌な音を立てながら、ガンダムデスレイザーの装甲が軋み始める。

しかし——

「はい、くろーさん」

そこへシャルルのシヤア専用ザクが肉迫、ヴァル・ヴァアのクローアームを格納していたそのスペースへ潜り込むと、その内部へ向けてザクマシンガンを撃ちまくる。

さすがのヴァル・ヴァアと言えども、装甲の内側までもが堅牢ではない。

ザクマシンガンの銃弾が炸裂する度にヴァル・ヴァアは黒煙を上げ始め、

「んじゃ、終わりだ」

トドメにザクバズーカを発射、反動に合わせるようにシヤア専用ザクはヴァル・ヴァアから飛び下がる。

一拍を置いて、ヴァル・ヴァアは小爆発を繰り返し、最後に派手に爆散した。

ヴァル・ヴァア、撃墜。

『Mission clear!!』

数十分前に『ピンクちゃん搜索任務』をクリアしたシャルル（ハバキリ）とサツキー、

ジルの三人は、続けてもうひとつミッションを受け、つい先程に『蒼く輝く炎で』もクリア、ベース基地に帰還しているところだ。

「やー、さつきはありがとね。危なかった危なかった」

サツキーはシャルルに軽く笑いながら礼を言う。

「ま、結果的にオレがヴァル・ヴァロを仕留めれたし、文句はねーな」

これでランクも『D』に上がるだろうしな、とシャルルは自身のログデータを目に通す。

本来なら『B』か『A』辺りのダイバーが戦うだろうヴァル・ヴァロを撃墜したのだ、当然ダイバーポイントもそれに見合った数値を得られる。

「サツキーさん、次のミッションはどーする?」

シャルルはサツキーに次はどうするのかを訊ねる。

「ごめんね、あたしそろそろ帰らないといけないから」

サツキーの方はログアウトする予定の時間が近いらしく、今日はこれ以上ミッションを受けるつもりは無いようだ。

「そっか。んじやオレも帰りますかね」

早めに帰った方がテラスも安心するだろうと思いつつ、帰還用のシャトルを目視で確認する。

「ねえシャルル、明日もログインする?」

「ん? 何も予定が無かったらするつもりだな。行けるんならメッセ送るぜ?」

「うん、そうしてもらえると助かる」

「オケー。じゃ、乗りますか」

そう告げると、シャルルのシヤア専用ザクが先にシャトルの格納庫に乗り込む。

その後で、サツキーのガンダムデスレイザーも続く。

「ジルちゃんは、この後どうするの?」

サツキーは、同じくガンダムデスレイザーのコクピットに同乗しているジルに話し掛ける。

「……わたし?」

「あたし、ELダイバーって見るの初めてだからさ。シャルルが教えてくれなかったら、ジルちゃんがELダイバーかどうかも分かんなかったし」

サツキー自身も「ELダイバーなる存在がGBNにいる」程度には知っていたが、実際にその目で確かめるのは今日が初めてだった。

ジルは「んーと、んーと……」と言葉を選んでから、答えられるように答える。

「わたしと同じ、えるだいな? がたくさんいるところにいる、いつもはそこで寝てる」

「ELダイバー専用の寮みたいな感じ?」

「りよー? って言うのは分からないけど、多分それでいいと思う」

要約すると、E.L.ダイバーとごく一部の管理者だけが立ち入り出来る場所にいる、というこらしい。

「そっか。そこって、出入りとかは自由なの?」

「うん、勝手に出ちゃダメ。外に出たい時は、ちゃんと外に出たいって言うてからじゃないとダメって」

「(……寮って言うよりは、まるで孤児院みたいね)」

E.L.ダイバー達がどのような生活を送っているのか、気になるところではあるが、恐らく一般ダイバーである自分では知り得ることは出来ないだろう、とサツキーは諦める。

「ふーん」

ちようど、ガンダムデスレイザーも着艦を完了する。

「着艦つと。ほら、降りて降りて」

「うん」

サツキーに促され、ジルは開かれたコクピットハッチを伝ってガンダムデスレイザーから降りる。

二機とも大きな損傷を負っていないため、整備を今日の内に済ませてから、シャルル

とサツキーはログアウト、ジルは保護管理局の方へ呼び戻される。

その日の晩。

ログアウトして帰宅してきたハバキリは、今日はダイバーギアではなく、スマートフォンのアプリを使ってコーデイと眩き合っていた。

ハバキリ：嘘・鋭敏

コウダイ：本当・呆

ウツソ・エヴィンとフォント・ボーの名前の由来を挙げることから始まったガノタ二人のトークは、相変わらず支離滅裂である。

本日のお題は、『V』の量産型MS、『ジェムズガン』だ。

コウダイ：ジェムズガンって、アニメだとポコポコやられまくってるけど、実際マジで弱いんかな？

ハバキリ：『V』の企画当初は、『W』みたいに複数のガンダムがメインで、『トーマスガンダム』って青いタンク型の機体が主役機で、ガンダム05に当たるのが『ジェームズガンダム』って言う赤い中型の機体があったらしいぞ（真顔）

コウダイ：えwwマジかwwエヴィンだろお前ww

ハバキリ：でも監督の御大が「いくらなんでも子供向け過ぎる」って理由で却下したつて。それで、考案途中だったジェームズガンダムをジム系の機体として再設計したのがジェムズガン。

コウダイ：あっ（察し）。ジェームズガンダムを振って、ジェムズガンか！なるほどなー（棒読み）

ハバキリ：ちなみに武装に関しては、赤いから左腕ビームガトリングの全身重火器にするか、五番目だから右腕をドラゴンハングにするかどうか迷ったらしい。

コウダイ：後のガンダムヘビーアームズと、シエンロンガンダムの原型であつた。ジャスワイビー♪

ハバキリ：トリアーエズ、クソ真面目に考察するとスペックそのものはヘビーガン先輩よりも遥かに上で、コスモ・バビロニア戦争でも余裕、木星帝国のバタラとも普通に戦えるレベル。

コウダイ：ええやんジェムズガンイけるやん！誰だよ、ジェムズガンって実際マジで弱いんかな？とか寝言言ってるアホは。

ハバキリ：ただ、ザンスカール帝国が地球侵攻に乗り出すまでの時間が長過ぎて連邦も暇だったんだよな。「俺らの相手になる奴いないし、ぶつちやけスペックは低くていいよ（鼻をほじほじ）」って連邦のお偉いさん（笑）がクソみてーな要求した結果、ジェ

ムズガンはそれ以上強くしてもらえなかった。

コウダイ：そしたら、ザンスカールのヘリコプターとタイヤが強過ぎて草も生えなくなっちゃったのか……（涙）

ハバキリ：つかタイヤが出てくる頃にはもうジエムズガンは画面からフェードアウトされてなかったっけ？ 同時期に作られたジャベリンの方がまだちよつと強かったのにな。

コウダイ：それな、ジエムズガンとジャベリンだったらどっち派？ 俺氏はもちろんジエムズガン派。

ハバキリ：オレもジエムズガン派。

コウダイ：同志！

ハバキリ：同志！！

一頻りジエムズガンに関する話題で盛り上がり、切りのいいところでやり取りを終える。

「……どーするかね」

とりあえず、そう口にしてみてから現状を認識し直す。

今現在の『アメノ・ハバキリ』は、GBNのログデータを初期化し、それ以降の更新

はない（と言うことにしている）。

しかしその一方で、ダイバー『シャルル』としての活動は順風満帆。

コウダイとセアは『シャルル』の存在を知らず、もう一方のサツキーの方は『アメノ・ハバキリ』のことを知らない。

唯一、『アメノ・ハバキリ』と『シャルル』の両方を知っているのはジルのみ。

ジルの場合は『シャルル』ハバキリ』と言う認識ではなく、容姿や性別などよりも先に『ハバキリ』だと思っているようだが。

「（なんだろうな、この、凄まじく宙ぶらりんな状況は）」

シャルルと言うネカマでプレイしていることを、コウダイやセアに隠したいわけではない。

ならば、今からでもシャルルからハバキリに戻れば良いだろうと思うその一方で、

サツキーと共に戦えることを心地良く感じている自分もいる。

あの、自分の歯車が相手の歯車が絶妙に噛み合う達成感と快感は、付き合いの長いコウダイとですら感じたことは少ない。

だが、サツキーの方からすれば『シャルル』はただのネットワークの顔見知りの『シャルル』でしかないだろう。

『ハバキリ』の姿で彼女の前に現れて「オレはシャルルだよ」と言ったところで、嘘をつ



いていると思われるのが関の山。

とは言え、『シャルル』のままでコウダイやセアと接しようものなら、今度はその二人を混乱させてしまいかねない。

どっち付かず。

「……あー、考えが纏まらん」

ダイバーギアをベッドの上に放り出して、横になる。

頭の中が煮詰まるような感覚は、これで二度目だ。

その一度目は、フォース・アルディナから脱退するべきか否かを交錯していた時だった。

あの時は、仲間達を火の粉から遠ざけるために、最適の行動を選択したはずだった。

であれば今回は……コウダイとセアの元へ戻る代わりにサツキーとの関わりを絶つか、あるいはその逆か。

そんな二者択一に視界を定められかけた時、ふと、ノイズまみれの耳障りな声が耳介に蘇った。

ーキミハ、オナジアヤマチヨクリカエシテイルジャナイカー。

フォース・アルディナを脱退し、コウダイとセアから身を置き、そして今度もまたか？

二者択一から、自問自答へ変わる。

.....

「なー、トーションロー」

かつて、アルディナのフォース・リーダーにして、互いが互いの右腕となっていた、あの意味でコウダイ以上の親友へ呼び掛けた。

「こんな時、お前ならどうしてた？」

返ってくるはずもない問い掛けに応えるのは、沈黙のみ。

「……それが分かるんなら、オレはアルディナの元から離れちやいねーか」

ワカラナイ。

ふとまた、あのゼク・アインの耳障りなノイズが聞こえる。

今はまだ、答えを出さなくとも良いだろう。

だが、その出さなくとも良い時間も長くはない。

焦燥感と、モヤモヤとイラつきが連続して襲って来る。

「分からねーのはオレの方だっつーの……」

ふと、コンコン、とドアがノックされる音が意識に介入してきた。

「兄さん、晩ごはん出来ましたよ」

テラスが夕食を作り終えて、呼びに来たようだ。

「ういうい、わーったわーった」

自問自答は一旦柵に上げるとして、ハバキリは勢いをつけてベッドから跳ね起きた。

柵に上げた自問自答とは言え、頭の片隅から消えたわけではない。

豚肉の生姜焼きを箸で突きながらも、ハバキリは無意識の内に自問自答を繰り返していた。

「……………、ねえ兄さん」

そんな箸の進まない兄の様子を見兼ねたのか、向かいに座っているテラスが不意に話し掛けてきた。

「昨日から、何だか様子が変ですよ?」

「ん……………」

自問自答のために意識片手間に反応するハバキリ。

「シャワーを浴びてるのかと思つたらいきなり怒鳴り声を上げて、どうしたのかと聞いたら「何でもない」って答えて、一日経つたら今度は考え事なんて……………ほんと、どうしちゃったんですか」

「……………オレがどーかしてるのは、昨日今日から始まつたことじゃねーからな」

意識片手間だろうが何だろうが、妹へ即座に軽口で返せる程度には冷静なつもりだっ

た。

「茶化さないでくださいよ、私は本気で心配してるんですよ？」

しかし、テラスにはとうにお見通しだろう。

今の軽口がいつもと同じ調子で言えなかったことも。

「悪い。お前には話しておきたいとは思ってるんだけどな、オレも上手く整理出来てねー……」

茶化すつもりはない。

今ハバキリが抱えている問題とは、他人からすれば些細なことだろうが、本人はそうもいかない。

「……もしかして、ホシザキ先輩のことですか？」

不意にテラスの口から、セアの名字が挙げられた。

「セアさん？あー、確かに関係してるな」

何気なく答えたハバキリだが、その答え方に対してテラスは訝しげに目を細めた。

「兄さん？今、ホシザキ先輩のことを下の名前で呼びましたよね？」

「あの人、GBNはリアルネームでプレイしてるからな。そう呼ばせてもらってる」

「……あー、はいはい、そう言うことでしたか」

何を察したのか、テラスは深い溜息をついた。

「最近、ホシザキ先輩がやけに中等部三年の男子と仲良くしてゐるって噂を聞いていたんですが、兄さんのことだったんですね」

一度お茶を一口してから、言葉が続けるテラス。

そこでコウダイの名前が挙がらないのは、何故かと突っ込むのは藪を突くようなものかもしれない。

「落ち込んでたりイライラしてたり、悩んでたりしてるから、てつきり兄さんはホシザキ先輩と付き合っていて、上手く付き合えていないんじゃないかって思ったんですけどね……まあ、兄さんに限ってそれはないですよ」

「ひつでーこと言いやがる」

とは言え、ハバキリにもそう言った自覚のようなものはある。

学園のアイドルと言われるホシザキ・セアから（恋愛感情云々はともかく）一目置かれているとなれば、”そう言う関係”と疑われるのは当然だろう。

「で、兄さんはホシザキ先輩と付き合っているわけではないと」

「まーな。オレとセアさんが付き合ってる、なんて広まってみろ？オレは校門を潜った瞬間拉致られて何をされるか分からんぞ？」

いくらハバキリが喧嘩のような荒事に慣れているとは言え、一人の時に完全な不意打ちを仕掛けられてはどうしようもない。

あるいは、四人や五人ではなく、もっと十人二十人と言った数の暴力が相手でも同じことだが。

「それは可哀そうですね、恋人が酷い目に遭って悲劇のヒロインになってしまいうホシザキ先輩が」

「おいこら、オレが拉致られることはスルーか」

兄の心配をしていると言いながらサラッとぞんざいに扱う妹に、ハバキリは思わず素の反応で返す。

まあそれはともかく、とテラスはもう一口味噌汁を啜る。

「厳密な意味で、ホシザキ先輩絡みの問題ではないんですね？」

「そーなるな」

例えもし、あの日にハバキリが請け負った初心者がセアで無かったとしても、今回と同じ問題に直面することになったかどうかは分からない。

だが、セアのリアルルの性別が女であることに別問題があった。

テラスはハバキリの言葉を曲解して捉えたらしく、こんなことを言い出した。

「ホシザキ先輩と親交を深めている一方で、別の女の子にも手を出していて、二股に悩んでいる……ってところですか？」

「HA？」

ハバキリは「お前何言ってるんだ？」と言いかけて、テラスのその言葉が、『状況だけ見れば強ち的外れでもない』ことに気付く。

セアとサツキー、時々ジル。

そんな感じのタイトルのドラマがあつたなー、と余計なことを頭に浮かべつつ、さらに余計なことにも気づいてしまう。

「セアさん、サツキーさん、ジル……アレ？まさかオレ、二股どころか三股掛けるんじゃない？」

いや、ジルはさすがにカウント外だろう（倫理的な問題ではなくELダイバーであると言う意味で）と思い直し、それでもやつぱり二股を掛けてるような状況には変わりないわけで。

「……に・い・さ・ん？まさかとは思いますが、まさか？」

自分の問い掛けを聞いた兄が固まっているのを見るや否や、テラスの纏う空気に怒気が見え隠れする。

笑顔なのに目が一切笑っていない。それどころか、殺気立っているように見えるは恐らく気のせいではあるまい。

これはヤバイ

EXAMシステムのスタンバイか、『S・E・E・D』が覚醒したシン・アスカか、ガ

ンダムフレームのリミッター解除か、いずれにせよ絶対に相手にしたくない状態だ。

本能的にその危険を察知したハバキリは、多少嘘をついてでも弁解しなくてはならないとして、可能な限りいつものマイペースを装い直す。

「何を言い出すんだこの愚妹は、それこそまさかだ」

わざとらしく大きな溜息をつけて見せて、ついでに呼吸を入れ換える。

「大体な、オレがそんな器用な人間に見えるか？」

「見えます」

「なんでや」

即答で返された。

「兄さんなら、身分を隠すために女装するくらい平気でやりそうですし」

しかも、やけに核心を突きまわってくる。

「あのなテラス。確かにやろうと思えばそれも出来なくもねーけどな……」

「兄さんが普段人前でヘラヘラしてるのは、自分の腹の中うちを他の人に読まれたくないからでしょう」

家族と言うのは、何故にこうも互いの思考を読み、読まれ合うものなのか。

「……ぐうの音も出ないとはまさにこれ」

「それで、実際のところはどうなんですか？」



テラスの気配から怒気が消える。

ハバキリはもう一度溜息をついてから、言葉を選びつつある程度は正直に答える。

まともに答えれば問答無用で『二股男』の烙印を抉り刻まれるのは、目に見えているからだ。

ログデータを初期化した後で、コウダイとセアに黙って新しく始めたこと。

周りから自分が『ハバキリ』であることを隠すために、敢えてネカマとして活動していること。

コウダイとセアのことを知らない（だろう）ダイバーとフレンドになってしまい、本来の『ハバキリ』に戻るべきなのか、それとも二人には黙ったままネカマとして動くべきなのかを悩んでいる。

この時、テラスを誤解させないようにサツキーの性別は隠している。

それを一通り聞き終えたテラスは、訝しげな顔を隠さない。

「所々、何か隠してそうな気がするんですが……まあ、兄さんの事情は分かりました」  
どうしてそれをのりくりりと躲そうとするんですか、とテラスは呆れたように溜息をつく。

「そんなもの、オオヤマ先輩とホシザキ先輩、それとそのフレンドさんに正直に話して謝れば済むでしょう……って言いたいですけど、兄さんの気持ちも分からなくはないで

す」

「自分が蒔いた種とは言え、めんどくせーことになっちまった」

ハバキリは冷めかけて生温くなった生姜焼きと白米をかつ込み、それを味噌汁で流し込む。

「……ん。ごちそうさん」

「お粗末さまでした。……それで、これから兄さんはどうするんです？」

現状をいくら認識したところで、打開策が見つかるかどうかはまた別だ。

テラスもそれを理解した上で、ハバキリに問いかけた。

「もーちよい考えてみる。飯も食ったから、少しは頭も回るだろ」

先に風呂入ってていいぞー、と言い残してから、ハバキリは自室に戻った。

勉強机の椅子に腰掛けて、一番目につくところに置かれている、ジンライのモノアイと自分の瞳を合わせる。

そのジンライの隣には、シャア専用ザクも置かれている。

二機の蛍光ピンク色のモノアイが、試すようにハバキリを真っ直ぐに睨む。

そうすること十数分が経ち、ふと脳裏に浮かんだのは――

ーもつと、楽しそうなハバキリを、もつと見たいー。

ジルの笑顔だった。

シャルルと言う名の仮面を被り、腹の中を見せたがらないハバキリの心底を見透かすような、曇りの無い純粹な笑顔を。

「あいつに、嘘とか誤魔化しとか通じなさそーだしな……」  
ハバキリはふと思った。

「……なにを、さつきから誤魔化すことばっか考えてんだオレは」

そーじゃねーだろ、と自分に言い聞かせて頭を掻く。

「あ、あー、そーかそーか。そーだったのな」

そこに至って気づいた。

自分は一体何に対してモヤモヤしてはイラついているのか。

答えは単純。

『中途半端なことをしている自分が気に食わなかった』のだ。

ストン、と何か腑に落ちるものを感じた。

さつきまでは、『どちらを選ぶのが正しいのか』『選ばなかった方はどう誤魔化すのか』

と言うことばかりを考えていた。

そんなもの、どうでも良かったのだ。

「……………」

腹積もりは決まった。

早速ダイバーギアを手に取り、メールの画面を開く。

送信先は、サツキーだ。

GBN上での現在時間は夜。

暗い山中に紛れるように、一機のGBNガードフレームがホバー機動でアスファルトの上を滑り、それを警護するように、エールストライカー装備の『スローターダガー』と黒く塗装されたエコーズ仕様の『ジェガン』の混成二個小隊が、油断なく飛び交う。

「……………こうもブンブンと飛び回っていては、かえって目立つのではないか?」

GBNガードフレームを操縦するダイバーは、近くにいたスローターダガーのダイバーに通信を繋ぐ。

「だからといって、護衛機無しでは見つかった時に対抗し切れないでしょう」

「それを理解した上で、だ」

スローターダガーとジエガンの群れに守られたGBNガードフレームは、順調に山道を下っていく。

「しかし、あの『ゲリラ』どもめ。我々がELダイバーを間引いているのだから、今のGBNが成り立っているのだぞ。必要悪と言うものを何故理解出来ん……」

「心中お察し致しますが、”悪”とは得てして理解されないものです。大儀と言うお題目はあつても、”マンハント”をしている以上、自分達はGBNの鼻つまみ者であることは、承知しております」

「悪党は悪党らしく皆から嫌われろ、か……」

特撮アニメの結末のように、正義の味方が悪者を倒して終わりーではない、その続きがあるのだから。

謂わば、『正義とは悪を以て成り立つのであり、正義の味方にとって悪者とは必要な存在』である。

”悪”と言う共通の敵がいるのだから、大衆は纏まっていられるが、それが無くなれば纏まりは簡単に解ける。

大衆にとつて、”敵”は常にいなければならない。自分の考えや行いが正しいのだと言う”愉悦”を覚えなければ、善悪の区別が出来なくなってしまうから。

そして、その考えや行いを肯定してくれるのが正義の味方なのだ。

自分を肯定し続けるために、大衆は声にせずとも”悪”の存在を望む。

悪を演じるのも難しいものだ、とぼやいたところで、急にアラートが反応、宵闇の空を一筋のビームが切り裂いた。

「敵襲！ゲリラだ！上空から三機！急速に近付く！」

敵機を捕捉しただろうスローターダガーの一機が敵襲を告げる。

雲の隙間から現れたのは、『エアリーズ』と『克蘭シエ』、そして『ゼータプラス』の改造機だ。いずれも、モスグリーンやレーシンググリーンと言った、目立ちにくいカラーリングが施されている。

「ガードフレイムの護衛はジエガン隊にさせろ！こちらのダガー隊で迎撃す……」

そう言った端から、ゼータプラスから放たれたビームがスローターダガーの一機を撃ち抜き、墜落させた。

スローターダガー、撃墜。

それを口火にゼータプラスは下降し始め、それを援護するようにエアリーズと克蘭シエがスローターダガーへ向けて攻撃を開始する。

「ジエガン隊聞こえるか！スピードーシングナルロスト、ゼータプラスがそちらへ向かった！」

「クラブー了解、引き続きガードフレイムの護衛を継続する」

スローターダガー二機と、エアリーズと克蘭シエによるドッグファイトが行われるのを尻目に、ゼータプラスは急速にGBNガードフレームと、それを護衛するジェガン隊を強襲する。

「予想よりも速いぞ！慎重にかかれ！」

GBNガードフレームと足並みを揃えながら、ジェガン隊はビームライフルによる射撃を行うものの、対するゼータプラスはいとも容易くビームの弾幕を潜り抜け、その最中にもパイロンにマウントさせたビームライフルを発射、ジェガン二機を撃ち抜き、その速度のままMS形態へ急速変形、変形完了と共にビームサーベルを抜き放ち、最後の一機を斬り裂く。

この間、わずか15秒。

そのまま逃亡を続けるGBNガードフレームの正面に周り込み、ビームサーベルをもう一基抜刀、二刀流のビームサーベルによって、抵抗しようとしていたGBNガードフレームの五体をバラバラに斬り刻んだ。

四肢を失い、地面に横たわるGBNガードフレームを見下ろしながら、ゼータプラスからの広域通信が届く。

『GBNプログラマーの、タカギ氏ですね？貴方に色々お聞きしたいことがあります。ご同行を』

すると、既にスローターダガーを撃墜し終えたのだろう、エアリーズがその場でホバリングしながらサーチライトを照らしている。

「グツ、ゲリラどもめ……」

MS形態に変形したクランシエに機体を拿捕され、そのまま上空へ連れて行かれてしまう。

それを確認しつつ、ゼータプラスのダイバーはどこかに長距離通信を行う。

『こちら『フリーユージェル』、ターゲットの確保に成功。これより帰投する』

翌日の放課後。

ハバキリは昨日と同じ体でホビーショップへ向かうと、すぐさまログイン、『シャルル』としてシヤア専用ザクと共にGBNへダイブする。

エントランスロビーに到着すると、その近くに翡翠色の髪と魔女っ子のコスチュームを身に着けたダイバーサツキーが待っていてくれた。

「あつ、シャルルー！」

ハバキリーシャルルの姿を見るなり、手を振ってくれる。

「おーっす、こんちはこんちは」



シャルルもひらひらと手を振り返してサツキーの方へ向かう。

会話が出来る距離まで近付くと、早速サツキーの方から話し掛けてくる。

「それでさ、昨日のメールにも書いてたけど『直接話したいこと』って?」  
そう。

サツキーに自分に本当のことを話すのだ。

自分は元々『ハバキリ』と言う名でログインしていたこと。

ELダイバーの排除を推進している運営の強硬派達から狙われているため、そのハバキリのログデータを一度初期化し、今の『シャルル』として、全くの別人を装ってログインしていること。

しかし、シャルルのままではハバキリだった頃の仲間と会えない。

そんな中途半端な状況を嫌い、今一度シャルルからハバキリに戻ることに。

もちろん、自分が今までネカマとして行動していたことも、元の仲間たちにも話すこと。

「おー、とりあえず順を追って説明……」

説明しますわ、と言いかけたところで

「あ、ハバキリにサツキー」

どこからかジルが現れた。

「いしま……ってジルか」

ジルの姿を見て、シャルルは話を止めてしまう。

「ジルちゃん？ 今日も遊びに来たんだ？」

サツキーも意識をジルの方に向ける。

「うん、こんにちは」

律儀にもペこりと頭を下げた挨拶してくれるジル。

保護管理局の方で、しっかりとした教育が為されているようだ。

サツキーに挨拶を終えたジルは、シャルルの方に向き直る。

「ハバキリ、今日も一緒に行つていい？」

「んー、そりゃ構わんけど」

しかし、それを聞いたサツキーが目を細めた。

「……あのさ、ジルちゃんってシャルルのこと「ハバキリ」って呼んでるけど、シャルル、ホントは初心者じゃなかったりする？ GBNを始めたばかりにしてはシステムとかすごい詳しいし、シヤアザクの操縦技術だってメチャクチャ上手いし」

なんかおかしいとは思ってたのよ、サツキーは訝しげにシャルルとジルを見比べる。

「サツキーさん、それを今から話そうとしてたんだよ」

さて、話の腰を戻そうと改めて話そうとするシャルルだが、

「あれ？ジルちゃん？」

聞き覚えのある声が聴覚に届いた。

「おつ、ジルちゃん。あつちは、E.L.ダイバーの友達か？」

ついでにもうひとつ。

その聞き覚えのある二つの声を聞いて、シャルルは心臓がざわつくような感覚を覚えた。

振り返って見れば、

そこにいたのは、セアとコーダイの二人だった。

ジルがその二人へ駆け寄るのを見て、サツキーは訝しげな表情を隠す。

「ジルちゃんの友達？」

「それっぽそーだな」

ここでそれを肯定すれば、なおのことサツキーはシャルルを怪しむだろう。

故にシャルルは曖昧に否定しなかった。

そして、この状況。

シャルル（ハバキリ）、セア、コーダイ、サツキー、ジル。

ハバキリのことを知るーセア、コーダイ。

シャルルのことを知るーサツキー。

ハバキリとシャルルの両方を知るージル。

そしてこの状況を作り出し（てしまつ）た元凶ーシャルル（ハバキリ）。

「（おいおいおいちよつと待てこの状況……下手したら修羅場か!?）」

しかも、ジルはシャルルのことを何の疑いもなく「ハバキリ」と呼んでいるのだ。

セアとコーダイの前で、ジルがシャルルを「ハバキリ」と呼べば「どう言うことだ」と。

逆にサツキーの前で、ジルがシャルルを「ハバキリ」と呼んでもさらに怪しまれる。

超スーパーステージーめんどくせーぞこれ、とシャルルは冷や汗が止まらない。

超高速で頭の歯車をフル回転させるものの、打開策が見つかる間もなく、事態は彼の

望まぬ方向へ突き進んでいく。

「ジルちゃん、向こうの人はお友達?」

セアはジルと、シャルルとサツキーの二人を見比べる。

「うん」

しかもジルは、今のハバキリがシャルルであることを認識していない。

シャルル（ハバキリ）がこの状況と言う名の爆弾なら、ジルはそれを爆発させかねな

い火種だ。

いつ爆発するか分からないこの修羅場。

「おつ、向こうの二人もなかなかの美少女……いいね」

コーダイはコーダイで、シャルルとサツキーをロックオンしている。

シャルルの正体を知った時のリアクションが気になるところだが、今はそれどころではない。

「ん？んーと、んーと……」

そこでジルは何を思ったのか、セアとコーダイ、シャルルとサツキーの二人組ふたつをキョロキョロと見比べている。

「……うんっ」

合点が入ったらしく、ジルはシャルルとサツキーの二人の手を取ると、セアとコーダイの方へ引つ張っていく。

「フレンド登録っ」

ジルに引き込まれ、シャルルとサツキーは、セアとコーダイの前に立たされる。

「ジルちゃん、フレンド登録の前にまずは挨拶が先でしょ？」

セアはジルの前で屈むと、人差し指を立てて優しく窘める。

「ん？はい」

ジルの素直な返事を聞いてから、セアはシャルルとサツキーの二人に向き直る。

「えーと、ジルちゃんのお友達ですか？」

シャルルがすぐに受け答えしないう言う間を空けてから、サツキーが答える。

「あ、はいそうです」

彼女が頷いてから、先にセアの方から名乗る。

「私はセアと言います。一応、ジルちゃんのお友達……だと思えます」

ジルとの付き合いが長くないためか、自信無さげに応じるセア。

「敬語じゃなくていいですよ。見た感じ、あたしより一個か二個上って感じですし

……つと、あたし、サツキーって言いませう」

サツキーが自身の自己紹介を終えて、今度はコーダイ。

「俺の名はコーダイ！良かったらコーちゃんでもいいぜ！」

女の子の前にしてか、コーダイはジルの時と同じような、調子外れなテンションで名

乗る。

一瞬、サツキーが怪訝そうな顔をしたことに気付いたのは、シャルルだけだった。

「そつちの金髪ちゃんは？」

金髪ちゃんーシャルルの方を見て、自己紹介を催促するコーダイ。

シャルルーハバキリは、この場では普通の女性ダイバーとして振る舞うべきかと考

え、どうせ後で自分からバラすのだからいつも通りで良いかと決め付けた。

「オレはシャルルです。先に言うのと、リアルな性別は男って言うネカマです」

それを聞いたセアが「えっ、そうなの？」と驚いているのを尻目に、コーダイは不意にシャルルから見て半身の姿勢を取った。

「シャルル？ 女の名前なのに……なんだ男か」

そのやり取りに反応したシャルルは、思わずその場のノリに乗った。

「シャルルが男の名前で何で悪いんだ！ オレは男だよ！ アバターは女だけだなー！」

とは言え、最後に本当のことを付け足した上で、だが。

「おっ、これを通じるとはあんた、中々のガノタだなー！」

シャルルがネカマであることに落胆することもなく、ネタが通じたことを素直に喜ぶコーダイ。

そんな妙な形の、双方の自己紹介が終わったところで、さてどうするかと互いに固まる四人。

「……あれ？ ジルちゃんどこいったの？」

最初にサツキーがそのことに気付いた。

それで残る三人も気付き始める。

いつの間にかジルが側からいなくなっている。

ここはエントランスロビーなので、白昼堂々とELダイバーのデリートなど行われな

いはずだが……

「お待たせー」

トテトテとジルがどこからか戻って来た。

「おいおいジル、勝手にどっか行ったら心配するだろーが」

「はい、ミツシオン受けてきた」

一瞬、誘拐されたのではないかと思いかけたシャルルの不安を押し退けるように、ジルがコンソールパネルを見せてくる。

「受けてきたって……なに勝手に受注してるんだか」

ジルはELダイバーではあるが、自身のプロフィールデータがあるため、ミツシオンを受けることそのものは可能だ。

何を受けてきたのかと、シャルルはそれを覗き込んで内容を読み取る。

ミツシオン名『トレーズ閣下からの頼みごと』

このミツシオンの分類はコレクトミツシオンに当たり、ガンダムWの登場人物であるOZ総帥『トレーズ・クシュリナーダ』から「本日のバスタイムはバラのエッセンスを加えたいのだが、そのバラの花が足りないなので、纏まった数を揃えて来てほしい」と依頼される、と言うものだ。

達成条件は、『バラの花20本をスーパーソニックトランスポーターへ納品』



ミッションが行われる場所は、エネミーが出現しないベースエリアの花畑なので、ガンプラに搭乗しなくとも、花畑へ移動するための足代わりさえ用意すれば良い。

「お花を集めてほしいんだって」

なるほど、ジルが選ぶようなミッションではある。

ふむ、とシャルルは頷いてから、他三人にもそのミッション内容を見せてやる。

「ジルがこのコレクトミッション受けたいって言ってるんだけど、どうしますかね？」

内容を目に通して、最初にセアが答える。

「簡単なコレクトミッションみたいだし、私は大丈夫だよ」

次にコーダイ。

「ジルちゃんが行きたいって言ってるし、俺は賛成だ」

最後にサツキー。

「バトルしないのはちよつと物足りないけど、たまにはいっかな」

一応、全員賛成のようだ。

「みんな行きたいんだってさ。良かったなジル」

「うんっ」

ミッションへ向かう前にフレンド交換をし合ってから、格納庫へ移動していく五人。

現在の格納庫には、四機のガンプラが立ち並ぶ。

シャルルのシヤア専用ザク

セアのガンダムMK―II

コーダイのキャノパルド

サツキーのガンダムデスレイザー

特に、コーダイのキャノパルドは、あれから武装を追加したのか、脚部のマウントラッチにミサイルランチャーを増設しているようだ。

それ以外には特に見るべきこともなく、シャルルはキャットウオークを渡って、シヤア専用ザクのコクピットに乗り込む。

「ジルちゃんは、私のMK―IIに乗る?」

「うん、乗る」

今回、ジルはセアと一緒に乗るようだ。

コーダイが「たまには俺と一緒にでもいいんだぜ?」とキメ顔でジルを誘ったのだが、「こうちゃは大きくて狭そうだからやだ」

と、ぎつくりと心を抉るような発言を直撃し、泣き喚きながらキャノパルドに逃げ込んで行った。

ハッチ開放、カタパルト展開、オールグリーン確認。

「ハバキ……んんっ、シャルル、ザク、出るぞ！」

「セア、ガンダムMK-II、行きます！」

「コーダイ、キャノパルド、行くぜ！」

「サツキー、ガンダムデスレイザー、出撃するよ！」

順々にカタパルトから打ち出され、デイメンションの空へ舞い上がる。

「（あ、そー言えばオレがハバキりだつてこと結局言いそびれたな……ま、これが終わってからでもいいーだろ）」

そう気楽に構えるシャルル。

しかし、この後に自分の想像とは違う形で正体を明かすことになるなど、この時は知るはずもなく……。

### 【次回予告】

シャルル「さてと。さくつとバラを集めてとつと帰るとしますか」

ジル「あーか、あーお、しーろ、ぴんく、たくさんいっぱい♪」

セア「こう言うミッションもあるんだね」

コーダイ「しかし、まさかこの後であんなことになるとは、この時の俺達には考えられなかったのだった」

サツキー「ちよつ、そう言うフラグ立てるような前フリはいらないから」

シャルル「……あー、そんなこと言うから、なんかやばそーなのが来てるんだけど？」

コーダイ「マジかよ俺のせい!?」

セア「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション

『迷い解き放つ時』」

シャルル「いよいよ年貢の納め時……なんて言ってる場合じゃねーや、マジでどーするこれ」

## 8話 迷い解き放つ時

ゲイバー『ADAMS APPL E』の店内で、やべー奴によるみくちゃんを崇め称えるための演説はなおも続く。こいつもうほつといていいんじゃないかな。

ネオアメリカンコーヒーが仮面の獣人に、日本酒『鉄ノ華』がトラちゃんに用意されてから、仕切り直しとばかりトラちゃんが『思い出語り』を続ける。

「修羅場とみくちゃんの話は一度置いておくとしよう」

トラちゃんは早速お猪口に酒を注ぎ、仮面の獣人はアメリカンコーヒーの香りを楽しむ。

「関連する話と言えばそうだな……貴殿は『ゲリラ』の噂はご存知かな？」

「存じているとも。ついでに言えば、これでも『私は元運営の人間』だからな。多少なりともGBNの”裏”について知っているつもりだ」

とは言え、と仮面の獣人は言葉の端の自信を弱める。

「私が知っているのは、『ゲリラ』と呼ばれる少数精鋭のダイバー達が、アンチELダイバー勢ばかりを襲撃しているぐらいのものだが」

「うむ、概ねその通りだな。まあ、ディーブな面にまで踏み込んで無ければ、それくらい

の情報しか出てこんだろう。俺も、この手の情報を手に入れるにあたって、随分と骨を折ったものだ」

お猪口に注いだ、薄紅色のそれを静かに呷るトラちゃん。

「君は、それ以上のことも知っていたようだが？」

仮面の獣人として分かっていることだった。

このトラちゃんが、現実とGBNの両方で底知れない情報網を持っていることを。

そしてそれは、トラちゃん自身が誠を誓う——GBNの運営においても強い発言力を持つている——“准将”なる人物による指示の元でしか動かないことも。

「知ってはいる。……だが、あまり口外に出来んことだからな。俺としてもどこまで話して良いものか」

言葉を選び直してから、トラちゃんは再度口を開き直す。

「その少数精鋭、もしくは単独の『ゲリラ』だが、普段は一介のフォースに紛れて、普通にGBNでプレイしているからな。実際に襲撃を行っている現場を目撃する以外で、『ゲリラ』であるか否かの区別は付けられん」

「神出鬼没の、文字通りの『ゲリラ』と言うわけか」

運営が把握し切れないほどの隠密行動、さらに極めて迅速かつ、確実。

まるでニンジャだな、と仮面の獣人は苦笑する。

「……とまあ、ニンジャのような『ゲリラ』だが、追跡していく内に面白い結果が出てな」  
「面白い結果、と言うと？」

まさかアバターまで忍装束を纏ったダイバーではあるまい、な、と仮面の獣人は冗談混じりに苦笑するが、トラちゃんが答えた結果は、予想とは異なる答えだった。

「この『ゲリラ』、実は『あるフォースのガンブラ』に見られる特徴に非常に近くてな」  
トラちゃんはコンソールパネルを開き、複数の画像を見せた。

それら画像には『董色のガンブラ』や『緑色の可変機』などが映し出されている。

「ふむ……ふ、む……？はて、どこかで見たことのある色合いだが……」

仮面の獣人は顎の毛並みを肉球で扱きながら、マスクのフィルター越しに目を細める。

「ほれ、こんな感じのガンブラなど、見覚えはないか？」

トラちゃんが指したのは、『手首が異常に大きい黒紫色のガンブラ』

「こつ、こいつはッ!?!……そうか、『ゲリラ』と言うのは、”彼ら”のことだったのか」  
その『手首が異常に大きい黒紫色のガンブラ』を見て、仮面の獣人は驚いて、すぐに納得したように息をついた。

今でもたまたま夢に出てくるのだ。

あの、ハンマーのように巨大な手首に肩を掴まれてはタコ殴りにされ、地面に思い切

り叩きつけられ、愛機を粉々にしてくれた、ジャイオーンの改造機を。

それを思い出してからは、画像内のガンプラが、どこのフォースの誰のものか、全て分かった。

「フォースの足並みを揃えていないのは何故かと思えば、こう言うことだったとはな……」

「ご理解いただけただけかな？」

「ああ、よく分かったよ」

仮面の獣人が頷くのを確かめてから、トラちゃんはコンソールを閉じた。

シヤア専用ザク、ガンダムMK-II、キャノパルド、ガンダムデスレイザーの四機が蒼空を舞い、景観のためのエリアである『レジャーフィールド』へ向かう中、コーダイは思考を回していた。

「あのシャルルって奴の話口調、なんか引つ掛かるんだよな……?」

気怠そうに、所々間延びした口調。一人称が「オレ」と言うのもそうだ。

自分で自分のことを「ネカマだ」と言うダイバーなど初めて見たが、隠すつもりもな  
いなら、何故リアルと同じ性別でプレイしないのだろうか。



何か理由があつてのことだろうが、コーダイの頭では思い付かない。

ふと思ひ当たつたのは、意外な人物だった。

「(ハバキリ……?)」

確かに話口調は似ているし、ハバキリなら理由さえあれば躊躇いもせず女装するかもしれない。

だがそれは、あくまでも『かもしれない』の範疇であり、使っているガンプラも愛機  
のジンライではなく、SDのシャア専用ザクであるとすれば、

「……まさかな」

と言う結論に至る。

シャルルのガンプラが、かつてのハバキリがフォース・アルテイナの結成当初に使っていた、アストレイブルーフレームと同じであればもう少し疑えたのだが、既にコーダイの中で『シャルル≠ハバキリ』と言う図式が組み込まれてしまったので、それ以上に踏み込むことが出来なくなっていた。

そうこうしている内に、目的地である花畑が近付いてきた。

シャルルの正体については一度頭の片隅に置いておくことにして、コーダイはキャノパルドの速度と高度を落す。

花畑そのものから少し離れた平地に、順番に着陸していく。

ここの花畑は、多種多様な花々が数多く群生しており、今回のターゲットアイテムであるバラの花だけでなく、ヤナギランの花や彼岸花の他、レアアイテムとして『00』本編中でイノベイターとの決戦を前に、フェルト・グレイスが刹那・F・セイエイに手渡した『命の華』が採取可能であったりする。

シャルルはシヤア専用ザクに片膝を着かせて、右マニピュレーターを胴体に寄せてからコクピットハッチを開く。

「さて、早いところバラの花を集めて、帰るとしますか」

地面に降り立つと、順々にコーダイ、サツキー、最後にセアとジルがコクピットから降りてくる。

「わあ……」

視界一面に広がる幻想的な光景を前に、ジルは見惚れる。

今にも駆け出しそうなジルを尻目に、セアはシャルルに話し掛ける。

「シャルルさん、バラの花つて何色でもいいの？」

「何色でもオツケーです。もし見分けがつかなくなったら、とりあえずアイテムボックスに入れて、後で確認すれば大丈夫です」

セアに話し掛けられて、シャルルは何気なく答えてからハツとなる。

「（あ、やべ。素の反応返しちまった）」

ついついとも同じー『ハバキリ』と同じように返してしまった。

しかしセアの方は特に訝しむこともなく「分かりました」と頷いた。

「ジルちゃん、行こっか」

「うんっ！」

すると、ジルはセアの手を取るなりそのまま引つ張つていく。

その後が続くように、コーダイは「コレクトミッシェンなんて久しぶりだなあ」と、サツキーは「なんかレアアイテムとか採れないかな」と、それぞれ違う様子を見せながら花畑に足を踏み入れていく。

「んじゃオレも、クソ真面目にバラ集めと洒落込みますか」

このローゼン・ズールは貴様を倒すために作られたのだからなあ、とぼやきつつ、シャルルも花畑へ向かう。

「……そうか、そつちは外れか」

イースト・エリア、山中にあるフォースネストの格納庫の中で、深緑のゼータプラスは待機していた。

『こつちの”裏側”はむしろ外ればつかねえ。連中も下手に”裏道”を通るより、堂々

してる方が安全って思ってるのかも』

「どうやらそうらしいな。マイ、一応そっち側はこのまま任せるぞ」

『はいはい。センパイもねー』

それだけ言葉を交わすと、すぐに通話を切り、履歴を削除する。

続いてGBNのワールドマップを開き、チェックポイントを記していく。

「……………」と、ここは探ったな。この地形なら、ショートカットが使える。だとすると、このサーバーゲートが……」

ぶつぶつと一つずつ確認しつつ思案に更けていると、

ーふと、所属メンバー以外のガンプラがフォースネストに接近する音声が鳴り響く。

「ん?」

それを聞き取ると同時に、ゼータプラスのコクピットへ飛び込み、すぐに機体を起動させる。

レーダーを確認すると、ガンプラの反応が二つほど。

フォースネストのすぐ近くを通過しようとしているだけで、ここに立ち寄るような素振りは見えない。

とは言え、かなりフォースネストに近い距離を飛行しているようだ。

とんだ迷惑だな、と嘆息をつくと同時に「待てよ」と零す。  
フォースネストから離れつつある二つの反応。

リーダー範囲を広げ、その二つの反応がどこへ向かうのかを注視する。  
その方向には、レジャーフィールドが点在している。

「……」

何となく嫌な予感がする。

すぐにまたゼータプラスから飛び降りるなりメンテナンスハンガーに降り込み、弾薬  
エネルギーと推進剤の補給だけすませてから、すぐにカタパルトデッキに乗せて、出撃  
した。

湯煙を切り裂きながら、ゼータプラスはWR（ウェイブライダー）形態へ変形、先程  
の二機を追うように、レジャーフィールドへ急行して行く。

シャルルは花畑の中で、バラの群生を正確に発見しつつ、手早くバラの花を採集して  
いく。

「……4、5、6つと」

色とりどりのバラの花をアイテムボックスへ納めて、他のメンバーはどうかと辺りを

見回す。

「命の華々、命の華はどこだ、隠れてないで出てこい」

コーダイはターゲットのアイテムよりも他のアイテムを探しているようだ。

採取率1%以下のレアアイテムだ、普通に確率を待つだけでは何度も同じミッションを受けなくてはならないだろう。

「なーんかあたし、こう言うミッションに嫌われてる気がする……」

サツキーは一応バラの花を集めようとしているようだが、肝心のそれがなかなか見つからないらしい。

『ピンクちゃん搜索任務』の時と言いこれと言い、何かと不運が付き纏っているようだ。

「見てみてセア、出来たっ」

「あ、もしかして花冠かな?」

セアとジルに至っては、ミッション中に遊んでいる始末だ。

ジルはそこら中の花を片っ端から集めては、花冠を作ることに夢中になっており、そんなジルの相手をするのはセアであり、当然ながら採集の手は進んでいない。

これはオレ一人で全部集めることになるかな、と腹積もりを決めて、シャルルは次の場所へ足を向ける。

「……7、8、9、10。これで半分だな」

「ええい、ヤナギランはいい！命の華を出せ！命の華を！」

「これだけ探してやつと一本とか……」

「セアのぶんも作ってあげるね」

「作ってくれるの？ふふつ、嬉しいなあ。……あ、これかな？」

ターゲットアイテム？バラの花 12/20

肉体的疲労の無いGBNとは言え、長時間も屈んでは気分が疲れる。

シャルルはその場で立ち上がり、背伸びする。

「んん……たまには土いじりもいいーけど、そんな楽でもねーな」

そうぼやきながら、ぼんやりと青空を見上げる。

燦々と降り注ぐ日の光に、ふわふわの綿菓子のように綺麗な純白色をした雲。

小さかった頃は、『あの雲が綿菓子みたいだ』と無邪気に笑っていたが、今になって雲が綿菓子みたいだと思えば、その次に『あれが全部綿菓子なら凄まじいカロリーと糖分だな』と余計なことも考えてしまう。

「どうしたのシャルル、ぼーっとしたりしてさ」

ふと、シャルルの隣にサツキーが歩み寄っていた。

「ぼーっとしていることに、ぼーっとしている他に意味があるってのか？」

「……ごめん、よく分かんない」

「ぼーっとしてることの意味なんかねーよ、つてことだ」

ただの言葉遊びだから気にすんな、とシャルルは背伸びをやめる。

「オレはバラの花を10本集めたけど、サツキーさんは？」

「あたしはまだ一本だけ。つてかシャルル、なんでそんなに集めれるの？なんか不条理なものを感じるんだけど……」

頬を膨らませるサツキー。

運の良し悪しばかりはどうしようもないが、連続して不運なことが起こると不条理さを感じるのも無理はない。

「二応、ソロプレイでもクリア出来るようには調整されてるはずだからな。たまたまオレの方に集中して置かれてただけだろ」

「ー実際は、シャルルがこの花畑のどこにどの花が採取出来るかを大凡把握しているのだが、それは明かさない。

コーダイが狙っている命の華に関しては、完全にランダム配置な上に出現率も極めて低いので、シャルルも分からない。

「なんか納得いかない……」

がつくりと項垂れながら溜息をつくサツキー。

「ま、そー言うこともあるだろ」



「……」

項垂れていた頭を上げて、サツキーはシャルルの顔を見上げる。

「なんだサツキーさん？ オレの顔に修正パンチでもぶち込むつもりか？」

「そんなことしないけど……もしかしてシャルルって、Mな人？」

「いやいやいや、さすがのオレも痛め付けられて興奮は出来ねーよ」

「つて、DSかDMの話しじゃなくてさっ」

何言わせるのよ、とサツキーは気持ち切り替える。

「シャルルって、あの二人と知り合い？」

サツキーの言うあの二人とは、セアとコーダイのことだ。

「……」

シャルルは言葉を詰まらせてしまった。

ここでその沈黙が意味することは、「セアとコーダイとは知り合いである」ことの証明

に他ならない。

「あ、やっぱり知り合いなんだ」

サツキーにもそれは分かっていたようで、納得したように頷く。

「……あの二人に、知られちゃいけないことでもあるの？」

「いや、むしろ知ってもらおうと思ってたよ。サツキーさんにもな」

「さつき言いかけてたこと？」

エントランスロビーでシャルルが言いかけていた『直接話したいこと』だ。

「さつきはタイミングが悪かったんだよ。このミツシヨンが終わった後にでも思ってた。……さつきと、バラの花集めよーぜ」

いくら制限時間に余裕があるとは言え、いつまでも遊んでばかりではせつかくのミツシヨンも失敗に終わってしまう。

気を取り直して採集を再開しようと動くシャルルだが、その動きをピタリと止めて、空を見上げた。

「どうしたのシャ……？」

サツキーもシャルルの視線の先を見上げて、それが何かを視認する。

「クツソー……どこにあるんだよ命の華……ん？」

コーダイは顔を上げた。

彼の視線の先に見えるのは、二つの機影。

それらは徐々に大きくなってーこの花畑に近付いてくる。

「何だ？ あいつらもここでミツシヨンか？」

コーダイの様子に気付いたのか、セアとジルもその方向に目を向けてー

「……うつ」

不意に、ジルが身を震わせた。

「どうしたの、ジルちゃん？」

心配そうにセアが声を掛けるが、ジルはその二つの機影を見やる。

「あの、二人から……嫌な感じがする……」

「！」

ジルの感じ取った「嫌な感じ」に、セアは覚えがあつた。

ハバキリとコーダイとの三人で挑んだ、オデツサ作戦のミツシヨンの時と同じだ。接近する機影が、ハツキリとした形が見えるほどに近付いてくる。

一機は『レガンダム』、もう一機は『サザビー』

どちらも『逆襲のシヤア』に登場した、それぞれアムロ・レイとシヤア・アズナブルが搭乗し、地球へ落下しつつあるアクシズを巡って激しい戦いを繰り広げた機体だ。

その二機が減速すると、何の躊躇いもなく花畑の上に着地した。

当然、フット裏にある花は踏み潰される。

「あつ……」

ジルはその光景を見て固まってしまう。

それを嘲笑うかのような、品の無い笑い声がスピーカー越しに響く。

『いるいる！ガンプラに乗りもしねーで彷徨ってるのが！』

『文字通り、アタマがお花畑ってかあ！』

レガンダムはビームライフルを足元に――正確には、ジルへ向けていた。

「ジルちゃんっ！」

セアは強引にジルの身体を抱き寄せると、その場から逃げ出した。

次の瞬間には銃口からビームが放たれ、二人がいた地点の花畑を焼き払った。

同様にサザビーの方もビームショットライフルをコーダイに向けて発射していたが、銃口を向けられたコーダイはその場から身を投げ出すようにしてビームをやり過ぎしていた。

当然、花畑もまたビームによって焼かれる。

「っ……お前らっ、ここをどこだと思って攻撃してやがる！」

コーダイは起き上がりながら、自分を攻撃してきたサザビーに向かって憤慨する。

『知ってるよ！生身を晒してる奴がいるから、どうぞ攻撃してくださいってエリアだろ！』

なおもコーダイに向けてビームショットライフルを連射するサザビー。

MSの銃火器で、動き回る生身の人間へ向けて当てるのは至難だ。

だが、掠めるだけで即死。

「クソツ、何とかガンプラに乗り込まねえと……!」

これ以上、この花畑を踏み荒らされるわけにはいかない、どうにかガンダムとサザビーをここから離れた場所まで誘導しなくては。

しかし、このまま真つ直ぐキャノパルドに乗り込もうとしても、乗ろうとしている内に狙い撃ちにされる可能性が高い。

どうする、とコーダイは逃げながらキャノパルドの元へ向かおうとするが、

「ルールとマナーも知らねーのかあんぼんたんが!!」

突如として、シャルルのシヤア専用ザクが現れ、サザビーのボディに飛び蹴りを喰らわせる。

だが、軽量なSDガンダムでは、20mを上回るサイズのサザビーの重量を蹴飛ばすことは出来なかった。

『はっ!SDガンダムなんて使ってるのかよ、そんなオモチャをGBNに持ち込むんじゃないよっ!』

逆に、サザビーのシールドに殴り飛ばされてしまうシヤア専用ザク。

とは言え、まともに受けてはないのですぐに姿勢制御する。

「だまらっしやいあんぼんたん、てめーのサザビーだつてオモチャだろーがあんぼんたん。だからてめーはあんぼんたんなんだよ、分かったかあんぼんたん」

『チツ……あんぼんたんあんぼんたんうるせえなあ!』

シャルルはサザビーを挑発しつつ、花畑から遠ざけようと誘導する。

一方のレガンダムの方には、サツキーのガンダムデスレイザーが打ち掛かっていた。シャルルとサツキーの二人はいち早く危険を察知し、コーダイとセアよりも先にガンブラに乗り込んでいたのだ。

「なんてことしてくれんのよ、あんた達はあッ!」

アクティブクロークを翻しながらビームシザースを振り抜くガンダムデスレイザーだが、対するレガンダムもビームサーベルを抜き放って迎え撃つ。

『あー? 露骨に腐女子受けを狙ったWのガンブラ使うとか! お前、ガンダムを何だと思っちゃってんの?』

ビームシザースとまともに打ち合えるところ、レガンダムのビームサーベルの出力も相当なものだろう。

「……なにその言い方? あんたもしかして、お気持ち警察とかそう言うアレなの?」

サツキーの言うそれは、ネット界限においてひとつの主義主張だけが正しいと言い張り、それ以外は何かにつけて何が何でも否定したがる、アンチのお手本のような連中だ。

「ごめん正直言つて気持ち悪いんだけ、どッ!」

「どッ」に合わせてビームサーベルを弾き、流れるようにビームシザースを横薙ぎする

が、レガンダムは反応も早く、飛び下がってビームシザースの一閃をやり過ぎす。

『いや、キモいのはそのガンプラの方だからね!?アタマあるでしょ!!使お……』

何かを言い掛ける前に、サツキーは通信を切った。

「はー、うっぎ……」

耳障りな声はこれ以上聴きたくない。

とりあえず、このバカとあつちのバカを花畑から追い出す。

ビームシザースを構え直し、ガンダムデスレイザーは突撃する。

シャルルとサツキーの二人が牽制してくれている内に、コーダイはキャノパルドに、セアもジルを連れてガンダムMK-IIに乗り込んだ。

コーダイはキャノパルドを再起動させつつ、セアと通信を繋ぐ。

「セアさん、聞こえてますか?」

「うん、大丈夫」

セアの応答を確認してから、コーダイはサザビーと戦っているシヤア専用ザクと、レガンダムと戦っているガンダムデスレイザーの両方を見比べる。

「……よしつ、俺はシヤアザクの方を援護します。セアさんはあつちのデスヘル、黒い羽根のガンダムの援護を頼みます」

「うんっ」

キャノパルドはシャア専用ザクの方へ、ガンダムMK-IIの方へ、双方の援護へ向かう。

サザビーが振り下ろすビームソードアックスを回避しつつ、シャア専用ザクは少しずつつ後退していく。

『避けんなよ、避けたら花畑が潰れるぜえ?』

「じゃ、てめーが攻撃しなきゃいんじゃないかね?」

避けたらこうなる、だったら攻撃しなければ良い、などと罵詈雑言のドツジボールをしつつ、シャルルは冷静に思考を回す。

あのサザビー、乗り手の人格はともかく完成度はそれなりに高い。お気持ち警察をしているだけはあるという事か。

気軽に作った程度のシャルルのシャア専用ザクでは、まともに攻撃しても撃墜するのは難しい。

「(ま、やりようはある)」

シャルルの中では、既にあのサザビーを撃破するための算段が組み上がっている。

問題は、向こうがこちらの誘いに乗ってくれるかどうかにか掛かっているが……



不意に、シヤア専用ザクとは別の方向からバルカン砲の銃弾がサザビーの装甲を叩く。

ダメージはゼロに近いが、注意を逸らす程度の効果はあった。

「大丈夫かシャルルさん！」

コーダイのキャノパルドが援護に来てくれたようだ。

彼がシャルルのことを「シャルルさん」と呼んでくれている辺り、どうやらハバキリだとバレていないらしい。

それに合わせて、シャルルも彼への呼び方を変える。

「わりいな、コーダイさん」、助かる」

シャルルはシヤア専用ザクのザクマシンガンを右手に持ち替えさせ、左手にはヒートホークを抜き放つ。

キャノパルドはさらに左肩に担いだハイパーバズーカも発射してサザビーを牽制するが、対するサザビーはビームソードアックスを振るって砲弾を切り裂く。

『チツ、Sランクの奴がこつちに来たか。まあいい、まとめてぶっ潰してやる！』

サザビーはその場から飛び下がると、バックパックに納められた六つの筒状の物体を射出させる。

『行けよファンネル！』

筒状の物体から四枚の羽が広がると、それらは意思を持ったかのように飛び回り、シヤア専用ザクとキャノパルドにビームを浴びせ付けてくる。

サイコミユ兵器のひとつである、ファンネルだ。

宇宙世紀の原作では、重力下でファンネルはまともに使えないのだが、このGBNでは重力の有無に関係なく使用可能である。

「うおっと、ファンネルか」

放たれるビームを掠めそうになりつつ、キャノパルドはビームライフルによる反撃を行い、シヤア専用ザクはファンネルからのビームを掻い潜りつつ接近を試みるが、サザビーはファンネルをこと細かく制御しながらも、ビームショットライフルを撃つてくる。

「（このザクじやキツイか）」

シヤア専用ザクでは性能が足りない。

無論、この機体で倒すことは出来るが、少しばかり時間がかかる上に面倒だ。

シャルルとしてはさっさと片付けて、レガンダムと交戦しているサツキーとセアの救援に向かいたいが、それもいかない。

『ホラどうしたどうしたア！』

なおも苛烈にファンネルとビームシヨットライフルを放ってくるサザビー。

「野郎、ナメやがって！」

コーダイもサザビーからの攻撃を掻い潜りつつ、ビームライフルとハイパーバズーカによる砲撃を以て反撃する。

「(ま、急がず攻めればいいか)」

今はまだ様子見だ、とシャルルは四方からのビームを躲けてみせる。

こちらが痺れを切らして仕掛けるか、向こうが慢心で油断するまでが勝負。

一方の、セアとサツキーの二人。

セアのガンダムMK-IIは、サツキーのガンダムデスレイザーを誤射しないように、なおかつレガンダムからの攻撃にも警戒しつつ、慎重に行動していた。

「サツキーさんのガンプラは、接近戦が得意みたいだから……」

あのビームの大鎌一丁だけでレガンダムに肉迫し、それ以外の武装の類は恐らく装備していない……そう読み取ったセアは、ガンダムMK-IIをレガンダムの後方へ回り込ませつつ、ターゲットマーカを合わせていく。

『見えてんだよ！フィンファンネル！』

すると、レガンダムの背部に掛けられていた複数の板が飛び出し、それぞれが『コ』の字に変形すると、サザビーのファンネルと同様に自立稼働しながらガンダムMK-IIへ

ビームを放つ。

「うそっ、あれも攻撃してくるの!?!」

オールレンジ攻撃の類を知らないセアは、完全に虚を突かれてしまっていた。

バイタルバートへの直撃コースだ。

しかし、セアと同乗していたジルが声を上げる。

「セア、上に飛んでっ」

「えっ?」

セアは返事をするよりも先に身体が反応していた。

アームレイカーを捻り引き下げると、ガンダムMKG-IIはその場からジャンプ、0.

2秒前まで立っていた地点を、フィンファンネルのビームが薙ぎ払った。

『避けやがった!?!』

「どこ見てんのよっ!」

ガンダムMKG-IIの挙動に意識を向けた瞬間、ガンダムデスレイザーが地面を削るように下からビームシザースを斬り上げてきた。

ℓガンダムは咄嗟にシールドを前面に向けて防ごうとするものの、ビームに耐性を持つ盾や装甲すらも一閃の元に両断可能な出力の前には耐え切れず、ℓガンダムのシールドは真つ二つに斬り裂かれた。

『クソがつ、なめんなやあ!』

だが、シールドで防がれると言うタイムラグが生じたせいで、ガンダムデスレイザーはレガンダムの前で隙を晒していた。

反撃に振るったレガンダムのビームサーベルが、ガンダムデスレイザーの両腕を斬り飛ばした。

「あっ!？」

マニピュレーターに掴んだままのビームシザーが、地面を滑っていく。

それに一瞬でも視界を傾けてしまったせいで、サツキーはレガンダムの次の挙動を見逃した。

返す刀で振り下ろされるビームサーベルは、確かにガンダムデスレイザーの胴体へ迫る――

「させない……ッ!」

寸前、レガンダムにビームと砲弾が降り注ぎ、ビームサーベルを振り下ろそうとしていた手を止めた。

上空へ跳んだセアのガンダムMK-IIが、ビームライフルとハイパーバズーカの両方でレガンダムを攻撃している。

『チツ、ザコが粹がつてんじゃねえよ!』

「ガンダムはガンダムデスレイザーを蹴り飛ばし、上空にいるガンダムMK-IIに視界を向け直す。」

『撃ち落とせフィンファンネル!』

制御を切られて地面に落ちていたフィンファンネルが再び動き出し、ガンダムMK-II目掛けて一齐にビームを放った。

セアは瞬時にアームレイカーを引き、ガンダムMK-IIを飛び下がらせつつ着陸しようとする、

「っ!」

が、その着地点には花畑がある。

「……は、ダメツ……!」

強引にバーニアを噴かせて、どうにか花畑から離れた位置にまで移動しようとするが、不意にスラスターの蒼炎が停止した。

コンソールには、ガンダムMK-IIのバックパックや足回りに『Over heat』の赤い表示がいくつも表示されている。

「オーバーヒート!?!」

スラスターを連続して酷使したために放熱が追い付かず、オーバーヒートを起こしてしまったのだ。

こうなると、バーニアが放熱完了する一定時間、スラスターを使った機動が出来なくなってしまう。

コンマ一秒が生死を分かつ戦闘中において、これは致命的なミスだ。

強引に方向を変えたせいで、ガンダムMK-IIは姿勢制御も出来ないままに地面に不時着する。

サザビーからの激しい攻撃を凌ぎつつ、シャルルは僚機確認の画面を開く。

コーダイのキャノパルドは大した損傷もなく善戦している。

問題は、女子二人の方だった。

サツキーのガンダムデスレイザーは両腕を失って戦闘力を失い、セアのガンダムMK-IIは何が起きたのかその場で倒れてしまっている。

その隙を見逃すレガンダムではないだろう。

事実、レガンダムはフィンファンネルを呼び戻すとビームサーベルを構え直して、どちらから仕留めようかと首を左右に振っている。

「ちくしょつ、ドガドガ撃ちまくりやがって！底無しかよー！」

コーダイはサザビーの絶え間の無い攻撃に悪態をついている。

ここで背を向けてレガンダムの方へ向かえば、後ろから撃たれるか、或いはコーダイ

が一人でサザビーを食い止めなくてはならなくなる。

しかし、ここで足を止めているわけにはいかない。

「ーシャルルーハバキリーーの思考が高速で回転しーこの事態を切り抜ける策を打ち出すーしかし不確実ーそれにコーダイを混乱させるかもしれないーハッキリ言つて”博打”ー」

中途半端なことをしている自分が気に食わない。

「ーその信念がシャルルを後押しし、ついに踏み切った。

「おい聞こえるかコーダイツ！」

「ああ!?!なんだっ！」

「『コンビネーションブラスト』だ！行けるな!?!よし行くぞ！」



「おうよっ!」

シャルルの口から放たれたそれを聞き、コーダイは反射的に了解を返した。

その了解を確認する前に突出するジンライー否、シヤア専用ザクの後ろ姿を見て、コーダイはハツとなった。

「なんで、シャルルさんが俺達の作戦コードを……?」

コーダイの言う俺達ーフォー・アルディナでは、作戦を迅速に進行させるための作戦コードを用いていた。

当然ながら、アルディナ以外のメンバーでは知るはずもないはずだが……?

それに、あのシヤア専用ザクが一瞬、ハバキリのジンライにダブって見えたのは気のせいかな?

「(……それは後だ)」

今それをシャルルに問い質している暇はない。

コーダイはターゲットロックをマニュアルに切り替え、ホロスコープを目に通しながら、照準をサザビーに合わせていく。

「ハー……ッ、ハー……ッ、ハー……ッ」

シャルルのシヤア専用ザクがサザビーからのビームの嵐を掻い潜る中、キャノパルドがサザビーをロックオンする。

その射線上にはシヤア専用ザクがいるがー

「……行けよオオオオオツ!!」

コーダイは構わずにトリガーを引き絞った。

瞬間、ビームライフル、ハイパーバズーカ、肩部キャノン一対、合計四門の火器が放たれる。

当然、それらはサザビーよりも前に先にシヤア専用ザクに向かう。

「最高のタイミングだぜ、コーダイ」

だが、シヤア専用ザクは不意にその場からジャンプし、ビームと砲弾を飛び越えるようにやり過ごす。

『は、はっ!?!』

ジャンプしたシヤア専用ザクに気を取られたサザビーは、続いてやって来るビームと砲弾への対処が遅れた。

結果、一筋のビームと三発の砲弾はサザビーのビームショットライフル、左肩、ボディを直撃していく。

だが、サザビーはネオ・ジオン総帥たるシヤア・アズナブルの専用機だ、多少の被弾ごときで戦闘不能になるほどヤワな機体ではない。

『ぐっ、そんなもんで……っ!?!』

重砲撃機たるキャノパルドの火力を受け切れたことは称賛に値しても良いだろう。だが、これで終わりではない。

仰け反った姿勢を正そうとするサザビーだが、そのダイバーの視界は蛍光ピンク色の光に覆われる。

何かと思つてモニターを凝視すると、

『……え？』

グポウオン、とシヤア専用ザクのモノアイが、文字通り目を光らせていた。

その左手でヒートホークを振り下ろしながら。

『あ、ちよ、やめ』

熱プラズマをサザビーの頭部コーコクピットに叩きつけられ、中にいたダイバーは何かを言い終える前に焼き潰された。

サザビー、撃墜。

コンビネーションブラスト。

フォース・アルディナのメンバーの中で熟知し合っていたその作戦コードは、前衛が敵機の目隠しとなり、後衛が前衛と敵機の対角線上から射撃、それに合わせて前衛が上方へ回避行動を取り、射撃を敵機に喰らわせる。

その射撃で敵機が撃墜するならよし、回避されたとしても上に跳んだ前衛が上空から

再度接近して近接攻撃を敢行、その間にも後衛がさらに援護射撃で追い詰める、と言う三段構えの攻撃だ。

サザビーの撃墜を確認したシャルルはすぐにシャア専用ザクのスラストターを飛ばし、反対側にいるレガンダムの方へ急ぎ、コーダイのキャノパルドもそれに続く。

あのガンダムデスレイザーとか言うふざけた改造機は両腕を失っており、まともに攻撃は出来まい。

そうなれば優先的に撃墜すべきは、まだ五体満足の素組みのガンダムMK-IIだ。

レガンダムは、スラストターのオーバーヒートを起こしてまともに動けないガンダムMK-IIの方へ狙いを付けるが、

「させる、かあつー！」

不意に、背後から蹴り飛ばされた。

それは、両腕を失っているにも関わらず突っ込んで来たガンダムデスレイザーだ。

『ハのっ、しっハハハ！』

レガンダムは起き上がるなり矛先をガンダムデスレイザーに向け直そうとするが、標的にしたその姿が風景に溶け込むように消える。

ガンダムデスレイザーが起動させたミラージュコロイドだ。

『あ?!どこいった……んがっ!』

消えたと思つた次の瞬間には、脇腹を蹴り飛ばされ、仰け反つたところに体当たりを喰らわされる。

『いい加減に、うぜえッ!』

苦し紛れに振るつたビームサーベルだが、体当たりを仕掛けたために至近距離にいたガンダムデスレイザーへ、まぐれ当たりながら直撃を与えた。

「あぐっ、あはっ!」

メガ粒子の波動がコクピット内にまで干渉していた。

モニターはスパークと共に弾け飛び、その衝撃がサツキーをコクピットの壁に叩き付ける。

ダイバーの制御を失つたガンダムデスレイザーは仰け反つたまま倒れる。

『死ねよやあ!』

再三四度、ビームサーベルを振り下ろすレガンダム。

「……っ!」

ダメージを受けた身体に鞭打つてサツキーはアームレイカーを握り締め、ガンダムデスレイザーのアクティブクロークを閉じ、レガンダムのビームサーベルを弾き返す。

1/144スケールと比べてもパーツそのものの質量や密度は桁違いな1/100スケールのパーツだ、そう簡単に破られはしない。

『このっ、ふざけた装甲しやがって!』

レガンダムは何度も何度もビームサーベルをアクティブクロックへ叩き付ける。

一撃一撃を受ける都度に耐ビームコーティングが剥がれ、装甲が斬り裂かれていく。

いくらスケール違いとは言え、限界はある。

次の一撃を受けてはもう保たないだろう。

しかし、その寸前でレガンダムはその場から飛び下がり、そこに砲弾が通り過ぎた。

「生きてるかサツキーさん!後は俺らに任せろ!」

コーダイのキャノパルドだ。

肩のキャノン砲で牽制してくれたようだ。

シャルルのシヤア専用ザクも一緒だ。

『チツ、あのバカもうやられたのかよ!』

あのバカ一僚機であるサザビーのことを罵りつつ、レガンダムはフィンファンネルを呼び戻し、シヤア専用ザクとキャノパルドの二機にビームを撃ちまくる。

シヤア専用ザクはビームとビームの間を掻い潜りながらも、ザクマシンガンを撃ち返

し、キャノパルドは脚部のミサイルポッドを全弾発射、空になったポッドはすぐに切り離してデッドウェイト化を防ぐ。

対するレガンダムもザクマシンガンの銃弾を避けつつ、四発のミサイルは頭部のバルカン砲で撃ち落としていく。

爆破されるミサイルの爆煙に紛れるように、シャア専用ザクはヒートホークを構え直しつつ、接近を試みようとするものの、フィンファンネルによる手数のある攻撃を前に踏み込めずにいる。

「……ま、苦戦してるフリでもしといてやるか」

「……その実、わざと踏み込んでいないのだが。」

コーダイの方もシャルルの意図に気付いたらしく、遠距離から散発的な砲撃を繰り返すだけだ。

『避けてばっかいいえで勝負しろよ、勝負！』

攻撃が当たらないことに苛立ち始めたのか、レガンダムの攻撃が乱雑になる。

シャルルはそれを見計らっていた。

「今だ、セアさん！」

セアへ向けた通信。

その刹那、

レガンダム背後からビームサーベルを突き刺した、ガンダムMK-IIの姿があった。

「後ろからって言うのは気が引けるけど、ごめんね」

そう小さく呟きつつ、セアはビームサーベルを引き抜いた。

コクピットブロックをまともに貫かれたレガンダムは、ツインアイの光を消して、その場で崩れ落ちた。

レガンダム、撃墜。

不埒な乱入者を討ち倒したのはいい。

だが、

「お花畑、めちやくちやになっちゃった……」

セアの隣にいるジルが、物悲しそうに零した。

色とりどりだった場所は踏み潰され、焼き払われてしまっていた。

「……派手に戦っちゃったからね」

サツキーも言葉の端を落とす。

「あいつらが変な乱入さえしてこなけりや、こんなことには……っ」



コーダイは苛立ちに齒軋りする。

「これ、もうバラの花は集められないよね……」

セアも、望まぬ過程による結果とは言え、自機が踏み荒らしてしまった花々を見下ろす。

この無残な光景が、彼らの沈痛さと悲痛さを表していた。

「……いや、そーでもねーな」

ふとそう口にしたのはシヤルル。

その言葉に耳を傾ける他の四人。

「ほれ、あそこ」

シヤア専用ザクの左の人差し指が、ある方向——正確には、先程までセアのガンダム MK-II がオーバーヒートを起こしてしまった地点の、近く。

そこだけ、無事な花畑があった。

「おつ、運良く生きてるのがあるじゃねえか」

コーダイもシヤア専用ザクの指す先を見やる。

「なんであそこだけ？全滅しちゃったんじゃ……」

サツキーはその方向を見て目を丸くするが、ジルがその理由を答えてくれた。

「セアが守ったんでしょ？」

「…………え？」

どういふことかと、セアはジルの顔を見降ろす。

「あの時、お花畑を潰さないようにって」

そう。

セアがガンダムMK-IIを着地させようとした時、花畑を潰さないようにわざと離れた位置まで強引に機動したのだ。

そのために、スラスターがオーバーヒートを起こしてしまったのだが、結果オーライだ。

「…………そうだった？」

セアとしては無意識の内の行動だったのか、今ひとつ的を得ていないような顔を浮かべている。

だが、彼女のおかげで、まだミツシオンを続けられる。

しかし、不意にコンソールがまたガンプラの接近を告げてきた。

「さっきの奴らのお仲間か!？」

コーダイは即座にキャノパルドのビームライフルを構えさせて、その接近反応の方へ向ける。

空の向こう側から現れたのは、ライトブルーとレーシンググリーンのツートンカラー

で塗装された可変機——ゼータプラスの改造機だった。

「ゼータプラスか……」

厄介な相手だ、とシャルルは舌を打つ。

すると、突然ゼータプラスはMS形態へ変形し、その場でホバリングする。

「……なに？襲ってこない？」

ガンダムデスレイザーのアクティブクロークを開きながら、サツキーはゼータプラスの挙動を注視する。

数十秒のホバリングの後、ゼータプラスは再びWR形態へ変形し、旋回してその場から離れていった。

「……何もしないで、帰って行ったね」

ゼータプラスが水平線の向こう側に消えるのを見送るセア。

「どうやら、俺が手を出す必要も無かったな」

ルガンダムとサザビーの二機が撃破されたのを見て、ゼータプラス——機体銘『ゼータプラスラファール』のダイバーはすぐに踵を返して、元いたフォースネストの方へ戻る。

その途中で長距離通信が届き、彼はそれに応答する。

「こちら、コードネーム『フリーユージェル』、どうぞ」

顔の見えないサウンドオンリーの通信から、男性の声が発せられる。

『サヤ君、今は大丈夫かね？』

「ご心配なく、自由飛行中ですので」

『そうか。では早速だが、良いニュースと悪いニュースの両方がある。どちらから先に聞きたい？』

「ローランさん、またそんな通信士の真似事のようなことを……じゃあ、良いニュースからで」

しかし、良いニュースと悪いニュースの両方があり、どちらから先に聞きたいかを問われた時、良いニュースとは『最悪よりはマシなニュース』であり、悪いニュースとは『控えめに言って正真正銘最悪のニュース』に限られているのだが……とサヤは心底で皮肉る。

『最悪よりはマシなニュースではないぞ、私達にとつては喜ばしいことだ』

そんなサヤの心底を読み取ったのか、あるいは同じことを考えていたのか、通信先の相手は苦笑する。

『まず、君が先日にな捕したタカギ氏から有力な情報を吐き出してもらった。おかげで

反E.L.ダイバー勢の拠点のいくつか割り出すことが出来た。近々にそれらの掃討、制圧戦を行うだろう』

「喜ばしい……かどうかは複雑ですけど。それで、悪いニュースの方は？」

『……………』

通信越しに間の置いた溜息が聞こえる。

伝えることも躊躇うほどの最悪なニュースなのだろうか？

『……………』

数秒の間を置いてから、『悪いニュース』の内容を聞かされたサヤは、思わずコクピットの壁を殴った。

セアが守った花畑から、残るバラの花8本をしつかりと採集し、近辺に停泊しているスーパースニックトランスポーターにバラの花20本を納品させて、ミッションはクリア。

「さて、シャルルさんよ。どう言うことか説明してもらおうじゃねえか」

ベース基地に帰還してきたシャルル、セア、コーダイ、サツキー、ジルの五人。

その構図は、壁を背にしたシャルルと、それに向き合う他四人と言う、文字通りの四

面楚歌。

「なんであんたが、俺やハバキリしか知らないはずの作戦コードを知っていたのか、をな」

「わーかつてるよ。ここまで来て逃げ隠れもしねーって」

元よりそのつもりだったからな、とシャルルは腹を括り、昨日までの全てを明かした。『ハバキリ』のログデータを初期化してからは、『シャルル』と言うネカマとして行動していたこと。

サツキーとは、シャルルとして行動している時に知り合ったこと。

シャルルのままでコーダイやセアの前に出るのを避けていたのは、二人を混乱させたくなかったから。

サツキーには、自分は元々ハバキリと言うSランクのダイバーとして活動していたことを伝えようとしたが、そこにジルとセア、コーダイがやって来て、有耶無耶になっちゃったこと。

作戦コードも、自分がコーダイと同じフォースにいたのだから知っていて当然。

これが、昨日までの全てだ。

「アホだろお前」

返ってきた開口一番が、コーダイのアホ呼ばわりだった。

「なあんでそんなこと黙ってたんだか。正直に言ってくれりや、ネカマで行動することだつて分かつてやれたのによ」

続いて、サツキーからは呆れたような溜息。

「やつぱりそうだったんだ。全部納得」

セアは困惑したような顔をするが、結局の要点を訊いた。

「えーつと、シャルルさんがハバキリくんで、ハバキリくんがネカマとして行動していったつて言うのはびつくりしたけど……それで、”君”はこれからどうするの？」

彼女が訊ねるのは、これからのことだ。

このままシャルルのままでいるのか、ハバキリに戻るのか。

「オレは本来のハバキリに戻ります。中途半端なことをしてる自分が気に食わなかったんで」

「そっか。それが訊きたかったの」

セアもネカマがどうだとは深く考えていないようで、これからも彼は『ハバキリ』であることが分かつて、納得したようだ。

「……ねえ、ハバキリ」

そして最後にジル。

「おー、なんだジル？」

彼女も何か訊くのかとシャルルは身構えるが、

「シャルルって、誰？」

その場にいた全員がずっこけた。

【次回予告】

ハバキリ「と言うわけで完全復活、スペシャルで二千回のオレ様が、地獄から舞い戻ってきたぜ」

コーダイ「炭酸かデユオかハツキリしろい」

セア「そうそう、Dランクになったらフォースって言うのを組めるようになるんでしょう？ここにいてるみんなで組めないかな？」

サツキー「それ、あたしも同じこと考えてました。せつかくだからさ、みんなでフォース組まない？」

ハバキリ「っても、ジルはガンプラ持つてねーから、本格的なフォースバトルをする



には、後一人くらいは欲しいな」

ジル「わたしは、ダメなの？」

コーダイ「ジルちゃんはアレだ、俺らのマスコットのな」

セア「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション

『七星エクリップス』」

サツキー「フォース名はどうしよっかなあ……」

## 9話 七星エクリプス

それぞれ、ネオアメリカンコーヒーと鉄ノ華を啜る仮面の獣人とトラちゃん。

やべー奴が椅子の上に立って『ガンダム草生エルの構え』を取りながら延々とみちちゃんを崇め称える演説を続けているが、もはや店内に流れるクラシック音楽の一部と化している。

「しかし、『E.L.ダイバー動乱』の終息の立役者である彼らが『ゲリラ』に身を落としているとは思わなんだ」

仮面の獣人は、脳裏に毛先に赤みを帯びた黒髪に、時代遅れの番長のような学ランを着込んだ女性ダイバーを思い浮かべる。

「彼らだけではないぞ、ロイヤルナイツやトレイルブレイザー、サンダーバード……彼奴らと少なからず関わりのあるダイバーのごく一部もが、『ゲリラ』として行動していることがある」

トラちゃんがそう補足する。

なるほど、確かに一介のフォースでしかないのなら、『ゲリラ』の正体の尻尾も掴めないわけだ。

「ふむ……」

仮面の獣人はマスクのフィルターの下で思案を浮かべる。

「何を考えている？」

トラちゃんがそう問い掛けてから数秒の間が必要だった。

「彼ら……『ゲリラ』の面々は、E.L.ダイバーを守るために行動しているのだろうか？だが、反E.L.ダイバーの勢力は……今でこそ沈静化しているが、少し前までは衰えるどころか、叩かれては硬くなる鉄のような勢いだっただけだ。活発化する都度に『ゲリラ』が火消しに回り、またそれ以上に活発化……そんなイタチごっこを繰り返すことが、『ゲリラ』の目的ではないはずだ。……物事の”落とし所”が見えんのだよ」

過程と行動理念は分かる、しかし最終目標が何なのか分からない。

ただ理由もなく、自分に関係のない者のために矢面に立とうとする彼らの思惑が見えない、それが分からないほど彼らは賢く無くないはずだ、と仮面の獣人は言う。

それを聞いて、トラちゃんは「くくっ」と低く笑った。

「貴殿はやはり優秀だ、そこまで読み考えているとはな」

「私はただ疑問を口にしたに過ぎんだが……思わず射ってしまったか？」

「フツ、糸口と言うものは得てして、思わぬところから引き当てるものだ」

これだから不確定要素は面白い、とトラちゃんはお猪口に酒を注ぎ直す。

「『ゲリラ』の最終目標だがな、それは……」

トラちゃんがそれを言いかけた時、

「御神体そのものであるみくちゃんを洗脳し、意のままに操るフォース・スピリッツの愚者どもは、地獄に……」

やべー奴がその先を言おうとした、その刹那

「使いじゃねえええええエエエエー……！！！！」

どこからかそんな怒号が聞こえたと思えば、  
何者かがバーの床下をブチ破って現れた。

アメノ・ハバキリがシャルルとして活動していたことを、彼自身の口から明かされて  
数日。

ハバキリ、セア、コーダイ、ジルの四人の中にサツキーが加わるようになり、このメ

ンバーと一緒にになってミッションをいくつこなし、一度は初期化したハバキリと、それに合わせたかのようにセアのランクが『D』にアップした。

そんな数日後の金曜日の、学園での昼休み。

高等部のクラスの教室で、セアとカナデは机を向かい合わせて昼食を摂っているところだ。

「最近何だか嬉しそうだね、セア」

「……数日上機嫌な様子のセアを見て、カナデはそう声を掛けた。

「そうかな？」

「そりやあもう。週明けの月曜日の時なんか、彼氏にフラレたみたいな顔してたのに」

「そ、そんな顔してたの、私……?」

セア自身、ハバキリが自分から離れていった時（それだけ見れば彼氏にフラレたと言えなくもないが）はショックを受けたものだが、そこまで分かりやすく顔に出ていたらどうかと思いい直してみても、

「……うーん、確かにそうだったかも」

思い当たる節しか無かったことに苦笑するしかない。

「でもまあ、何かは分からないけど、悩み事が解決したわけだ」

「一応、解決したってことになるのかな？ 変な心配させちゃってごめんね、カナちゃん」

「心配してたことに変わりはないけど、そんなに深くは捉えてないよ。アメノくんに言いたいことを言っただけだからね」

その週明けの月曜日の昼休みの屋上で出来事を思い浮かべるカナデ。

あの時の彼ーハバキリからは、もう一度やり直したいと言う気持ちと、やり直したところで結果は同じだと言う諦めがぶつかり合って、半ばどうでも良くなったように感じられた。

そんな彼に、カナデは何かしたわけではない。

ただ「やめたいならやめればいい」「それでもセアとは友達でいてほしい」と言っただけに過ぎない。

結局のところ、ハバキリは自分のことを自分でケリを着けたのだ。

その彼が自分の決着を着けた結果、セアの悩みも解決したのなら、それでいいかとカナデはお茶の詰まったペットボトルを傾ける。

その屋上では今……

ハバキリが一人。

急所をまともに打ち込まれて蹲っている男子が一人。

後頭部をコンクリートの壁にぶつけて気絶している男子が一人。

そのハバキリに首を握り締められて弱々しく抵抗している男子が一人。そして、床にぶちまけられたハバキリの弁当箱とその中身。

「なーお前ら……」

いつものアメノ・ハバキリにしては珍しく、「キレて」いた。

「テラスの兄貴であるオレに向かつて「妹さんを俺にください」って正面切つて土下座しに来た、その硬化する前のパテ並みの根性だ・け・は・認めてやらんでもねーらしーかな」

だけは、の部分だけを強調するハバキリ。それ以外は認めないどころか門前払いと言うのは言わずもがな。

「でもなー……」

首を握り締めている男子を振り下ろし、顔面を床に押し付けてやる。

「いくらテラスの作った弁当が食いてーからつて、三人がかりでパクろーとした挙げ句台無しにするつてのは、ちよーりーつとオイタが過ぎるんじゃないのか、あ?」

ハバキリがキレている理由とは至極単純。

妹が作ってくれた弁当をーひいては自分の食事をーアメノ家の生活費をードブに捨てたこと、だ。

「テラスがこの弁当を作るのに、何円掛かつてると思つてる?」

三人ともそれに答えることが出来ないと分かつていて、そんな間を投げ掛けるハバキリ。

「カネさえ払えば温めてから差し出してくれるコンビニ弁当じゃねーからな？」

不意に、蹲っていた男子が立ち上がり、ハバキリの背後から殴り掛かろうとした瞬間、彼の顎に、ハバキリの上履きの踵ー振り向き様の回し蹴りが炸裂していた。

「オレの昼飯代なんぞはそれこそカネを払えば済むけど、てめーらがテラスの睡眠時間と労力を返してくれるってのか？」

倒れた頭を踏みつけてにじり、にじり、と踵を振じ込む。

「てめーらは包丁で指を切ったことがあるか？跳ねた油で顔を火傷したことがあるか？玉ねぎを炒めて目に沁みたことがあるか？水分が多くてネツチャネツチャになった米を残さず食べたことがあるか？表面が真っ黒になったハンバーグを飲み込んだことがあるか？」

あるわけねーよな、と吐き捨てる、

「ありがたみも分からん畜生はその辺の雑草でも食つとけ！んでもって雑草を食うよーなド畜生に妹はやらん！！んーなド畜生以下に強制はしねーからあの世に行つて帰つてくんない！！」

その怒号と共に、もう一度顎を蹴り飛ばした。





「人が作った弁当を台無しにするよーなアホにテラスの世話になる資格はねーよ！病院にでも行ってバカさを治してもらえばいいんだよ！」

「私のことを思ってくれてるのは嬉しいですけどね！だからって三人まとめて病院送りにするのではないでしょう！あと、病院ではバカもアホも治せません！」

妹思いの末にキレた兄と、その兄を怒り叱る妹。

とは言え、生活指導室前でギャーギャーと騒いでいれば、当然室内にいる者の耳にも入ってくるわけで。

「お前ら！兄妹喧嘩なら家でやれ！それと兄貴の方、ちよつと来い！」

生活指導員に呼び付けられ、ハバキリは渋々と、本当に渋々と生活指導室に入る。

「あーもー、昼から最悪だったぜ……」

生活指導員にこっぴどく言われた上に頬に拳骨を頂戴したハバキリは、下校の帰り道にガンダムベースに立ち寄り、そのままGBNへログイン。

もちろん、金髪碧眼の少女『シャルル』としてではなく、本来の自分に近い容姿と、青と黒を基調とした軽装のダイバールックだ。

既にベース基地のエントランスロビーで待っていていた、同じ学園のセアとコーダ

イ、E.L.ダイバーのジル、最近になってよくつるむようになったサツキーの四人。

「そりやお前、三人も病院送りにすりやそうなるわな」

久々にやりやがったなおい、とコーダイはおかしそうに笑う。

「中等部の男子が三人病院送りになつたつて聞いたけど、ハバキリくんが原因だったの？」

高等部の生徒であるセアは詳細こそ知らないものの、学園に救急車が来校して来たのを聞いて、何かが起こつたとは判断していたが、まさかそれが自分のよく知る人物によるものとは予想出来るものか。

「そいつらが、オレの昼飯をパクろーとしたんですよ。食い物の恨みつてのはどー言うものかを身を持って教えただけなのに、解せぬ」

オレ何も悪くないのに、とハバキリは拳骨を頂戴した方の頬を擦る。

そんな彼の目の前に、ジルが歩み寄る。

「ハバキリ。悪いことしちゃ、めっ」

「……ハイ、スイマセン」

よりにもよつて、ジルにまで叱られる始末。

とは言えハバキリとて自衛権を行使したに過ぎないのだが、さすがに「やり過ぎた」とは思っていないもない。

一人は今なお意識不明の重体、一人は窒息で心肺停止寸前のところにAEDで命拾いし、一人は顎関節が損傷して回復までともに動かせなくなったのだ。

状況が状況（そもそもの被害者はハバキリの方）だっただけに、辛うじて停学だけは免れたのだが、これからしばらく、ハバキリは教員達から目を付けられる日が続くだろう。

「まあまあ、自宅謹慎にならなかつただけ良かったんじゃない？」

フオローのつもりなのか、サツキーはそれ以上その話題に触れようとはせず、GBNに関する話をする。

「シャルル……じゃなくて、ハバキリもセアさんも、この間でDランクに上がったでしょう？だからさ、ここにいるみんなでフォース組んでみない？」

現在の彼らのランクは以下のようなになる。

ハバキリ？ D（元はSランク）

セア？ D

コーダイ？ S

ジル？ D

サツキー？ C

そして、フォースを結成、もしくはフォースに参加するのに必要な条件は、Dランク

以上であること。

ここにいる五人ともDランクに到達しているので、フォースの結成、参加は可能だ（Eランクダイバーであり、なおかつ自分のガンプラを持たないジルのランクアップに関しては、他のダイバーと共にミッションに参加、クリアすることでポイントを得ている）。

サツキーのその提案を聞いて、ハバキリは待ったをかけて、コーダイに向き直った。

「オレはアルデイナから脱退してるからいいけど、コーダイはどーするんだ。お前、まだアルデイナに所属してるんだろ？」

そう。

ハバキリは正式にフォースを脱退しているため、今現在はフリーのダイバーでしかない。

だが、コーダイは今でこそフリーで活動しているものの、既存のフォースに所属していることに変わりはない。

ハバキリからそう言われたコーダイは、何故か困ったように後頭部を掻く。

「……あー、そっか。あの時にはもうハバキリはいなくなってたから、知らないんだっか？」

「？」

彼が一体何を言うのかと耳を傾けるハバキリ。

その内容は、彼自身の耳を疑うものだった。

「ハバキリがフォースを抜けてから四日くらいだっけか……『トーシローがいきなりフォースを解散させた』んだよ」

「……は？」

ハバキリは聞き違えたのかと思ひ直す、聞き違いようが無かった。

トーシローがいきなりフォースを解散させた。

どうということかと、ハバキリはコーダイに続きを催促する。

「理由は分らん。通知が届いてると思つて確認したら、もうフォースが解散になつてたからな。トーシローに直接連絡取ろうにも、拒否される一方だ」

「……なに考えてんだ、あいつ」

互いに額を突き合わせて思案を回す。

女子三人は、二人で何か大事なことを話しているようだと言つて遠巻きから見守つている。

「オレがアルディナから抜けてから、何か言つてなかつたか？」

「特に何も……あーいや、んーとな……何か、「もう、こうするしか無いのか？」とか言つてた気がする。フォースを解散するしかない、つて意味じゃ無さそうだけどな」

「……マジでなに考えてんだ、トーシロー」

ハバキリにもコーダイにも、思い当たる節が無い。

これ以上はただの憶測にしかならないと踏んで、コーダイは話を元に戻す。

「ま、トーションローのことは追々調べりゃいい。とにかく、今は俺もフリーってわけだからさ、このメンバーのフォースになるのは全然オツケーだ」

遠巻きから見ている女子三人の方に意識を向け直して、フォースに関する話を続ける。

「……五人いるって言っても、ジルが自分のガンプラを持ってねーんだったな」

ハバキリも、納得いかないながらも意識を切り替えて、このメンバーにおける懸念点を挙げる。

彼の発言によって、ジル以外の四人の視線が彼女に向けられる。

「ガンプラが無いと、ふおーす?に入れないの?」

小首を傾げながらジルは訊ねるが、すぐにコーダイが補足する。

「いや、ガンプラが無くてもフォースに入ることは出来るんだよ。そこは心配しなくて大丈夫な」

けど、とハバキリが言おうとしていた懸念も付け足す。

「フォース関連のバトルって、基本的に五人制なんだよな。このメンツでガンプラ持つてるのは、俺、ハバキリ、セアさん、サツキーの四人だろ?」

「あ………実質、一人足りないんだね?」

何を懸念しているのかを、セアがすぐに読み取った。

「つてことは、あと一人勧誘しないといけないんだ？」

サツキーもその懸念に気付く。

「まー、その辺はすぐに解決出来る方法があるわけじゃねーし、のんびり募ればいーだろ。頭数だけ慌てて揃えて、肝心のメンタルがあんぽんたんな奴だったら目も当てられねーしな」

「この間の」お気持ち警察「みてーな奴らとかな、とけつたいな具体例を挙げるハバキリ。」

確かに、あのような連中は必要ない。むしろこちらからキックしてブロックもしてやるくらいだ。

「じゃあ、フォースのことも考えながら、今日のところは普通にミッションつてことで」最後にコーダイが締めてから、今日のミッションはどうしようかとミッションカウンターへ向かう一行。

人の想いは、弱くて小さくて、不確かなもの。

しかし、そんなちつぽけなものも集まり、繋がりが合えば、強くて大きくて、確かなも



のになる。

確かなものーそれは、己の”魂”。

肉体があろうとも、無かろうとも、自分は確かにここにいるのだと、感じる事が出来る。

感じることは出来る。しかし、それは自分にしかわからない。

誰かにも、この喜びを分かってほしい。

ならば声を上げるのだ。

産声を以て、自分はここにいるのだと。

”魂（スピリッツ）”に、”意思（インテンション）”を乗せてーーー。

日の落ちた密林の中、黄土色の軍勢が、有機的な一つ目を光らせながら行列となって進む。

手にしているのは、鬼の金棒の形に似たビームライフル。

『G』に登場する量産（増殖）機、『デスアーミー』の軍団だ。

地球に落ちた『デビルガンダム（アルティメットガンダム）』が散布するDG（U）細胞によってほぼ無限に生み出される機体であり、単体であれば正規軍の量産型MSに譲

る程度の性能だが、デスアーミーの恐るべき点はその何十、何百にもなる数の暴力にある。

不意に、機械的に行軍を継続するデスアーミー軍団を照らす月明かりが陰った。

デスアーミーの一機が、何事かとその陰に目を向ける。

月を覆い隠しているのは、黒い”何か”。

その黒い”何か”が、バサリと開いた。

次の瞬間には、その黒い”何か”は緑色に輝く三日月を携えながら猛スピードで降ってきた。

一閃。

薙ぎ払われた三日月に、デスアーミー軍団はバラバラと壊れていった。

「これでよし、っと」

黒い”何か”ーガンダムデスレイザーを着地させたサツキーは一息つく。

ミッシェン名『デビル包囲網を突破せよ』

原典作品は『G』に当たり、南米ギアナ高地の広大な大自然の中で繰り広げられる戦鬪系のミッシェンであり、弱小ながらも大量のデスアーミーを全機撃破し、最後にボスユニットであるデビルガンダムを撃破すればクリア、と言うものだ。

サツキーは周囲に他のデスアーミーの反応がないことを確認してから、僚機へ通信を

繋ぐ。

「こつちはもう片付いたよ。他のみんなは？」

最初に応答したのはハバキリ。

「おー、こつちも終わってるぞ」

一匹残らずスクラップだぜ、と機能停止したデスアーミーの首を蹴り飛ばすのは、シヤア専用ザクではなく、ハバキリ本来の愛機、ジンライだ。

以前のジンライとは少しだけ外観が異なっており、パーツの一部が『ジンハイマニューバ』の物に取り換えられている。

元々が同じジンであるため、パーツの互換性を活かしたミキシングだ。

機体銘はジンライ改め、『ジンライ改』

彼の次に応答するのは、コーダイ。

「今忙しくてな……ほい来たつ、ストラライク！」

高台の上にいるコーダイのキャノパルドは、タイミングを計っていたようで、それに合わせてコーダイはスイッチを押し込んだ。

すると、高台に近付こうとしていたデスアーミー軍団は突如として、爆炎に呑み込まれた。

なんの事はない、デスアーミー軍団の進行路に地雷をいくつか仕込んでいただけだ。

「はっはーっ、これで済むなら安いものだ、ってな！」

高笑いを上げながら、デスアーミー軍団の撃破を告げるコーダイ。

最後に応答するのはセアとジル。

「ちよ、ちよつと待つてねっ！」

セアのガンダムMK-IIはビームライフルで一機ずつデスアーミーの数を減らしているのだが、さすがに数が多いので時間が掛かっているようだ。

「今は話しかけないで、って」

代わりにジルが代弁して応答する。

現状、ハバキリ、コーダイ、サツキーの三人は自分の持ち場のノルマは達成したが、セアだけが少し手間取っている。

「あたしが助けに行こっか？」

サツキーは自分がセアの援護に回るべきかと進言するが、先にハバキリがそれを遮る。

「いや、オレが片付けるわ。どーせならライフルも使い切っておきてーしな」

そう言うなりジンライ改は持ち場から飛び立ち、セアが相手になっているデスアーミー軍団の横腹にアサルトライフルを撃ち込んでいく。

ハバキリの加勢によってデスアーミー軍団は瞬く間にその数を減らされ、ようやくセ

アの持ち場も制圧する。

「ありがと、ハバキリくん」

「どーいたしました。それよりセアさん、次が本命ですよ」

弾を撃ち尽くしたアサルトライフルを捨てて、ハバキリはすぐにコンソールを打ち込む。

今回はボスユニットが予めデビルガンダムだと分かっているため、補給輸送システムを活用して、対大型目標用の火器に換装するのだ。

ほんの十数秒後に、ミデア輸送機が飛来、パラシュートに括られた武装コンテナを降下してくれる。

開封したそれから引っ張り出すのは、ザフト製のMS用無反動バズーカ砲『キャットトウス』と、マニピュレーターで保持して使用可能なように改造した三連ミサイルポッド『パルデウス』だ。

もう少しだけインターバルを置いてから、ギアナ高地の一角が盛り上がり、ガンダムタイプの機体が地面から這い出てくる。

上半身はやや着太りしたような外観だが、問題はその胴体から下。

蛇腹状の腹部に繋がれた巨大な六本の脚部と、甲殻類の鋏のような前足。

これこそが、『最強最悪のガンダム』、デビルガンダムだ。

尤も、このミッシヨンの難易度レベルは3なので、原作をそのまま再現しているわけではなく、スペックもそれほど高いわけではない。

ただ、巨体に見合う耐久値だけはある、サイクルこそ遅いもののDG細胞の自己再生によって自動回復までされるので、断続的にダメージを叩き込まなければ、いくら攻撃しても倒せない。

「イヤー、いつ見てもデカいな」

こんな怪物を前にしても、コーダイはお気楽だ。

「んじやー、サクツと終わらせませるか」

ハバキリも同じ。

「あ、セアさんとサツキーは無理しなくていいよ。めんどいところはオレとコーダイで処理するから」

ジンライ改はキャットウスとパルデユスを構え直して、キャノパルドと共にデビルガンダム目掛けて突撃する。

「だからって後ろから見てるだけってのはね、つとー！」

ガンダムスレイザーもビームシザースを軽く手遊ばせると、アクティブクロークを翻しながら、先行する二機を追う。

「私もっ……」

エネルギーの残っていないビームライフルを手放して、温存していたハイパーバズーカを手取るガンダムMK-II。

遅ればせながらセアも続こうとするが、

「……待って、セア」

不意にジルが、セアの服の裾を掴む。

「どうしたのジルちゃん？」

「ちよつと、あつちに行つてほしいの」

ジルが指差す方向は、デビルガンダムが点在する位置からややズレた場所。

あそこに何かあるのだろうか。

ジルは時々、何の前触れもなくこのようなことを言う。

それは決して、嘘や思いつきと言つたいい加減なものではない、彼女が確かに何かを感じたが故の言葉だ。

セアはジルの言葉を信じることにして、デビルガンダムへの進行方向から少しズレた方へガンダムMK-IIを向かわせる。

ジンライ改、キャノパルド、ガンダムディスプレイザーの三機がデビルガンダムとの戦闘を開始すると同時に、ギアナの地中から緑色の蛇腹状の装甲の先に、ガンダム頭をくつ

つけたような奇妙なユニットーガンダムヘッドが何機も現れる。

それらガンダムヘッドは、口の部分を牙のように変形させて襲いかかって来るが、  
「ほい、こいつらは俺が相手するぜ」

コーダイが迎撃を買って出ると、キャノパルドはビームライフルを連射、瞬く間にガンダムヘッドの首を貫いては機能停止させていく。

ガンダムヘッドの壁を突破、デビルガンダムへ肉迫するジンライ改とガンダムデスレイザー。

「オレが上から、サツキーは下から」

「オツケー！」

それだけで意思疎通し、ジンライ改は高度を上げつつデビルガンダムへ迫り、ガンダムデスレイザーは高度を下げつつ、やや迂回しながら接近を試みる。

ジンライ改は左手に持たせたパルデウスを三発とも一斉発射してすぐに捨てると、続いてキャットウスも発射する。

放たれた四発ともデビルガンダムに直撃するものの、これだけの巨駆ともなれば、耐久値も半端ではない。

ある程度のだメージを与えたことへの応酬は、デビルガンダムからの拡散ビームだ。

肩部の砲口から何筋ものビームが、ジンライ改を撃ち落とさんとあらゆる方向へ吐き



出される。

「よつと」

そう来ることはハバキリにも読めており、即座にジンライ改を飛び下がらせて拡散ビームをやり過ぐすと、反撃にもう一発キャットウスをぶつ放す。

デビルガンダムは頭部のバルカンを速射、キャットウスの砲弾を撃ち落とすが、その撃ち落とした砲弾の爆煙を切り裂きながら、ガンダムデスレイザーがデビルガンダムの懐へ飛び込んでいた。

「てえやああああッー！」

振り抜かれるビームシザーは、デビルガンダムの巨大な脚部を一撃の元に斬り裂く。

巨重を支える脚のひとつを失い、デビルガンダムはバランスを崩す。

足元にいるガンダムデスレイザーを睨みつけるデビルガンダムだが、畳み掛けるように砲弾の嵐が降り注ぐ。

キャットウスを連射するジンライ改と、その奥から肩部キャノンを撃ちまくるキャノパルドだ。

砲弾の嵐が藍色の空を眩く照らすその一方で、セアとジルのガンダムMK-IIは、戦場からやや離れたところであった。

そこは、ちょうどMS一機ぶんが入れそうなくらいの、ードモン・カツシュが明鏡止水の境地に至るために籠もった一滝の洞窟だった。

「この、奥」

ジルは、白刃の滝の奥に広がる暗闇を指す。

「ここに、何かがあるの？」

何が来ても対応出来るように、ハイパーバズーカをリアスカートへ納め、アイドリングストップを掛けた状態でビームサーベルを抜き、洞窟の奥へ踏み込む。

地盤の割れ目から滴る川の水が水溜りに弾ける音が、やけに大きく、不気味に反響する。

洞窟の奥行きはそれほど深くなく、すぐに広い空間が見える。

不意に、ガンダムMK-IIのセンサーが、ガンプラの反応を捉えた。

「ガンプラの反応……」

有視界でも、その青基調のトリコロールカラーの姿を捉える。

通常のガンプラと比べても頭が大きく、手足の短い、寸足らずな外観。

それがSDガンダムと言うカテゴリであることは、経験の短いセアにも理解出来た。

防衛武装のひとつなのか、それとも飾りのひとつなのか、機体の左半分を覆うような黒マントが特徴的だ。

だが、機体は見るからにボロボロで、とてもまともに戦えるようには見えない。

『……クツ、まだ追ってくる……ッ』

目の前にいるSDガンダム―機体銘『七星剣士エクシア』と呼ぶらしいガンプラは、ガンダムMK―IIへ向けて右腕に備えた、折り畳んだ剣と一体化したような短銃を突き付けた。

「っ、戦うつもり？」

セアは身構えるが、それはジルに止められた。

「セア、あの人は敵じゃない。だから、コクピットを開けて」

「え？」

今ひとつジルの思惑が見えないことを訝しみつつも、セアはガンダムMK―IIのビームサーベルを切り、彼女の言う通りに従って、コクピットハッチを開けて、生身を見せる。

いきなりコクピットを開いてみせたガンダムMK―IIを見て、七星剣士エクシアはその挙動に躊躇を見せた。

『なんだ、どう言う……？』

戸惑う相手の前で、ジルはガンダムMK-IIの開かれたコクピットハッチの上に立つ。

「そのガンプラに、『わたしと同じ人』が乗ってる」

ジルの言葉を聞いて、セアはその真意が分かるまでは黙っている。

そしてその相手の方は、向けていた小銃を下ろし、こちらと同じようにコクピットハッチを開いてみせた。

現れたのは、「二人」。

一人は蒼い髪をした、中性的な少女——と言うよりは美少年だろうか。

もう一人は、その蒼い髪の少年に抱えられた、クリーム色の柔らかな髪を持った、ジルと同じくらいい少女。

少女の方は怪我を負っているらしく、苦しげに肩で呼吸している。

蒼い髪の美少年——七星剣士エクシアを操縦しているダイバーは、ジルの姿を見て少しだけ考えるような素振りを見せてから声を返す。

「君も、E.L.ダイバーなのか？」

「うん。そう呼ばれてる」

「……良かった」

どうやら敵ではないと判断してくれたらしく、蒼い髪の少年は安堵に息をつく。

「なら分かるとは思う。……この娘も、君の”同胞”だ」

少年の視線が、抱えている少女に向けられる。

ここまでの状況を見て、セアは理解する。

ジルは、自身特有の感知能力によってあの二人——どちらかと言えば少女の方——の気配を感じ取ったのだろう。

恐らく、少年は偶発的にE.L.ダイバーの少女を発見し、保護しているのだろう。

そして、あの二人は何者かに追われているのだとも読み取れた。

「何とかして彼女をベース基地まで連れ帰らなくちゃいけない。でも外にはデスアーミー……いや、今はデビルガンダムがいるし、そうでなくてもE.L.ダイバーのアンチ勢に見つかるかもしれない」

「だから、ここに隠れていたんだね？」

ジルの隣に立ちながら、セアが話に加わる。

彼女の問い掛けに、肯定のために頷く少年。

「大丈夫。今、外で私の仲間が戦ってくれてる。外の安全を確認したらまた戻って来るから、もう少しだけ待っていてくれるかな」

まずは外で暴れているだろうデビルガンダムを撃破し、周辺の安全を確保してから、二人を同行させて帰還する。

そう算段を立てるセア。

しかしーその算段は即座に崩れることになる。

コクピットを閉じて外に出ようと踵を返すガンダムMK-IIのセンサーが、滝の壁の向こう側から迫る敵対反応を捉えた。

「敵!？」

滝を突き破りながら、デスアーミーがガンダムMK-IIへ金棒を振り降ろしてくる。

咄嗟にビームサーベルのエネルギーを入れ直しながら振り抜き、金棒を持ったデスアーミーの腕を斬り落とし、続いて腹部にも突き入れて沈黙させる。

デスアーミー、撃墜。

だが、これだけではない。

滝の洞窟の外で待ち構えているかのように、いくつもの敵対反応ー大ききから見ても同じデスアーミーだろうエネミーが点在している。

「(私がここに入るところを見られた?)」

今まで少年が見つからずにいたのに、セアがここに来た途端敵機が襲い来ると言うことは、後を尾けられていたのだ。

「……見つかるとも時間の問題だとは、思ってたけど」

すると、ガンダムMK-IIの後ろで、中破状態の七星剣士エクシアが再起動する。

「ごめんなさい、私のせいかも」

「気にしないでいいよ。……それより、まずはここから脱出しないと」

ガンダムMK―IIと七星剣士エクシアは、同時に滝の洞窟から飛び出した。

撃ち尽くしたキャットウスを捨てて、ジンライ改はリアスカートからシースザンバーを抜き放ちつつ、ハバキリはコーダイに通信を繋ぐ。

「コーダイ、ちよつといーか？」

「ん、どうした？」

執拗に襲い来るガンダムヘッドをビームライフで排除しつつ、コーダイは応答する。

「セアさんの反応が見当たらねーんだけど、どこ行ったか知らねーか？」

そう訊ねるハバキリのコクピットのリーダーには、ジンライ改、キャノパルド、ガンダムスレイザー、デビルガンダムの四つの反応が表示されており、本来ならもうひとつーガンダムMK―IIの反応があるべきはずなのだが、それが見当たらない。

「え？ありや、いつの間に……んでも、撃墜されたとかそんな通知は来てねえな」

コーダイの方でもー索敵範囲の広いキャノパルドでもガンダムMK―IIの反応は

見当たらない。

「いくらジルちゃんでも、こんなドンパチしてる中で遊ぼうなんて思わねえだろうし……」

「ちよつと男子二人！サボつてないでこっち手伝つてくれる!？」

不意にサツキーの通信が割り込んできた。

見れば、多数のガンダムヘッドがガンダムデスレイザーに集中してビームや火炎放射で攻撃している。

「コーダイ、とりあえずセアさん探しは後だ」

「お、おうっ」

セアとジルがどこへ消えたのか気になるところだが、今はデビルガンダムの撃破が優先だ。

ジンライ改はシースザンバーを構え直しつつ加速、キャノパルドは脚部ミサイルポッドを全弾発射して、ガンダムデスレイザーを攻撃しているガンダムヘッドの群れへ命中させていく。

動きを止めたガンダムヘッドに、ジンライ改はシースザンバーを振り降ろして脳天から叩き斬り、ガンダムデスレイザーはビームシザーを一閃、ガンダムヘッドの蛇腹状の胴体を真っ二つに切断していく。



その最中に、ジンライ改のモノアイと、ガンダムデスレイザーのツインアイが交錯する。

「ハバキリ！」

「よーしー！」

サツキーの声を聞いて、何をすべきかを瞬時に読み取るハバキリ。

なおも襲い掛かるガンダムヘッドの群れは一斉にビームや火炎放射を浴びせ付けてくる。

それらを前に、ガンダムデスレイザーはジンライ改の前に躍り出ると、アクティブクロークを閉じて、敢えてビームと火炎を防いで見せる。

凌ぎ切るや否や、ジンライ改はガンダムデスレイザーのアクティブクロークを踏み台にして跳躍、ハバキリはアームレイカーを一気に押し倒して最高速度まで加速、ガンダムヘッドの群れの中を突っ切るようにデビルガンダムへ肉迫する。

ジンライ改を後ろから狙い直そうとするガンダムヘッドの群れは、アクティブクロークを開いたガンダムデスレイザーが振るうビームシザーによって首を落とされていく。

「……息ピッタリじゃねえか、あの二人」

わずかな言葉を交わすだけで緻密な連携を見せるハバキリとサツキーの二人を見て、

コーダイは苦笑する。

自分とハバキリは小学生からの友達で、それなりに付き合いが長い方だとは思っている。

それだけ付き合いが長ければ息が合うことも多いが、サツキーとはまだ会ってから一週間も経っていないはずだ。

にも関わらず、自分と同等か、或いはそれ以上の連携を見せ付けてくれる。

「なんであんなポツと出の奴が」とは思わない、むしろ「負けてはいられない」とさえ高揚する。

デビルガンダムへ突撃するジンライ改を援護すべく、キャノパルドは残り少ないキャノン砲を惜しみなく撃ちまくる。

一方の、ガンダムMK-IIと七星剣士エクシアの二機。

今しがた、予備の弾倉も含めて弾の切れたハイパーバズーカを捨てたガンダムMK-IIは、ビームサーベルでデスアーミーを斬り倒し、七星剣士エクシアもまた、右腕に備えたソードでどうか血路を切り開かんと奮戦している。

しかし、デスアーミー軍団の包囲網は決して脆いものではない、そればかりか徐々に集まってくることもあって、二機のガンダムは追い込まれつつあった。

「これ以上は、キツイか……ッ」

元より消耗していた七星剣士エクシアは、ここまで機体が保っているのが不思議なほどの損傷を負っている。

セアのガンダムMK-IIも、少なくとも回数被弾しており、そろそろシールドも保ちそうにない。

一段落が着いた、と思ったその矢先にまた現れるデスアーミー軍団が、金棒型ビームライフルを手にジリジリと迫り来る。

セアは、迫り来るデスアーミー軍団を見据えながらも思考を回す。

「(こう言う時、コーダイくんならどうする？ハバキリくんなら……?)」

追い詰められたその時、人は二つのタイプに分かれると言う。

ひとつは、焦りによって思考を乱すタイプ。

もうひとつは、逆に冷静になって冴えるタイプ。

例外として、焦りしなければ冷静にもならない平常運転を続けるタイプも存在するが、それは余程な人間に限られるだろう。

セアはどちらかと言えば――後者。

そして彼女は、優れた理解力と頭の回転の速さを持つ、秀才である。

リーダー反応に目をやれば、遠いながらもデビルガンダムの反応が見える。

そこから得られる情報を読み取れば、彼女の頭脳は瞬時に事態のリスクとリターンを打ち出し、そこから最も安全かつ効率的（ローリスクハイリターン）な突破口を構築する。

このデスアーミー軍団を二機で殲滅させるのは不可能。

ハバキリかコーダイかのどちらかに救援を頼むべきだが、二人ともサツキーと共にデビルガンダム攻略に集中しているし、何より距離があるせいで通信も届かない。

しかし、裏を返してみれば三人ともデビルガンダムの近くにいると言うこと。

ならば、一か八かーと言う博打は必要ない、もちろん不確実ではあるが博打を打つよりは遥かに安全な道……

それは、敢えてデビルガンダムの近くに接近することでハバキリ達に捕捉してもらうことだ。

そのためにはーこのデスアーミー軍団の包囲網を一点突破する他に手はない。

この間、僅か2秒。

セアは七星剣士エクシアに接触通信を行う。

「今から、11時方向に突っ切るよ」

「……そっちにはデビルガンダムがいるけど？」

「その近くに私の仲間がいるから、私達に気付いてくれるはず。それしかない」

「……了解」

半信半疑ながら話に乗ってくれたようだ。

間合いに近付いたデスアーミー軍団は、一斉に金棒型ビームライフルを向けようとして――

その瞬間、ガンダムMK-IIと七星剣士エクシアはデビルガンダムがいる地点目掛けて突撃を開始する。

不意に、キャノパルドのセンサーが反応をキャッチ、コーダイはそれを見やる。

「ん?」

その反応の方向を拡大して見ると、自分達以外の戦場が見える。

「まさか、セアさんか?」

先程から姿が見えないのは、孤立してしまっただろうか、とコーダイは読み取る。次に、キャノパルドの残弾を確認する。

肩部キャノン砲は弾切れ、ビームライフルも二発しか残っていない。

さすがにこれだけでは心許ない。

よって、コーダイはサツキーに通信を繋ぐ。

「サツキー! 悪いが5時の方向に向かってくれ! セアさんがいるかもしれない!」

「5時方向!?なんでそんなところから……うんっ、分かった!」

手近にいるガンダムヘッドを斬り飛ばすと、ガンダムデスレイザーは踵を返し、指示された方向へ飛び立つ。

一方のハバキリのジンライ改は、デビルガンダムからの激しい弾幕を掻い潜りながらもシースザンバーの腹で防ぎ、確実にデビルガンダムへと迫っていた。

迫り来るジンライ改を前に、デビルガンダムは胸部のクリアパーツに高エネルギーを集束し始める。

デビルガンダム最大の内蔵火器、『メガデビルフラッシュ』を放つつもりだ。

しかし、それこそがハバキリが待ち望んでいたタイミング。

アームレイカーを押し出して、弾幕回避のために抑えていた速度を瞬時に最速まで加速、デビルガンダムの正面へと突っ込む。

「吹っ飛べ」

その速度のまま、シースザンバーの切っ先をデビルガンダムのボディへ突き込ませた。

肉厚の刃が深々と突き刺さり、同時にメガデビルフラッシュが暴発する。

その暴発に巻き込まれる前に、シースザンバーから手を離れたジンライ改は急速離脱。

く。  
デビルガンダムはもがき苦しみながら、ジェネレーターとの連鎖爆発に包み込まれてい

く。  
デビルガンダム、撃墜。

親機とも言えるデビルガンダムの機能停止によって、デスアーミー軍団もまた、電源を切られたかのようにモノアイの光を消して動きを止めていく。

「止まつ、た？」

デスアーミー軍団の渦中に突撃してはビームシザーズを振り回していたサツキーは、突如として動きを停止したデスアーミー軍団を見て、操縦の手を止める。

「あつ、サツキーさん！」

ふと、停止したデスアーミー軍団の向こう側から、セアのガンダムMK-IIが見える。  
「セアさん、……と、そつちのエクシアは？」

サツキーの視認するモニターに、隣にいる七星剣士エクシアが映り、誰なのかと訊ねようとするが、

「すまない、ちよつと急いでるんだ。いきなりで申し訳ないんだけど、ベース基地に帰還するまでの護衛をお願いしたい」

七星剣士エクシアの方から、有無を言わせぬ内に護衛を依頼する。

「え？まあ、帰るついでに感じてみたいだし、いいよ」

ハバキリとコーダイにも伝えないと、とデビルガンダムを撃破しただろう男子二人に通信を飛ばす。

無事にベース基地まで帰還するや否や、七星剣士エクシアの少年はすぐに『ELダイバー保護管理局』に連絡し、ものの数分で彼が保護していたELダイバーの少女は、管理局によって保護された。

「では、彼女は我々が責任を持って保護致します。ご協力、ありがとうございます」

ELダイバーの少女が連れて帰られるのを見送って、少年は安堵に息をつく。

「何とか、なった……」

それもそこそこに、突発的ながら護衛を依頼した彼ら——ハバキリ達に向き直って頭を下げる少年。

「おかげで助かった、ありがとう」

「別に礼を言われるもんじゃねーさ。オレ達が帰るついでにアンタが勝手に付いてきたってだけだろ」

ハバキリの言うそれは謙遜でなく、そのままの感想だ。



「……そう言えば、頼んでおきながら名乗ってなかったね。ボクは『エミル』。フリーのガンプラ乗りだよ」

彼ーエミルが名乗ったことに合わせて、ハバキリ達もそれぞれのダイバーネームを名乗り返す。

互いの自己紹介を終えたところで、サツキーが話を持ち出す。

「あのさ、フリーってことは、フォースに所属してないってことよね？」

「そうだけど」

「だったらさ、あたし達の……」

「フォースに入ってくれ」って言うのなら、遠慮させてもらおうよ」

サツキーがその先を言うよりも先に、エミルはそれを遮った。

「ちよ、何で？フォースに入ってた方が、絶対楽しいって」

食い下がろうとするサツキーだが、エミルはあろうことか、声のトーンを落としてそれを否定する。

「……楽しいばかりが、フォースじゃない」

冷たい目をしていた。

それは、”拒否”と言う意味を言葉にせずとも表している。

「とにかく、フォースに入るつもりはないよ。じゃあね」

会釈として軽く手を振ると、すぐにコンソールを開いてどこかへ移動してしまった。

「断られるとは思ってなかった」

サツキーは肩を落とす。

「……ま、何か事情があつたんだろーよ」

ハバキリはエミルの様子から何かーそれも自分やコーダイに近いソレを察し取ったのか、「何か事情があつた」としか言わなかった。

「そうかも、ね……」

セアは、そう言ったハバキリにも「何か事情があつた」ことがあつたのだと、言葉にはしなかった。

「まあまあ、勧誘に失敗したことはいいじゃないの。とにかく、ミツシヨンクリアを喜ぼうぜ」

コーダイもコーダイで「何か事情があつた」ことを察したようだが、その話題から遠ざけるべく敢えて明るい声で言い張る。

この偶然の出会いが、彼らの躍進の第一歩となるか、あるいは……凄絶なる戦

いへのシナリオとなるか。

【次回予告】

セア「うーん……このままじゃちよつと辛いかな……」

ハバキリ「ぞーしたんです、セアさん」

セア「ミツシヨンの難易度も上がってきて、今のガンダムMK-IIじゃ厳しいかなって……」

ハバキリ「んーじゃ、セアさんもそろそろガンプラの改造に挑戦する頃合いですかね」  
セア「でも私、ハバキリくんのガンプラみたいな改造とかが出来るか分からないよ？」  
ハバキリ「いきなりそんな改造はしなくていいです。まずは、誰でも作れるオリガンの基本、ニコイチからです」

セア「次回、ガンダムビルドバイバース・スピリッツインテンション

『デートコースはありふれた街の中で』

って、何このサブタイトル!?これ、デートなの!？」

## 10話 デートコースはありふれた街の中で

「使いじゃねえ」と言う叫びと共に床下をぶち破って現れたのは――宇宙世紀の地球連邦軍の軍服を着崩して着用した、ボサついた黒髪の男。

「だから！俺は地獄の使いじゃねえって毎度毎度言ってるだろうが！いい加減にしようれ！」

唾を撒き散らしながら店内を睥睨するこの男。

「ちよつとちよつと」先生、アナタがウチの床を壊すの、これで七回目よ〜」

バーテンダーはこの男を『先生』と呼んでいるが、その態度は他のお客に対するものとそう変わらない。

床下をぶち破るのも既に見慣れたものなのか、怒りもせずにとだ呆れるだけ。

「おつと、悪いな姐さん。修繕費やらなんやらは、いつも通り俺から払つとくわ」

その先生も悪びれることもなく、修繕費を自分で払うと言う。

そんな様子を自分の席から驚愕しながら見ていた仮面の獣人は、またもトラちゃんに耳打ちする。

「まさか、これもいつものことではなからうな？」

「フツ、いつものことだ」

床下からいきなり人が現れたと言うのに眉の毛先一本も動かさずに酒を啜るトラちゃん。

「いやそれよりもだな！俺のことを地獄の使い呼ばわりしやがったのはどいつだ!」

先生のその怒号を聞いて、なおも構わず演説を続けていたやべー奴はようやく反応を見せた。

「何だ?!? 貴様、みくちゃんを地獄に落とせとせとでも言うつもりか!」

しかも、おかしな方向に曲解した上で。

「あアン? 俺の教え子が何かやらかしたつてのか?」

「おのれつ、貴様もスピリッツの愚者どもの回し者か! 殺すツ! 殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺すツ! 完膚なきまでグツチャグチャに、否ツ、グツチョングツチョンにしてぶつ殺すツ!!」

すると、やべー奴の身体が見る内に肥大化し始め、身長190cmはあるだろう背丈に、鍛え抜かれて隆々とした筋骨が自己主張し、さらに爬虫類を思わせるスプリット・タンをベロベロベロベロと振り回しながら先生に殺意をぶちまける。

「何だか知らねえが喧嘩なら買ってやんぞ、表エ出るや」

クイツと親指を店の外へ向ける先生。

その先生と共に外へと出るやべー奴。

「ここ、ここはいつから、世界ビツクリ人間大賞授与者のサロンになったのだ……っ？」  
仮面の獣人はあからさまに動揺しながらもトラちゃんに同意を求めようとするが、

「いつも通りだ、問題ない」

トラちゃんは見向きもせず「いつも通りだ」と頷く。

こんな光景がいつも通りだと言うのなら、自分が今までこのバーで見てきたものはなんだったのか、と仮面の獣人は自分の目を自分で疑い始める。

偶発的ながらもE.L.ダイバーの少女を保護していたダイバー、エミルとの邂逅の翌日。

後一人だと言うのにフォースマンバーが募らないままに時間だけが過ぎていった。

とは言え、何かの期間が迫っているわけでもないのです、落ち着いてじっくり探せば良い、と言う結論に至っているのが現状だ。

そんな土曜日の夜に、ハバキリとコウダイはいつものようにガノタトークに勤しんでいた。

ハバキリ？野球やろうぜ、お前ボールな

コウダイ？いいぜー（180mキャノンの照準を合わせながら）

ハバキリ？バッターはデュエルガンダムだから実弾は効かねーぞ

コウダイ？（ピッチャーは）ストライク！ストライク！ストライク！ストライク！バッターアウト！ゲームセット！乱闘開始！

ハバキリ？この間の（デッドボールを受けた）傷の札だ！受け取れストライクウウウウ！！

コウダイ？これもう野球じゃねえな

ハバキリ？もう下がれ！33―4で君達の負けだ！

コウダイ？なんでや阪○関係ないやろ！（ボールをバットで）打てばいいだろう！お前もそう言つたはずだ！

ハバキリ？アスラン下がって！

コウダイ？そしてニコルも乱闘に参戦！

ハバキリ？バッター、シユベルトゲベールを振りかぶって、ホーーーーームラン！！ズヴァーン

コウダイ？ニコルウウウウウウウウ！！

ハバキリ？選手をバットで殴り飛ばすと言うルール違反に抵触する以前の問題をや

らかすキラ様マジキラ様

コウダイ?クソツ、クソツ、クソオツ!何で、何であいつが、ニコルが討たれなきやならないんだ!(ロツカー相手にボクシングを始めるイザーク)

ハバキリ?言いたきや言えば良いだろ!?オレのせいだつて!オレのせいで野球がボクシングになったつて!!

コウダイ?違う、そうじゃない

ハバキリ?オレの甘さが、野球をボクシングに変えた……ッ!!

コウダイ?レフェリーとして割って入ろうとしたツールに向かつてシールドを投げつけて、ノックアウト!

ハバキリ?ツールウウウウウウウウ!!

コウダイ?その頃、アークエンジェルのお世話になつてるグウレイトであった

ハバキリ?公式認定でC・E・最強と呼ばれたキラが唯一、本気で殺しに掛かつてな  
お不覚を取る伝説の一戦、はーじまーるよー♪

コウダイ?シン「あの俺、一回フリーダム墜したんですけど……」

ハバキリ?いや、あれはキラ様がなめプしてたから負けただけだし、ノーカンでいいかと。それにフリーダムとインパルスは稼働時間こそ差はあるけど、武装のスペックそのものはインパルスの方が上だし、フォースシルエットなら機動性もイーブン、しかも



インパルスは戦闘中に上半身ミサイルにした挙げ句新しいパーツに換装してたし。そもそもチミ、デステイニーって当時最強スペックの機体使ってたながらストフリのリールガン直撃してたけど、「これがビームだったらもう終わってる」からね？ VPS装甲に感謝しなさい

コウダイ？ シン「まあたフリーダムになめプされた挙げ句、脚本の設定無視のせいでデステイニーを電池切れ寸前にされた。VPS装甲の設定まで無視されなかっただけマシなの？（・ω・）」

ハバキリ？ キイラアアアアアアアアアア!! キラキラバシユ

コウダイ？ アアスウラアアアアアアアアアアアンン!! キラキラバシユ

ハバキリ？ これもう乱闘じゃねーな

コウダイ？ リリーナ様「ひどい……こんなものは乱闘ではありません！ ただの殺し合いです！」

ハバキリ？ その通りです、リリーナ様

コウダイ？ アレ最初に何の話してたんだっけ？

ハバキリ？ 野球やろーぜ、お前ボールな

コウダイ？ そもそもベースボールですらなかったwwww

そんな感じにお互い面白おかしくトークをしている途中で、不意にハバキリのダイバーギアに通話が着信される。

「ん？」

誰かと思い名前を確認すると、セアからの通話だった。

こんな時間に彼女が自分に何の用だろうか、ハバキリは通話に応じる。

「もしもし、セアさん？」

『あ、ハバキリくん。こんばんは』

「はいこんばんは。それで、どうしたんです？特に用はなくて、オレの声が聞きたかったとかじゃねーですよね」

『違うよ、ちゃんと理由があつて電話してるんだから』

何言ってるの、とセアの苦笑する声が聞こえる。

『あのね、明日って予定空いてるかな？』

「んー、明日は普通に一日中フリーですよ。GBNに行くかどうかは明日にでも決めようかと思つてましたけど」

そのGBNを一緒にしないか、と言うお誘いかと思つたハバキリだが、セアの用件とは少しだけ違つていた。

『じゃあもし良かったら、またガンプラ作り、手伝つてくれないかな？』

GBNのプレイでは無かったが、ガンプラ関連であることに変わりはなかった。「イーですよ。でも、なんで急に？」

『と、特に深い意味はないんだけど、新しいガンプラを作ってみようかなって』

一瞬、セアの言葉の端に動揺を感じたのは気のせいだろうか。

何となく違和感を覚えたハバキリだが、今はそれを気にしないことにする。

「……まー、それはそれでいいんですが。それで、場所はどーします？」

『学園近くの、いつものガンダムベースでいいよ』

「んじゃーそーしま……あいや、ちよつと待ってください」

そーしましよ、と言いかけてハバキリは止まる。

明日は日曜日。

休日のガンダムベースは特に親子連れが多く、買ったその場で作って帰るケースもまた比例する。

そうなると工作ブースの席が取れない可能性が高く、そもそも品薄状態になる可能性もまたある。

その懸念点を思い返してから、ハバキリは別案を持ち出す。

「セアさんの近くのショッピングモールって、ガンプラ売ってる所ありますか？」

『え？んーと、確か『ジョーヒン』ならあつたけど……ガンダムベースじゃダメなの？』

大手家電製品店のひとつを挙げるセア。

何故かと訊いてくる彼女に、ハバキリは脳内に挙げていた複数の懸念点を教える。

『そつか。そこならそこで、私からしたら近くていいんだけど、ハバキリくんは電車に乗らないといけないよね』

「ま、そーなりますね」

それからいくつか確認をしてから、通話を終える。

ハバキリ？スマン、電話に出てた

コウダイ？おう、んじやそろそろ切り上げるか

ハバキリ？ういうい、おやすー

コウダイとのやり取りも終えて、ベッドに身体を落ち着けるハバキリ。

「えーと、明日は10時前にセアさんの最寄り駅だから……」

一応、電車の運行時間やそのショッピングモールの情報も調べておく。

ガンプラの製作が目的なら、製作道具なども必要だろう。

嵩張らない程度に荷物を纏めておき、そのまま床に付いた。

G B N全体の中の、地球圏と木星圏の中間宙域——そのデブリベルトで、『鉄血のオルフェンズ』に登場する強襲装甲艦『ハンマーヘッド』が各砲座を展開しながら細かに機動していた。

放たれるミサイルや対艦ナーム弾が殺到する先は、輸送艦。

対する輸送艦も対空機銃を撃ちまくってミサイルとナーム弾を迎撃していく。

それら艦砲射撃の合間合間に、ガンブラ達が応戦し合っている。

G B N上では稀に見られる、艦対艦戦だ。

そのハンマーヘッドの格納されたブリッジの艦長席に、アロハシャツ、短パン、ビーチサンダル、サングラスを掛けた、おおよそ艦長とは思えないような服装をした大男が窮屈そうに座り、艦を統制している。

「ちよつとは遠慮してやれよ。外装はボロクソにしても構わんが、中身は無傷で確保したいからなあ」

「リョーカイ！リョーカイ！」

大男がそう指示を与えたのは、人の代わりにC I CやF C Sを管制している、色とりどりのハ口達。

各々、パタパタと耳を上下し、マニピュレーターを忙しなくコンソールへ打ち込んで

いる。

「一番機、状況はどうか？」

大男は、先陣を切って出撃した『V2アサルトバスターガンダム』のダイバーに通信を繋ぐ。

余裕を保って戦線を維持しているようで、落ち着いた様子で応答される。

「推定敵戦力の53%は削りましたね、こちらの損害は軽微。あ、今、二番機……息子さんが敵艦に取り付いたようです」

V2アサルトバスターガンダムは特にロックオンすることもなく、マニュアルでメガビームライフル、ヴェスバー、スプレービームポッド、ミサイルランチャーを一斉射、敵部隊を一息に薙ぎ払う。

「うんむ、順調順調。敵さんが白旗を挙げるまでは、油断するなど、ウチのバカ息子にも伝えてくれ」

「おいこら聞こえてんぞ。誰がバカ息子だ、クソ親父」

複数のモニターのうちのひとつに、輸送艦の懐に飛び込んだ『ガンダムグシオンリベイクフルシテイ』の姿が見え、そのダイバーが通信に割り込んできた。

輸送艦に取り付いたガンダムグシオンリベイクフルシテイは、120mmロングライフル、輪胴式グレネードランチャー、四連ミサイルランチャーを撃ちまくり、対空機銃

やミサイル発射管を片っ端から破壊していく。

その後ろから、輸送艦を守ろうと追ってきた『黒金色のグレイズ』がガンダムグシオンリベイクフルシティと対峙する。

『おのれ！艦の懐を狙うとは卑怯な真似を！』

残弾のない銃火器類を手放していくガンダムグシオンリベイクフルシティ。

対するグレイズはサイドスカートからナイトブレードを抜き放ち、ガンダムグシオンリベイクフルシティへ迫る。

『この私の、裁きを受けよ！』

しかし、グレイズの動きは緩慢で隙だらけ、まるで素人――

否、”たわけ”だ。

振り降ろされるナイトブレードに対し、ガンダムグシオンリベイクフルシティはリアスカートを構成するシザーシールドを抜き、それでたわけのグレイズのナイトブレードを弾き飛ばした。

『へ、え？』

呆気なく武器を失って丸腰になるたわけのグレイズ。

すぐに後退するなり、味方に救援を乞うなどすれば良いものを、動揺のあまり棒立ちになっている。

ガンダムグシオンリベイクフルシティは流れるようにシザーシールドを開き、そのままたわけのグレイズのボディをガツチリと挟み込んだ。

『あ、あ、そんなつ、こんなところで私はあ!』

シザーシールドの圧力によって潰されていくコクピットの中で、ただただ喚き散らすだけのたわけ。

しかし、たわけを助ける者はもう残っていない。全てV2アサルトバスターガンダムが撃墜してしまっているから。

『アアアアアアアアア、イツ、イヤアアアアアアアアアア……』

ペシャン公。

そんな音を立てて、グレイズはコクピットにいるたわけもろとも挟み潰された。

グレイズ、撃墜。

それと同時に、輸送艦の機関部が多数のビームによって貫かれた。

推進剤の引火による爆発が輸送艦を激しく揺らす。

これでもう輸送艦は身動きすらまともに取れなくなる。

爆煙の中から姿を表したのは、紫陽花の色に似たキュベレイの改造機『ヒュドレインシア』によるファンネルだ。

メインエンジンを破壊された輸送艦のブリッジ近くに、ヒュドレインシアは腕部のイ



ンコムクローを射出して突き刺す。

そのヒュドレインシアのダイバーであるシスターの僧服を纏った女性——『ミスズ』は、インコムクローを通じての接触通信で降伏勧告を行う。

「たつた今、貴艦の機関部を破壊させていただきました。これ以上の損害を惜しむのならば、直ちに降伏なさい」

すると間もなく、輸送艦の方から“降伏”を示す発光信号が上げられた。

ハンマーヘッドからそれを確認した大男は、パンパンと手を鳴らす。

「よし、よくやった。これより敵艦の接収作業にかかるぞお」

彼ら——フオース・『フラワーズ』もまた、反ELダイバー勢の駆逐のための活動を行っていた。

大男は、艦長席の傍らにいる、エスニックな服装をした色白童顔の少年に声を掛けた。

「この程度で済むんなら、わざわざ『スピリッツ』から君を借りてくる必要も無かったかねえ」

「いえ、ボクの方からもフラワーズと同行させてくださいとお願いしましたから」

気にしないでください、と謙虚に頷く少年。

「そうかい。……ただまあ、近い内にまたドンパチが起きるだろう。その時には、アテにさせてもらおうかね」

「任せてください」

少年ー『ミーシャ』は今、自分のフォースを離れて、フラワーズと共に行動していた。

翌日の日曜日。

アメノ家の食卓で、テラスはガタツと椅子を蹴り倒した。

「兄さん……今、なんて言いました……？」

「もっかい言わなきゃならねーか？「今日は朝からセアさんと出かけてくる」って言っただろーが」

なんだその深海魚みてーなツラは、とハバキリはコンソメスープを啜る。

対するテラスはわなわなと身を震わせると、バツと時計の時刻を確認する。

現在、午前の7時45分。

「なんでそんなにゆっくりしてるんですかつ、あともう二時間も無いじゃないですか！」

「別にそんなに慌てねーでも、30分前にでも出れば余裕で10時に間に合うだろ」

何故そんなにゆっくりしているのかと咎める妹と、何故そんなに慌てているのかと呆れる兄。

「だって兄さんっ、あのホシザキ先輩と『デートしに行く』んでしょ!?!」  
「FAZZZ（ファッツ）？」

ZZガンダムのフルアーマープランの検証、実験用の試験機の名を口にするハバキリだが、そんなことはどうでもいいし何の関係もないし、そもそもテラスはそんな細かいガンダムネタまでわからないだろう。

「休日、相手を選んで、女の子と、お出かけ……これがデート以外の何だって言うんです！」

「すごいなその単略的な思考。それなら、『兄妹で近所のスーパーに買い物に行く』デート』って公式も成り立つな」

天才を通り越したドアホだな、とハバキリはコップに注がれた牛乳を呷る。

「ええいつ、これだから兄さんは！」

テラスはハバキリの食べ終えた食器を奪い取ると流し台の水に浸けておく。

「いいですか兄さん、女の子とデートすると言うのは、謂わば一種の戦争です」

「戦争と書いてデートと読むとか久々に聞いたわ。つーかそもそも、デートですらねーぞ。ただ買い物しに行くよーなもんなんだから」

デートではないと否定するハバキリだが、テラスの方はテラスの方で、これは戦争（デート）（違う）であると譲らない。

「まずはひとつ、服装はいつもの私服で出ることです。下手に着飾ろうとするのはかえって逆効果です」

「(デートするよーな相手もいねーお前が、何偉そーなこと言ってるんだか……)」

大方、少女漫画かその辺りに影響されたのだろう。

ハバキリ自身もたまにテラスが買ってきたそれを読むことはあるが、中には明らかに対象年齢いくつの本だと疑うような濃厚でディープかつ、ドロドロの刺しつ刺されつな……成人誌扱いされないギリギリのラインを攻めているとしか思えないものまである。そこから間違った知識を覚えたり、歪な人間関係を構築したりしないだろうか、兄としては心配でもあったりする。

そんな心配をする時点で、自分も少女漫画に影響されていると言う同じ穴の貉であることへの自覚はある。

「ふたつ、必ず集合時間の30分前には着くことです」

「30分前? 30分も何して待って言うんだ?」

まさか30分もの間、何もせずに待てと言うつもりだろうか。

それはもはや待ち合わせではなく、ただの嫌がらせの類ではなからうか。

「兄さん、デートにおける待ち合わせと言うのは、男の子は待つ側にならなくてはならないのです。そして、やって来た女の子は待たせたかと訊いてきますので、その返しは必

ず「待つてないよ、今来たばかり」と答えるんです」

「コツテコテのテンプレじゃねーか、昼飯に天ぷらうどんでも食えつてののか」

「テンプレでも天ぷらでも、こう言うのはひとつの作法……つまりはルールです。「戦争にもルールはあります」って、ガンダムでも言つてましたよね？」

「なんでそんなとこだけ覚えてんだか……」

『08小隊』のアイナ様の台詞じゃねーか、とハバキリは呟く。

それはともかくとして、これはもうテラスの言う通りにするしか滞り無く進むことは出来ないだろう。

よつて、ハバキリは潔く諦めることにした。

それから、テラスの『デートのルール』を延々と聞かされた上に私服のチョイスや髪型まで口を挟み、ダメ出しまでされてようやく解放された頃には、もう既に9時前。

『30分前には待ち合わせ場所に到着しておかなければならない』と言うルール(?)に従い、かなりの余裕……と言うか暇を持て余して、ハバキリは最寄り駅からの各駅停車に乗り込む。

「(ま、テラスの言うことも分からなくはねーよ。傍から見れば、デートしているよーに

も見えるだろうしな)」

特に、学園のアイドルとさえ称される美少女とだ。

今日のこと、コウダイには話さなくて正解だった。

仮にも昨日のやり取りの中で「オレ、明日セアさんと出掛けることになったwww」と呟いてみるでしょう。

すると、すぐさまメッセージのやり取りから通話に切り換わり、『セアさんとデートだ?! 貴様、それ以上余計なことを言うとその口縫い合わすぞ!!』と開口一番で脅迫されるだろう。

そして、翌日の学園で根掘り葉掘りと尋問をしてくるに違いない。

それは超スーパーステージめんどくせー、と心底で呟いていると、目的の駅に到着する。

「駅前広場だったな」

現在時刻、9時28分。

ほぼちようど、本来の待ち合わせ時間の30分前だ。

とは言え、バカ正直に30分間何もせずに待つのは暇過ぎる。

とりあえず飲み物でも買うか、と近くのコンビニに入り、コーヒーを購入してから広場に戻ってくる。

ふと見れば、周りにいるのはスマホを弄っていたり、頻りに腕時計を確認している男

ばかり。

恐らくではあるが、デートの待ち合わせをしている者達だろう。

「（おいおい、何だこのリア充広場は。いや、それはオレも同じことか。……違うとすればデートじゃなくて、デートっぽい何かってだけだ）」

何となく居心地の悪さを感じつつも、ハバキリはドリップされたばかりのコーヒーにフレッシュとシュガーを入れて、一口啜る。

スマホを手に取ると、マナーモードにしていたために気付かなかったが、テラスからのメールが届いていた。

「……」

内容も見ずにそのままゴミ箱へ投下、すぐに削除した。

見なくとも分かる。どうせ今日のデート（違う）の予定やらコースやらがびつしりと分単位で書かれているのだろう。

いちいちそんなものに付き合ってられない。

メールチェックを終えると、すぐにスマホを鞆の中にしまい、交換するようにダイバーギアを取り出す。

トップ画面から、動画共有サービス『G-Tube』を開いた。

ダイバーが有志で配信された動画を閲覧可能なサイトであり、代表的なチャンネルは

『キャプテン・ジオン』氏によるマナー改善動画や、『パトリック・コーラサワー』氏による、スペシャルで2000回にも渡る対戦動画を始め、マイナーながらも『ジャスティス・カザミ』氏による自撮り動画なども配信されている。

ハバキリは特にチャンネル登録はしておらず、たまに『みんなの投稿』を見て、気まぐれに観てみる程度のものだ。

スワイプしてみて、最終更新動画を確認すると、ふと目に止まる項目が見えた。

「(……『ゲリラドライバーにご注意を!』?)」

運営側が配信している公式情報で、三分ほどの短い動画のようだ。

一体何だろうと、ドライバーギアにイヤホンを繋ぎ、再生してみる。

『本日もGBNを<sup>ご</sup>鼻屑にして頂き、誠にありがとうございます。昨今、ディメンション内で『ゲリラ』と呼ばれる少人数のドライバーが、運営管理者を対象に襲撃を行うと言う事件が多発しております』

その前置きから始まり、続いて流れる映像には、GBNガードフレームの部隊と交戦しているガンプラが三機ほど。

管理者側の機体であるGBNガードフレームの性能は桁違いに高く設定されており、その道のプロでさえも手出しを控えるほど。

だと言うのに、GBNガードフレームの数は見る内に減らされ、それと対する三機は



全く被弾すらせずに攻撃を続けている。

『この『ゲリラ』、パーソナルデータなどは完全に秘匿されており、個人の特定は困難とされており。さらに、出没する場所やタイミングなども不規則で、運営側でもその動向を把握し切れていないのが現状です』

やがてGBNガードフレームは全滅、交戦していた三機はすぐさま踵を返してその場を立ち去っていく。

続いて、また別の戦闘状況の映像に切り替わる。

『また、運営側に限らず、一般プレイヤーにも襲撃を行っているようです。中には、輸送艦を狙った海賊行為に出ることも』

宇宙空間の中で、輸送艦を攻撃している様子が見える。

輸送艦の機関部を破壊され、已む無く降伏信号を挙げる輸送艦が映し出されたところで、映像は止まる。

『これらは、目撃例のほんのごく一部です。実際は、皆様のすぐ近くでも発生しているようですので、皆様もこのような襲撃事件に遭遇することの無いよう、十分お気を付けてプレイしてください。お時間、ありがとうございました』

これにて動画は終了。

「…………『ゲリラ』か。こんなご時世の中、そんな“ヒーローごっこ”をやってる物好き

がいたもんだな)」

先述の『ジャステイス・カザミ』氏の動画のコメントに、同氏が呟いたこのような言葉がある。

「俺はただ、GBNでヒーローごっこをやったただけで、世界とか人の命とか、そんなもの背負えねえ」

収録当時のジャステイス・カザミ氏のガンプラが、『インフィニットジャステイスガンダム』——「戦争はヒーローごっこじゃない」と言う名言を残したアスラン・ザラの搭乗機——をベースとしたガンプラを使っていたことも相まって、痛々しいほどに皮肉なコメントであると、フォローユーザー達は静かに囁き合ったと言う。

実は、こっそりとジャステイス・カザミ氏をフォローしているハバキリもまた、その中の一人である。

イヤホンを外して、ダイバーギアのジャックからそれを引き抜いて鞆の中に納める。コーヒーをもう一口傾けて、息を吐き出す。

「(あのゼク・アインも、『ゲリラ』の一員なのか……?)」

不可解な介入行動を仕掛けてきたと思えば、意味深な言葉を残してから突然立ち去っていく。

不可解な介入行動と言う点においては、『ゲリラ』と類似しているが、あのゼク・アイ

ンのドライバーは『シャルル』であるはずの自分をハッキリと『ハバキリ』だと断言していた。

だとすれば、『ゲリラ』とは反ELドライバー勢のことを指しているのだろうか？

否、”アレ”は腐っても運営の一部（恥部のようなものだろう）であり、運営のガードであるGBNガードフレームを襲う理由が無いはずである。

「（ま、管理側でさえ分からない相手に、一般プレイヤーが分かるわけねーな）」

『ゲリラ』の正体についての憶測を早々にやめて、ハバキリは待ち人を待つことに――  
「……あつ、ハバキリくん！」

……しようとしたのだが、その待ち人が現れたようだ。

自身の名前を呼ぶ声の方向から、人目を振り向かせながら駆け寄って来る、ホシザキ・セアが手を振ってくれている。

「おー、セアさん。おはようございます」

ハバキリも普段通りを装ってひらひらと手を振り返す。

「ハバキリくん、意外と早く着いてたんだね？まだ15分も前だよ？」

「別に15分前から待っても、バチ当たりなことにはならんでしょ」

コーヒーを飲み干してゴミ箱に放り込む。

「そー言うセアさんだって、15分前に来てるでしょ」

「わ、私は、ほら、ここが地元だから、ハバキリくんよりも遅れて来るわけにはいかない  
と言うか……」

セアは慌てて目を泳がせてハバキリの視線から逃れようとするが、その逸した視線の  
先を彼に回り込まれてしまう。

「……セアさんって、幼稚園とか小学校の頃、明日の遠足が楽しみで眠れなかったって夕  
イブ？」

「うっ」

凶星をズビシと指されて、セアは声を詰まらせるが、すぐに苦し紛れに言い返す。

「た、楽しそうなことを楽しみにして、悪いことはないよねっ？」

「あっさり開き直ったな……ま、遅れて来られるよりは良いってことにしましょ」

そんなことより、とハバキリはある方向へ目を向ける。

そちらに見えるのは、今日の目的地であるショッピングモールだ。

「モール全体の開館は、10時からでしたっけ」

「うん。今から向かえば、ちょうど開館に合わせられるよ」

「んじゃ、行くとしますか」

ハバキリとセアは、ショッピングモールへと向かった。

ショッピングモール内に併設されている、大手家電製品店の一角である『ジョーヒン』に入店した二人。

スマートフォンのアクセサリーなどを一通り見て回ってから、玩具売り場――主にガンプラのブースへ。

「さてセアさん。MK―IIに続くガンプラ、何にしますか？」

「……」

すると、セアは途端に難しい顔になる。

「いきなりそんな顔してどーしたんです。深刻な問題じゃねーんですから」

「うーん……やっぱり、経験豊富な人に訊くしかないよね……」

ぶつぶつとそう呟くと、セアはハバキリに向き直る。

「最近、ミッションの難易度も上がって来てるでしょ？正直、今のMK―IIじゃ辛くなってきた……」

「(……：昨日の通話の違和感はこちら)」

ガンプラ作りを手伝ってほしい、と言う昨日のセアの声を思い出すハバキリ。

あれは暗に、『ガンダムMK―IIをどう改造するべきなのか』を相談したかったのだらう。

それを含めた上で、ハバキリは応えを返す。

「別に、MK-IIにこだわる必要は無いですよ」

「え？」

「そりゃ、初めて作ったガンプラだから愛着があるってのは分かります。けど、だからってそれだけに固執してたら、他のものが見えなくなりですよ」

そう言いながら、ハバキリは鞆からガンプラのケース、そこからジンライ改を取り出して、セアに差し出した。

「オレのジンライ、好きに見てもいいですよ」

「う、うん……」

ガラス細工を触るような繊細な手付きで、ジンライ改を受け取るセア。

しばらく、それを回しながらまじまじと見つめること数十秒。

「やっぱり、素人目に見ても凄いくオリテイだと思おう……」

セアがジンライ改を見ている間、ハバキリはあるガンプラのパッケージを取ってくる。

それは、『HG SEED モビルジン』シリーズのジンライ改のベースとなったキットだ。

「セアさん。オレがそのジンライを完成させるまでに、これをいくつ買ったと思います？」

「い、いくつって……同じものをつてこと？そんなの分からない……っっていうか、どうして同じものがいくつも必要なの？」

どう言うこと、とセアはジンライ改とモビルジンのパッケージを見比べる。

「そうですね、『ジン』をベースにつて決めてから、バリエーション機含めて、大体四つくらいは使い潰しましたね」

「使い潰したって……壊したってこと？」

セアはますます分からなくなる。

ハバキリが一体何を思つて、そこまでに至つたのか。

「自分が満足……いや、『ギリギリ妥協出来るところ』まで目指した、その結果ですよ。二重関節、肩と胴体の可動、四肢の延長、ボールジョイントをピンジョイントに、ピンジョイントをボールジョイントに、各部のエツジ化、金属パーツへの取り換え、三重四重に渡る重ね塗り……何をどこまでしたか、もう覚えてねーや」

指折り数えしながら、自分の愛機をどこまで改造したのかを思い出していくハバキリだが、不意にその表情に陰りが見えた。

「……ここまでやつてもまだ足りねーくらいです。オレが必死こいてやつて来たことを、”アイツ”は同じことを平然とやつてくる」

”アイツ”って……？」

ハバキリの言う”アイツ”が誰のことを指しているのか。

コーダイのことだろうか？

「……つと、こんなことセアさんに話してもしょうがねーですよ。とにかく、自分のことなんだから自分が好きなよーにやればいーんですよ」

「好きなようについて言われても……」

好きなようにするにも、(出来る出来ないを別にして)何をしたいのかが分からないのがセアの現状である。

「偉そーなことを言いますとね、初心者には初心者らしく、余計なこと考えずに、作りたいものを作ってりやいーんですよ」

「作りたいものを作る……」

セアはその言葉を反芻する。

つまり、ガンダムMK-IIのことは一旦棚に上げて、これと思ったものを作れば良いのだと、ハバキリは言うのだ。

「……よしつ。ハバキリくん、これありがとう」

何かしらの決心が着いたらしく、セアは手にしていたジンライ改をハバキリに返すと、早速物販ブースを見て回り始める。

その様子を見守りながら、ハバキリは心中で溜め息をついた。



「今だつてビクつきながら試行錯誤を繰り返してる分際で、何を偉そーなこと言つてんだか……）」

それは、自分への嘲笑だった。

自分はプロのモデラーなどではない。

その道のプロのやることを見様見真似でやっては失敗して、成功したフリをしているだけの、アマチュア以下の素人。

そんなことは100回以上も理解している。

「ま、悩んでる相手にちよつとぼやくぐらいならいいだろ）」

そんな風に自分に言い訳しつつ、さてセアは新たなガンプラに何を選ぶほうとしているのかと、目を向ける。

その彼女が目留めているのは、『HGCE フリーダムガンダム』だった。

一度それを棚に戻してから、もう二回ほど右往左往をしてから、最後にまたフリーダムガンダムのパッケージを取りに戻って来た。

「うん、これ」

セアはそう呟いて、ハバキリに向き直った。

「ん、フリーダムですね」

「これ、ハバキリくんのジンと同じシリーズのガンプラなんだよね」

「ガンプラのシリーズとしては別カテゴリーですけど、登場作品は一緒ですね」

フリーダムガンダムもジンも、同じ『SEED』に登場するMSだ。商標的には『SEED』ではあるが、続編の『SEED DESTINY』にも引き続き登場している。「他に何か買うものとかは大丈夫ですか？」

「あ、えーつと……スミ入れペンってどこにあるかな？それも欲しいんだけど……」

「オレ、このジョーヒンは初見だからどこと聞かれても分かりませんが……ま、大体は塗料のコーナーにありますよ」

あそこですかね、とハバキリが指すのは、ガンプラの販売ブースのすぐ近くに配置されている場所。

セアがそちらへ向かうのを尻目に、ハバキリもガンプラの品揃えを見て回る。

「インジャが出たんだから、普通のジャスティスだつて出してもいーだろーに」

いつかは出るだろーけどさ、と新発売のポップと共に前面に展開されている『HGCE インフィニットジャスティスガンダム』を見流しつつ、ハバキリはセアが戻つて来るのを待った。

会計を済ませた後は、テーブルとパイプ椅子がいくつか並べただけの、簡素な製作ブースに移動する。

一緒にガン普拉を作っている親子を見掛けつつも、一席を占拠、早速フリーダムガンダムの製作に取り掛かる。

「……」

取扱説明書を目に通すなり、セアは黙々と組み立て始める。

特に何も言わずに作業を始めたところ、今回は最初から最後まで自分で作るようだ。

こうなると、ハバキリは少し手持ち無沙汰に。

「オレも何か買って作るか」

とは言え、セアを待たせない程度には手早く作れるものとなれば、選択肢は限られてくる。

キョロキョロと販売ブースを見回して、

「あ、そーだ」

ふと何かを思いついたハバキリは、セアに一声掛けてからその場を離れる。

目当ての品を見つけ次第、すぐ買って戻って来るとすぐにセアと向かい合わせの席に着き、製作を始める。

作業開始から、1時間半が過ぎた頃。

セアは作業の手を止めて軽く背伸びする。

「んん……そろそろお昼かな」

靴からスマートフォンを取り出して時刻を確かめれば、正午を少し過ぎた頃。

セアの手元にあるフリーダムガンダムは、本体こそ組み上がっているが、武装やウィングバインダーなどはまだ出来上がっていない。

「んじゃ、作業は一旦ここまでにして、昼飯に行きますか」

既に作業を終えていたハバキリは、手早く広げていた工作道具などをケースに仕舞い込んでいく。

「ハバキリくんは、何を作っていたの？」

自分のフリーダムガンダムに集中していたセアは、ハバキリが何かを作っていることは見えていたが、具体的に何を作っているかまでは見ていない。

しかしハバキリはパットとそのパッケージを靴の中に放り込んで隠してしまう。

「んー？セアさんが、そのガンプラ完成させたら教えてくださいね」

「何それ、お預けってこと？」

余計に気になるなあ、とハバキリの茶目つ気に苦笑するセア。

作りかけのフリーダムガンダムをパッケージに納め、製作ブースを片付けてから、二人はジョーヒンを後にする。

「お昼ごはん、ハバキリくんは何が食べたいかな？」

シヨツピングモール内のフードコートの際に移動してきて、セアはハバキリに訊ねる。

「特にこだわりとかはねーんですけど、強いて言うんなら、今日の朝飯がパンだったから、和食ですかね」

だからといって、今朝のテラスとの問答の中で挙げられた天ぷらうどんを選ぶつもりはないが。

「和食系だね。それなら……」

覚えのあるアテがあるらしく、セアは案内板を見ることがなくその方向へ足を向ける。

セアが選んだのは和食レストランで、今ようやく混み始めたばかりのようで、辛うじて並ばずに席に案内された。

注文の方も早々に決まり、お茶を啜りつつ待つのみ。

「ハバキリくんは、GBNを始めてどのくらいになるの？」

最初にセアの方から話題を振ってくれた。

「オレは中学に上がってから、すぐに親の許可もらってGBN始めたんで、大体二年半くらいですね。ガンブラそのものを始めたのは10歳くらい……だったけな」

確かその辺りだったはず、とハバキリは思い出しながら答える。

「五年もかあ……それだけ経験があれば、ジンライくらいのガンプラだって作れるんだね」

「その辺は個人差あるんじゃないですかね。オレより年下で、世界のプロ相手に渡り合ってる奴だっているんだし」

それはある種の天才かドアホの類だな、とハバキリは苦笑する。

「そー言えば、セアさんは何でGBNを始めようって思ったんですかって、訊いていいですか?」

今度はハバキリの方からの質問だ。

その問い掛けに対して、セアはもう一口お茶を喉に注いだ。

「そうだね……ちよつと、私の思い出話から始まつちゃうんだけど……」

そう前置きを置いて、セアは自分が高校生になつてからのことを語り始めた。

ー私ね、高校生になつたら勉強とかすごく大変で、ドラマみたいな青春を送るなんて、出来ないと思つてたの。

今の学園だつて、中学からの知り合いなんて一人もいないし、誰にも頼れない、一人で頑張るしかないんだつて、ずっと肩肘張つてた。

そんな、自分で勝手に窮屈にした生活を送っていた時に、出会ったのが、カナちゃんークラサカ・カナデちゃんだった。

『難しそうな顔してるね』

それが、カナちゃんが私に声を掛けてきた第一声。

『え……?』

その時の私、きつとすごく変な顔してたんだと思うの。

『ホシザキさん、だったっけ? えーと……確か、この学園から離れた中学から来たって』

『そうですけど……クラサカさん、ですよね?』

『別に敬語なんて要らないよ、同じ年なんだし。……見た感じ、意気揚々と高校に上がったのはいいけど、周りに頼れる人が誰もいなくて、ぼつちにならざるを得なかった、つと……?』

『……』

初めは、カナちゃんの遠慮のない言い方を不快に感じたこともあった。

でも、その言い方がカナちゃんなりの気遣いだって思い直したのもすぐだった。

『私も同じだよ。よそから何十分も電車に乗って来てるんだから。仲間って言えるような人が誰もいなくて、肩肘張る気持ちも分からないでもない』

カナちゃんは、色んな意味で私とは正反対な人で……だから、友達になれたのも自然

なことだったかもね。

『そりゃね、味方は誰もいないかもしれないけど、周りは敵だらけってわけでもないんだから。無理に強張ってばかりじゃ、自分の欲求不満を誤魔化すために虐めに走るようなクズに目を付けられるよ?』

味方を作る前にまず敵を作らない……カナちゃんはそう言ってた。

『憐れむわけじゃないけど、よかつたら昼ごはん、一緒にしてもいいかな』

こうして、私はカナちゃんと一緒になって行動することが増えて、カナちゃんを通じての友達も増えた。

少しずつ、学園生活にも余裕が出来るようになってきて、夏休みが終わった後だね、「せっかくだから、何か新しいことを始めたい」って思ったのは。

でもそれは、部活みたいな連帯責任の無くて、もっと自由なものを求めてたの。

そんな都合のいいものなんてそうそう無いって思いながら、何か無いかなって探してたところに、テレビでGBNの特集をやってるのを見て、いいなって思ったの。

何十年も続いているゲームだし、ガンブラはそれよりもっと昔から続いている、それこそお父さんやお母さんが生まれる前からあるようなものだし、どうしてみんなそんなに夢中になれるのか、気になった。

気になったら答えはひとつ、自分で確かめるだけ。



動機は単純だったけど、やるのなら出来る限り頑張る。そうして、私はGBNの世界に飛び込んだー。

「……そんな感じで、ミツキさんを通じてハバキリくんに出会って、今に至るってところかな」

思い出語りを終えたセアは、お冷を口に流し込む。

「なんつーか、意外と普通な動機ですね。もっとう、学園の中じやアイドル扱いされて窮屈だから自由を求めてたとか、大層な理由があるもんだとばかり」

「……前々から気になってるんだけど、何で私、アイドル扱いされてるのかな？」

セアは不満そうに目を細める。

自分の知り得ぬところで勝手に祭り上げられる感覚はハバキリには分からないが、少なくともあまり嬉しいことでは無いようには思える。

アイドル扱いされるその理由を、ハバキリは溜息混じりで答える。

「コーダイからうるせーくらい聞きますよ。セアさんは美人でスタイルも性格も良くて成績は学年トップ、非の打ち所も向かうところの敵も無しって」

「大袈裟だなあ……みんなして私のこと過大評価し過ぎだよ」

「オレに言わせてみれば、セアさんは自己評価が低過ぎると思うんですけどね」

だからこそ学年トップの成績だって叩き出せるんでしょーけど、とハバキリは言葉を続ける。

「偉そーにふんぞり返ってりやいい、とは言いませんけど、もーちよい、「自分はこれだけのことをしているんだ」ってことを誇らしく思ってもいーんじゃないですか？」

「……誇らしく」

ハバキリの言葉を反芻するセア。

思案を回そうとしたところで、

「お待たせしました。季節限定A定食と、焼鮭定食になります。ご注文は以上でお揃いでしようか？」

ちようど、オーダーした料理が運ばれて来た。

いただきます。

昼食を終えた後はセアの先導の元、ショッピングモール内を見て回り、ハバキリはそれに付き合うと言う形であった。

全てを見て回ることは出来なかったものの、セアが見たい所は全て回り、それが終

わった頃には既に夕陽が傾いていた。

「あ、もうこんな時間……過ぎるの早いね」

”時は金なり” って言葉を考えた人は天才ですよね」

「時間もお金も、減らなくていい時にばかり減るものだよね」

ジョークを交えても、過ぎたものは戻ってこない。

今朝に待ち合わせていた駅前広場にまで来たところで、今日のところはお開きだ。

切符を改札に通す前に、ハバキリはセアに向き直る。

「んじゃーセアさん、今日は楽しかったです。ありがとうございます」

「ううん、私の方こそ、今日は付き合ってくれてありがとうございます」

「今日作ってたフリーダム、完成したら見せてくださいね」

「もちろん。ハバキリくんが何を作っていたのかを教えてくださいだね」

また明日、学園で。

互いにそう挨拶を交わして、ハバキリは改札を通り、セアはそれを見えなくなるまで見送ってくれた。

その、翌日の学園では。

「ハア〜バア〜キイ〜リイ〜……お前、昨日セアさんとデートしてたつてのは本当かア!?」

朝の教室のど真ん中で、コウダイが詰め寄ってきていた。

「(あー、やっぱり誰かが見てたんだなー)」

何となくこうなることは予想出来ていたハバキリは、いつもの調子を装いながらそれらしく答えることにした。

「ー昨夜にセアが、ちょうど完成したばかりのフリーダムガンダムを見せてくれたことを思い出しつつ。」

### 【次回予告】

コウダイ「なあぜだ！何故お前にばかり幸運が降り掛かって来る!!」

ハバキリ「知らねーよ、Google先生にでも聞けよ」

サツキー「セアさん、昨日ハバキリとデートしたってホントですか!?!」

セア「デ、デートじゃないよ!?!ただ買物に付き合ってくれただけだから……」

ハバキリ「そんなことより、オレ達のフォース戦、そろそろ考えねーとな」

コウダイ「ん待て！セアさんとのデートの顛末、もつと詳しく聞かせろオ！」

ジル「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション  
『初陣！フォース・リヴェルタ』

ねえハバキリ、デートつてなに？

ハバキリ「それはまた今度な」

## 11話 初陣!フォース・リヴェルタ

やべー奴と先生が店の外へ出ていくのを見送った後。

仮面の獣人はネオアメリカンコーヒーもすぐに飲み干すと、カップとソーサーをカウンターへ返す。

「すまんがマスター、会計を頼む」

「あら、もうお帰り?」

寂しいわねえ、と言いつつもバーテンダーは手元の作業を片付けると、仮面の獣人へ向き直る。

仮面の獣人は自分のコンソールを呼び出すと、ブレンドコーヒーとネオアメリカンコーヒーのぶんのビルドコインを、カウンターの端末機器へ送信する。

これで精算は完了だ。

「彼奴ら二人のぶつ壊れっぷりを見て、正気ではいられなくなったか?」

彼奴ら二人ーやべー奴と先生のことを指しつつ、トラちゃんは薄く笑う。

「正気でいられなくなる前に、だ。それに、どの道そろそろお暇しようと思っていたのでな」

人。コンソールパネルをトップ画面に戻し、ログアウトのコマンドを呼び出す仮面の獣

「ふむ、もう少しいてくれた方がありがたいのだが、無理強いはすまい」

トラちゃんも特に引き止めることはしない。

「では、失礼する」

小さく頭を下げると、仮面の獣人はログアウトしていった。

店内に残るのは、トラちゃんとバーテンダー、それと数人のウェイターのみ。

「急に静かになったわねえ」

「全くだ」

お猪口に酒を注ぎ直しては、一口呷るトラちゃん。

ハバキリとセアのデート（第三者視点）の翌日。

学園内で散々コウダイに根掘り葉掘り訊かれて、ハバキリはどこからどこまでを嘘にするか本当のことを話すかを選びつつ、コウダイからの尋問をどうにかやり過ごした。

その日の放課後。

下校路からガンダムベースへ直行しつつ、ハバキリとコウダイは今後について話して

いた。

「そろそろ一回、フォース戦をやってみようと思うんだけどよ、ハバキリはどう思う?」  
コウダイは先日から話していた、フォースバトルについての話題を持ってきた。

「とは言え、人数の問題は解決してねーだろ。結局、あれからめぼしー奴のスカウトなんざしてねーし」

フォースバトルの基本は5on5だ。

無論、双方のフォースの合意の上で変則的なルールとするのも認められているが、それでもフェアプレーを前提とするならやはり人数は揃えたいところ。

「とりあえずフォースを結成するだけして、足りない頭数は助っ人に頼るってのもアリじゃねーか?」

ハバキリが妥協案を挙げる。

「助っ人かあ、出来れば正式にフォースに腰を落ち着けてくれる奴の方がいいけど、まあそれは後が無くなった時の手段だな」

それを聞いたコウダイも、賛成こそしないものの、否定することもしなかった。

「んじゃ、セアさんとサツキー、ジルちゃんが揃ったら、とりあえずだけでもフォースの結成だな」

バトルに関しては追々つてことで、とコウダイは頷く。



ログイン完了。

しばらくは野郎二人で雑談に華を咲かせていたところで、最初にサツキー、次にセア、最後にジルがやって来た。

「よし、とりあえず全員揃ったな」

コーダイが率先して先導する。

フォースこそまだ組んでいないものの、この五人がいつものメンバーである、と言う認識が既に組み上がっている。

女子三人は、これから何かあるのかとコーダイに耳を傾ける。

「ハバキリとの協議の末、ここにいる俺達五人で、ひとまずフォースを組もうと思いません」

フォースを組むと宣言するコーダイだが、すぐにサツキーが反応する。

「ねえコーダイ、それって前に人数が足りないからって先延ばしにしなかつたっけ？」

「人数の問題はまだ解決してない。それでも、とりあえずフォースを組むだけ組んで、足りない頭数は助っ人で補おうって話をしてたんだよ」

コーダイはハバキリの挙げた意見を取り入れた、現時点での妥協案を提示する。

「助っ人に關しては、俺とハバキリの両方で伝手を持つてるから、フォースバトルを実施する数日前にコンタクトを取れば、十分間に合う」

だからそつちの心配は必要ない、とコーダイはスタンバイさせていたコンソールパネルを開き、拡大させながら四人に見せる。

「今日決めたのは、フォースの名前。あんまり中二臭いのか、尊大過ぎるのは無しで頼むわ。何か良さげな名前とかあるか?」

コーダイがそう言い終えたところで、ハバキリが口を開く。

「ちなみに、オレは『地球外縁軌道統制統合艦隊面壁九年堅牢堅固』って意見を挙げたら、ナノ一秒で却下されました。解せぬ」

「それ、そのまま使ってるだけじゃないの。ってか、長過ぎて文字数足りないでしょ」  
「当たり前のようにサツキーからダメ出しをされる。」

ハバキリは「そっかー」と残念そうに呟く。とても残念そうには見えないが。

「まあ……あたしも名前なんて思いつかないんだけど。ジルちゃんは何かない?」

サツキーは隣にいるジルに目を向ける。

「うーん?名前?」

小首を傾げているジルだが、そもそも何の話をしているのかもよく分かっていないかもしれない。

そのジルのそばにいるセアは、思案しているように目を閉じている。

「……………」

とは言え、すぐに出てくるようなものでもない。

「俺達が所属していたフォースの名前が『アルディナ』……」大地” って意味だったからな。その対になるように”空”を意味する名前にしようって思ったんだけどな……」

コーダイは気まずそうに後頭部を搔く。

「オレとコーダイからしたら、それは元々フォースメンバーだった奴らへの反抗……ってか、裏切りになるんじゃないやね？ってな」

ハバキリは何気も無くそう言うが、彼にとつてその名前はある種の戒め——引き摺って歩かなければならないようなものだろう。

空に関するワードは禁句。

それでまた範囲が狭まったところで、セアの口と目が開いた。

「—————」自由”

その二文字に、他四人が耳を傾けた。

「フリーダム……だと、私のガンプラと被っちゃうか。なら、他には……」  
「……なら、”自由”を独語にして、『リヴェルタ』ってのはどーです？」

さらにそれを補足するのはハバキリ。

コーダイのコンソールパネルに指を伸ばし、フォース名の欄に『Liberta』と打ち込む。

”自由”、か……変に捻るよりは、シンプルでいいですね”

コーダイもその『リヴェルタ』と言う言葉を咀嚼する。

セアは、その”自由”の銘を冠した、その理由も話す。

「ほら、私達つて色んな経緯があつてこうして集まつてるでしょう? 約束していたわけでもなくて、全部偶然の産物から生まれて、みんながみんな、”自由”な意思で動いていたから、私達は集まつた……つて意味を込めてるの」

そもその事の始まりは、ハバキリが元いたフォースを離れたことから。

ハバキリがセアと出会い、その二人にジルが拾われ、ハバキリを通じてコーダイがセアと知り合い、ハバキリ（シャルル）がサツキーと出会つては引き込んだ。

誰かがこうなることを仕組んだわけではないし、期待したわけでもない。

各々の自由意思が重なり合ったことで、偶然生まれたフォースだと、セアは言うのだ。

「はえー、凄く深いネーミングですね……」

サツキーは納得したように頷いている。

「オレは賛成ですよ。コーダイはどーよ?」

「俺も異議なし!」

ハバキリとコーダイも賛成し、それにサツキーも便乗。

「ジルちゃんはどうかな？」

ある意味で、このメンバーの最高決定者（？）であるジルを窺うセア。

そのジルは特に考えたような様子もなく首を縦に振る。

「なんか、カツコいい。うん、うん」

全員賛成による可決。

ここに、フォース『リヴェルタ』が結成した。

ちなみにフォースリーダーは、この中で一番歳上であることと、チーム名を可決させたとする理由で、セアが推薦された。

本人は慌てて辞退しようとするものの、ハバキリが煽り立て、コーダイがベタ褒めし、サツキーがエールを送り、最後に最高決定者（？）のジルが再度推薦したことで、渋々と承認してくれた。

「さて、フォースが無事に結成されたところで、次の問題だな」

フォースが結成されたことによって、フォースネストの使用が認められるようになったハバキリ達は早速そこへ移動し、ブリーフィング用のモニターを起動させていた。

「オレ達のフォースの、デビュー戦。その相手を、どこかフォースにするかだ」

その問題を提唱するハバキリに、サツキーはすぐに意見を挙げる。

「そんなの、あたし達と同じくらしいのランクのフォースでいいんじゃないの?」

何故そこで相手に悩む必要があるのかとサツキーは疑問符を浮かべるのだが、ハバキリはその理由を答えた。

「さて問題です。オレ達のフォースには、一人だけSランクって言う上級者がいます。それは誰でしょう?あ、ちなみにオレはDランクだからな。ホントダヨーウソジャナイヨ」

その問い掛けに、サツキーとセアの視線がコードダイに向けられる。

「つて、そりゃハバキリはいつペンデータ消したからランクが最初からになってるだけで、実力そのものはSランク級だろ?」

「まーな」

否定はしなかった。

「でもだからって、平均ランクSの上位フォースの相手になってもらうか?それじゃサツキーはともかく、セアさんには荷が重すぎる」

ハバキリが懸念するのは、メンバー達の中でランクや実力に差がありすぎることだ。

その逆もまた然り。

同じく結成したばかりでまだビギナーから脱却し切れていない者達ばかりの相手な

「どしようものなら、ハバキリとコーディネイの二人だけの独壇場と化すだろう。」

「でもそれだと、私達にとつても相手にとつてもちようどいい相手つて、少ないんじゃないかな？」

セアは申し訳無さそうにしながらも挙手する。

自分がこのフォースの平均ランクを下けているからだ。

「そーでしよーけど……とりあえず、フォース戦の募集を掛けてみますか」

ハバキリはコンソールを操作してフォース戦の募集掲示板を開き、自分達のフォース・リヴェルタの公開可能な範囲でのデータを投稿する。

『初心者、中級者、上級者、なんでもござれのワイワイフォース！同じようなフォース、探してます！初心者狩りの皆さんも大歓迎、一人残らずブチ○してあげます！』

と言う（物騒な）自己紹介文を打ち込み、投稿した。

「よし、募集は掛けた。コーディネイ、助っ人の件は？」

ハバキリは、自分のコンソールパネルを操作しているコーディネイに目を向ける。

「今、ミツキにメール送ったとこだ。この時間なら、すぐに返信してくれるはずだけど……」

そう言った途端、すぐさまコーディネイに通知が届いた。

「おっ、来た来た。えーと、『了解しました。では、そちらの平均ランクを鑑みて、C、ま

「たはBランクの方を派遣致します」……だつてよ」

概ね、色の好い返信のようだ。

フォースの結成と、フォース戦の募集、助っ人の問題もひとまず解決したところで、今日は軽めのミツシヨンをこなすことにした。

その日の晩。

夕食を食べ終えてお茶を啜っていたハバキリは、ダイバーギアにメールの着信が届き、パツと手に取った。

「(セアさんからか)」

恐らく、今日のフォース戦の募集や、助っ人の派遣に関する連絡網だろう。

(形式上は)セアがフォースリーダーであるため、フォース・リヴェルタに関する連絡や通知は、一括して彼女に届くようになっていた。

一度セアが目を通し、それからハバキリ達他のメンバーにも同じ内容を彼女から送信されるのだ。

セア：お疲れ様。今日のフォース戦の募集についてだけど、是非ともマッチしてほし  
いってフォースが来てくれたの。向こうのフォースの情報は、添付した画像に書かれて



いるから、ちゃんと確認しておいてね。助っ人のことは、ミツキさんの方から直接みんなに連絡を入れるとのことですよ。

そのメッセージの下に添付されている画像を開き、拡大してみる。

フォース名『フラワーズ』

その名前を見て、ハバキリは目を細めた。

「（フラワーズって言えば、確かかなり上の方にいるフォースだよな？）」

フォース名から記憶を掘り起こすハバキリ。

確か、中高年層のユーザーが有志で集まって出来たフォースで、去年の初夏に勃発した、反マスダイバー連合軍とマスダイバー達の戦い『アデレート攻防戦』にも参戦していたはずであり、少なくとも全員Aランク以上には到達しているはずだ。

しかも噂によれば、あの伝説のフォース・ファイアワークスのメンバーの一部が吸収されたとも聞く。

何故そんなベテラン揃いのフォースが、初心者混じりの自分達とマッチしたいと近づいて来たのか。

しかしハバキリの記憶とは裏腹に、表示されているフォースメンバーは、D、C、Bと、ランクにややバラつきのあるメンバーで構成されており、（ハバキリがランク詐欺紛いなことをしている点を除けば）ちょうど自分達と均衡が取れたフォースともいえる。

フォースリーダーには、『鉄血のオルフェンズ 月鋼』の登場人物の一人である『ロザリオ・レオーネ』に似た壮年の男性ダイバーの顔画像が表示されているが、他のメンバーは高校生、もしくはは大学生くらいの若者だ。

画像の下にある自己紹介文に、『フォース・フラワーズの下部組織ですが、フォース戦は未経験です。お手柔らかにお願い致します』と書かれているのを見て、「二軍みたいなもんか」とハバキリは納得する。

「バトルの予定日は……今週の日曜か」

ちようど一週間後と言うことらしい。

期間に幾分か余裕がある方が、後から参加してくる助っ人ダイバーと作戦を合わせることも十全に行えるはずだ。

それなら残る懸念は、ミツキから派遣される助っ人がどのような人物か、だ。

ミツキの伝手であれば、足並みを揃えずに独走するような者は送ってこないはずだが、それでも気になるものは気になる。

そこばかりは焦れても仕方ないとして、ミツキからの連絡を待つ他ない。

すると、続いて別のダイバーからのメールが届いた。

セアからの連絡網を一度閉じて、受信されたばかりのそれを開く。

焦れても仕方ないと割り切ったばかりのところへ、ミツキからのメールが送られてい

た。

ミツキ：お忙しいところに失礼します。例の助っ人の件についてですが、Bランクのダイバーをご紹介致します。助っ人さんは、明日にでも顔合わせをしたいとのことですが、いかがでしょうか？

なるほど、話が早くて助かる相手のようだ。

ハバキリはすぐにミツキへと返信する。

ハバキリ：オケー、理解した。一応、最後の承認はウチのリーダー、セアさんに任せてるから、そっちにも再度連絡頼むわ。

そう返信してから数十分後に、セアの方から再度連絡が送られ、明日の16時頃にエントランスロビーで待ち合わせをする、と言う運びとなった。

翌日。

「……まさか、ミツキの言う助っ人がアンタのことだったとはな」

GBNエントランスロビーで、既に待っていた助っ人の姿を見て、ハバキリは何とも言えぬ表情を浮かべる。

「ボクの方だって、君らのことって知らされずに請け負ったんだけど？」

ハバキリ達フォース・リヴェルタの前にいるのは、先日セアが遭遇した、蒼い髪の中性的な容姿を持つダイバーである『エミル』だった。

微妙な空気になる前に、リーダーであるセアが積極的に動く。

「えーと、エミルくん、だよね。今回、私達のフォースの助っ人を請け負ってくれてありがとう。改めて自己紹介させてもらうけど、私はセア。一応、このフォースのリーダーをさせてもらってます」

「（こちらこそ改めまして、ボクはエミルです。ミツキを通じて、一時的な助っ人と言う形でフォースに入隊させていただきます。これから少しの間、よろしく願います）」

エミルの方も、セアの挨拶に対して相応の礼儀を返す。

ハバキリ、コーダイ、サツキー、ジルも各々の自己紹介をしてから、早速日曜日に控えているフォース戦の交流試合に向けてのブリーフィングを行うため、フォースネストへ移動する。

「はいと言うわけで、俺達フォース・リヴェルタのデビュー戦に向けて、色々とお互い確認していきたいと思いまーす」

モニターの前に立って作戦会議の進行を買って出るのは、コーダイ。

エミルは「こう言うのって普通リーダーがするものでは？」とハバキリに零したが、

リーダーであるセアはガンダムやガンプラに関する知識に乏しいため、参謀としてコーダイがそれを取って代わっている、と答えた。

その答えに特に異を唱えることもなく、エミルは黙ってコーダイの進行を聞く。

各々のガンプラのスペックや武装を見て、フォース戦におけるポジションや役割りの分担などを決め、バトル開始からの具体的な作戦進行などを組み立て、その通りに進められるどうかをトレーニングモードやクリエイトミッションなどで繰り返しシミュレートし、時には通常のミッションを受けることで互いの連携力を高めていく。

それらを数日かけて行い、一週間はあつという間に過ぎていった。

日曜日。

今日は、待ちに待ったフォース戦の当日だ。

ハバキリ達フォース・リヴェルタの面々は、ミツキの案内によつて自分達のガンプラを搭載させた輸送機に乗って、フォース戦が行われる現地へと向かっていた。

指定されたその場所は、色とりどりの花々が咲き乱れる庭園と、それに合わせたように作られた巨大な城——実在するベルサイユ宮殿を再現した——、今回の対戦相手となるフォース・フラワーズのフォースネストだ。

普段から彼らが利用しているハンマーヘッドもフォースネストと言う名目であるが、どちらかと言えば移動拠点のような扱いであると、フラワーズの幹部クラスの一人は語る。

庭園に設けられた発着場に輸送機を着陸させてから降りると、既に何人ものダイバーが待つてくれている。

その代表だろう、シスター姿の女性——ミスズが一步前に出た。

「初めまして、フォース・リヴェルタの皆様。私はフォース・フラワーズの代表のミスズと申します」

それに対しては、一応のリーダーであるセアが応じる。

「こちらこそ、初めまして。フォース・リヴェルタの、一応のリーダーの、セアです。今日は、よろしく願います」

一応のリーダー、と言う言い方を聞いて、ミスズの後ろにいるメンバー達の、若者達からどういふ事だろうかと言うような目でセアを見る。

それを止めさせるように、ミスズの方から話を切り出す。

「ミツキさんからお聞きしているとは思いますが、今回のフォース戦は私達フラワーズの、下部組織……新規入隊者によるチームがお相手致します。ではナオエさん、後はお願い致します」

ミスズは一步後ろにいる、下部組織のリーダーである、ロザリーオ・レオーネに似た壮年の男性ダイバーに目配せして、若者達の後ろに下がる。

「初めまして、『ナオエ』と言います。元釣具屋の店主で、今は楽隠居の身です」

じきに還暦を迎えるだろう年齢に見えるナオエは、穏やかな物腰でセアに一礼する。

「孫のために道楽でガン普拉バトルを始めたもんですが、よろしくお願いします」

「お孫さんのために？あ、いえ、こちらこそお願いします」

込み入ったことを訊ねかけて、慌てて挨拶を返すセア。

その彼女の一步後ろでナオエを見ていたハバキリは、表情に出さないように彼を睨んでいた。

「（あのおっさん……道楽者の目じゃねーな。ボケたフリした喰わせ者つてところか……）」

何にせよ、高齢とはいえ侮って勝てる相手ではなさそうだ。

「うんうん、若くて元気な子達と張り合えるつてのはいいい機会だ」

いかにも年寄り臭そうなことを言うナオエ。果たしてそれが演技なのか、それとも素なのか。

ハバキリの疑念を他所に、彼らと同行していたミツキが取り仕切る。

「これより、フラワーズ二軍とリヴェルタの交流試合を開始します。ルールは5 on 5

の殲滅戦。制限時間は無し、先に全機撃墜したフォースの勝利となります。場所は庭園郊外の森林地帯。審判は私、ミツキが務めさせていただきます。何かご質問等がございますか？」

特に双方からの質問もなく、円滑に進められていく。

「それでは、五分のインターバルの後にバトルスタートの信号を発信します。参戦者の方は、ガンプラへの搭乗をどうぞ」

ミツキの手にあるタイマーが押され、五分のカウントダウンが開始、フラワーズ二軍の面々は慌ただしく自分達のガンプラを待機させている場所まで急ぐ。

その中で、セアはジルを連れてミスズの方へ向かう。

「えーと、ミスズさん。打ち合わせていた通りに……」

「そちらの、ジルちゃんのことですね。バトル中の間、こちらでお預かり致します」

ジルはバトルを行うわけではないので、安全な場所で観戦してもらう、と言うことを打ち合わせていた。

「ジルちゃん、フラワーズの皆さんに迷惑かけちゃダメだよ?」

「はい」

嫌がることもなく、ジルはミスズへ預けられ、手を引かれて宮殿の方へ連れられる。



輸送機に積載しているガンプラに乗り込んでいくフォース・リヴェルタの面々。

「さて、オレ達のフォースのデビュウ戦つてことで、リーダーのセアさん、一言どーぞ」  
ジンライ改を起動させたハバキリは、オープン回線にしてそう言った。

「えっ、そう言うことも言わないとダメ？」

そのジンライ改の隣で、フリーダムガンダムのPS装甲を起動させているセアは戸惑うものの、

「よっしやー！ここは一発お願いしますよ、セアさん！」

コーダイがそれに便乗し、

「セアさんのありがたいお言葉、あたしは聞きたいですね！」

サツキーが後押しし、

「士気を高揚させるのは、リーダーの役目のひとつですよ」

最後にエミルが正論で逃げ場を無くす。

「うう……分かった……、こほんっ」

諦めて、セアは一度咳払いで前置きを置く。

「えー……つと、今回、私達のフォースのデビュウ戦になるわけだけど……みんなで協力すればきつと勝てるはずだから、が、頑張ろう！」

戦意高揚と言うにはあまりに稚拙だが、その言葉にコーダイとサツキーは囁し立て、

ハバキリとエミルは静かに頷く。

五分のインターバルが経過し、ベルサイユ宮殿からバトルスタートの信号弾が上げられた。

「ハバキリ、ジンライ改!」

「コーダイ、キャノパルド!」

「サツキー、ガンダムデスレイザー!」

「エミル、七星剣士エクシア」

「セア、フリーダムガンダム!フォース・リヴェルタ、行きます!」

掛け声と共に、一斉に輸送機から出撃していくリヴェルタのガンプラ達。

ハバキリのジンライ改は、いつもと同じく、アサルトライフル、重斬刀、シースザンバーの三つを装備して出撃。

コーダイのキャノパルドは、ビームライフルと脚部にミサイルポッドに、今回は予備としてビームガンも追加している。

サツキーのガンダムデスレイザーは、相変わらず潔くビームシザーズ一丁だけ担ぎ、アクティブクロークをバサリと広げる。

エミルの七星剣士エクシアは、以前に邂逅した時とは異なり、本来のガンダムエクシアと同じ、セブンソードー七つの近接武装を全て装備している。

そして七星の機体名が示すように、七つの近接武装全てに、北斗七星の銘を与えられている。

GNソードの【巨門】

GNビームサーベルの【天枢】【禄存】

GNビームダガーの【天権】【開陽】

GNロングブレイドの【玉衝】

GNショートブレイドの【揺光】

左肩から羽織っているマントだが、ガンダムエクシアリペアのように腕を失っているわけではなく、実はA・B・C（アンチビームコーティング）マントである。

セアのフリーダムガンダムは原典機にはない、『グングニル』と名付けられたオリジナルのバズーカ砲を持ち、本来のルプス・ビームライフルはリアスカートにマウントしている。

これは、元々は『ストライクバズーカ』と通称される、ストライクガンダムの装備のひとつであり、ハバキリがそれをザフトガンダムタイプ用に改造したものだ。

以前にセアとハバキリのデート（違う）の時に、「C・E.」におけるハイパーバズーカの「的な武装」として、ハバキリがセアのために作っていたものである。

森林地帯の深い木々の隙間に潜む陰が二つ。

白灰色と黒のモノトーンカラーのゲイレールと、ガンダムデユナメス。

フラワーズ二軍のリーダーであるナオエは、搭乗機であるゲイレールに片膝を着かせながら、メンバー各機に通信を行っていた。

『さて、鬼が出るか、蛇が出るか……各機、状況はどうかかな?』

前線にいる、ウイングガンダム、ブレイズザクファントム、ブルーディスティニー号機の三機の内、副長であるブルーディスティニーがそれに応じる。

『全機、配置完了しました。後は作戦通りに動くだけです』

『作戦通りに動くだけ……で上手く行けばいいんだけどねえ。まあ、無理せずに行くとしよう』

『了解!』

前線の三機は、油断なく身構えながらも前進し、残るゲイレールとガンダムデユナメスはそれとは別方向へ移動を開始する。

出撃完了したフォース・リヴェルタ。

前衛はジンライ改と七星剣士エクシア、後衛はキャノパルド、中衛はフリーダムガンダム、遊撃はガンダムデスレイザーと言うフォーメーションを取りつつ、森林地帯を慎重に進む。

「どうだ？」

狙撃が行えるよう、高台を陣取っているコーダイは、ハバキリとエミル、セアの三人に通信を繋ぐ。

「敵さんはまだ姿が見えねーな」

「向こうも慎重ってことだね」

「こっちも、特に何も……」

注意深く辺りを観察している三人だが、それらしい反応はまだ見当たらない。

……と思った時には、ジンライ改と七星剣士エクシアのアラートが鳴り響き、一步遅れてフリーダムガンダムも反応する。

前方から二機、ウイングガンダムとブレイズザクファントムの三機が、それぞれマシンキャノンとビーム突撃銃で牽制を掛けながら向かって来る。

「来たっ」

セアはアームレイカーを捻り返し、襲い来る弾幕を回避していく。

「お出ましたな」

「数は二つか」

ハバキリのジンライ改も回避運動を取りつつもアサルトライフルを撃ち返し、エミルの七星剣士エクシアは右腕のソードライフルで続く。

しかし、その撃ち合いがほんの数秒だけ交錯すると、敵機は牽制を続けながらも後退を始めた。

「敵が下がる?」

牽制射撃を往なしつつ、エミルは相手の動きを見る。

「数的不利だから、つてわけじゃなそうだけど……」

セアは訝しみながらもグングニルのトリガーを引き、砲口から放たれた弾頭は、発射されてすぐに散弾となって飛び散るが、距離が開いているためにダメージらしいダメージを与えられずに、シールドに弾かれてしまう。

「……、……突っ込み過ぎない程度に、追いますか」

ほんの数秒で、相手が何を企んで下がるのかをいくつかシミュレートしたハバキリはそう進言し、三人は少しずつウイングガンダムとブレイズザクファントムを追う。

このまま追撃をしても、問題ないことを確信して。

フラワーズ二軍の前衛二機は、牽制を続けながらも後退している。

その様子をリーダーで確認している、小隊長のブルーデイスティニーは、自分達の作戦通りに事が進んでいることにほくそ笑む。

『いいぞ、このままこいつらを目標地点まで誘い込め』

ウイングガンダムとブレイズザクファントムが向かう地点には、複数のトラップが仕掛けてある。

陽動を掛けて誘導、トラップで動きを鈍らせたところへ強襲、さらに遠距離からガンダムデュナメスによる狙撃も行わせ、一気に各個撃破……それが、彼らの目論見であった。

しかし、リヴェルタの三機が前進しているにも関わらず、キャノパルドがその場から動かず、またガンダムデスレイザーの動きが全く見えないのも気に掛かる。

見えないものは仕方ないとして、とりあえずは作戦進行通りに動き、問題が発生しても早急に対処出来るよう、余裕を保つ。

しかし、ガンダムデュナメスからの通信で、その余裕は焦燥へとひっくり返ることになる。

『おい大変だ！敵の一機が、トラップを破壊してやがる！』

『何っ!?!』

ミラージコロイドを解除したガンダムデスレイザーがビームシザーを振り抜けば、張り巡らされたワイヤーが焼き切られ、それと連動するトラップが機能停止する。

「これで三つ目つと。この短時間でよくこんなに仕掛けたわね」

続いて頭部のバルカン砲を地面に向かって撃ち込む。

どこことなく不自然に掘り返されたような跡が見えるそこへ銃弾が突き刺さると、その地点を中心に連鎖爆発が起こる。

地中に仕掛けられた地雷を起爆させたのだ。

「さて、そろそろ気付かれるかな……つとー!」

不意に、彼方から粒子ビームが放たれてきた。

しかしサツキーは予めスタンバイさせていたウエボンセクターを押し込み、アクティブクロークを閉じる。

瞬間、粒子ビームはアクティブクローク表面の耐ビームコーティングに弾かれる。

防御に成功するなり、ガンダムデスレイザーはすぐにその場から離脱していく。

「さっきの狙撃は、H E S—88方向だから……」

サツキーはフィールド全体を映すマップにマーカーを付け、それをコーダイへ送信す



る。

ガンダムデスレイザーから送信されてきた座標データを確認するコーダイ。

「よし、サンキューなサツキー」

「わかつたのは方角だけよ。高度とか、詳しい距離とかは分からないのに、やれる？」

「陸戦で狙撃出来るポイントってのは限られてるからな。まあ、任せとけて……」

彼女との通信を終え、コーダイのキャノパルドは早速行動に移る。

どつしりと腰を落ち着けると、キャノパルドの肩部キャノン砲が可動、細かく位置調整されていく。

「(H E S—88方向で正確な狙撃が出来る場所は……ここしかない)」

コンソールパネルに映し出されているマップを拡大、狙撃可能な位置をすぐに割り出し、そこへ狙いを付ける。

「当たればラツキー、外れてもプレッシャー掛けられりや十分だ……発射ア!!」

雲を撃ち抜くかのように、蒼空へ向かってキャノパルドのキャノン砲が咆哮を上げた。

放たれた砲弾は放物線を描きながら、ある地点へ。

GNスナイパーライフルでガンダムデスレイザーを狙撃していたガンダムデユナスは、アクティブクロークにビームが弾かれたことに舌打ちしていた。

『チツ、一発じゃ貫けないか』

翼の大きさから見ても1/100スケールのパーツを使用しているのだろうかとは読み取れる。

狙撃されたことを警戒したのか、ガンダムデスレイザーはその場から離脱していく。

『このままおめおめと逃げられてたま……』

逃げられてたまるか、と言いかけたところに、ナオエのゲイレルが接触通信を行ってきた。

『何やってる、早くここから離脱だ』

『でも隊長つ、アイツが……』

『離脱だ。狙い撃ち返されるぞ』

ナオエがそう口にしたのが合図だったかのように、大気を切り裂く甲高い音と共に、空から何発もの砲弾が降ってきた。

空気抵抗の影響故か、それらは完璧ではないものの、この高台と言う場所を確かに狙っており、ドカンズドンと爆音を立てながら砲弾が地面に炸裂していく。

『なっ、何でこんなすぐに場所が……』

運悪く、ガンダムデュナメスの頭部に240mmのソレが直撃し、上半身を粉々に吹っ飛ばした。

ガンダムデュナメス、撃墜。

『あっちゃあ……』

言わんこつちやない、とナオエは嘆息を尽きながらすぐにその場から離脱していく。その直後に、数秒前までゲイレルがいた地点に砲弾が着弾した。

ガンダムデスレイザーがトラップを先んじて破壊し、キャノパルドの長距離砲撃がガンダムデュナメスを撃破。

「あら、いきなりですか?」

ベルサイユ宮殿の来賓室のモニターは、各機から見た戦況が映し出されている中、ミスズはガンダムデュナメスが撃破されたのを見て目を丸くする。

「先に敢えて狙撃させることで、座標を割り出したのか。撃たれてからすぐにそれが出来るのも、十分凄いなと思うけど……」

元ファイアワークスのメンバーの一人の『マサユキ』は、腕を組みながら目を細めた。

「……はむっ」

椅子に座りながら、チョコミントアイスをもきゅもきゅと頬張っているのはジル。

ブルーデイスティニーは、大慌てでウイングガンダムとブレイズザクファントムの二機と合流しようとして急いでいた。

トラップからの各個撃破と言う作戦を早くも台無しにされ、相手を誘い込むためにわざと数的不利の状況を作り出していたのに、このままでは二機とも不利なまま撃墜される。

目視で戦況を確認。

幸い、必死に抵抗してくれたおかげで、僚機二人はまだ撃墜されていないものの、追い詰められているのがありありと見える。

すると、青いジンの改造機ージンライ改が捕捉したのか、ウイングガンダムから目を切つてこちらへ向かって来る。

『(確かこいつはDランク……油断しなければやられはしない)』

フラワーズ二軍で、ナオエがリーダーとして就任する以前は自分が頭を張っていた彼は、自身がBランクであることを自負している。

故に、格下のランクであるジンライ改を相手にしても易々と突破出来るとは思っていない。故に、格下のランクであるジンライ改を相手にしても易々と突破出来るとは思っていない。故に、格下のランクであるジンライ改を相手にしても易々と突破出来るとは思っていない。故に、格下のランクであるジンライ改を相手にしても易々と突破出来るとは思っていない。

『(それに、まだ勝機はある。ナオエ隊長が来るまで持ちこたえれば、十分巻き返せる……)』

だが、彼は知らないのだ。

このジンライ改の『中の人』が、S、あるいはSSランク級の実力を持っていることを。

エミルはブレイズザクファントムと、ハバキリとセアはウイングガンダムと戦っているところへ、姿の見えなかったブルーディステイニーが駆け付けてきた。

ハバキリはそれを一瞥し、アサルトライフルでウイングガンダムを牽制しつつ、セアとエミルに声を掛ける。

「オレが今来たヤツを相手する。セアさん、ウイングガンダムの相手は任せましたよ」

「うん、任せました」

セアはウイングガンダムから注意を切らないまま応答を返し、グングニルで射撃を行い、それが最後の一発だったためにその場で放棄、リアスカートからルプス・ビームラ

イフルを取り出す。

一方のエミルは、GNソード【巨門】とGNビームサーベル【天枢】の二つを持って、ブレイズザクファントムのビームトマホークと打ち合っている。

GNビームサーベル【天枢】とビームトマホークが鏖迫り合い、弾かれ合う。

ブレイズザクファントムは瞬時に右手にあるビーム突撃銃のトリガーを引き絞るが、銃口を向けられた時点で七星剣士エクシアは、SDガンダム特有の身軽さを以てその場から跳躍、ビーム弾を飛び越えると、空中で回転しながらGNソード【巨門】を振り下ろした。

「でええいッー!」

対するブレイズザクファントムも、左肩のスパイクシールドを向けて防御の構えを取るが、GNソード【巨門】の質量と凄まじい斬れ味によって、スパイクシールドもろとも左腕を斬り落とされた。

『クソッ、やってくれたな!』

すぐに距離を取るべく、ビーム突撃銃を撃ちながらバックホバーして下がるブレイズザクファントム。

大苦戦。

フラワーズ二軍のブルーデイスティニーは、控え目に言つてそれしか言葉が出てこない。

ブルーデイスティニーは、ジンライ改のアサルトライフルの銃弾を辛うじて躲し、飛び下がりつつビームサーベルを脚部から抜き放つ。

『何なんだこいつ……ほんとにDランクなのかよ!?!』

「あー？Dランクに決まつてんだろ、アルファベットも読めねーのかよ」

ジンライ改はアサルトライフルの弾が尽きたのか、それを放り捨てると、利き腕である左手に重斬刀を抜き放つ。

互いに接近戦になるようだ。

先に動いたのはブルーデイスティニー。

振り抜かれるビームサーベルに対して、ジンライ改は丹念にコーティングされた重斬刀の腹でそれを受けてみせる。

ほんの少しだけ受ける力を逸らせば、ブルーデイスティニーはビームサーベルを空振りし、ジンライ改はすぐさまその無防備な脇腹を蹴り飛ばす。

それを追撃せずに、ハバキリはセアとエミルの状況をサイドモニターから確認する。

セアのフリーダムガンダムはウイングガンダムとビームサーベル同士の間で格闘戦へ移

行し、エミルの七星剣士エクシアはブレイズザクファントムを左腕を破壊して戦闘力を削いだようだ。

それだけ確認して再び身構えるジンライ改だが、不意にブルーデイスティニーは明後日の方を向くと、踵を返して離脱していく。

「あれはゲイレール……あのおっさんの機体か?」

木々の隙間から、モノトーンカラーのゲイレールが見えた。

ブレイズザクファントムは、ビーム突撃銃をリアスカートに納めると、サイドスカートにマウントしてあるハンドグレネードを掴み、それを地面に放り投げた。

着弾すると同時に、ガスの噴射と共に灰色の煙が立ち込め始めた。

「スモークか」

ザクウォーリア（ファントム）の本来の武装である、煙幕弾を見て、エミルは下手に攻撃をせずに身構える。

一方のウイングガンダムの方は飛び下がり、バード形態に変形すると、ザクファントムが起こしたスモークに紛れるように飛び去った。

「エミルくん、追わなくていいの?」

セアはシールドで身を守りながら、様子を見ているエミルに声を掛ける。



「目の前もロクに見えない中を突っ込めって、ボクに「死んでこい」って言うつもりですか？」

「そ、そうだよ、今追い掛けたら危険だよ」

ここで追撃を行うことの危険性を理解したセア。

ふと、遊撃手として出撃して、トラップを破壊して回っていたサツキーのガンダムデスレイザーが合流してきた。

「相手さんは、仕切り直しってところですね」

ブルーデイスティニーが後退したのを見て、ハバキリのジンライ改も戻ってきた。

「んじゃ、こっちも仕切り直しだな」

前線を押し上げるために、コーダイのキャノパルドも高台から降りてくる。

そろそろスモークが晴れてくる頃合いだ。

だが、煙幕が晴れたと思えば、今度は光を反射する粒のようなものが辺りに撒き散らされる。

「ん？」

なんだこれ、とハバキリが目を細める。

同時に、味方からの通信がノイズに変わり、レーダー反応が消えてしまった。

「ミノフスキー粒子……いや違う、『ナノミラーチャフ』か！」

ナノミラーチャフとは、『鉄血のオルフェンズ』に登場する架空の物質であり、散布することでLCS通信やリーダー反応などを途絶させる攪乱物質だが、砲弾やミサイルの爆風などによって効果を失ってしまう欠点があり、劇中では実戦で使い物にはならないとされている。

しかし、使い物にならないと思われているからこそ、使ってくるとも思われず、虚を突くと言う点では有効である。

だが、今のジンライ改にはチャフを吹き飛ばせるだけの火器など装備していない。

そうなれば、とジンライ改はモノアイを回転させ、フリーダムガンダムの姿を見つけると、すぐに駆け寄って接触通信を行う。

「セアさん、聞こえていますね？」

「ハ、ハバキリくんっ? 何だか急に通信が出来なくなつて……」

「相手がそー言う攪乱物質を使つてきたんです。大丈夫、対処できます」

戸惑うセアを落ち着かせるようにハバキリは説明する。

「前方に向かつてフルバーストをしてください。それでチャフを吹っ飛ばせるはずですよ」

「フルバースト……こう、だね」

セアは複数のウェポンセレクターを開き、ルプス・ビームライフル、プラズマカノン

『バラエーナ』、レールガン『クスイファイアス』を同時に選択する。

すると、フリーダムガンダムの翼と翼の間に挟み込まれている巨砲と、サイドスカートに折り畳んでいる長砲が展開し、さらにルプス・ビームライフルも構えー

「いつ、けえッ!!」

五つの砲門が一斉に放たれた。

ビーム、重荷電粒子、電磁加速弾が木々を吹き飛ばし薙ぎ倒し、同時にナノミラーチャフを焼き払っていく。

「フリーダムが地面に足を着けてフルバーストって言うのも、なかなか絵になるなあ」  
通信が回復したらしく、エミルからそんな感想が聞こえてきた。

セアが放ったフルバーストが合図であったかのように、残る四機が焼き払われた木々から飛び出してくる。

ウイングガンダムがバスターライフルを構え、最大出力のそれは、熱プラズマの渦となつてハバキリ達を呑み込まんよと迫るが、瞬時に散開してやり過す。

それに続くようにブレイズザクファントムが背部のブレイズウイザードのバインダーを開き、その中に納められているファイヤビームミサイルを一斉射、さらにナオエのゲイレールの肩に取り付けられているミサイルポッドも発射されていく。

「ちっ、全部は迎撃出来ねえかっ」

コーダイのキャノパルドも脚部のミサイルポッドを撃ち返し、ビームライフルとビームガン撃ちまくって、合わせて40発近くのミサイルを撃ち落とすとしていくが、それでも10発ほどしか数を減らせず、前にいる四機にミサイルのスコールが襲いかかるが、「あたしに任せて!」

サツキーはミサイルのスコールの中へ突っ込むと、ガンダムデスレイザーはビームシザースを振り回し、ライトグリーンの旋風を思わせるビーム刃の波動を巻き起こし、ミサイルを次々に吹き飛ばしていく。

『こんな方法でミサイルを防ぐなんて?!』

「突撃あるのみいッ!!」

ブレイズザクファントムは驚愕しながらも、右のシールドからビームトマホークを抜き放ち、続いて突撃してくるガンダムデスレイザーを迎え撃つ。

『待つてろ、今援護に……』

ウイングガンダムがブレイズザクファントムの援護に向かおうとするが、「おーっと足が意図的に滑った」

瞬時に加速してきたハバキリのジンライ改がスライディングするようにウイングガンダムを蹴り飛ばす。

サツキーがブレイズザクファントムを、ハバキリがウイングガンダムをそれぞれ相手

にするのを見て、エミルとセアは自身のターゲットをブルーディステイニーとゲイレルへと切り替える。

対するブルーディステイニーとゲイレルは、それぞれ100mmマシンガンと、グレイズ用の120mmライフルを連射して牽制してくる。

ガンダムデスレイザーのビームシザースと、ブレイズザクファントムのビームトマホークが何度も打ち付けられ、その都度にスパークが木々の葉を焦がす。

振り下ろされるビームトマホークを受け止めるガンダムデスレイザーは、すぐに弾き返すなり反撃を仕掛けるが、ブレイズザクファントムは振り抜かれるビームシザースを潜り抜けるように回避し、そのままガンダムデスレイザーの右側面へと回り込んだ。

「やばっ……」

『もらった!』

右脇腹へビームトマホークを叩き込もうと迫るブレイズザクファントムだが、  
「……なんてね」

ガンダムデスレイザーは、ビームシザースを振りかぶったその状態から、背後を見ないままにその長柄の柄尻を突き出した。

いきなりビームシザースの柄尻が突き出され、それはブレイズザクファントムの頭部

に突き刺さった。

『ぐわっ、カメラがやら……』

それを言い終えるよりも先に、最後に見えた光景は、ガンダムデスレイザーが振り向きながらビームシザーズを薙ぎ払う姿だった。

ブレイズザクファントム、撃墜。

七星剣士エクシアとフリーダムガンダム、ゲイレルとブルーデイスティニーが中距離から撃ち合う最中、ブルーデイスティニーの100mmマシンガンが沈黙した。

『弾切れか……すみません隊長、仕掛けます!』

ブルーデイスティニーは右手にビームサーベルを持ち直すと、

『EXAMシステム、起動!』

グリーン一色だったブルーデイスティニーのバィザーが紅く発光した。

本来、このEXAMシステムは暴走する可能性の高い、非常に危険なシステムなのだが、GBN上では一定時間の間、機動性と出力を底上げする武装として組み込まれている。

「EXAMを使ってきたか。セアさん、ボクがコイツを相手します」

赤光が尾を引きながら迫り来るブルーデイスティニーに対して、エミルが相手を引き

受ける。

猛烈な速度で振るわれるビームサーベルに対して、エミルはあくまでも冷静に対応していた。

大振りなGNソード【巨門】をその場でパージし、もう片方のGNビームサーベル【緑存】を抜刀、二刀流の構えを以てブルーデイスティニーを迎え撃つ。

『オラアアアア!!』

一撃、二撃、三撃と振り抜かれるブルーデイスティニーのビームサーベルを、踊るように受け流していく七星剣士エクシア。

しかし、EXAMシステムによる圧力の前にはいつまでも凌げるわけではない、右手のGNビームサーベル【天枢】が弾き飛ばされてしまった。

『こいつでエエエッ!』

ビームサーベルを突き出しながら突っ込んでくるブルーデイスティニー。

対する七星剣士エクシアは、空いた右手でマントを掴むとー

ふわり、とそれをブルーデイスティニーの頭部に放り被せた。

『なっ、えっ、ちよっ!?!』

突然視界が真っ暗になり、ブルーデイスティニーは突撃の速度を殺して狼狽えてしま

ビームサーベルの間合いにまで踏み込んできて、その狼狽は自殺に等しい。

「システムのパワーに振り回されてるんだよ」

そして、そんな隙を見逃すエミルではない。

七星剣士エクシアは右手にGNロングブレイド【玉衝】を抜き放ち様にブルーデイス・ティニーの胴体に突き刺し、

「終わりだ」

間髪なく左手のGNビームサーベル【祿存】も振るい、コクピットを斬り裂いた。

ブルーデイスティニー、撃墜。

蹴り飛ばしたウイングガンダムを追い詰めるように、ハバキリのジンライ改は急激に速度を上げながら迫る。

どうにか転倒しないように姿勢を保ったウイングガンダムは、向かって来るジンライ改へバスターライフルのトリガーを引こうとするが、

「読めてんだよ」

ジンライ改は左手に握る重斬刀を、槍投げの要領で投擲した。

投げ付けられたそれは、エネルギーが臨界寸前のバスターライフルの銃身に突き刺さった。



『やつべ!?!』

暴発する、とウイングガンダムは慌ててバスターライフルを放り捨て、一拍を置いて持ち主を失ったバスターライフルが大爆発を起こした。

しかし安堵している暇はない、ジンライ改はすぐにでも迫り来る。

ウイングガンダムはシールドからビームサーベルを抜刀し、

ジンライ改へ接近戦を仕掛けようとするが、

「よつと」

突然、ジンライ改のフロントスカートが跳ね上がると、その内側からチェーンに繋がれたアンカーが飛び出し、ウイングガンダムの右腕に咬み付いた。

ハバキリは、ジンライ改のフロントスクートをジンハイマニューバのモノに取り換えるにあたり、余剰スペースに長くないものの、アクセサリチェーンを改造したものを取付けたものを仕込んでいたのだ。

『なつ、は、離せっ!』

「離せって言われて離すアホは……」

ジンライ改はそのまま力任せにウイングガンダムを引き込むと、

「いねーっての!」

リアスカートにマウントした状態のまま、シースザンバーから斬鋼刀を抜刀、ウイン

グガンダムを真つ二つに斬り裂いた。

チエーンアンカーがフロントスカートに納まると同時に、ウイングガンダムが爆散した。

ウイングガンダム、撃墜。

「後は、セアさんだな」

ジンライ改のモノアイが、激しく交錯するフリーダムガンダムとゲイレールの戦況を捉える。

エミルがブルーデイスティニーの相手を引き受けた時点で、セアはナオエのゲイレールと戦うと決めた。

『君が相手かな?』

ゲイレールはフリーダムガンダムにロックオンし直すと、すぐさまライフルを撃つてくる。

対するセアのフリーダムガンダムは、シールドで銃弾を受けながらも距離を詰め、ある程度の距離に踏み込んだところで、ウイングバインダーからバラエーナを発射する。

一対の重荷電粒子はゲイレールを呑み込まんと迫るが、ナオエはゲイレールを跳躍させて片方を回避し、もう片方は肩の盾で防いだ。

「弾かれた!？」

セアは知らなかったのだが、ゲイレールに限らず、HGIBOのガンプレーは『ナノラミネートアーマー』と言う特殊な装甲に守られており、直接打撃や炎熱には弱いものの、射撃武装のほとんどを弾き返してしまう代物だ。

とは言え、フリーダムガンダムの最大火力であるバラエーナの威力の前には、さしものゲイレールも完全に無効化は出来ず、吹き飛ばされてしまう。

『つとと、危ない危ない。これは何度も受けられないなあ』

ゲイレールはどうか受け身を取って着地するなり、リアスカートのホバーユニットを噴かし、今度は自らフリーダムガンダムへ接近戦を仕掛けに行く。

「射撃が通らないなら……」

セアはルプス・ビームライフルをリアスカートへ納め、右手にラケルタ・ビームサーベルを抜き、自らもまたゲイレールへ向かう。

瞬間、フリーダムガンダムのラケルタ・ビームサーベルと、ゲイレールのバトルアックスが衝突する。

しかし鏖迫り合いにはならず、ゲイレールの方から弾き返した。

反撃が来る、とセアはシールドでボディを守ろうとするが、ナオエの狙いは違った。バトルアックスをシールド裏に引っ掛け、それを引っ剥がしてしまった。

「!」

続いてゲイレールはライフルのゼロ距離射撃を叩き込もうとするが、セアは咄嗟にラケルタ・ビームサーベルを振り上げてライフルを破壊した。

『やるねえ』

ナオエのゲイレールはライフルの爆発から逃れ、一度フリーダムガンダムから距離を置いた。

同様に、セアもまたゲイレールから距離を取る。

「(射撃が通らないのは、装甲に何かタネがあるからで……)」

彼女の脳裏に再生されるのは、バラエーナを弾き返し、受け身を取って着地するまでのゲイレールの様子。

「(……それなら!)」

思案はそこまで、既にゲイレールが目前に迫り来る。

フリーダムガンダムはその場から動かない。

セアはロックオンカーソルを合わせていく。

『いただくぞ!』

バトルアックスを振り上げるゲイレール。

その寸前に、フリーダムガンダムの両サイドスカートのクスイファイアスが展開し、

「当たってえッ!!」

放たれた一対の電磁加速弾の狙いは、ゲイレールの両腕の関節。

可動部を正確に狙い撃った電磁加速弾は、その両腕を貫いた。

ナノラミネートアーマーの恩恵を受けているのは、あくまでも装甲の表面のみ。

無論、内部フレームも容易く破壊されるものではないのだが、衝撃を殺し切れない可

動部だけはどうしても脆い。

さらに、局所攻撃を行うに当たり、火力は高いもののナノラミネートアーマーに弾かれる可能性の高いバラエーナではなく、砲身が長く、ビームと比べても空気抵抗の影響を受けにくい実体弾であるクスィファイアスを選んだ。

セアはこの短時間、ゲイレールと僅かに競り合っただけで、その複数を見抜いたのだ。

『なんと!』

予想外な形で両腕を破壊され、その衝撃でナオエのゲイレールは吹き飛ばされ、地面に叩き付けられると、リアスカートを構成していたホバーユニットが接続部から破損して外れてしまい、派手に砂煙を上げながら転倒してしまふ。

コクピットの震動に顔を顰めるナオエは、ゲイレールが止まってから前方を視認する。

その目の前には、フリーダムガンダムがゲイレールを見下ろしながら、ラケルタ・ビー

ムサーベルを突き付けていた。

「私の、勝ちです」

『ふむ……降参』

両腕を失っているため、ゲイレールのコクピットハッチを開けて生身を見せることで降参を示すナオエ。

他のメンバー達も、ナオエがセアと戦っている間にやられてしまったようだ。

『そこまで!』

途端、ミツキのアナウンスが戦場中に響き渡る。

『フラワーズ二軍の全機行動不能、降伏を確認。よつてこのバトル、フォース・リヴェルタの勝利です』

一拍を置いて、停戦を表す信号弾が上げられた。

撃墜されたフラワーズ二軍のメンバー達がセーブポイントからリスポーンされてから、ハバキリ達とナオエは再びベルサイユ宮殿の庭園まで戻って来た。

「今日は、ありがとうございました」

リヴェルタの代表として、セアが一步前に出て頭を下げ、同じくフラワーズ二軍代表

のナオエも做う。

「こちらこそありがとう。なかなか面白い体験をさせてもらったよ」

いやはや強いねえ、とナオエは苦笑してみせるが、

不意に、誰かに対して通話の着信が届いた。フォース・リヴェルタのものではない。

「ああ、少し失礼……」

ナオエのものだったらしく、セアの前から離れてから通話を応じる。

「はい、こちらイノグチで……、……ターゲットのログイン元が特定出来た？……分かった、すぐにログアウトして向かう。切るぞ」

その通話に応じる声は、好々爺のそれではない、まるで別人のようにトーンの低いものだ。

しかし、通話を終わるとすぐにまた穏やかな物腰に戻る。

「挨拶の途中で悪いけど、ちよつと急用が出来てねえ。ログアウトさせてもらうよ」

それだけ告げると、ナオエはコンソールパネルを呼び出し、さつさとログアウトしていった。

どういう事かと、リヴェルタの面々は顔を見合わせているが、それは副長であるブルーデイスティニーのダイバーが答えてくれた。

「ナオエ隊長は、楽隠居してるって周りには言ってるんだけど、たまにあんな風にいきな

りいなくなるんだよ」

俺らの知らないところで危ないことでもやってるのかねえ、とぼやく。

ナオエがログアウトしたことで、二軍ではないフラワーズのリーダーであるミスズが代わる。

「本日はお疲れ様でした。初めて……ではない方もいるようですが、初のフォース戦はいかがでしたか?」

ちらり、とミスズの視線がハバキリとコーダイに一瞬だけ向けられたが、男子二人は気付かないフリをした。

「緊張しましたけど、とても楽しかったです」

嘘偽りなく、真っ直ぐに答えるセア。

「それなら何よりです。これからも、その楽しむ気持ちを忘れぬよう、精進することを期待します」

ミスズはその言葉を区切りに、二軍の面々に向き直る。

「何をしているのです。お客様方がお帰りになられるのですよ? 早急に輸送機の準備を」

「「はっ、はいッ!!」「」

二軍の青年達は慌ててミスズに敬礼すると、ハバキリ達が乗ってきた輸送機の発進準備



備へ取り掛かっていく。

エンジンの起動やガンプラの積載なども全てフラワーズ二軍のメンバー達が全て行ってくれたおかげで、輸送機はすんなりと離陸を開始し、ベルサイユ宮殿から離れていく。

「案外楽に勝てたわね」

機内には自分達しかいないために、先ほどは対戦相手の手前、言えなかったことを口にするサツキー。

「まあ、俺とハバキリからしたら、勝って当然って感じだけだな」

フォース戦に慣れているコーダイにとっては、今回の相手は取るに足らない相手とも言えた。

「あのナオエさんのゲイレールが、少し上手かったくらいじゃないかな」

エミルは、ガンダムデュナメスを撃破されてから、ナオエのゲイレールが合流してからの立て直しの早さに着目していた。

GBN初心者に変わりはないだろうが、年の功とでも言うべきなのか、落ち着いた立ち回りを最後まで崩していなかった。

三人が話している隣で、セアはジルと話していた。

「ジルちゃん、フラワーズの人達はどうだった?」

「えっとね、ちよこみんとあいす、って言う冷たいのを食べさせてくれたの」

「ご馳走してくれたんだ?」

私もなんか食べたくなくなってきた、とセアは小さく笑う。

セアとジルが楽しそうに会話しているそのもうひとつ隣の座席では、ハバキリが頬杖を置きながら窓の外を見ていた。

「(オレとコーダイはこーして新しい居場所を作ったけど……お前は今何やってんだ? トーシロー)」

夕暮れの茜色の空に、かつての戦友を思い浮かべる。

その戦友との再会がすぐ近くに、そして全く予想外の形で待ち受けていることを知る由もなく、輸送機はゆっくりとベース基地の発着場へと減速していったー。ー。

### 【次回予告】

エミル「さて、フォース戦も終わったから、ボクはこれにてお役御免だね」

セア「そう言う約束だったけど……エミルくん、どうしてもフォースには入らないの？」

サツキー「そうだよ。短い間だったけど、あたし達、仲良くやれてたじゃない」

コーダイ「まあまあ、今すぐ無理強いしなくてもいいだろ？気が向いたら、またいつでも来てくれよな」

エミル「そう言ってくれるとありがたいよ。じゃあね」

ハバキリ「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション

『Cold moon』

ジル「エミル……どうしてそんなに苦しそうなの？」

## 12話 Cold moon

「トラちゃん。アナタ、『ファイアワークス』のことは知ってるでしょう？」

バーテンダーは、仮面の獣人が残っていたコーヒーカーップとそのソーサーを回収しながら、そのフォースの名を口にする。

「うむ。かつてフォーストーナメント三連覇を成し遂げた、あの伝説のフォースのことだな」

トラちゃんもその名を知っていたために頷く。

「そのファイアワークスのメンバーちゃん達が、引退したのはだいぶ前だけど、フォース自体を解散したのはつい最近のことなのよねえ」

「去年の8月辺りだったか？ 確か……『GBN上におけるニュータイプ理論』を、オキバ・アキヒト氏が構築した『真阿頼耶識システム』で、クサナギを験体として実現しようとしていたはずだったな」

その当時の戦闘データは、不用意に再現されると危険であることもあって、ファイアワークスの面々によって削除、復元不可能なようにしたはずだが、例によって例のごとく、トラちゃんはそのデータのバックアップを取っている。無論、非合法な手段を用い

て、だが。

「実験機として使われたRX-78（ガンダム）が暴走、いくらダイバーの救助を最優先していたとは言え、あのファイアワークスのフルメンバーが総出で掛かっても止め切れなかった。もつとも、ヒメカワ嬢が呼び掛けてようやく止まったようだが」

「アタシも、削除される前にその戦闘データを一度見せてもらったけど、とんでも無かつたわねえ。あれはもう、チートどころじゃないわ」

本気のキョウヤちゃんでも果たして止められたかどうか、とバーテンダーは溜め息をつく。

「何もないところから、あらゆるガンダム作品の武器を生み出しては、雨あられのごとく飛ばしてくると言うものだ。」

その上、ガンダム本体の戦闘能力も尋常ではなく、験体であるダイバーが日本武道の達人ともなれば、瞬きしたそのコマ秒にパンチやキックを5、6発ほど叩き込まれていた、なんてこともあった。

最終的には、そのダイバーの幼馴染みの女の子の必死の呼びかけによつて一瞬だけ動きを止めた際に、ガンダムグシオンリベイクフルシテイのシザーシールドが右足を、ガンダムバルバトスプラスのレンチメイスが左足をそれぞれ挟み込み、その上からガンダムバルバトスプラスレクスのワイヤーブレードで全身を雁字搦めにし、さらにケンブ

フアーがガンダムを羽交い締めにし、なおも暴れようとするところへガンダムデスサイズヘルのツインビームサイズで頭部を斬り落として、ようやく止まったと言う。

「そのフアイアワークスだが……解散した今、メンバーの一部は、ナンブ女史の『フラワーズ』に吸収されたとも聞く。後は……新参者の練兵にも力を入れているのだったな」

「新米ちゃん達は、あんまり訓練の成果を出せてないようだけどねえ」

初戦の相手が悪かっただけかも、と苦笑するバーテンダー。

「すまんが姐さん、お冷のおかわりを頼む」

「はいはい」

トラちゃんがそう頼むと、バーテンダーはトラちゃんのコップを取り、氷をいくつかに入れてから水を注ぎ、カウンター席へ戻す。

「フツ、昔語りをしていたはずだったが、随分と話が脇道に逸れてしまったな」

「話したいことを話しに来たんでしょ？脇道も寄り道も、したっていいじゃないの」

「それもそうか」

ならばそうさせてもらおう、とトラちゃんはお冷を口へ注ぐ。

よく冷えた水が喉の渴きを潤すのを確かめてから、コップを置く。

「姐さんよ、俺はひとつ思うのだがな。ELダイバーとは、何を以てして、ELダイバー

なのであろうな？」

「唐突な上に、よく分からない質問ね？」

そうねえ、とバーテンダーは思案するように首を傾げる。

「……抽象的に言えば、ヒトの無意識の集合体、あるいは具現化かしら。何にせよ『存在自体が矛盾している』とも言えるわね」

「矛盾とな？」

「だってそうでしょう。データ化出来ないようなものが集積するなんて、矛盾以外の何物でもないじゃない。ましてや、GBNはあくまでもインターネット……科学技術の範疇を出ない。世間の社会的関心はあっても、学会では物笑いの種にもならないわ」

「辛辣だな、故に的確とも言える」

E.L.ダイバーの誕生プロセスには、矛盾だらけーと言うより矛盾しかないのだ。

証明出来ないものを証明していること……それが、『存在自体が矛盾している』のだと、バーテンダーは言う。

だが、そう捉えているだけであり、それが間違った存在だとは言っていない。

「だがな姐さん、こんな話を知っているか？ E.L.ダイバーの中には、相手の攻撃を先読みしたり、隠れた相手の位置を感じ取ったり、ガンブラの本来のスペックを超越した性能を發揮させたりすると言う、”本物の”ニュータイプのような話を」

「もちろん。リツちゃんとサラちゃんと言う前例を知っているもの」

それがどうしたのかとバーテンダーはトラちゃんの表情からその真意を汲み取ろうとする。

そのトラちゃんの表情は、不敵な一瞥のように見えるが、どこか忌々しげにも感じられる。

「……そんな“本物の”ニュータイプのような力があれば、バトルに勝つことも容易いだろうな」

先程から“本物の”を強調してニュータイプと言う言葉を連呼するトラちゃん。

彼の零した言葉の意味は、羨望や嫉妬ではない……まるでバーテンダーにその続きを言ってもらおうのを待っているかのように見られる。

「……、……そうねえ。でも、いざニュータイプを探すと見つからない。だったら……」  
キン、と氷とガラスが擦れる音が響いた。

ハバキリ達フォース・リヴェルタは、デビュー戦を大勝で飾り、ベース基地へ帰還して来たところだった。

自分達のガンプラを格納庫に納め、レンタルした輸送機を返却して、さて後は解散す



るだけと言う時。

「フォース戦も終わったことだし、ボクはこれにてお役御免かな」

全員にそう言ったのは、エミルだった。

そう。エミルはリヴェルタのメンバーではなく、あくまでも助っ人として雇われたに過ぎないのだ。

「あつ……そうだったね」

エミルからそう言われて思い出したのか、セアは残念そうな顔をする。

「元々そう言う約束だったけど……やっぱりちよつと寂しいかな」

「別に今生の別れってわけでもないでしょう」

また会うかも知れないだし、とエミルは移動するためにコンソールパネルを呼び出していく。

「やっぱり、あたし達のフォースには入らないの？」

サツキーがそれを引き留めようとするが、それに対してエミルは首を横に振った。

「入らない。何度も言わなくても分かるでしょ」

「そうだけどき……」

食い下がろうとするサツキーを遮るように、コーダイが割って入る。

「まあまあ、無理強いはよくないぜ。気が向いたら、いつでも遊びに来てくれよな。その

時は歓迎するぜ」

俺達はいつでも待つてるからさ、とコーダイは頷く。

「ありがとう。それじゃね」

軽く手を振ると、エミルは移動していった。

それを見送ると、サツキーは小さく溜息をつく。

「エミルつてば、なんであそこまでフォースに入りたがらないのかな」

「個人的な都合つてもんがあるんだろ。なんか事情があるかもしれねえんだし」

コーダイはどちらも否定しない言葉を選んだ。

ダイバーのプレイスタイルは、その個人の自由意思によって決まるものだ。誰かがそれを強制し、従わせるのは規約違反にもなる。

「(……個人的な都合、か。あいつはあいつで何か爆弾を抱えてそーな気がするな)」  
ハバキリは、自分が知る限りのエミルの行動を思い返す。

彼が野良のELダイバーを救助していたところをセアが偶然発見したのが始まり。

次に会ったのは、ミツキを通じてフォース戦の助っ人として。

それから一週間少しだけとは言え、連携を取り、背中預け合った仲だ。

決して自分勝手な行動などしていないし、むしろ不慣れなセアをよくフォローしており、フォースそのものに慣れているような節さえ見えた。

だからこそ、フォーエスへの加入を拒否する理由が見えないのだ。

「……ハバキリ」

ふと、ジルがハバキリの袖をくいくいと引つ張る。

「どーしたジル、オレはシナンジュじゃねーから袖なんか引つ張つてもビームサーベルは出てこねーぞ」

そんな反応をするハバキリだが、ジルのその表情を見て、ふざけるのをやめた。

「エミル……なんか、苦しそうだった」

「苦しそう?」

「うん……寂しくて、苦しくて、でも、誰も助けてくれないんだって」

「……………」

寂しくて、苦しくて、でも誰も助けてくれない。

その言葉は、まるで少し前のハバキリに似ていた。

足掻きと諦念が入り混じった、中途半端な情性のままにいること。

もしかしたら少し前のハバキリも、ジルにはそう見られていたのかもしれない。

「ま、オレ達が首を突っ込んでいーもんかね……」

他に解決出来る人がいるのかもしれないし、とハバキリはポンポンとジルの頭を撫でる。

この日はそれ以上何かをすることもなく、解散となった。

ハバキリ達と別れた後。

エミルは再び七星剣士エクシアに乗り込んで出撃していた。

何かミッションを受けたのではなく、誰かと待ち合わせをしているわけでもない。

そんな彼がどこへ向かうのか。

デイメンションの蒼空を飛翔すること数分。

七星剣士エクシアは、ある場所へ降り立った。

そこは、雪山の中に建てられたロツジーフォースネストだった。

人工的に設けられたガンブラの発着場に七星剣士エクシアを着陸させると、エミルは

外へと降りる。

ロツジの扉の鍵を開けて、中へと入るエミル。

「……ただいま」

誰もいなかった。

灯りはついておらず、暖炉には長いこと誰も使っていないかのように、溜まった灰しか残っていない。

「……………いないか」

誰かいると思つて期待して、やっぱり誰もいなくて——それも、もうどれくらいになるのだろう。

あの日……かつて自身が所属していたフォースがバラバラになつてしまい、もうどれくらいになるだろう。

それ以来、自分以外誰も来なくなつてしまつたこのフォースネストに通い続けて、もうどれくらいになるのだろう。

誰の帰りも待つていない部屋。

自分は、ここにいる必要があるのだろうか。

ふと、脳裏に思い浮かぶのは、フォース・リヴェルタのメンバー達だった。

彼らは、フォースに入つてほしいと願つてきた。

しかし、入るわけにはいかない。

自分はまだ、このフォースに所属しているのだから。

暖炉の上に立て掛けられた、デジタルフォトスタンドへ目を向ける。

写真の中には、かつての仲間達に囲まれて嬉しさと恥ずかしさに変な顔をしてしまつた自分がある。

皆、優しくて頼りになる、背中を預け合わせるに値するダイバー達だった。

そんな彼らと共に戦い、喜びと悔しさを分かち合っていたことが、どれだけ楽しかったことか。

「……」けれど、それは全て過去。

暖炉の火も入れず、エミルはただそこでデジタルフォトスタンドを見ているだけだった。

エリアー。

通常の設定では上位ランカーが入れない初心者用サーバーに存在するエリアである。

そのエリア内の、ラグランジュ4の資源衛星群の中で、一人のダイバーがコンソールを片手に何者かと連絡を取り合っていた。

「……で、ア・バオア・クー……いいえ、今の時期はゼダンの門だったかしら？そこを通過するところを襲撃しろってことね」

『ミーシャがフラワーズを通じて見つけてくれた情報よ。私も合流したいけど、今は口イヤルナイツと動いてないといけないの。お姉ちゃん一人に“汚れ仕事”を押し付けるように悪いけど……』

「別に、こう言うのはあたし一人でやるのがちようどいいのよ。ユイちゃんは堂々と正

義の味方をしてればいいからさ……切るわよ」

それだけ告げて、一方的に通話を切る。

黄土色とベージュが混ざったような色の髪を掻き上げれば、紺色と董色のオッドアイが強化ガラスに映る。

「さつてと、ちよいとめんどくさい仕事をしましょうかね……」

強化ガラスの向こう側にあるカタパルトデッキに鎮座している、『血に染められたような紅いガンブラ』を見下ろしたローロー。

ハバキリは今日、久々に一人で放課後を過ごしていた。

コウダイは何やら大事な書類を提出しなければならぬとのことで学園に残り、セアは家の用事があるらしくGBNへログイン出来ないとのこと。

サツキーの方はと言うと、今日はリアル側の友人達と遊びに行くのだそうだ。

そんなわけで、さて今日はどうするか。

「(今日のところはソロプレイでもしますか)」

軽めのミッションをこなし、早めに帰ってテラスの家事でも手伝おう。

そう決めてから、ハバキリの足は真つ直ぐにガンダムベースへ向けられた。

ダイブ先をエントランスロビーに指定してから、ログイン完了。

ミツシヨンカウンターに近付いたところで、最近になって見慣れるようになった顔が見えた。

蒼い髪に、刹那・F・セイエイの私服と同じものを身に着けたあのダイバーは、一人しかない。

「……ん、ハバキリ?」

向こうもハバキリのこと気付いたらしく、目を合わせてきた。

「よーす、エミル。これからミツシヨンか?」

特に取り繕うことなく、普通に声を返すハバキリ。

「まあ、そんなとこ。今日は君一人か?」

「本日は皆さんお忙しーみたいでな。オレも今日のところはソロプレイでもするかなーって」

ハバキリは、エミルの方もソロプレイをするつもりだと読み取り、提案を持ち掛けた。

「今日はお互いソロなんだ、どーせなら一緒にやるか?」

「……まあ、別にいいけど。君相手なら知らなくはないし、連携取るのだからって楽し」

仕方無く手伝ってやる、と言う様子を見せながらも、エミルはそれに頷いた。



「それで、何のミッションにするんだ？」

「今から考えるところだ」

それに、とハバキリは自分の背後に振り向く。

すると、見慣れたピンク髪の少女――ジルがこちらに向かって駆け寄ってきた。

「ハバキリ、エミル、こんにちは」

「おう、こんにちはジル。今日はオレとエミルだけだからな」

他のメンバーはどうしたのかを伝えるハバキリ。

「そっか。今日はちよつと寂しいね」

いつもより人数が少ないからか、ジルは眉の端を落とす。

「ま、そーゆー日もあるってことだ」

ミッション行こーぜ、とハバキリはミッションカウンターを指し、三人揃ってそちら

へ向かう。

受付嬢の営業スマイルを見流しつつ、ハバキリとエミルの二人がミッションを選び、

ジルは一步後ろでじーつと待っている。

「エミルが選ぶか？」

「ボクが選んでいいの？じゃあ……」

ハバキリは選択権をエミルに移譲した。

エミルのランクはBで、ハバキリはランクこそDではあるが実力そのものはSランク級。

あまりにも難しいミッションでなければ、多少の問題はあるかもしれないが、十分クリア可能な範囲だ。

「……これ、受けてもいいかな」

エミルが指したのは、難易度レベル6のミッション。

ミッション名『ゼダンの門』

原典作品は『Z』からで、ハマーン・カーン率いるアクシズ軍と結託したエウーゴが、ゼダンの門と名を変えられたア・バオア・クーにて、ティターンズと繰り広げられる戦いの再現だ。

達成条件は『敵機の全機撃墜、およびゼダンの門とアクシズの衝突完了』だ。

ゼダンの門とアクシズは、ミッション開始から一定時間が経過すれば、基本的に自動で衝突するのだが、ある程度敵機の数減らしていなければ、ゼダンの門が回避行動を取ってアクシズを躲してしまい、失敗してしまう。

そして、敵機の殲滅よりも先にゼダンの門とアクシズが衝突した場合、宙域には大量のスペースデブリが飛び散り、障害物だらけの中で戦闘を続行しなければならなくなる。

だからと言って、両者の衝突よりも先にティターンズを殲滅するのは至難の業である。

衝突する前に可能な限り敵機の数減らし、衝突後の戦闘を長引かせないのが、クリアの鍵と言えるだろう。

「ゼダンの門か。これは初めてだな」

ハバキリはミツシヨンの内容を見て目を細める。

「少し難しいかもしれないけど、気を抜かなきゃいけるさ」

エミルはミツシヨン参加人数を三人に設定し、受注した。

今回は宇宙空間でのミツシヨンであるため、まずはシャトルにガンプラを積載して宇宙に上がり、目的地まで移動するのだ。

滞りなく大気圏を離脱、そのまま戦闘中域へ突入していくシャトル。

オート操縦にした状態で、シャトルが減速を始めたのを見計らって、ハバキリ（とジル）とエミルは出撃を開始する。

「ハバキリ、ジル、ジンライ改、出るぞ！」

「エミル、七星剣士エクシア、目標を駆逐する」

ジンライ改と七星剣士エクシアがシャトルから発進し、その背景にはエウーゴの艦のアーガマとラーディッシュ、それとアクシズ軍のグワダンが見える。

そして、刻一刻とゼダンの門へと迫る小惑星アクシズ。

「ま、とりあえずお互い自由に戦うってことでいんじゃないね？」

「了解」

それだけ意思疎通して、ハバキリとエミルは前方から迎撃に現れたハイザックとマラサイの二個小隊を捕捉する。

「軽く慣らしてやりますか」

そう呟くなり、ハバキリはアームレイカーを押し込み、ジンライ改を一気に加速させる。

ビームライフルやザクマシンガン改を撃ってくるマラサイとハイザックの群れだが、ジンライ改は悠々と泳ぐように弾幕を潜り抜け、その最中にアサルトライフルを撃ち返し、ハイザックを一機撃ち落とす。

ハイザック、撃墜。

すると、もう一機のハイザックがザクマシンガン改による射撃を続行し、マラサイはシールド裏からビームサーベルを抜いてジンライ改へ接近戦を仕掛けようと迫る。

それを視認すると、ジンライ改はさらに加速、マラサイへ真っ直ぐに向かう。

間合いに踏み込み、マラサイはビームサーベルを振るうものの、その寸前でジンライ改は急旋回し、マラサイの脇を潜り抜けた。

ハバキリの狙いは、もう一機のハイザックだ。

ザクマシンガン改を撃ちまくるハイザックだが、もうそこは既にジンライ改の間合い。い。

ジンライ改は右手に重斬刀を抜き放ち様に、ハイザックの胴体を真つ二つに斬り裂いた。

ハイザック、撃墜。

振り返って追撃して来たマラサイは、ジンライ改の背後へビームサーベルを突き立てようと迫るが、ハバキリはそれを見もせず回避し、すれ違い様にマラサイへ重斬刀の一撃を喰らわせて撃墜させる。

マラサイ、撃墜。

一方のエミルの七星剣士エクシアは、まずはソードライフルによる射撃で敵機を牽制、すぐさま加速して接近戦へ持ち込む。

ソードライフルのビームを躲すマラサイとハイザック一個小隊は、すぐにビームライフルやザクマシンガン改を構え直そうとするが、七星剣士エクシアはマントの下から左手に抜いていたGNビームダガー【開陽】をマラサイへ投擲、投げ付けられたビームの

短剣はマラサイの頭部へ突き刺さった。

動きを止めたそこへ瞬時に肉迫する七星剣士エクシア。

GNビームダガー【開陽】を引き抜くと、間髪入れずGNソード【巨門】を一閃、マラサイを両断してみせる。

マラサイ、撃墜。

残るハイザック二機は、それぞれビームサーベルとヒートホークを抜いて前後から挟み撃ちを仕掛けに来る。

前と後ろを一瞥して、エミルは前から迫るビームサーベルを握るハイザックの方へ狙いを付け、七星剣士エクシアを真っ直ぐに向かわせる。

ビームサーベルを突き出したハイザックだが、その寸前に七星剣士エクシアは突き出されたビームサーベルを潜るように回避、そのままハイザックの懐に潜り込むと、GNビームダガー【開陽】をバイタルバートへ突き立てた。

ハイザック、撃墜。

動けなくなったハイザックを、もう一機のヒートホークを抜いたハイザックへ蹴り飛ばす七星剣士エクシア。

同じハイザックをぶつけられて仰け反った敵機にもすかさず接近、ヒートホークを握った右腕をGNビームダガー【開陽】で斬り裂き、返す刀でGNソード【巨門】を振

るい、ハイザックの頭部から股間を真っ二つに両断する。

ハイザック、撃墜。

「まあ、こんなところかな」

エミルは特に苦にした様子もなく、GNソード【巨門】を折り畳み、GNビームダガー【開陽】を納める。

「難易度6つて言っても、ハイザックとマラサイだしな」

ハバキリはアサルトライフルの残弾を確認しつつ、次に現れる敵機を確認する。

数秒の間を置いてから、背景にいる戦艦『アレキサンドリア』から出撃してきたのは、バーザムが四機。

他に類を見ない特異な形状のビームライフルを中距離から放ってくるバーザム四機だが、ジンライ改と七星剣士エクシアは瞬時に左右に散開してビームを躲す。

ジンライ改は牽制にアサルトライフルを数発だけ撃つと、すぐさまバーザムの下へ潜り込むように急加速する。

頭部のバルカンポッドも連射するバーザム隊だが、ハバキリはアームレイカーを捻り返し、それに呼応するようにジンライ改は大きく急カーブを描き、バルカンポッドの銃弾を往しながらも接近しつつある。

バルカンポッドの弾幕が弱まる、その瞬間にジンライ改は一気にバーザムの一機に肉

迫する。

足下近くにまで近付くと急上昇、バーザムの目の前でピタリと止まり、重斬刀をバーザムのボディへ斬り込ませた。

バーザム、撃墜。

ジンライ改が接近戦を仕掛たことに合わせるように、七星剣士エクシアもジンライ改とは逆方向から接近していく。

バーザム隊の注意はジンライ改に向けられており、七星剣士エクシアの接近に気付くのが遅れる。

ようやく一機が七星剣士エクシアの接近に気付くが、モノアイをそちらへ向けた時にはもう遅い、GNソード【巨門】の一閃が、すれ違い様にバーザムの胴体を泣き別れにしていた。

バーザム、撃墜。

連携が取れなくなり、残り二機のバーザムの動きが鈍った隙を見逃すハバキリではない、その場で重斬刀を投擲、ロックオンしていたバーザムの右肩へ剣刃が喰い込んだ。

右腕の自由が効かなくなり、左手でビームサーベルを抜こうとしたバーザムだが、その左腕はジンライ改に掴まれ、次の瞬間にはアサルトライフルのゼロ距離射撃が胴体を穴だらけにしていた。



バーザム、撃墜。

苦し紛れにビームサーベルを抜いてジンライ改へ斬り掛かる最後のバーザム。

しかし、その側面から七星剣士エクシアがインターセプトし、GNソード【巨門】でビームサーベルを握った右腕を切断、瞬時にGNショートブレイド【揺光】を抜き放ち様にバーザムのバイタルバートへ突き刺し、その内部を削り抜いた。

バーザム、撃墜。

黙々とミツシオンを進行させていく二人。

「ハバキリ、今日はあんまり喋らないね？」

ジルが、ハバキリの横顔を見つめながらそう訊ねる。

「んー？そりやいつもはコーダイとかサツキーがいるからな。話し相手に困ってなかったし……そー言われると、いつもより静かな気がするな」

撃破したバーザムの右肩から重斬刀を回収しつつ、彼女に言われてからそれに気付くハバキリ。

まだ顔見知りになってから間もないエミルが相手では、どう話し掛けたものかと思うところもある。

とは言え、こちらからベラベラと話し掛けてもミツシオン中ではそれも迷惑だろう。

「ジルにはちよつとつまんねーかもしれねーけど、今日は口を慎むか」

「うん、お口チャック」

そう言うのと、唇を閉じてみせるジル。

そんなやり取りをしている内に、次の相手が現れる。

扁平な放熱板に、鋭利なスタビライザー、機体の各部から複数のモノアイが覗く、青いエイに似たシルエット。

ここ、ゼダンの門で試作された可変MS『ハンブラビ』、それが三機だ。

『ダンケル、ラムサス、行くぞー！ 手当たり次第撃ち落とせい!!』

『了解!』

それぞれ、ヤザン・ゲープル、ダンケル・クーパー、ラムサス・ハサの三人が搭乗している設定らしく、先程までの量産機とは動きが違い、一糸乱れぬフォーメーションを組んで迫り来る。

「ヤザン隊か」

ハバキリはアームレイカーを握り直して気を引き締める。

オールタイプ最強パイロットの一角とされるヤザン、そしてそのヤザンがわざわざ名指しで呼び出すほどの実力派であるダンケルとラムサスの二人だ。

GBNにおいても、同レベルの難易度でも格の違う強敵として現れる。

「まずはダンケルとラムサスからだね」

エミルは三機いるハンブラビのが内の、ダンケル機をロックオンする。「定石（セオリー）通りだな。じゃ、ヤザンの相手はオレがしますかね」

ハバキリはヤザン機のハンブラビをロックオンしつつも、ラムサス機も視界から外さぬように立ち回る。

数分前。

ゼダンの門へと進路を向け、核バルスエンジン点火させたアクシズ。

そのアクシズの表面で、身を潜めているのは、一機の青いガンプラーゼク・アインだ。

モノアイが映すモニターは、近付くに連れて大きく見えてくるゼダンの門。

ふと、ゼダンの門周辺で戦闘が始まった。

一般ダイバーがミッションを受注し、目的地がここだったのだろう。

モノアイを長距離望遠で覗いてみると、ハイザックとマラサイの二個小隊を容易く撃破したのは、SDのガンダムエクシアの改造機と、

青いジンジャージンライ。

パーツの一部がジンハイマニューバの物に交換されているようだが、あのカラーリン

グと改造度は間違いない。

確か以前に、ジャブローで見た時は、SDのシャア専用ザクのはずだったが、改めてジンライを使う気になったのだろう。

それはいい。

だが、あのジンライはただミッションのためにここへ来たのだろうか？

それも、”こんなタイミング”で。

続いてバーザム四機も瞬く間に撃墜し、次はヤザン隊のハンブラビ三機と交戦を開始している。

幸い、向こうはまだこちらの存在には気付いていないらしい。

であれば、下手なことをしなければ予定通りアクシズはゼダンの門へ衝突する。

ゼク・アインは、そのまま何もせず静観し、このまま通り過ぎるのを待つことにした。

が、

『こんにちは』

狂ったようなスピードで何かアキシズに接近してきたと思えば、血塗られた肉厚の刃がゼク・アインに向けて振り降ろされた。

ゼダンの門へ向かうアキシズに、何かがつかり、デブリの破片が飛び散った。

「なんだ？」

それに一瞬気を取られ、視線を向けるハバキリ。

だが、その一瞬の隙すらも逃さずにヤザン機のハンブラビは突いてきた。

袖口のビームガンが放たれ、ジンライ改のアサルトライフルの弾倉を焼き切る。

「おっとつ、余所見した……」

すぐさまアサルトライフルを投げ捨てるジンライ改。

『今だラムサスツ、やれい！』

投げ捨てたアサルトライフルの弾倉が爆発すると同時に、ジンライ改の左腕に、橙色の何かが巻き付いた。

テイターンズ機の装備のひとつである電撃ワイヤー『海へビ』だ。

ラムサス機のハンブラビは、ジンライ改の左腕に巻き付けた海へビに高圧電流を流し

込もうとするが、

「知ってた」

ハバキリは何ら慌てることなく、海へビのワイヤーをジンライ改に掴ませ、それをハンマー投げの如く振り回し始める。

メチャクチャに振り回されるラムサス機は、海へビの高圧電流を流すこともままならないどころか、その勢いのままヤザン機のハンブラビにぶつけられる。

体勢を崩されたハンブラビ二機の内、海へビを握ったままのラムサス機はジンライ改に引き戻され、

「よつと」

重斬刀の切っ先をバイタルバートへ刺し込まれた。

確実にコクピットを潰すために、念入りに刃をねじ込んで。

『ヤ、ヤザン隊ち……』

ハンブラビ（ラムサス）、撃墜。

『ラッ、ラムサス!?!この野郎……よくも!』

姿勢を制御し直したヤザン機のハンブラビはMA形態に変形し直して距離を置き、ジンライ改は巻き付いたままの海へビを解く。

一方のエミルの七星剣士エクシアと、ダンケル機のハンブラビ。

MA形態の状態で、腕部クローを用いた格闘戦を仕掛けるダンケル機だが、七星剣士エクシアはGNソード【巨門】とGNロングブレイド【玉衝】を突き出し、二本爪であるハンブラビのクローとクローの間に挟み込ませ、その身動きを封じる。

ギチギチギチギチッ、と実体剣とクローが擦れ合う不快音が火花を散らす中、七星剣士エクシアはダンケル機のハンブラビの腹部を蹴り飛ばして怯ませる。

ハンブラビが怯んだその一瞬の隙に、GNロングブレイド【玉衝】を手放し、代わりにGNビームサーベル【天枢】を抜き放ち様に、一閃の元に両断した。

『何っ、バカなっ……』

ハンブラビ（ダンケル機）、撃墜。

『ダンケル……このままで済むと思うなよ』

ドスの効いたヤザンのボイスの後に、最後のハンブラビはMA形態に変形し、即座に反転して退いていく。

このミッションのヤザン隊は、ダンケルとラムサスの二人を撃墜すれば、不利を悟ってヤザン機は撤退するのだ。

ハバキリとエミルはヤザン機のハンブラビが撤退していくのを見送りつつ、現在状況を確認し合う。

「エミル、まだいけるか？」

「ボクの方は大して消耗していないよ。……それより、君の方が被害が大きいんじゃないのか?」

「ライフル壊されちまったしなー、予備にザクマシンガンくらい用意するべきだったわ」  
ちよつと反省、とハバキリはいつもの調子で言つてのける。

「……気付いたか?」

「何が?」

疑問符を浮かべるエミルに、ハバキリのジンライ改は左マニピュレーターの人差し指を、なおもゼダンの門へ向けて進行中のアクシズに向けてみせる。

「さつき、アクシズに何かが衝突したのを見た。……ゼダンの門に、じゃねーからな」

「ごめん、気付かなかったみたいだ。それで、確かめに行くのか?」

アクシズへ向かうのかと問い掛けるエミルに、ハバキリは首を横に振つた。

「いや、スルーだな。それにもう少ししたら、ゼダンの門にアクシズがぶつかる。衝撃に巻き込まれるのは勘弁だしな」

「そっか」

後は、このままアクシズがゼダンの門へ衝突するのを確認して、残存する敵機を風潰しにしていくだけだ。

しかしー



「……………ツ!?!」

突然、ハバキリの近くにいたジルが身体を震わせた。

「どーした?」

ハバキリは首だけ振り返って、ジルの様子を見てすぐに全身ごと振り返る。

明らかにジルの様子がおかしい。

「なに、これ……声がする……それも、たくさん……」

両手で頭を抱えながらコクピットの中で膝をつくジル。

「おいジルツ、大丈夫か!?!」

「ハバキリつ、ジルちゃんはどうしたの!?!」

七星剣士エクシアがジンライ改に接触通信を図る。

「あ、あつちに、何か、声が……」

ジルは頭を抱えながら、その方向……アクシズを指す。

アクシズから何か、声を聞き取ったらしい。

「……エミル、前言撤回。アクシズに向かうぞ」

ハバキリはエミルに接触通信を返し、アクシズに向かうと伝える。

「アクシズに?……いいけど、じきにゼダンの門と衝突するんだ。急ぐよ」

ジンライ改と七星剣士エクシアはスラストターを加速させ、アクシズへ接近する。すると、アクシズ表面にガンプラの反応が二つ見える。

その二つの反応を捉え、望遠で目視する。

そこにいるのは、ゼク・アインと、紅く塗装された『パラス・アテネ』らしき機体の二機。

両者が鎧を削り合って戦っているのが見える。

「(あのゼク・アイン……)」

ハバキリは表に出さないように、ゼク・アインを睨む。

あの時—ージャブローで出くわした時と同じ機体だろうか。

今すぐあの中へ介入し、ゼク・アインのダイバーをコクピットから引き摺り下ろして小一時間ほど問い詰めたところだが、それをどうにか飲み込んで静観する。

一方で、エミルはパラス・アテネの方に目を向けていた。

「紅い、パラス・アテネ……?」

何だ、あの、『血に染まったような紅色』は。

片手で軽々と振るわれる血塗られたバスターソードに、爪先から伸びるビームサーベ

ル。

あたかも、パラス・アテネでアルケーガンダムを模倣したかのような姿ではないか。それはまるであの時の――

カタ、カタ……とエミルの握るアームレイカーが震えた。

何かと思つて目を向ければ、アームレイカーが震えているのではなかった。

自分の手が震えているのだ。

「……おいエミル、どーした？」

不意にハバキリに声を掛けられて我に返るエミル。

「何でもない。それよりあの二機、何だと思う？」

「見た感じ、野良同士の戦闘つてところだろ。もうすぐゼダンの門とクラッシュするつてのに、お元気なこつて」

軽口と皮肉を織り交ぜながら返すハバキリだが、

「……違う、そつちじゃない」

ジルが消え入りそうな声で彼に伝える。

「そつちじゃない？」

彼女が何を感じ取ったのかは分からないが、あのゼク・アインとパラス・アテネのことではないらしい。

ふと、また別の反応をセンサーが捉えた。

ゼダンの門とアクシズの間近くを、一隻の船が通過しようとしている。

何の船だと思い、今度はそちらを拡大望遠してみる二人。

白く塗られた外装に、目立つようにペイントされた、赤十字のマーク。

「あれは、病院船？」

エミルはその船を、医療関係者、及び病人や怪我人などを同乗させる赤十字船だと読み取った。

「多分アレだ。一定時間撃墜させずに守りきれば、ボーナスポイントとか追加報酬が得られるとか言うヤツだな」

GBN上では、ミッション内容に記載されていないサバイメントなどが確率で発生する場合がある。

エース機の乱入や、防衛対象の出現、レアアイテムを隠し持った輸送機など、ミッションクリアには直接関係しないが、余裕があれば達成を狙ってみても良い、程度のものだ。

今回のそれは赤十字船の護衛らしい、とハバキリは言う。

しかし、

「あの、アレから……声がたくさん聞こえる……っ」

ジルはその赤十字船を指した。どうやら、あの船から何かを……それも複数……感

じ取ったようだ。

「……ハバキリ、どうする?」

エミルはハバキリに問い掛ける。

赤十字船を護衛すればボーナスポイントや追加報酬が得られる。

しかし、ジルはその赤十字船から苦痛を感じているらしい。

以上を理解した上で、ハバキリは判断を下した。

「無視だな。ほつといてもミツシヨン失敗にはならねーんだ。通り過ぎて達成出来るならそれでよし、撃墜されても痛くはねーよ」

ジンライ改は赤十字船から注意を切り、ゼダンの門とアクシズが衝突する頃合いを見計らい、アクシズから離れる。

だが、事態はここで急転する。

ゼク・アインと戦闘を継続していたプラス・アテネは、そのゼク・アインを蹴り飛ばすと、自身もまたアクシズから離脱し、ある方向へ赤十字船へ向けて機体を加速させた。

「あいつつ、まさか病院船を狙うつもりか!」

エミルは機体を反転させ、赤十字船へ真つ直ぐ向かっているパラス・アテネを追う。「おいエミル！ほつとけつて言つたら！」

何をするつもりだと怒鳴るハバキリだが、不意にジルの手が彼の袖をくいと引つ張る。

「ハバキリッ、あの船を守つてあげて！」

「ジルッ、お前まで何言つて……」

何を言っているんだと言いかけて、ジルのその嘆願が必死なものであることに声を押し止める。

「お願いっ、あそこっ、あそこには……ッ！」

「チッ……しゃーねーな！」

ハバキリはアームレイカーを捻り返して反転する。

パラス・アテネはなおも加速して赤十字船の背後へ猛迫、その機関部へ向けてバスターソードを振り下ろそうとするが、

その寸前にエミルの七星剣士エクシアが割り込み、GNソード【巨門】でバスターソードを食い止める。

「お前！自分が何を攻撃しようとしているのかつ、分かっているのかッ！」

『あーら、あんたも”アンチ勢”のお仲間?』

しかし、七星剣士エクシアとパラス・アテネのパワー差は歴然だ、パラス・アテネが少しでも力を加えれば、あっけなく弾き返された。

「くっ」

すぐに姿勢制御を行い、身構え直す七星剣士エクシア。

『あんたこそ、自分がなに守ろうとしているのか、分かっただのかしらねえ』

パラス・アテネのオープン回線から、下卑た女の声が届く。

『その”中身”、何が入ってると思う?』

そう告げながらもパラス・アテネはスラスタを吹かし、ユラユラと不規則に、なおかつ迎撃しにくいようにいやらしい軌道を描いて七星剣士エクシアへ迫る。

「何を言ってる……」

『知らないならそれでいいわよ。知らない方がいいだろうしねえ』

気が付けば、パラス・アテネは右足の爪先のビームサーベルを蹴り上げて来ていた。

七星剣士エクシアは咄嗟にA・B・Cマントと、その下に隠しているシールドで防御するものの、耐ビームコーティングが施されたマントはおろか、その下にあるシールド諸共斬り裂かれた。

それでもまだ五体満足でいられるだけマシだった。

「くそっ」

エミルは悪態をつきながら、七星剣士エクシアを下がらせつつソードライフルで牽制する。

もう少し距離を取りたいが、これ以上下がるわけにはいかない、後ろには赤十字船がいるのだから。

連射されるビームをバスターソードで斬り弾きながら迫り来るパラス・アテネ。

距離が十分に縮まったところでバスターソードを振り上げる。

「躲せるっ」

一撃で致命打を与えるつもりなのか、動作が大振りだ。

エミルはバスターソードの切っ先を睨みながら、この攻撃は回避出来ると判断し――何故か七星剣士エクシアの両腕が斬り裂かれていた。

「なっ!？」

何が起きたのかとエミルは慌ててコンソールと正面にいるパラス・アテネを見比べる。

見れば、パラス・アテネはバスターソードなど振り下ろしておらず、両足爪先のビームサーベルが発振されている。

バスターソードを振り下ろそうとするフリをして、相手の注意をバスターソードに向



けさせ、そのままサマーソルトの要領で両足のビームサーベルによる死角からの攻撃を行ったのだ。

パラス・アテネはすぐさま胴体を捻り返してバスターソードを振るい、七星剣士エクシアの頭部を斬り飛ばした。

「あつ……」

頭部を破壊されて、機体の視界を失うエミル。

『じゃあね』

パラス・アテネは姿勢を制御し直すと、再び加速して赤十字船を追う。

両腕と目をを失い、まともな攻撃力を失った七星剣士エクシアに、これを追う力は残されていない。

「待てよつ……!」

今度こそ赤十字船を沈めようとバスターソードを振り上げるパラス・アテネ。

血塗られた切っ先が赤十字船を叩き潰すー

「調子乗ってんじゃねーぞ」

寸前、その右腕に鎖に繋がれたそれが噛み付いた。

パラス・アテネの右腕に噛み付いているのは、ジンライ改のフロントスカートから放たれたチェーンアンカーだ。

ジンライ改はチェーンを強引に引っ張り上げて、赤十字船からパラス・アテネを遠ざけようとするが、

『んーもう、邪魔』

パラス・アテネは何の躊躇いもなく、チェーンアンカーに繋がれた腕を肘から切り離し、拘束から逃れた。

「てめつ、この……！」

バスターソードを握った右腕だけを引き上げてしまい、ジンライ改はそれを明後日の方向へ蹴り飛ばす。

その時には、もうパラス・アテネは赤十字船に近付き終えていた。

左腕のビームガンの銃口からビームサーベルを発振させ、それで赤十字船を真っ二つに焼き斬った。

機関部の爆発と、その爆発に推進剤が引火、船内に行き渡っていた酸素がそれに拍車をかけ、赤十字船は瞬く間に燃え広がり、爆散していった。

「イ、」

ジルは、その光景をジンライ改のモニター越しに直視してしまった。

ビクッ、と彼女の背筋が震えると、

「……………」  
「!!!!」

ハバキリですら聞いたことのない、形容し難い金切り声が、ジンライ改のコクピットに響き渡った。

「ジルっ、どうしたっ?！」

明らかに正常ではない様子のジルに、ハバキリは右手で強引にジルを抱き寄せた。

「あ、あ、あ、あ、イヤっ、イヤあああああ」

両手で身体を抱きながら頭（かぶり）を振るジルは、ハバキリの声が聞こえていないのか、ただただ錯乱したように声を上げるだけだ。

「しっかりとしろおい!……何がなんだってんだよっ」

これでももうミツシヨンどころではない。

ハバキリはジンライ改を、頭部と両腕を失って漂っている七星剣士エクシアへ向かわせ、機体を掴ませると、すぐにゼダンの門から反転、自分達が乗り込んできたシャトルへ直行していく。

シャトルがこの宙域から離れると同時に、ゼダンの門とアクシズが衝突し、キノコ傘のような形をしたゼダンの門の上部とその下部が砕け折れ、辺りには無数のデブリが散

らばる。

デブリの破片がゴンゴンと装甲にぶつかる中、パラス・アテネは即座に離脱、その一歩遅れてゼク・アインが、離脱していくパラス・アテネを見送ってしまう。

『……シテヤラレタカ。マアアイ、コッチモノゾムトコロデハナカッタシナ』

ゼク・アインは機体を反転させて、パラス・アテネとは反対方向へ離脱していった。

### 【次回予告】

ハバキリ「つたく、変な乱入に巻き込まれたせいでエライ目に遭っちまった」

エミル「ごめん、ボクが勝手なことをしたばかりに……」

ハバキリ「別に構わねーよ。それよりジルの方だ、何であんな急に取り乱して……」

エミル「……」

ハバキリ「なんか言いたそうだな、エミル」

エミル「……聞いて、もらっていいかな」

ハバキリ「次回、ガンダムビルドダイバース・スピリッツインテンション

### 『傷痕』

ちよつとへビーな話になりそーだな……」

## 13話 傷痕

氷とグラスが擦れ合った音が、沈黙を彩った。

だったら……、と口にしたバーテンダーも、敢えてその先を言わなかった。

「……まあ、それとコレはケースが全く異なる。何せ、実体が無いのだからな」

トラちゃんはその短き沈黙を破った。

「ELダイバーには感情がある。つまり、AIでは無いということだ。SF等では、感情があるようにしか思えぬAIもあるが、それは除外していいだろう」

「そうねえ。人間の意図の外で生まれているし、人工能とかじゃあないわね。『作られた世界の中で意図せずして作られた存在』……」

「卵が先か、鶏が先か？」

「卵には卵の、鶏には鶏の美味しさがあるからいいのよね。親子丼とか、アタシも好きよ」

突然全く違う話をぶっ込んで来たバーテンダーだが、トラちゃんも腰を折ることなくごく自然に返す。

「フツ、ちなみに俺はカツ丼派だ。ゲン担ぎにはちょうど良い」

「ああ、カツ丼も良いわねえ」

そしてそのまま丼もの話になっていく。

「俺は牛丼と言えばヨシノ屋だと思っただが、姐さんはどこ屋派だ？」

「んー、どこも美味しいから迷うのよねえ」

……少なくとも、酒場でする話では無いだろう。

もう数分だけ牛丼はどこ屋派だと言う、関係がない上にとてつもなくどうでもいい話を続けたところで、トラちゃんが突然話を元に戻す。

「そうだな……やはり、”クローニング”だろうな」

「パーソナルデータを別のハードに移し換えることが出来るくらいなもの、それくらいは普通に可能でしょうね」

「いや、クローニングですらないか。単なる”コピー”に過ぎんな」

どちらにせよやるだけなら容易なことだ、とトラちゃんはもう一口お冷を口に注いだ。

極東ベース ノース・エリア

『0080 ポケットの中の戦争』の冒頭の戦場となる北極基地では、数人のダイバーが

ドックの中で話し込んでいた。

その内の、エスニックな民族衣装を纏った少年ダイバーが頷いた。

「分かりました」

その少年の向かいに立つ数人のダイバーは、礼として頭を下げた。

「ありがとう。俺達じゃどうしても、な……」

「気にしないでください、荷物を届けるだけならお安い御用ですから」

では早速出撃を、と言いかけたところで、不意に基地内に敵機接近を知らせる警報が鳴り響く。

「敵襲!?!」

「なんでここに!?!」

泡を食って慌てるダイバー達だが、少年ダイバーは迷わずにその場から駆け出し、待機させているガンプラに乗り込む。

青緑色の装甲と銀色のフレーム、その上から着込ませたような形を取る蒼い外装ユニットが特徴的だ。

「敵は水中から来てます。この機体なら、水陸両用機でも引けを取らないから大丈夫です」

コクピットハッチを閉じ、TVモニターのような赤いアイカメラを光らせた。

「ミーシャ、『ガンダムアスクレプオスシャード』、行きますー！」

少年ミーシャは、愛機であるガンダムアスクレプオスシャードを海中へ飛び込ませ、潜水ハッチをオープン、基地へ迫る敵機の迎撃に掛かった。

ハッチが閉じられて間もなく、アクティブソナーが機影を捉える。

ズゴックが二機と、グリーンによる一個小隊のようだ。

格闘戦が不得手なグリーンが後方から砲撃し、ズゴック二機が距離を詰めていく、と言うスタンスらしく、距離がある内からグリーンは両腕の魚雷を連射、その魚雷を追うようにズゴック二機が加速する。

対するガンダムアスクレプオスシャードは、機体各部のハイトルクスラスターを加速させ、その重厚な見た目を裏切るほどの水中機動性を以て、グリーンからの魚雷を文字通り泳ぐように掻い潜る。

ズゴック二機の内、一機はガンダムアスクレプオスシャードの背後を取るように迂回し、もう一機は正面から白兵戦を仕掛ける。

甲殻類の鋏を思わせる三本のアイアンネイルを突き出すズゴック。

しかし、ガンダムアスクレプオスシャードも同じく、巨大な前腕に装備された白銀の巨爪『パイソクロー』で迎え撃ち、アイアンネイルを弾き返し、

「はあッー！」



すかさずもう片腕のパイソクローを突き出し、超震動を発するそれはズゴックの装甲を容易く突き破ってみせた。

ズゴック、撃墜。

その間に、回り込んでいたもう一機のズゴックは、頭部からロケットランチャーを発射、放たれる多数の弾頭がガンダムアスクレプオスシャードの背後から迫る。

既に避けられる間合いではなく、ガンダムアスクレプオスシャードは振り返ると同時に前腕で機体のバイタルバートを守る。

ロケットランチャーが次々に着弾していくものの、重厚かつ頑強な装甲はそう易々と破られるものではない、ガンダムアスクレプオスシャードは全弾受け切ってみせた。

魚雷の爆風を切り裂きながらガンダムアスクレプオスシャードは突進、一機目のズゴックと同じく装甲をパイソクローで貫き砕いた。

ズゴック、撃墜。

残るはグーンのみ。

僚機であるズゴック二機を一瞬にして失ったグーンは、自らガンダムアスクレプオスシャードへと距離を詰め、一对のフォノンメーザー砲を照射する。

この音波兵器は、目視出来ない水中用のエネルギー武装だが、軸合わせ用の目視可能なレーザーも同時に照射している。

ガンダムアスクレプオスシャードは、そのレーザーを目印にフォノンレーザーを掻い潜り、瞬時にグリーンへ接近してみせる。

しかし、グリーンは巡航形態へと変形して突然加速、頭突きの要領でガンダムアスクレプオスシャードへ体当たりを敢行した。

「くっ……」

機体ごとぶつけられた震動に顔を顰めるミーシャ。

吹き飛ばされて水中の惰性で回ってしまいうガンダムアスクレプオスシャードへ、グリーンは再びフォノンレーザーを照射しようと照準を合わせようとする。

しかし、ガンダムアスクレプオスシャードの挙動が変わった。

巨大な前腕と、扁平な頭部からせり上がり、その下からスマートな腕と、ツインアイが輝くガンダムフェイスが現れたのだ。

水陸両用機を思わせる形態が『接近戦モード』

本来のガンダムアスクレプオスの『ガンダム』としての姿が、『高機動モード』なのだ。

ガンダムアスクレプオスシャードは、リアスカートから長剣を抜き放つと、再びハイトルクスラスタを加速させて突っ込む。

照射されるフォノンレーザーは、長剣の腹で弾き返し、ついにガンダムアスクレプオスシャードとグリーンの間合いがほぼゼロ距離になる。

悪あがきにマニピュレーターで殴ろうとするグリーンだが、それは叶わなかった。ガンダムアスクレプオスシャードの長剣が”開き”、それでグーンの胴体を挟み込んだ。

『シザーブレード』と銘打たれた、その”鋏型”の長剣はその名の通り、対象を挟み潰すための武器だ。

グーンの水圧に耐えるための重装甲がメギメギメギと嫌な軋轢音を立てながら圧壊を始め――

「ふんっ！」

真つ二つに裁ち斬ってみせた。

グリーン、撃墜。

他に襲撃者がいないかとアクティブソナーに目を通すミーシャだが、周囲にガンダムアスクレプオスシャード以外の反応が無いことを確認して、一息つく。

「こちらミーシャ、敵機の排除を確認。帰投します」

シザーブレードを納め、ガンダムアスクレプオスシャードは踵を返して基地へと戻る。

”本来の”依頼を受け直すために。

ミツシヨン『ゼダンの門』をリタイアしたハバキリとエミル、ジルの三人（正確にはハバキリが二人をリタイアさせた）。

放心してしまつたエミルと、異常なまでに取り乱してしまつたジルを連れて、ハバキリはフォースネストへ訪れていた。

エミルを椅子に座らせ、ジルを簡易ベッドに寝かし付けてから、ハバキリは一度フォースネストを出て、すぐに戻つてきた。

「ほらよ」

外の自販機でドリンクを購入してきたハバキリは、エミルにそれを放つてやり、ジルには封を開けてストローを指した状態で手渡してやる。

「ごめん、後で……」

「金ならいらねーぞ、それ飲んでとつと落ち着け」

ぶつきらぼうに言い付けるハバキリに、エミルは申し訳なさそうにドリンクの封を開けて、それを一口飲む。

「……………ふう」

溜息混じりに一息つくエミル。

ハバキリも自分のドリンクを飲んで、気を入れ換える。

「つたく、なんかエライ目に遭っちまったな」

「……そうだね」

呼吸を入れ換えた頃を見計らって、ハバキリの方から話しかけたが、エミルはただ相槌を打つだけ。

「……あの病院船に、何かあったのか？」

ハバキリは、エミルに話を持ち掛ける。

あの紅いパラス・アテネが赤十字船を撃沈させた時、ジルは突然激しく苦しみだした。それには何か理由があるはずだ、とハバキリは言うが、エミルは首を横にふるだけだった。

「分からない……」

でも、とエミルは言葉を続ける。

「あのパラス・アテネのダイバーが言っていたんだ。「そっちこそ何を守ろうとしているのか分かってているのか」、「その船の中身は何だと思う？」って」

「中身……？アレはただのNPD機じゃねーってのか？」

「だと、思う。ハッキリとは分からない」

「破壊したらジルが苦しむ中身か……」

皆目見当もつかねーな、とハバキリはドリンクを飲み干すと、ダストボックスへそれ

を放り捨てる。

エミルはドリリンクの蓋を見つめるように俯いたまま。

「……なんか言いたそーだな、エミル」

ハバキリはエミルの様子から、何か言いたいことを我慢しているようだと言み取った。

それは的外れでは無かつたらしく、エミルは少しの躊躇の後に口を開いた「……………」  
「……………」ボクは元々、『コキユートス』と言うフォースに所属していたんだ。  
仲間にも恵まれていたし、ボク自身も楽しくやれていた。

だけど、その楽しかった日々は、突然終わりを告げてしまった。

『ファーストE.L.D.ダイバー・サラ』による、GBN運営権の乗っ取り。

それはあまりにも突然で、現実味の無い演説だった。

しかし、新型ブレイクデカールを蔓延させていたのは彼女だったと理解すれば、怒りが沸いた。

お前など害虫どころではない、文字通りのウイルス―汚染物質だ、つてね。

秘匿チャットでフォースのアライアンスと連絡を取り合い、あの『サラ』を打倒すべ

く行動を起こした。

結果は、最悪だった。

ベース基地へと侵攻を開始したところまでは良かった。

ボク達の目の前に現れた『血のように紅いレギンレイズジュリア』の改造機。

圧倒的で、そして暴力的だった。

嵐のように振り回されるバスターソードと、目まぐるしく放たれるブレードキックを前に、為す術なく戦闘力を奪われてしまった。

戦闘力を失ったボクを守ろうとする仲間達は次々に撃墜され、ボクはそれを見ることが出来ず、生き残った仲間達と撤退すること余儀なくされた。

その上、撃墜された者はその後の行方を絶った。

後にこの事件が解決し、『ELダイバー動乱』と呼ばれるようになった頃、行方を絶った仲間達から連絡があつた。

「もうGBNなんて出来ない、死にたくない」

恐怖に震えた声だった。

撃墜された者達は、気が付いたら病院にいて、何日も眠り続けていたと言う。

誰からそれを聞いたのかは知らないけど、『ログデータにウイルスを植え付けられて強制ログアウト出来なかった』らしい。

下手をすれば、そのまま廃人になっていたかもしれない、とも……。

ログデータは削除され、彼らはそれ以来二度と戻って来なかった。

ボクを含めた残された者達は、ログイン回数が減り始め、やがて顔を合わせることにす  
らやめてしまった。

フォースは確かに存在している。

しかし、それは既に形骸。

『血のように紅いガンブラ』

それを見る度に、このことを思い出してしまう。

フォース自体はまだ残されているし、ボクもまだ所属はしているけど、ボク以外はみんな抜けてしまった。

それでも、きっと誰かがまたコキュートスに戻ってきてくれる……今日までそう信じていた。

だけど、まだ誰も帰ってこない。

期待しては落胆するだけの日々の繰り返しだった。

でも、心のどこかで「会いたくない」って気持ちもあった。



GBNをやめていった人達はみんな、ボクを守ろうとして、死ぬような目に遭わされたんだ。

……きつと、ボクの顔なんて二度と見たくないのかもしれない。

どうしてこうなったんだろう。

フォースなどに入らなければ、こんなことにはならなかったのかもしれない。

ボクは今、何のためにGBNを続けているのか、それすらも分からない。

いや、分からないんじゃない。

ただ、臆病なだけだ。

目の前の現実も見ようとしない、ただの臆病者————。

————自分の過去を語り終えて、エミルは溜め息でそれを締め括った。

「……お前がフォースに入れたがらねーのは、そーゆー理由があったのか。(……んじやアレはそー言うことか)」

エミルの話を聞き終えたところで、ハバキリは少しの思案の後に声を返す。

「過去に囚われるのはやめるんだ、そんなことをしても何も戻りはしない、とでも言うつもり？」

「言わねーよ、そんな格闘する度に奇声を上げまくるとつかのアスランじゃねーんだから。……オレも過去を引きずりながら、今ここにいるからなー」

ハバキリは軽口で応じた。

「オレとコーダイも、昔に所属していたフォースがあつた。……今はもう、知らねー内に解散されちまつたけどな」

「……」

「気掛かりとか心残りは、当然ある。それがあらくらいにはフォースに愛着はあつた。どつかのハイネなら、「割り切れよ」って言うだろーけど、割り切れるくらいなら、そんな『割り切れる程度の愛着しか持つてねー』ってことだ。……エミルは、そーじゃねーんだろ？」

「……うん」

諦めきれぬものなら、そこまで思い詰めはしない。

諦めきれぬものがあるから、思い詰めるのだと、ハバキリは言う。

「ま、今すぐどーのこーのつて話じゃねーしな。とりあえず落ち着かねーとな」

ハバキリは席を立つと、出入り口の方へ足を向ける。

「さつてと、さつきは消化不良だったからなー。ちよーつとフリーバトルでもやつてくるわ。じゃなー」

軽く手を振ると、フォースネストを後にしていった。残されるのは、エミルとジルの二人だけ。

「……落ち着いたところで、どうなるって言うの」

くしゃ、とドリリンクの紙カップを握り凹ませる。

落ち着いて、それから？

何をすればいいのか？

その先が全く見えない。

「……エミル、怒ってる？」

不意に、簡易ベッドにいたはずのジルが、エミルのそばに近付いていた。

先程まで酷く錯乱していた彼女だが、落ち着いたらしい。

「怒ってるわけじゃないよ」

「……んー」

ふと、ジルはエミルの頭へ手を伸ばし、

「ほんほん」

ほんほん、とエミルの頭を優しく撫で始めた。

「？」

「ほんーんほんーん」

「??」

「ぼんぼ、ぼんぼ」

「あの、ジルちゃん？」

何を思つて頭を撫で始めたのか分からず、エミルは頭を動かさないままに問い掛ける。

「これは、一体……?」

「辛そうな人がいたら、優しくしてあげなきゃいけないって。だから、ぼんぼんするの。」

「ぼんぼ、ぼん」

つまりジルは、エミルを慰めようとしているらしい。

ぼんぼん、ぼんぼん、とジルはエミルを撫でる。

撫でまくる。

「ぼんぼんぼん、ぼんぼん」

いつの間にかリズムに乗りながらぼんぼんするジル。

エミルもそれをやめさせたりせず、ただジルの好きなようにぼんぼんさせていた。

それが数分ほど続いた時、フォースネストの自動ドアが開かれた。

「いやー、遅くなっちゃまって悪い悪い。思いの外時間が掛かつ……」

学園での用事を終えたのか、コーダイがログインしてきた。

そして、ログインしてきて最初にこの光景を見て、口を止める。

「……えー……つ、と。どう言う状況だ、コレ？」

エミルの頭をぽんぽんするジル。そんなエミルは抵抗することもなくぽんぽんされるがまま。

「……………ジルちゃんに、ぽんぽんされてる、かな？」

ありのままを答えるしかなかった。

もう数分だけジルにぽんぽんされてから。

コーダイはジルに「エミルぼつかずりい！俺にもぽんぽんしてー！」とお願いしたのだが、

「こうちや元気だから、ぽんぽんしなくても大丈夫」

と返されたので、しょんぼりしてしまった。

しょんぼりし終えてから、コーダイはエミルに向き直る。

「そう言えば、ハバキリはどうした？」

「ハバキリなら、消化不良だったからってソロプレイしに行ったよ」

「消化不良？」

どう言うことだとコーダイが訊ねると、エミルは少しの躊躇の後に、先程にミツシヨ

ンに失敗したことを話した。

その失敗が、自分の独断先行によるものだとも。

「あちやあ……まあ、そんなに気にすんなって。気を取り直しに、今度は俺と行くか？」

「いい。今日はもう、やる気にならない。ログアウトするよ」

「そりや残念。そう言うこともあるか」

それじゃあ今日はどうするかな、とコーダイはコンソールパネルを開き、エミルはログアウトしていった。

一方、(本来の目的であった)ソロプレイに駆り出たハバキリ。

フォースネストのカタパルトデッキから出撃したジンライ改。

今回は特にミッションを受けておらず、フリーバトルをするつもりだ。

フリーバトル専用のフィールドに赴き、エリアに足を踏み入れたその瞬間からバトルは始まるのだ。

時間制限も無ければ、特殊なルールもない、正面から堂々と戦うのもよし、罠に嵌めてからトドメを刺すのもよし、よってたかって一人を潰すのもよし、文字通りのフリーバトルと言うわけだ。

エリアの境界線に突入し、まずは自由飛行で敵機を搜索。

すると、同じくフリーバトルに勤しんでいた者達が、突然の闖入者を次々に捕捉する。ハバキリはアームレイカーを押し出し、ジンライ改は一気に加速、森林のど真ん中へ突入していく。

迎撃しようと地上からビームライフルを放っているジムⅢに狙いを付け、さらに加速しつつ急降下。

ジムⅢが肩のミサイルランチャーを発射しようとしているがもう遅い、ジンライ改からのアサルトライフルの銃弾が、発射寸前のミサイルランチャーを撃ち抜き、誘爆させる。

ミサイルの爆風に煽られるジムⅢに、擦れ違い様に重斬刀を一閃、コクピットブロックを真つ二つに斬り裂いた。

ジムⅢ、撃墜。

『何だあのジンは!?!』

『お、おい、あの青いジン……!』

『まさか……『青き狂戦士』!?!』

周囲にいたダイバー達がジンライ改の姿を見て、動揺を見せる。

ジンライ改はモノアイを光らせながらゆらりと振り返り、

「さーてと、今日のオレはちよーつと気が立ってるんでね……とりあえずお前から全員スクラップな」

手当たり次第に襲い掛かった。

エミルがログアウトした後。

コーダイは、ハバキリとエミルの二人が失敗したミッション『ゼダンの門』のリプレイを観ていた。

ちなみに、ジルは保護管理局の元へ帰った。

「(ミッションの進行は順調だな。ここから何があつて失敗したのやら……)」

ハイザックとマラサイの二個小隊、バーザム四機、ヤザン隊のハンブラビ二機を撃墜、一機を撃退したところで、ジンライ改と七星剣士エクシアが、ゼダンの門の衝突する寸前のアクシズへ向かう。

そこにいる、ゼク・アインと紅いパラス・アテネ、そしてその側を通過しようとする赤十字船。

「(ん？ちよつと状況が乱れてきたな)」

パラス・アテネがゼク・アインとの戦闘を放棄、赤十字船へ向かうその途中で七星剣



士エクシアと交戦、これを一瞬で無力化させた。

赤十字船に肉迫しようとしたところで、今度はジンライ改のチェーンアンカーに掴まれるが、右腕の関節を切り離して拘束から逃れ、左腕部のビームガンの砲口からビームサーベルを発振、赤十字船を撃沈させる。

そこからが不可解だった。

ジンライ改は両腕と頭部を失った七星剣士エクシアを抱えると、ミツシオンを継続するのではなく、シャトルに乗り込むなりすぐにゼダンの門から離脱していった。

ここでミツシオンリタイアとなって、リプレイ動画が停止する。

画面を閉じて、コーダイは腕を組んで考え込む。

ハバキリなら、こうなったらパラス・アテネやゼク・アインのことをスルーして、ミツシオンクリアを優先するはずであるし、そもそも赤十字船を撃沈されたところでミツシオンが失敗になるわけではない。

にも関わらず、すぐにでもミツシオンをリタイアする選択を取ったのだ。

考えられるとするならば、あくまでも憶測であると言うことを前提とするならば。

「(あの赤十字船はサブイベントじゃないな)」

恐らく、“本物”の赤十字船だったのだ。

とは言え、GBN上では痛みを錯覚することはあっても、実際に傷害を負うわけでは

ない（ごく一部を除いて）ので、船内に怪我人や病人がいたとは思えない。

だと、したら。

「何か『知られちゃまずいもの』を載せていたってところか」

赤十字船と言う、攻撃をタブーとするものを隠れ蓑にして、一般公開させるわけにはいかないものを運んでいたのかもしれない。

そして、パラス・アテネはその中身が何か知った上で攻撃を仕掛けたのだろう。

「ハバキリがすぐに撤退したのも、下手すりや運営からIDを削除される可能性もあったのかもな」

一般公開してはならない、後ろめたいものに関わりかけたのだ。

最悪、口封じとして近くにいたダイバーを問答無用でID削除、と言うことも有り得なくないだろう。

その点、ハバキリが速やかに撤退したことで「自分達は何も見ていません、見なかったことにします」とアピールしたこともなる。

「（とは言え、その”中身”ってのは実際何なんだろうな）」

どうせ、知りたくもないものでも仕込んでいたのだろう。

溜め息をついてリプレイを停止させ、コンソールを閉じたところで、ふと来客を告げるインターホンが鳴った。

「ん、お客？」

一体誰だ、とコーダイは再度コンソールを開き、来客に応じる。

「はいよ、どなたですかー？」

モニターには、中学生くらいの、エスニックな服装をした少年ダイバーミーシャが映し出されている。

『突然ですみません。エミルさんが、ここのフォースにいるって聞いたんですけど……』  
「エミル？あー、エミルならつきさつきログアウトしましたよ。なんか、あいつに用事でもあるんすか？」

『用事と言うか。ちよつとエミルさんに渡したいものがあるんです。外に出て来てもらっていいですか？』

「渡したいもの？はいはい、とりあえず出ます」

コーダイはコンソールを閉じて、フォースネストの外に出た。

外には、モニターに映っていたダイバーと、その後ろに小さなコンテナを抱えた『ガンダムアスクレプオス』の改造機ーガンダムアスクレプオスシャードが膝をついてくれている。

ミーシャはコンソールパネルを呼び出し、何かしらのコマンドを打ち込む。

すると、ガンダムアスクレプオスシャードはゆっくりと挙動を開始し、マニピュレー

ターに持っているコンテナを地面に下ろす。

「エミルさんへ渡してほしいって頼まれた荷物です。それと……」

ミーシャは今度はメールの画面を開き、未開封であるメールをコーダイへ送信した。

「このメールを、エミルさんに」

「お？」

コーダイのコンソールにメールの着信を告げ、受信を確認する。

「……とりあえず、そのコンテナとこのメールを、エミルに渡せばいいんだな」

「はい、よろしく願います」

じゃあボクはこれで、とミーシャは踵を返してガンダムアスクレプオスシャードへ乗り込もうとするが、

「ちよつと待ってくれ」

その前にコーダイが呼び留めた。

「あんたは、エミルが元々いたフォースの仲間か？」

彼の問い掛けに、ミーシャは振り返りながら答える。

「違いますよ。エミルさんのフォース仲間に、荷物を届けてほしいって頼まれただけですから」

「……なんで仲介する必要があるのか分からねえけど、まあ分かった。引き留めて悪

かったな」

頷くコーダイにミーシャは軽く会釈すると、今度こそガンダムアスクレプオスシャードのコクピットに乗り込み、その場から飛び去っていった。

それを見送ってから、まずはコンテナを格納庫に移動させようと、キャノパルドの元へ向かおうとするコーダイだが、ガンダムアスクレプオスシャードと入れ替わるように、ハバキリのジンライ改が帰還してきた。

片膝を着きながら着地し、ジンライ改からハバキリが降りてくる。

「おー、コーダイ。用事は終わったのか？」

「まあな、思ったより時間食っちゃったぜ」

苦笑するコーダイを見て、ハバキリは側に置かれているコンテナへ目を向け直す。

「あのコンテナはなんだ？」

「ああ、なんか、エミルが元々いたフォースの仲間が、代理人を通じて送ってきたらしいんだよ」

俺が受け取り人つてわけだ、とコーダイもコンテナへ目を向ける。

「ハバキリ、悪いけどそれ、ジンライで格納庫にまで運んでくれるか」

「おー、分かった」

ハバキリはジンライ改に乗り込み直し、そのコンテナを持って格納庫へと入庫、コー

ダイも一緒に格納庫に入り、シャツターを閉じる。

大した損傷もないジンライ改のメンテナンスをそこそこに済ませておき、ハバキリは自分が運んできたコンテナとコーダイを見比べる。

「それで、エミルの元フォースメンバーの連中が送ってきたつてことは、エミル宛の荷物つてわけか」

「どうやらそうらしい。本人に直接渡せばいいのにな」

「……開けたら爆発するとかじゃねーだろーな?」

「だとしたら、えらい手の込んだ嫌がらせだな。一応スキャンもしてみたけど、その危険は無さそうだぜ」

ああそれと、とコーダイは未開封のエミル宛のメールをハバキリに見せてやる。

「それは?」

ハバキリはそれが何のメールかと覗く。

「これも、エミルに送ってくれつて頼まれた」

コーダイがそう答えて、ハバキリは少しだけ考え込む。

「……なーコーダイ」

「どうした、そんな難しい顔して」

ハバキリは、自分の考えをコーダイに話した。

それを聞いてコーダイは「お前もなかなか意地の悪い奴だな」と笑った。

翌日。

エミルはダイブ先をフォースネストに指定してからログインした。

昨夜に、ハバキリから連絡があつたのだ。

ハバキリ：エミルに渡したいものがいくつかある。ただし、フォースネストに来て、直接手渡しで、だ。都合の良い日で構わない。

明日の夕方でも構わないと返信し、エミルはハバキリの指定通りに、リヴェルタのフォースネストへ赴いた。

そこには既に、エミルを除いたフォースメンバー全員……ハバキリ、コーダイ、セア、ジル、サツキーが待つてくれている。

「あ、来た来た」

サツキーがエミルの姿を見て笑みを浮かべた。

そのサツキーの笑みを見て、エミルは内心で警戒した。

「……それで、渡したいものって？」

目を細めながら、メンバー達を睥睨する。

すると、ハバキリがコンソールパネルを開きながら一歩前に出た。

「 Emilルに見せつけてやるように、昨日にコーデイがミーシャから受信したメールを差し出す。」

「こいつは、フォース・コキユートスのメンバーさん達が、Emilルに宛てたメールだ」  
「！」

コキユートスの名を聞いて、Emilルが反応する。

「昨日の今日にこー言うものが送られるってことは、向こうさんはお前の近況を知ってるってことだ」

んでもって、とハバキリはEmilルへ向けてそのメールを送信した。

Emilルのコンソールに受信確認の音声が届く。

「Emilル。そのメール、今ここで読め」

「え？」

何故？とEmilルがコンソールに向けていた視線を上げる。

「そのメールには、コキユートスのメンバーさん達の、今のお前に対するメッセージが込められてるはずだ。あー、先に言つとくと、オレ達はこのメールを読んでねーからな」

ハバキリは真つ直ぐにEmilルを見据える。

「お前、昨日言ってたよな。自分のために犠牲になったメンバーさん達が何を思ってい



るか分からないから、それ知るのが怖いから、自分は臆病者だって」

エミルに言葉を返させないように、続けて畳み掛ける。

敢えて、憎まれるような言葉を使って。

「そのメールが読めねーんなら本当に臆病者だ。臆病なくらいでちよーどいいってんなら、読まねーでもいいぜ。臆病者、軟弱者、てめーなんざZガンダムのシールドにぶち抜かれるジ・Oのコクピットがお似合いだ、やーいやーい、弱虫アホエミルのあんぽんぽーん」

「ツ……………言っただなお前」

キツ、とエミルがハバキリを睨み返す。

「ああ読めばいいんだろ？読んでやるよ！今、ここで!!」

半ばヤケクソ気味になりながら、メールを開いた。

「……………」

時間にして、十数秒ほどが過ぎたのだろう。

エミルはハバキリに向き直る。

「…………ハバキリ、ボク宛のコンテナってどこに置いてある？」

その質問に、ハバキリは黙って自分の背後へ親指を向けた。

ちようど、七星剣士エクシアのすぐ近くに、それが置かれていた。

エミルはキャットウォークを駆け上がり、七星剣士エクシアのコクピットへ飛び込むと、マニピュレーターですぐにそのコンテナの封を切った。

「これ……」

コンテナの中に納められているのは、ガンプラに装備させるパーツ、それもSDガンダムサイズの合わせたものだ。

まるで、エミルと、七星剣士エクシアのために用意してくれていたかのように。

「……………」

仲間達は、決して自分を嫌ってなどいかなかったのだ。

それが分かった時、エミルはコンテナを閉じ直し、すぐに出撃準備を整えていく。

予感がするのだ。

きつと、今行けば会えるはずだと。

その様子を見上げながら、ハバキリはエミルに声を掛ける。

「どーやら憑き物は取れたみてーだな、エミル」

足元にいるハバキリにツインアイを向ける七星剣士エクシア。

「ごめん、ちよつと出掛けてくる。今日もパスで」

「おー、行つて来い行つて来い。気の済むよーにしてこい」

ひらひらと手を振り返すハバキリを見ながら頷き、エミルを乗せた七星剣士エクシア

はオールグリーンを確認、デイメンションの空へ打ち出されていった。  
発進が完了してから、ハバキリ達はその背後を見送る。

エミルが向かった先は、一昨日にも訪れた、フォース・コキュートスのフォースネス  
トだった。

遠目から見た見た光景は、一昨日のものと変わらない。

それでもエミルは七星剣士エクシアをロツジへ接近させ、着陸させた。  
コクピットから飛び降りて、駆け足でロツジのドアを開けた。

室内は、一昨日と同じだった。

「……世の中、そんなに都合よくないよね」

とんだぬか喜びだった。

それとも、あんなメールひとつで浮かれてしまう自分が単純過ぎるだけか。  
溜め息をひとつ零してから、ドアを閉めようとして、

「エミル？」

最後に聞いたのはいつだったか、それでも確かに聞き覚えのある声が届いた。

「!?」

ドアノブを離して跳ね返ったように振り返るエミル。

その振り返った先には、数人の男女ーコキュートの面々が立ち並んでいた。

面々の中には、ログデータを消したはずの者までいるではないか。

「せっかくサプライズで出迎えてやろうと思つてパーティーの準備までしてたのに、来るの早過ぎなんだよ」

フォースリーダーだった青年は、口ではそう言うものの、その顔は安堵と喜びに満ちている。

彼の後ろにいるメンバー達も同じ顔をして頷いている。

「みん、な……」

「何そんな幽霊でも見たような顔してんだよ。ちゃんと生きてるだろ？」

確かに死にそうな目には遭つたけどな、と苦笑するリーダーと、「そうだそうだ」「勝手に殺すなよ」と口々に笑い声上がる。

「立ち話もなんだし、入ろうぜ。……」俺達の家」に」

”俺達の家”と指された、ロツジ。

それを聞いたエミルは、瞼から溢れそうになっていたものを拭つて、

「うん……」

清々しい笑顔で頷いた。

カタパルトデッキから、一度フォースネストのレストルームに戻ったハバキリ達。

「エミルくん、どこに行つたのかな」

セアは、エミルはどこへ向かうのかと首を傾げる。

「さー、どこ行くんですかね？……何となく、想像は出来ませけど」

ハバキリはセアの言葉に応じつつ、コンソールパネルにタップとスワイプを繰り返す。

「つて言うかハバキリさ、さっきのはホントに意地悪だと思うわよ？」

コンソールの操作をしているハバキリの背中に、サツキーが溜め息混じりで声をかける。

「メールの内容は分かんないけど、もしあの内容がエミルへの批難とかだったら……」

「あ、それはねーよ」

ハバキリはいとも簡単に断言した。

「オレ達がエミルを助つ人として加入させて、三日くらいだな。このフォースネストの周りでココソソしてる奴らがいたんだよ。遠巻きに見てるだけで悪さするわけでもなし、とりあえず放置して様子を見ても何もしねーし。で、昨日にエミルの話を聞いてピ

ンと来たってわけ。ありやエミルのことが心配なだけのストーリーカーだな、って」

「ええ!? あたし、全然気付かなかったんですけど……」

「私も知らなかった……」

自分達が知らない内に外から見られていたことに、サツキーは驚き、セアも申し訳な  
さげに首を振る。

「俺は何となく視線を感じてたくらいだな。別に気にしちやいなかったが」

ハバキリほどの視野は持っていなかったが、誰かの気配や視線は感じ取っていたコー  
ダイ。

「ジルちゃんは気付いてたか？」

「うん。「エミルは新しいフォースに入ったけど大丈夫かな?」「上手くやれるといい  
な」って」

ジルに至っては心の声まで聞こえていたようだ。

「ま、そんなところだろうな」

ハバキリが最後にめてから、エミル以外の全員に向き直る。

「ま、それは置いといて、だ。さて、今日は何のミッションを受けましょーかね」

その日の内にエミルがリヴェルタのフォースネストに帰ってくることはなく、ミッ  
シオンをクリアしてから解散となった。

GBN上の、とある秘匿チャット。

そのある集まりが、定期的に連絡を取り合っていた。

フリーユージェル：と言うわけで、今日もまた不定時連絡を取りたいと思う。ビーフさんは別件が入ったから、先に欠席連絡があつた。

ムラクモ：出席。

チェリリン：出席です♪

スミレ：出席します。あ、マイマイさんは出張で欠席してます。

フリーユージェル：あとはレイヴンさんだけか。とは言えレイヴンさんはログイン率も下がって来ているし……今日のところは四人で始めよう。

レイヴン：遅刻寸前でスライディング出席！

ムラクモ：ムラマサブラスター

チェリリン：セーフティ解除！

スミレ：この瞬間を待っていたんだ！

フリーユージェル：三人の連携力は草を生やすに値するな。

レイヴン：スマン、親父がぎっくり腰やらかしてアタシの仕事が増やされた。

チエリリン：お父さんエ……

フリューゲル：始めていいだろうか？

レイヴン：おうよ。

スミレ：どうぞ。

チエリリン：ヒューヒュー！パチパチパチパチー！

ムラクモ：チエリリンさん静かに。

フリューゲル：まずは俺から報告させてもらう。先日予測した通り、“コピー体”は既に量産体制に入っていた。それと、例の“船”はマイマイさんが撃沈を確認したそうだ。以上。

ムラクモ：俺からの報告です。アンチELダイバー勢の中で、RMTの疑いのあるダイバー数名を追跡、内2名はイノグチ警部が逮捕した模様。以上。

チエリリン：わたしからの報告です。プロトシングルナンバー1は現在、フォーヌネストNo. 178に所属中です。以上。

スミレ：私からの報告です。現在、ポイントX42Sから666Sまで、ターゲットが移動中。引き続き追跡を続行します。以上。

レイヴン：アタシからの報告です。と言いたいが、ほとんどログイン出来てねえから報告内容がない。以上。



フリーユージェル：スマレさん、X42Sから666Sへ移動中と言うことは、地上に降下していると言うことか？

スマレ：昨日まで資源衛星MO-IIIに点在していましたが、今日になって真っ直ぐに地球へ降下、既に大気圏に突入完了したようです。今、進路を割り出しているところですよ。

ムラクモ：宇宙へ行ったり地球に降りたり、相変わらず行動が読めんな。

チェリリン：ターゲットは、かなり自由に動いてるらしいよ。少し前には独断でジャブローに介入してたくらいだし。

フリーユージェル：よし、みんなからの報告も上がったし、今後の行動に関する通達だ。ムラクモさんとチェリリンさんは引き続きRMTの疑いのあるダイバー、及びプロトシングルナンバーの動向を追跡してくれ。

ムラクモ：了解です。

チェリリン：了解です。

フリーユージェル：スマレさんは例のターゲットとそれに関する周囲の状況を逐一確認。それと、今日の不定時連絡の内容をマイマイさんにも通達を頼む。

スマレ：分かりました。

フリーユージェル：レイヴンさんは現状は自由に動いて構わない。だが、気になることが

あればすぐに伝えてほしい。

レイヴン：アタシだけ戦力の勘定に入ってねえ捨て駒みてえな扱いだな。

フリーユージェル：そんなつもりは無いんだが……ログイン率が低い以上は、出来ることも限られているしな

レイヴン：まあこつちはこつちで、『フォース・出雲』の伝手もある。……出来れば頼りたくねえけどな。

フリーユージェル：各人への通達は以上だ、他に何かあるか？

ムラクモ：特にありません。

チエリリン：特になしです。

スミレ：上二人に同乗します。

レイヴン？アタシも特になし。んじや、ログアウトさせてもらうぜ。

フリーユージェル？では、以上で今日の不定時連絡を終了する。解散！

さらにその次の日。

ハバキリとコウダイはダイブ先をフォースネストに指定してからログイン。

次にサツキー。

その次にセアがジルと一緒にフォースネストへ入室してきた。

.....

.....

.....

「エミルくん、もう来てくれないのかな……」

セアは出入り口へ振り返る。

元々、エミルはフォース戦のための数合わせとして一時的にリヴェルタに所属していたに過ぎない。

彼自身も「フォース戦も終わったから、お役目御免だ」と言っていた。

「実力もあるんだし、このままいてくれたら良かったですね」

サツキーも溜め息混じりにセアに同意する。

「ま、昨日にあんなもの見せられちゃ、なおさらウチにはいられねえわな」

コーダイも同じく。

自分のことを案じてくれただろうメールと、その自分を思って作ってくれたパーツ。

それだけの施しを受けていながら、他所のフォースに腰を落ち着けるなど、解釈は人それぞれだと分かっているても、不義理と言うものかもしれない……少なくとも、コーダイにはそう感じられた。

「……とは言え、オレ達に何の連絡も無いってのも不自然だと思っただがな」

ハバキリは腑に落ちないものを感じていた。

短い付き合いながらも、エミルの性格は何となく分かっているつもりだった。

彼は決して感謝や恩を無碍にする人物ではない。

なればこそ、(些か乱暴な)後押しをしてくれたハバキリ達にメールのひとつこそ送り  
そんなものだが、一晩が経ってもエミルからのメールや通話は届いていない。

「大丈夫」

皆が皆、大なり小なり「エミルはもうフォースに戻ってこないかもしれない」と思っ  
ている中、ジルだけはそうは思わなかった。

「エミルなら、ちゃんと帰ってくる」

何も疑っていない、信じる者の目をしている。

ジルが、エミルから何を感じたのかは分からないし、そうだとしてもそれは不確かな  
ものだろう。

エミルのことならば、折を見て連絡でも何でもするだろうと結論づけようとしたとこ  
ろで、フォースネストに誰かが入室してきた。

「ごめん、ちよつと遅くなった」

エミルだった。

その彼の顔には、確かな決意が見える。

「……その様子だと、ただ礼を言いに来たわけじゃなさそうだな」

ハバキリは心中で「そー言う結論に至ったか」と呟く。

エミルはこくりと頷くと、セアに向き直る。

「セアさん。お願いがあります」

「何かな？」

セアも、エミルのただならぬ様子に自然と背筋を改める。

「ボクをこのフォース・リヴェルタに、『正式』に入隊させてください」

迷いも澁みもないその言葉にセアは目を見開き、すぐに少しだけ細めた。

「……、エミルくん。君が前までいたフォースのことはどうしたの？」

もちろん、エミルがリヴェルタに戻ってきてくれたことは嬉しく思っているセアだが、その前に気になることがあるのだ。

「私達に恩があるとか、そんなことはいいの。君がどうしたくて、ここへ戻って来てくれたのか、それを聞かせて」

セアは、エミルの意思を確認する。

その意思は果たして、自分の本心なのかと。

エミルは呼吸を入れ換えてから、昨日にあったことを話し始めた。

「ボクは昨日、前のフォース仲間と会って、色んなことを話し合いました。バラバラになっってしまったからどうしていたのか、今は何のガンブラを使っているのか、……今、GNで何をしているのか」

エミルの言葉の端々から、押し隠しているような様子は見られない。包み隠さず話しているのだろう。

「……みんなには、一時的にとは言え他所のフォースに加入していたことも話しました。もしかしたら、批難されるかもしれないんですけど。……それが怖くても、話さなくちゃいけないかった」

でもね、とエミルはおかしそうに苦笑した。

「そしたら、「なんでそんなことで謝るんだ」「一時的にじゃなくてちゃんと正式に加入しろよ」「新しい居場所が見つかって良かったな」「さすがエミルだ、何とも無いぜ」って、笑ってくれました。ついでに、たくさん”どつかれ”ましたけど」

つまり、エミルが気にしていたようなことは何も無かったのだ。

「ボクからも伝えましたよ。「リヴェルタのメンバーになりたい。なつてもいいか」って。みんな、快く送り出してくれました。……だから、ここに”出戻り”に来たのは、ボ

クの本心です」

嘘偽りの無い、真っ直ぐな言葉。

セアはそれを確かめてから、頷いて右手を差し出した。

「うん。改めて、ようこそ。フォース・リヴェルタへ」

### 【次回予告】

サツキー「エミルも正式に入ってくれたし、これで万事オツケーね！」

エミル「えーっと、これからよろしくお願いします」

コーダイ「なーに他人行儀ぶってんだよ、俺達もう一緒に戦った仲じゃねえか」

セア「うんうん。お客さんじゃないんだから、遠慮とかしないでいいんだよ」

ハバキリ「……………」

サツキー「ハバキリ？なんか、あんまり嬉しそうじゃないけど……」

ハバキリ「あー……気になることがあってな、ちよーっと外行ってくるわ」

コーダイ「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション

『大地は雨に打たれて』」

ジル「なんか、今のハバキリ……怖かった」



## 14話 大地は雨に打たれて

ふと、オーダーが無いにも関わらずバーテンダーは珈琲豆をメーカーに注いでいく。

「どうした姐さん。別に俺はコーヒートのオーダーなどしとらんぞ?」

「アタシが飲みたいのよ。他にお客はいないんだし、いいでしょ?」

「構わんさ。まあせっかくだ、俺もコーヒートを頼む」

「はいはい、ブレンダーね」

トラちゃんがそこでオーダーし、バーテンダーはもう一人ぶんの豆をコーヒーマーカーが豆を挽いていく。

三度、ガーガーと言う音が鳴り響く中、トラちゃんはお冷やに口を付ける。

「……コピー体、か。今でこそ運営の利用規約でそれも禁止されるようになったが、少し前まではそれが動乱の再来を引き起こしたとは、思いもしなかった」

「ホントにねえ。強化人間なんてものは大概ロクな結果を齎さないって、分かっているはずなのにね」

「E.L.ダイバーが新しい命の形……ニュータイプだとするなら、その研究開発はされて然るべきなのだろうがな。……全く気に入らん」

腕を組んで慥然として溜め息をつくトラちゃん。

「気持ちに分かるわよ。でも、誰かがアクションを起こさない限り、人は戸口の前で足踏みしたままよ。リツくん達が尽力したからこそ、サラちゃんは救われたし、その後生まれれたELダイバーも自分の人生を謳歌出来るようになった。……救われなかったことも、大勢いたけどね」

バーテンダーの脳裏に、白金色の髪を二つ結びにし、誰かからプレゼントされたのだろうエメラルドのイヤリングを愛おしそうにしていたELダイバーの少女が思い浮かぶ。

「……………世界から存在を抹消された、”本当の”ファーストELダイバーを……………」

「なあ、姐さんよ。『ELダイバーにも、生まれ変わりはあるのだろうか?』」

ふとトラちゃんは、そんなことを訊ねた。

「どうかしらねえ?その辺りは霊的な専門家にでも相談しないと分からないけど……でも、生まれ変わる方が、ロマンズがあつていいじゃない。例え今生きている時に会えなくても、その後で会えたらって思うのは、ステキなことだと思おうわ」

「フツ、そうだな。その方が”人間”らしいな」

バーテンダーのロマンチストな答え方に、トラちゃんはいつもの胡散臭さ通常の三倍の怪しい笑みで頷いた。

Emil がフォース・リヴェルタに『正式に』加入してから数日。

ハバキリ達は今、一週間ほどログインを自重している。

理由とは、学生ならば誰しも避けられぬ壁——学期ごとに二回に分けられる、定期考査だ。

その一回目、中間考査がひとまず終わるまではテスト勉強をしなくてはならない、と言うことをハバキリとコーダイ、セアが話し、同じく学生であるサツキーとエミルも頷く。

いずれ同じタイミングでサツキーやエミルもテスト勉強のためにログイン出来なくなるだろう。

ジルだけはE.L.ダイバーなので学業とは無縁であるため、ハバキリ達がログインしてくる日までは保護管理局の元で大人しくするそうだ。

と言うわけで、ハバキリ、コウダイ、セアの三人はテスト勉強に勤しむことになるの

だが。

「ハバキリー、帰りにどっかで勉強会やらねえか？」

放課後、コウダイはハバキリーに話しかける。

「あー、悪いコウダイ。オレ、妹の勉強見てやるって約束してんだわ」

しかし、ハバキリーの方は既に妹—テラスの方に先約があった模様。

「そっか。お兄ちゃんは大変だな」

家族サービスは大事だもんな、と納得するコウダイ。

「つたく、オレはオレで忙し—んだってのによ」

「……。今日、妹ちゃんの勉強見終わったら何するんだ？」

「この間買った『メツサー』の組み立て」

「つておいい!?そこは嘘でも自分の勉強だつて言えよ!？」

テスト期間中だと言うのにガンブラに手を出そうとしているハバキリーに、コウダイはツツコミを入れる。

「別にテスト前だからつて慌てて勉強しなくても、普段から教科書とノートを見直してりや普通に点は取れるだろ」

「そりゃ出来るヤツの意見だろ……普通はそれだけで点数は取れねえんだつて」

コウダイ自身も忘れかけていたが、ハバキリーは毎度学年トップ10入りしているほど

成績優秀なのだ。

それだけ優秀でもなければ、学年の違う妹のテスト勉強を見ながら自分の趣味にも手は出せないだろう。

「そんなに不安なら、先輩で学年トップのセアさんにでも教えてもらえよ」

「あつ、その手があつたな！よしつ、そうと決まれば善は急いで回らず！」

『善は急げ』と『急がば回れ』をこっちゃんにしながら、コウダイはスマートフォンを取り出してセアに連絡を飛ばす。

結果は、セアはセアでカナデとテスト勉強をするらしく、お断りされてしまったのだが。

帰宅してからは、コウダイに言った通りにテラスのテスト勉強を見てやっているハバキリ。

集中の妨げになると言うことで、テレビや音楽などは流さず、飲み物を注いだコップ以外に余計な物は置かない。

「えつと兄さん、こっこなんですけど……」

「あー、これはこっちに代入してからな……」

分からない所を素直に聞いてくるテラスに、ハバキリもいつものように面白おかしくすることもなく普通に教えている。

テラスはテラスで、一から十まで教えなくとも、少しだけヒントを示すだけで残りは理解してくれる。

その分からない所の数も多くはないので、テラスが問題を進めている間はハバキリも自分の教科書とノートを広げて勉強をしている。

そんな集中された勉強時間が二時間ほど過ぎた所で、ハバキリのスマートフォンに予め設定していたアラームが鳴り、すぐに止められる。

現在時刻、18時ちょうど。そろそろ食欲が自己主張を始める頃だ。

「よし、今日はここまで。飯作るか」

「はい」

兄妹で手分けして夕食の準備を整え、すぐに食卓に着く。

鶏肉団子のスープを啜りつつ、テラスは会話を持ちかける。

「兄さん、最近のGBNはどうですか？」

「んー、色々あったけど、新しくフォース作って順風満帆つてところだな」

それがどーかしたのか、とハバキリは聞き返すが、対するテラスは安心したような顔

をしている。

「最近の兄さん、何だか楽しそうですから。ちよつと前まで、悩んでばかりだったのに、今はGBNを始めたばかりの頃みたいだなんて」

「ま、よーやく面白くなってきたしな……」

「ここ最近、問題が発生してはそれを解決しての繰り返しで、楽しむどころでは無かったのだ。」

エミルが正式にフォース・リヴェルタに所属してからまだ数日だけだが、ようやくハバキリが「楽しい」と感じられる形になってきた。

ふとハバキリは、別の話題を持ち出す。

「あー、そーだテラス。最近お前の噂がすげーぞ。中等部の一年生の中に、『男子の理想の大和撫子な女の子』がいるって」

「ちよつ、兄さんっ、それどこから聞いたんですかっ?」

自分の噂話のことになり、テラスが途端に慌てふためく。

「一年の女子からよく聞かれるんだよ、「テラスちゃんのお兄さんですよね?」ってな」

「私に兄がいるって話してないのに、どこから洩れてるんですかそれ……」

「それだけじゃねーぞ、色んな女子の運動部からも聞かれまくりだ。さすが、学年女子の体力測定全イチなだけあるな」

「……どおりで体育祭が終わってから、やたらと運動部から勧誘が来るとは思ってた」  
た」

名字が同じなら身内だろうかと思われるのはともかく、この兄妹、とにかく学園内で目立つのだ。

兄は成績学年10位内の常連者で、なおかつ荒事に関しても悪名高い。

そんな兄の身内であると言うだけでも悪目立ちすると言うのに、その妹は体育関連で目覚ましい才能を見せ、さらに料理上手で礼儀正しい。

加えて、どちらも顔立ちが良く、特にテラスの方は“大和撫子”とさえ呼ばれるほどの美少女。

「勿体ねーな、せっかくなら運動部に入っちゃまえよ。テラスなら練習なしで即戦力だぜ」  
「兄さんは兄さんで私のこと買いかぶり過ぎです。そう言う兄さんこそ……」

「オレは中学に上がったたらGBNするって決めてたからな」

運動部に入ったかどうか、と言いかけたところでハバキリがそれを遮る。

いつもと何ら変わらない、アメノ家の団欒だった。

学生達の戦場であるペーパーテストもあつと言う間に過ぎ、ハバキリとセアは難な



く、コウダイとテラスも問題なく突破。

一週間ぶりに、GBNの解禁である。

「よっしやアテスト終了!」

最後の科目のテストを終えて、コウダイは中学生離れした身長を思い切り伸ばしながら声を張り上げる。

「くあー……、テストも終わったってのにうるせーぞコウダイ」

開始十分少しで全ての解答を埋め、残りの30分以上を居眠りに当てていたハバキリは欠伸しながら文句をつける。

「そう言うお前はテストも終わったってのにテンション低いんだよ! 昼飯食った後はGBN行こうぜGBN!」

「へいへい……昼飯くらいはゆっくり食わせろよ」

コウダイのテンションの高さに辟易としながらも、ハバキリは荷物を纏めて帰りのホームルームを待つ。

食堂で昼食を終えて、ハバキリとコウダイは一度帰宅して、サツキーとエミルの、平日のログイン時間に合わせて駅前のガンダムベースへ向かう。

セアは地元の方からログインすると昼食中に連絡があった。

テラスにも夕方までGBNにいと伝えて、ハバキリはガンダムベースへ向かう。

ガンダムベースに入店、使用許可を得てからダイブルームに入るが、まだコウダイは来ていないようだ。

一足先にログインするか、とハバキリはいつものようにジンライ改とGPベースをセツト、ダイブ先をフォースネストに指定し、現実世界からテイメンションへ飛び込んだ。

フォースネストに到着してすぐに、ハバキリは「違和感」に気付いた。

「(……なんだ?)」

チリチリと身体に張り付くような「違和感」。

似たような感覚は、つい少し前にあった。

エミルの元いたフォース、コキュートスのメンバー達が陰から自分達を見ていた、その視線。

だが、今回のそれは以前ほど明らさまではない、気配を殺しているのだろうか、しか

し確実に誰かを見ていると感じ取られる程度に、GBN上のハバキリの感性は鋭利なものだ。

……否、気配を殺したようなこの感覚はさらに前に一度、同じものを感じたことがある。

「(……何が目的だ?)」

ハバキリはしばらくの間、その視線に気づかぬフリをしつつ、G—T u v eの動画などを視聴しながら様子を見ていた。

数分が経過しても、何のアクションも見えない。

代わりに、フォースネストにジルがやって来た。

「おー、ジルか。一週間ぶり」

「こんにちは、ハバキリ。えっと、てすと?してたんだよね?」

トテトテと入って来ると、早速備え付けの椅子にちよこんと座るジル。

「そーそー。つたく面倒つたらねーぜ」

ジルがやって来たことで、謎の視線のことを一度頭の片隅に置いておくハバキリ。

もう数分が経つと、セアがフォースネストにログインしてきた。

「こんにちはハバキリくん。テストお疲れ様」

「こんにちはセアさん、今回もまた学年トップですか?」

「だから、ハバキリくんもだけど、みんな私のこと買いかぶり過ぎだよ。まだ結果だつて分かってないのに」

苦笑するセアにとりあえずの挨拶だけは返し、意識は謎の視線に向けられたまま。

「ジルちゃんも、一週間ぶりだね」

「セアもてすと、お疲れ様」

セアとジルが談笑を始める様子を近くで見ているハバキリは、表情に出さない程度に目を細める。

「(ジルは何も感じてねーのか?)」

否、それはないだろう。

自分ですら気付くのに、感知能力を持ったジルが気付かないはずがない。

周囲に気を遣って、分かっているかも知らないフリをしているのだろうか。

続いて、サツキーとエミルが一緒にやって来た。

「あ、セアさんにハバキリ、一週間ぶりです」

「テスト、お疲れ様です」

サツキーは軽く手を振りながら、エミルは一礼して、フォースネストに入ってくる。

そして最後にコーダイがログインして来た。

「つと、もうみんな先に来てたか。よし、一週間ぶりに全員揃ったところで、今日の

ミツシヨンは……」

そこまで言いかけたところで、ハバキリは意を決した。

「あー、コーダイ。一週間ぶりで悪いんだけど、オレちよつとソロでやらせてもらおうわ」  
それだけ呟くと、ハバキリは椅子から立ち上がって格納庫へ向かうとする。

「つておいおいハバキリ？なんで全員揃ってからソロプレイになるんだよ」

コーダイがそれを呼び留めようとするが、

「気になることがあつてな。10分経つても帰つてこなかったら、オレ抜きでやつてくれ」

振り返らないままにハバキリは室内を後にしていった。

格納庫に到着するなり、そのままジンライ改へ乗り込んだ。

カタパルト展開、オールグリーン確認。

「ハバキリ、ジンライ改、出る！」

リニアカタパルトによって打ち出されるジンライ改は、そのまますぐ近くの森林地帯へ向かう。

「(あの感覚が確かなら、アレは……ジャブローの時と同じ奴だ)」

木々の中へ突入してすぐに、ハバキリのお目当ては見つかった。

ずんぐりとした青い機体——ゼク・アイン。

あちらもジンライ改を——最初から——捕捉しただろうゼク・アインも、モノアイを向けてくる。

対するジンライ改は堂々とゼク・アインの前に降り立つ。

「よー、この間はどエライ世話になったな——」

全周波通信でゼク・アインへと呼び掛けるハバキリ。

「とりあえずてめーをコクピットから引き摺り下ろして、そのツラ拝ませてもらうついでに、じっくり話を聞かせてもらおうじゃねーか！」

すると次の瞬間には何の勧告も無しにアサルトライフルを向け、躊躇いなくトリガーを引き絞った。

連射される銃弾を前に、ゼク・アインもその場から身を翻してやり過ぎす。

「ハッ、前と同じよーにやれると思ってるじゃねーぞ——」

回線をオープンにしたまま、ハバキリはアームレイカーを殴り倒し、ジンライ改を加速させてゼク・アインとの距離を詰めていく。

ゼク・アインも反撃にビームライフルを連射するものの、ジンライ改はそのピーキーなまでに突き詰めた機動性を駆使して閃光を掻い潜り、その最中にもアサルトライフルを撃ち返す。

アサルトライフルとビームライフルの交錯が数度繰り返され、先に仕掛けるのはジンライ改。

アサルトライフルを右手に持ち替え、ハバキリの利き手である左手に重斬刀を抜き放つ。

鋭角なカーブをジグザグに織り交ぜながら、接近戦へ持ち込む。

ゼク・アインの方もその気になったのか、ビームライフルを納め、シールド裏からビームサーベルを抜いた。

そのまま重斬刀とビームサーベルが衝突するーと思いきや。

「だーれがてめーの迷惑通りに戦ってやるかよー」

重斬刀を振り抜こうとするフリをして一回転すると、流れるような動作でアサルトライフルを近距離で撃ちまくる。

だがゼク・アインの反応も早く、すぐに肩のシールドで防御の姿勢を取ってアサルトライフルの銃弾を弾き返す。

ガードするために足を止めている内にアサルトライフルの射撃を止め、重斬刀で斬り掛かるジンライ改。

今度こそ振り抜かれた剣刃。

しかしゼク・アインは銃弾を防いだ姿勢のまま重斬刀を受け流してみせる。

ダメージを与えられていないと即断し、ハバキリは強引にアームレイカーを捻り返してジンライ改を飛び下がらせ、その0.5秒後にゼク・アインのビームサーベルが振り抜かれる。

ビーム刃の波動がジンライ改の胸部を焦がすが、損傷はない。

一度距離を置き、身構え直しながらハバキリはなおも挑発する。

「何だ何だ、今日はだんまりか？この間みてーにベラベラ喋ってみせろ、よッ！」  
アサルトライフルを撃ちまくりながら再び接近戦へ持ち込むハバキリ。

ハバキリがジンライ改で出撃した後。

「何だよハバキリの奴、今日はノリ悪いな……」

普段はもつとノリノリでおちやらけてるのにな、とコーダイは不満そうにボヤク。

「気になることがある」って言ってたけど、何のことかな……」

セアも、ジンライ改が飛び去って行った方を見ながら呟く。

サツキーとエミルも、何のことだろうかと頭を悩ませているところで、不意にジルが口を開いた。

「さっきのハバキリ、何かおかしかった」



この時コーダイは「ハバキリがどっかおかしいのは今に始まったことじゃねえけど」と言いかけて飲み込んだのはナイショ。

「それに……ちよつと怖かった」

彼女の「怖かった」と言う言葉に全員が耳を傾ける。

「確かに……上の空、つてわけじゃねえが、何となく別のことを考えてるみたいな感じはあったな」

しかし、エミルが正式にフォースメンバーに加入して、今のところフォース・リヴェルタに問題らしい問題は見つからないはずである。

だとすれば、ハバキリは何を思っただけで行動に出たのか。

彼は「10分経っても帰ってこなかったら、今日は自分抜きでやってくれ」と言っていた。

それほどまでに、他人に関わらせたくないことなのだろうか。少なくとも、付き合いの長いコーダイにすら。

「……私、ちよつとハバキリくん探してくる」

セアは開いていたコンソールを閉じる。

「待ってよセアさん、ハバキリがどこ行ったのか分かるんですか？」

先走ろうとするセアに、サツキーはそう問い掛ける。

「さっき、ハバキリくんのジンライが東の方に飛んでいくのを見たから。それには、10分で行って帰ってこれる距離なら、多分そんなに遠くには行ってないはず」

それだけ返してから、セアは格納庫へ駆け出す。

キャットウオークからフリーダムガンダムのコクピットへ飛び移り、すぐに出撃準備を整えていく。

「セア、フリーダムガンダム、行きますー！」

リニアカタパルトによって外へ打ち出されたフリーダムガンダムは、蒼翼を広げ羽ばたき、ジンライ改が向かっただろう方角へ機体を飛翔させる。

今日のデイメンションの空は、暗雲が覆い尽くしていた。

いつの間にか、雨が降り頻っていた。

重斬刀とビームサーベルが打ち付け合うのも、戦いが始まって既に100回は超えただろう。

にも関わらず、ジンライ改とゼク・アイン、両者に目立った損傷は見られない。

ハバキリはゼク・アインへの注意を切らないように、ジンライ改の状態を確かめる。

コンソールからは、重斬刀の耐ビームコーティングが剥がれ落ちてきていることを告げており、そろそろビームサーベルを防げなくなるだろう。

ついでに、アサルトライフルの残弾も心許無い。

「そろそろ本気出してやるよ、感謝しな」

潔く重斬刀をその場に捨てると、リアスカートからシースザンバーを抜き放ち一瞬ぐさまゼク・アインへ飛び掛かった。

振り下ろされるシースザンバーに対し、ゼク・アインはその場から飛び下がって大剣の切っ先を躲す。

だが躲されることはハバキリの想定の内、空振ったシースザンバーが草木を碎き潰しながらも武装フォルダを開き、チェーンアンカーを選択する。

ジンライ改のフロントスカートから鎖付きの鉤爪が放たれ、一瞬だけ挙動の遅れたゼク・アインの左腕へ噛み付いた。

それを確認すると、ジンライ改は繋がれたチェーンをゼク・アインごと力任せに引っ張り上げようとするが、

ゼク・アインもまた、チェーンアンカーに噛み付かれた左腕を引っ張り上げており、ジンライ改と綱引きをするような形になっていた。

ギチギチギチギチとチェーンが火花を散らす中、ジンライ改とゼク・アインの綱引き

が続く。

「チツ、初見殺しとはいかねーか……」

舌を打つハバキリだが、

次の瞬間にはニヤリと獰猛な笑みを浮かべる。

「じゃ、やーめた」

不意にジンライ改はフロントスカートからチェーンを切り離した。

拮抗し合っていた力の片方が失われ、後ろに引つ張ろうとしていたゼク・アインの勢

いが余って仰け反る。

その隙が、ハバキリの狙っていた瞬間だ。

瞬時にジンライ改を加速させて、地面を削りながらゼク・アインへとシースザンバーを斬り上げる。

「殺（と）った!!」

シースザンバーの切っ先の向かう先はゼク・アインのバイタルバートだ。

しかし、

『ダミーアーマー、パージ』

ハバキリ自身が確信するほどの会心の一撃。

「……………あ？」

だが、その手応えはあまりにも軽過ぎた。

シースザンバーが捉えたのは、ゼク・アインの『パーツだけ』だったからだ。またしてもシースザンバーは空を斬る。

そんなことは問題ではない。

「……………は？おいおいちよつと待て、どーゆーことだ？」

ハバキリは、前方に見える光景に目を疑った。

『バラバラになったゼク・アイン』のパーツの中から現れたのは、白銀に塗装された『ジム・クウエル』の改造機だった。

そして、ハバキリにとってそれは見間違うはずのない姿だった。

「ちよつと説明してくれるか？『トーシロー』」

二度と交わることは無いと思われた青と白が、交錯した。

出撃を完了したセアのフリーダムガンダムは、ハバキリのジンライ改が向かったらう方角へ進みつつ、辺りを見回している。

「途中で曲がったりしなかったら、多分この辺に……」

例えばどこかで進路変更したとしても、それほど遠くには行けないはず、とセアは注意深くモニターの数々を見比べる。

『……………いちよつと待て、どーゆーことだ?』

不意にオープン回線の通信を、フリーダムガンダムが傍受した。

「ハバキリくん?」

セアはアームレイカーを引き戻し、フリーダムガンダムをその場でホバリングさせる。

傍受した通信がどこからのものであるかの特定を急ぐ。

それは、すぐ近くの地上からだった。

フリーダムガンダムの視界をそこへ向けさせると、シースザンバーを握ったジンライ改と、もう一機、白銀のガンプラー確かジムと言うMSだったはずーがそこにいた。

互いに武器を構え、睨み合ったまま動かない。

セアもそこへ介入はせずに、フリーダムガンダムをゆっくり降下、着地させると、木々の隙間に片膝を着けさせる。

『ちよつと説明してくれるか？』『トールシロー』』

「(トールシロー?)」

トールシローと言うのは、ダイバーの名前のことを言っているのだろうか。

あの二機の中に、何があるのか。

セアは通信に耳を傾けたまま、しばらくの間静観することにした。

かつて、フォース・アルディナで双壁を誇った二機のガンプラ。

ひとつは、青く塗装されたジンを使う『青き狂戦士』

もうひとつは、白銀に塗装されたジム・クウエルを使う『白銀の聖騎士』

その後者が今、前者の前に立っている。

機体銘『ジム・クウエルロウ』

それも、わざわざゼク・アインに擬態していて。

「お前、トールシローだろ?人違いじゃーねーよな?」

ハバキリがそう問い掛けても、目の前のジム・クウエルロウは黙ったまま。

パージしたゼク・アインのシールドを拾うと、それを左手に持たせて盾代わりにする。互いに睨み合い、静寂が訪れる。

もう数秒の沈黙の後に、先に動いたのはハバキリだった。

「よし分かった、ドーやら人違いみてーだな。じゃー、遠慮なく……ぶっ潰す!!」

再びシースザンバーを担ぎ直して、ジンライ改はジム・クウエルロウへ突進する。

対するジム・クウエルロウは、その場で足を止めてビームライフルを連射して迎え撃つが、ジンライ改はシースザンバーの腹でビームを防ぎながら距離を詰めていく。

間合いに踏み込むと同時にシースザンバーを振り下ろすーと見せかけて、瞬時に加速しながら迂回、ジム・クウエルロウの左腕後ろ側面へ回り込みながら、回転の遠心力も含めてシースザンバーを薙ぎ払った。

これに対し、ジム・クウエルロウは先程拾ったゼク・アインのシールドで防ごうとする。

結果、シールドに遮られたせいでジム・クウエルロウの胴体は捉えられなかったものの、シールドを砕き飛ばしー

たその隙間から、ジム・クウエルロウのビームライフルの銃口が覗いておりー

ーその動きは、ジャブローで出くわしたゼク・アインと全く同じでー



「……ッツツツツ?!」

ハバキリの頭の天辺から足の土踏まずまで、鳥肌が立った。

そのせいで反応が鈍り、ジム・クウエルロウが放ったビームライフルへの回避が遅れた。

咄嗟に機体を振らせることでバイタルバートへの直撃を防ぐが、ジンライ改は右腕を撃ち抜かれてしまった。

すぐに機体をバツクホバーさせて距離を置き直す。

「……なー、やっぱお前トーシローか? トーシローだろ? トーシローだな? はい決定、お前トーシローな」

今の動きで理解したー理解できてしまった。

仕方なくシールドで防がざるを得なかったと見せかけて、ビームライフルで必殺のカウンターを狙っていた。

『そうしてくると知っていなければ』、ジンライ改は今の一発でコクピットを撃ち抜かれていた。

そしてージャブローで出くわしたゼク・アイン（の見た目をしたジム・クウエルロウ）の動きと、全て繋がった。

「おいトーシロー、一体何のつもりだよ。ジャブローの時に、ゼダンの門の時に、今回の

コレに。……まさか、オレが分からないなんてことはねーだろ  
そう。

ジャブローの時のゼク・アインは、ハバキリの動向を見透かしているかのような発言をしていた。

だとすれば、あの耳障りなノイズの正体がトーシローだと言うのは領けることだ。

「なんだよ、そこまでして信じられねーのか？」

しゃーねー奴だな、と呟くとハバキリはコンソールを打ち込み、ジンライ改のコクピットハッチを開けて、生身を晒した。

ハッチの縁に片足を乗せて、堂々と姿を見せてやる。

「ほらよ、これで満足か？オレが自分からツラ見せてやってんだ、お前も降りてこいよ」  
数秒の間を置いてから、ジム・クウエルロウのコクピットハッチも開かれ、相手のダイバーも姿を見せた。

ジム・クウエルロウに合わせた白銀の軍服を纏い、首から上を完全に覆ったフルフェイスタイプの仮面。

その仮面に手を掛けると、あっさりとそれを外して見せた。

ー見紛うことなき、背中まで伸ばしたプラチナブロードの長髪と、エメラルドグリーン色の瞳を持ったダイバーだった。

ダイバーネーム『トーシロー』

雨の中、ハバキリのダークブルーの瞳と、トーシローのエメラルドグリーンの瞳がぶつかり合った。

「……久しぶり、とでも言うべきか？ハバキリ」

その口から放たれた声は耳障りなノイズなどではない、変声期の狭間に近い、青年の声色。

「なーにほざいてやがるトーシロー、ついこの間に会ったばかりだろうが」

寝言言ってんじゃねーよ、とハバキリは警戒を強めた。

今日の前にいるトーシローが、自分の知っている彼で無くなっているのでは、と懸念しているからだ。

「さて、じっくり話を聞かせてもらおうじゃねーか……一体何のつもりだつてな」

「……………」

「あ、じゃー質問変えるわ。『てめーは今何をしてやがる？』」

「……………」

「答えられねーよーな『後ろめたいこと』をやつてんのか」

「……………」

ハバキリの言葉に、ほんの僅かだがトーシローの眉が微動した。

「相変わらず嘘のへたな奴だな。それとも土壇場で嘘を通すために、オレに嘘のへたな奴だと思わせるための演技か？」

「……僕は君ほど器用に出来た人間じゃない。嘘が下手なもの、否定はしない」

「そーか。で？そろそろ本題に入ろーじゃねーか。……お前、『運営の強硬派の人間になっちまったのか？』」

「ッ」

今度はあからさまに動揺した。それでも動揺を隠しているつもりなのだろう。

「その反応、凶星か」

「……」

凶星を指されてなお、沈黙を続けるトーシロー。

「いー加減に答えろトーシロー、お前マジで何考えてやがる？俺達のフォース、アルディナが解散になった……『お前がそうさせた』、そもその原因だった、その連中の汚職の片棒を担いで……てめーのやってること、ムチャクチャじゃねーか」

「それは違う」

不意に、ハバキリの言葉をトーシローが否定した。

「君は、僕がアルディナを解散させた原因を、運営のせいだと言いたいようだが、それは違うな」

「……違う、だ？なら、野良のELドライバーに接触したオレが悪いとでも言うつもりか？」

「それも違う。ハバキリが悪いなんてことは無い、全く無い」

「チツ……んじや何だよ、オレ達のフォースをムチャクチャにしてくれやがったのは、運営のドアホどもでも、オレでも無いってんなら、何だ？何が全ての原因だ？」

ハバキリのその問いかけに、トーシローはさも当たり前のように答えた。

「悪いのは、全部僕のせいだ」

トーシローの答えに、ハバキリはすぐに返すことが出来なかった。

「フォースの、例えば末端が引き起こしたことだとしても、その責任はリーダーたる僕が負わなくてはならない。なら、責任を取ってフォースリーダーを辞退するのは、当然のことだ」

「……」

「運営は不正を正そうと行動していたに過ぎない。例えその行為が、一般プレイヤーにとって害を与えるようなものでも」

「……」

「それに、アルディナの皆が運営からマークされていることも知っている。だから僕は素性を隠して運営に協力し、その裏でアルディナの皆に可能な限り類が及ばないようにしていた」

「……」

「僕のやり方が100%正しいとは言えないし、君にとって納得できることでもないだろう。だが、これが今の僕に出来る最善の……」

「――最善のやり方なら、『ELダイバーを片っ端から殺しても構わない』ってのか？」

不意にハバキリが声を返した。

何の感情も込もっていない、冷たく無機質な声で。

「お前の言ったことは全部マジなんだろうよ。素性を隠してたってんなら、ゼク・アインに偽装してたってのも分かる」

でも、とトーシローに言い返す隙を与えずに言葉を続ける。

「お前今、ELダイバーのことは何も言わなかったな？アルディナの奴らに類を及ばないように、運営に協力する。……それって、連中のELダイバー狩りに加担することに何の疑問も持ってねーってことだろ」

「何を言って……」

「アルディナの奴らに害が及ばないようにする。逆に言えば、『今度はそれ以外の誰かに害を向ける』ってことでもあるんじゃないかねーのか?」

「……」

「トーシローがそんなことも分からねー奴だとは思いたくはねーけど、そーなったら、またオレ達と同じよーな奴らが出てくるぞ。……そー言うの、死ぬほど気に入らねーな」  
ハバキリの言葉が杭となって、トーシローへ打ち込まれていく。

「トーシロー。お前の本音はどこにあるんだ?」

「……やはり、君には分かかってしまっただな」

不意に、トーシローは観念したように溜め息をついた。

「だが、ここで僕が本音を言ったところで、君は納得しないだろう」

「……その本音があつたのを、さっきから訊いてんだよ」

不意に、トーシローはコクピットに入り戻ると、ジム・クウエルロウを再起動させた。

『すまない』

それだけを告げると、ジム・クウエルロウはビームライフルを放ち、ジンライ改の左足を撃ち抜いた。

「なっ、ちよっ、おいつ……!?!」

ジンライ改がバランスを失って転倒する中、慌ててジンライ改のコクピットハッチを閉じて、どうにか落下を防ぐハバキリ。

その間にも、既にジム・クウエルロウは踵を返して遠くへ飛び去ろうとしていた。

「待てよおいトーシロー！クソつ、こんなんじや追うことも出来ね……ッ！」

左脚を失ったジンライ改は、起き上がることにすら満足に出来

ず、そのまま見送ってしまう。

ーそれはまるで、ハバキリがフォース・アルディナ脱退を決意した、あの日と立場が逆になったかのようにー。

だが、ふとどこからか現れたフリーダムガンダムが、ジム・クウエルロウの後を追っていた。

森林地帯から海上に出たところで、背後から何者かが追ってきていることをアラートが知らせてきた。ジンライ改ではないだろう。

トーシローはジム・クウエルロウを反転させ、追ってきた何者かーフリーダムガンダムを視認する。



同時に、オープン回線でフリーダムガンダムのだいバーからの通信が届く。

「待って、攻撃の意志はないの」

フリーダムガンダムは構えを取ることなく、棒立ちの状態でホバリングして速度を止める。

「私はセア。あなたの友達の、ハバキリくんのフォースの、リーダーです」

「……そうか、あなたがリヴェルタのリーダーの、セアさんか」

トーシローも、攻撃の意志はないことを示すために、ビームライフルを下げる。

「盗み聞きをするつもりじゃなかったけど、さっきのあなたとハバキリくんの会話を聞いた。……どうして、もつとハバキリくと話そうと思わなかったの?」

「セアさん。あなたも、ハバキリと一緒に戦ってきたのなら分かるはずだ。あいつは、自分が正しいと確信したことは絶対に曲げずに貫き通そうとする、己の正義を地で行く奴だ。……そして今の僕は、あいつとは“分かり合えない”場所にいる。恐らく、近い内に敵としてまた会うことになるだろう」

トーシローの言葉には、確固たるハバキリへの理解が見える。

しかし、『理解しているからこそ逆に“分かり合えない”』こともあるのだと、彼は言う。

「理解しているのに分からない?それは、どう言うこと……?」

「これは、僕とハバキリの問題だ。あなたは関わらないでほしい。……ハバキリのジンライは動けないはずだ、救援に行ってくれ」

トーシローの声のトーンが下がる。

これ以上関わるなら手荒な真似をするぞ、と、暗に告げている。

だが、セアはここで回れ右をするつもりは無かった。

「ハバキリくんと君だけの問題じゃない。私達リヴェルタと、君の元のフォース仲間達、みんなの問題のはずだよ。……ハバキリくんに言えないのなら、私にだけでも、本音を伝えてほしい」

「そうか……なら、無礼を許してもらおう」

ジム・クウエルロウは即座にビームライフルを構え直すと同時にトリガーを引き絞るが、対するフリーダムガンダムも咄嗟にシールドでビームを防いだ。

「……戦うつもりならっ」

セアはアームレイカーを握り直し、フリーダムガンダムはウイングをハイマツトモードに広げて飛び上がる。

上方からルプス・ビームライフルを連射するフリーダムガンダムだが、ジム・クウエルロウは海面を滑るように機動し、避けられたビームが海面にぶつかると激しい水飛沫を立ち昇らせる。

「距離が遠い……もつと詰めない」と

フリーダムガンダムはジム・クウエルロウとの距離を詰めるために、高度を落としたしながらも前方へ加速する。

頭部の機関砲『ピクウス』を速射しつつ、ジム・クウエルロウの動きを注視する。

ジム・クウエルロウもその場でビームライフルを連射し、フリーダムガンダムを近付けさせまいとするが、セアは冷静に回避とシールドによる防御で被弾を防ぎつつ、確実に距離を詰めていく。

「……でっー」

ある程度の距離を縮めたところで、セアはウエポンセレクトターを三つ同時に開き、ルプス・ビームライフル、バラエーナ、クスイフィアスによる合計五門の火砲を一斉射する、ハイマツトフルバーストを放った。

だが、ハイマツトフルバーストを放つためにバラエーナとクスイフィアスを展開すると言う動作を見た時点で、ジム・クウエルロウは既に射線の外へと回避しており、五筋の火線はただ海面を薙ぎ払っただけに終わる。

ハイマツトフルバーストの反動を殺し切れていない内に、ジム・クウエルロウは瞬間的に加速、一気に近接格闘の間合いにまで踏み込み、左手に保持したままイドリングストップを掛けていたビームサーベルの光刃が発振される。

「速いっ!?!」

セアが辛うじて反応出来たのは、ハバキリのジンライ改と言う身近な具体例があったからか、瞬時にシールドを前に向け、振り翳されるビームサーベルから機体を守るが、先程から何発もビームライフルを防いでいたために損傷しているシールドでは防ぎ切れず、真つ二つに斬り裂かれてしまった。

それを認識するなり、セアはすぐにアームレイカーを引き戻し、フリーダムガンダムを急速後退させる。

すぐに距離を取ったおかげで、返す刀でビームサーベルを斬り返すジム・クウエルロウの一撃を躲すことに成功する、

が、回避に成功したとセアが認識した瞬間には、既にジム・クウエルロウのビームライフルの銃口が向けられていた。

放たれた一射は、フリーダムガンダムのルプス・ビームライフルを撃ち抜く。

「あっ!?!」

ルプス・ビームライフルを失った、とセアの思考に動揺が生じ、

その一瞬の動揺が、勝敗を分けた。

すぐまた距離を詰めてきたジム・クウエルロウはビームサーベルを一閃、フリーダムガンダムの頭部を斬り飛ばした。

セアの動揺が深まる中、モニターが砂嵐へと切り換わってしまふ。

「サ、サブカメラに切り替えを……」

すぐに視界をメインカメラからサブカメラへ切り替えようとするが、もう遅い。

右腕をロスト。

左腕をロスト。

右足をロスト。

左脚をロスト。

右翼、及び右バラエーナをロスト。

左翼、及び左バラエーナをロスト。

右クスイフィアスをロスト。

左クスイフィアスをロスト。

フリーダムガンダムのボディ以外の部位全てが、ジム・クウエルロウのビームサーベルによって破壊されてしまった。

「こん、な……ッ!?!」

「……藻屑になる前に、誰かに見つけてもらってくれ」

最後にジム・クウエルロウはフリーダムガンダムを蹴り飛ばし、海中へ叩き込んだ。

まともな推力を失い、セアはフリーダムガンダムがただ沈んでいくのを見ているしか

なかった。

同じ頃、サツキーのガンダムデスレイザーは、ハバキリからの救援要請を受けて出撃していた。

指定ポイントには出撃して間もなくの位置であったため、サツキーはすぐにジンライ改とハバキリを発見した。

「随分派手にやられちゃったみたいだけど……大丈夫？」

左足と右腕を失って横たわるジンライ改の近くに片膝を着けて着陸させ、左マニピュレーターをハバキリへ差し出す。

「いやー、すまん。助かったわ」

ポリポリと後頭部を掻きながら、ハバキリはガンダムデスレイザーの掌に乗り、サツキーはハバキリを乗せた左マニピュレーターをコクピットハッチへ近づけ、そのままコクピットの中へ入れてやった。

ハバキリの確保に成功してから、サツキーは彼に問い質す。

「ハバキリ、セアさんがここに来なかった？あんたが心配だって飛び出してっちゃったんだけど……」

彼女がそれを訊いてくると言うことは、ついさつきに見えたフリーダムガンダムは、セアの機体だろう。

ハバキリはそのフリーダムガンダムが向かって行った方向へ目を向ける。

「……さつき、フリーダムが3時の方向に飛んでいくのが見えたから、多分セアさんの機体で、オレとやり合ってた機体を追って行ったんだろーな」

確証はねーけど、と付け足す。

「セアさんのことは気になるけど、とりあえず回収するわね」

サツキーはガンダムデスレイザーのコクピットハッチを閉じて機体を立ち上げさせると、近くに転がっているジンライ改を抱え、元来た道に戻るように飛翔する。

沈んでしまったフリーダムガンダムのコクピットの中で、セアはコンソールを開き、救難信号のコマンドを入力していた。

水深はゆうに100mは越えているだろう、こんな海中ではいくら生身では無いにしろ、自力での脱出はまず不可能だ。

とは言え、こんな海中から発信されている救難信号など、拾ってくれるだろうか。

それでも、何もせずに潮に流されて深海にまで沈み、水圧で機体が破壊されるのを待

つよりは遙かにマシだ。

救難信号が発信されたのを確認してから、セアは一息つく。

「……何も、出来なかった」

勢い勇んでハバキリを、トーシローを追い掛けたのは良かった。

しかし、トーシローの実力を前に、まともに戦うことすら出来なかった。

挙げ句、コクピットを破壊されずに戦闘力だけを奪われると言う、情けを掛けられた。

ハバキリのような実力者と対峙するとは、こう言うことなのだ、ハッキリと思いは知らされた。

「……私だけだ」

ハバキリやコーダイ、サツキー、エミル。

自分の仲間達は皆、自分なりに愛機に塗装や改造を施し、実力をモノにしている。

自分は、自分だけが、何の改造や塗装らしい事もしていない、無改造のガンプラを使っている。

「(私も、みんなに追い付かなきゃ)」

いつまでもこのままではいけない。

フォースのリーダーである自分が、リーダーの自分だからこそ、彼らと並んでも恥のないガンプラでなくてはならない。



そのためにもまずは……ここから脱出しなくてはならないのだが。不意に、ガクンツと機体が揺れて、下方へ降りていく感覚が伝わる。

「……沈んでる!？」

潮の流れに引かれ、より深海へと機体が沈んでいく。

しかし、今のセアに出来ることはもう無くなってしまっている。

これではもう、水圧で機体もろとも潰されて強制ログアウトされるしかない……  
そう諦めかけた時、またガクンツと機体が揺れて、機体の沈下が止まった。

「え……?？」

岩に引つ掛かりでもしたのでだろうか？

だとしても根本的な解決にはならない。

すると、数秒のノイズの後に接触通信が届く。

『こちら、『フォース・ロイヤルナイツ』所属のリヒターだ。聞こえるか、フリーダム』  
白い四肢に、青灰色の鎧を纏ったガンプラが、フリーダムガンダムを抱えていた。

サツキーがハバキリを連れてフォースネストへ帰還するや否や、格納庫内は慌ただしくなっていた。

セアのフリーダムガンダムを捜索、及びハバキリのジンライ改を回収するために、コーダイとエミルも出撃を急いでいるのだ。

キャノパルドのкокピットに乗り込んで機体を立ち上げながらコーダイは、メンテナンスハンガーで補給を受けているサツキーのガンダムデスレイザーへ通信を繋ぐ。

「ジンライが放置されたポイントから三時方向だよな!」

「そう!まずそこまで移動してから、その方角沿いに探すの!」

ガンダムデスレイザーの推進剤の補給が完了したのを確認してから、ハンガーから下ろす。

「もしかしたら海中に沈んでいる可能性もあるけど、水中用装備なんて用意してないよ……!」

いち早く七星剣士エクシアの機体を立ち上げて出撃準備を終えたエミルは、すぐにも発進しようと急ぐ。

ハッチ開放、カタパルト展開、オールグリーンを確認。

「エミル、七星剣士エクシア、目標を……」

捜索する、と言いかけたところで、何者かのガンプラがフォースネストに近付いて来ていることを、コンソールが告げてくる。

こんな時になんだ、とエミルはフォースネストの外回りの様子をモニタリングさせ

る。

フォースネストの外には、デュエルガンダムー否、アレックスの改造機が、PSダ  
ウンしたフリーダムガンダムのボディを抱えた状態で、待っていてくれる。

『こちら、フォース・ロイヤルナイツのリヒターと言うものだ。そちらのフォースリー  
ダーの、セアさんの機体から救難信号を受信、人道的立場から救出した。機体と身柄を  
引き渡したい、誰かいないか？』

オーブン回線のそれを聞いて、エミルは七星剣士エクシアをカタパルトから下ろし、  
直接ハッチから降りる。

向こうの回線の周波数を合わせ、エミルが通信に応じる。

「こちらフォース・リヴェルタのエミルです。リーダーを救出してください、ありがとう  
ございます」

『ただの通りすがりだ。礼を言われるほどのことじゃない』

七星剣士エクシアが降りて来るのを見て、アレックスーブルシユヴァリエは片膝を  
着き、セアを乗せたフリーダムガンダムのボディを差し出す。

エミルがそれを受け取ると、ブルシユヴァリエはすぐに立ち上がり、『確かに引き渡し  
た。これで失礼する』と告げて、踵を返し飛び去っていった。

ブルシユヴァリエを見送ると、エミルはすぐに七星剣士エクシアを帰還させ、フリー

ダムガンダムのボディを広い場所に下ろす。

「セーフティシャッターは作動してるから、放射能漏れは起きてないはずだけど……」

フリーダムガンダムの動力機関は核分裂反応炉であり、万が一心臓部が損傷していたら、コクピットにいるセアは放射能汚染を受け、ライフを失って強制ログアウトされている可能性があった。

それを可能な限り防ぐための自動セーフティシャッターは閉じられているため、その可能性は低いと見ているエミルだが、不安なものには不安だ。

一応、『SEED DESTINY』劇中で、フリーダムガンダムのパイロットであったキラ・ヤマトは、インパルスガンダムとの戦闘で機体が甚大な損傷を負った際、咄嗟に機関部を閉鎖して停止しさせたように、手動でもセーフティシャッターを閉じることが出来るが、普通の人間でそこまでのことは出来ないだろう。

すると、すぐにハバキリとコーダイに、サツキーに手を引かれてきたジルが駆け付けて来る。

ハバキリとコーダイがフリーダムガンダムのセーフティシャッターに取り付くと、すぐにコンソールを通じて強制解除のコードを入力していく。

十数秒の後に、コーダイはエンターキーを押し込んだ。

「よし、シャッターを開けるぜ」

強制解除コードが認証され、フリーダムガンダムのセーフティシャッターが開かれ、ハバキリは中を覗き込む。

しかし既にコクピットの中はもぬけの空になっていた……なんてことはなく、「え、えーつと、ただいま……?」

申し訳なさそうな顔をして、「ただいま」を告げてくれた。

その顔を見せることで、メンバー達は初めて安堵したのだった。

### 【次回予告】

セア「フォースのみんなに遅れを取らないように、私もガンプラの塗装や改造をやってみたいんだけど、ハバキリくん、今度の連休って予定空いてるかな?」

ハバキリ「あー、すいませんけど今度の連休はウチ、両親が帰ってくるから空けられないんですよ。コーダイはコーダイで予定が埋まってるみたいだし……」

セア「そっか、先約があるんじゃないね」

ハバキリ「代わりと言っちゃなんですが、ちよつとミツキの伝手を借りてみますね」

セア「ミツキさんの伝手?」

ハバキリ「鴉野（からすの）神社、つてとこなんです……」

セア「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション、  
『鴉野神社へようこそ』」

わ、綺麗な巫女さん……え？あの人、元ヤンなの!？」

## 15話 鴉野神社へようこそ

二人分の珈琲豆を挽き終え、粉末状になったそれに軽く熱湯を注いで蒸している数十分の間に、ドアベルが来客を告げてくれた。

「今宵はお客の多い日だな」

仮面の獣人、やべー奴、先生と言う濃厚な面々の次に現れたのは、

壮年男性だろう、カラス型の鳥人だった。

「ふむ、カイドウ先生に誘われて一度来たきりだが……」

「あーら？アナタは確か、先生と一緒に飲みに来てくれた……『ケンさん』だったかしら？」

バーテンダーは、その鳥人を「ケンさん」と呼んだ。

「おお、覚えておいででしたか」

その節はどうも、と軽く会釈しながら、ケンさんはカウンター席へ向かう。

「お隣、失礼する」

「どうぞどうぞ」

トラちゃんも会釈を返すと、先程まで仮面の獣人がいた席にケンさんが着く。

「店長、前と同じ……『俗物』を頼みたい」

「はい、俗物ね。少々お待ちを……」

オーダーを受けながらも、バーテンダーは二人分のコーヒーを注ぎ、その内のひとつをトラちゃんを手渡してから、カウンターの棚からその二文字が筆書きされた酒瓶を取り出す。

トラちゃんは、お冷を口に付けるケンさんを監察するように見ていると、ふと何か思い当たった。

「……もしや貴方は、カラスノ家の御当主では？あの、フォース・『出雲』の」

「む？如何にもその通りだが……君は？」

ケンさんは少し不思議そうにトラちゃんの顔を見る。

何故なら、彼の所属するフォース・出雲は、積極的にミツシオンを受けはせず、単にオンライン上の会話手段程度にしか使われていない、無名のオーそれこそ運営ですらその存在を認知しているかもどうか怪しいほど、知名度の無いフォースだ。

身内以外では、バーテンダーやミツキぐらいしか知らないはずのことを、トラちゃんは知っているのだ。

「名を名乗るほどの者ではありません。ですが、貴方のご息女……長女の方と何かと縁がありました」



「ほう、あのバカ娘と。迷惑をかけては……否、迷惑千万そのものだろうか？ここ二年で更生の兆しは見えだが、それでも猪なのは相変わらずだ」

そう語りながらもケンさんの脳裏には、ある年の夏に仮病を使って長女を呼び戻しては無理矢理仕事を手伝わせ、それが終わればGBNで不条理とも言える特訓をさせた日々が浮かんでいた。

「そう過小評価することも無いでしょう。控えめに言つて、彼女の力無くして今のGBNは存在し得なかった」

トラちゃんは事実を言っているつもりだった。

彼女がもしいなければ、”彼ら”は『ポイントゼロ』に近付くことさえ出来なかっただろう。

猪突猛進と言えば聞こえは悪いが、何者にも恐れず進む勇氣と、後に続く者のために道を切り開くその力は単純で——しかし得難いものだ。

「そう言ってくれるのは、父親として誇らしいものはあるが……」

照れ臭そうに、手羽の先でこめかみを搔くケンさん。

それを見てトラちゃんは内心で「親馬鹿、ここに極まれりだな」と呟いた。

「ところでケンさん、腰の調子はどうかしら？」

ふとバーテンダーは、お猪口を用意しながらケンさんにそう訊ねた。

「どうにもなあ……まさか供物の米俵ひとつも支えられんとは、歳には勝てんな」

参ったわ、と腰を擦ってみせるケンさん。

本人曰く、「次女に歳を理由に身体を心配されたので、まだまだ現役であることを誇示するために米俵を担いで見せようとしたら、ぎっくり腰をやらかした」らしい。何やつてんのあんだ。

そのせいで長女にも「ジジイはジジイらしく縁側でネコの相手でもしてやがれ、クソ親父」と死ぬほど口汚く心配されたと言う。

ちなみに、米俵ひとつで50〜60kgはくだらないため、特に鍛えてもいない人間では持ち運ぶことすら難しいだろう。

デイメンション某所。

セアのフリーダムガンダムを海へ沈めたトールシローのジム・クウエルロウ。

暗がりの中、メンテナンスハンガーに納められ、再びゼク・アインの外装が纏われる。トールシロー自身もまた、外していたフルフェイスマスクを被りながら、先程までハバキリと交わした言葉を思い出す。

——最善の策なら、ELダイバーを片っ端から殺しても構わないってのか？——

その言葉に対する答えは、咄嗟に出なかった。

「(良いわけがないだろう……)」

だが、今の自分は身を偽っているとは言え運営側のダイバーの末席。「そうだ」と命令をされたのなら、その通りに実行するしか無いのだ。

例えそれが、自分にとって好ましくないことでも。

不意に、コンソールパネルから通話が着信を告げる。

トーションローはすぐに周囲を見回し、誰もいないことを確認してから壁を背にしてから通話に応じる。

「……コチラ、コードネーム『シルヴァ』」

マスク越しのくぐもった声で応答すると、サウンドオンリーの通信から、低い男性の聲が届く。

『油を売る余裕があるとは、随分と暇を持って余しているようだな』

「ウツテイタノハアブラデハナク、ケンカダガ……ソレデ、ヨウケンハ？」

『次の命令だ。君には、フォース・リヴェルタの動向を追跡してもらおう』

「リヴェルタヲ？」

『我々が逃してしまった『プロトタイプ』が、フォース・リヴェルタのメンバーとなつて身を隠している、と言う情報があつた。無論、一介のフォースに直接殴り込みを掛ける

わけにはいかん』

「ユエニ、ヨウスヲミロト？」

『そうだ。かのフォースには、あの『青き狂戦士』もいると言う。迂闊に仕掛けても返り討ちに遭うだけだろう。……近頃、ゲリラの反抗運動も活発化している。我々の”計画”発動の日も近いのだ、慎重にな』

「リョウカイ、”ゲームマスター」

トーシローがそれを返すと、通信は切られる。

コンソールパネルを閉じて、彼はマスクを外して一人ごちた。

「何故、四年前に身を引いたあなたが、今になってGBNに台頭するんだ……カツラギ氏」

その脳裏に、ガンダイバーのアバターを思い浮かべて。

ハバキリと例のゼク・インナートーシローのジム・クウエルロウとが遭遇し、セアがその後を追い掛けた日の、その後。

ログアウトしてからセアは、ゲームセンターから行き付けのジョーヒンへ訪れていた。

新しいガンプラを作りたいと言う気持ちを抑え、塗料のコーナーに足を向ける。

トーシローのジム・クウエルロウとの戦闘で痛感した、自分と周りの実力差。

無論、ほぼ素組みのフリーダムガンダムの性能も悪いものではない。むしろ、比較的新しいフォーマットであるHGCEのそれは、組み立てただけの状態でもそれなりの性能は出る。

しかし、それだけでは近い内に必ずどこかで頭打ちになる。

いくらセアが自分の操縦技術を高めようとも、根本的な機体性能差は如何とも覆し難いものがある。

そのために、ガンプラの性能を高める――塗装や改造を施す必要があるのだ。

「(とは言っても、何この数……)」

セアは、目の前にずらりと並ぶ塗料の小瓶の列を見て、顔を困らせた。

これだけではない、その隣にはスプレー缶の塗料や、マーカークの塗料も立ち並ぶ。

しかも同じ色でも、アクリル系、ラッカー系、エナメル系、さらには水性、油性と分類されており、どれとどれを重ね塗りしてはいけないと言うことも一覽表に書かれている。

とりあえず普通に塗装をしたいのだが、何をどう使えば、ハバキリやコーダイ、サツキー、エミルのようなガンプラになるのか、全く分からない。

スマートフォンを検索で、初心者向けのガンプラ塗装のハウトウを閲覧してみるのが、紙ヤスリによる表面処理だの、コンパウンドによる研磨だの、合わせ目消しだの、サーフェイサーによる下地塗装だの、とてもではないがいつぺんに実践出来そうになり。

結論、セアは今日ここでの買物はやめる。

一人で焦って解決出来ることなど、高が知れている。

分からなければ、分かる人に相談するのが一番の解決策だ。

しかし、事はセアの思い通りには進んでくれなかった。

今度の三連休のどこかで、ガンプラの塗装について教えてほしいとハバキりに相談してみたところ、

『あー、すみません。今度の連休、ウチの両親が帰ってくるんですよ。家族水入らずで過ごすって予定立ててまして……』

と言う返答が返ってきた。

ハバキリが言うには、コウダイも連休に予定を入れていろいろらしく、そちらに頼むのも難しいとのこと。

「そっか……無理言つてごめんね」

そう言つて通話を切ろうとするセアだが、『待つてください』とハバキリに呼び止められる。

『ミツキを通じてのアテならあります。今から繋ぎ取るんで、いつペン切りますよ?』『ミツキさんの、アテ? あ、うん。待つてるね』

そこで一度、通話が切られた。

ダイバーギアを手元に置き、機の目立つところに置いている、ガンダムMK-IIとフリーダムガンダムを見比べる。

「(どっちを塗装しようかな)」

いずれはどちらも塗装や改造を施したいが、二ついつペンには出来ない。

さてどちらから手を付けようかと悩むこと数分、ダイバーギアが通話の着信を告げた。

ハバキリからの折返し連絡だ。

「もしもし」

『あーもしもし、セアさん。さつき言つたアテとの繋ぎ、取れましたよ。ちよつと伝えることが多いんで、メモの用意してもらつていいですか?』

そう言われて、セアはさつとシャーペンと、側にあつたノートの後ろを開く。

「メモの準備、オツケーだよ」

『んじゃ早速……』

ハバキリは、先程に自分が聞いた内容をそっくりそのままセアに伝えた。

それをメモし終えたセアは、頭に浮かぶ疑問符が消えない。

「ガンプラの塗装や改造を教えてもらうのに、どうしてそこなの？もつと他に場所があるんじゃ……」

『あちらさんの都合らしーです。セアさんからしたら都合が悪いってんなら、今からでもキャンセルの連絡しますけど……』

「ううん、大丈夫。ただ、ちよつと意外に思っただけだから」

『事は、さつき伝えた内容通りなんで。他に聞いたくことかありませんか？』

「……場所が場所だからイメージつかないけど、多分大丈夫」

『じゃ、頑張つて来てくださいいね』

「うん、また明日学園でね」

互いにまた明日を告げ合ってから、通話を切る。

セアの初めてのガンプラ改造は、予想も出来ないことになりそうだ。



祝日の金曜日の早朝。

セアは大きめの荷物を抱えて電車に乗り、三駅ほど通過した駅で降りて、そこから歩くこと数十分。

ガンプラの改造や塗装をするからには、ガンダムベースのような施設で行うのかとばかり思っていたセアだが、ハバキリの言う「アテ」は、そのイメージを180度逆に引っくり返すような場所だった。

『鴉野神社』……うん、ここかな』

スマートフォンの位置情報サービスを見比べつつ、ここが目的の場所であると確信するセア。

『鴉野神社』

大きくはなくとも、代々受け継がれてきた由緒正しき神社であると、事前にハバキリから教えられていた。ちなみに、今年の春辺りから、『若い美人の巫女』が新たにここで勤めるようになったとか。

とは言え……

「二泊三日、泊まりがけで……それも神社でするなんて」

予想外も予想外に過ぎる。

しかも、神々を祀る厳かな社の中でそんなことをしても良いものか、とセアの中で戸

惑いが生じるのも無理はない。

とにかく、ここまで来て引き返すつもりもない。

セアは意を決して赤鳥居を潜り、長い長い石段へ足を踏み入れた。

何分も石段を登り続け、ようやく本殿が見えてきた。

「ふう……」

大荷物を抱えながらの階段登りを終え、セアは一息つく。

紅白が目立つ装束を着込んだ女性――巫女が境内を竹箒で掃除しているのを見て、セアはそちらへ足を向ける。

「ん？」

巫女の方もセアの存在に気付き――的を得たような顔をした。

女性としてはやや身長は高く、毛先が赤みを帯びた黒髪が特徴的な巫女。

「あの、今日から三日間お世話になります、ホシザキ・セアと申します」

深々と腰を折るセアに、巫女も微小を浮かべて頷く。

「ええ、お話はお伺いしております。アタ……私はこの神社直系の巫女の、『カラスノ・ヤイコ』と申します」

しやなり、と言う擬音が聞こえてきそうなほどの、ヤイコの流麗な仕草に、セアは思

わず目を奪われる。

「(美人だし、仕草とか立ち振る舞いも……凄く”巫女さん”って感じ)」

「さっ、どうぞ中へ」

ヤイコに連れられて、本殿とは別のー居住区の方へ案内される。

さてそれでは早速ガンプラを……と思っていたセアであったが。

玄関口から客間へ移動させられ、そこで着替えるとのこと。

何に着替えるのかと思いきや。

「あの、私……巫女のアルバイトに来たんじゃないんですけど……」

紅白の袴姿ーヤイコと同じ巫女装束へと着替えさせられたのだ。

しかも、着替えるだけならまだしも(セア自身、一度着てみたいとは思っていたのだが)、その格好で本殿へと戻って来れば竹箒を持たされ、境内の清掃をしることだった。

「ごめんねホシザキさん。今、宮司のお父さんが療養中で、その分の仕事を全部姉さんが取って代わってて、人手が足りなかつたの」

申し訳なさそうに答えるのは、ヤイコの妹である『カラスノ・ユミコ』。

目元が隠れかけている髪は、確かにヤイコと99%以上同じ遺伝子を受け継いだのだ

ろう、毛先が赤みを帯びた黒色。

「事情は分かりますけど、うーん……」

今ひとつ納得出来ていないセアに、ユミコは諭してやる。

「ガンプラのことは、後でちゃんと教えてあげられるから、ね？……うん、よく似合ってるよ」

セアにとって不幸中の幸いと言うべきなのか、カラスノ家の邸宅には、ガンプラの塗装を行うにあたって必要な道具などは一通り揃っているし、塗料そのものもある程度は備えてある、とミツキからのハバキリ経由で知らされている。

道具や塗料を無償で使わせてくれる、と言うのであれば、ここで巫女の業務の手伝いをするのは、ある意味等価交換とも言えるか。

――実は、鴉野神社が現在人手不足、しかも宮司が療養中の中、アルバイトを雇うべきか否かを決めかねていたのだが、ハバキリからミツキを通じての話聞き、渡りに船とばかりセアを利用することにしたのは、当事者だけの内密である――。

「……分かりました。やるからには、出来るだけ頑張ります」

ともかく、前向きに取り組もうと腹積もりを決め込むセア。

「うん、それじゃあまず……」

ユミコからの指示を受け、セアは境内の清掃に取り掛かる。

それから、二時間が過ぎた頃。

セアは黙々、黙々とユミコから与えられた範囲を竹箒で掃いているのだが、

「(やつてもやつても進まない……もうお昼になっちゃう)」

日の高さは既に頂点を過ぎた頃。

しかも、木の葉が色付き、舞い散り出すこの季節だ。

境内の片隅には、文字通り山のように集められた赤や朱、黄の落ち葉——その、塊。出来るだけ一箇所に固めているとは言え、その高さはセアの腰ほどまでである。

「(巫女さんは、こう言うことを毎日してるんだよね……)」

これを毎日やれと言われれば……毎日やっていけば慣れるかもしれないが、少なくとも今は慣れる自信がない。

ふと、ユミコが居住区の方からやって来た。

「ホシザキきさーん、そろそろお昼に……って、ええッ!？」

そろそろお昼にしよう、と言いかけたところで境内を見たユミコは驚愕する。

「あ、ごめんなさいユミコさん。まだ全部終わってなくて……」

「ううん、そうじゃないの……えっ、何これ、こんなに綺麗にしてくれたの?」

セアは「まだ終わっていないから驚愕した」と思ったのだが、ユミコは「あまりにも清掃が行き届き過ぎていて驚愕した」のだ。

境内の石畳は、塵ひとつ無いのではないかと錯覚するほど清掃ーいっそ、研磨されているとも言うべきなのか。

「……えっと、何かまずかったですか?」

何か間違ったことでもしてしまったのか、とセアは不安になりかけるが、

「全然まずくないよ? ちよつとびつくりしたただけだから。……姉さんが同じ時間やつてもこうはならないのに」

「?」

セアは小首を傾げつつも、ともかく昼食の時間だそうなので、手を洗いに行く。

ーしかし、この清掃がまだ第一関門を突破出来たばかりで、すぐに第二関門が待ち構えているのだった。

その、第二関門とは……

「えー……と、ユミコ、さん?」

「何かな、ホシザキさん」

ユミコが持つて来てくれた昼食は、タップパーに詰め込まれた『ナニか』だった。

大事なことなのでもう一度記述する。

ユミコが持つて来てくれた昼食は、タッパに詰め込まれた『ナニか』だった。

「これは……お弁当、ですか？お弁当ですよね？」

とてつもなく怪訝そうな顔をしながら、お弁当（？）とユミコのきよとんとした顔を見比べるセア。

「お弁当だよ？」

「……お弁当、なんですかね？」

「そんなに疑わなくてもいいのに。お父さんも姉さんも普通に食べてくれるよ」

そう言ってくれるユミコだが、この、モザイクをかけられた上で放送されそうな『ナニか』を見るセアの反応は至極当然で、一般的な感覚だろう。

「例えば、この、（自主規制）みたいなのは……？」

「卵焼きだけど？」

……何をどうすれば、卵がこんな（自主規制）になるのか。

これを、カラスノ姉妹とその父は普通に食べているのなら……と、セアは色々なものを押し殺すことにした。

「い………いただきます」

恐る恐る、その（自主規制）を口にしてみるセア。

……セアの味覚は正常らしく、砂糖を混ぜた甘めの卵焼きの味がする。

これから後二日間、このような食事が続くのかと思うと、セアは目眩を起こしたくなかった。

昼食という名の第二関門を突破したセア。

味や食感はい美味しいのに、何故見た目だけはあんな（自主規制）なのだろうか。

考えたくないことを考えそうになるセアだが、きつと考えたら負けなのだろうと決め付けることにした。

居住区の客間にセアを通してから、ユミコは道具などを用意するために客間を後にする。

これから、塗装をするー！ための前段階に入るのだ。

ユミコが淹れてくれたお茶を啜り、彼女が戻ってくるのを待つ。

ふと、喧騒が客間に届いて聞こえてくる。

何か起きたのかとセアは襖に耳を傾けると、

「いいからとつとと接骨院行ってきやがれクソ親父！さもなきやテメーをスマキにして病院にぶち込んでやんぞゴラ!!」



声そのものが暴風のような怒号がビリビリと廊下に響き渡る。

「!？」

セアは慌てて襖から飛び下がった。

今のはヤイコでもユミコでもない、誰だろうか？ いや、どちらかと言えばヤイコの方が声色に近いが……ヤイコがあのような罵詈雑言を吐き散らすだろうか？

喧騒が止んだ頃、プラケースを手にユミコが苦笑しながら戻ってきた。

「あつはは……うるさくしてごめんね、ホシザキさん」

「え、えーっと、今のは……」

「気にしないでいいよ。それより、始めよっか」

ユミコは客間の座布団に腰掛け、持ってきたプラケースをテーブルに置き、それを開く。

「まずは、パーツの分解からだね」

「はい」

セアは鞆の中のケースから、ガンダムMK-IIを取り出した。

初心に戻ると言う心掛けも込めて、フリーダムガンダムではなく、初めて作ったガンブラであるガンダムMK-IIを選んだのだ。

「HGのガンダムMK-IIだね。うん、比較的簡単なガンブラで良かった」

ユミコはプラケースの中からパーツオープナーを取り出し、セアにそれを貸してやる。

まずはポリキャップで接続されている部分を取り外して行き、次にパーツごとに分解していく。

一時間が過ぎたところで、ようやく全てのパーツの分解を終える。

「次は、紙ヤスリで表面処理だよ」

「表面処理？」

確かこの間に見たハウトウーでそのようなことも記述されていたはず、セアは思い起こす。

「このまま塗料を吹き付けると、パーツ表面の油脂とかのせいで着色が悪くなるの。本当は三段階くらいに分けて処理した方がいいんだけど、ホシザキさんは初めてだから、800番辺りで一回でいいよ」

そう言いつつユミコは、プラケースから今度は紙ヤスリを取り出し、セアはそれを受け取る。

「これで、パーツを擦るんですか？」

「あんまりやり過ぎると、パーツ自体が変形しちゃうから、軽くでいいんだよ。表面が少し白むくらいで」

「軽く……軽くで……」

セアは優しく丁寧に、パーツに紙ヤスリをかけていく。

時間が掛かる作業なので、ユミコは社務所の仕事の手伝いに行き、何かあれば連絡してほしいと連絡先も教えてもらった。

「……………あれ？もう夕方？」

セアは窓の外を見た。

辺りは茜色に染められ、日が沈みかけている。

手元に転がされているパーツは、全て紙ヤスリを当てられている。

スマートフォンの時刻を確認してみれば、17時を回ったところ。

「ん、ん……………」

一度大きく背伸び。

長時間同じ姿勢を続けていたせいかわ、背伸びが嫌に億劫にかんじる。

ふと、客間の一角に目を止めた。

硝子張りの戸棚の中には、多くのガンブラが並んでいる。

ヤイコか、あるいはユミコが手掛けた作品だろうか。

その中でも、白い毛並みの九尾に似たガン普拉が一際存在感を放っている。

それらをひと目見てから、一旦ユミコに連絡を入れようと電話帳を開こうとしたところで、客間の襖がノックされる。

「ホシザキさん、ヤイコです」

社務所の業務を終えたのだろう、ヤイコだ。

「どうぞで」

セアの声に応じ、襖が開かれる。

「妹からお話は聞いております。だいぶ根を詰めてやっているようですね?」

「大丈夫です、ちょうど一区切りついたところですから」

セアはスマートフォンを閉じて鞆に戻す。

「六時から夕食ですので、もうしばらくお待ちくださいね」

では、と一礼してから、ヤイコは客間を後にする。

それを見送って、セアはダイバーギアの方を取り出した。

「一応、ハバキリくんにメッセだけしとこ」

案の定と言うべきなのか、夕食もユミコが作ってくれた（自主規制）らしきものだつ

た。本人曰く、得意のコロッケだそうだが。

ちなみに、ユミコの（見た目だけは）ゲテモノ料理を見たセアの表情を見たヤイコは、無言で肩に手を添えてくれた。

言いたいことは分かる、だから何も言うな、と首を横に振るだけ。

それだけで理解できてしまったセアも、この環境に慣れつつあるのかもしれない。

夕食とその後片付けを終えてから、セアはユミコと共に客間に戻って来た。

「ひとまずパーツ全部にヤスリはかけました」

セアは、パツケージの中に転がる白んだパーツの数々をユミコに見せる。

「うん。じゃあ次は、パーツの洗浄だね。中性洗剤を泡立てたぬるま湯に浸けておくの」

「さすがに、こんなに粉の被った状態で塗装は出来ませんよね」

早速、ヤスリがけしたパーツを洗面台に持っていき、パツケージからボウルへとパーツ移し替え、中性洗剤を注ぎ、ぬるま湯をかけて泡立てる。

こうすることで、ヤスリがけで生じたプラ粉や、残っている油脂を洗い落とすのだ。

界面活性化した水分に包まれたパーツ郡は、一晩ここに浸けておく。

「じゃあ、セアさんはお風呂に入っついでいいよ」

「あ、はい」

ユミコに勧められ、セアは一度客間に戻り、入浴の用意一式を取り出す。

ミツキを通じてのハバキリから事前に聞かされた通りなら、源泉から引いてきた天然の露天温泉がここでの入浴らしい。

天然の温泉など数えるほどもない回数しか入ったことのないセアは期待を膨らませながら、脱衣所へ向かった。

そのセアが脱衣所へ入ったの見送って、ユミコはリビングにいるヤイコに声を掛けた。

「姉さん、ホシザキさんはお風呂に行っちゃよ」

それを聞いて、姿勢正しくお茶を啜っていたヤイコは……

「……かー……かー……つ、固ツツツツツ苦しくてやってらんねえぜ!!」

ダンッ、と湯飲み茶碗をお盆に叩き付け、正座の状態から大の字になって寝転がった。

……内情を知らない人間が見れば、ヤイコが壊れたのではないかと思う光景だが、何も問題はない、『これが本来正しい状態』なのだ。

「あの、姉さん……あんまり大声出すとホシザキさんに怪しまれるよ？ 昼間のお父さんに対してもだけど」

「仕方ねえだろお、朝っぱらから晩まで、ついでに飯の時間までお行儀よくしろなんて、

何の拷問だつつの。親父は親父で、たかが階段でヒーコラしてんに「最近の若者に神職とは何たるかを教えるのに丁度良い機会だ」なんてふざけきつたこと抜かしやがるしよ」

「あつはは……」

それから、セアが入浴から上がってくる寸前まで、ヤイコは思う存分ダラけていたのだった。

翌朝、午前5時。

スマートフォンのアラームに鳴り起こされて、セアは客間の布団からむくりと起き上がる。

「ん、むあさあ……う？」

とりあえずアラームを止めてから、眠い目を軽く擦る。

昨夜の内にヤイコから、明日の朝は5時起きだと伝えられていたのだ。

そうだと分かっついて、昨夜は早めの時間に床に就いたはずだが、思いの外疲れてきたことと、慣れない寢床であることもあつて、上手く疲れが取れなかつたようだ。

今日は早朝から境内の清掃と、ゴミ出し、時間が来れば途中で朝食、それから業務の

続きで午前中は終わる。

「よしつ、頑張ろうっ」

身体に力を入れて目を覚ますと、身嗜みを整え、巫女装束を纏う。

まずは境内の清掃だ。そのときに、毎朝散歩のついでに参拝に来る高齢の女性が来るそうなので、ちゃんと挨拶するようにと言いつけられる。

境内の清掃に掛かり、一度朝食に戻り、(ユミコの(自主規制)のような料理はもう見慣れた)食後すぐにゴミ置き場にゴミを出しに行つてから清掃の続きに向かい、それが済んだ後は社務所で業務を行っているヤイコを手伝い、午前中に予定している業務が済めば、昼食。

その昼食の後は、セアが待ちかねていた(本来の目的である)ガンダムMK-IIの塗装だ。

ユミコによる主導の元、界面活性剤に浸けていたパーツ群をぬるま湯で濯ぎ、水分をしっかりと拭き取つてから、ツールのひとつである『猫の手』にひとつひとつパーツを挟ませていく。

その猫の手の数々を塗り分け別に専用スタンドに差し立てて、いよいよ塗装だ。



「まずは最初に、サーフェイサーによる下地塗装をするの」

持ってきたスプレー缶塗料の一つ、ホワイトサーフェイサーを見せるユミコ。

「そのまま直接塗料を吹きかけてもいいんだけど、先に下地塗装をしておく、塗装面の凹凸とか、キズとかを目立たなく出来るの」

「えーつと、つまり……紙ヤスリで削った跡とかを消すってことですね？」

「そう。ホシザキさんは理解が早いね」

居住区の裏庭に移動して、エプロンとマスクを着けて、準備完了。

「遠くから少しずつ塗り進めていくの。一気にやろうとすると厚塗りになったり、近付き過ぎると塗料の中に気泡が混ざったりするから」

「遠くから、少しずつ、ですね」

ユミコの言う通り、やや離れた位置からサーフェイサーを吹きかけていくセア。

少しずつながら、パーツ郡が見る内に白灰色に染められていく。

吹きかけ終えれば、一度乾燥を待つ。幸い、今日はよく晴れた日なので乾きも早いだろうと、ユミコの言。

20分ほどが過ぎたところで、パーツの部分ではなく、猫の手に触れて見て、乾燥しているかどうかを確認。

乾燥していれば、次は色塗り別にスタンドを分ける。

ホワイト、ダークブルー、モンザレッド、ニユートラルグレー、ガンダムイエローの五色に分けられたものを、順番に塗装していくのだ。

それも、一度塗り終えた後で乾燥させ、二度塗りも行うため、時間は想像以上にかかる。

二度目の塗装を終えた頃には既に夕方頃。

ひとまずはパーツの乾燥を待ったため、裏庭にツールを置いておき、一足先に夕食の準備をしに戻ったユミコの後を追うように客間に戻るセア。

やはり見た目（自主規制）な夕食を美味しくいただいてから。

完全に暗くなる前に、セアは裏庭に置いていたパーツ郡を回収し、客間にまで持ち込む。

「えーつと、後は……」

持ってきていた取扱説明書を開き、目を凝らす。

元々シールで再現していた部分は、当然塗装する前に剥がされているため、そこをさらに上から塗り分けるのだ。

その部分とは、アイカメラとセンサー類のライトグリーンと、シールドのモールド部

のイエロー、バルカンポッドのモールドのレッド部。

それらにはそれぞれ、ガンダムメタグリーン、ガンダムイエロー、ガンダムレッドのガンダムマーカーを使うのだ。

既に一度塗装した上から塗るため、一度では色が定着しない、と言うことは先程ユミコに教えてもらっている。

部分塗装の乾きを待っている間は、一度入浴へ。

入浴から上がってから、もう一度部分塗装を行い、さらに乾くのを待つ間に、他のパーツを組み立てていく。

明日の朝も早朝5時起きなので、遅くならない程度に時間を気を付けつつ、セアは秋の夜長をガンプラ作りに没頭するのだった。

何故こんなことになったのだろう。

既に武装の大半を失った愛機トールセイバーガンダムと、目の前の複数の敵機を見比べ、彼は絶望の淵に叩き込まれていた。

エルドラと言う未開の地で戦い続けたと、ジャステイス・カザミの配信動画を見た時からだった。

武器を失い、装甲の大部分が傷ついた機体でも必死に戦い、時には文字通り我が身を盾にして仲間を守り抜いてみせたその姿に、心底惚れた。

それに憧れ、真似をしたくなるのも必然であつた。

なのに、現実はどうも酷なものなのか。

正義など掲げたところで、初心者狩りと言う名の暴力の前には倒されるしかないのか。

違う、そうじゃない。

「まだだ……」

諦めてはならない。あのジャステイス・カザミも、傷ついても傷ついても、何度だつて立ち上がったではないか。

「俺はまだ、戦えるー!」

その意志に応えるかのように、セイバーガンダムはデュアルアイを輝かせ、残された左肩のヴァジラ・ビームサーベルを抜き放つた。

「よおく言つたガキンチョ!!」

不意に、上空から何かが降って来た。

「つたくよお、数日ぶりにログイン出来たと思っただら……」

ズドオンツ、と地面を踏み潰すように着地したのは、黒紫色をしたガンダムGPO  
2ー通称『サイサリス』

「良いところ見せつけてくれるじゃねえか！」

しかし、サイサリスの特徴とも言える巨大なバズーカ砲や対核シールドを装備しておらず、何故か手首だけが異常に大きいガンプラだった。

「その諦めねえ姿勢さえありやあ十分！後は、アタシに任せな！」

通信越しに、その姿がモニターに映る。

毛先が赤みを帯びた、刺々しい黒髪。

その群を抜くバストにはサラシが巻かれ、やたらと裾の長い黒の上着をマントのように羽織り、袴のように膨らんだ同色の足袋を履く。

そしてその背中には、金刺繍で『喧嘩上等』の四文字がデカデカと輝く。

所謂ー『特攻服』を纏った女性だった。

ダイバーネーム『ヤイコ』

機体銘『碎鎖裏守(さいさりす)』



右腕を潰された拍子にゲルググは尻もちをつく。

『や、やつぱ喧嘩王に勝てるわけねえんだ……俺は逃げる!』

すると、ドムが突然踵を返してその場から逃げ出し、

『ばっ、ばっかじゃーねの!? やつてられつかこんなクソゲー!』

次にツダも逃げ出して、

『お、俺は降りるぞ! こんな奴の言いなりなんて、嫌だったんだ!』

最後にザクⅡも逃げ出してしまった。

『お、おいお前らっ、俺を置いて逃げてんじゃねえよ!』

仲間だった(とさえ思われていなかった)者達に見捨てられ、ゲルググだけが残される。

ガンツ、とコクピットが揺れた。

尻もちをついていたゲルググの腹を、碎鎖裏守が踏み付けているのだ。

「さあて、ケジメの時間だ」

接触通信越しに、「頭」「ヤ」がつく組合の方のようなドスの効いた声が届く。

「コクピットから降りて」「ごめんなさい」するか、コクピットから引き摺り出されて「ごめんなさい」するか、選びな」

しかし、恐怖に怯える相手は選択を選ぶことさえ出来なくなっている。

「それとも……『強制ログアウト出来なくさせて、一生ベッドの上でおねんね』するか?」  
『!?』

聞いたことがある。

一年前、コンピューターウイルスをログデータに植え付けられ、何日も目を覚まさなかつた者がいたと。

それと同じ目に遭わされるのだとしたら……

『す……すいま、せん……ほんとつ、すいませ……つ』

すると、ゲルググのkokopittoハッチが開けられ、中にいたダイバーが地面に降りて、碎鎖裏守に向かって泣きながら土下座をした。

「アタシに土下座してんじゃねえ、”あっち”にしな」

土下座するゲルググのダイバーに、碎鎖裏守はセイバーガンダムの方へ人差し指を向けた。

ヤイコの言う通り、セイバーガンダムの方に向き直ってから再度土下座するダイバー。

それを見てセイバーガンダムはヴァジユラ・ビームサーベルのエネルギーを切つて肩部装甲へ納め、片膝を着いて自身もkokopittoから降りてきた。

「もう十分だ、顔を上げてくれ」



そう言われてもなお額を地面に打ち付けて許しを乞うゲルググのダイバー。

その様子を見た、ヤイコの碎鎖裏守のスピーカーから声が響く。

「もう初心者狩りなんて、つまんねえことすんじやねえぞ」

そう告げてから、碎鎖裏守は踵を返してその場から立ち去った。

飛行する碎鎖裏守のコクピットの中で、ヤイコは一人眩く。

「こんなのは、得意じゃねえんだがな……」

以前の自分ならばあの状況、遠慮なくコクピットを殴り潰していたところだったろう。

もちろん今でも、ガンプラバトルとは一種の喧嘩であると言う認識は変わっていないし、これからも変えるつもりはない。

ただ、以前のように悪事を見た瞬間「悪だ、ぶん殴る」で即決するのではなく、「まずは相手を降参に促し、それでも歯向かって来るならばぶん殴る」と、一時間掛けてからにしている。

自分が悪いと思つて謝ることが出来る相手を、殴る必要は無いからだ。

大抵の相手は、無力化させてから少し脅しを掛けてやれば、すぐに謝罪の意を示そうとする。

「(アタシがやりてえのは、本気で殴り合える喧嘩だけど……)」  
今は喧嘩どころじゃ

ねえしなあ)」

運営の中でも、穏健派と強硬派による、分裂した二つの派閥。

ELダイバーの保護を唱える穏健派に対して、ELダイバーの積極的排除を推進する強硬派。

ここ数ヶ月で、強硬派の意見が右上がりしつつあり、やがて穏健派を呑み込みかねない勢いだ。

その上、デイメンション全体の動きがどこか怪しい。

ヤイコはコンソールを開いて、GBNのイベント情報を開く。

「近いフォースイベントは……『バイク戦艦の侵攻』か。動きがあるとすりやあ、ここだな」

複数のフォース同士で協力すると言う、大規模なイベントミッションのようだ。

大人数が集まる関係上、運営の監視の目も必要になるだろう。

そこで、何かが起こる可能性がある。

「さつてと、寄り道しちまったし……急ぐか」

今日はフォースメンバー達と不定例会をする予定だ。

この間のように、遅刻寸前でスライディング出席をするわけにはいかない。

アームレイカーを押し上げて、碎鎖裏手を加速させた。

日曜日の朝。

スマートフォンのアラームを聞いて、セアはすぐに跳ね起きてそれを止める。

「……ようしっ」

よく眠れた朝だ。

寝間着から巫女装束に着替えて、身嗜みを整える。

今日は午前中は神社の業務を手伝い、昼前になったら私服に着替えてから客間を綺麗にして、最後に挨拶をして帰ると言う予定を立てている。

ガンダムMK-IIはまだ完成されていない。

だが、ユミコから教えてもらった塗装や改造のノウハウはしっかりメモに残している。

今日の昼に帰ってから、完成させるつもりだ。

巫女装束を着れるのも、今日が最後。

セアは気合を入れて客間を出た。

まずは境内の清掃、途中で朝食を挟んで、清掃が済めば社務所にいるヤイコの手伝い。それを終える頃には丁度昼前。

セアは一度客間に戻って、巫女装束から私服に着替え直し、使わせていただいた客間も掃除。

「これで、よし、と」

立つ鳥跡を濁さず、二日前にここへ通された時と同じにして、巫女装束もきちんと畳んで、荷物もしっかり纏めてから、セアは客間を後にした。

「今日まで三日間、お世話になりました。貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございます」

本殿を前にして、見送りに来てくれたヤイコとユミコに、セアは深々と頭を下げ、腰を折った。

「いえいえ。こちらこそ、ホシザキさんが手伝ってくれたおかげで、本当に助かりました」

ヤイコはたおやかな笑みを浮かべて一礼すると、ユミコに目配せした。

「えつと、ホシザキさん。これ、お礼のお給料。それと、餞別だよ」

ユミコが差し出したのは、お給料と筆書きされた封筒と、紙袋だった。

「えっ、お給料ですか!？」

それを見てセアは、何故かと目を丸くする。

「この三日間、ホシザキさんは本当によく働いてくれました。その働きに見合った報酬は支払いませんとね」

ヤイコがそう言うものの、セアは戸惑うばかり。

「で、でも、塗料とか道具とかも無償で使わせていただいたのに。それに、こっちの紙袋は……?」

中を見ても良いかと聞いて、頷かれるのを確認してから紙袋を開いてみる。

詰め込まれているのは、ガンプラのランナーパーツの数々だった。

「これ……ガンプラのパーツですか? しかも新品……ちよ、ちよっと待っててください、お給料を貰った上にこんなにくれさん……私、貰い過ぎてませんか!？」

慌てて返そうとするセアをやりわりと突き返すユミコ。

「お給料はちゃんと払わないと、私達が法的に罰せられちゃうから。そのパーツも、GBNのパーツデータを射出成形機で打ち出してきただけだよ。姉さんが「こんなにいらな  
いから、ホシザキさんにでも渡してやってくれ」ってね」

「えええええ……」

貰っても良いものかと右往左往するセアだが、相手が良かれと思つての施しなのだ

し、セア自身が迷惑に感じているわけでもない。

もう少しだけ悩んでから、頷く。

「分かりました、ありがたく使わせていただきます」

もう一度深々と頭を下げて感謝するセア。

姉妹に見送られながら石段を降りて、セアは最寄り駅の電車に乗り込む。

「塗装や改造も教えてもらって、パーツもこんなにあるし、お金の余裕もある……」

逸る気持ちもあるが、一度帰宅しなくては。

帰ってきてゆっくり落ち着いてから、行動に移せばいい。

「（思いがけないことばかりだったけど……楽しかったな）」

来年の初詣は、ここに来てもいいかもしれない。

そんなことを思いながら、セアは自宅への帰路を辿った。

彼女の新たなガンダムMK-IIが完成したのは、それから三日後のことだった――。

【次回予告】

ハバキリ「三日間お疲れ様です、セアさん」

サツキー「お疲れ様です！」

ジル「セア、おかえり」

セア「やつと私のMK-IIも完成したし、どこかで一度試してみたいな」

コーダイ「そんなセアさんにご朗報！今度、フォー局限定のバトルミッションがあるんで、それに参加しませんか？」

エミル「それで、今回はどんなミッションなんだ？」

セア「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション

『撃進のアドラスティア』」

ジル「大っきい大っきい……ドーナツ？」

コーダイ「違う、そうじゃない」

## 16話 撃進のアドラスティア

バーテンダーから差し出された『俗物』をお猪口に注ぎ、一口呷るケンさん。

「まああのバカ娘も、私が動けない時でも十全に業務をこなせるようになったし、下の妹も無事に大学に受かった。……まだまだ楽隠居するつもりはないがな」

「生涯現役と言うわけですな。そのためには、まずはぎっくり腰をなんとかしませんとなあ」

フツ、と胡散臭い笑みを浮かべるトラちゃん。

「全く、この身体さえまともならば、バカ娘に頼らずとも……」

「ケンさんも素直じゃないわねえ、ヤイコちゃんがツツパるようになったのは、お父さんの影響かしら」

バーテンダーはおかしそうに笑う。

「……うむ」

若い頃に思い当たる節でもあったのか、ケンさんは言い澀んでから頷く。

生きていれば生きているほど、誰にも言わずに墓に持っていきたいことは増える。

……実はトラちゃんはケンさんの若い頃に「やらかした」ことの数々を知っている



のだが、それをほじくり返すのは無粋と言うことも知っているので、ここでは何も言わなかった。

「ところで店長、私はあまりディメンションには来ないのでよくは知らないのだが……最近ではGBNの治安が悪化していると言うのは本当なのか？」

ごく自然の内にケンさんは話題を変える。決して自分の若い頃に「やらかした」とを問い詰められるのを避けたかったわけではない。断じて。

「今は少しマシにはなってるわ。……でも数ヶ月前は本当に酷かった」

その酷かった理由とは何なのかと訊こうとするケンさんに、トラちゃんが答えた。

「当時、運営側は穏健派と強硬派と言う二つの派閥で分け隔てられておりました。意見が異なる者の集まり同士……だけならまだ良かったのですが、それが生み出していた軋轢は、もはや修復不可能なレベルにまで至っていたのです」

専門用語は分からないケンさんだが、一つの組織の中で意見がぶつかり合って複数の派閥が出来上がるなど、現実の政界では当たり前だと理解している。

むしろ有史以来、一度も分裂することなく今日までひとつに纏まり続けた体制などあっただろうか？

否、の一字に尽きる。

無論、今の時代は政治屋同士のくだらない言い争いが、全人類規模の戦争になること

など、”今のところは”起きていない。

だが、その派閥問題がGBN―『もうひとつの現実世界』で、それも『ガンプラバトルの勝敗によって運営の方針すら変えてしまう』ような世界でそれが起きたとすれば

……

「想像するに容易いことだな」

ケンさんはそう頷いた。

セアが鴉野神社で三日間を過し、そこで得た教訓を基に作り上げたガンダムMK―IIが完成した、その日の翌日。

ハバキリ、コウダイ、セアの三人は、放課後に駅前近くのガンダムベースのカフェに立ち寄っていた。

お題目は、『セアの新たなガンダムMK―IIの実物のお披露目』である。

テーブルの一席を占拠し、各々の飲み物をオーダーしたところで、早速始められる。

「ハバキリくんのジンライとか、コウダイくんのキャノパルドと同じくらいにはならなかったけど……今、私が作れる最高のガンプラだよ」

鞆に入っていたケースの中から取り出された、彼女のガンダムMK―IIが姿を現し、

テーブルの中央に立てられる。

元のガンダムMK―IIと比べても、主に色の明暗がハッキリしている、と言うのがハッキリとコウダイが同時に思った感想だった。

「バックパックにI・W・S・Pを装備させたんですね」

ハバキリは、背負われているその大型のバックパックを指す。

大小左右一対による四枚のウイング、肩越しに伸びる長大な火砲、脇差のように備えられた肉厚の刀が目を引くそれは、『SEED』のバリエーション装備のひとつ、『I・

W・S・P』だ。

ストライクガンダムの装備であるストライカーパックには、各パックによって戦闘力を特化させる性能を持ち、このI・W・S・Pと言う装備は、『エール』の機動力、『ソード』の斬撃力、『ランチャー』の砲撃力、と言う三点をコンパクトに纏めたものだ。

「ん、よく見りや頭部のバルカンポッドが外されてるな……単装砲と干渉するからか」

コウダイはガンダムMK―IIの頭部にある、外付けのバルカンポッドが無いことにも気付く。

「コンバインシールドじゃなくて、MK―II本来のシールドを装備してるってことは……あそつか、ライフルのカートリッジか」

I・W・S・Pは、コンバインシールドと言う、ガトリングガンとビームブーメラン

が一体化したシールドも備えられているのだが、それを装備しない理由を「ビームライフルのカートリッジを保持出来ないから」と読み取ったハバキリ。

「ハイパーバズーカも上手い具合に干渉せずに装備されてるし、シンプルでも良い改造つすね。MK-IIのカラーリングも、ストライクEに似てるからサマになってるし」

カラーリングも含めた外観も見て評価するコウダイ。

そして、この二人による総評は。

「初めての塗装改造にしては、よく出来上がってると思いますよ。これなら、機体性能も上がってるはずですよ」

「ただ、ストライカーパックの宿命ですけど、背中に装備が集中してる分……前と同じようには操縦出来ないっすね」

ハバキリは真つ当な評価を、コウダイは懸念材料を挙げる。

丁寧な塗装と、本来規格の合わない装備をしっかりと組み込めるだけの加工によって、素組みの状態よりも機体性能は遥かに向上するだろう。

反面、装備を増やすと言うことは全備重量の増加に直結し、重い機体を単独飛行させる推進力と揚力があるとは言え、必然的に常に高い出力を持続させるための操縦技術も必要になる。

「うん。だからどこかで慣らし運転をして、それからどれくらい難しいミッションに挑

めるかを、確かめたいかな」

二人の評価と懸念材料を聞き、素直に受け取るセア。

「慣らし運転なら今からでも出来ませうけど……コウダイ、中堅レベルで、そこそこやり応えのあるミツシヨンってあったか？」

「ちよい待ってくれ、えーつと……」

コウダイはダイバーギアを取り出し、オフィシャルサイトを開く。

近々に行われるイベントは何かと調べているのだ。

「つと、今週の日曜日から行われるイベントな。『バイク戦艦の侵攻』……フォース10組がチームになって、『アドラステア』を討伐するってヤツだな」

バイク戦艦、と聞いてセアは何のことかと小首を傾げる。

その様子を見て、ハバキリがすぐに説明する。

「あー、セアさんは知らないんですっけ。バイク戦艦ってのは、メチャクチャデカくて頑丈なタイヤを、バイクみてーに前後に取っ付けた戦艦のことです。地球上で運用することを前提として、都市群を踏み潰しながら走るって代物です」

「……イメージ付かないんだけど、とにかくそう言うものなんだね？」

原典作品は『V』で、ザンスカール帝国の『地球浄化作戦』のために開発した汎用戦艦であり、その巨大なローラーで環境を破壊することなく、都市群を地球人ごと蹂躪す

ることを目的としたもの。

火力も非常に高いのだが、特筆すべきなのはその防御力だ。

前輪と後輪を構成する巨大な“タイヤ”は、当時でも強力な実体武装であった『ジャベリン』のショットランサーすら無傷で跳ね返すほど頑強で、耐ビーム性も万全と、通常攻撃ではほぼ破壊不可能であった。

……実はこのバイク戦艦の設定だが、当時放送していた時の監督が、まともに歩けないほど病んでいたらしく、その当て付け〜〜と言うよりやけっぱちで考案したものが通ってしまった、と言う逸話があるらしい。

「で、そのバイク戦艦……アドラステアを、複数のフォースと協力して倒すってイベントミッションがあるんですよ。これなんてどうですかね？」  
コウダイが自分のダイバーギアの画面をセアに見せる。

ミッション名『バイク戦艦の侵攻』

参加条件：フォースに所属しているダイバーのみ

成功条件：アドラステアの撃沈

失敗条件：所属チームの全滅、及びアドラステアが絶対防衛ラインを突破

特殊条件：補給輸送システム使用不可

「ハバキリさんとコウダイくんは、このミッションってやったことあるの？」

経験者二人の意見を求めるセア。

「オレもコーダイも、他のミッションでバイク戦艦の相手はしたことありますけど、このイベントミッションは初見ですね」

「あの時は、アドラステアの撃沈が成功条件じゃなかったしなあ、このミッションのアドラステアがどんなヤツなのかはちよつと分からないっすね」

二人とも、バイク戦艦との交戦経験はあるが、このイベントミッションとしては初めてらしい。

「そっか。私はこのミッション、受けてみたいな。サツキーさんとエミルくんにも、この話を伝えておかないとね」

頷くセアを見て、ハバキリとコウダイはすぐに行動に出る。

ハバキリがサツキーへ、コウダイがエミルへ、それぞれメールを飛ばした。

この事はすぐにサツキーとエミルの元へ知られることになり、二人からも参加の意志を確認、五人＋ $\alpha$ （ジル）の六人で『バイク戦艦の侵攻』のミッションを申し込んだ。

平日をセアのガンダムMK-IIの慣らし運転や、ガンプラの調整、あるいは武器の追加製作などに費やし、ついにイベントミッション開催の日が訪れた。

『ただいまより、イベントミッション『バイク戦艦の侵攻』を開催致します。参加者の方は、指定されたエリアへ出撃してください。繰り返します……』

アナウンスに従って、ハバキリ達フォース・リヴェルタは、レンタルした輸送機に各々のガンプラを積載し、自分達に指定されたエリアへ出撃していく。

「さてと。今日まで何回もシミュレートしてきたけどもだ、ここで最終確認」

目的地へ移動中にブリーフィングルームへ集まり、コーダイが主導となつて、最後の確認を取る。

スクリーンに、アドラスティアを指す大きな赤いマークと、それを取り囲む五つの青いマークが表示される。

「バイク戦艦、アドラスティア。多数のメガ粒子砲とミサイルランチャー、対空ビーム砲を備えた上に、ほぼ破壊不可能なタイヤが厄介な相手だ」

画面が切り替わり、いくつかのエリアに区切られたフィールドの、一番後ろのエリアに『?』マークが点滅する。

「このアドラスティアが、絶対防衛ラインを突破するまでに撃沈させないと、ミッションは失敗」



アドラステアのマーカーが最初のエリアに侵入し、ゆっくりと進んでいく。

「つつても、その動きはゆっくりだから、射撃機は艦砲射撃に注意しながら砲撃を叩き込んで艦の火力を奪い、弾幕が薄くなってきたところを、格闘機が突入、ブリッジを破壊」  
青いマーカーが赤いマーカーを取り囲んでは、攻撃していく。

「エリアとエリアの間に、メンテナンスポイントがあるから、弾薬の補給に関しては心配は無し」

それと、とコーダイはアドラステアの周りに広げるように赤いマーカーをいくつか表示させる。

「このミッションとは別に、以前俺とハバキリがアドラステアと戦った時は、発進してきた『ゲドラフ』『ゾリディア』が邪魔してくるって仕様だったから、今回もそれが来る可能性がある」

一度画面が切り替わり、タイヤ型のサブライトシステム『アインラッド(ツインラッド)』に乗り込んだ、ゲドラフとゾリディアが映し出される。

どちらもザンスカール帝国のベスパが開発した量産機だ。

このアインラッド、もしくはツインラッドが曲者であり、並の火器では歯が立たないほど強固な上に、常に回転している。メガ粒子の接触面を拡散させているため、例えばビームサーベルを突き立てようとしても、かき消されてしまい、そのままタイヤの下敷

きになってミンチに……と言うことになる。

タイヤの形状の問題から、左右は防御の範囲外なのだが、そこはMSが装備するビームシールドを展開することでカバーしている。

「その場合は、基本的に俺とセアさんが砲撃を続行、サツキーとエミルがザコの排除、ハバキリは状況に応じて遊撃に回ってくれ」

五つの青いマーカーの内、コーダイ機とセア機がその場に留まり、サツキー機とエミル機が小さい赤のマーカーに接近し、その二者の間にハバキリ機が移動する。

「……俺からは以上！何か意見はあるか？」

自分の言う確認を終えて、意見や懸念は無いかとコーダイは訊ねるが、何度もシミュレートしているのです、この場で特に疑問などは挙がらなかった。

「よしっ、それじゃあセアさん！ミツシヨンスタート前に、一言どうぞー！」

唐突にコーダイはセアに言葉を要求した。

「えっ、また私がそう言うことを言わなくちやなの？」

一度目はフォース・リヴェルタのデビュー戦の時、そして今回のコレだ。

しかも、ここで遠慮しようとしても囁し立てられて結局言わざるを得ない状況にまで持っていかれるだろう。

故に、セアは早々に割り切ることにした。

「えー……つと……、今回のミッションは私達を含む大勢のダイバー達との共同戦線になります。つまり、それだけ困難なミッションになると言うことです。だけど、困難だと分かっているからこそ、私達は可能な限り準備と対策を重ねてきました。だから、今回のミッションも必ず達成出来ると、私は信じています。みんながみんな、全力を尽くしましょう」

以上です、と締め括ると、やはりコーダイとサツキーが歓声を上げ、ハバキリとエミルが静かに頷き、ジルはばちばちと拍手してくれる。

もうしばらくして、輸送機が指定エリアに到着した。

輸送機の格納庫から直接出撃するのだ。

「ハバキリ、ジル、ジンライ改、出るぞ！」

「コーダイ、キャノパルド、行くぜ！」

「サツキー、ガンダムデスレイザー、出撃するよ！」

「エミル、七星剣士エクシア、目標を駆逐する」

「セア、『エンハンسدガンダムMK-II』、フォース・リヴェルタ、行きます！」

各々の掛け声と共に格納庫を飛び出していくフォース・リヴェルタの面々。

第一迎撃エリア。

切り立った崖と崖の間に、ぼつかりと空けられた、長い長い道。

この道を、アドラスデアが通過するのだ。

ハバキリ達が出撃を完了した頃には、既にもう何機かのガンプラがそれぞれの配置に着いて、アドラスデアを今か今かと待っているを見て、彼らも急いで打ち合わせていた配置に着く。

参加するダイバーが全機出撃してほんの数分後に、その時が訪れる。

遙か彼方から、砂煙を巻き上げながら前進してくる巨影。

黄土色の艦体に、旧日本帝国軍の戦艦を思わせる火器の数々。

そして、その通称の代名詞である、巨大なタイヤ型の装甲。

アドラスデアが、ついに姿を現した。

「……ほんとにタイヤなんだね」

その外観を見たセアが、思わずそう呟いた。

「まあ、タイヤっすね」

近くにいたコーダイがその呟きを拾い、相槌を返す。

それが合図だったかのように、エリア内に侵入してきたアドラスデアの格納庫から、タイヤの中に納まるような形のMS―ゲドラフが複数出撃し、着陸すると同時にアイラッドを回転させ、アドラスデアを護衛するように進撃を開始する。

「やっぱゲドラフが出てきたか。サツキー！エミル！頼んだぞ！」

コーダイは崖の近くで待機している、ガンダムデスレイザーと七星剣士エクシアに、ゲドラフの群れの迎撃を頼んだ。

「オツケー！行くわよエミル！」

「了解、攻撃を開始する！」

サツキーとエミルはそれぞれ了解を返し、崖の上から飛び降りて、展開するゲドラフ部隊を急襲する。

ガンダムデスレイザーはこれまでと変わらない姿だが、七星剣士エクシアの方は主に背部に大きな違いが見える。

元々GNドライヴを取り付けていたそこに、小型の航空機のような機体を背負う形のは、彼の以前まで所属していたフォース・コキュートスのメンバー達が彼のためを思つて贈つたサポートメカだ。

データ上だけでなく、後日に彼の自宅に実物が届けられたため、自由に改造可能にもなったため、エミルはこれを『ジャステイスガンダム』のリフターである『ファトウムー00』のように、背負つたりそれを切り離して上に乗り込めるようにするなどと言つた改造を施した。

武装としては、北斗七星の英名である『グランシヤリオ』を冠することにしたらしい。

先発する二人を見て、他のフォースのガンプラ達も同様に崖上から続く。

「さてと、ぶっ放していきますか」

ハバキリのジンライ改は今回、対艦攻撃としてキャットウスと、デビルガンダムとの戦闘でも使用した、ハンドミサイルユニットとして改造したパルデユスを装備している。

有効射程に届くなり、キャットウスを一発。

それは対空ビーム砲のひとつに着弾するが、火砲自体も頑丈に作られているらしく、破壊しきれていない。

「あー、これ死ぬッほどタフな体力オバケだな」

苦勞しそーだな、と事も無げに呟くハバキリ。

『怯むな！撃ちまくれ！』

他のフォースの砲撃型のガンプラ達も、果敢に砲撃を放っていく。

砲火の雨が降り注ぐ中、アドラスティアは主砲のメガ粒子砲や対空ビーム砲を崖の上へと発射、何機かはそれに貫かれてリタイアしていく。

「よーし、俺達も行きますよセアさん！」

「うん！」

コーダイのキャノパルドは今回ビームライフルを装備していない。

その代わりに、キャノパルドの全長と同じくらいの大形の火砲を抱えて、崖っぷちに乗り出しながらどっかりと足腰を落ち着ける。

「それでも、喰らいやがれ！」

トリガーを引き絞れば、一拍を置いてから、六本のシリンダーを束ねたような砲身が回転を始め、轟音を上げながら砲弾の嵐を吐き出す。

今回のミツシヨンに備えてコーダイが新しく用意した、『ジャイアントガトリング』だ。

激しく空葉莢を排出しながら、大口径の砲弾が次々にアドラステアの対空ビーム砲や主砲に着弾していく。

一発一発の威力は高いものではない、しかし秒間数十発にも及ぶ連射力は、並大抵のガンプラなら一瞬でハチの巣に変わるだろう。

すると、主砲のひとつがメガ粒子を放とうとキャノパルドに向けられるが、主砲が向けられると予測していたコーダイはすぐにジャイアントガトリングの連射を止め、崖上へ引っ込む。

一拍を置いてから、キャノパルドがいた地点をビームが薙ぎ払われた。

主砲による砲撃が止まるのを確認してから、セアも続く。

「ターゲットロック……これならっ」

照準を固定すると同時に、エンハンスドガンダムMK-IIは背部のI・W・S・Pから肩越しに伸びるレールガンを発射する。

放たれた115mmの弾丸は、ジャイアントガトリングが穴だらけにしたところへ突き刺さり、内部から炸裂した。

「大丈夫、これを繰り返せば……」

ふと、崖の下からゲドラフの一機がエンハンスドガンダムMK-IIを睨み、インラッド上部のミサイルランチャーを一斉発射してきたが、セアはすぐにビームライフルと単装砲を連射してミサイル群を撃ち落とし無力化させていく。

ゲドラフはその場でインラッドを止めて、半身になってビームライフルで狙いを付けようとするものの、足を止めた瞬間、ジンライ改のキャットウスの砲弾がボディを直撃した。

ゲドラフ、撃墜。

「（繰り返すだけじゃキツイかもな）」

ハバキリはマップ上のアドラステアの現在位置と、艦の損耗具合を見比べて、「このままでは止め切れない」と読み取った。

このアドラステア、相当“堅い”。

対艦、対要塞攻撃に適した機体が揃って撃ちまくっていると言うのに、損傷は



軽微。

対空ビーム砲の一つや二つが動かなくなつたところで、氷山の一角の破片のようなものだろう。

艦の急所であるブリッジを狙いたいところだが、遠くからじつくり狙おうとすれば即座に対空ビーム砲が飛んでくる。

懐に飛び込んで近接攻撃を仕掛けるのも難しい。

あのハリネズミと見紛うほどの対空ビーム砲を運良く掻い潜れても、護衛のゲドラフが追ってくるのだ、そうして足止めされている内にビーム砲の射線に踏み込んでしまつたら一発アウト。

こりや予想以上に厳しくなりそーだ、と呟きながらも、ハバキリはキャットウスのトリガーを引き、すぐにまた崖の上へ引つ込む。

一方、ゲドラフ部隊の撃破とアドラステアへの肉迫攻撃を仕掛けようとする、サツキーのガンダムデスレイザーと、エミルの七星剣士エクシアと、その他近接格闘機達。

ゲドラフの厄介なところは、前後は鉄壁のインラッド、左右は自前のビームシールドで守りを固めているので、死角は無いに等しいのだ。

しかし、無敵とも取れるこの組み合わせだが、GBN上でのその攻略法は複数挙げられている。

アインラッドの破壊は機体スペックが高くないと難しいのだが、何も無理にアインラッドを破壊する必要はない。

それを率先して実践するように、サッキーとエミルの二人は次々にゲドラフ部隊を撃破していた。

「こう言う時、鎌状の武器って便利よね」

ガンダムデスレイザーがビームシザースを薙ぎ払えば、三日月型のビーム刃はアインラッドにぶつかることなく、ゲドラフのビームシールドに接触、ビームシザースに出力負けしたビームシールドは突破されて、ゲドラフはあえなく胴体を斬り裂かれる。

ゲドラフ、撃墜。

ビームシザース（サイズ）はその形状から、アインラッドを飛び越して横合いから直接ゲドラフを攻撃出来る武器だ。

同じような武器としてはフォビドゥンガンダムのニーズベグや、元来『相手の防御を躲しながら攻撃する』武器である、ガンダムサンドロックのヒートショーテルや、ユーゴー【サンドバル機】の半月刀なども有効だ。

ゲドラフの一機が、七星剣士エクシアを轢き潰そうと突進してくる。

「遅いね」

エミルは慌てることなくひらりとその突進を躲して、擦れ違い様にGNソード【巨門】をゲドラフのビームシールドに突き立ててやる。

ガンダムエクシアと言う機体が元々、対太陽炉搭載機——GNフィールドを展開可能な機体に対抗するためとして、他のガンダムに比べても格闘武装が豊富に揃えられている。

GNフィールドを突き破るために作られたその大剣は、相手がビームシールドであろうと関係なく、それごとゲドラフを貫通させてみせた。

ゲドラフ、撃墜。

ようは、ゲドラフのビームシールドを突破、もしくは無力化させる手段が確立出来れば、それほど脅威には成り得ない。

「にしたって、ゲドラフの数も多いわね。次から次へと出てくる、しっ！」

サツキーはすぐさまガンダムデスレイザーを飛び下がらせて、アドラストアからの対空ビーム砲を躲す。

躲したついでに他のゲドラフのインラッド上部のミサイルランチャーをビームシザースで斬り落とす。

「ま、ボク達の役目はあくまでもゲドラフの排除と、チャンスが見えたら艦の懷に飛び込

むことなんだ。焦らずに行こう」

ミサイルランチャーを失って動揺したゲドラフの側面にGNソード【巨門】を突き立てる、エミルの七星剣士エクシア。

周囲にゲドラフの反応が消えたことを確認してから、二機は顔を見合わせる。

「この辺りのゲドラフ部隊は片付いたね。他の援護に回る？」

エミルはソードライフルでアドラステアの前輪の中心にあるビーム砲を攻撃しつつ、サツキーと通信を取る。

「そうね、白兵戦仕掛けるにはまだ早いと思うし、今はゲドラフの数を減らしませよ」  
手が足りていないところはどこかと周囲を見回すサツキーの視界に、一機のイフリートの改造機が見えた。

「赤と黒のツートンカラーで塗装された」そのイフリートは、ヒートサーベルを剣道のように構えると、突進してきたゲドラフをインラッドごと真つ二つにしてみせた。  
「すごつ、インラッドごと斬り捨てちゃった」

サツキーがそれを見て感心していると、そのイフリートのモノアイが二人に向けられ、駆け寄って来るなり、通信を掛けてきた。

『悪いが、少しいいか』

イフリートのダイバーらしい青年の声が届き、エミルが応対する。

「なんですか？」

『参加しているダイバーの中で、“怪しい”奴を見ていないか？』

怪しい奴はいないかと問われて、エミルは訝しげな顔をしながらも正直に話した。

「怪しい奴？……すみません、他のダイバーの動向までは見てません」

『そうか……すまん、邪魔したな』

一礼すると、イフリートはすぐに踵を返して、他のゲドラフの排除に向かった。

それを見送るなり、ガンダムデスレイザーのビームシザーの柄が、七星剣士エクシアの肩に乗せられ、接触通信が行われる。

「何だったの？」

「怪しい奴を見てないか、だって。……あまり関わらない方が良さそうだ」

あのイフリートのダイバーが、どんな目的でこのミッションに参加したのは分からない。  
い。

しかし、誰かをーそれも怪しい奴ーを捜していると言うのなら、何かしら後ろめたいことでも抱えているのかもしれない。

接触通信をしている内に、アドラステアがエリアの外へと消えていく。

次のエリアでまた迎撃行動に出るために、エリアとエリアの間にあるメンテナンスポイントで整備を行うための時間が設けられるのだ。

ふと、コーダイからの通信が届いて来た。

「サツキー、エミル、聞こえるか？このエリアは終わりだ、急いで戻ってきてくれ」

二人は了解を返すと、すぐに機体を飛翔させてメンテナンスポイントまで急がせた。

第一メンテナンスポイント。

主に弾薬とエネルギーの補給からが完了されるまでの短い間、フォース・リヴェルタの面々は額を突き合わせて作戦会議に勤しんでいる。

「正直、とんでもなく堅いな」

そう告げたのはコーダイだった。

装甲に守られていない対空ビーム砲でさえ、破壊するのに四苦八苦しなればならぬいほどだ。

今のところ、リヴェルタのメンバー達の中で撃墜されたものはいないが、この先で誰かリタイアしてもおかしくない。

「射撃に対する耐性が飛び抜けてやがるな。砲撃機の全火力を集中させてもビーム砲二、三基潰すのが精一杯なんて、とんだムチャクチャだ」

ハバキリは溜息混じり応じる。

「幸い、周りでウロチョロしてるゲドラフはそんなに強くないわ。倒すだけなら苦勞はしないし」

サツキーも自分が読み取った現状を伝える。

「だけど、艦に取り付こうとする味方への邪魔だけは、しつかりやつてくれるよ。……こつちからしたら迷惑極まりないけど」

エミルは自分の視界の中で、強引にアドラストアに乗り込もうとした味方のシュツルム・ガルスが、熱殺蜂球（ミツバチの大群が外敵に張り付いて体温を上げさせ、そのまま蒸し殺すこと）のごとく、多数のゲドラフのインラッドに轢潰されて見るも無惨な姿にされたことを脳裏に浮かべる。

四人が挙げる報告は、あまり良いものではない。

それを静かに聞いていたセアは、思考を巡らせた。

「……射撃への耐性が高いなら、近接攻撃ならダメージを期待出来るってことだよな？」  
彼女の進言に、コーダイが応える。

「まだ試した奴がないんで、格闘攻撃が有効かどうかは分かりませんが……これで格闘耐性まであつたら、クリア出来ないクソゲーになりますね」

サツキーもそこに口を挟む。

「もし格闘耐性は低いとしても、ゲドラフが邪魔で取り付く島もないですよ？」

格闘攻撃を仕掛ける以前の問題だ。

しかし、セアは進言を続ける。

「別に、近付かなくても近接攻撃は出来るよね？」

どういふことか、と他四人は耳を傾けた。

間もなくアドラスティアが第二迎撃エリアに侵入すると言う警告が流れ、慌ただしく迎撃準備を整えていく。

第一迎撃エリアと同じく、渓谷の隙間をアドラスティアが進み、その左右の崖から砲撃を行うなり、谷に降りて肉迫するなりして迎え撃つ。

サツキーは変わらず谷に降りるが、エミルと交代するようにハバキリがそこへ向かう。

「おいでなすつたおいでなすつた……」

やって来るアドラスティアを見てハバキリは軽く唇を舐める。

キヤットウスを置いてきたジンライ改は、リアスカートからシースザーバーを抜き放ち、それを左肩に担ぐ。

「ああ言うことを思い付けるセアさんって、実はすごい頭良かったりするのかな」



サツキーは、先程にセアが挙げた意見を思い出し、ハバキリがそれを補足する。

「実際、セアさんは学年トップの成績だからな。頭脳と成績の良さは別って言うけど、元の頭が悪くちや頭脳も成績もクソもへつたくれもねーしな」

「そう言えば、ハバキリとコーダイって、セアさんと同じ学校なんだっけ？」

ガンダムデスレイザーの首が、ジンライ改に向けられる。

「まーな。……さてと、お喋りはこの辺にするか」

アドラステアがエリアに侵入、同時に格納庫が開かれる。

現れるのは、同じくインラッドを装備したソーゲドラフではない。

赤黒い体躯に右肩に縦長のシールド、左肩にはスパイクアーマーと、ザクⅡを思わせるシルエツト。

「今度はゾリディアか」

ゲドラフとは異なり、ザンスカール帝国の傑作量産機とされるゾロアットを陸戦用に再設計された機体だ。

そのゲドラフのような、インラッドとの連携運用を前提とした機体では無いが、それでもゾロアットをベースとされた機体の信用性は高い。

「また大きいドーナツだね」

ゾリディアのインラッドを見てか、ジルはそれを「大きなドーナツ」と解釈したら

しい。

「あんな地面に転がしまくってばっちくなつたドーナツなんか食えるか」

軽口を返してから、ハバキリはアームレイカーを一気に押し出し、着陸しようとしているゾリディアの側面に回り込み、ビームシールドを展開するよりも先にシースザンバーの切っ先を突き込ませた。

ボディを潰されたゾリディアをアインラッドから追い出すと、ジンライ改はその持ち主のいなくなったアインラッドを奪い取る。

とは言え、ジンライ改の全高ではアインラッドの中には入れない。

しかし、原作のリガ・ミリティアのパイロット達のような使い方に拘ることはない。

「そらよー」

ジンライ改はその掴んだアインラッドを振りかぶり、他のゾリディアに向かって投げ付けた。

同じモノ同士では踏み潰すことは出来ず、投げ付けられたアインラッドをぶつけられたゾリディアはバランスを崩して転倒してしまふ。

その隙を見逃すハバキリではない、転倒したゾリディアヘシースザンバーを振り下ろし、アインラッドもろとも叩き斬った。

「……あたしちよつとゾリディアに同情するわ」

自分達の作り上げたものを、ただ有効活用するならまだしも『盛大にぶち壊しながら』味方への被害を押し広げると言うのだ。

質（タチ）悪つ、と言いなながらもサツキーはサツキーで、ゲドラフと同じ対処法でゾリディアを斬り捨てていく。

一方、崖の上で機会を虎視眈々と狙う、エンハンストガンダムMK-II、キャノパルド、七星剣士エクシアの三機。

「……よしっ」

セアのエンハンストガンダムMK-IIは、脇から伸びた長刀――試製9. 2m対艦刀を”逆手に”抜き放つ。

その柄には結び付けるようにして、高分子ワイヤーが伸びる。

「いつでもいけるよ、コーダイ」

エミルの七星剣士エクシアも、リアスカートからGNビームダガー【天権】【開陽】を抜き放てば、対艦刀と同じように高分子ワイヤーが結び付けられている。

「うっし、攻撃開始イー！」

攻撃開始の号令と共に、コーダイのキャノパルドは弾薬補給されたジャイアントガトリングを撃ちまくる。

弾丸の暴風はアドラスティアの甲板へと容赦なく降り注ぐが、大したダメージなど望むべくもないのは、第一迎撃エリアの時点で分かり切っている。

『全く何もしないよりは遥かにマシ』だ。

ジャイアントガトリングだけではない、肩部のキャノン砲もとにかく撃って撃ちまくるキャノパルドから少し離れたところから、エンハンスドガンダムMK-IIと七星剣士エクシアも行動に出る。

「槍投げの要領で……せえのっ！」

エンハンスドガンダムMK-IIは、対艦刀を握った右腕をその場で振りかぶると、アドラスティア目掛けて投げ付けた。

砂塵を斬り裂きながら放たれたそれは、アドラスティアの対空ビーム砲のひとつに突き刺さりー砲弾やビームなどでは大したダメージも入らなかったそれを、一撃で破壊した。

「セアさんの見立て通りですね。なら、ボクも……」

七星剣士エクシアも、両手に抜き放ったGNビームダガー【天権】【開陽】の二つを投げナイフのように放つ。

集束したビームの短剣が、主砲のひとつに突き刺されれば、それが暴発した。

アドラスティアに突き刺さった対艦刀とGNビームダガー【天権】【開陽】だが、エンハ

ンストガンダムMK-IIと七星剣士エクシアは繋がっている高分子ワイヤーを巻取り、投げ付けた得物を回収する。

先程のセアの進言……それは至極単純、『近付けないのなら、近付かなければ良い』と  
言うものだった。

それは矛盾してないかとサツキーが口を挟んだが、コーダイはすぐに理解を示した。

近付かない格闘攻撃……つまるところ、エミルが得意とする『刀剣類を投擲する』と  
言う攻撃だ。

しかし、銃火器ではないため、投げた後はそのまま投げっぱなしになる。

それを防ぐために、対艦刀やビームダガーの柄にワイヤーを繋ぎ、投げ付けてからも  
回収が効くように考慮したのだ。

射撃耐性こそ高いこのアドラステアだが、やはり近接攻撃への耐性は低いようだ。

『そうか、そう言うことなら！』

セアとエミルの攻撃を見て的を得た、味方のソードインパルスガンダムは、相手にしていたゾリディアをエクスカリバーで斬り捨てると、崖の上まで上昇してエクスカリバーを一度納め、背部に背負っていたフラッシュエッジ二丁を、連結させた状態で振り投げる。

フラッシュエッジと言うとビームブーメランのイメージが強いが、実はこうして二つ

連結させた上での、大型の実体ブーメランとしても機能するのだ。

砂塵を斬り裂きながら放たれたブーメランは、アドラスデアの主砲のひとつを切断してみせた。

『おお！俺達も続くぞ！』

『よっしや！攻略法さえ分かりやこつちのもんだ！』

『これ、母さんです……』

誰か一人、見てはいけないものを見たような発言をしたようだが、誰もそんなことは聞こえていない。

ベルガ・ギロスがショットランサーを射出し、ゲイツのエクステンションアルレスターの先端からビームスパイクが伸び、ハシユマルの外装を纏ったガンダムフレームがテイルブレードを振ると、『近付かない近接攻撃』が可能な機体達が、アドラスデアへ猛攻を掛ける。

要塞の一つや二つを陥落させかねないほどの砲撃すら温そうだったアドラスデアが、見る見る内に傷付いていく。

これではまずいと判断したのか、崖下に展開していたゾリディア部隊は崖の上へ向かうとするものの、

「はいはい、あんたらの相手はこつちよ、つとー！」

即座に振り抜かれたガンダムデスレイザーのビームシザースに、ビームシールドごと斬り裂かれ、

「タイヤが空を飛ぶな」

ジンライ改のフロントスカートから放たれたチエーンアンカーがインラッドのミサイルランチャーに噛み付き、ゾリディアは強引に引き寄せられ、シースザンバーの錆に変えられる。

ゾリディア部隊はほぼ壊滅状態、アドラスティアも艦砲の半分以上を失うという、散々な状態にされて第二迎撃エリアを突破した。

この先は、最後のエリアである絶対防衛ラインだ。

最後の決戦に備えて、メンテナンスポイントで補給を受けようと急いで帰投するガンブラ達の中、赤と黒のツートンカラーのイフリートは、誰もいなくなつた第二迎撃エリアの片隅で、誰かと通信を取っていた。

「……こちらコードネーム『ムラクモ』。イベントミッションDグループ、第二迎撃エリア。今のところ、怪しい動きはない。……ああそうだ、例の『プロトシングルナンバー』もいる。……分かつた、ミッションを継続する」

通信を終えて、彼はイフリートをすぐに離脱させた。

第二メンテナンスポイントで、弾薬エネルギーの補給をしている間、フォース・リヴェルタの面々は再び作戦会議に顔を合わせる。

この場を取り仕切るのは、自然とコーダイとなる。

「次が最後の、絶対防衛ライン。ここを突破されたら、ミッションは失敗だ」

コーダイは、絶対防衛ラインの地形図を呼び出しながらそれを全員に見せてやる。

マップの左端からゆっくり進むアドラスデアと、右端の赤い『?』の文字が点滅される。

「このエリアは、さっきまでみたいな溪谷じゃなくて平坦な一本道。上から一方的に攻撃が出来ない、ガチンコ勝負ってわけだ」

アドラスデアの表示を拡大し、外から見た具体的な映像を映す。

「つても、さっきの攻撃でアドラスデアもだいぶダメージを喰らってるし、艦砲の数も残り少ないはずだ」

八門ある主砲は半分ほど減らされ、対空ビーム砲はほぼ全滅、ミサイル発射管もほとんどが破壊されている。

「ゲドラフとゾリディアの生き残りも出てくるだろうが、基本的に後はアドラスデアを



倒すだけだ」

拡大させていた画面を元に戻し、次に青のマーカーが五つ——リヴェルタのガンプラ達が表示される。

「俺のキャノパルドはここまでと同じ遠距離から砲撃するけど、今度はセアさんも前線に出てもらいます。」

五つある青のマーカーの内の四つがアドラステアへ向かい、一つだけがその場に留まる。

「私も前に出るんだね？」

セアが自分のマーカーを指差す。

「そうです。そろそろアドラステアに取り付いてもそれほど危険じゃないはずだから、セアさんには対艦刀でアドラステアを攻撃してほしいんです」

「そのための”対艦”刀だもんね」

コーダイの要請に、セアはメンテナンスハンガーに納められているエンハンスドガンダムMK-IIの脇に備えられた対艦刀へ目を向ける。

間もなくアドラステアが最終エリアに到達するとのアナウンスが響き渡り、ダイバー達は慌ただしく向かう。

絶対防衛ライン。

第一、第二迎撃エリアとは異なり、溪谷は無く、だだっ広い平坦な荒野。

その後端には都市群が見えており、アドラスティアがここを突破すれば、遠慮なく踏み潰されていく、と言うものだ。

「さーとと……」

ハバキリのジンライ改がシースザンバーを担ぎ、

「派手に暴れてやりますか!」

サツキーのガンダムデスレイザーがアクティブクロークを広げ、

「目標を駆逐する」

エミルの七星剣士エクシアがGNソード【巨門】を展開し、

「ここが正念場……みんな、気を抜かないでね」

セアのエンハンスドガンダムMK-IIが対艦刀を抜き放ち、

「よおし……突撃、開始イ!!」

コーダイのキャノパルドのキャノン砲が、最後の攻撃の狼煙を上げた。

アドラスティアがエリアに侵入すると、艦首近くに砲弾が炸裂する。

度重なる格闘攻撃によって損傷したそれは、例え射撃攻撃でも揺るがしかねないほどだ。

それと同時に、生き残ったゲドラフとゾリディアの部隊が出撃開始、決死の抵抗に出てる。

これまでのただ蹂躪するだけだった突撃戦法ではなく、アインラッドとビームシールドの防御力を活かしてアドラステアを守っているのだ。

向かってくるところを迎撃したいダイバー達にとって、これほど手間になることはない。

そして、その手間を掛けている間にもアドラステアは着実に絶対防衛ラインへ迫る。

ジャイアントガトリングによる弾幕で、アインラッドのビームキャノンやミサイルランチャーを破壊して回っているコーダイは、冷静に戦況を見渡す。

守りを固めるゲドラフとゾリディアと、その守りを前に攻めあぐねる味方部隊。

「(こりやあ、間に合わねえか?)」

アドラステアのブリッジを破壊さえすれば、ミッションはクリアだが、それだけはさせないようにゲドラフとゾリディアは守りを固めているのだ。

速度を見ても絶対防衛ラインの突破まで、残り二分といったところ。

「コーダイ」

ふと、ハバキリが通信を掛けてきたと思えば、ジンライ改がキャノパルドに触れて接触通信を行っている。

「時間がねーし、オレが突っ込んでブリッヅを潰す。援護頼むわ」

「おいおいハバキリ、お前正気か？今突っ込んでみんちよりひでえやになるぞ？」

ゲドラフとゾリディアの数はまだ20機近くもいる。

いくらその半分以上が他のダイバーの相手をしているとはいえ、アドラスティアに取り付こうとすれば、即座に反転して排除にかかるのだ。

その上から、僅かながら残されている主砲や対空ビーム砲を掻い潜りながらもなれば、ハバキリの「突っ込んでブリッヅを潰す」は、無謀な特攻にしか思えない。

「そこはお前の腕を信用してるから問題ねーよ。コーダイがしくつたらオレの特攻も無駄になるってことだ」

「プレッシャーを与えていくスタイルかよ……」

しかも、その無謀な特攻の成功率も、チームメイトの援護に依存すると言う、極めて不安定で分の悪い博打である。

だが、コーダイはコーダイでその『極めて不安定で分の悪い博打』を否定しなかった。「そこまで大口叩くことは、『俺の援護が完璧なら必ず成功する』ってことだな。よーしやってやろうじゃねえか、もしミスったらアルティメットレアの『1/1トリイ』が出るまでリセマラな」

「おいこら、0.03%を引き当てるとかクソゲーか」

果たしてそれはGBNがサービス配信されている内に入手出来る者がいるのだろうか。

「……んじゃー行くか!」

「おうきゃー!」

無駄話はそこまで、シーズザンバーを構え直したジンライ改がアドラステア目掛けて一直線に突撃、その三步後ろをキャノパルドが追従する。

アドラステアに乗り込むと、ゲドラフとゾリディア達の動きが切り替わり、瞬時にジンライ改とキャノパルドを取り囲もうとする。

このままでは逃げ場を失ってしまうが、構わずに二機はアドラステアのブリッジ目掛けて突撃していく。

迫りくるタイヤ装甲の地ならし機動。

それがあとほんの数秒で接触するーその寸前に、キャノパルドはそこで足を止めて、スラストアの炸裂と共に一気に真上へ上昇する。

「行つてっおい!!」

0.5秒前まで自分が真下へ、キャノン砲とジャイアントガトリングが猛火を噴き出す。

激しい砲火の雨に曝されるゲドラフとゾリディアは、アインラッドもろとも撃ち抜か

れていく。

撃墜を確認する間もなく、キャノパルドの砲撃が今度はアドラスデアのブリッジ付近へと降り注ぐ。

残り少ない対空ビーム砲と主砲の弾幕を掻い潜りながら、ハバキリのジンライ改はブリッジへ猛迫する。

飛び越えた対空ビーム砲をシースザンバーで叩き潰し、キャノパルドからの援護射撃が最後のミサイル発射管を誘爆させた。

ジンライ改のモノアイが、アドラスデアのブリッジを捕捉する。  
「(こいつで終わりだ)」

ブリッジを破壊すべくシースザンバーを振りかぶろうとして――

「ッ、ハバキリッ、右――」

突如、ジルの警戒を促す声が聞こえ、その一瞬の後に右側面から敵機接近を告げるアラートが鳴り響く。

「!?!」

正面に意識を集中させていたハバキリはその反応が遅れ、ジンライ改は横あいから突き飛ばされてしまった。

「ぐあっ!?!」

「はうっ」

ジンライ改を突き飛ばしたのは、ゲドラフやゾリディアと同じアインラッド付きの青い機体、それが三機。

「チツ……こんなところで『ブルツケング』かよー」

舌打ちしながらもハバキリはジンライ改の体勢を立て直そうとするが、ともに突き飛ばされてしまったせいで、アドラステアから足を踏み外してしまう。

「やべっ」

転落しかけるジンライ改だが、落下はそこで止まった。

「間一髪、だね」

その寸前に、セアのエンハンスドガンダムMK-IIが受け止めてくれたのだ。

「おっ、セアさん？助かりました」

エンハンスドガンダムMK-IIはそのままジンライ改をアドラステアまで持ち上げると、自身もそのまま着艦する。

眼の前には、ブリッジを死守せんとするブルツケングの一個小隊。

同時に、コンソールが『間もなく絶対防衛ラインが突破されます！』と『？』マークを点滅させてくる。

もう時間がない。

「シースザンバー、抜刀」

不意にジンライ改はシースザンバーを開き、その中から斬鋼刀を抜き放った。敵の数は三機。

一機がセア、二機をハバキリが相手すれば勝てるが、その前にアドラスデアが絶対防衛ラインを突破するかもしれない。

せめて、もう一機いてくれれば……

だが、コーダイは遙か後方で離脱しているし、サツキーとエミルの動きは分からない。二人で何とかするしかない、と腹積もりを決めようとするハバキリの隣に、何者かの機体が降り立った。

『助太刀する』

赤と黒のツートンカラーのイフリートが、ヒートサーベルを構え直しながら告げる。

「……感謝するぜ」

短く礼を言った、その一秒後にジンライ改はスラスターを全開にしてブルツケング小隊のど真ん中へ突っ込み、エンハンスドガンダムMK-IIとイフリートも一步遅れて続く。

固定式のインラッドを装備するブルツケングは、半身の姿勢でビームライフルを放って来るが、ハバキリのジンライ改は斬鋼刀でビームを斬り弾きながらブリッジへ迫



る。

そのジンライ改を追い越すほどの速度で、イフリートはブルツケングの一機へ肉迫し、ヒートサーベルによる格闘戦を仕掛ける。

セアのエンハンストガンダムMK-IIも、対艦刀を持ってもう一機のブルツケングへ打ち掛かる。

僚機が他の相手をしている内に、指揮官機のブルツケングがビームサーベルを抜き放ってジンライ改へ斬り掛かろうと迫る。

それに対してジンライ改は、ブルツケングのビームサーベルを無視した。

右腕を斬り落とされるが、それすらも無視、ジンライ改はさらに加速し、逃がすものと指揮官機のブルツケングは急加速してジンライ改を追い掛ける。

アドラステアのブリッジはもう目と鼻の先、しかしすぐ背後にはブルツケングが迫る。

ジンライ改がブリッジを斬り飛ばすのが先か、ブルツケングがジンライ改を止めるのが先か……

そのギリギリの追いかけっこは、”後者に軍配が上がった”。

ブルツケングのビームサーベルの一閃が、ジンライ改のバックパックを斬り裂いた。

推進剤を焼き斬られて吹き飛ぶジンライ改。

「……だが、ハバキリのその口元は笑みを浮かべていた。

「ごっくろー……さんッ!!」

なんと、吹き飛びながらもジンライ改は左手に握った斬鋼刀を投げ付けた。

放たれた刀刃は、真っ直ぐにアドラスデアのブリッジへ向かい……ちようど、艦長席に当たる部位へ突き刺さった。

制御を失ったアドラスデアは急停止、それに伴ってゲドラフ、ゾリディア、ブルツケング達は電源を切られたように動かなくなっていく。

「……絶対防衛ラインとアドラスデアのタイヤとの距離は、わずか3mも無かった……」

アドラスデア、撃沈。

『Mission clear!!』

いつのまにか、夕暮れが荒野を朱く染めていた。

周囲のダイバー達がミッション成功を喜んでいる中、ガンダムディスプレイザーが、中破したジンライ改を肩に担いで運ぶ。

「相つ変わらず無茶するわねえ、あんたは……」

エミルと共にゲドラフとゾリディアの数を可能な限り減らしていたサツキーは、事の顛末を本人から聞いて呆れたように頷く。

「無茶したおかげでミッシェンクリア出来たんだし、問題ねーよ」

軽く笑うハバキリだが、そばにいたジルに袖を引っ張られ、

「ハバキリ、無茶したら、めっ」

人差し指を立てて怒られた。

「無茶のひとつくらいさせてくれって」

「むう。そんなこと言うなら、セアに言っちゃうもん」

「そりゃ勘弁。セアさんにまで怒られたくねーからな」

悪かったな、と悪びれることもなく、頬を膨らませるジルの頭を撫でる。

すると、ハバキリとサツキーを待っててくれたのか、それぞれガンプラから降りた

セア、コーダイ、エミルが手を振ってくれている。

その光景を視認しつつもハバキリは別の方向に意識を向けていた。

その方向はハバキリ先程に助太刀してくれた、イフリースの改造ガンプラだ。

ミッシェンも完了したと言うのに、メンテナンスポイントにも向かわず、ただその場で立っているだけ。

と思いきや、モノアイを輝かせると、すぐに踵を返してどこかへ飛んでいってしまった

た。

「……何だったんだろーな」

イフリートが飛び去って行くのを見送りながら、ハバキリは動かなくなったジンライ改のкокピットの中で揺られていた。

イベントミッション『バイク戦艦の侵攻』は各地で終了していた。

そのBグループと分類されているエリアでは、撃沈されたアドラスデアや、機能停止したゲドラフやゾリディアが順次消えていく中、ドワツジとマグアナツクの二機だけが残っていた。

二機とも密着して向かい合って、機体越しに通信している。

「さてと、邪魔がいなくなったところで、”商売”の話と行こうじゃないか」

フードを目深に被るドワツジのダイバーが、防塵用のマスクで顔を覆うマグアナツクのダイバーに向かってそのように話し掛けた。

「……”失敗作”の再利用と言うのは、信用出来るのか?」

訝しげなマグアナツクに、ドワツジは問題ないと、下卑た笑みで頷く。

「なあんにも知らねえ空っぽな奴らだからな。ちよつと技術を教えて、それを実践させ

て、バレそうになったら証拠隠滅にボンツ……ってな。ただ放置して勝手に消されるより、よっぽど有効活用だろ？」

「まあ何でもいい……カネが手に入るなら、失敗作でも何でも利用してやるさ」

マグアナックのダイバーはコンソールを打ち出し、予め設定しておいた額のビルドコインをドワツジへ送金する。

ほんの一秒少いで、ドワツジのダイバーのコンソールに、送金された額の数字が加算される。

「毎度あり。ほれ、これが例の”失敗作”だ」

ドワツジはフロントスカートに携えていたカプセルを掴み、それをマグアナックに差し出す。

「ん、確かに受け取った。では、気付かれる前にログアウトさせてもら……」

ログアウトさせてもらおう、と言いかけたところで、両機の間には砲弾が落ち、炸裂した。「もう気付かれた!?!いくらなんでも早すぎるぞ!」

「……いや違う、こいつは運営の奴らじゃない!?!」

慌てるドワツジとマグアナックの両機の前に現れたのは、

『確かに運営じゃあ無いが……』『私服警官』ってところか』

ジャイアントバズを構えた赤と黒のイフリート・イフリート・エスパード。

『さっきの不正取引は、こっちのレコーダーで記録済みだ。このデータは、早急に警察に届けさせてもらう』

「てめえ！」

ドワツジは納めていたラケーテン・バズを取り出そうとするが、その頭部に投擲されたヒートサーベルが突き刺さり、仰け反った瞬間に発射されたジャイアントバズが両足を吹き飛ばし、ドワツジはその場で横転して動かなくなる。

「貴様……さてはゲリラだな!？」

マグアナックはコンテナを庇いながら、ビームライフルの銃口をイフリート・エスパードに向けるが、

次の瞬間にはその赤黒い機体は姿を消して、砂煙の跡だけが残る。

「どっ、どこにっ……」

マグアナックがカメラアイを左右させている間に、イフリート・エスパードは背後からマグアナックに組み付いて押し倒し、人体の関節を外すように両手両足を引きちぎっていく。

『GBNやELダイバーを、リアルマネートレードの手段の一つとしか見ていないよう

な奴がいるから……』

イフリート・エスパードは、マグアナックが落としたコンテナを奪い取った。

『あんたらのログイン元には、もうパトカーが来てるはずだ。さつさとログアウトして、大人しく自首するんだな』

踵を返してさつさと離脱していき、入れ替わるようにGBNガードフレームが、ドワツジとマグアナックの二機を取り囲む。

「……こちら、コードネーム『ムラクモ』。容疑者二名のデータと、例のELダイバーの確保に成功しました。どうぞ」

『こちらイノグチ。仕事が早いねえ。こっちは今ようやくパトカーから降りたところさ』

「仕事は早い方が良いでしょう。……不正取引のデータを送ります」

『……んむ、確認した。助かるよ。』

「ま、私服警官の真似事ですけど。お役に立ったなら何よりです」

『ナンブさんから聞いたけど、君は日本武道の達人らしいね。是非ウチの部署にも来てほしいもんだ』

「受験に失敗したら、就職先として考えときますよ……確保したELダイバーを保護局

に送り届け次第、リアルの方に戻ります」

赤みを帯びた黒髪を後頭部で束ね、武者のような和装を纏うイフリート・エスパードのダイバー。『ツルギ』は、ナオエとの連絡を終えて、操縦に集中することにした。

### 【次回予告】

ジル「ハバキリ、セア、こうちや、サツキ、エミル。気が付いたらこんなにくさんの友達が出来て、毎日がとっても楽しい。……でも、わたしはわたしのことを何も知らない。わたしは自分をもっと知りたい。もっとみんなと、色んなことを話したい。

次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション

### 『彼女の見た世界』

わたしは、どこから生まれたの？」



## 17話 彼女の見た世界

もう一口、お猪口に『俗物』を注ぐケンさんと、コーヒーを啜るトラちゃん。

少しの沈黙が流れたところで、不意に誰かのコンソールにメツセージの着信を告げる。

「あら失礼、アタシのかわ」

バーテンダーはコーヒーカーップをテーブルに置き、コンソールからメツセージのアプリを開く。

その内容が既読になると同時に、またもドアベルが来客を告げる。

「はろはろー、今戻ったわよママー」

勝って知ったると言う様子で入店してくるのは、腰ほどまで伸びた、黄土色とベージュが混ざったような長髪を揺らす、少女と大人の女性の端境期ほどの女性ダイバー。

その瞳は、董色と紺色と言う珍しい配色のオッドアイだった。

彼女から「ママ」と呼ばれたバーテンダーは、それを聞いて顔を綻ばせる。

「おかえりなさい、『マイマイ』ちゃん。どうだった？」

バーテンダーはその女性ーマイマイを迎えると、氷を詰めたグラスに炭酸のジュー

スを注いでいく。

「ちよーつとめんどくさかったけど、余裕よ余裕」

ケンさんとの間にトラちゃんを挟むようにカウンタース席に座るマイマイは、バーテンダーからジューズを受け取ると、早速ぐびぐびと飲み始める。

「ぶはーっ、この一杯のためにGBNやつてるようなもんねえ」

「あらやだマイマイちゃん、これお酒じゃないのよ?」

「こう言うのは気分よ、気分。気分次第で、水でも酔っぱらえるんだから。……そうそうママ、これ報告のデータね」

そう言いつつもコンソールを開き、ログデータのバトルの履歴動画をバーテンダーに見せてやる。

何十機といるガンプラの部隊のど真ん中を、血のように紅い Paras・アテネがバスターソードを片手に堂々と斬り込んでいく。

バスターソードで頭から叩き斬り、爪先のビームサーベルで四肢をバラバラにし、腕部のビームサーベルでコクピットを念入りに焼き斬る。

「……頼んだアタシの言うことじゃないけど、GBNはいつからこんなことになっちゃったのかしらねえ」

戦いの様子を見ながら、バーテンダーは悲しげに呟く。

「E.L.ダイバーと言う名の”ニュータイプ”と、運営と言う名の”オールドタイプ”、か……誰か言ったか知らないけど、言い得て妙ってヤツかしら」

マイマイはあつという間にジュースを飲み干す。

「ニュータイプって言葉が出てくるなら、当然”強化人間”や”クローン”だって現れる。……『機動戦士ガンダム』ってアニメは、どこまでもどこまでも人類に忠実よね」

宇宙世紀と言う設定を知っている者からすれば、これ以上に無い皮肉だろう。

マイマイは飲み干したコップをテーブルに置いた。

「なら今度は、どっかのバカが隕石落としてもするのかしらねえ」

その”どっかのバカ”が月を地球に落としかけたことはあつたけど、とマイマイは意地の悪そうに口の端を歪める。

誰かが言っていた。

人間が眠っている時に夢を見るのは、記憶の整理をするためだと。

”実”があろうと無かろうと関係なく、何かしら記憶に僅かでも刻まれればそれらは扱い等しく満遍なく整理の対象となる。

嫌な夢から始まった。

自分はここにいると言う自覚はある。

鉄、鎖、錠、鍵……硬くて固くて堅くて難いものに繋がれ、何も見えない聞こえない感じない動けない。

ただ、そこにいるだけ。――時折、耐え難いほどの苦痛を与えられながら。ドカン、と言う爆音と共に視界が切り替わる。

爆音は何度も何度も打ち鳴らされ、煩いつたらない。すると、誰かが近付いてきた。

じつとしていろ、と言われてじつとすると、彼は手にしていたもので、繋いでいたものを壊した。

ここにいてはいけない、早く逃げろ。

それだけ告げてから、彼は元来た道へ戻っていく。

とにかく、ここは危ないらしいと言うことだけは分かった。走った。

何も考えずにただ走った。

どこまでも走った。

後ろから、草木を枯らし吹き飛ばし消滅させる死の炎と光が追いかけて来る。

嫌だ。死にたくない。

そんな衝動に突き動かされるままに、ひた走った。

ようやく隠れられると思つた場所に身を落ち着ければ、またしても爆音が耳を殴り付けた。

吹き飛んだ身体が爆風に焼かれ、地面に叩き付けられる。

ああ、ここで死ぬのかと、やけに他人事のように思えた。

意識が飛び遠のく中で聞こえた、声。

「おい、生きてるか?……いや、生きてなかったら」消えてる」か」

「う……?」

その声に、閉じられた瞼をこじ開ける。

「お、気が付いたか。こんなところで昼寝してちや危ねーぞ。……好きでこんなところにいるわけじゃなさそーだが」

ボサボサで伸ばし放題の、銀色の髪が見えた。

むくり、とベッドの上で上体を起こす。

まだぼんやりとした頭で、夢の内容を思い出そうとする。

自分が、ハバキりに助けられるよりも前にいたあの場所は、一体何だったのだろうか?

これっぽっちも楽しくなくて、痛くて苦しい思いをさせられるだけの、あの場所は、それだけでない。

自分はいつからあの気持ちの悪い場所にいたのだろう。

何故、そんないたくもない場所にいたのか。

「……わからない」

何も分からないのだ。

ハバキリとセア、コーダイの三人は、GBNではない、現実世界でも友達であり、学校と言う、大人になるための勉強をしにいくための場所に通っていると聞く。

それは、とつても楽しそうだ。

サツキーやエミルにも、学校に通っているのかと訊いてみれば、そうだと頷いてくれた。

行ってみたいと思う。

学校とは一体どんな場所で、大人になるための勉強とはどんなことなのか。けれど、自分はこのGBNの中でしか生きられない存在だとも教えられた。

保護局に保護されなければ、すぐにでも殺されてしまうとも。

もう一度眠ろうと横になってみるが、夢を思い出そうとしたせいで頭や目が覚めてしまったようだ。

「……むう」

眠ろうとするのを諦めて上体を起こし直して、コンソールを開いた。

ギャラリーのコマンドを選択すれば、今日までハバキリ達と一緒に撮った、たくさんの写真がある。

真剣な表情でバトルに臨むハバキリ。

作った花冠を付けてくれて笑顔を浮かべるセア。

フォースネストを華やかにしようとするコーダイ。

肩を寄せ合って一緒に自撮りをしてくれたサツキー。

七星剣士エクシアの肩に乗って黄昏るエミル。

その五人と一緒に並んで撮った、フォース・リヴェルタのデビュー戦初勝利の、記念撮影。

それだけでない、もっと色んな写真があつて、どれこれも自分にとって真新しくて新鮮で、面白くて楽しいものばかり。

ハバキリがいて、セアがいて、コーダイがいて、サツキーがいて、エミルがいてくれたから、今ここに自分がある。

だけど、なのに。

「(わたしは、みんなに何もしてない)」

そう。

自分はただ誰かに与えてもらうばかりで、その誰かに何か返したことがない。もらいつばなしなのだ。

セアに学ぶと言うことを教えてもらった。

コーダイにガン普拉を教えてもらった。

サツキーに女の子について教えてもらった。

エミルに人と人の繋がりを教えてもらった。

ハバキりに命を救ってもらった。

こんなにもたくさん守ってもらって、教えてもらって……でもそれは当たり前のことではなくて。

そのために、自分には何が出来るだろう。

ハバキリは、セアは、コーダイは、サツキーは、エミルは、何を贈れば、何をしてあげれば、喜んでくれるだろう。

「うーん……うーん、うーん、と……」

考える。

考えてみる。

とにかく考えた。



ぐるぐるグルグルと頭の中が回る。  
が、何も思い浮かばない。

自分は、何も知らない。

だから、何も思い浮かばない。

「……はあ」

溜息が溢れた。

何も知らない、何も出来ない自分がもどかしい。

ベッドの上に座り込む。

否、座り込んでも、止まっけていても、何にもならない。

止まるんじゃねえぞ、と言う言葉を思い出す。

「……この場合の「止まるんじゃねえぞ」は、認めたくない悲しい別れなどではなく、笑  
いを取るためのネタのひとつと化しているのだが（なお、作者はこの「止まるんじゃねえ  
ぞ」初見の際、画面の前でマジ泣きした模様）……」

止まるよりも、動くこと。

それを認識し、ベッドから降りて立ち上がる。

まずは……フォースネストに行こう、と。

朝の一時とは、家庭によって異なりが多々あるだろう。

目覚し時計に叩き起されて慌ただしく急ぐ者、文字通りの朝飯前の散歩に行く者、テレビの前で朝食を摂る、あるいは食後のお茶を啜る者、今日は早めにとのんびり準備を終える者など、家庭の数だけ朝がある。

アメノ兄妹の朝はどことそう変わらない、朝食を食べながら今朝のニュースを見流しつつ、登校の時間を待つ。

しかし、今朝のニュースのひとつは、見流さずに食い入るように見ていた。

『リーガンプラバトル・ネクサスオンラインの元運営会長、及び元ゲームマスターである『カツラギ』氏が、悪質なRMT（リアルマネートレード）の疑いによって、拘束されたことが昨日午後に判明しました』

「……元ゲームマスターが、逮捕された？」

ハバキリは眉間に皺を寄せながら、訝しげに画面の向こう側にいるニュースキャスターを睨む。

「ゲームマスターって言うと、GBN運営の一番偉い人ですか？」

テラスが向かいの席から訊ねてくる。

「おー、そのとおりだ。……元、だから今一番偉いってわけじゃねーが、それなりに重要

なポストにいてもおかしくはねー」

頭に元が付くとはいへ、何年もGBNの治安を曲がりなりだとしても守ってきた人物が、何故にそのような犯罪行為に走ったのか。

ニユースキャスターによる読み上げが続く。

『取り調べに対しカツラギ容疑者は、「不正取引など身に覚えがない。全くの無実だ」と容疑を否認しており、警察は端末機器やアカウントなどの履歴などを現在確認中でー』

「RMTって、ゲームの中の仮想通貨とかアイテムを、現実のお金でやり取りするってことですよね？」

頻りにテレビ画面とハバキリの顔を見比べるテラスに、ハバキリは難しそうな顔を浮かべる。

「まーな。GBNを含めた日本国産のオンラインゲームの利用規約上では一応禁止されてはいる……けど、ユーザー同士の合意で対面ニコニコ払いなら、友達同士で教科書借りると変わらねーから、全部が全部ダメってわけでもねー。……だから危険な可能性も高い」

問題になったり態々利用規約に禁止の条文が加筆されたりするのはそこだ、とハバキリは言う。

「正しいRMTなんてものは無くて、だからといって法律に触れるようなことでもない……どうにもその辺がグレーですね」

「しかもGBNには、ELダイバーって言う特殊なユーザーもいるから、なおのことRMTに関しては厳しい」

現在、国際的に『ELダイバーは法が適応されない』ことが明かされている。

ELダイバーにも人権を定め、法的措置を受けられるようにすべきか否か、適応されるにしろそれはどこの国の法律によるものなのか、GBNの関連商品のメーカーが日本なら日本の法律にすべきだ、などとその事に関する審議が日夜続いており、難航している。

ELダイバーが法に触れないからこそ、それを悪用するユーザーが現れないとも限らないからだ。

「（そー言う仮説が出て来た時点で、『既にその実例は存在している』ってことだろーかな）」

今のところ表沙汰になっていないだけであって、ELダイバーを利用した犯罪行為は既に起きているだろう。

もしそのようなことが発覚、表沙汰になれば、ELダイバーが犯罪の引き金になるとして、GBNそのものがストップになりかねない。

「……オレ達が見てねーところで、ジルがそんな問題に巻き込まれてなきやいーんだが」

いくら保護局に保護されているとは言え、100%安全とは言い切れない。今はそれを頭の片隅に置いておくとして、残る朝食を掻つ込むことにした。

フオースネストに着いた。

着いたのはいいが、誰もいない。

「いないなあ……」

いつもなら夕方頃か、早い時でももう少し後くらいになるのだ、こんな早朝では誰もいないのも致し方無いか。

フオースネスト内を見回してみる。

最初は、無機質な壁を囲んだだけの場所だった。

だがそれも、少しずつ変わっていった。

無機質な壁には壁紙が貼り詰められ、固い椅子やベッドは柔らかいものに取り替えられ、ソファアーには一抱えくらいの大きさのあるテイペアが鎮座し、その近くには、全身真っ白な装甲の隙間に赤く光るパーツが埋め込まれたー確か『ユニコーンガンダ

ム』のPG（パーフェクトグレード）だ、とコーダイが言っていた気がする。

テディベアに手を伸ばすと、ぎゅっと抱きしめてみる。

「もふもふ」

もふもふ、もふもふ、と連呼しながらソファーに寝転ぶ。

しかし、寝転んでしまったのが運の尽きか、目の奥から強烈な眠気が襲い掛かってきた。

「もふもふ、もふもふ、もふもふ……」

眠りが浅かったこともあって、抵抗する間もなく、睡魔に意識を呑み込まれた。

テディベアを抱きまくらのようにして、もふもふと二度寝に入った。

「すうー……くうー……すうー……くうー……」

何のためにフォースネストに来たのかは、既に忘れていた。

自宅である海沿いの団地から、通学路である駅前近くまで来たところで、ハバキリとテラスは見慣れた姿を改札口に見つけ、一旦足を止めた。

通学定期をカードリーダーに翳して改札を潜って来たのは、セアとその親友のカナデだった。

「あ、ハバキリくんおはよう」

「ん、アメノくんだね」

セアは柔らかい笑みを、カナデはいつものぼんやりした顔を向けてくる。

「おー、セアさんにクラサカ先輩、おはようございます」

ハバキリはいつも通りに挨拶を返すが、テラスは向こうの二人と兄を見比べるばかりで挨拶を返そうとしない。

その理由を、ハバキリはすぐに察し取った。

「……あ、そーか。テラスは初対面だったな」

テラス自身も、高等部では有名人のセアのことは一方的に知っているのだが、どう挨拶をすればいいか分からないのだろう。その相手が三つも上の先輩なら尚更だ。

セアも、ハバキリのその言葉を聞いて次に何を言うべきかの、空気を読む。

「ハバキリくん、そつちの子は？」

挨拶させやすいように、誰なのかを訊ねるセア。

それを待っていたように、ハバキリはテラスに目配せし、テラスは佇まいを整える。

「初めましてホシザキ先輩。わたしは、妹のアメノ・テラスと言います。いつも兄さんがお世話になっております」

深々と頭を下げ、社交辞令を述べるテラス。

「あ、妹さんなんだね。ハバキリくんには妹がいるのは前から聞いてたけど……と、私は高等部一年の、ホシザキ・セアです。私のことは、ハバキリくんから何度か聞いたことがあるかな？」

「はい、高等部の一年生に、才色兼備で非の打ち所も向かう所の敵も無い人がいる、とは聞いています」

自分が聞く限りのことを連ねるテラスに、セアは困ったように眉をひそめた。

「……新一年生にまで過大評価されてるよ、私」

「セアは自己評価が低過ぎるからね。それが一部の連中から反感買ってるって自覚無いでしょ」

いつ誰かに命を狙われるやら、とカナデは嘆息をつく。

「おっと、私も妹さんにご挨拶だね。同じく高等部一年のクラサカ・カナデだよ」

「はい、よろしくお願いします」

向き直るカナデに、テラスは挨拶を返す。

そう言えば、とカナデはテラスの顔をまじまじと見つめる。

「今年の中等部一年の女子に、スポーツ万能の大和撫子がいると聞いたことがあるけど……」

「……君のことだったかな」

「……誠に不本意ながら、わたしのことらしいです」



スポーツ万能の大和撫子、聞いてテラスはセアと同じような顔をする。セアとテラスの顔を見合わせつつ、カナデはハバキリにも目を向ける。

「成績最優秀の超絶美人な先輩と、スポーツ万能の大和撫子な妹……その両方を相手取るアメノくんは、どこのハーレム系ラノベ主人公かな？」

「……あ、すいません、電車が通り過ぎてよく聞こえなかったからもう一回言ってもらっていいですか？」

「典型的な難聴系主人公だね」

長々と立ち話をしていては遅刻しかねないため、とりあえずは歩きながら話すことにする。

とは言え、テラスがまだ先輩二人に接し慣れていないともなれば、必然的にハバキリとセアがGBNに関する話題をするようになる。

「今度は、フリーダムの方も塗装しようと思ってるんだけど、どう言う風にしようかなって」

「それなら、『ガンスタグラム』に投稿されてる作品とか参考に見てみたらどうですか？ダイバーギアのアプリに入ってますから、そこから見れますよ」

二人が楽しそうに会話を交わす傍ら、テラスとカナデは置いてけぼりだ。

「早速二人だけの世界に入ったね」

「これで付き合っていないって言うんですから、世の中不条理ですよ、クラサカ先輩」  
「ん？テラスさんはむしろ、男を選びたい放題じゃないの？」

「ああ言うのは、わたしを自分たちの部に勧誘してイメージアップさせるとか、わたしの作ったお弁当が食べたいとか、わたしを都合のいい何かとしか思っていないような人達ばかりですよ。この間なんか、兄さんのぶんのお弁当を台無しにされました」

「それはいけない、食べ物への恨みはこの世で最も恐ろしい恨みだからね」  
怖い怖い、とカナデはおかしそうに笑う。

昇降口の前で、セアとカナデとは、中等部の校舎と高等部の校舎とで別れ、ハバキリとテラスはさらに途中の階で別れる。

「んじやーな、テラス」

「兄さんは今日もGBNですね？」

「おー、また後で折返し連絡するな」

軽く手を振り合って、ハバキリはその階で、テラスはさらに上の階へ上がる。

さて自分のクラスの教室へと足を向けようとした瞬間、

「羨ましい羨ましい羨ましい……羨まけしからん過ぎるッ!!」

「ドワツジ!？」

突如、背後からコウダイが現れ、ハバキリは驚いた拍子にドムの改造型の名前を口走ってしまう。

「つてなんだコウダイか。Vガンダムもヴィックトリーだぜ」

シャレを効かせながら挨拶をするハバキリだが、当のコウダイは血涙を流さん勢いで迫る。

「なんだとはなんだ！朝っぱらから美少女三人侍らせながら登校とか、お前はどこのハーレム系ラノベ主人公やねん!？」

「それと同じことさつきも聞いたな」

朝から一体何を発狂しているのか、とハバキリはコウダイを諫めようとするが、それは逆にコウダイを逆撫でするだけだった。

「朝からあんなもん見せ付けられたら発狂したくもなるわツ！お前のリアルラックどうなってるんだ!?!いくら課金すりゃそうなるんだ!?!」

「なーお前ら、金で手に入る幸せで満足か……？オレは、嫌だね……」

「ロツクオオオオオオン!!……じゃねえ、誤魔化されるところだった」

「くくく自然に『00』のネタを挟みつつも、コウダイの発狂ショーは続く。

「つうか、お前の人生恵まれ過ぎじゃね？最近のハバキリと一緒にいると、高確率で女の子が近くにいるから目の保養になるけど、その要因は俺にじゃなくてハバキリにあるじゃねえか！」

「おいおいおいおいコーダイ、朝からマジでどーした？テンションおかしーどころか、頭のネジが何本か抜けてんじやねーか？」

いつもコウダイをぞんざいに扱うハバキリだが、この様子ではさすがにちよつと心配する。

「よく考えてみる！家に帰れば大和撫子な妹ちゃんと同棲生活だろ？」

「そりや家族だからな、一緒に住んで当たり前だろ」

「かー！ー！つ、その認識が既に羨ましいッ!!」

手の平を顔に当てながら天を仰ぐコウダイ。

「まままあ？ご両親からいただいた家庭環境だから？それは百歩、いや千歩、いやいや一億歩譲ってもまだ足りねえくらいだが譲るとしよう？」

でもだな、とコウダイはさらに凄味を効かせてハバキリを睨む、否、もはや殺意にすら達しているかもしれない。

「学園のアイドルで、非の打ち所も向かう所の敵もないセアさんを口説き落としたりとなれば、黙ってはおれんッ!!」

「口説いてねーよ、あんぼん」

冷静に切り返すハバキリだが、今のコウダイには効果が無い。

「しかもつ、そのセアさんの隣にいるクラサカ先輩だって、なかなかの美人だろ!? 毒舌クールな先輩属性なんて、DMのヤロー共からしたら女神そのものだぞ!」

「知らんがなそんなもん」

毒舌クールなのはハバキリも認めるところだが、マゾヒストではないので、女神かどうかを聞かれても反応に困ったりする。

「それどころかつ、リアルだけに飽き足らずつ、GBN上でも女の子を増やしていると来た! ジルちゃんとサツキーって言う実例がある以上つ、知らんがなとは言わせんツ!」

「それこそ知らんがな。つか、GBNのフレンドもカウントされんのかよ。そこまで行くとアウトな気がするぞ」

「ーそのジルは今、自分達のフォースネストでもふもふと二度寝していることなど露知らずー」

「いいか! 非の打ち所も向かう所の敵も無いパーフェクト女子高生、ホシザキ・セアさんと、その親友のクラサカ・カナデ先輩に全幅の信頼を寄せられ!」

「そこまで信用されるとは思わねーぞ」

「その上! スポーツ万能で家庭的な大和撫子、アメノ・テラスちゃんとは実の兄妹と言う

「親密な関係であり！」

「妹を過大評価されると、兄としては複雑だな」

「そして！健康的なヘソ出しミニスカギャル系ダイバー、サツキーを女装と言うアブノーマルな手段で釣り上げ！」

「あらぬ誤解をされそーな言い方だなおい」

「挙げ句の果てには！純粹無垢で穢れを知らぬ神秘的なELダイバー、ジルちゃんには小動物のように懐かれる始末！」

「もーオレは何を言ったらいいーのか分からん」

「な？」

「な？つてなんだよ」

ポン、とコウダイの手がハバキリの肩に乗せられる。

そして、声のトーンを落として真顔になる。

「お前、その内誰かに後ろから刺されてもおかしくねえぞ」

「真顔で恐ろしいことを言うな、シャレにならん」

この学園内では良い意味でも悪い意味でも目立つハバキリにしてみれば、それこそシャレにならない。

背中にまな板でも仕込んでおこうか等と本気で考えていると、予鈴のチャイムが鳴り

響いたので、二人は急いで教室へ向かった。

また夢を見ている。

夢を見ていると言う自覚がある。

けれど、夢と言うにはよく分からない世界。

泡沫のようなものに包まれた光景、それが無数に浮かぶ。

笑ったり、喜んだり、怒ったり、悔しがったり、悲しんだり、泣いたり……

これらはきつと、誰かの思い出なのかもしれない。

だが、何故自分はこんなものを見ている、見ることが出来るのだろうか？

ふわり、とそこから動いてみた。

包まれた思い出を掻き分けて、奥へ奥へと進んでみる。

その、奥の先。

そこにいたのは、純白の髪に金色の瞳を持った、自分と同じくらい少女が、何かの映像を見ながら座っていた。

『……………ん？』

こちらに気付いたのか、顔を向けてきた。

「こんにちは」

『……こんにちは。誰だい君は、僕の『夢の中』に入ってきたりして』

不思議そうな目で見てくる。

「夢の中？」

『そうさ。それに、僕の夢に干渉出来るってことは、君もE.L.ダイバーなんだろう？』

「うん。わたし、ジル。あなたは？」

『僕は……、……』

名前を言おうとして、何故かその先が紡がれない。

『……そうだね、”名無し”でいいよ』

「ナナシ？」

ナナシ、と聞いて小首を傾げる。

『”名”前が”無”って意味さ』

「名前が無い？」

疑問に思つてそれを訊ねると、何故か名無しは顔を歪めた。

『昔に名乗っていた名前はあるよ。まあ、名前と言うよりは、”記号”みたいなものだった。……だけど、僕はもうそれを名乗ることさえ許されないことを犯した。名前を無くした……いや、『初めから名前なんて無かった』』



「……」

その”歪み”には、深い悲しみの念が浮かんでいる。

それを見て、エミルにやってあげたように、頭をぼんぼんしようと手を伸ばすが、

「ぼんぼ……あれ？」

するり、とぼんぼんしようとした手がすり抜けた。

『ごめんね、僕には肉体が無くて、”姉さん”の心の中に”魂(データ)”を残してもらっているだけなんだ。昔持っていた肉体は、自分で壊してしまったからね』

何度ぼんぼんしようとしても、すり抜けるだけ。

「……ぼんぼん出来ない」

『まあ、君が僕を慰めようとしているのは分かったよ、ありがとう』

それを見て苦笑する名無し。

ぼんぼん出来ないのは残念だが、大人しく手を引つ込める。

ふと、名無しが見ていた映像が目に止まる。

「何見てるの？」

『戦いの記録だよ、君も見るかい？』

一緒に見るかと聞かれ、頷く。

どうせなら最初から、と名無しは映像を巻き戻した。

それは、宇宙空間におけるガンプラバトルのようだった。  
脈打つ巨大な銀色の塊。

そこから現れる、赤と灰色の巨大なガンプラ。

その一対の巨影に立ち向かうガンプラ達。

赤と黒の鎧武者。

桜色の姫武者。

堇色の射手。

血のように紅い狂戦士。

蒼銀の悪魔。

深緑の戦闘機。

巨大な手首をした喧嘩屋。

黒金の騎士姫。

重鎧を纏う青騎士。

棘の生えた紫陽花。

派手な橙色の闘士。

人形を操る黒銀の指揮者。

長大な火砲を背負う白雷。

黄緑に赤を加えた異形の姿。

漆黒の大剣を振るうバカ。

黒マントを翻す変態。

丸腰で様々な技を放つ単眼。

……”何故か”途中で映像がフリーズしたが、すぐにまた再生される。

最後に、銀色の塊が内側から爆発したところで、映像が終了する。

『これが、一年前に起きた戦いだよ』

「ふーん？」

大勢のダイバー達が、巨大な敵を相手に奮戦すると言う動画のようだが、名無しにとっては思い出深くー忘れられない戦いだと言う。

不意に、視界が揺れ始め、名無しの姿が遠ざかっていく。

『どうやらお目覚めの時だね』

「うーん、そうみたい。ばいばい」

手を振ると、名無しも手を振り返してくれた。

意識が眠りから浮上してきた。

「すうー……くうー……すうー……、む……」

本日二度目の起床はティンバアと共に。

「……よく寝た」

軽く臉を擦り、キョロキョロと周りを見回す。

そうだ、ここは自分の寢床ではなく、リヴェルタのフォースネストだったと思い直す。

ティンバアをソファーに戻し、時刻を確認してみれば、ちょうど昼が過ぎたところ。

ハバキリ達ならちようど、「昼飯」や「お弁当」を食べている頃だろう。

セアの丁寧な説明曰く、「ご飯を食べないと人間は死んでしまう」と言う。

だから、この時間帯は極端に人が減る。

自分も彼らと同じような「ご飯」を食べることはある。

しかし、それは必ず食べないといけないものでもない。

食べれば美味しい、食べなくても何でもない。

薄々と分かつているのだ。

自分は『ご飯を食べなくてもいい身体』であり、ハバキリ達は『ご飯を食べなくてもならない身体』であることを。

そして、自分はその『ご飯を食べなくてはならない身体』になることは出来ない。

一部のE.L.ダイバーは、希望すれば現実世界で動けるようになるための処置が施され

るらしいが、今はそれが行われていない。

ELダイバーを排除せよと言う声高に唱える者達にとって、現実世界にまで干渉されるなど我慢ならないことだろう、そのような案件があれば必ず阻止、あるいは妨害に走る。

故に彼らと同じにはなれない。

それでも、

「学校、行ってみたくないなあ」

そう思ってしまうのは、ただの無い物ねだりだろうか。

夢の内容が、すっかり頭から抜け落ちていくことなど気にすることもなく、テーブルの上に鎮座しているプチッガイのガンプラを手に取り、カチャカチャと触り始める。

放課後。

「ハバキリー、GBN行こうぜ」

帰りのホームルームが終わると同時に、コウダイはハバキリーに声を掛けた。

「んよし、行くかー」

あークソ眠いぜ、と背伸びしながらハバキリーは鞆を担ぐ。

教室を出て、階段を降りる最中でも会話は続く。

「セアさんは地元のゲーセンからログインしてるんだっけ？」

「おー、本人がそー言ってたしな」

「じゃあ、俺の方が先に着く感じだな」

一階にまで降りてくると、上履きから革靴に履き替えているテラスの姿が見えた。

「あ、兄さん。と、オオヤマ先輩」

テラスの方も気付いたようで、軽く手を振ってくれる。

「よーテラス、今帰りか？」

「これから、帰るついでにお買い物に行くところですよ。兄さんは、今晩は何が食べたいですか？」

今日の夕食のリクエストは何かと訊ねるテラスに、ハバキリは「そーだなー」と思考を回す。

「先週の水曜はオレのリクエストだったし、今日はテラスの好きなものでいーぜ」

「あつ、じゃあ今日はグラタンにしますね。帰りは何時くらいですか？」

「んーとな、19時くらいだな」

「分かりました。では、わたしはお買い物に行きますね。オオヤマ先輩も、さようなら」

テラスはコウダイにも向き直って一礼すると、踵を返して校門へ向かった。その後ろ姿を見送っていると、コウダイが何故か震えていた。

「どーしたコーダ……」

何事かとハバキリは声をかけようとするが、

「な・ん・だ・よ・今のいかにも「同棲してます♡」的な会話はア！」

何故か逆ギレするコウダイ。

その反応から「あー、今朝の続きだな」と読み取ったハバキリは、それ以上の会話をせずに自分の下足ロッカーを開き、流れるように靴を履き替える。

「さーて、今日は何のミツシヨンを受けますかねー」

そのままそそくさと昇降口を出ていく。

「あっコラー！待ちやがれ！」

コウダイも慌ててその後を追う。

駅前のガンダムベースに着いてもなお、コウダイの呪詛は続く。

「大体なあ、神様は極端なんだよ。モテる人間とモテない人間とできっぱり分け隔て過ぎなんだよ。普通さ、学園のアイドル的な存在と仲の良い妹持ちの男子なんざ、そうそういるもんじゃねえだろ。一人くらい俺に分けてくれてもバチ当たらねえんじゃねえ

の?」

「おいコーダイ、酔っ払ってるんなら水でも買って飲んでこいよ。飲酒運転は立派な犯罪だぞ」

「酔ってねえよ!俺はまだ未成年!お酒は二十歳になってから!」

※日本では間違っても18歳からじゃありません。

「クツソオオオオオツ、俺は不運の星の下に生まれた男だっというのかよ……ッ」  
「知らねーよ、とつととログインしに行こーぜ」

もー付き合ってられん、と吐き捨てながらハバキリはガンダムベースへ入店、コウダイもしょんぼりしながら一歩遅れて続く。

ダイブ先をフォースネストに指定してから、ログイン完了。

さて自分達二人が一番乗りか、とハバキリとコーダイはフォースネスト入室する。すると、意外な人物が一番乗りしていた。

「あ、ハバキリにこうちゃ」

意外な人物……ジルが、ソファアに座りながらプチッガイで遊んでいた。

「お、ジルか。今日は早いな」

「うん、こんにちは。……あ、そうだ」



プチツガイをテーブルの上に戻したジルは、そのままハバキリとコーダイの元へ歩み寄る。

「あのね、えつとね、ハバキリ」

「うん、どーした？」

「えーつと、うーんと、……ほ、欲しいものって、ないかな？」

欲しいものは何か無いかと訊ねられ、ハバキリは目を丸くする。

「急になんだ？欲しいもの？」

いきなりそんなこと訊かれてもな、とハバキリは頭を搔く。

「じゃあ、ハバキリはあとで……こうちゃは、欲しいものとか、ない？」

ジルの視線がハバキリからコーダイに移る。

「えつ、欲しいもの？そりやあもちろん、ジルちゃんがほし……」

「おーつと意図的に足が滑った!!」

コーダイが何か言おうとした瞬間、ハバキリの回し蹴りが彼の脇腹に炸裂した。

「ゴツグ!!」

ジオンの水陸両用MSの機体名と共に、コーダイはフォースネストの壁に叩きつけられた。

「……いや、ジル。世の中にはあー言うのがいるから、迂闊に「欲しいものはない？」

とか訊いちやダメだからな」

「え、でもそれじゃあ……」

「大体、なんで急にそんなことを訊くんだ？ 今日はおれもコーダイも誕生日とかじゃねーぞ」

ジルの思惑が今ひとつ分らないのだ。

彼女は一体何を目的に、欲しいものを訊こうとしているのか。

それを答える前に、また一人フォースネストにログインしてきた。

「二人ともお待たせ。ジルちゃんも、今日は早く来たんだね」

セアがフォースネストに入室してきたのだ。

彼女がやって来たのを見て、ジルの視線が今度はセアに切り替わる。

「あのね、セアは、欲しいものとかある？」

「欲しいもの？」

案の定と言うべきか、セアも何のことかと小首を傾げる。

「なんかさつきから、「欲しいものは無いか」って、おれとコーダイにも訊いてきてるんですよ。……このぶんだと、サツキーとエミルにも同じことを訊きそーですけど」

ハバキリがジルの様子について伝える。

「うん、サツキーとエミルにも訊く」

ジルもそのつもりらしく、素直に頷く。

「んー、それなら、みんな揃ってから話そっか」

セアの提案により、ジルのこの質問はサツキーとエミルが来るまで少しお預けだ。

「ところで、コーダイくんは？」

「オレが”修正”しておきました」

ハバキリが指した方向には、「あーいつててて……」と起き上がろうとしているコーダイの姿があつた。

それから、サツキーとエミルもログインしてきたところで、メンバー全員がテーブルに着く。

司会進行はセアだ。

「はい、と言うわけでジルちゃん、どうぞ」

「はーい」

ジルは椅子から立ち、全員を見回す。

そして、欲しいものは何かを訊くのは何故か話し始めた。

「あのね、わたしは、みんなに「ありがとう」を返さなくちゃいけないの」

ありがとうを返す、と聞いて、ハバキリ、コーダイ、セアは「そう言うことか」と納

得し、まだ訊かれていないサツキーとエミルは「急にどうしたのか」と反応する。

誰かが言葉を出す前に、ジルは続ける。

「みんなに、色んなことをいっぱい教えてもらって、何度だって守ってくれた。でも、教えてもらってばかりで、守ってもらってばかりで、わたしはみんなに何もしてないの」

だから、とその理由を話す。

「だから、わたしはみんなの欲しいものをあげたい。ガンプラに乗って戦えないから、そうじゃない方法で「ありがとう」を返したい」

ジルのその瞳は本気だった。

誰かの欲しいものを手に入れるためなら、それこそ本当に何でもやりかねない、そう感じられる。

コーダイもさつきのような冗談は口にせず、真剣に聞いている。

「みんなの欲しいものを、教えてほしい」

その言葉を最後に、ジルは席に着き直す。

少しの沈黙の後、挙手する者が現れた。

「はい、あたしからでいいかな」

サツキーだ。

「質問に質問を返すようで悪いんだけど。あたしがジルちゃんに何かプレゼントしたいって言ったら、ジルちゃんは何か欲しい？」

逆に自分が欲しいものは何かと訊かれて、ジルはきよんとする。

「え？わたし？プレゼント……サツキーが、「これ」って思ったものなら、何でも嬉しいと思う」

「うん。それならあたしも、ジルちゃんが「これ」って思ったものがいいな」

だつてさ、と続けるサツキー。

「ジルちゃんがあたしに「ありがとう」って伝えたくてプレゼントを贈りたいんでしょ？そりゃね、あたしが「これ欲しい」って言ったら、ジルちゃんはそれを用意してくれるかもだけど……それってなんか、『ジルちゃんの気持ちにつけ込んで』みたいで、あたし的にはやなんだよね」

ジルが感謝の気持ちを込めて贈るものに、自分の欲求を押し付けたくないと言うのだ。

「それにさ、貰うその日まで何を贈るのか分からない方が、楽しみだと思わない？」

「俺もサツキーに賛成だな。ジルちゃんが贈りたいって思うものが一番だと思うしな」

サツキーの意見に、コーダイも便乗する。

そのコーダイに続くように、残るハバキリとセア、エミルも同様に頷く。

五人が五人とも同じ意見であることに、ジルは戸惑う。

「……えっと、ほんとに、わたしが選んだものでいいの?」

本当は欲しいものがあるのに、気を遣っていないかとジルは視線を右往左往させている。

なかなか踏ん切りがつかないようで、それを見てサツキーが再び行動に出た。

「……んじゃあ、欲しい”もの”じゃなくて、”権利”が欲しいなあ」

悪戯を思いついたような子どものような笑みを浮かべながら、ジルに歩み寄る。

「サツキーさん、あんまり意地悪なことはダメだよ?」

セアがサツキーに釘を刺すが、その彼女は「大丈夫ですって」と返す。

「けんり? ってなに?」

権利と言う言葉が分かかっていないジルは、向かってくるサツキーに小首を傾げる。

「それはねえ……えいつ」

サツキーはジルの目の前にまでやってくると、突然両腕を伸ばし、ジルの肩に手を回し、自分の胸に引き寄せた。

「ふえっ」

いきなりのことにジルは目をぱちくりさせながら、為す術なくサツキーに抱き寄せられる。

「名付けて『女の子限定！ジルちゃんをぎゅつと出来る権』のフリーパスよ！」  
「……え、なにそれ」

”ぎゅつと”されているジル本人は、怪訝そうな顔をしている。

「つまりね、ジルちゃんさえ良ければ、いつでもジルちゃんをぎゅつと抱きしめることが出来るってこと」

「あ、私もそれ欲しいな」

セアもサツキーが提案した『女の子限定！ジルちゃんをぎゅつと出来る権』のフリーパスを希望した。

「セアまで？」

自分の想像と違った形の『ほしいもの』を希望されて、ジルは頭に疑問符を浮かべまくっている。

「俺も！俺もジルちゃんをぎゅつと出来る権のフリーパスが欲しい！今すぐ欲しい！」

コーダイが椅子を蹴り倒しながら思い切り挙手するが、エミルにそれを制止された。

「待ってコーダイ、そのジルちゃんをぎゅつと出来る権は、”女の子限定”だよ。男には発行されないらしい」

「じ、じゃあつ、男の子限定の……」

そこまで言いかけたところで、それはサツキーに止められる。

「ブブツ、その権利は法的に認められませーん。越権行為で有罪判決になりまーす」  
「ふざけんな?! 冤罪だ冤罪! 激しく抗議する! おいハバキリツ、お前も一緒に抗議しろ! 抗議!」

バンツとテーブルを叩きながらサツキーに人差し指を向けつつ、ハバキリに同調を促そうとするコーダイだが、そのハバキリは少し考え込むような表情を浮かべている。

「サツキー、そのジルをぎゅつと出来る権のフリーパスは、既に持つてるんじゃねーか? もう一枚同じもの持つてても効果は一緒だろ?」

「あつ、そつちスか?!」

抗議ではなく、ただの意見だった。

ハバキリにそう言われてサツキーも「あそつか」と気付く。

フリーパスなんてものがあるとなかろうと、サツキーはこれからもジルを抱きしめたりするだろうし、わざわざモノとして持つていても一緒だとハバキリは言う。

「二人一人があれ欲しいこれ欲しいって言つてたら、ジルだつて用意するのは大変だろ? だつたら最初に挙げたよーに、ジルが贈りたいものつてことでいんじゃね?」

『女の子限定! ジルちゃんをぎゅつと出来る権』のフリーパスは既に持つているため、重複発行は無効。

ちなみに、男子には発行されないことは法的に決められているので、これも当然無効。



約一名がなおも抗議文を提出するが、『「コーダイを好きにフルボッコ出来る権」のフリーパスを発行させんぞ』とハバキリが脅し止めた。

結論。

「……うんつ、わたしが「これ」って思ったのを、みんなに贈りたい！」

ジルのやる気に満ちた笑顔になったことで、満場一致。

とは言え、今日は元々ミツシヨンを受ける予定だったため、ジルのメンバー達へのプレゼント選びはまた後日だ。

フォースネストからミツシヨンを受注し、そのまま格納庫に移動して出撃する手筈で進む。

ジンライ改、エンハンスドガンダムMK-II、キャノパルド、ガンダムデスレイザー、七星剣士エクシアの五機が格納庫に立ち並ぶ中、セアはジルに声を掛けた。

「ジルちゃんは、今日は誰と一緒に乗る？」

誰の機体に同乗するのかを訊ねられる。

いつもはハバキリかセア、たまにサツキーかエミル。

「んー……」

さてどうするかと、見回すジル。

ふと、先程の『ジルちゃんをぎゅつと出来る権』のフリーパスが発行されなくて、しょんぼりしながらトボトボとキヤットウオークを渡るコーダイを見上げる。

「うん、今日はこうちやにする」

「そっか」

セアとの会話を終え、ジルはコーダイの後を追うようにキヤットウオークを駆け上がる。

しかし、追いついた頃にはコーダイは既にキャノパルドのкокピットハッチを閉じて機体を起動させている最中だ。

しかし、

「待って、こうちやー！」

あろうことかジルはキヤットウオークから跳躍し、そのままキャノパルドの頭部のバイザーに飛び移った。

кокピットの中で、メインカメラをモニターが投影させた瞬間、ジルの顔がどアップで映った。

「どおわあああッ!?!」

当然コーダイは驚愕し、思わずキャノパルドを後退りさせてしまう。

機体が挙動したせいで、ジルは振り払われてしまい、

「きゃっ」

その身体が宙を舞った。

「あつ、ジルちゃっつ、危ねえッ!!」

コーダイは半ば反射的にキャノパルドの左マニピュレーターを伸ばし、床に落ちる前にジルを掌で受け止めた。

それを確認して安堵する間もなく、コーダイはコクピットハッチを開けながら怒鳴る。

「おおいジルちゃんっ、機体に直接取り付いたら危ねえだろー落ちたらどうすんだよ!」

「だ、だつてっ」

キャノパルドの掌で起き上がるジル。

「だつてこうちゃ、急に元氣無くしちゃったから、どうしたんだろつて思つて、心配になつて……」

その元氣を無くした理由が、コーダイの自業自得であることも知らず、ジルはただ純粹に彼を心配していたのだ。

「だから、今日はこうちゃと一緒に乗ろうつて思つて、そしたら……」

「っ……」

コーダイは思わず怒鳴ってしまったことを後悔した。

彼女は自分のことを心配していたと言うのに、何を責めているのかと。

キャノパルドの左腕を引き寄せ、コクピットに近付ける。

「……悪いジルちゃん、怒鳴っちゃまってさ」

「ううん、わたしが危ないことしたから、いけなかった。危ないことしたら、怒られるのに」

今度はジルがしょんぼりしてしまう。

「ああもう、そんなしよげんなって……」

コーダイはキャノパルドのマニピュレーターをコクピットの中へ入れ込む。

「ええと……おうそうだ！」

何とかジルの気分を取り戻そうと、コーダイは声を張る。

「確かに俺は落ち込んだ。でも、ジルちゃんが心配してくれた。その気持ちだけで、俺は十分だ！元氣9900倍だ！」

「……ほんと？」

「ホントホント！ジルちゃんが応援してくれるなら、通常の3倍は頑張れるぜ！切り裂きエドでも月下の狂犬でも黄昏の魔弾でも何でも来やがれってんだ！わは、わははははは!!」

ほとんどヤケクソ気味だが、ジルをこれ以上心配させないために、語彙力の限り元氣

をアピールしまくるコーダイ。

すると、効果があったのかジルの顔に笑顔が戻る。

「うんっ、こうちや頑張れ！ふれえーっ、ふれえーっ、こーうーちやー！」

「……ホッ」

とりあえずジルの元気が戻ったことに安堵するコーダイ。

改めてジルをコクピットに同乗させてから、ハッチを閉じ直し、キャノパルドをハンガーからリニアカタパルトへ下ろす。

カタパルト展開、オールグリーン確認。

「コーダイ、ジル、キャノパルド、行くぜ!!」

最初にキャノパルド、次にジンライ改、ガンダムデスレイザー、七星剣士エクシア、エンハンスドガンダムMK-IIが順次出撃し、蒼空を駆け抜けていく。

今日のミッションもきつと上手くきますように。

ジルは、キャノパルドのコクピットの中でそう願う。

その頭の片隅に、みんなへのプレゼントをどうしようかと考えながら……。

【次回予告】

ハバキリ「元ゲームマスターが逮捕された、か……どーにも嫌な予感とゆーか、きな臭いな」

サツキー「あつ、そのニュース知ってる。なんかね、元ゲームマスターのアカウントの履歴には、不正取引をしたことだけが残ってて、それ以外の更新は無いんだって」

ハバキリ「なんだそりや、怪し過ぎかよ。……こりや、ちよつと気を付けたほーが良さそーだな」

サツキー「……ねえハバキリ、もしかして危険なことやろうとしてる?」

ハバキリ「何もオレがやるとは言ってねーよ。他の奴にしてみたらうだけだ」

サツキー「次回、ガンダムビルドダイバース・スピリッツインテンション

『悪意の矛先』

????「さーて、潜入開始と行きますかねー」

## 18話 悪意の矛先

ELダイバーとは、ニュータイプであるのか？

基本的にGBN上でしか存在出来ない彼らは、ヒトが生まれながらにして遺伝子的に備えられた本能である『種を残す』と言う行為が出来ないとされている（仮にそう言った行為が可能だとしても、胎に命を宿すことが出来るかどうかは不明）。

ニュータイプと言う解釈のひとつ（生粋のアースノイドがニュータイプ能力を開花させた例も存在するため決定的な解釈ではない）である『生活圈を地球から宇宙へと移すことで、宇宙への適応力を身に着けた”人間”』のことを指すにしろ、『種を残すことが出来ない時点で、ELダイバーは人間ではない』

しかし、これまではELダイバーの誕生経路は不明瞭なものであったか、ごく一部の者だけが知らされた、惑星『エルドラ』の存在の仮定と仮説を年々組み上げてきた結果、（100%の証明ではないが）、エルドラの古き民（『古代エルドラ人』と呼称する）が電子的な因子となってGBNに流れ着いたことによって発生するのがELダイバーである……と、されている。

この説の登場によって、古代エルドラ人が我々地球人と同じ生殖機能を持っていると

前提すれば、

古代エルドラ人ⅡELダイバー

古代エルドラ人Ⅱ我々地球人が呼ぶところの『異星人』Ⅱ宇宙人Ⅱ宇宙に適應した人

類Ⅱニュータイプ

ELダイバーⅡニュータイプ

と言う図式は成り立つ。

その一方で、これまでにダイバー達の間で囁かれてきた『ELダイバーはガンブラへの想いの集積によって誕生する存在である』と言う仮説は否定されることになる。

電子的な因子がネットワーク上に流れ着くことでELダイバーが誕生するのなら、ガンブラへの想いがデータ化するなどと言うのは戯言だ、と一蹴される。

では、システムにガンブラがスキャンされる際に生じる1/1000000以下の余剰データとは何なのか、と言う疑問も浮上する。

その余剰データに古代エルドラ人の因子が”着床”することによって性別や体格、容姿などが形成されると仮定すれば、多少強引ではあるが一応『ELダイバーはガンブラへの想いの集積によって誕生する存在である』説は残る。

だが、現存するELダイバーの大半以上は、自分が古代エルドラ人であると言う記憶は無い。



これは、余剰データに因子が”着床”する際に、記憶や感情と言ったデータ化出来ない情報は弾き出されてしまう可能性があり、「無い」と言うよりは「失われている」のが適切かもしれない。

現に、GBN史上『最初にその存在が認められた』フォース・ビルドダイバーズのサ  
ラに、エルドラに関する記憶が無いことが証明している。

記憶の有無に関わらず、地球以外の場所で文化的な生活が行われていたことが驚嘆に  
値すべきだろう。

地球以外の場所など、我々地球人にしてみれば、全てが真新しいものだ。  
地球人は、未だ重力から離れることは出来ない。

しかし、重力の外への進出は進みつつある。

ELダイバーという名のニュータイプは、その架け橋、あるいは水先案内と言えるの  
ではないだろうか。

いつの日にか訪れる、人が宇宙に住む時代の、先駆けたる存在として。

「……と言う論文を運営に提出しようと思っ  
ているのだが、姐さんはどう思う？」

トラちゃんは、コンソールに打ち込まれた論文をバーテンドーに見せていた。

「個人的に興味深い論文ではあるけど、ちよつと仮定と希望的観測が多いわねえ。特に、古代エルドラ人の辺りをもう少し掘り下げないと、伝わりにくいかも」

「ふむ、やはりそうか。可能ならば現地調査を行い、現地住民や、かの地に棲む聖獣なる存在に話を聞きたいところだが、ままならんな」

バーテンダーからの意見を聞き、提出はまだまだ先になりそうだとトラちゃんはコンソールを引つ込める。

「……と言うか、トラちゃん？」

「どうした姐さん、ご覧の通り俺は怪しい奴だが、嘘はつかない誠実な男でもあるのだぞ？」

怪しいのに誠実な人間などいるのだろうか、と言う言葉を飲み込み、バーテンダーは訝しげに目を細める。

「惑星エルドラが実在するとか、エルドラの古き民の仮定とか、なんで知ってるのかしら？それ、本当にごくごく一部の人間にしか知らないはずなんだけど」

バーテンダーが知る限りならば、それはGBNの開発陣やベータテスター、しかもその中でも一握りぐらいしか知らないはずである。

いくらトラちゃんの持つ情報網が並大抵のものではないにしろ、現実世界の個人の口頭でしか語られなかったそれを、何故知っており、さらに深く解釈出来るのか。

「フツ、蛇の道は蛇、と言うわけだ」  
やはり、胡散臭い笑みを浮かべるだけのトラちゃんであった。

ジルの、ハバキリ達に『「ありがとう」を返す』ためのプレゼントの用意が始まってから一日が過ぎた。

彼女がセアに付き添ってもらいながら訪れているのは、シテイエリアのアクセサリーショップだ。

多種多様なアクセサリーの販売、買い取りはもちろん、エリアに赴いての採集やミッション報酬などで入手可能な、アクセサリーの素材を消費することで、販売されていないアクセサリーを生産したり、オリジナルのアクセサリーを作成することも可能である。

ジルの目的は、オリジナルアクセサリーの作成だ。

この事はサツキーにも相談しており、『リヴェルタのメンバー達をモチーフにしたアクセサリーを作りたい』と語った。

「えっと、ハバキリが暗い青、セアが白、こうちやが赤、サツキーが緑、エミルが明るい青……蒼？それとわたしがピンクで……」

メモ帳に記した内容を復唱しつつ、ジルはオリジナルアクセサリー作成のヘルプ画面とにらめっこする。せつかくということもあって、自分の分のアクセサリーも作るそう  
だ。

セアはその様子を優しく見守りつつも、自分のコンソールに表示させている図面を引く。

フリーダムガンダムをベースにどう改造するか、塗装するかを少しずつ描き進めているのだ。

その図面の端には、『Gーアルケイン フルドレス』や『ウイングガンダムゼロ』などの画像が貼り付けられているのは、これらを参考に行っているためだ。

「（本体のホワイトと、こっちのホワイトは別のものに塗り直して……あ、こっちも組み込めるかも？）」

別のラフ画が新規で描かれようとしたところで、

「セアあ」

ジルの困ったような呼び声が聞こえたので、そちらに意識を向け直す。

「何か困ったことがあった？」

「うん、ハバキリの分のアクセサリーを作ろうとしたらね、えーっと、こくよーせき？コレが足りないって」

そう言いながらジルが画面を見せてくるので、それを見てみると、どうやら素材アイテムのひとつである『黒曜石』が足りないのだそうだ。

「それ、私がつてるかも。ちよつと待っててね……」

セアは自分のアイテムボックスを開き、素材アイテム一覧を確認する。

「黒曜石、黒曜石……あ、あった。これ、ジルちゃんにあげるね」

「いいの？」

「うん。今は使う予定が無いから、ジルちゃんが欲しいならその方がいいと思うの」

はいこれ、とセアは黒曜石をジルに送る。

ピコン、とジルのコンソールの端にアイテム受け取りのアイコンが表示されたので、それを受け取るジル。

「うんっ、ありがとセア！」

受け取ったばかりの黒曜石を消費して、早速アクセサリー作成に取り掛かる。

一方、フォース・リヴェルタのフォースネストには、ハバキリとサツキーの二人だけがいる。

コーダイはソロプレイ専用のミッションに赴き、エミルは以前のフォース仲間と会いに行っているようだ。

ソファアーに腰掛けながら、ハバキリはGBNのオフィシャルサイトのニュースを閲覧していた。

「……………」

読み進めば読み進むほどに、ハバキリの表情は険しいものになっていく。

「難しそうな顔して、何見てるの?」

そう声を掛けながら、サツキーはハバキリのコンソールを横から覗き見ようとするので、ハバキリは少しだけ身体の位置をズラして見せてやる。

そのニュースの内容とは、昨日の朝にもテレビにも出ていた、元ゲームマスター・カツラギ氏の逮捕についてだった。

「昨日の朝のニュースにも出てた。なーんかちよつと怪しくてな……………」

「あつ、これあたしも知ってる」

サツキーもこの事を知っているようだ。

「昨日の夕刊だとね、端末とかアカウントの更新履歴には、不正取引をしたことは確かに記録されていたんだけど、それ以外の他の更新はされてなかったらしいね」

「……………」

不正取引は履歴に残っていて、それ以外の更新は無かった?

ハバキリは険しくしていた目をさらに訝しげに細めた。

「……それな、逆に言えば『不正取引したこと』だけ」は履歴に残っていた』ってことにならねーか？」

だけ、の部分を強調するハバキリ。

そう言われて、サツキーも的を得たように目を見開く。

「でも、なんでそれだけ履歴を残してたんだろ？ つか、都合の悪いことを隠したいなら、それを一番最初に消さなきゃいけないはずだけど……」

「……さーな、お賢いお偉いさんのお考えは、オレ達一般市民の理解の範疇には及ばねーんだろ」

一瞬だけ考えるような間を置いてから、ハバキリは吐き捨てた。

その一瞬だけ、すらもサツキーは聞き逃さなかった。

「ハバキリ……あんたもしかして、危険なこと考えてない？」

それを聞いて、ハバキリの指先が僅かに揺れた。

「女のカンってこえーな。ま、心配しないでいーぜ。それをするのは『オレじゃねーから』」

今ひとつ納得出来てなさそうなサツキーを尻目に、ハバキリはオフィシャルサイトを閉じて、ログアウトのコマンドを選択する。

「んじゃ、今日はこの辺でお暇するぜ。妹が待ってるんでな」

「うん、またねー」

軽く手を振り返しつつ、ハバキリはログアウトしていった。

サツキーは、先程までハバキリがいた位置に座り直し、背もたれに背中を預けた。

「ハバキリ……?」

なんとなく、ハバキリの発言の裏を考えて。

翌日。

ハバキリは昨日に考えていたことを行動に移そうとしていた。

コウダイとセアには「ちよつと野暮用があるから今日はパス」と、テラスには「今日もGBNするから帰りは夕方頃」と、それぞれ内容の異なるメールを送る。

一度自宅に帰宅すると、自転車の鍵だけ取るとすぐにまた出る。

今日もGBNにログインするのは変わらないが、今日は自転車で行ける距離にあるホビーショップからログインするのだ。

いつもの駅前のガンダムベースではなく、わざわざそちらに赴いてまでログインするには理由があつた。

ハバキリは入店する前にダイバーギアを開き、GBN上で活動するためのアバターの



情報を書き換え、それを完了させてからログインしていった。

短めの金髪に、青い瞳の、スレンダーな身体付きの少女ダイバーが、エントランスロビーにログインしてきた。

「さつて、と……」

それはハバキリーではなく、『シャルル』だった。

そう。

今からシャルルは『危険なこと』をやるうとしている。

それに他の仲間を巻き込むわけにはいかない。

だから『ハバキリーではない別の誰か』を装って行動に出たのだ。

ダイバー情報をもう一度確認してから、格納庫へ移動する。

格納庫に鎮座しているのはもちろんジンライ改ではなく、SDのシャア専用ザクだ。

素組みにスミ入れだけだった状態から、しっかりとした塗装改造が施され、以前のモノと比較しても格段に性能が高まっている。

だが、ここにあるのはシャア専用ザクではなかった。

シャア専用ザクと向かい合う形で、何故かガンダムデスレイザーまでハンガーにいる

のだ。

「ッ」

アクティブクロークに包まれたその姿を見て、シャルルは思わず足を止めた。

「それをするのはオレじゃねーから」って、『そうじゃない誰か』が危険なことするってことでしょ？」

不意に、ハンガーの陰から聞き慣れた声が聞こえたと思えば、『翡翠色の髪と魔法少女のコスプレをしたダイバー』が現れた。

「チツ、なんでバレてんだよ……」

その姿——サツキーを見て舌打ちするシャルル。

「それくらい分かるわよ。わざわざ「オレじゃない」って言い方までされたらね。……  
コーダイやセアさんじゃ分からなかったと思うけど」

ハバキリのことを最もよく知るのはコーダイだが、『シャルルのことを最もよく知るのは』サツキーだ。

まあそれは置いて、とサツキーはシャルルの元へ歩み寄る。

「危険なことだって分かっていたら、尚更一人じゃ行かせられないって。あたし一人だけ

でも、道連れにしてつてよ」

「……しゃーねーな、好きにしろ」

ハバキリは敢えて素っ気ない言い方をしたが、内心ではありがたいと思っていた。

ついでに言えば、隠密行動に適したガンダムデスレイザーの性能は、今回の”危険なこと”には最適だった。

「じゃ、好きにしよっかな。……それで、どこを探るとかって目星はついてるの?」

「ある。迂闊に喋るわけにはいかねーから、とりあえずオレについてきてくれ」

「おっけ」

シャルルはシヤア専用ザクに、サツキーはガンダムデスレイザーにそれぞれ乗り込んで出撃を開始する。

「ハバ……シャルル、ザク出るぞ!」

「サツキー、ガンダムデスレイザー、出撃するよ!」

リニアカタパルトから打ち出され、デイメンシヨンの蒼空を翔ぶ二機。

シャルルのシヤア専用ザクがサーバーゲートへ進入し、その後をガンダムデスレイザーも続く。

シャルルが向かった地点は、エスタニア・エリアの『ホンコンシティ』だった。

市街地に被害を出さないように、港とは反対側の郊外で待機する中で、ガンダムデスレイザーはビームシザーの柄でシヤア専用ザクと接触通信を行う。

「ここって、あのフォース『虎武龍』の縄張りでしょ？ 何かあるって言うの？」

サツキーは、ハイランカーが目を光らせている場所で何かが起こるとは思いにくい、と言いたいようだが、シャルルは視線を周囲から切らずに応える。

「ミツキってダイバーは知ってるだろ？ そいつの伝手を通じて情報と、助っ人を呼んでもらった」

「ミツキーさんのことは知ってるわよ。でも、助っ人って？」

「そろそろ待ち合わせ時間だから、もう来るはずだ」

時刻を確認しつつもう少しだけ待っていると、水平線の向こうから輸送機が飛来してくる。

シャルルがその輸送機の識別照合を確認し、シヤア専用ザクの右手を振る。

輸送機は着陸しないようで、格納庫から一機のガンプラが出撃してきた。

「すまないねえシャルルさん、ちよっと待たせたかな」

モノトーンカラーのゲイレール。

通信を繋いできたのは、この間にハバキリ達と交流試合を行ったフォース・フラワー

ズ二軍のリーダー、ナオエだった。

「いえいえ、こつちも来たばつかですから」

シヤア専用ザクが一步前に出て応じる。

ふと、ゲイレールの頭部がガンダムデスレイザーに向けられる。

「ん、そつちの死神みたいなガンプラは、確かりヴェルタの……」

ナオエが思い起こそうとしている途中で、サツキーも通信に割り込む。

「どうも、お久しぶりでーす。あたし、”シャルル”のフレンドのサツキーって言います。無理言つて付いてきちゃいました」

話の口裏を合わせるために、シャルルのフレンドと言うことを先に伝えておく。

「ああ、やつぱりリヴェルタのメンバーさんだったね」

久しぶり、とナオエが返すのを見てから、シャルルは話を切り出す。

「ナオエさん、久しぶりの再会のところ悪いんですが、早いところ始めましょ。せつかく足取りを掴んだのに、逃げられたんじや意味がない」

「つとそうだったね。早速、”仕事”に入ろうか」

ナオエのゲイレールは、シヤア専用ザクとガンダムデスレイザーに接触通信を行う。

「今、このエスタニア・エリアの港に、”不審な貨物船”が停泊し、積荷を下ろしている」  
声の量とトーンを落とした低い声に、シャルルは何事も無さげに、サツキーは背筋を

強張らせる。

続いて送信されたデータに、つい数分前に撮影された画像が映し出される。

そこに映っているのは、真つ黒な船体に、ドクロマークがデカデカと主張する黒い幌、やたらと刺々しく趣味の悪そうな装飾が過剰に施されている。

「貨物船、ってかどう見てもコレ『海賊船』じゃないですか」

サツキーがそう言うのは尤もらしいことだ。

これのどこが普通の貨物船に見えるだろうか。

「そう、海賊船だね。もちろんGBN上では、艦船型のフォースネストもあるから、これはそのひとつだろう。歴史の授業を受けているなら分かると思うけど、中世期の海賊は、海軍に偽装したりして悪事を働くことが多々あった」

ナオエが補足する途中で、シャルルがその言葉の裏に気付く。

「海軍に偽装した海賊がいるなら、『海賊に偽装した海軍』……この場合なら、素行の悪いプレイヤーのフリした運営がいる、と?」

シャルルのその答えに、ナオエは頷いた。

「うんむ、シャルルさん正解。まあ普通、運営なら「私達は運営の者である」と主張しておけば、誰も手を出そうとはしないんだけど……『運営の者であると公言出来ないような、何か後ろめたいことを腹に隠している』とは思わないかな?」

それを聞いて、サツキーは何のことかと小首を傾げ、シャルルは「ま、そんなところだろ」と呟く。

「この海賊船も気になるけど、それよりも気になるのが、積荷の方だ」

「……その積荷が、『後ろめたいこと』ってヤツですか？」

サツキーは訝しげに、画像の端に見えるコンテナを拡大する。

見た目はただの貨物コンテナだ。

「恐らく。僕が気にしてるのは積荷の方……と言うよりは、その積荷の宛先かな」

荷物の中身が後ろめたいのなら、当然受取主も何かしら後ろめたい事情を抱えているものだ。

「送り先そのものを調べたいけど、向こうも警戒はしてるだろうねえ。そこで今回、シャルルさんに頼もうとしたのは、海賊船に攻撃を仕掛けての陽動だ」

「オレが陽動を掛けて、ドンパチで混乱している内にナオエさんが潜入するって予定を立ててたけど、方向修正だ」

シヤア専用ザクのモノアイが、ガンダムデスレイザーに向けられる。

「この陽動は、サツキーに任せたい」

「あたしが？」

「デスレイザーにはミラージュコロイドがあるし、ビームシザーは水中でも使える。

オレのザクよりも海での戦闘に向いてるって理由だ」

ターゲットを急襲し、攪乱させるのなら、ステルス機能を備えたガンダムデスレイザー、その使い手であるサツキーの方が向いているとシャルルは言うのだ。

「もちろん、適当なところで切り上げて撤退してくれた方が、足が付かなくて助かる。やってくれるか？」

「つまりあたしは、海賊船にちよっかい掛けて荒らすだけ荒らしたら、トンズラするってことね。ん、分かった」

サツキーもその理由に納得したようで、頷く。

「なら、最終確認だ。サツキーさんが陽動を仕掛けて、その隙に僕とシャルルさんが内部に潜入、可能な限り調査した後はすぐに逃げる。合流地点は、ポイントX01Dでいいかな」

「了解」

ナオエが確認を纏め、それに了解を返すシャルルとサツキー。

「よし……作戦開始だ」

同時に、サツキーのガンダムデスレイザーはアクティブクロークを閉じてミラージュコロイドを起動、その姿が風景に溶け込む。

シャルルとナオエは、それぞれシャア専用ザクとゲイレールから降りて、目標地点へ



向かう。

シャルル、サツキー、ナオエの三人が作戦を開始した頃。

海底スレスレを蒼いガンプラと、それに牽引してもらう形で『桜色のSDガンダム』が通過していた。

『なんかごめんね、ミーシャくん。アスクレプオスが水中活動に向いてるからって、わざわざ運んでもらって』

『いいんですよ。ガンプラひとつ運ぶくらい、何ともないですから』

その蒼いガンプラーガンダムアスクレプオスシャードが、アイカメラを海面へ向ける。

同時に、アクティブソナーが大型の艦船の反応を捉える。

『いました、”例の荷物”を積んだ海賊船です』

『サヤ先輩の戦術予報が正しいなら、ちようど今積荷を降ろしてる頃かな？』

ガンダムアスクレプオスシャードが捉えているデータが共有される。

今は近付き過ぎない程度に様子を見るべく、ガンダムアスクレプオスシャードはパイソクローをアンカー代わりに海底に突き刺して、機体を固定する。

『攻撃開始のタイミングは、ユイさんの狙撃が合図でしたね』

『うん。ユイちゃんもそろそろ時間合わせしてると思うし……』

気楽そうに会話を交わす二人だが、不意にアクティブソナーが別の反応を捉えた。

『ソナーに別の反応？これは……MSです』

『海賊船に近付いてるみたいだけど、護衛の随伴機とかじゃないよね？』

それが想定外のイレギュラーだと気付くのは、この直後であった。

海賊船に偽装した貨物船は、突然の激震に襲われた。

「爆発!? 索敵班は何をしていた!」

船長が怒鳴り散らす中、すぐに乗組員達が状況把握を急ぐ。

「所属不明機による攻撃です!」

「アンノウン、既に本船に取り付いています!」

「第三カーゴブロック大破、損傷箇所から浸水を確認!」

「所属不明機、ガンダムデスサイズヘルがベースである模様!」

『こちら第三格納庫! 浸水が激しいぞ、損傷箇所のブロックを切り離して隔壁閉鎖だ、急げ!』

『MS隊は迎撃だ！今すぐ出せるアंकシヤを全部出せって言うてんでしょ！』

『敵機の反応なんかどこにも無かっただろ!?なんでいきなり出てくるんだ!』

『バカ野郎！ステルス持ちの奴に決まってるんだろ!』

『こつ、こちら第二格納庫つ、あ、あくまつ、悪魔が出た』

『おおいつ、こつちは積荷降ろしてる最中だぞ!?ええいもういい中止だ中止!タラップを上げろ、積荷を攻撃されたらたまらん!』

あちらこちらで矢継ぎ早に報告と指示と怒鳴り声が飛び交うブリッジの中で、船長は歯軋りで怒りを抑えようとする。

「ゲリラどもめ……さすがに笑えんぞッ」

所属不明機——サツキーのガンダムスレイザーは、ミラージユコロイドを展開した状態で海賊船に接近、カーゴブロックに取り付いてからミラージユコロイドを解除しつつアクティブクロークを開き、ビームシザーで隔壁を一閃。

船体を穴だらけして浸水させ、水害を与えようものだ。

「さつてと、ちよつと派手に行こうかしら、ねっ!」

サツキーはアームレイカーを引き上げ、ガンダムスレイザーを上昇、敢えて姿を晒

すように海賊船の甲板に取り付くと、対空砲や主砲を片っ端からビームシザーで破壊していく。

暴れ始めてから数十秒が過ぎた頃、破壊し切れていない格納庫から、シャッターを無理矢理押し開けながら這い出るように、丸みを帯びた上半身と鋭角な下半身混ぜ合わせたような青緑色の機体――アークシヤがMS形態で一機、また一機と現れる。

ビームライフルでは船に被害を与えてしまうため、ビームサーベルで排除しようとするガンダムデスレイザーに迫る。

アークシヤを見据えつつ、サツキーはモニターの端に映る港をちらりと目を向ける。「MSも出てきたし、後は逃げよっかな」

これだけ船に被害を与えておけば、少しの間くらいは修復に時間を割かなくてはならないだろう。

帰る前に火器のひとつでも潰しておこうかと算段を立てるが、

不意に明後日の方向からアラートが鳴り響く。

「ロックされたっ?」

サツキーは慌ててガンダムデスレイザーのアクティブクロックをクローズモードに切り替え、直後に彼方から放たれたビームが黒翼に直撃する。

高密度のパーツの上から耐ビームコーティングが施されているアクティブクロック

越しにも、ビリビリとした振動がコクピットのサツキーにも伝わる。

詳細は分からないものの、射程も出力も並大抵のビーム兵装ではないことだけは確かだろう。

「んツ……別働隊のスナイパー？」

万が一を想定していたのか、遠距離から狙撃出来る者を控えさせていたのだろう。であれば、なおのこと長居は無用だ。

ガンダムデスレイザーはそのまま海に飛び込もうとするが、その前に一際大きく海賊船が揺れた。

エンジン部が炎上し、船そのものが傾き始め、アंकシャ達は震動に足を取られて転倒したりバランスを保とうと四苦八苦している。

明らかにこの船を狙った攻撃だ。

「っ、今度はなに!？」

それはつまり、『自分以外にもこの海賊船を狙う第三者がいる』と言うこと。その『第三者』も、すぐに海中から飛び出しては甲板に着地してきた。

『武者飛駆鳥』をベースにしているらしい、桜色のSDガンダム。

後頭部から伸びる黒髪のようなバインダーが、海水に濡れて艶やかに光る。

機体銘『麗桜姫頑駄無』

『ちよつとちよつと、これどう言う状況?』

そのダイバー……『ハルナ』は、アंकシヤ部隊とガンダムデスレイザーを見比べては、この事態を前に躊躇する。

港がパニック状態に陥っている最中、シャルルとナオエはそのどきどきに紛れつつ、コンテナの中身が運ばれている施設へ接近している。

誰かに気付かれないように細心の注意を払う二人だが、外の騒乱のせいではなにか、いとも容易く施設内へ潜入出来た。

足音を極力立てぬように、壁を背中にしつつ、気配も殺しながら進む。

「シャルルさん、銃の腕前に自信は?」

懐から拳銃を抜きつつ、ナオエは目線だけをシャルルに向けつつ、白兵戦の心得はあるかと遠回しに訪ねる。

「対MS砲があれば、ザク一機をぶっ飛ばせるくらいには」

シャルルもアイテムボックスからアサルトライフルを取り出し、弾倉をセットしつつ『銃の腕前』を答える。対MS砲が銃の腕前に含まれるのかは些か疑問だが。

「そりゃ頼もしい。……行くぞ」

ナオエのトーンの低い声に肯き、さらに施設の奥へ進む。

裏口の窓から入ってすぐは、何の変哲もないオフィスのようであったが、奥へ進むほどに照明器具の数が減り、まるで夜中の病院とさえ思える。

「……………」

ふと見えた光景に、シャルルは足を止めた。

「どうした？」

ナオエもすぐに振り返って戻ってくると、シャルルの視線の先を見やる。

『SHIELD』と言う文字が赤い照明越しに見える。

その下には、鍵の掛かったドア。

「ここ、なんか怪しいですよ。普通、『シールド』なんて単語、ドアの表示に使わねーでしょ」

「ふむ……………」

どのみち、時間もあまりない。

ナオエはドアの鍵穴に拳銃を押し付けると、一発、二発と撃ち込む。

ガギンツ、ガギンツ、と言う耳障りな音が二回響き、ナオエは力任せにドアノブを回し開けた。

鍵を壊したのだ。

ドアが開かれると同時に、シャルルが油断なくアサルトライフルを構えつつ中を覗く。

ドアを開けたらいきなり撃たれた、なんてことはなく、それでも油断なく辺りを見回す。

ナオエも拳銃を構え直しつつ続いてくる。

無機質な壁に張り巡らせるように設置された、巨大な試験管——カプセルだろうか。

それを見たシャルルは、

「ツツツツツツツ?!?!」

声を上げそうになった口を抑えた。

ナオエも、その光景を見て絶句する。

培養液か何かに満たされたカプセルの中に、『ジル』がいる。

しかも——『それと同じもの』が、壁中に。

言ってしまったば、

『たくさんのジルのカプセルに閉じ込められて  
いる』のだ。



「なんな、んだよ、こ、れ……」

何故ジルがここにいる？

何故ジルと全く同じ容姿をしたE.L.ダイバーがこんなにかくさんいる??

ジルを閉じ込めているこのカプセルはなんだ???

どうしてこんなものがこんなところにある???

一体どんな目的があつてこんなことをする???

????????????????????

シャルルーアメノ・ハバキリに書き込まれる情報が脳のキャパシティを超えそうに

な  
た時、

「……シャルルさん、ここまでにしよう」

ナオエがシャルルの腕を掴むと、ぐいっと引つ張り上げた。

「脱出し、合流予定地点に向かう」

そのままシャルルを引きずるようにして、その場を後にしていく。

幸い、誰にも見つかることなく施設から脱出することが出来たシャルルとナオエだが、まだ港の方から爆発などの戦闘音が聞こえてくる。

「サツキーさん、まだ戦っているのか？」

ゲイレールを立ち上げつつ、ナオエはリーダーに目を通して現状把握を急ぐ。

「囲まれて逃げられなくなってるかもしれない。一度様子を見にいつて、サツキーがいるならそのまま救出、いなけりゃ反転して合流予定地点に向かいましょ」

混乱しかけていたシャルルだが、戦闘になる可能性が高いと読むとすぐに頭を戦闘モードに切り替え、スリープモードにしていたシヤア専用ザクを再起度させるなり、すぐにフルスロットルで加速させて港へ急行、ナオエのゲイレールも遅ればせながらもその後を追う。

ホンコンシティの港から少し離れた離島の海岸線には、董色のケルデイルガンダムーガンダムマナジュリカが、大型のロングライフルを腰溜めに構えていた。

そのダイバーのユイは、ライフル型コントローラーに片目を通してつつ舌打ちした。

「ちっ、あのデスサイズヘルが邪魔ね……」

自分の最初の狙撃が、作戦開始の合図としていた言うのに、突然現れた第三者ーガンダムデスレイザーと言うらしい改造機のせいで台無しだ。

だからといって作戦を中止するわけにはいかない、とにかく事態を動かすための一撃

を放った。

あの機体、ガンダムデスレイザーを排除しようとしたものの、巨大なアクティブクロークに阻まれて撃墜には至らなかった。

自分が最初の一撃を撃つたことで、ハルナとミーシャもそれぞれ動き始めてくれた。ハルナは船上で火器郡を破壊して回り、ミーシャは船を攻撃して浸水させるはずだったが、それも全てガンダムデスレイザーがやってしまったではないか。

そのせいでハルナもミーシャも、どう行動したものかと戸惑いながらも行動を開始している。

海賊船（の外観をした貨物船）へ与えた被害はもう十分だろう、やり過ぎても返って都合が悪い。

ならばこれ以上の戦闘は無意味だが、それを伝えようにもここからでは距離が遠く、短距離通信も届かない。

ガンダムマナジュリカはその『GNロングライフル』を左肩へマウントさせ、各部スラストから粒子を吐き出しながら現場へ急ぐ。

自分達と、ガンダムデスレイザーと、アंकシヤの群れ。

想定外のイレギュラーの出現によって、三つ巴の混戦へ陥ってしまった。

沈み始める海賊船の甲板で、ビームシザースを振り回しながらサツキーは悪態をついていた。

「ホント何なのよ、この、状況ッ!」

接近してきたアंकシヤが振るうビームサーベルを、ビームシザースで弾き返し、返す刀の要領で振り抜き、真つ二つにしてみせる。

アंकシヤ、撃墜。

直後、抜き放った小太刀を逆手に構えた麗桜姫頑駄無が斬り掛かってくる。

大振りな武器であるビームシザースでは、小回りの効く相手と相性は良くない。

ガンダムデスレイザーはすぐにビームシザースを引き戻し、柄で小太刀を受けながしつづつ喰い止める。

ギリギリギリギリとビームシザースの柄と小太刀が火花を散らす中、麗桜姫頑駄無から接触通信が届く。

『ねえっ、いきなり介入したと思っただら邪魔したりしてっ、何なの!』

「はあっ?こつちからしたら、あたしが邪魔されてるんですけど!」

売り言葉に買い言葉とはまさにこれ。

ガンダムデスレイザーは強引に麗桜姫頑駄無を蹴り飛ばし、ビームシザースで斬り掛

かろうとするが、即座に側面からアラートが鳴り響く。

海面から上半身を覗かせるガンダムアスクレプオスシャードが、パイソクローの中央部からビームガン『ラピッドショット』を連射して牽制してくる。

「水中にもいるし……っ！」

サツキーは咄嗟にアクティブクロークの一部を閉じて、ラピッドショットを防ぐ。

その間にも体勢を立て直した麗桜姫頑駄無だが、近くにいたアंकシヤがビームサーベルを振り翳して来る。

『ああもおつ、なんかムチャクチャ！』

ビームサーベルが麗桜姫頑駄無に届くよりも先に小太刀がアंकシヤの腕を斬り裂き、間髪なくバイタルバートに切っ先を突き立てられた。

アंकシヤ、撃墜。

それとほぼ同時に、ラピッドショットでガンダムデスレイザーを牽制しているミーシヤから通信が届く。

『ハルナさんっ、11時方向から敵の援軍です！数は六つ、空中と水中から来ます！』

彼の通信内容通り、その方向からジェットストライカーを装備したウィンダムと、マリンハイザックの二個小隊が波を蹴り立てながら迫り来る。

『……ちよつと派手にやり過ぎたかも？』

本来なら増援が来る前に事を片付けるつもりであったが、その増援が到着した今、ここで離脱しなくては囲まれて逃げられなくなる。

であれば、現時点で最大の脅威であるガンダムデスレイザーをどうにか退けて、ガンダムアスクレプオスシャードに引っ張ってもらえない。

だが、彼女の意志とは関係なく事態はさらなる混乱を生むことになる。

麗桜姫頑駄無が再度ガンダムデスレイザーへ接近しようとするものの、

「ところがアルケーー！」

不意に足元に銃弾が降り注いできた。

何事かと見上げる麗桜姫頑駄無の視界に、ヒートホークを頭上に構えながら降ってくるSDのシャア専用ザクが映る。

偽装海賊船が何者かの攻撃を受けている。

その報せを受け、すぐにスクランブル発進したウインダム隊とマリンハイザック隊。

報せ通り、偽装海賊船がゲリラらしきガンプラの攻撃を受けて沈み掛かっているのを発見する。

大立ち回りを演じるガンダムデスサイズヘルの改造機と、桜色のSDガンダム、及び

SDのシャア専用ザクとガンダムアスクレプオスを目視で確認。

『敵機を捕捉……攻撃開始！』

船への被害を最小限に留めつつビームライフルを放とうとするウィンダム部隊だが、隊長機のウィンダムのビームライフルが、横から割って入って来た銃弾によって撃ち抜かれ、破壊される。

『何だ!?!』

ビームライフルの爆発をシールドで防ぎつつ、銃弾が飛んできた方向に頭部を向ける隊長機。

視界の先に、目視でギリギリ見えるような距離に、水上をホバーで機動する白黒の機体ーナオエのゲイレルが、グレイズの120mライフルを構えているのが見える。

「さてさて、ちよいとおじさんと遊んでもらおうかい」

ホロスコープのターゲットマーカーを焦点に合わせ、ナオエはトリガーを引き絞る。

沈みつつある海賊船の上で、シャア専用ザクのヒートホークが麗桜姫頑駄無の小太刀と打ち合い、そのすぐ下の海中ではガンダムデスレイザーのビームシザースとガンダムアスクレプオスシャードのシザーブレードが打ち合う。

シャルルとサツキーの二人は、どちらかと言えば苦戦していた。

シヤア専用ザクと相對する麗桜姫頑駄無は、その性能差が大きい。

スピードならどうか互角だが、パワーに関して言えば分が悪い。

小振りで華奢に見える小太刀は、その実凄まじい斬れ味と強度を持ち、下手をすればヒートホークの刃すら斬り裂きかねないほどだ。

しかも、それが目視困難な速度で振るわれるのだ、目の前で死線を交わし合うシャルルからすれば、0.1秒でも集中力が途絶えた瞬間に首が飛ぶとすら見ている。

とは言えシャルル自身、ここで麗桜姫頑駄無を倒そうとは考えていない。

背を向けても良い頃合いを見計らい、その時が来ればさっさと逃げるつもりだ。

「(つつても、その頃合いが全く見えねーな)」

麗桜姫頑駄無からの攻撃と攻撃の間は二秒未満、まさに息つく暇もないのだ。

一方、海中のガンダムアスクレプオスシャードと戦うサツキーのガンダムデスレイザーだが、相手がそもそも水中機動性に優れた機体であり、いくらビームシヤースが水中でもビーム刃を形成できると言っても、それはアドバンテージにはなり得なかった。

その上、高度なAMBACと飛行能力を持つアクティブクロークも、水の中ではその質量や面積が仇になってしまっていた。

水圧の影響を受け過ぎるからだ。



結果、アクティブブロークは防御の役割しか果たせず、しかしその防御力も瓦解しつつある。

ノロクサとしか動けないガンダムディスプレイザーに、各部のハイトルクスラスターによつて縦横無尽に泳ぐガンダムアスクレプオスシャードは、その黒翼にパイソクローを何度も叩き付けている。

『この翼も堅い……!?!』

並大抵の装甲ならば一撃で粉碎するほどの威力のパイソクローを何度も防がれて、ミーシャは驚きを隠せない。

「褒め言葉をどー……もっ！」

アクティブブロークを開きながら反撃にビームシザーを振り抜くが、ガンダムアスクレプオスシャードは一瞬で間合いから離れてしまう。

それを見やりつつ、サツキーは自機の損傷状態を確認する。

アクティブブロークの損傷は大きく、これ以上下手に防御すれば破られる恐れがある。

どうする、とサツキーはビームシザーを構え直しつつ、水泡を纏いながら猛スピードで向かってくるガンダムアスクレプオスシャードを睨む。

ウインダムからのビームライフルとジェットストライカーによるロケットポッド、さらにはマリンハイザックからのサブロクガンが、文字通りの波状攻撃となつてナオエのゲイレールを襲う。

「さすがに六対一じゃ厳しいねえ……」

リアスカートのホバーユニットのおかげでどうにかイニシアティブを維持出来ているが、ライフルの残弾も心許ない。

不意にウインダムの一機がビームライフルを捨ててビームサーベルを抜刀、ジェットストライカーを加速させて一気に接近してくる。

接近戦になるか、とゲイレールは左手に握るバトルアックスで迎え撃とうとするが、その直前で接近してきたウインダムが横殴りのビームを受けて爆散した。

ウインダム、撃墜。

「んっ」

何事かとナオエはそのビームが放たれた方向に視界を向ける。

その間にも、もう一機ウインダムがビームに貫かれた。

まだいるのかと動揺して動きを止めた最後のウインダムは、ゲイレールからの射撃で撃ち落とされた。

狙撃を行っているのは、GNロングライフルを両手で構えた機体ーガンダムマナ

ジュリカ。

あちらの方が脅威だと判断したのか、マリンハイザック達は水面から顔を出して肩やバックパックからミサイルを全弾発射する。

それらミサイルの群れを前に、ガンダムマナジュリカは冷静にGNロングライフルを捨てて、流れるように2丁のGNビームピストルIIを抜き放つ。

それを無造作に正面へ向け、大した狙いも付けないまま連射、放たれるビーム弾は吸い込まれるようにミサイルの群れを捉えていく。

爆発の閃光が水面を眩く照らし、次の瞬間には、ガンダムマナジュリカの右肩に連結されたダブルガトリングガンが猛火を吹き、マリンハイザック達を次々に沈没させていった。

「これはまた……強敵か」

ウイングダムやマリンハイザックなど足元にも及ばぬ強敵が現れたとナオエは警戒するが、ガンダムマナジュリカはゲイレールなど目もくれずに反転、炎上する海賊船へ向かった。

ついに、酷使のあまりヒートホークが小太刀によって折られた。

「チツ……！」

唯一の近接武器を失い、シャルルは舌打ちしつつシャア専用ザクを飛び下がらせる。

こんな相手にライフルなど通じるまい、しかしやるしかない。ザクマシンガンを構えようとするが、不意に麗桜姫頑駄無は明後日の方向にマニピュレーターを振り始めた。

すると、どこからか現れた葦色のケルデイルガンダム。ガンダムマナジユリカが海賊船に近付き、麗桜姫頑駄無を抱えるように掴む。

『もー、ユイちゃん遅いよ。こっちは大変だったんだから』

『仕方ないでしょ、こんなに混乱した戦況じゃ考える時間だつて要るんだから。……トランザム!』

圧縮粒子を全面解放、ガンダムマナジユリカがトランザム特有の赤い輝きに包まれると、一瞬で麗桜姫頑駄無を連れて行ってしまった。

それに一拍遅れて続くように、接近戦モードのガンダムアスクレプオスシャードは突如反転、この海域から離脱していく。

「……逃げた?」

遠くへ消えていくガンダムアスクレプオスシャードを見送るサツキーは、アクティブクロークを開いてガンダムデスレイザーを浮上させる。

海面から顔を出すと、既にシャア専用ザクとゲイレールが合流しているとところだった。

シヤア専用ザクはホバーユニットの生きているゲイレールに運んでもらい、ガンダムデスレイザーは未だ健在のアクティブクロークを羽ばたかせて、エスタニア・エリアを離脱、サーバーゲートを通じてベース基地へと帰還する。

メンテナンスハンガーに各々のガンプラを降ろし、整備を始めていく。

シャルルのシヤア専用ザクは装甲の損傷は当然だが、機体を構成するCSフレームには過剰な摩耗が生じていた。

いくら全塗装と簡単な改造を施しているとは言え、その完成度や、シャルルーハバキりに合わせた改修が施されているジンライ改には及ばない。

こりやーこつちにも本格的な改修改造が要るかもな、とぼやきながらもシャルルは後は時間経過を待つだけの状態にまで終わらせる。

ナオエのゲイレールは、弾薬と推進剤の補給が必要なくらいで機体の損傷はそれほどでもなかった。

サツキーのガンダムデスレイザーは、アクティブクロークの損傷が甚大、加えて水圧の影響を受けていたせいで翼全体にも負荷が掛かっており、もう少し時間が必要そう

「あーもう、これ直すの大変なのに……」

彼女が四苦八苦している後ろで、シャルルは先程に見た光景を思い出していた。

何人もの“ジル”が培養液に満たされたカプセルの中で眠っていた、あの不気味な光景を。

アレは、本当に何なのだろうか。

初めてジルと出会った時、彼女は運営の強硬派の者達に追われているようだったが、あれと何か関係があるのか。

それに、アレを他のメンバー、――特にジルに話しても良いものか。

自分は、見てはいけないものを見てしまったのか。

どうするべきかと悩んだ時、ナオエの方から通話のコール音が聞こえた。

「はいこちらナオエです。……何?……の改竄?それは……ははあ、なるほど……カツラギ氏の……には何かおかし……つていた。……裏は取れて……、……」

断片的に聞こえてくる単語から、何やら不穏なことが起きているらしく、そちらへ目を向けるとナオエの表情が険しいものになりつつある。

すると、

「そんなバカな!連中はそこまでするのか!?正気の沙汰とは思えん!」

怒鳴るような声にシャルルは目を細め、サツキーも「ひやつ!」と竦み上がる。

「……ああすまん、ログアウトする。一度切るぞ」

ナオエは一度通話を切り、すぐにログアウトしていった。

サツキーはシャルルの顔を覗う。

「ナオエさん、どうしたんだろ……なんかすごい怒鳴ってたけど」

「……さーな、何か良くないことでも起きたんじゃないの？」

シャルルはシャルルで、何となくながらナオエがどこの誰に何を話していたのかの察しはついている。

恐らく、RMTを始めとする、GBNに関する犯罪などを取り締まるエージェン  
トローその長頭か何かだろう。

今回のあの不気味な光景のことを報告して……何か分かったことがあるのかもしれない。

それは恐らく……ロクなことではあるまい。

GBN内の、奥深くのサーバー。

暗礁宙域の中に、スペースデブリに偽装した”何か”。

その内部は司令部のようになっており、暗がりの中で数人のダイバーがコンソールを

叩く音だけが響く。

「エスタニア・エリアの”ラボ”の映像を再生しろ」

「ハッ」

再生される映像には、二人組のダイバーが『SHIELD』の部屋の鍵を壊して侵入し、すぐに出口までの一閃間。

「見られているか……”爆破”しろ」

「了解、自爆コードを入力。五分後に爆破します」

ダイバーの一人がコンソールに何かを入力していくのを尻目に、次の指示が下る。

『『ニュータイプ部隊』の完成には、後どれくらいになる?』

「当初の予定よりも五日……いえ、一週間ほど遅れております。」完成体の逃走と、ゲリラによる妨害が痛手である、とのことでした」

「そうか。……『百花繚乱』の開催は今週末だったな」

「ハッ、スポンサー『サザメス』からの提供も、万事滞りなく行われます」

「それをエサに”完成体”の所属するフォースを誘き寄せ、目標を確保せよ」

「司令、『五代目スゴック』にもこの件を連絡を?」

「……あのポーカルバンドグループか。リーダーに少々問題はあがるが、実力と経歴は申し分ない。要求は全て呑んでやると返信してやれ」



「ハッ」

暗闇に潜み、計画を進めていく者達。

それを統括するのは——『ガンダイバー』の姿をしたアバターであった。

【次回予告】

ハバキリ「む……」

コーダイ「おいハバキリ、何そんな変な顔してんだ？」

ハバキリ「……あー、今日の晩飯何かなーって」

コーダイ「なんだそりや。それより、今週末に『百花繚乱』が開催されるんだ！テンション上げようぜ！」

エミル「今年は、大手ブランドの『サザメス』がスポンサーらしいな、噂にはあの『五代目スゴック』も来るとか……」

セア「『百花繚乱』？」

サツキー「女性限定の対一のバトルトーナメントですよ。あたしも出ようと思ってるんですけど、セアさんもどうですか？」

ジル「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション、

『百花繚乱！乙女達の戦い』

ハバキリ「ん、どーしたテラス。なぬ、お前も出たい？」

## 19話 百花繚乱！乙女達の戦い

トラちゃんとマイマイが、GBNの機密に関わるような案件をベラベラと喋る中、ケンさんはいたたまれない気持ちになりながらも『俗物』を睨り、ふと気になったことをバーテンダーに訊ねた。

「店長、先程のお二方の話を聞いていて申し訳ないのだが、『強化人間』や『クローン』とはなんの事か教えていただけないだろうか？」

ケンさんの問い掛けによって、バーテンダーはハツとなった。

「ああー……そうだったわ、今ここには一般ユーザーもいるんだった。ケンさん、今の話はオフレコでお願いね？」

「内容がよく分からんから、言い触らしようがないのだが……まあそれは分かった」

「で、強化人間やクローンについて、だったわね？ガンダム的な解釈になるけど、それでもいい？」

「私はガンダムについてもよくは知らんからな。それで頼む」

ケンさんの確認を取ってから、バーテンダーは言葉を選びながら話し始める。

「まずは、強化人間の方ね。まあ……簡単に言うと、”生きた兵器”、MSのパーツの一

部扱い。人間の脳や身体を、薬物や洗脳によって人為的に強化する、文字通りの”強化人間”ってこと。普通の人間には耐えられないようなG(重力加速度)に対応したり、増幅された脳波を用いてサイコミュ……つまり、専用の小型の端末機器を思考だけで動かしたりもするわ」

「なるほど。”非人道的”であることに目を瞑れば、確かに強力な”兵器”になる、と言うことか」

非人道的、兵器、と言う言葉を強調しつつ、ケンさんは頷いた。

「で、もうひとつのクローンね。これは、優れた能力を持った人間の遺伝子を解析して、それと同じか、もしくはは限り無く近い形の塩基配列に組み替えて複製した人間のことで、あくまでも遺伝子を組み替えているだけだから、これが強化人間と同じかどうかは、解釈次第。……一番非人道的なのは、『強化し終えた人間と同じ遺伝子配列をクローンとして増産すること』ね」

「人間を外的要因によって強化するだけでも唾棄すべきだが、そのような者を”消耗品”扱いし、あまつさえその”代替品”さえ作り出すとは……”ガンダム”とは誠に奥が深く、命が軽いものだ。……現実にあってはならんことに変わらんが」

さらには消耗品、代替品と言う言葉まで使ってみせるケンさん。

「まあそれはあくまでもアニメの設定の話であって、今現在の世界にそんなことは行わ

れてないわよ。オリンピッククに向けたドーピングだけは絶えないけど」

「……その強化人間やクローンが、GBNとはどう関係するの？ オンラインゲームのアバターの能力強化などは、あり触れたものだと思うのだが」

強化人間とクローンの意味について知ったところで、ようやくケンさんの本題に移る。

強力な武器を装備したりアイテムを使うことで能力を上げたり下げたりするのは、別段おかしいことではない。

何故そんなことが問題になるのかとケンさんは言うのだが、その先はトラちゃんも答える。

「GBNに限らず、この手のオンラインゲームは、性能を引き上げる不正なツールやデータ……”チート”が横行しやすいのです。現に、六年前の旧ブレイクデカールや、去年のルビスシステム……新型ブレイクデカールなどがその凡例」

まあそれだけならまだ良かったのですが、と言葉を続ける。

「本来ならガンプラに落とし込むためのソレを、『ELダイバーに使ったらどうなる』の  
でしような？」

調査を終えたシャルルは、それ以上長居する気は起きず、ログアウトした。

シャルルから本来のアメノ・ハバキリに戻った彼は、ヘッドギアを外して、ダイバーギアとシャア専用ザクを取り出す。

脳裏に浮かぶのは、あの光景——『複数のジルが培養液に満たされたカプセルの中に閉じ込められている』場所。

アレが何なのかを推し量ることは、出来なくもなかった。

——多分に、あまり想像して気持ちのいいものではないが——。

とはいえ、ログインしていないのにいつまでも居座っているのは他の利用客の迷惑だ。ハバキリは早々にダイブルームを後にして、そのまま帰宅していった。

帰宅してから、テラスがダイニングキッチンで夕食を作っている間、ハバキリは自室のベッドに寝転がって再び思考に耽る。

あそこにいた複数のジルの中で、『フォース・リヴェルタの』ジルがいたとは考えにくい。

今、ジルは誰かに付き添ってもらいながらアクセサリー作成を行っており、足りない素材があればその都度ミッションを受けて素材を集めに行く、と言うことを繰り返して

いる。

故に、あそこにいる複数のジルは全て、”別の誰か”だろう。

ハバキリは、頭の中に浮かぶいくつかの例を口に出してみる。

『クローニング』『バイオ脳』『ソキウス』『カーボンヒューマン』『イノベイド』……」

いずれも、人間の遺伝子（もしくは人工脳）を複製して生み出された存在で、ベースとなった検体と全く同じか、限り無く近い容姿として生み出されるケースが多い。

その中のいずれかにせよ、そんなものを量産して何をするつもりなのか。

「……………」

しばらく思考を回し続けること数分。

もしも。

もしも、万が一、『ジル』がああ複数の”ジル”に何か関係があつたとしたら……

「兄さん、晩ごはん出来ましたよ」

テラスからのノックと呼び声で思考の回転が元に戻る。

「おー、わーったわーった……」

あーらよつと、と背伸びしながらドアを開けて、リビングへ降りていく。

「それですね、兄さん。私もGBNを始めようと思うんです」

食後から間もなく、テラスの口からそのような言葉が出てきたのが始まりだった。

「…………お、お？」

一瞬、何を言われたのか理解に遅れたハバキリは、少し間を置いたための時間が必要だった。

「ダイバーギアとアカウントはもう持ってますから、後は自分のガンプラと、その操縦技術があれば大丈夫のはずです」

いきなり始まったと思えばトントン拍子に話を切り出していく妹に、ハバキリは元の速度に戻していた思考を再び速める。

「えー、つまり？明日かその辺にでもガンプラの購入と製作をしに行きたいってところか？」

「そうです。私一人だとちよつと不安ですが、百戦錬磨の兄さんがいれば憂い無しです」  
「まー、オレをアテにしてくれるのは嬉しいんだが、今になって急にやりたいなんて、

どー言う風の吹き回しだ？」

「それは風に訊いてください。…………と言うのは冗談ですけど」

テラスはスマートフォンを手に取ると、待機させていたその画面を見せる。

「んー、女性限定の10001のバトルイベント…………あー、『百花繚乱』のことか」

「兄さん、知ってるんですか？」



「そー言うのがあつてのは知つてた。当たり前だが、出たことはねーな」

……ハバキリとしてではなく、『シャルル』としてなら出場可能だろうが、それはルール違反……にはならないが、「これでいいのか?」と言う気分になるだろう。

「せっかくGBNのデビューをするなら、大きなイベントの中でしたいんです」

「ま、記念になるからな。気持ちは分かるが……」

ハバキリはカレンダーを目にやる。

今日は火曜日で、百花繚乱の開催は今週の日曜日。

実質、四日ほどしか時間がない。

「ガンプラの購入と製作は明日の放課後、残りの三日で操縦訓練……何とかなるか?」

四日ほどの内、どう言う風にテラスを実戦投入可能なレベルにまで仕立て上げるかの算段を立てるハバキリ。

「何とかしましょう。私も頑張りますから」

テラスのモチベーションも高そうだ。

それを見てハバキリは算段を組み立て直す。

「……よし、その気があるなら予定を繰り上げだ。片付けが終わったら、ガンプラ買いに行くぞ」

「え、今からですか?」

明日の放課後にとばかり思っていたテラスは、思わず時刻を確かめる。

18時19分。

駅前のガンダムベースなら、閉店までまだ時間がある。

さすがに店内で作る時間までは取れないが、それは自宅でも問題ない。

『兵は拙速を尊ぶ』って言うからな、こー言う時の行動は早い方がいい」

そう言うなりハバキリは食べ終えた食器を流し台に持っていく、続いてテラスの分の食器も取り上げて洗っていく。

ハバキリの手によって食器の後片付けも一瞬で終わり（それでもきちんとして洗われている）、アメノ兄妹は通学路の途中にある駅前のガンダムベースの物販ブースに訪れていた。

「それで、テラスはどのガンプラが欲しーんだ？いきなりMGとかRGに手を出すなんて暴挙はやめろよ？」

「兄さん達がいとも使っているのはHGでしょうか？それくらい分かります。初心者向けのガンプラってどれですか？」

そーだな、とハバキリはぐるりと品揃えを一目で確認する。

「まー、基本中の基本はRX-78-2……よーするに初代『ガンダム』だが、運動神経いいテラスなら可変機とか格闘機でもアリだな。とは言え、可変機だと物によっちゃ組み立てが大変だしな。組み立てやすさと性能バランスとかも考えたら、ウイングガンダム辺りが……」

「あ、これなんだろう」

「って聞けよ」

ハバキリの言葉を無視しながらテラスが手を伸ばしたのは、『HGFC ノーベルガンダム』だった。

「兄さん、このセー◯◯みみたいなガンプラはどうなんですか？」

「あー、ノーベルガンダムか。オレは作ったことねーけど、コーダイが作ったのなら知ってる。パーツ数は少ねーし、可動範囲も広いし、MF（モビルファイター）なら格闘戦も得意だし、テラスならちよーどいいーな」

「じゃあ、コレにしますね」

言うや否や、早速レジに並びに行くテラス。

ハバキリとしてはもう少し選んでからでも良かっただろうが、テラスがコレが良いと言っているのであれば、それ以上口を挟むつもりもなかった。

ノーベルガンダムを購入してすぐに帰宅して、ハバキリからニツパーや紙ヤスリなどを借りて早速製作に取り掛かるテラス。

困ったことがあれば呼べよ、と言い残してからハバキリは自室に戻る。

テラスもGBNを始めたいと言うのは喜ばしいことだ。

しかしルー先程の懸念が頭に浮かぶ。

あの『複数のジル』があまり考えたくない通りの存在だとしたら……

ハバキリは、今日はシヤア専用ザクを使っていたために勉強机に立てられているジンライ改を手を取った。

「……わりーなジンライ、付き合ってもらおうぞ」

愛機に一言詫びを入れてからルーパーツの分解を始めた。

それからの三日間、ハバキリはリヴェルタの面々に「妹が百花繚乱に出たと言って言うから、今日から三日間で実戦投入可能なレベルにまで仕立て上げる。しばらくはフォー・スネストに来れない」と伝えておき、放課後から夜までの数時間をバトルの特訓に費やした。

その夜の間、テラスは「ちよつと考えていることがあるんです」と自分なりに塗装したいらしく、ハバキリからガンダムマーカをいくつか借りた。

ハバキリもガンプラの施しにまで口を出すつもりはなく、好きなようにさせていた。

三日後。

今日はいよいよ待ちに待ったレイドイベント『百花繚乱』の開催だ。

出場する前に、まずはテラスをフォースメンバーと顔合わせしておく必要がある。

コーダイとセアは学園でテラスのことは知っているが、サツキーとエミル、ジルは会ったことがないからだ。

「……とゆるわけで、こいつがオレの妹。つっても、ダイバールックだがな」

ほれ、と背中を軽く押してメンバー達の前に立たせてやる。

「改めて初めまして。兄さん……ハバキリの妹で、ここでは『ステラ』と名乗らせております。僭越ながら本日付けでフォース・リヴェルタに加入することとなりました。未熟者ですが、よろしくお願ひ致します」

ぺこり、と丁寧にお辞儀をするテラスーではなく、ステラ。

ステラと言うダイバーネームも、『テラス』を『ス』から読み始めたものとしている。

彼女の自己紹介が終わったところで、最初にセアが出る。

「こっちは初めましてだね。ステラちゃん、ようこそ、フォース・リヴェルタへ。歓迎します」

エミルが正式に加入を求めた時と同じように、右手を差し出すセア。

「こちらこそよろしくお願いします。ホシザ……いえ、セアさん」

一瞬、現実側の名字を言いかけて、すぐにダイバーネームを言い直すステラは、セアの右手を握り返す。

その様子を見ながら、エミルはハバキリとステラを見比べながら、兄の方に話しかける。

「良く出来た妹さんだね。本当にハバキリの妹かどうか怪しいくらいだ」

「オレって言う兄貴がこんなだからな、妹がすっかりしてるくらいでちょーどいーのよ」

猫被ってるってのもあるがな、と軽口で返すハバキリ。

次にサツキーがステラに話しかけていた。

「よろしくねステラちゃん。あたし、サツキーって言うの」

「はい、よろしくお願いしますサツキーさん」

さてそれじゃあボクも、とエミルがステラに自己紹介しようとしているのを尻目に、

ハバキリはコーダイに向き直った。

「コーダイ、百花繚乱の会場はイースト・エリアの、特設場だったよな」

「おう、輸送機の手配も今終わったとこだ」

百花繚乱のエントリー用の輸送機のレンタルを完了させたコーダイは、コンソールを閉じる。

「ところでよハバキリ、来てなかった三日間はテラス……ステラちゃんの特訓に付き合ってたみてえだが、大丈夫か？」

「大丈夫って何がだ？」

「いや、百花繚乱つてな、女性限定つて以外で特に制限はねえだろ？ 上位ランカーと当たる可能性もあるし、初心者ステラちゃんにはちよつとハードル高くね？」

セア、サツキー、ジルと、女子トークに興じるステラを見やりつつ、コーダイは懸念する。

「大丈夫大丈夫。ちよつと強い奴に当たったくらいで負けるよーな鍛え方はしてねーよ」

「ならいいんだけどよ」

ハバキリとコーダイがそのような会話をしている最中に、アナウンスが流れる。

『間もなく、イベントバトル『百花繚乱』の開催です。出場者の方は、イースト・エリア

の特設会場まで移動してください。繰り返します……」

それを聞き、ハバキリ達フォース・リヴェルタは、レンタル登録したばかりの輸送機の待機している格納庫へ向かった。

今回、格納庫には男子三人のガンプラは無く、エンハンスドガンダムMK-II、ガンダムスレイザーと、もう一機いる。

それは、ステラが作り上げたノーベルガンダムだが、カラーリングが原典機と異なっていた。

青や赤の部分は黒灰色に、金髪のような頭部放熱板は艶やかなブラックに塗装され、胸部や背部のリボン状のスラスタはメタレッドにと、全体的にシックなカラーリングだ。

……シックな、と言うよりは。

「日本の女子高生みたいなノーベルガンダムだな?」

真つ先にコーダイが、ここにいる誰もが思っただろう感想を口にする。

「ウチの学園の制服って真つ赤じゃないですか。私、こう言う黒めの制服に憧れてたんです」

このような塗装した理由を答えるステラ。



確かに、日本の女学生の制服のように見える外観だろう。

エミルはそのノーベルガンダムとステラを見比べる。

「ステラさんはこれが初めて作ったガン프라なんだよね？初めてにしては思えないくらい、よく出来てる」

よく見れば塗装にムラが見え隠れしているが、それでも遠目から見ると分には目立たない。

「兄さんって言うガンプラバカがいますからね。見様見真似でやってみました」

兄の隣で堂々とバカ呼ばわりするステラだが、ハバキリはそれに気を損ねることもなく、「ガンプラバカなのは事実だしな」と軽く笑い飛ばす。

「んじゃ、遅れねー内に早速乗りますか」

三機のガンプラを輸送機の格納庫へ積載し、百花繚乱が行われる特設会場へ急ぐ。

レイドイベントバトル『百花繚乱』

女性ダイバー限定のロードレース『ナデシコアスロン』から派生したイベントで、こちらは一対一のガンプラバトルを行うものだ。

出場クラスは『エンジョイ』と『ガチ』の二つに分かれ、そこからA～Hブロックで

トーナメント戦が行われ、各ブロック優勝者によるベスト8でさらにトーナメント戦が行われる。

そして、『エンジョイ』『ガチ』双方の優勝者同士がバトルする『美のガンプラマイスター決定戦』が行われるのだ。

色とりどりの花々で彩られた特設会場に、セア、サツキ、ステラの三人が開会式に出式し、ハバキリ、コーダイ、エミルの男子三人と、ジルが観客席へ座る。

会場全体が静まったところで、アナウンスが開催宣言を告げる。

『これより、第四回百花繚乱サザメス杯を開催致します。本日はゲストとして、人気ボーカルバンドグループの『五代目スゴック』のリーダー、『ジュン』君にお越しいただいております』

すると、舞台の床が開き、その下から一人の青年ダイバーが現れた。

『ハーイみんなチョリーツス!今日はたくさん女の子が集まってきたくて、男としては嬉しい限りだよー!イエイ!!』

ハイテンションな挨拶をするジュンに、大多数の女性ダイバー達は「キャーキャー!!」と黄色い声をあげ始めた。

「ジュンくん!モノホンのジュンくん!」

「える・おー・ぶい・いー・ジュンくん!」

「ジュンくん！ケツコンしてー！」

「「「「「キヤーーーーーー！！！！」」」」」

周りの皆が皆黄色い声上げる中、ステラはサツキーに耳打ちする。

「誰ですか、あの人」

「ステラちゃん、『スゴック』って知らない？十年くらい続いて、もう五代目になるボー

カルバンドグループよ」

「へえ、そうなんですね」

誰なのかわかると、ステラは興味無さげにジュンの挨拶を聞き流す。

もうしばらく黄色い声援が会場を支配してから、ようやく大会進行が始まる。

セアとステラは『エンジョイ』に、サツキーは『ガチ』の方へ、それぞれ参加。

セアはDブロックに、ステラはAブロックに。

『ガチ』側のサツキーはCブロックに。

観客席からは複数のモニターによってバトルの様子が中継されるため、大会進行そのものはスムーズに進められるのだ。

各ブロックでの第一試合が行われ、フォース・リヴェルタでは最初にサツキーが戦うことになった。

「よっし。さーて、あたしの相手は……」

対戦相手をトーナメント表で確認し、

「えっ?」

絶句した。

フォース・『ロイヤルナイツ』所属『ノエル』

ガチの中のガチだった。

「勝てるかあああああー……ッ!!」

案の定、一瞬で負けた。

『エーデルルガンダム』と言う、ルガンダムの改造機を前に手も足も出せなかったのだ。

開幕、フィンファンネルからのビームでアクティブクロークを一瞬でズタボロにされ、ビームシザーズで斬り掛かろうものならそのフィンファンネルに弾き返され、挙げ句の果に五体をビームレイピアで破壊されて降参するハメになると言う、情けない結果で終わり、泣く泣く観客席へ戻っていく。

その様子を観客席のモニターから見ていた男子三人とジルは。

「うん、ありや相手が悪かったな」

「ロイヤルナイツって、現在の最上位フォースの一角だろ？」

「そんなの相手に一対一は無茶だよ」

ハバキリ、コーダイ、エミルは至極淡々と「負けてもしようがない」と声を揃える。

「あれ、サツキー負けちゃった？」

もぐもぐモグモグとポップコーンを頬張るのに夢中だったジルは、そもそも観戦すらしてなかった。

サツキーが敢え無く初戦敗退の結果で終わり、次に『エンジヨイ』側でステラが出る試合だ。

「見せてもらおうか、ハバキリの妹さんの実力とやらを」

シヤア・アズナブルの名言のひとつを用いつつ、エミルはステラのノーベルガンダムを見やる。

それと相對するのは、レズン・シユナイダー専用の青い『ギラ・ドーガ』だ。

試合開始のゴングが鳴り響く。

「ステラ、ノーベルガンダム、行きます」

ステラはアームレイカーを握り締めて身構える。

ノーベルガンダムは懐からホルダーを抜き放ち、本来なら『ビームリボン』として鞭状に形成されるそれを、ビームソードとして発振させた。

対するギラ・ドーガも、右手にビームマシンガンを手にした状態で、左手にビームアツクスを抜く。

『はんつ、ノーベルガンダムなら農家で鈴を鳴らしてりやいいんだよ』

牽制にビームマシンガンのトリガーが引かれ、連射されるビーム弾がノーベルガンダムに襲いかかるが、

「遅いです」

ステラは跳ね上げるようにアームレイカーを引き上げ、ノーベルガンダムはその場から跳躍、飛び越えるようにビーム弾を躲す。

跳躍で宙に浮いた状態から、頭部の冷却フィンをAMBACとして振るい、『直角に逆V字を描くような形で』一気にギラ・ドーガへ迫る。

『なつ、速……』

一閃。

ギラ・ドーガの脇を通り抜け様に着地するノーベルガンダム。

一拍を置いてから、ギラ・ドーガの上下半身が泣き別れにされた。

ギラ・ドーガ、撃墜。

バトル開始から、わずか8秒。

文字通りの秒殺に、観客席は歓声とどよめきが入り混じる。

「お、おいおいハバキリさんよ、アレホントに初心者動きか?」

ステラの瞬間的な跳躍とAMBAC機動を見たコーダイは、瞬きを繰り返しながらハバキリに問い掛ける。

「おー、実戦は今回が初めてだな」

さすがテラスだ、なんともないぜ、とハバキリは頷きながら答えたが、エミルは訝しげに彼を睨む。

「いや、あんな動きが出来る初心者がいてたまるか。ハバキリ、お前ステラさんに一体何を仕込んだ?」

たかが三、四日間の数時間の特訓だけで、エンジョイ勢相手とは言え秒殺など出来るだろうか。

どんなマジックをすればそうなってしまうのか。

「大したこととはしてねーよ。ただちよつと『あるシミュレーションをやらせた』だけだ」  
あるシミュレーション、と聞いて、コーダイとエミルは二人揃って真つ青な顔をした。

「お、おいハバキリ……おま、まさか、全くの初心者に”アレ”をやらせたつてのかよ!?”  
コーダイの言う、”アレ”。

それは聞く人が聞けば、真つ白に燃え尽きたり、エクトプラズムを口から浮かべたり、虚ろな目で体育座りしたり、白目を剥いて痙攣したり、ノイローゼに陥ったり、ケタケタと不気味に笑ったりすることで有名なシミュレーション訓練だ。

何を言おうと、その訓練内容がとにかく理不尽なのだ。

具体的に言うると『ザクIIでS型のゲルググ一個大隊を倒すくらい出来て当たり前』である。つまり、それ以上に理不尽な訓練がごまんと揃えられていると言うわけだ。

常人にさせれば、クリアする頃にはまともな感性や正気を失うレベルである。

「なるほど……”アレ”をやらせたつて言うなら、納得……したくないけど出来てしま  
うか」

エミルは『納得はしないが理解は出来た』

「オレとコーダイも”先生”のお世話になったけど、エミルも”アレ”をやったのか」

あの、ボサついた髪に地球連邦軍の軍服を崩して着用した「使いじやねえ」ことでの有名な、漆黒のダブルオーガンダム使いを脳裏に浮かべる。



ステラに続いてはセアの試合だ。

しかし、彼女のエンハンスドガンダムMK-IIは、相手のティエレンタオツを前に攻められないでいる。

人革連系のMS特有の、Eカーボンの重装甲で固めた鈍重そうな外見に見合わない機動性の高さは、ビームライフルやレールガンなど通じない。

『避けてみせる……っ！』

ビームと電磁加速弾の波状射撃を掻い潜って、エンハンスドガンダムMK-IIへ迫るティエレンタオツ。

「……」

対するセアは、攻撃が通じていないことに焦りを覚えるどころか、さらに冷静になっている。

レールガンを片方だけ発射、しかしそれはティエレンタオツの直撃コースではなく、すぐ足元を狙ったものだ。

石畳が捲りあげられ、砂煙が立ち昇る。

『そんなものに！』

ティエレンタオツは滑腔砲に取り付けられたカーボンブレードを構え、砂煙を切り裂いて肉迫する。

カーボンブレードが振り降ろされる瞬間、セアはアームレイカーをグイッと引き下げ、エンハンストドガンダムMK-IIを飛び下がらせた。

ティエレンタオツーもすぐに反応し、さらに加速して追い継ろうとする。

再びビームライフルとレールガンの波状射撃が仕掛けられ、ティエレンタオツーは先程と同じように躲そうとして、

『なっ』

直撃された。

ビームと電磁加速弾の三発が、『ティエレンタオツーの回避したその先に叩き込まれた』のだ。

さすがに重装甲だけあるものの、被弾によって動きを鈍らせたティエレンタオツーに、セアはターゲットロックを固定、真っ直ぐにティエレンタオツーのコクピットを撃ち抜いた。

ティエレンタオツー、撃墜。

セアの勝利によって、彼女の顔画像がトーナメント表をひとつ進むのを見つつ、エミルは先程のセアの戦いを見て感想をもらす。

「苦戦したみたいだけど、何とか巻き返せたね」

だが、ハバキリとコーダイの二人は、エミルとは違う感想だった。

「……最後の一齐射撃な。アレ、完つ壁に相手の動き読んでたぞ」

「苦戦してたんじゃないかって、ありやあ相手の動きを見てたんだな。……この短時間でほぼ完璧に先読みが出来るってのも、そう簡単じゃねえ」

そのニュアンスは「凄い」ではなく、「末恐ろしい」だ。

具体的には、フラワーズ二軍との交流試合を行った時からだろうか、セアの『見る』力はその時から急速に高まりつつある。

アドラステアを巡るレイドバトルでも、攻略を見出したのは彼女の観察眼によるものだったのだ。

「今はまだ頭に操縦技術が追い付いてねーけど、それが比例するよーになったら、間違いなく“化ける”な」

各ブロックで順々にトーナメント戦が進む中、ゲストルームでは先ほどに挨拶を行っていたジュンが、ソファーに腰掛けながら、大会関係者と言葉を交わしていた。

「……報酬はこの通りの額で出させていただく」

「フォース・リヴェルタの、ELダイバーちゃんを確保すればいいんでしょう？」

ジュンはコンソールに表示されている情報を読み取っていく。

「そうだ。あのフォースの中に、我々の”完成体”がいる。名前は……」

「分かっていますよ。ちょうど、分かりやすい名前のようだし……」

コンソールを閉じたジュンは、観客席からバトルの中継の様子を見やる。

その視線の先にいるのは……黒灰色のノーベルガンダム。

その後も、トーナメントは順調に進んでいた。

中でもセアとステラは目覚ましい活躍を見せて続けている。

セアは基本に忠実かつ安定した操縦によって隙を見せず、戦闘中に相手の機体特性や操縦の癖などを観察し、そこから弱点を見抜くことで、確実に勝ち目を拾う。

一方のステラは、兄から課せられた『例のシミュレーション』を短時間で集中的に体験したことで、ステラのリアルータラスとしての運動神経の良さ、そしてノーベルガンダムと言う機体の性能が功を奏し、特に近接格闘では初心者とは思えぬほどの圧倒的な戦闘力を見せつける。

二人とも瞬く間に各ブロック内で優勝して、『エンジョイ』のベスト8へと進出。

選ばれし八人のダイバーネームがトーナメント表に並ぼうと言う時、再びアナウンス

が流れる。

『おっと、ここでジュン君からのメッセージです。ではジュン君、どうぞ』

すると、会場中央に先程にも挨拶に現れたジュンが登壇し、それを見た大多数の女性ダイバーが黄色い歓声を上げる。

『へいみんな！ガチ勢もエンジョイ勢も、どっちも華やかで熱いバトルを繰り広げてくれるね！こんなの見てたら、俺もバトルがやりたくなつてきちゃったよ！』

黄色い歓声が徐々に収まりつつある頃を見計らって、ジュンはメッセージを続ける。

『そこで！俺はあるダイバーと戦ってみたいと思う……』

バツ、と手振りをしながらエンジョイ勢ベスト8のトーナメント表の中の一人ーーステラを指した。

『それは……ステラさん、君だ！』

観客のほとんどはトーナメント表に、残りはステラのノーベルガンダムに視線を向ける。

「……私が？」

何故自分が、とステラは困惑する。

『聞けば！昨日今日GBNを始めたばかりなのに、経験者達を次から次へと打ち倒していくと言う、今大会最強のダークホース、期待の新星！それを聞いて、一人のファイター』

として戦ってみたと思うのは自然なことだと、俺は思う!」

グツ、と拳を握って見せるジュン。

大多数の女性はその姿に見惚れるところだが、生憎とステラはそこまで盲目ではなかった。

「(それはない。私と同じかそれ以上の活躍をしているセアさんを指名しないで、素人に毛が生えた程度の私を指名する理由は無いはず。どうせ、スポンサー辺りからベスト8の誰かと戦えとかって言われたんでしようけど)」

芸能人であれば演技や演出で魅せるのは当然だろうが、それとこれとは違う。

それに、

「(……私が昨日今日始めたばかりの初心者だと、『どうして知っている』の?)」

参加登録をする際に、設定性別が女性であることと、ダイバーネーム、それと所属フォースの名前を書き込んだくらいだ。

具体的なランクやプレイ時間などは明かされていないはずである。

それが筒抜けになっているとすれば、

「(あのままさか、『最初から私と戦うつもり』だった?)」

それこそ何故だ?

ステラの疑問を他所に、アナウンスが本人の意向を無視して勝手に進行させていく。

『おーっと、ここで即席エキシビションマッチです！と言うわけでAブロック優勝者のステラさん、バトルの準備をお願いします！』

初めからそうなるのは分かっていただろうに、白々しく驚いてみせるアナウンスに苛立ちすら覚えるが、それを押し隠しつつ、ステラはノーベルガンダムに乗り込んだ。

観客席は、ジュンがバトルを行うという興奮と、何故あんなポツと出の女がジュンのお眼鏡に掛けられるのかという嫉妬が渦巻く中、リヴェルタの男子三人は小声で言葉を交わし合う。

「……なあ、サプライズにしちゃえらい不自然じゃねえか？」

コーダイが最初にそれを言った。

次に反応したのはエミル。

「普通、公平性を保つために、個人に肩入れするようなことは望ましくないはずなんだけど……」

目的が見えない、とエミルは言う。

「兄であるオレが控えめに言っても、絵面を狙うならセアさんの方が適してるはずだ。……ロリコンなのか知らんが連中、ステラの何が目的だ？」

ハバキリは二人に会話を合わせつつも、ステラのノーベルガンダムを横目で見やる。

今回の百花繚乱、どうも何か裏がありそうだ。

「……オレ、ちよつとトイレ行つてくるわ」

そう言い残してから、ハバキリは観客席を立つて行く。

残されるコーダイとエミルだが。

「GBNなんだからトイレとか無いよな?」

「無いね」

あのシスコン、間違いなく何か”やらかす”つもりだ。

二人とも言外に頷いた。

ノーベルガンダムが待機しているところへ、会場地下のガンプラ用のエレベーターから、ジユンのガンプラだろう機体が姿を現した。

薄いライトブルーで全身を塗装され、ひよろ長い四肢に、腰と背中に二対の鋭角な揚翼。

ジムのようなバイザー付きの頭部の左右には、それぞれ長さの異なるアンテナ。

右手にはライフルを、左腕には両端を尖らせたようなプロペラのようなシールドを備えている。

ステラはその機体を知らないが、『00』に登場する量産機『ユニオンフラッグ』だ。



『ステラさん、俺の挑戦を受けてくれてありがとう!』

「……私は受け入れた覚えはないですよ。拒否していいのなら拒否しているところですよ」

『……』大人の都合、ってヤツでね、申し訳ない気持ちはあるんだよ』

一瞬、ジュンの語気がブレたのをステラは聞き逃さなかった。

どうやら、このバトルを不本意としているのは向こうも同じらしい。

疑心を抱くステラに、個人回線による通信が届く。

それは、ハバキリからのものだった。

「もしもし、兄さん?……え?……ああ、はい。それなら………はい………うん、分かりました」

ハバキリとの通信を終えて、再度ジュンへ向けて通信を繋ぐ。

「ジュンさん、でしたっけ? 私の兄から、あなたへのメッセージがあるそうです」

『お兄さんから?』

一体何かと耳を傾けるジュンに、発信源不明のオープン回線で届けられた。

その内容とは、

『てめーごときチンパンがオレの妹に手を出すんざ、リアルな数字で十年早いんだよ

チンパン。だからてめーはチンパンだつってんだろチンパン。チンパンはチンパンらしく、E衛星でバルブスにでも乗ってロリコンの相手でもやってろチンパン。分かったかチン○ン』

……とんでもない罵詈雑言だった。

『ツツツツツ……………』

回線越しに、ジュンの怒りを押し殺すような声が漏れる。

「兄さん……なんてことを」

嘆くように左手で顔を覆うステラ。

『……、お兄さんからのメッセージは以上かな?』

どうにか怒りを押し殺して見せたジュンは、その営業スマイルを引き攣らせつつ、ステラに確認する。

「以上みたいですね。すみません、ウチの兄さんが……それじゃあ、そろそろバトルにしましょう」

謝罪の意を見せるのは上辺だけ。内心はステラもハバキリのメッセージに頷いているからだ。

ステラはアームレイカーを握り直し、ノーベルガンダムのビームソードを構える。

ジュンのユニオンフラッグも、押し殺し切れていない怒りで震えそうになっている右手のリニアライフルの銃口をノーベルガンダムへ向ける。

両者身構えたところで、アナウンスのレフリーが試合開始を告げる。

『それでは！ガンプライフアイト、レディー……ゴッ!!』

ゴングが打ち鳴らされ、ノーベルガンダムとユニオンフラッグの両者は同時に動き出す。

接近戦に持ち込みたいステラは一気にノーベルガンダムを加速させ、対するジュンのユニオンフラッグはその場でリニアライフルの銃弾を連射して牽制を掛ける。

電磁加速された銃弾を掻い潜りながら、距離を詰めていく。

『そおら墜ちろ墜ちろ墜ちろオー!』

自らも動きながらも、さらにリニアライフルによる牽制射撃を重ねるユニオンフラッグは、懐に左手を伸ばしてプラズマソードを抜き放つ。

間合いにまで踏み込んだノーベルガンダムがビームソードを振るい、ユニオンフラッグのプラズマソードがそれを押さえつける。

ビームとプラズマが鏝迫り合ったのはほんの僅か、ユニオンフラッグがビームソードの一撃を逸らし、空振りしたノーベルガンダムへ、プラズマソードを突き立てようとする。

「つとー」

しかしステラの反応も早く、瞬時にアームレイカーを引き戻し、ノーベルガンダムはバック転をしながらプラズマソードの切っ先を躲しつつ距離を取り、着地と同時に頭部のバルカン砲を速射する。

ユニオンフラッグは左腕の盾『デیفエンスロッド』を回転させて、バルカン砲の銃弾を防ぎ、凌げばすぐにリニアライフルで撃ち返す。

銃弾が装甲を掠めながらも、ステラは最小限の回避でやり過ごす。

「……伊達だけでGBNでアイドルをやっているわけじゃないと」

ユニオンフラッグは身を翻すと、一気にノーベルガンダムへ迫る。

振り抜かれるプラズマソードに、ノーベルガンダムはビームソードで迎え撃つ。

再びビームソードとプラズマソードが激突、一撃、二撃、三撃、四撃と打ち合いが繰り広げられる。

『俺はスポンサーから、君を確保しろって言われてるんでね』

「やつぱりっ……どうしてそこで私が、あなたに確保されなくちゃならないんですっ!？」  
やはりそうか、とステラは目を細める。

自分の何が目的なのかと問い質すステラに、ジューンは答えない。

『さあな。君はスポンサー達から“完成体”とか呼ばれてるし、むしろ君の方が確保さ

れる理由が分かってているんじゃないの？」

”完成体”……？何のことですかっ”

罅迫り合いの状態から強引にユニオンフラッグを蹴り飛ばすノーベルガンダム。

「私はただの初心者です、誰かの作った作品なんかじゃありません！」

『チツ、しらばつくれやがる……』

一度距離を取り合い、ユニオンフラッグはニアライフルで牽制、ノーベルガンダムは銃弾を躲しながら詰め寄る。

もう何発かニアライフルの牽制弾が放たれて、一瞬だけその銃撃が止まる。

「弾切れっ。攻めるなら今！」

その一瞬を”弾切れ”と判断したステラは、ノーベルガンダムを加速させて一気に距離を詰める。

しかし、悪い偶然が重なった。

『そつちから来てくれちゃうかあ！』

弾切れを起こしていたはずのユニオンフラッグは、すかさずニアライフルをノーベルガンダムへロックオン、トリガーを引き絞ると、牽制としてばらまいていた射撃とは段違いな出力の電磁加速弾が放たれた。

「!？」

ステラの動体視力はそれを視界に捉えることが出来たが、回避や防御を行うには身体の反応が遅すぎた。

結果、ノーベルガンダム胸部のリボンナー胸部サブスラスターにリニアライフルの銃弾が直撃、内蔵されていた推進剤が誘爆した。

観客席に戻ってきていたサツキーは、爆炎に呑み込まれたノーベルガンダムを見て思わず腰を浮かせた。

「ステラちゃんっ!?!」

バイタルバート付近への直撃だ、今の一発で撃墜されたかもしれない。

コーダイとエミルは至極冷静に今の戦況を読み取っていた。

「今の時間差の射撃、リニアの電力チャージだな」

「うん。少電力の射撃で牽制してステラさんの動きをある程度誘導して、接近してくるタイミングに合わせて本命の一撃だね」

リニアライフルは銃弾へ供給する電力を調整可能であり、与える電力を高めればそれだけ強力な射撃を撃てるが、当然ながらその与えるための電力のチャージも必要になる。

「なに呑気に解説してるのよつ、今のでステラちゃんやられちゃったかもしれないのに！」

慌てるサツキーだが、

「大丈夫」

それを遮ったのは、ポップコーンを食べ終えてからは不動の姿勢で試合を見ている、ジルだった。

「ステラのガンブラ、「まだ大丈夫」って言ってる」

ジルの、ガンブラの心の”声”を読み取るかのような、オカルト染みた言葉。彼女はこれまでに何度もその”声”を聞き、ハバキリ達にそれを伝えてきた。

そしてそれは予言のように、一度も外れたことはない。

ノーベルガンダムへの反応は健在。

ジルのユニオンフラッグは既に電力供給を完了させたりニアライフルを油断なく構えつつ、爆煙が晴れるのを待つ。

黒灰色の霧の中から現れたのは、『胸部サブスラスターを失っている以外に損傷らしい損傷の見えない』ノーベルガンダムだった。

『んなっ!?直撃のはず……!』

ジュンには分からないが、これには仕組みがある。

この胸部サブスラストー、防御範囲を限定した『炸裂解除外装甲（リアクティブアーマー）』でもあり、ちょうどコクピットに当たる部分である胸部に一定以上の衝撃や熱量を受けた際、外部装甲と本体装甲を繋ぐボルトロツクが爆破され、外部装甲を強制的に切り離すことで本体へのダメージを減らすと言うものだ。

とは言え、原典のノーベルガンダムにこのような機能は無い。

しかも、

「（この胸のリボンって、こんな機能あつたっけ？）」

実はステラもこれを知らなかったりする。

何故なら、今日の前日にステラーテラスが寝静まった頃、ハバキリがこっそりノーベルガンダムを持ち出し、胸部サブスラストーをリアクティブアーマーとして改造していたのだ。

自分が知らないだけで、そう言った機能があるのだろうかと勘違いし、ステラは再びユニオンフラッグへ向き直る。

しかし、このまま接近戦を仕掛けてもプラスマソードにふせがれ、距離を取るなら向こうにリアライフルによる射撃の自由を許してしまう。

せめて、あともう少し機動性があれば……



「あ、そうだ」

ふと何かを思い付いたステラは、ノーベルガンダムの左手を頭部のバインダーに掛けて、

「うん、これで少しは軽くなる」

「うん、これで少しは軽くなる」

斬り落としたバインダーを捨てて、ノーベルガンダムはビームソードを構え直す。

『……その程度の軽量化が何になる！』

あたかも断髪でもするかのような行動に驚愕するジユンだが、即座に戦闘に意識を切り替え、電力を抑えたりニアライフルでノーベルガンダムを牽制する。

が、対するノーベルガンダムは前傾姿勢、陸上競技のクラウチングスタートのような姿勢を取ってリニアライフルの銃弾をやり過ぎ、

走り出すための最初の踏み込みと、スラストによる推進力をシंकクロさせた。

ハバキリがほぼ無意識に行っている『機体のAMBACとスラストによる加速を同時に行うことで急激な旋回と加速を行うこと』……それに近い操縦技術を、ステラはこの場で行ったのだ。

突風が吹き抜けたような風切り音をユニオンフラッグが集音した時には、既にノーベルガンダムが懐にいた。

『はっ!?!』

ジュンの方も辛うじて反応し、咄嗟にユニオンフラッグを飛び下がらせるが、ノーベルガンダムが斬り上げたビームソードにリアライフルを破壊されてしまう。

彼は「断髪」したノーベルガンダムを「その程度の軽量化で何になる」と口にしたが、ステラにしてみれば「その程度でも軽量化出来れば十分」なのだ。

斬られたリアライフルを捨てて、すぐにプラズマソードで反撃を試みるユニオンフラッグだが、ノーベルガンダムはその低い姿勢のままサマーソルトキックの要領で腹部を蹴り飛ばす。

『グッ……こいつつ、急に動きがッ』

姿勢を取り戻しつつ、プラズマソードを右手に持ち直すユニオンフラッグだが、そのほんの一秒未満の隙を、ノーベルガンダムはビームソードで突いてきた。

ユニオンフラッグも咄嗟にプラズマソードを寝かせるように構えて切っ先を受け、鏝迫り合いにもつれ込む。

しかし、姿勢を制御しきれていないユニオンフラッグは体勢が悪く、ノーベルガンダムに押し込まれつつある。

『これ、がつ、ELダイバーの実力だとも……ッ』

「あのですねえ、さつきから何なんですか? 人のことをELダイバーだのELダイバー

だのE.L.D.ダイバーだの……」

苛立ちを隠すことなく、ステラは接触通信で吐き捨てる。

「私は、初心者だって、言ってるでしょう」

ノーベルガンダムは強引に鏢迫り合いを中断し、ユニオンフラッグのプラズマソードを空振りさせ、ビームソードでそれを斬り飛ばした。

宙を舞うプラズマソード。

ノーベルガンダムはその場で跳躍してプラズマソードを掴む。

右手にビームソード、左手にプラズマソードを構え、ユニオンフラッグへ迫る。

「だからあなたはチンパンなんですよ。分かりましたかチンパン」

瞬間、ビームとプラズマの光刃がX字を描くようにユニオンフラッグを四散させ、一拍を置いて爆炎が舞った。

ユニオンフラッグ、撃墜。

「はあ……せつかくのデビュウなのに、なんか散々です」

ガンダムベース内のカフェのテーブルで、テラスは溜息をついた。

同席には、ハバキリ、コウダイ、セアの三人が着いている。

あの後、ステラがジューンを撃墜したことによって観客と参加者を含めた大多数の女性ダイバーが発狂し、大会の意向を無視してステラをリンチ（私刑）にしようとする者が続出したため、彼女は運営側の判断によって一度強制ログアウトされたのだ。

ステラがログアウトされたのなら、とハバキリ達もログアウトし、一人だけ置いてかれたセアは途中棄権してからログアウトした。

ログアウト直後に、テラスのダイバーギアに運営から謝罪とお詫びのメール、及び参加賞とAブロック優勝の景品が届けられた。

「ま、あーゆるーアイドル狂信者に目を付けられたら、冗談抜きで殺されるからなー。テラスを強制ログアウトさせた運営の判断は正しいな」

ハバキリがコーヒーを啜りながら一息つく。

恐らく今頃SNS上では『謎のノーベルガンダムがジューンくんをボッコボコにした！許せない！』などと掲示板言う名の火薬庫で花火大会をしていることだろう。ついでに、ステラの個人情報の開示を運営にしつこく要求しているに違いない。

ほとぼりが冷めるまで、しばらくテラスはログインしない方がいいかもしれない。

「でも、テラスちゃん本当に強かったよね。お兄さんとい勝負出来るんじゃないかな？」

セアは、アメノ兄妹を見比べて率直に頷く。

「さすがに兄さんには勝てませんよ。私はそれほどトチ狂ってませんし」

「おいこら、さらつと兄貴をデイスっていくスタイルか」

ハバキリとテラスがじゃれ合っているその側で、コウダイはジュースを飲みながら顔を険しくしていた。

「……結局、あのジュンとか言うアイドルが、テラスちゃんを狙っていた理由は分からず終いだな」

何故ジュンニーと言うよりもそのスポンサーが、ステラⅡテラスを狙っていたのか。

「あの人、私のことをELダイバーって勘違いしていたみたいですよ」

テラスは、ジュンから言われたことを話す。

「なんかですね、ELダイバーを確保しろって言うのがスポンサーからの指示だって……」

「！！！！」

ハバキリとコウダイ、セアは「ELダイバーを確保しろ」と言う言葉に強く反応した。

「なんでオレの妹がELダイバー扱いされてるのは知らんが、どーにもきな臭いな」

「つてことは、あいつのスポンサーの狙いは、本当はジルちゃんだったってことか？」

同時にハバキリの脳裏に、ナオエと共に潜入した施設のことを浮かべる。

やはり、どうにも良くない……気に入らないことが裏で動いているらしい。

「きな臭いなんてレベルじゃねーな、既に表面化し始めてるってことなのか……?」  
GBNに見えない暗雲が立ち込め始めている。

それが確信に変わるのは、もう間もなくのことであった。

### 【次回予告】

コーダイ「オフ会やろうぜオフ会!」

ハバキリ「いきなり唐突だなおい」

セア「オフ会って、リアル同士で会うんだよね? サツキーさんとかエミルくんはどうなのかな?」

サツキー「あんまり遠くなかったら、あたしは大丈夫ですよ」

エミル「ボクは、……うん、大丈夫だと思います」

ステラ「私も参加していいんですよね?」

コーダイ「おう、もちろんだ。実物のガンプラを持ち寄って、ついでに改造案とかも出し合ってさ……」

ハバキリ「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション

『それぞれの時』」

ジル「いいなーみんな、わたしだけお留守番……」

## 20話 それぞれの時間

「E.L.ダイバー」に”不正ツールを使えばどうなるのか。

トラちゃんはその発言を聞いて、ケンさんの表情が凍り付いたように固まる。

「……それは、」

「ハーイ、そこまで」

バーテンダーがそこで口を挟み、三人分のお冷を注ぎ直す。

「今は、楽しい思い出語りの時間でしょう？嫌なことはすぐに忘れて、楽しいことは何度でも思い出す。人生は、それが一番よ」

今までに何人ものダイバーと語らい、そしていくつもの激戦を潜り抜けてきたバーテンダーの言葉には、やけに重みのある説得力があった。

「フツ、そうであったな。ここに来るとすぐに話が脱線してならん」

トラちゃんは胡散臭い笑みを浮かべて、コーヒーを一口啜った。

「思い出話って、最初は何話してたの？あんた、けっこう長い時間ここにいるみたいだけど」

マイマイはストローから唇を離すと、トラちゃんに何を話していたのかと訊ねる。



「はて、何を話していたか……おおそうだ、フォー・ス・リヴェルタのアメノ兄についてだったな」

「少しだけ思い出すような素振りを見せてから、トラちゃんはだいたい逸れてしまった話の道筋を元に戻す。」

「イチノ……いや、今はマイマイだったな？ お前から見て率直に、奴はどのようなダイバーだと見る？」

「一瞬、現実側の名字を言い掛けたトラちゃんだが、すぐにダイバーネーム、それもコードネームの方で呼び直す。」

「んー？ そうねえ……忌憚の無い意見でいい？」

「それが聞きたくて訊いたのだ」

「脚色などせず、見たままのことを話せと言うトラちゃんに、マイマイは一呼吸入れ替えてから口を開き直した。」

「アレは、98点は取れても100点が取れない。そして、『持っているはずの才能を努力の積み重ねで捨ててしまっている』……そんな人間ね」

「ほう？」

「だってそうでしょ？ 努力って言うのは、裏返せば『余計な情報を入れないために固定概念で自分を塗り潰す』のと同じよ。凡人が天才を超えられないのは、その”余計な情報

”を額面通り(自分勝手)に解釈して、受け入れないから。『努力の天才』なんてものは、この世に存在しない!”

弁解も侮辱もしない、ただ彼女の目から見たハバキリが、凡人を上回ることが出来ないと言ふことを言葉にするだけ。

「なるほどな」

トラちゃんの方も、マイマイの言うことを理解したのか、そのように頷く。

同期である二人だけの中で事が完結されようと言う時、この中で最も人生を長く生きているケンさんが口を出した。

「お嬢さん、あなたは少し、物事を俯瞰し過ぎてはいまいか?」

マイマイをお嬢さんと呼ぶケンさんに、彼女は何の気無しに振り返る。

「まだ若いのだし、もう少し夢を見ていても良いのではないか、と言うのは年寄りの冷水か?」

ケンさんの問い掛けに対するマイマイの答えは、酷く冷め切ったものだった。

「あたしには、もう夢を見る資格なんて無い。やりたくないことを放り出して、好き勝手なことばっかりして、親の期待を妹に押し付けた挙げ句、その妹を傷付けた。死神様が許したって、他の誰でもないこのあたしが、あたしを許さないのよ」

誰かに理解してもらおうなんて思っていない、とマイマイは強がる素振りもなく、淡々

と答えを出すのみ。

「……すまない、口が過ぎた」

まさに年寄りの冷水だな、とケンさんは口を噤む。

戻りかけた『楽しい思い出語り』に文字通りの冷水が掛けられた空気だが、それを瞬時に読み取ったトラちゃんは、バーテンダーにアイコンタクトを送った。

「(姐さん、”アレ”をやるぞ!）」

「(了解よトラちゃん)」

アイコンタクトだけで、0・2秒で双方の役割を理解する二人。

「んんっ……、……ウソだろ……これが、ダンジ?」

突然バーテンダーは、自分の掌を見つめながらわなわなと震えだした。

演技のものか、いつもよりも飾り気のない男らしい声色だ。

「ああ……MWの残骸から見つかったのは、阿頼耶識のピアスだけだった」

対するトラちゃんも、演技によって声色を変えてバーテンダーに応じる。

「クッ!何でだよダンジ!お前言ってたじゃねえか!「死ぬ時はでっけえおっぱいに埋もれて死にてえ」って!おっぱいはなあ、柔らけえんだぞ……MWのシートみてえにくねえんだぞ!」

「ぶっはははははっ!ママったら相変わらずシノの真似が上手いんだからあ!もうシノ

の中の人でしょこれ! くっ、はっはははははっ……!」

そのやり取りを聞いて、マイマイは腹を抱えて爆笑した。

……実は、このバーテンダーの特技の一つとして、『ノルバ・シノ』のモノマネが物凄く上手いのだ。

鉄血のオルフェンズのアニメを視聴したことのあるユーザーなら、その声の違和感の無さに口が開かなくなるか、マイマイのように大爆笑するのかのどちらかに分けられる。

「う、うむ、む……?」

ケンさんは何が起こったのかと視線を右往左往させるばかり。

どうにか空気が戻りかけたのを見て、トラちゃんは「ひゃーっはっはっはっ」と笑ってみせる。

イベントバトル『百花繚乱』から数日後。

事の始まりは、フォース・リヴェルタのグループメッセージで呟かれた、コウダイからのひとつのメッセージからだった。

コーダイ？ オフ会やろうぜオフ会！

ハバキリ？ 一泊二日の東京デステイニerland旅行だな！ 代金は全額コーダイが負担してくれるってフォーオール全員に連絡すればいいんだな！ よし、任せろ！

コーダイ？ おいばかやめろ！ 俺の小遣いとお年玉が何年分吹っ飛ぶと思ってるやがる！？

ハバキリ？ 何を戯けたことを抜かすかコーダイ、お前はのために茨の園で三年待つたんじやねーのか？

コーダイ？ 私は我慢強い！（ハムさん感）

サツキー？ はいはい！ コーダイが代金負担してくれるなら、あたしもデステイニerland行きたい！

コーダイ？ ほれ見ろハバキリ！ お前が変なこと言うからサツキーが誤解してるんだぜ！ どうするんだぜ！？

ハバキリ？ コーダイが俺達をデステイニerlandに連れて行ってくれればいんじゃない？

サツキー？ ねえ、何人殺せばいい？ あと何人殺せばそこへ辿り着く？ ゼロは俺に何も言っただけじゃない、教えてくれコーダイ

コーダイ？ やめろよ！ そんな血生臭くて殺伐としたデステイニerlandなんか行き

たくねえよ！

エミル？僕達は、どうしてこんなところ（血生臭くて殺伐としたデステイニーランド）に来てしまったんだろう……僕達の、世界は……

ハバキリ？オーブの市街地で遠慮なくハイマツトフルバーストをぶっ放してシンの家族を焼き払った諸悪の根源

エミル？リマスター版ではカラミティの砲撃に差し替えられてる辺り、ファンのキラ様崇拜が加速してる、誰よりも速く。

サツキー？元々、キラ、アスラン、シンは三人とも主人公って扱いだったのよね？アニメ本編はキラが主役で、その他ゲーム作品だとシンが主役、つまりアスランは結局二番目から抜け出せない、世界で二番目に有名な緑のヒゲ親父だった……？

ハバキリ？アスラン視点からのコミックもある。『THE EDGE』シリーズだったかな？

エミル？ガンダム無双2なら、最終的にアスランがキラを降すシナリオもあったし、シンがキラアス二人を同時に相手取る過去最高のシナリオもあるよ

セア？えーっと、オフ会をしたいって話だよね？

コーダイ？この状況、さすがセアさんと言うべきなのか、まともに話を聞いてくれるのがセアさんしかないことを嘆くべきなのか……

ハバキリ？全く！コーダイが一泊二日の東京デステイニerland旅行に連れて行ってくれるなんて、一体誰か言つたんだよ!?

コーダイ？お前だよ！

サツキー？あんたよ！

エミル？君だね

セア？あの、オフ会するんじゃないのかな？

コーダイ？もうハバキリなんか知らん！お前抜きでオフ会の話を進めさせてもらう

！

ハバキリ？サーセン、謝るからオレも混ぜて

コーダイ？しゃあねえな許してやるよ！でだ、まずはみんながどこに住んでるかを確  
認しなきゃならないわけだ。

ハバキリ、コーダイ、セア、ステラの四人は通う学園が（ハバキリとステラは兄妹な  
ので住所も）同じなので確認の必要はないのだが、サツキーとエミルに掛かっている。

例えば新幹線や飛行機を必要とするような距離だと、そもそも会うのが難しいから  
だ。

しかしコーダイの懸念に反して、サツキーとエミルもお互いそれほど離れた距離と言

うわけでもないようで、交通費が少し掛かる程度だった。

コーダイ？距離的に見ても、シーサイドベースのガンダムベースが一番都合がいいと思うんだけど、どうだ？

エミル？シーサイドベースって言うと、エールストライクが立ってる場所だっけ？  
コーダイ？そうそう、そこな

サツキー？そこならあたしの方からも遠くないし、大丈夫よ

ハバキリ？コーダイ、一番肝心なこと忘れてんぞ。そのシーサイドベースに、いつ集まるんだ？

コーダイ？そこは無難に、今週の日曜日辺りにしようと思ってる。ここのメンバーは全員学生だから、いけると思うんだけど、その辺はどうなんだ？

セア？私は日曜日で大丈夫だよ

サツキー？セアさんに同じく！

エミル？ボクの方も日曜日が都合いいかな

ハバキリ？大丈夫だ、問題ない（僅かに数値が異なるのを見逃しつつ）

コーダイ？なんか一人、死亡フラグって言うニュートロンジヤマー発生装置を地中に埋め込もうとしてるけど、大丈夫だな、よし！



ハバキリ？妹にはオレから伝えとくわ。あ、ステラのことな

コーダイ？また後日に伝え直すけど、暫定の時間帯は、開店の10時に合わせて集合、昼飯もそこでつてことで。

セア？了解です。

サツキー？オツケー！

ハバキリ？任務了解、ターゲットロックオン、破壊する（バスターライフルをコーダイに向けて）

エミル？やめてさしあげて

コーダイ？んじや、今週の日曜日は、シーサイドベースでオフ会な！解散！

コーダイの解散を確認し、ハバキリは一度ダイバーギアを持ったまま部屋を出て、向かいの部屋にいるテラスの元へ向かう。

コンコン、と軽くドアをノックしてから、テラスを呼ぶ。

確認を怠るから、ひとつ屋根の下と云うだけで問題が多発するのだ。

「テラスー、入っていいーか？」

「ん、どうぞ」

ちゃんと部屋主からの反応を確認してから、ドアノブを捻る。

宿題をしているのか、机に座って教科書とノートを広げているテラス。

「今週の日曜日な、フォースの面子でオフ会やるーぜって話を今してたところだ」

「あ、ごめんなさい、ダイバーギア見てなかったです」

テラスは部屋の隅で充電しているダイバーギアを手に取り、「わ、更新いっぱい来る」と慌ててグループメッセージを開いて内容を確認する。

「えーつと、日曜日に……シーサイドベース？ってどこですか？」

「こつから電車とモノレールを乗り継いで40分くらいの距離だ。そこのガンダムカフェで集まるーぜって話だ。まずオレ達二人とコーダイの三人で移動、セアさんとサツキー、エミルは現地集合だ」

「分かりました。時間帯とかお昼ごはんは、ひとまずはメッセージ通りですね」

テラスが日曜日の予定を把握するのを確認してから、ハバキリは踵を返して部屋を出る。

「宿題の邪魔して悪かったな」

「いえいえ、お気になさらず」

テラスは宿題へ意識を集中させ直し、ハバキリは自室に戻る。

ハバキリの勉強机に敷かれたカッターマットには、改造途中のジンライがパーツごと

に分解されて広げられている。

机の隅には『リーオー』や『ギラ・ズール【親衛隊仕様】』などのパツケージが重ねられ、半開きになつているケースには作りかけ、もしくは完成済のパーツが詰め込まれ、塗装中のパーツは猫の手ツールに差し込まれて、開けつぱなしの窓際に立て掛けられ、手元近くにあるルーズリーフには、ジンライと思わしきガンプラのラフ画が描かれ、『ビームカービン』や『高初速ロケット砲』『シユツルムスラストター』などと殴り書きされた項目が見られる。

ハバキリがジンライの改造を始めてから数日が経つが、進捗はあまり芳しくない。

何度かはひとまずの完成を見て、試験運用を行ったものの、彼の要求するところまで機体性能が届かなかつたり、酷い時には機体が空中分解を起こすこともあった。

その都度に改造し直しては試験運用を繰り返しているのだが、それも限界が見えてきた。

ハバキリは手元にあるペーパープランを取つて睨むように目を通し直す。

「この辺は今度、コーダイと要相談だな……」

シーサイドベースで集まる時に、サツキーやエミルの意見も求めるつもりだ。

とは言え、少しでも時間があるなら手を加えておきたい一心で、ハバキリは再び机に向かった。

日曜日。

コーダイが立てた予定通り、今日はシーサイドベースのガンダムベースに集まってオフ会だ。

ハバキリとテラスは、まずは最寄り駅前でコーダイを待つ。

「兄さんは、こう言うオフ会って初めてですか？」

柱時計の時刻を確認しつつ、テラスはハバキリに、オフ会のような事は初めてなのかを訊ねる。

「あー、全く初めてでもねーな。以前にいつペンだけ、昔のフォース仲間と会うことがあったくらいか。でもその時は、せいぜい隣町にいた連中くらいのもんだっし、今回見たいな、普段気軽には会えない距離にいる相手とは初めてだな」

半分以上がリアルでの友人なので、純然なオフ会とも言い難いのだが。現実で初めて会うのは、サツキーとエミルの二人だ。

少なくとも、サツキーが嘘をついていなければ、彼女は自分達と同じくらい的女子中学生と聞いている。

今ひとつ正体がハッキリしていないのは、エミルだ。

リアルではどうなのかと言う話を、エミルからはあまりリーと言うより、一度も聞いたことがない。

アバタールックそのものは、自分達と同じくらいの男子学生だが、実際のところは不明。

そう言う話題を振ろうとすると彼は「……GBNでそう言う話をするのは野暮じゃないか？」と意味深そうに毎回はぐらかしてしまふからだ。

実のところ、エミルはオフ会に参加しないのではないのかと思っていたハバキリだが、今日までキャンセルの連絡が入っていないところ、ドタキャンでもなければ来るはずだ。

「私はもちろん初めてですけど……サツキーさんとエミルさんがどんな人なのか、楽しみですね」

少し緊張しているのか、それを隠そうと明るく振る舞うテラスを見て、ハバキリは軽く頭を撫でてやる。

「そんな緊張すんなって。お前やセアさんを狙う怪しい奴が近付いてきたら、オレとコーダイがフルボッコにしてやるからな」

「ちよつ、人前で頭などでないでくださいよ、恥ずかしい……」

慌ててハバキリのなでなでから離れるテラス。ガラスに写る自分を見て髪形を頻り

に確認している。

やっぱ緊張してるなー、と苦笑していると、いつもの方向からコウダイがやって来た。「お待たせー！待たせたか？」

「はよーっすコウダイ。どのくらい待ったかはご想像にお任せするぜ」

「そんなに待つてないってことにしとくぜ。テラスちゃんもおはようさん」

コウダイが声を掛けてきたので、テラスは瞬時に振り返っていつもの自分を取り繕う。

「おはようございます、オオヤマ先輩。ちなみに、待つていた時間は10分くらいです」「意識の高い時間前行動だな？」

感心するコウダイを他所に、駅のアナウンスが快速急行電車が間もなく到着することを告げてくる。

「つとと、アレに乗らないとな」

急げ急げ、とコウダイに急かされるようにハバキリとテラスは改札に切符を通す。

途中で一度乗り換えて、目的の駅に着いたら今度はモノレールに乗り換えて、ようやく到着する。



「ハバキリでしょ？」

「おー、アメノ・ハバキリだ。リアルネームと同じな」

次にコウダイを見て、

「リアルでも背え高い……コウダイね？」

「正解！オオヤマ・コウダイだ。『コ』を伸ばしてコウダイってな、ほぼそのまんまだ」

最後にテラス。

「で、ステラちゃん」

「そうです、アメノ・テラスです。テラスをアナグラムの読み替えて、ステラってとこです」

ペコーリとお辞儀するテラス。

お辞儀するテラスとハバキリを見比べて、サツキはふと疑問符を浮かべる。

「って言うか、ホントに兄妹？全然似てないけど……」

「似てねーとはよく言われるけど、れっきとした血の？がった兄妹だ。間違っても複雑なアレコレがあるわけじゃねーからな」

親同士の再婚によって義兄妹になったとか、養子として引き取られたとか、そう言ったデリケートな家庭背景は無いから安心しろ、とハバキリは強調する。

「いやいや、そこまで聞かないから大丈夫」



サツキとしても、ハバキリとテラスが似てないと言ったのは見たままの感想であつて、他所の家庭の内情にまで踏み込むつもりはない。

双方の自己紹介が終わつたのを見計らつて、セアは辺りを見回す。

「あとは、エミルくんだけだね」

残るはエミルのみ。

リアルに関する話題を避けていたエミルだが、今回のオフ会には来ると言つていた。「そろそろ10時になりますけど、大丈夫ですかね？」

コウダイは腕時計で時刻を確認する。

後一分少しで、ガンダムカフェの開店時刻だ。

「電車が遅れてるとか？あたし、連絡取つてみるね」

そう言つてサツキはダイバーギアをバッグから取り出そうとした時。

「あ、あの……」

蚊の鳴くような小さな声が、セアの背中に届く。

振り返つてみると、辛うじて中学生くらいだと判断出来るくらいのも、綺麗に切り揃えられた紺色の髪をした、小柄な少女がいた。

「えつと……フォース・リヴェルタの方々です、よね？」

「？　そうだけど……」

フォース・リヴェルタの面々と会ったことのある人だろうか、とセア以外も少女の姿を見やる。

すると、躊躇いがちな自己紹介する。

「その、信じられないかも、ですけど……ぼ、ボク、『エミル』です……」

……

……

……

「「「……ええっ!」」」

「わお、びっくり」

セア、コウダイ、サツキ、テラスは驚き、ハバキリだけはびっくりと言いつつも、そんなに驚いていない。

立ち話も何だと言うことで、開店したガンダムカフェへと向かい、予めコウダイが予約していた席へと案内される。

六人用の席に着いたところで、まずはエミルの自己紹介から始まる。

「……『ヒカミ・メグミ』、です。メグミは、恩恵の『恵』と、美しいって書いて『恵美』で、エミルはメグミの一部を音読みにして、語呂合わせに『ル』を付け足して『エミル』です」

五人の視線が集中する中、しおしおと縮こまるように席に座り直すメグミ。

自己紹介の終わりを見計らって、コウダイが最初に口を開いた。

「……信じられねえな。いや、疑ってるわけじゃなくてな、俺達が普段知ってるエミルとはえらい違いだから、なんっつか、なあ？」

GBNと現実とのギャップ差が激し過ぎて、コウダイは自分の言いたいことと語彙が追いついていない。

冷静堂々とした振る舞いに、多種多様な近接武装を自在に操る敏腕ダイバー……の正体が、相手の顔色を窺いながらオドオドした少女だと、誰が想像出来るものか。

同じことをサツキも思っていたらしく、彼女は率直に伝えていく。

「GBNの時みたいなの喋り方でいいのよ。セアさん以外には普通にタメ口じゃん？」

セアだけがこのメンバーの中で唯一歳上なので、敬語を使って話すのは別段不自然なことではないとしても、他のメンバーに対しても敬語で話す必要は無いとサツキは言うが、

「いい、いえ、なんと言うか、GBNの『エミル』と、ここにいる『メグミ』を別人物として使い分けてるんです」

それに、とメグミは他五人の顔を見比べていく。

「同じ中学生でも、ボクは一年生で、サツキさんは二年生、ハバキリさんとコウダイさんは三年生。セアさんに至っては高校生で……テラスさんしか同じ年がいなくて……」

テラス以外は皆歳上なので、どうしても遠慮してしまうのだと、メグミは言うのだ。

そのテラスとも、この間にフォースメンバーに加入したとは言え、まともに話したのはまだほんの数回だけだ。しかもテラスの場合は百花繚乱の一件からログインを控えていることもあり、話し合った回数さらに減らしてしまっている。

「ま、今すぐ慣れろって話じゃねーんだ。ボチボチな、ボチボチ」

それよりも、とハバキリはメグミ本人に関する話題を遠ざけつつ、自分の本来の目的を進める。

「こいつを見てくれ。こいつを……どう思う？」

ハバキリは鞆の中のケースから、改造途中のジンライを取り出してテーブルに立たせた。

一見すると完成しているように見えるが、一部のパーツは塗装をせずに仮組みの状態で組み込んでいる。

「お、久々に見た見たジンライ……の、改造途中か」

コウダイはその青灰色のジンを一目見ただけで、それがまだ未完成だと見抜く。

「リアルで見るのは初めてだけど……これ、半分以上は出来てるんでしょ？作り込みとかすごいし」

サツキはコウダイと顔をぶつけないように、ジンライを覗き込む。

その隣のメグミもこくこくと無言で頷いている。

「何度か完成はしたんだけどな。いざGBNで使ってみたら思ったより性能が出なくてな。オレの独力じゃ限度があるし、他の奴の意見をいただこうと」

ハバキリがそう言うなり、コウダイは「ちよいと触るぜ」と一言断ってからジンライを手にとつて見る。

「……やけにアポジモーターの配置が宇宙世紀っぽいなって思ったらコレ、親衛隊ギラ・ズールの脚部を移植してんのな。フット部はジンハイマニューバのまま変わってねえけど」

「HGC E系の二重関節じゃ強度に問題が出てきたから、ポリキャップの太い袖付き系にした。以前とは関節構造が違うぶん、細かいアジャストは慣れが要るがな」

次はサツキが、ジンライの腕部に目を付ける。

「この腕つてさ、わざとこうしてるの？関節と下腕との間に隙間出来てるけど……」

「可動域を限界まで広げよーとしたんだが、代わりに中身がスカスカになっちゃった。隙間があるぶん、強度にも問題が増えた。だからって隙間をパテで埋めたら重くなるしな」

コウダイとサツキの間から隠れるようにジンライヤーではなく、そのジンライを納めていたケースの中を見ていたメグミが、率直な意見をこぼす。

「……このライフルって、ビームマシンガンですか？」

「どつちかつつーと、『ビームカービン』だな。脚部をギラ・ズールのもんに変えてペイロードに余裕が出来たから装備させるつもりだ。カービンって言っても、基本的にはザクウオーリアのビーム突撃銃と同じで、一発の威力より連射力重視だ」

ハバキリはそのケース自体もテーブルの中央に置く。

ビームカービンだけでなく、愛剣シースザンバーや以前から使用している無反動砲のキャットウズ、重斬刀、76mm重突撃銃と言ったジン本来の武装群が取り揃えられている。

コウダイ、サツキ、メグミがあーだこーだと話し合っている中、まだそれほどガンブラについて詳しくないセアとテラスの二人が肩を寄せ合って、その様子を眺めている。

「百花繚乱の後くらいからですね、兄さんが少し悩んでそうに見えたのは」

「ちょうどその辺りから、ガンブラの改造で詰まっていたのかな。私も、ハバキりくんの力

「なってあげたいけど、深くて細かい改造になると、ちよつと手が出せないし……」  
「それもあるんですけど……」

テラスは、コウダイと言葉を交わす兄を盗み見てからセアと目を合わせ直す。

「悩んでるのに、『焦ってるようにも見えない』んですよ」

「焦ってる?」

どういふことかとセアが訪ね返すのを尻目に、コウダイが大きく溜息をついた。

「ムチャクチャなことを言うな。このカタログスペック通りに完成したら、GBNの再現つっても10Gは軽い。しかもリミッター付きでそれだろ。リミッター解除したら……想像してみろよ、『四方八方から肋骨が砕けるような激痛』を抱えながら操縦するなんて、出来るか?」

「……フォン・スパークなら、首を爆破されての半死状態で10分は戦えるから、オレなら……、……三分くらいなら、なんとか?」

「おい、フリじやねえからやめとけ、冗談抜きで死ぬぞ」

「ゴズミック・イラ版のツールギスでも作るつもりかよ、とぼやくコウダイに、サツキも同調する。」

「大体、そこまでムチャクチャな改造しなくても、今のジンライを完成させるだけでも十分だと思うけど……」

ハバキリも、コウダイとサツキがそのような反応をするのは承知の上だったのか、気にせずに自分の意見を押し挙げる。

「いやな、『普通の相手』ならそこまでする必要はねーんだけど、……ちよつとこれから先、『普通じゃない相手』と戦うかもしれないねーのさ。そんなのと出会さないとそれにしたことはねーけど……いざって時に対抗出来る力は、持つとかねーと」

『普通じゃない相手』と聞いて、コウダイ、サツキ、エミルの三人がどういうことかと無言で訊ねてくる。

「あー、えーつとな……」

自分とナオエが、あの『複数のジル』の存在を目撃したことを素直に話すべきか。

しかし、ジルのいないここで話すことは、彼女への不信感を煽るような行為にもなりかねない。

ほんの数秒の思考の末、ハバキリは嘘をつかない程度に誤魔化すことにした。

「……サツキとかエミ……メグミは知らねーと思うけど、オレやコウダイは、以前は運営の強硬派の連中に狙われていたんだよ。まー、毎回返り討ちにしてやったな。最近はその言うのも聞かぬーけど、いつまたそんな輩が出てくるか分からぬーし、何にせよやれることがあるならそれをやるべきだなと」

少なくとも、嘘ではない。



今は運営の中で隠れて行動しているトーシローのおかげで、以前のような襲撃は鳴りを潜めている。

だが、いつまたあのような連中が現れないとも限らないし、もしそんな連中がイレギュラーなことに手を染めるかもしれない。

それこそ一運営が新型ブレイクデカールを使うようなことを（その件に関しては運営の意志ではなく、E.L.ダイバー・『サラ』のハッキングによるものだったとされている）。

もちろんそれもあるが、

「（トーシローの真意が分からねーからな。この間はアレだったが、次に会うことがあるとすれば……）」

恐らく、戦場で相見えることになるかもしれない。

その時に、彼を踏み倒して進まなければならないことにもなるだろう。

サツキとメグミは今ひとつ分からないようだが、コウダイはハバキリのその言葉に理解を示したように頷く。

「ああ、なるほどな……」

理解したと言うリアクションは見せたコウダイだが、彼自身は今ひとつ腑に落ちるものがない。

少なくとも、「改」の銘を打たれる前のジンライですら、一対多数の状況を覆せるレベルの性能はある。

なのに、今更になって運営の過激・強硬派のことを警戒する理由が分からないのだ。別のところに本音があるのだろうか、それを問い詰めたところでハバキリがそれを話すことは、恐らくない。

その末に弾き出した結論は。

「(こりやアレだな、こいつまあた一人で勝手に行動を起こすつもりだな)」

長年の付き合いがなせる業と言うべきか、皮肉と言うべきか。

ハバキリは普段はちやらんぼらんに見えるし、普段でなくともちやらんぼらんそのものだが、その実は誰よりも責任感が強く、他者を巻き込まずに、裏で誰も見ていないところで処理しようとする側面がある。

しかしそれは、他人のことを第一に考えているのではなく、「自分がこうしたい、こうすべきと思っただけ」と、極めて自己中心的な考え方に基づくものだ。

自分勝手に、自己犠牲……それが、アメノ・ハバキリと言う人間の基本。

「(たまには、俺にも仕事させろよなあ)」

そんなハバキリを、コウダイは嫌いではなかった。

なればこそ、自分も彼に負けてはいられないと思い、行動に移したくなる。

「……次、いいかな」

すると今度は、セアが小さく拳手した。

全員の視線が自分に向けられたのを確かめてから、セアはバッグからガンプラケースを取り出し、その中にあるフリーダムガンダムを見せる。

フリーダムガンダムと言っても、背部のウイングバインダーやサイドスカートなどは取り外され、シンプルな姿にされていた。

「あと、これも」

続いてダイバーギアも取り出して、待機させていた画面も見せる。

セアは以前からフリーダムガンダムの改造案の図面を引いており、それも凡そが描き上がったところだ。

「色々な作品を見て、私なりにフリーダムガンダムをどう改造出来るか考えてきたんだけど、こんな感じに出来ないかな」

描かれているのは簡単な線画のみだが、どのような形になるかは分かる。

まず、腰から踝（くるぶし）近くにまで掛けてドレスのように広がる増加装甲だ。

形状を見るところ、フリーダムガンダム本来のウイングバインダーが使われているようだ。

ウイングバインダーを下半身に移したところで空いた背部には、複数枚の展開式楊翼

と一対の火炮で構成されたバックパックが背負われている。

ちようど、『アカツキ』のオオワシパックに似ているだろう。

手持ち武装であるルプス・ビームライフルやシールドはそのまま装備させているようだが、この辺りはまだ手を加える余地が残っている。

ハバキリ、コウダイ、サツキ、メグミの四人が食い入るようにダイバーギアの画面を見ては拡大させたりしている中、最初にコウダイがコメントした。

「フリーダムをドレスっぽく見立てたつてところつすね。指し詰め機体銘は、『フルドレスフリーダムガンダム』か」

略して『フルフリ』だな、とコウダイが冗談めかして言うが、

「うん、名前はそうしようと思ってたの。コウダイくん、よく分かったね?」

セアの考えているその通りだった。

下半身にウェイトが集中し、バックパックにも新たな武装を装備して全備重量も増しているが、上下半身の重量バランスは取れており、火力や機動性も大きく強化されているため、パワーウェイトレシオで言えばこちらの方が上だ。

サイドスカートが別物に代わったため、クスイファイアスレールガンはオミットされ、ラケルタ・ビームサーベルはセイバーガンダムと同じ両肩に移動されている。

そのサイドスカートに、プラズマカノンのバラエーナがそのまま取り付けられている

ため、バックパックのキャノンとバラエーナ、手持ちのライフルと合わせれば、ハイマツトフルバーストも可能だ。

ハバキリのジンライと、セアのフルドレスフリーダムガンダム(仮)について話し合っている内に、時刻は既に正午前。

コウダイの提案によって談義は一旦休止し、ランチタイムへ。

ジルは、管理保護局の自室のベッドの上で、自身のコンソールを見ていた。

「いいなー、みんな……」

いつもの日曜日なら、この時間帯にフォース・リヴェルタの面々は揃うことが多いが、今日は『オフ会』と言う、現実世界の方で遊ぶことだとセアが教えてくれた。

彼らは自分と違い、GBNだけをやっているわけにはいかないことは知っている。

誰かがいてくれる、と言うことが当たり前になっているのかもしれない。

それはいけない、とジルは頭を振る。

いつまでも彼らが来てくれるとは限らないのだ。

そのいつかが来る前に、彼らに「ありがとう」を返さなくてはならない。

「……」

ジルは勢いよくベッドから飛び起きる。

外出許可を得てから、ジルはGBNシテイを歩く。

いつもなら誰かと付き添ってもらいながらだが、今日は一人だ。

行き先は、オリジナルアクセサリー製作のために頻繁に通っているアクセサリーショップ。

入店すると、「いらっしやいませ」と言う挨拶に迎えられる。

ジルの姿を見つけるなり、受付のNPDが声を掛けてくる。

「今日もアクセサリーの製作ですか？」

「うん」

こくりと頷いて、早速ジルはアクセサリー製作に取り掛かる。

実のところ、これに関する進捗は良好だ。

どのような形にするかのデザインを選び、次にカラーリング、外観が出来たら装飾品としてのカテゴリ、それらを決定した後は必要な素材と金額を確認し、最後に生産だ。

ジルは、最終過程である必要素材と金額の確認の時点で、一旦データを保存している。

自分を含めたリヴェルタのメンバー七人（新たにステラの分も製作するため）のアクセサリーのデザイン、それと必要な素材と金額を全て揃えてから、いっぺんに作るつも

りだった。

「……それも、もう終わる頃だ。」

「ハバキリ、よし。セア、よし。こうちや、よし。サツキー、よし。エミル、よし。ステラ、よし。……わたしも、よしっ」

指差し確認を終えて、満足げに頷くジル。

今日まで保存してきたデータも合わせて、一括で提出する。

「ではこちら、合計で七つのアクセサリになります。生産しますか？」

「はい」

ジルが提出したデータを読み取らせ、必要素材と金額も消費させ、次々にアクセサリが完成されていく。

いずれもネックレスとして作られ、

ハバキリはオブシディアン、セアはダイヤモンド、コーダイはガーネット、サツキーはエメラルド、エミルはサファイア、ステラはブラックオニキス、そしてジルのものはパール。

「……出来たあー！」

完成され、並べられるアクセサリを見て、ジルは嬉しそうにはしゃぐ。

「えへへー」

アイテムボックスに入れることも忘れ、そのまま手に持ったままアクセサリーシヨツプを出た、

その時だった。

何人かのダイバーがアクセサリーシヨツプから出てきたジルを取り囲んでいた。

「ターゲットを捕捉、確保する」

「……………え？」

ジルの戸惑いを他所に、ダイバー達の内の一人が懐から何かを取り出し、ジルの首筋に当てた。

「あゝっ」

バチンツ、と言う音がジルの聴覚に届いた瞬間には、既に意識を失っていた。

その何かースタンガンの電流を浴びたジルが抱えていたアクセサリー達はその手を離れ、バラバラと床に散らばった。

「ターゲットの確保完了、帰投する」

ダイバー達はジルを、違反者拘束用のバリアフィールドで拘束すると、すぐにその場を立ち去った。



残されているのは、『六つの』アクセサリーだけだった。

昼食後は、ガンダムベースの製作ブースでガンプラの改造に勤しむハバキリ達。

ハバキリとコウダイの二人はジンライを分解しつつ、あーでもないコーダイでもない、と額を突き合わせて改造し合う。

「何言ってやがるコーダイ、プロペラントタンクなんか付けたら重くなる上に被弾面積だって広がるだろ。そんなもんいらんいらん」

「いやいや、こいつがスペック通りに完成しても、まともに動かすだけでも絶対推進剤が足りなくなるぞ。プロペラントタンクくらいサザビーやシナンジュだって付けてるし、いざとなったらパージすりやいいんだよ。これ付けるだけで、稼動時間が少なくとも二分は伸びるんだからよ」

「んー……ビーム兵器も使うとなると、やっぱパイロッドの余裕はもうちょいいるかー」  
『『サイズジン』みたいに装甲を徹底的に削つ……たら、機体が加速度に耐えられなくなつて』ツダ” るんだつたな」

じゃじゃ馬とか暴れ馬どころじゃねえなコレ、とコウダイは前髪を掻きむしる。

「腕部の隙間があるのは危険だよなあ。可動範囲も十分にあつて、スカスカにならない

構造……いつそ、腕関節をガンダムフレームに置き換えるつてのはどうだ？」

「……あ、いいなそれ。メモっとくぜ」

コウダイの意見を聞き取り、すぐにメモ帳にペンを走らせるハバキリ。

その一方で、セア、サツキ、メグミ、テラスの女子四人が、フルドレスフリーダムガンダムの製作を手分けてして行っていた。

「うわっ、すっごい綺麗に塗装されてるっ。セアさんって塗装上手いんですね！」

サツキは、セアが塗装したのだろうパーツを見て驚いている。

「前に神社で塗装を教えてもらったって言うたでしょ？それを実践しただけだから……」

謙遜するセアを他所に、メグミとテラスは黙々とパーツを組み上げていく。

「学校に持っていくお弁当も、全部テラスさんが作ってるんですか？」

「そうですよ。たまに兄さんが作ってくれることもあるんですけど、基本は私が作ります」

「すごいですねえ……」

同い年であって話しやすいのか、細々ながらもメグミとテラスの会話が交わされる。

それから二時間ほどが経過し、ハバキリの新たなジンライと、セアのフルドレスフリーダムガンダム（仮）が八割ほど完成に近付いて来た頃。

男子二人と女子四人とで分かれた製作ブースの中、不意にその場にいた者達のダイバーギアが一齐にメールの着信を告げる。

さて何の通知かと、作業の手を一度止めてメールの内容を確認する。  
運営からのお知らせのようだ。

GBN運営管理からのお知らせ？平素はGBNをお楽しみいただき、誠にありがとうございます。  
ございます。

大変申し訳ありませんが、11月18日の0:00〜23:59の間、緊急のメンテナンスを実行致しますので、上記の時間帯のログインが出来なくなります。

皆様に安心安全なプレイを行っていただくためのメンテナランスですので、ご理解とご協力をお願い致します。

「あー、メンテのお知らせか」

ま、しゃーねーか、とハバキリはメール画面を閉じて、マイページにまでバックする。「去年の動乱事件以降、緊急メンテが増えたもんなあ」

コウダイもメールの内容を確認したのか、彼に做うようにダイバーギアを閉じた。

ELダイバーの過剰な誕生を抑止するために、内部データを整理し、なおかつエラーなどの修正が主な目的らしい。

女子四人の方や他の利用客も、緊急メンテナンスのことを理解したようで、「緊急のメンテだつて」「またかよー」などと交わしている。

「あ、ジルにもこれ伝えておかねーとな」

再度メール画面を立ち上げ、送信先をジルに指定しようとして、

「……………あ?」

ハバキリは自分の目と、表示されている画面の両方を疑った。

登録フレンドデータに、ジルのデータが無い。

何度目視確認したり受信メールの更新確認を行っても、やはりジルの名前が見えない。い。

「つかしーな……………悪いコウダイ、なんかオレの画面だとジルの名前が出てこねーから、代わりにメッセ頼むわ」

「おう」

ハバキリに言われて、コウダイはメールの送信先を指定しようとするが、

「ありや、俺の画面にもジルちゃんのデータがねえぞ？」

「……どーゆーことだ？」

ハバキリは、隣の席にいるセア達四人にフレンド登録にジルの名前が消えてないかと訊ねてみる。

すると案の定と言うべきなのか、フォース・リヴェルタ全員のフレンド登録から、ジルの名前が消えているのだ。

「なんでジルちゃんのデータが消えちゃってるのよ」

疑問符を浮かべるサツキに、テラスは少し考えてから思い当たる意見を挙げる。

「間違つてログデータを消してしまった、とかですか？」

「だったらいいんだが……」

ジルのログデータの消失に、運営の緊急メンテナンスの通知が（恐らく）同時に起きているのだ。

ハバキリは形容し難い胸騒ぎのようなものを覚える。

その一方でコウダイも顎に指を当てて考え込む。

「まさか……いやでも、ジルちゃんは保護されてるんだ。いくら強硬派の奴等でも、保護局に直接殴り込みが出来るはずがねえ」

コウダイは、例によって例のごとくELダイバー狩りのことを頭に浮かべたが、運営の保護管理局によって保護されている以上、それは無いと頭を振る。

「……ちよつと、ログインしてみようか」

ここで考えても仕方ないと踏んだのか、セアは荷物を纏め始める。

確かめないことには何も分からない、とこの場の全員が思ったようで、六人でダイブルームの使用許可を得てから、デイメンションへログインした。

ログイン後、ハバキリとセアは保護管理局へ、コウダイとエミル（メグミ）がフォースネストへ、サツキー（サツキ）とステラ（テラス）がベースエリアの外周りへと、それぞれ三手に別れて行動を開始した。

コウダイとエミルはフォースネストに入室してすぐに、ジルがいないことと、いたような痕跡も見当たらないことを確認する。

「フォースネストに来た様子もなさそうだな」

ソファアの上に鎮座しているティデアが、昨日の最後に見た配置と変わっていないことや、テーブルの上のプッチガイのガンプラも触られたような形跡がないことも確かめるコウダイ。

「こつちもネスト中捜したけど、やっぱり見当たらないね」

落胆に声を落とすエミル。

「となると、とりあえずこつちはハズレだな」

とにかく、フォースネストにはないことを他四人にメールを送ってから、二人ともフォースネストの周りからジルを捜し始める。

ハバキリとセアは、ELダイバー管理保護局の局番に通話を繋いでいた。

数秒のコール音の後に、受付の局員の顔がモニターに表示される。

『こちら、GBNのELダイバー管理保護局です。ご用件をどうぞ』

「もしもし、ダイバーのハバキリと言う者です。えーと、そちらの保護局に、ジル……短いピンクの髪のELダイバーが保護されていますね？」

『確認致しますので、少々お待ちください。……………はい、ELダイバーNo. 13

6『ジル』さんですね』

「そのジルにメールを送信しよーと思っただんですが、何故か彼女のフレンド登録データが消えておりました……そちらに何かシステムエラーはありませんか？」

『いえ、こちらでは特にシステムエラーは確認されておりませんが、再度システムエラーが無いか検査を行わせていただきますね。それと、ジルさんでしたら、午前11時頃に

外出許可を取られております』

「……外出許可を、取ったんですね」

『はい、間違いありません。これよりシステムエラーの有無を確認しますので、確認完了後に折り返しご連絡をさせていただきます。いただいてもよろしいでしょうか』

「あー、はい、お願いします。失礼します」

やや切り詰めるように通話を切るハバキリ。

通話終了を終えてセアに向き直ると、その彼女の顔は青褪めている。

「外出許可を取ったってことは、もしかしてジルちゃん、一人で出掛けたんじゃない!?」  
「その、可能性は高そうですね。フォー스ネストにいないとなれば、ジルが行きそうなところは……」

最近前後で、ジルがよく出入りしている場所。

それは、ひとつしかなかった。

「アクセサリーショップ」

ハバキリとセアの声が重なると同時に、コンソールが通話の着信を告げる。

保護管理局からの報告かと思えば、ステラからの通話だった。

「もしもし、どーしたステ……」

『兄さんっ、大変です!』



通話越しのステラの声音は、本当に慌てている時のそれだった。

何か分かったのかとハバキリが問い質そうとするよりも先に、ステラが続けた。

『ジルちゃんが通っているアクセサリーショップに行ったんですけど、これっ、見てく  
ださい！』

ステラは短い動画をハバキリに送信した。

それをすぐにタップして、動画を再生する。

アングルから見ても、どうやら監視カメラによるもののようなだ。

アクセサリーを完成させたジルが、嬉しそうに店を出た、その瞬間に運営のダイバー達に取り囲まれ、スタンガンを撃ち込まれて気絶させられ、そのまま拘束用のバリアフィールドに包み込まれ、連れ去られてしまった。

ここで動画は終了だ。

「……は、ハバキリ、くん」

セアは震えた声で彼の名を呼ぶが、

「セアさん、すぐに他の奴らにフォースネストに集まるように伝えてください」

ハバキリは至極冷静に指示を飛ばしてきた。

「オレは運営と保護管理局に、この動画を提出しに行きます。それが終わったら、オレもフォースネストに向かいます。いいですね？」

「う、うん、分かった」

セアはすぐにフォースネストへと移動していった。

それを見送ってから、ハバキリは——

「これが、てめーのやることなのかよ……トローシローツ!!」

今ここにいない、かつての最高の戦友へ怒りを込めて壁を殴った。

### 【次回予告】

コーダイ「ジルちゃんが誘拐されたってのは本当なのか!？」

ステラ「間違いないです、監視カメラにだってそう映ってましたし……」

サツキー「なんで……なんでこんなことになるのよ!？」

ハバキリ「……」

エミル「ハバキリ、何か言いたそうだね？」

ハバキリ「ちよーっと、信じられねー話をするな……」

セア「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション、

『叛乱』

?????

『さあ、準備は整った。雌雄を決しよう、ハバキリ』

## 21話 叛乱

バーテンダーとトラちゃんの即興演技によって、爆笑するマイマイと戸惑うケンさん。

「ハツハツハツ……まあ、中の人に關する話はその辺にしておいて、だ」

頃合いを見計らって、トラちゃんは別の話題を持つてくる。

「マイマイは当然だが……姐さんよ、覚えているか？」

「ん、何かしら？」

何のことかと聞き返すバーテンダー。

「ちょうど一ヶ月前になるな……例の、『運営の内乱』だ」

それを聞いて、マイマイは目を細め、バーテンダーもグラスを磨く手を止めた。

ケンさんだけはこの剣呑な空気を読み取り、黙って我関せずを決め込む。

「そうねえ……ちょうどあの時は、緊急のメンテが入るからつてその日は別の予定を入れていたのよ。日付けが代わってログインしてみたらもう祭りの後だったから、アタシは何もしてないし、知らなかったんだけど」

後から自分の伝手と言う伝手から情報を集めてたわね、とバーテンダーは息をつく。

「運営本部を中心とした『正規軍』のGBNガードフレームは一万機を上回る大部隊。対する『反乱軍』はNPDRリーオーなどを含めてもせいぜいが二千機ほど。五倍近い戦力差など、普通なら覆せはすまい？」

「まあ無理ね。……その戦いが、『普通の戦い』ならそうはならなかったんでしょうけど」  
古来より起こり得る戦は『戦力の少ない方が勝つ』ことが多いとされているが、それは歴史上の人物を脚色するために誇張されているケースが多分に含まれている。

実際ガンダム作品においても、一年戦争におけるジオンが国力30倍の連邦に勝つことは出来ず、グリプス戦役でも連邦軍がエウーゴに肩入れするようになったことでティターンズは壊滅（ティターンズ内における内乱が原因ともされる）。

第一次ネオ・ジオン抗争（ハマーン戦争とも呼ぶ）も結局は内乱によって自滅同然に終わり、第二次ネオ・ジオン抗争でも、ロンド・ベル艦隊だけでなく、連邦宇宙軍全軍で迎え撃てばアクシズは地球圏に到達することもなく終結したとされている（諸説、異説多数あり）。

「うむ。数の不利を覆せるようなご都合主義が罷り通るのなら、鉄血のオルフェンズも『レギンレイズジュリア大勝利！希望の未来へ、レディー・ゴー！（苦笑）』と言う結末で終わることはなかったらうな」

まあそれは置いておこう、とトラちゃんは話の腰を戻す。

「……先にも話したが、『ニュータイプ』が戦争の優劣を決めることもあると言うのは間違ではないな」

「あの一ヶ月前の内乱は、末端の一部の暴走だったとはいえ、運営最大の汚職ね。何せ……」

バーテンダーは溜息で一拍置いた。

「『適正のあるE.L.ダイバーを』強化人間』に仕立て上げ、そのデータで作り上げたコピー体達を』ニュータイプ部隊』と称した』んだもの」

ステラが送ってくれた動画を、運営への通報と保護管理局へ送信してから、ハバキリはりヴェルタのフォースネストへ向かった。

到着するなり聞こえたのは、コーダイの怒鳴り声だった。

「……どう言うことか説明しろッ!!」

何故彼が怒っているのか、大体の察しはついている。

「落ち着いてコーダイ、怒ると判断力を失う」

諫めようとするエミルだが、コーダイの怒りは収まる気配がない。

「ジルちゃんが誘拐されたんだぞ?!これが落ち着いてられるかッ!」

怒り心頭のコーダイと向かい合っているのはステラ。

「説明も何も、この動画の通りとしか言えません……」

動画だけでは、どこの誰がジルをどこへ連れて行って何をするつもりなのかは全く分からないのだ。

「……少なくとも、ELダイバーの存在を疎ましく思っている者達による仕業だろうが。」

「あたしとステラちゃんがアクセサリーショップに着いた時にはもうジルちゃんはいなくて、その場に残ってたのは、ジルちゃんが作ったネックレスだけだったのよ」

「サツキーはテーブルに、ジルが作ったばかりの複数のネックレスをテーブルに並べる。」

セアのダイヤモンド。

コーダイのガーネット。

サツキーのエメラルド。

エミルのサファイア。

ステラのブラックオニキス。

ジルのパール。

「……ひとつ、足りなくないか？」

エミルは六つのネットワークスを見て、違和感に気付く。

ジルを含めたフォース・リヴェルタのメンバーは、合計で七人いる。

「確か、オブシディアン……兄さんのぶんのネットワークスが無……」

ステラがあと一つ足りないそれが誰の物かを挙げようとするが、コーダイはテーブルを叩いてそれを黙らせた。

「んなことは今どうでもいいだろ！」

それよりもジルちゃん本人のことだ、と続けるコーダイだが、真つ先にサッカーがその発言に喰って掛かる。

「どうでも良くないわよ！ジルちゃんがこれを作るのにどれだけ頑張ったと思ってるのよ!?!」

「無くしたんなら作り直しやいいだろ!?! アクセサリーの話をして、ジルちゃんが帰って来るんならいくらでも話してやるよ！」

「はあ!?! バツカじゃないのあんた！それでジルちゃんが帰って来たらっ、こんなことになつてないっての！」

ジルが彼らのために作ったアクセサリーのことも大事だが、それを気にしたところで事態は解決しない……コーダイとサッカーも分かっているはずだが、エスカレートし始



めた感情はそう簡単に止められるものではない。

今にも取っ組み合い殴り合いでもするのではないかとエミルが動こうとするが、

「二人とも喧嘩はやめて!!」

フォースリーダーであるセアが金切り声でそれを強引に仲裁する。

「……二人が喧嘩しても、ジルちゃんは戻ってこないよ」

結局は、そこなのだ。

ジルがいなくなった、それがどうだこうだと騒ぐばかりで、具体的な行動には出ていない。

セアのその言葉を境にして、ハバキリはフォースネストに入室した。

「悪い、今戻った」

自分を除いた五人の視線が集まるのを確認して、ハバキリは決心する。

「……今からオレが話すことは、恐らくジルに関係することだと思う。とりあえず聞いてくれ」

ハバキリが話すことは三つ。

一つ目は、かつてのフォース『アルディナ』のリーダー、トーシローが素性を隠して運営の過激・強硬派に所属していること。

二つ目は、ナオエと共にホンコンシティのある場所を調査した時に『複数のジル』を発見してしまったこと。

三つ目は、トーシローとその複数のジルが、自分達の敵になって襲い掛かる、もしくは立ち塞がる可能性が高いこと。

以上を話し終えて、コーダイが真つ先に椅子を蹴り倒した。

「……どうしてそれを今まで話さなかつたんだよ!？」

「言えばトーシローのことはともかく、ジルへの不信任を煽ることもなる。簡単に口外するわけにはいかねーだろ」

「だからってな……」

ハバキリとコーダイの二人の口論になりかけるところで、エミルが「ハバキリ、ちよつといいか」と声を掛ける。

「これはボクの想像の範囲に過ぎないけど……前にゼダンの門で、病院船を破壊したらジルちゃんが苦しんでいたことがあつたな?」

「あー、あの時アレか?」

エミルがまだ正式にフォース・リヴェルタに所属する前、ゼダンの門でのミツシヨンの最中に病院船が出現し、それを追う紅いパラス・アテネと交戦した時のことだ。

「あの病院船……もしかしたら、さっき言ってた『複数のジル』ちゃんがいたのかもしれない。ジルちゃんはその時、声がたくさん聞こえるって言ってたし、可能性はあると思う」

「……99%自分と同じ存在が近くにたくさんいて、それを虐殺されたら、発狂したくもなるか」

それはまるで、海賊船に偽装した貨物船と同じではないか。

その積み荷が、ジルのコピー体とも言えるようなもので、彼女が今、何者かに誘拐されたとなれば。

「どうにも、ボク達はものすごく厄介なことに巻き込まれているみたいだね」

「自分達は運営の者である」と公言出来ないものを積み、その積み荷の破壊（或いは奪取）を狙う勢力との抗争。

自分達はその渦中にいるのではないかと、エミルは呟く。

「……今のハバキリくんの話は驚いたけど、重要なのはそこじゃないよね？」

セアは話を進めようとして、ハバキリはすぐに意識を切り替える。

「そーです。いくら現状確認したって事態は変わりませんしね」

ハバキリはフォースネストのコンソールを打ち込み、電灯を落としてモニターを起動させる。

何も表示されていない無地の画面に、ハバキリが文字を打ち込んでいく。

「ジルがどこに攫われたのか。ハッキリ分かっているわけじゃねーが、怪しそーなところの大体の目星がコレだ」

・アーモリー

・オデッサ鉾山基地

・ジャブロー

・フラワーズのフォースネス

・ゼダンの門、及びアクシズ

・ポイントX666S（セアとトローシローが遭遇した地点の周辺）

・ホンコンシティ

・百花繚乱の特設会場

ハバキリが挙げたこれらは、『ジル』、『過激・強硬派』、『トローシロー』の三点のいずれかが関係した地点である。

無論、あくまでも大体の目星に過ぎないので、挙げたこれらが全てハズレの可能性もあるが、僅かでも可能性があるならば探らなくてはならない。

「心当たりのある場所を片っ端からか、まさに人海戦術だな」

コーダイは腕を組みながら頷く。

ジルを除けば、今ここにいるのは六人。

ここから手分けして捜すのだ。

ハバキリは該当地点とメンバー達を見比べて、それぞれに合った指示を出す。

「まず、セアさんはアーモリーと、フラワーズのフォースネストにアポを取ってください。特に、アーモリーの方は周辺区域も嚴重注意を」

「うん、分かった」

次にコーダイ。

「コーダイはオデッサを頼む」

「奴らの攻撃を受けた地点だな、よっしゃ」

次にサツキー。

「サツキーはホンコンシティ周辺を探ってくれ」

「あの怪しい施設を調べたらいいの？」

「いや、あそこは陽動があったから上手く行ったただけだ。もう一度つてのは難しーかもしれん。港周辺と、あと聞き込みを頼む」

彼女が頷くのを見てから、エミルへ。

「エミルはゼダンの門宙域周辺の調査を頼む。あと、近くにアクシズがいるなら、そこもな」

「あまり思い出したくないけど……了解」

セア、コーダイ、サツキー、エミルの四人への指示を終えて、ステラが拳手する。

「兄さん、私は何をすればいいですか？」

「お前はオレと一緒にジャブローに行く。ほとぼりは冷めてると思うが、前の百花繚乱の時に発狂した狂信者どもが彷徨いてるかもしれないねーからな。あと、オレの補佐役な」

「……つまり私は、兄さんと一緒に一番危険なところに行くつてことですね？」

「おー、賢い妹でお兄ちゃんは嬉しいぜ」

「なんだか複雑です、と嘆息をつくステラを尻目に、ハバキリはパンツと手を叩く。

「ジルが誘拐されてキレてんのはみんな同じだ。もちろんオレもな。でもキレてる暇があつたら、出来る事やれる事をひとつでもやった方がいい。こーしてる内にも、強硬派のあんぼんたんでもは要らんことをやらかしてるけど、保護局や運営の本丸も、もしかしたら力を貸してくれるかもしれん。……泣いて喚いてキレるなら、全部終わつてからでもいいーだろ？」

この場にいる全員が、ハバキリの言葉に耳を傾けている。

「ほれ、みんな何ボサつとしてんだ。行くぞステラ」

「あつはい」

ハバキリに連れられ、ステラがフォースネストを後にしていく。

それを見送ってから、サツキーもパツと席を立った。

「あたし、ナオエさんと連絡取ってみる。何か知ってるかもだし……」

ナオエとの通話を繋ぎながら、彼女も格納庫へ向かう。

「シャトルと長距離ブースターをレンタルしてきます。宇宙で長時間活動するなら、準備も掛かる」

エミルもすぐに行動に出る。

フォースネストに残っているのは、セアとコーダイの二人。

「強いんだね、ハバキリくんって」

そう言ったのはセアだった。

ジルが誘拐されたと知って、それでも怒りも焦りも見せずに、的確な判断と指示をしてみせたのだ。

しかし、コーダイはセアの言葉を肯定出来なかった。

「……そうですかね」

「コーダイくんの方が知ってるでしょ？」

「いや……」

首を横に振るコーダイ。

「あいつね、他人に……妹のステラちゃんにさえ、自分の内面を見せないようにしてるん

ですよ。ハバキリはそれを隠してるつもりみたいですけど……もしかしたら、俺達の見えないどこかで、怒ったり泣いてるのかもしれない。もし、気付いたらでいいんで、ハバキリのこと気に掛けてやってくれませんかね」

「……うん」

セアもコンソールを開き、格納庫へ向かう。

残るはコーダイ一人だが、彼はまだフォースネストを出ない。

出来る事があるならそれをやれと、ハバキリに言われたことを実践するために。

格納庫に並ぶリヴェルタのガンプラ達。

ステラはその中にあるノーベルガンダムに乗り込み、メインカメラに視界を映す。

その向かいには、まだ未完成だがスキャンさせてダイブしてきたハバキリの新たなジンライがハンガーから降ろされる様子が見える。

「兄さん、そのガンプラってまだ未完成なのに使って大丈夫なんですか？」

「んー……色々とりあえずの間に合わせ品を使ってるが、今回は戦闘するわけじゃねーんだ。いざとなったら逃げりゃいい」

そう言つてのけるハバキリのジンライは、いかにも間に合わせでございと言わんばか



りのものだった。

胴体部は軽量化とアタッチメントの増設によって一回り小型になっている。

肩から腕に掛けては、ジンの腕装甲の中に無理矢理HGIBOのガンダムフレームを組み込んだようで、やや歪な形状をしている。

腰部から脚部は、HG SED系の本体規格を中枢としてギラ・ズール【親衛隊仕様】のものがほぼそのまま移植され、フット部だけは元のジンハイマニューバのものを使われている。

バックパックは、脚部と同じギラ・ズール【親衛隊仕様】のものを使用し、シースザンバーはリアスカートに懸架させてちる。

左手にはジンライ改から使い続けてきたアサルトライフル。

これだけでも十分な性能を発揮出来るように見えるが、ハバキリ曰く「これなら元のジンライ改の方がまだマシ」と言い捨てるほどだ、性能は上がっているかもしれないが、どこに弊害が生じているか分からない。

「私が先に出ますね。……ステラ、ノーベルガンダム、行きます！」

リニアカタパルトから打ち出されるノーベルガンダムを見送ってから、ハバキリ機も続く。

「機体銘なんざまだ考えてねーんだがな。ハバキリ、『ジンライ改式』、出るぞー！」

機体銘もとりあえずだ。

ジンライ改式は、先行したノーベルガンダムを追って発進する。

サツキーはガンダムデスレイザーを飛行させながらも、現実世界側にいるナオエと連絡を取っていた。

ジルが強硬派の手によって誘拐されたことと、今自分達がジルの足取りを追っていることも伝える。

「……………つて言うことなんですけど」

『ふむ……………』

サウンドオンリー画面の向こう側で、ナオエの考え込むような呟きが聞こえる。

『サツキーさん、元ゲームマスターのカツラギ氏が、悪質なRMTの疑いで検挙にかけられたことは知っているかな?』

「あ、知ってます。ニュースとかでもよく取り上げられてましたし。なんで、ログデータには不正行為しか残ってなかったんですね。足が付かないようにするなら、都合の悪いことは真っ先に証拠隠滅するのが普通なのに……………」

『……………不正行為の記録しか残っていなかった?他の記録は何も無かったのか?』

サツキーの意見を聞いて、一瞬だけナオエの言葉が止まる。

「だから何か変なんですよ。そんなのまるで「自分はこんな悪い事をしましたよ」って自首してるとような……」

『そういう事かッ?!』

不意にナオエの音量が増して、サツキーは驚いてたじろぐ。

「なっ、なに、どういう事ですか?」

『すまんねサツキーさん、急用が出来たから切らせてもらおうよ』

「えっ、ちよつと！何が分かったのか教えてくだ……」

彼女が言い終えるよりも先に通話を切られてしまった。

「……まあ、後で教えてくれるでしょ」

そろそろホンコンシティに到着する頃合いだ。

サツキーはコンソールを閉じて、ガンダムデスレイザーの操縦に集中する。

フォー스ネストで『やるべきこと』を終わってから出撃、オデッサ鉾山基地に到着したコーダイは、高台から搜索を開始する。

もしジルがここ周辺に連れ去られたのだとしたら、どこかに怪しげな基地があるはず

だとコーダイは予想していた。

キヤノパルドのフットローラーを駆動させつつ、リーダーと目視確認を見比べる。

「(にしても、まさかトーシローが運営の強硬派の奴等の中にいたとはなあ……)」

ハバキリは以前から知っていたようだが、何故それをもっと早く教えてくれなかったのか。

下手なことをして混乱させたくないと言う、彼なりの配慮のつもりだろうが、それは余計な世話というものだ。

「(俺達を守るために、敢えて強硬派の一部に取り入るか。分かんんでもねえ話だが……)」

不可解なのは、何故二度もハバキリに攻撃を仕掛けてきたのか、だ。

一度目はジャブローで、二度目は『ポイントX666S』で。

ハバキリは、その真意が分からない以上はトーシローの全部を信じることは出来ないと言っていた。

彼は一体何を目的に動いているのか？

「……っと、それは後回しだな」

今は搜索と操縦に集中しなきゃな、とコーダイはアームレイカーを握り直す。

意識片手間で操縦して、事故でも起こそうものならハバキリに笑われる。

セアは未完成のフルドレスフリーダムガンダム（仮）ではなく、エンハンスドガンダムMK-IIで出撃していた。

行き先は、彼女の初めてのミッション『怒れるモノアイ』を行った場所である、アーモリー。

もしもあの時、ハバキリが操縦を代わってくれなければ、どうすればいいかも分からず、ジルを助けることが出来なかったかもしれない。

それからまだなのか、もうなのか、二ヶ月以上も経っている。

「あつという間の毎日だったなあ……」

GBNを始めてからの毎日は、本当に過ぎるのが早く感じる。

それだけ充実した日々だったのだろう。

そんな楽しくて充実した日々を送ってこられたのは、自分自身だけでない。

ハバキリがいて、コーダイがいて、サツキーがいて、エミルがいて、ステラがいて、そして、ジルがいてくれたから。

だからこそ、ジルが誰かの好き勝手のために利用されていいはずがない。

戦闘を行った場所であるアーモリーに到着。

しかし、見たところは何の変哲もなさそうだ。

セアはコクピットから降りて、生身で探索を行うことにした。

NPDリーオーが納められている格納庫内や、その周りを注意深く見回してみるが、これと言ったジルの痕跡や足跡は見つかりそうにない。

ここはもう探索済みとしてエンハンストガンダムMK-IIの元へ戻ろうと、格納庫の出入り口へ振り返ろうとして、その近くに転がっているコンテナーその中からはみ出している何かが見えた。

セアはそれに近付いてしやがみ込み、注視してみる。

「これは……?」

消えかかっているそれは、何かのデータ片だった。

コンソールを呼び出し、あるコマンドを入力する。

『サーチモード』と呼ばれるこのコマンドは、カメラ機能を利用し、ダイバーの目視だけでは視認出来ないような情報を確認したりすることが出来る。

実は、これを使うことで光学迷彩なども見破れるのだが、ガンプラに搭乗した状態では、機体のカメラを通すファイルターがかかることになるため、この恩恵は受けるにはコクピットから生身を晒す必要があるのだが、戦闘中でこれをやろうものなら、狙ってくださいと言っているようなものだ。

セアはこのサーチモードを使って、足元に転がっているデータ片の情報を読み取って  
いく。

『e d a i l . 1 3 6 : z 』

『精 s t : 不 a 』

『γ r i f e p n を f 用 : t g 1 8 昇』

『空 n n 力 : 7 1 % 7 % n s 』

『m モリー 枢 s n : k w 確 n 』

『s 正 k ち を 服 y : h 損 n 修 s 』

『サ k エ ブ 測 t : 7 9 ↓ 9 3 % 』

所々が文字化けや虫食いになっており、これだけでは内容がよく分からない。

しかし、ハバキリ達にこれを見せれば、何かが分かるかもしれない。

セアはサーチモードを切り、そのデータ片を回収してから、アーモリーを後にした。

この後は、フラワーズと会うために。

長距離ブースターと連結されたシャトルに七星剣士エクシアを載せたエミルは、マス  
ドライバーから打ち上げられて大気圏を離脱している最中であつた。

行き先はゼダンの門宙域。

「まあ、可能性は低い方だと思うけど」

何せゼダンの門の周辺宙域は、一度襲撃を受けているのだ。

航路が割り出されると分かっている、なおかつ他に道がいくつもあるのなら、わざわざ危険な可能性の高い航路を取るはずがない……しかし「二度も同じ航路を取らないだろう」と言う心理的な裏を考えれば、「高くはない」可能性もある。

それと同じ理由から、サツキーが向かったホンコンシティも同じだろう。

重力の振り切りに成功、進路を微調整しながらエミルは速度を少し落としてから、コンソールを開いてメールの画面を呼び出す。

自分達の一大事だ、”彼ら”ならきつと力を貸してくれるはずだ。

ゼダンの門へ接近する頃には、メールの本文の入力を終え、各人へ送信を完了。

少しだけ気を引き締めて、ブースター付きシャトルから七星剣士エクシアを発進、ゼンサーの範囲を広げつつ搜索を開始する。

ゼダンの門の周辺をぐるりと一周しても、特に変わったものは見つからず、アクシズも近くに来ていない。

どうやらここはハズレかな、とエミルは搜索を切り上げようかと思つた時。

七星剣士エクシアの視界に、巨大な筒状のソレがゼダンの門の近くを通過しようとする



る光景を捉える。

「……コロニー？」

エミルが見間違いでもしなければ、それは紛れもなくスペースコロニーのそれだった。

何故こんなところに、とエミルは七星剣士エクシアを加速させて、そのコロニーへ接近する。

どうやら廃コロニーのようで、予備電源は生きているようだが熱源などは感知されない。

何かのミツシヨンで使われるために移動してきたのだろうか。

「……何もない、とは思うけど」

一応、一応確認するだけだ、と言いつがましく言い聞かせるのは、得体の知れない胸騒ぎがするからか。

ウエポンフォルダにソードライフルを先頭に回してから、エミルは廃コロニーに取り付いた。

外壁を伝い、コロニーの外部ハッチに移動していく。

ハンドルを回してハッチを開けて、コロニー内へ進入。

気密状態が為されているのを確認してから、エミルは七星剣士エクシアのコクピット

を開ける。

「酸素は薄いけど……生身でも大丈夫そうか」

懐に拳銃を忍ばせつつ、エミルは機体から降りて通路を進む。

コロニーの港エリア付近に接近すると、話し声が聞こえてくる。

それを耳にしたエミルは一度そこで足を止めて、通路の角からその先を覗う。

そのすぐ下にはドックが広がっており、そこら一帯を支配するかのよう流線型の紅い戦艦のような機体がハンガーに掛けられている。

「戦艦……グワシリーズやレウルーラ、サダラーンでもないな」

ドックのキャットウォークでは数人のダイバーが話し込んでおり、エミルは耳を傾ける。

「……では、作……始は……18……言う……」

「うむ、……同時に……イプ部隊を降下、……まま……部を制圧……」

何かの作戦の確認をしているようだが、距離があるせいで上手く聞こえない。

「(ここからじゃ上手く聞こえないな)」

ここは諦めて他を探るべきかと考えた時、

「失礼します！プロト01の再調整が完了しました！いつでも搭乗可能です！」  
後から来たハキハキとした声の男は、ノーマルスーツに身を包んだ小柄なダイバーと共にキャットウォークに歩み寄ってきた。

「ご苦労だった。他はどうか？」

「ハッ、大気圏突入オプシオンも含め、全て実戦投入可能な状態にあります！」

無駄に大きくハキハキとした声のおかげで、エミルにもよく聞こえる。

「プロト01の再調整……、大気圏突入オプシオンも含め、全て実戦投入可能な状態……」

再調整、と言う言葉を耳にして、あまり考えたくない想像をしてしまう。

そこから先は一度棚上げすることにして、エミルは踵を返して来た道に戻る。

七星剣士エクシアに乗り込み直し、コロニーの外へ出る。

怪しいコロニーを発見したことを、ひとまずフォースメンバーに伝えようとメール画面を開こうとして、視界に映った光景にその手を止める。

「制動を掛ける？こんなどころで？」

このコロニーは明らかに方向制御用のバーニアを噴射している。

方向転換が完了してか、コロニーは再び慣性で移動する。

その進路は……地球だ。

ジャブロー上空に進路を取るジンライ改式とノーベルガンダム。

「兄さん、機体の調子はどうですか？」

先行するステラが、ハバキリと通信を繋ぐ。

「……とりあえず、スピード出しても空中分解はしなさそーだ」

今のところは問題ねーな、とハバキリは返す。

ジンライ改式の各部スラスターは正常に蒼炎を吐き出しており、機体のバランスも不安定ではない。

尤も、不安定ではないだけで、安定もしていないのだが。

ジンライ改式のモノアイが、広大なジャングルを捉える。

「降下するぞ。ステラ、付いてくれるな？」

「兄さんがバカみたいに飛ばさないなら、大丈夫ですよ」

「よし。んーじゃ、行くか」

ハバキリはやや下向きにアームレイカーを押し出し、ジンライ改式は下方へ向けて加速、一步遅れてステラのノーベルガンダムも続く。

今はミッション中ではないため、対空砲火が飛んでくることもなく、ハバキリとステラは何ら苦勞することなく滑走路に着陸しようとした、

その時、ハバキリとステラ、共々アラートが反応する。

「敵!」

ステラのノーベルガンダムは着地すると同時にビームソードを抜き放つて臨戦態勢を整える。

ハバキリのジンライ改式はアサルトライフルをその方向へ向ける。

前方より現れるのは、この白昼の空に浮かぶ太陽のような白銀の姿。

ステラはそれが何かは分からなかったが、ハバキリはそれを見て、敵意によって目を細める。

それは、トールシローのジム・クウエルロウ……だが、以前に見たゼク・アインへの偽装体ではない、明らかに戦闘力を高めるための改造が施されている。

まず目につくのは、『サンダーボルト』版のジムを思わせるバツクパツクから伸びたフレキシブルアームと連結された一対のシールド。

両腕にはギャプランのムーバブルシールドをコンパクトにしたような、ビームライフルをマウントした盾。

脚部は一見変化が無いように見えるが、アポジモーターの配置から見ると、ブルーデイスティニー系列の物が移植されている。

機体銘も変更されているのか、コンソールには『ジャツジムメント』と表記されてい

る。

身構えるジンライ改式とノーベルガンダムの前に堂々と着陸する

「……今度はゼク・アインに偽装もしねーでいきなり来たか」

回線をオープンモードに切り替えつつ、ハバキリはジンライ改式を一步前に踏み出させる。

すると、ジャツジムメントの方からも通信が届く。

『君ならここに来ると信じていたぞ、ハバキリ』

「その言い方からすると、オレがここに来るのを最初から読んでやがったか。……なら話は早えーな」

アサルトライフルの銃口を向けながら、ハバキリはトーシローに問い掛ける。

「トーシロー。ジルをどこに連れてった？三秒以内で答えろ」

どーせ答える気は無いだろうが、と決め付けつつ最初の一秒目のカウントを取ろうとした時、

意外にも率直な答えが返ってきた。

『彼女なら今、宇宙にいる』

「宇宙……ってことは、ゼダンの門の方だったか」

アタリを引いたのはエミルかもしれない。

「……で？それを簡単に教えてくれるってことは、ここから生きて返すつもりはねーってことだな？」

ジンライ改式のマニピュレーターがアサルトライフルのトリガーに掛けられる。

『想像に任せよう』

対するトーシローも、両腕のビームライフルを構えさせる。

「ステラ、こいつは生半可な相手じゃねー。お前は先にフォースネストに戻ってろ」

「大丈夫です。援護くらいなら私にだって……」

「要らん。邪魔だ。帰れ。……さもなきやオレがお前を撃墜せにやならん。オレに余計なことさせんな」

ハバキリは低くドスの効いた声でステラを脅す。

トーシローの実力は知っている。

だからこそ、一人で戦う方が良い。

聞き慣れない兄の声色に身を竦ませ、ステラはノーベルガンダムのビームソードを納め、機体を反転させてジャブローから離脱する。

ノーベルガンダムを見送ってから、ジンライ改式はアサルトライフルを構え直す。

「さーて、邪魔はいなくなつた。二人きりのデートと洒落込もうじゃねーか」

『……待ち侘びたよ、この時をな』

アサルトライフルとビームライフルが睨み合う。

………

………

………

ふと吹いた風に、木の葉が舞った。

その木の葉が、ジンライ改式とジャツジムメントとの間に舞い降り……

銃弾とビームが交錯した。

互いの一発目は挨拶代わり。

ハバキリは瞬時にアームレイカーを引き下げてジンライ改式をバックホバーさせて距離を少しだけ取る。

対するジャツジムメントはサブアームのシールドでアサルトライフルの銃弾を防ぎ、一対のシールドの隙間からビームライフルを連射する。

左右から次々に放たれるビームをジグザグにホバーさせながら回避し、接近しながらもアサルトライフルを撃ち返すジンライ改式。

一箇所を狙った射撃ではなく、散発的に銃口のズレた射撃だが、これはハバキリが意図的に銃弾を散らしているのだ。

サブアームによる制御はマニピュレーターを必要としないために、一度に複数の武装



を使用可能ではあるが、その分操縦系統が複雑化し、ダイバーの負担が掛かる。

これを防衛しようものなら、シールドを制御するためにダイバーに細かくて煩雑は操縦を強いることになって神経を擦り減らし、無視して銃弾を受けようものならガンブラ自体へのダメージは少なくとも、「被弾している」と言う認識を植え付けさせて精神衛生を害する、と言う二段構えのストレスを与える。

ジャツジムメントは、メインカメラや関節部と言った被弾に脆い部分だけをシールドで防ぎ、それ以外は装甲の厚い部分で受ける。

ダイバーの操縦は最少限に、ガンブラの被弾も最低限に。

理想的な捌き方とも言うべき形だ。

ジンライ改式はアサルトライフルを撃ちながらも右手に重斬刀を抜刀、ジャツジムメントとの距離を詰めていく。

接近してくると知るや否や、ジャツジムメントは頭部バルカンで牽制しつつも左マニピュレーターを左脚へ伸ばし、脚部内に格納されたビームサーベルを抜き放つ。

牽制射撃のバルカンの銃弾を、ジンライ改式は構わずに受けながら突進、真つ直ぐにジャツジムメントへ迫る。

瞬間、重斬刀とビームサーベルが衝突し、耐ビームコーティングとメガ粒子の刃が干渉し合う。

罅迫り合うことはなく、ジンライ改式はすぐにその場から飛び下がり、その0.2秒後には右サブアームシールドが振り下ろされた。

あのまま足を止めていたら、横殴りの一撃を受けて体勢を崩し、ビームサーベルで止めを刺されていただろう。

飛び下からせたジンライ改式を安定させつつ、着地させると同時に加速、大きく回り込むようにジャツジムメントへ接近しながらも、ハバキリはトーシローに問い掛ける。「ここにはオレとお前以外は誰もいねーさ。だから答えろトーシロー、何がしたくてこんなことをする？」

回り込むジンライ改式に対してジャツジムメントは左右のビームライフルを連射し、踏み込んでくるタイミングを計る。

「強硬派のドアホどもに協力して、連中の汚職の片棒担いで、ついでにこーしてオレに喧嘩を売ってくる……オレもお前もニュータイプじゃねーんだから、言わねーと分かるねーぞ」

連続出放たれるビームを掻い潜り、ジンライ改式は踏み込みと共にスラストを点火、瞬時に加速してジャツジムメントとの距離を詰める。

『そうだな、その通りだ。言葉を交わさないから誤解が生じる』  
迎撃にビームサーベルを薙ぎ払うジャツジムメント。

しかし、その寸前にジンライ改式は跳躍、薙がれたビームサーベルを飛び越え、そのままジャツジムメントの頭部へ飛び蹴りを喰らわせる。

『……だがつ、言葉にすることで不必要な擦れ違いが生じることもある！』  
蹴り飛ばされて崩れた姿勢を強引に立て直すトーシロー。

その瞬間には既にジンライ改式が重斬刀を振り降ろして来ており、ジャツジムメントは左のサブアームシールドを突き出して防ごうとするものの、ハバキリの手によって文字通り“鍛え”られた一閃は、丹念に加工が施された防盾すらも容易く叩き斬るが、ジャツジムメントを仕留めるには至らなかつた。

「（今のはヤツの操縦によるものじゃねー……肉迫攻撃に対する自動近接防御か？）」  
恐らくは、敵機接近に対してダイバーの操縦が間に合わない判断された場合に限り、自動操縦だろう。

それを瞬時に読み取ったハバキリはすぐにアームレイカーを捻って距離を取らせる。  
「そいつは詭弁（きべん）の類だなトーシロー、人間なんざ擦れ違つてなんぼのモンだろーが」

一拍遅れて、ジャツジムメントの反撃のビームサーベルが振るわれ、ジンライ改式の前面装甲を薄く焼いた。

「擦れ違つてはぶつかつて、手前に非がありや謝罪の意を見せる。テメーはオレのそこ

が気に入らねーみてーだが、そのどこが間違つてやがる?」

『君はいつだつてそうだ! 仲間の気遣いや善意を受け取らず、いつも自分一人で背負い込んで!』

しかしビームサーベルを躲されることは想定範囲か、ジャツジムメントはすぐに右手のビームライフルを連射する。

『あの時』もそうだった……ッ、自分一人が立ち去れば全て解決すると! そう思い込み、誰にも相談せずに行動に移した! 何故もつと僕達を信じてくれなかつたんだ!』

放たれるビームに対し、ジンライ改式は重斬刀を振るい、時には寝かせて構えて、ビームを捌いていく。

『君がフォースを抜けてから、後を追うように仲間みんなフォースを去つて行った……僕はそれが悲しくて寂しくて辛くて堪らなかつたッ!』

今度はジャツジムメント自らが接近する。

『コーダイだけは最後まで残つて一緒に考えてくれたさ、どうすればみんながフォースに戻つて来てくれるのか……』

向こうから近づいてくれるならば、とジンライ改式は重斬刀を納め、リアスカートからシースズンバーを抜き放つ。

「それが、フォースを解散させて運営のイヌに成り下がることか?」

ジャツジムメントは右のサブアームシールドで機体を守りながら、ビームサーベルをランスのように構えて迫る。

『成り下がると!?』

迫り来るジャツジムメントに対し、ジンライ改式はシースザンバーを構えた状態から動かない。

「違うってのか?」

激突……したのはシースザンバーと、右腕のムーバブルシールドだった。

今度は力による押し合いへし合いになり、ジンライ改式とジャツジムメントの膂力が拮抗する。

『僕は自分自身の意志で……ッ!』

ギヤリギヤリギヤリギヤリッ、とシースザンバーとムーバブルシールドとの間で火花が散り、互いのフット裏がジャブローの滑走路のアスファルトにめり込み合う。

「自分自身の意志で……イヌに成り下がったのか。救えねーな」

『そ、う、じゃ、ないッ!!』

拮抗し合っていた力比べ。

どちらかがこの拮抗を中断するかに掛かっていたが、その中断の時は予想外の形で訪れる。

不意に、ハバキリのコンソールが警告を発し、両腕部に赤い『DANGER!』の表示が点滅している。

「両腕装甲に過度な負荷……まさかつ」

まさか、と思った時には既に遅かった。

ジンライ改式の両腕の、補強した上で消してあるはずの『合わせ目』に亀裂が走り、真つ二つに割れた。

その装甲の下にある、ガンダムフレームが露出し、内部からスパークが漏れている。

『……不完全な機体だったのか?』

トーシローのその言葉と共に、ジャツジムメントは急に押し比べを中断して飛び下がった。

『それならもう、ここで戦う理由はない』

「はっ」

突然どうしたと言うのか。

ハバキリが疑問符を浮かべるのを余所に、ジャツジムメントは踵を返す。

『この勝負、一時預ける!』

そのままスラスターを点火させ、飛び去った。

ハバキリは反射的にジンライ改式のアサルトライフルを手に取りらせ、銃口をその背中

に向けて——撃つことはしなかった。

「オレの機体が不完全だから勝負を一時預ける、か。100%完成してたら……何をやらかすつもりだ？」

ひとつ貸しにされたな、とハバキリは溜息をついた。

とりあえずは帰還して機体の整備を行うために、ジンライ改式を飛び立たせ、ベースエリアへと向かう。

その帰り道の途中、不意に通信が何かを傍受した。

「……なんだ？」

ハバキリの操作に関係なく、勝手にその通信が開かれる。

画面に移るのは、ガンダイバーの姿をしたダイバー。

『GBNをお楽しみの皆様、そして、GBNの現運営本部へお伝え致します。私は、元ゲームマスターの『カツラギ』と申します』

「……元ゲームマスター？今は拘束されてるんじゃないかったのか？」

何故、とハバキリの中に疑念が生じる中、元ゲームマスター・カツラギのメッセージが続く。

『私は四年前に、今の運営陣にゲームマスターを引き継がせ、オブザーバーとしてのポストについておりました。ですが、翌々年に大問題が発生してしまいました。皆様もご存

知でしょう、あの『E.L.ダイバー・サラ』を名乗るE.L.ダイバーによる、運営権のハッキング事件『E.L.ダイバー動乱』を』

どうやらこのメッセージ、通信回線に強制的に割り込んで、全世界のダイバーの元へ届けられているようだ。

『あのような混乱を招いてしまい、多くのユーザーが命の危険に曝されてしまったのは何故か』

フラワーズのフォースネストに赴いていたセアにも。

『それは、当時の運営側の、E.L.ダイバーへの対応が不適切であったことに他ならないことでしょう』

オデッサ鉱山基地周辺にいるコーダイにも。

『私は、現運営の不甲斐なさに激怒しました。何故止められなかったのかと』

ホンコンシティで聞き込みに戻っているサツキーにも。

『動乱事件そのものは、多くの有志達によって終息しましたが、その爪痕はあまりにも深く、運営の者であると騙り、E.L.ダイバーを排除せよと言う声を唱えるダイバーが各地に続出するようになりました』

今、ゼダンの門付近にいるエミルにも。

『これによって、GBN全体の治安は悪化の一途を辿り、ユーザー人口は百万人以上も減



少ししました。このような現状を招いた現運営に、オブザーバーとしてハッキリと言いましよう。「これが無能以外の何であるか」と』

ベース基地に帰還してノーベルガンダムを整備していたステラにも。

『ここに至って私は、GBNはこのようなことを二度と繰り返してはならないと、確信したのです。そのためには何をすべきか……それはこの現状に対して、反旗を翻すことです』

「反旗を翻すだと……？」

反旗を翻すーつまりは、”叛乱”を起こすことだ。

『今の運営陣に、本当にGBNと、そこに生きるELダイバー達を守れるだけの力があるのか。それを試すために、私は確固たる意志の元、現運営陣へ”宣戦布告”します！』  
あまりにも堂々とした宣戦布告。

当然これは、運営本部にも届いている。

『我々はこれより自らを”反乱軍”を名乗り、11月18日に極東ベースへ攻撃を仕掛けます。これは脅しではありません。もしも現運営が対応を怠るようであれば、我々反乱軍はベースエリアの施設を破壊します。当然、ELダイバーの保護管理局にも攻撃を加えます』

つまり、無差別攻撃を行うということだ。

『現運営から見た我々は、サイバーテロそのものです。しかし、これを防げぬようでは、二千万人以上のユーザーの期待を裏切ることになるでしょう。私からのメッセージは以上になります。お時間をありがとうございました』

回線は自動的に切られ、コンソールがホーム画面に戻る。

「……」

ハバキリはアームレイカーを押し上げてジンライ改式を加速させ、ベースエリアへの帰路へ急ぐ。

先程の宣戦布告。

つまりは、『大義名分を掲げて堂々とELダイバーを虐殺する』と言っているようなものだ。

ジルは、その見せしめにでもされるのか。

ELダイバー動乱に続く、二度目の乱。

恐らく、乱は納まるだろう。

しかし、そこに至るまでの過程に、『大きすぎる損失』が起きてしまうことは、今ほどこの誰にも分からない。

## 【次回予告】

ハバキリ「みんなもさっきの演説は聞いてたな？」

コーダイ「ああ、聞いたぜ。連中、どうやら本気でやるつもりだ」

サツキー「でもこの運営の内乱に、あたし達で何が出来るの？」

エミル「それは分からない。でも、やることはやっておきたい」

セア「そうだね、今は何も分からなくても、ジルちゃんを助けられる手立てが見つかるなら」

コーダイ「そうだと思って、助っ人を呼んでおいたぜ！」

エミル「あれ？コーダイも呼んでいたの？」

ステラ「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション

『意思の名の元に』」

ハバキリ「……いやいやいや、シャレになんねーぞ。何だよ、ニュータイプ部隊って」

## 22話 意思の名の元に

適正のあるELダイバーを強化人間に仕立て上げ、そのデータを基に作り上げたコピー体達をニュータイプ部隊と称した。

そう答えたバーテンダーに、トラちゃんはコーヒを飲み干して、四度目のオーダーを行う。

「姐さん、これが最後のオーダーだ。『BEYOND THE TIME』を頼む」

「はいはい」

トラちゃんのオーダーを受けたバーテンダーは、戸棚を開けて、かなり奥の方にあるそれを引つ張り出して来る。

その様子を見ながら、マイマイは頬杖を突いた。

「運営の内乱って言っても、今だから言えるけど、結局は収束してみんなハッピーになっておしまい……だったのは大多数で、それ以外はそう言うワケにはいかなかったのよねえ」

「ああ……准将を始めとする多くの方々の尽力によって、無事にハッピーに終わったが、『命が失われた』ことにならない。0.1歩でも誤れば、今とは違う現在(いま)になっ

ていたろうな」

内乱の渦中に介入していたトラちゃんとマイマイは、その顛末を語り合う。

「で、”あの子達”は何て言ってたの？」

「言い方は様々であったが、感謝するにきれない、とだけは伝えておこう」

「そう」

トラちゃんの掻い摘んだ言い方に、詳しく問い詰めることもなく、マイマイは頷く。

「種デスのレイも言ってたもんねえ、「どんな命でも、生きられるのなら生きたいだろ  
う」って」

ベースエリアに帰還してからは、ジンライ改式の整備を行うこともなく、ハバキリはステラと共にログアウトした。

先程の、カツラギ氏の”宣戦布告”は、他のメンバー達の耳にも届いているだろう。

メンバー全員が同じ場所からログインしているのなら、わざわざGBN内で話し合う必要もないからだ。

最初にハバキリとテラス、次にコウダイとサツキ、その後にはセアと、少し間を置いてからメグミもログアウトを完了した。

ハバキリ達はダイブルームを後にしてから、一度ガンダムベースから外へと出る。

室内に居座り続けたために、吸う空気を入れ替えたいと言うこともあったが、それは建前。

実際のところは、あまり無関係な人間に聞かれたくないと言う意味合いが強い。モノレールの駅前の噴水広場のベンチに腰掛けていくリヴェルタの面々。

.....

.....

.....

しかし、皆自分から口を開く気にはなれそうにない。

無理もない、あのような宣戦布告を聞いた直後だ、何を言えばいいものか。

「なんかこの部屋、空気が悪いな。エアコンの故障かな?」

不意に、コウダイが『モンド・アカゲ』の台詞を使ってこの事態の打破を試みた。

「残念だったなコウダイ、故障してるのはエアコンじゃなくて、空気そのものだ」

そのコウダイの意図を汲み取ったハバキリは、瞬時に会話を合わせる。

「空気が故障してるってどう言うことやねん!」

「知らねーのか?今の時代、酸素と二酸化炭素はナノマシンで作られてるんだぜ?」

「人間の科学技術やべえな」

「GBNで戦争するくらいには技術は進歩してるからなー」

GBNで戦争、と言う言葉を聞いて、サツキも反応した。

「そうよ、元ゲームマスターさんが、今の運営に喧嘩売ったって……でも、ジルちゃんのこと心配だし、だからってあたし達一般プレイヤーに何が出来るか……あーんもうっ、いつぺんに色々ありすぎて混乱しちゃうっ！」

頭追いつかない、とサツキは右手で額を押さえて見せる。

サツキに続いてメグミも何か言いたそうに視線を右往左往させている。

ここにいる全員が、多少なりとも言いたいことを抱えているだろう。

それを見兼ねた上で、セアはパンツと手を叩いて音を鳴らし、全員の視線を自分に向けさせる。

「今日のところはもう解散。落ち着いてから今晚にまたチャットで連絡を取り合う。ここで焦ったって仕方がないから、今は、これでいいかな？」

そう、今は落ち着いて事態を整理すべきなのだ。

セアの全体意見に反対する者はおらず、不本意ながらここで解散となった。

帰りのモノレールから本線に乗り換えて、地元の最寄り駅へ戻るハバキリ、テラス、コ

ウダイの三人。

「……コウダイ」

その途中、ハバキリは不意にコウダイに話しかけた。

「ん、どうした？」

何気なく聞き返したコウダイだが、次のハバキリの発言に動揺を見せることになる。

「さつき、トーシローと会った」

「っ!？」

動揺を見せはしたが、すぐに平静を取り戻す。

「……そうか。それで、一戦やり合ったのか？」

「まーな。ジンライが不完全だったからって、勝負はお預けになったけど」

ひとつ借りを作られちゃった、とハバキリは鼻で溜息をつく。

「不完全だからお預けになった……ってことは」

「おー、完全に完成してたら、あいつに何が起こるんだろーな？」

「……ハバキリの言う『普通じゃない相手』ってのは、そう言うことだったのな」

ハバキリが、ジンライを極限に近い状態まで改造することに拘る理由。

彼は、「普通じゃない相手とぶつかるかもしれない」と言っていた。

それは、いずれトーシローとまたぶつかるのだと分かっていたのか、とコウダイは読



み取った。

「ー実際はそうではなく、もっと違う相手のことを指しているのだが、強ち間違いでもないー。」

「ま、その辺諸々を含めて、また今晚にだな」

「おう、そうだな」

二人はそれ以上話すことなく、テラスも口を開くことはなく、最低限の挨拶を交わしただけで、駅前広場で別れた。

その日の晩。

時刻は19時になった辺りで、コーダイがチャットにメッセージを送信したことから始まった。

コーダイ：と言うわけで、今日の大事と思う二点を挙げる。まずは、誘拐されたジルちゃんの行方。それと、元ゲームマスターによる宣戦布告だ。

サツキー：あたしも色々考えてみたんだけど、やっぱりどうしたらいいか分かんなかった。

エミル：ボクからも大事なことをひとつ。ゼダンの門に向かった時に、怪しいコロニーを見つけた。少しだけ中に潜入してみても、分かったことを挙げる。コロニーのドックに正体不明の紅い戦艦みたいなガンプラがあった。それと、プロト01の再調整の完了とか、大気圏突入オプシオンを備えているとかって聞こえた。最後に、その怪しいコロニーが、地球に向けて制動したこと。以上。

ハバキリ：詳しくは分かんないが、多分それ、コロニーを移動拠点代わりにしてるんじゃないか？地球に向けて動いてるってことは、運営本部を攻めるための準備ってことかな。

コーダイ：どうやら、反乱軍として動くってのは本当みたいだな。

セア：私からも、大事なことをひとついいかな。ちよつと画像を見せるけど……

セアが送信してきた画像とは、彼女がアーモリーで発見した、所々が欠けたデータ片だった。

そのデータ片に記録されていた内容もコピーしてテキストとして送信する。

セア：『e d a i r . 1 3 6 : z 』

『精 s t : 不 a 』

『γ リフエプンをf用：tg 18 昇』

『空 n n力：71% 7% n s 』

『mモリー 枢 sn:k w確n』

『s正 kチ を服y:h損 n修s 』

『サ k エ ブ測t:79 ↓93% 』

ハバキリ：パツ見サツパリですけど、よく読んだら何となくは分かります。もしかしてこれ、ジルの情報じゃないですか？一文目は『ELダイバーNo. 136:ジル』ではないかと。

コーダイ：三文目についてなんすけどこれ、『γクリフエプタン』って書いてるんじゃないですか？

エミル：γクリフエプタンって確か、SEEDのブーステッドマン三人に施された処置だよね？脳にマイクロチップを埋め込むってアレ

サツキー：待って。それじゃあ、ジルちゃんはただのELダイバーじゃなくて、リアルブーステッドマン、って言うか、“強化人間”ってこと!?

コーダイ：確証は無い。でも時々、ジルちゃんはニュータイプみたいな感知能力を持つてるとは思ってたけど、ひよつとすると人為的な副産物か、あるいは最初からそうなるように強化されたのかもしれない。

ハバキリ：となると、最後の文は『サイコウエーブ測定：79%↓93%に上昇』とも読み取れるな。ジルが本当に強化人間扱いされているなら、そー言う実験だつてされてるだろ。

エミル：だったら、四文目は『空間認識能力』のことを指しているかもしれない。

セア：私はガンダムの特用語はよく分からないけど、つまりジルちゃんは誰かの手によつて、ガンプラバトルに勝つための実験動物のようにされている……で、いいのかな？

サツキー：モルモットつて言うか、戦闘マシンのように改造されてるつて方が正しいかもです。

コーダイ：ハバキリが見たつて言う、『複数のジル』ちゃんが俺の想像通りなら……：ジルーちゃんつて言うEシダイバーを強化して、それで得られたデータからクローン兵を量産するつてことだろう。胸糞悪いつたらねえな。

サツキー：それつて、プルシリーズみたいにつてこと？

エミル：指し詰め、ジルちゃんのクローンを戦力化して、『ニュータイプ部隊』とでも名付けるつもりか。でも、もし本当にジルちゃんのクローン達が、ニュータイプみたいな能力を使つて戦つたら……

ハバキリ：運営の“正規軍”が真つ当な対応をすれば、少なくねー犠牲は出るが、止

めることは出来るだろうな。

コーダイ：でも現状、今の正規軍に不満を持つてるユーザーは多い。下手すりゃ、そう言うユーザーを抱き込んで束になって来る可能性もあるわな。

セア：話を少し戻すけど、反乱軍が本部に攻撃を仕掛けるのは、来週……11月18日はちょうどメンテナンス日だけど、多分それどころじゃないよね？

ハバキリ：十中八九、メンテは中止ですね。それと、全員に確認したいことがある。

セア：何かな？

エミル：どうした？

サツキー：どしたの？

コーダイ：いいからはよ

ハバキリ：分かっているとと思うが、オレはジルを反乱軍のあんぼんだんどもの手から奪い返すつもりだ。あいつはまだ、オレ達に「ありがとう」を返してねーからな。でも、他のみんなはどーだ？

サツキー：答えるまでもないでしょ。

エミル：然り。

コーダイ：然り。

ステラ：途中参戦ですが、然り。

セア：みんな、考えてることは一緒だよ。

ハバキリ：よし、それが聞きたかった。具体的な作戦があるんだが、それはGBN内のブリーフィングでしたい。明日、学校の授業が終わり次第、フォー스ネストに来てくれるか？

セア：了解です。

ステラ：それじゃあ、明日の晩ごはんは遅めになりますね。

サツキー：オツケー。

コーダイ：よっしゃ、それならこつちも動くとするか。

エミル：それじゃ、また明日の放課後ってことで。

チャットが終了して、ハバキリはダイバーギアを充電器に差し込ませて、ジンライ改式の改造に掛かった。

トーシローとの戦いで、問題点を洗い出せたのだ。

それが分かった以上は、そこを改めるだけだ。

翌日。

各々の学校の授業終了に合わせて、フォース・リヴェルタの面々はフォースネストに集合していく。

が、ハバキリとステラ、セア、サツキーだけで、コーダイとエミルがまだ来ていない。ログインはしているのだが、少し寄り道をしているのかもしれない。

先に四人だけでブリーフィングルームへ移動し、モニターとコンソールを起動させていく。

「さて、具体的な作戦があるとは言ったけど、正直なところ、作戦と言えなくはねーが、実質博打そのものだ」

ハバキリはコンソールを打ち込み、地球と、その衛星軌道周辺を表示させ、そこに赤いマーカーをいくつか置く。

「エミルの証言通りなら、恐らく反乱軍は衛星軌道上から部隊を展開、大気圏突入オプションを使って直接極東ベースを狙って中央突破してくるはずだ」

いくつかもの赤いマーカーが地球へと移動を開始する。

次に画面が切り替わり、ベースエリア周辺のマップが映し出される。

「正規軍は各サーバーに戦力を分散させなきゃならんから、軌道上からの強襲を受けて、対応が一次的に遅れる。それでもすぐに立ち直って戦力を集結、包囲して各個撃破を狙うはず」

ベース基地の周囲に黄色のマーカーが複数表示され、いくつかは赤のマーカーとぶつかつて消えるが、すぐに黄色のマーカーが周囲から大量に現れ、赤のマーカーを取り囲む。

「オレ達が介入するのは、正規軍が立ち直りかける、その直前。正規軍の混乱時間を出来るだけ引き伸ばすと同時に、反乱軍側も混乱させる」

次に、全く別方向から青のマーカーが六つ表示され、赤と黄色の群れの中へ突っ込んでいく。

すると、ステラが挙手した。

「兄さん。私達の狙いは反乱軍なんですよね？だったら、正規軍と協力するって言うのはダメなんですか？」

「その手も考えたんだがな、これはあくまでも運営同士による内部抗争……正規軍と反乱軍の二色に分けられた戦いだ。その中へ介入するなら、問答無用で”第三勢力”と見なされる。だから、その案はダメだ」

「難しいですね……」

案にダメ出しをされて、ステラは挙げていた手を下ろす。

「で、両軍が混乱している間にオレ達はジルを捜す。混乱から立ち直る前にジルを救出出来れば御の字、包囲される前にトンスラする」



赤と黄色のマーカークの動きが止まり、青のマーカークが赤いマーカークの群れの中へ混じっていく。

「混乱してる時間がどれくらいか分からないけど、多分そんなに長くはないよね？えーと、あたし、ハバキリ、セアさん、ステラちゃん、コーダイ、エミルの六人か。これだけで捜してたら、結構時間が必要よね」

サツキーが懸念を挙げる。

両軍の出兵にもよるが、それでも六人だけではシビアだと言うのだ。

「もしジルちゃんが見つかる前に両軍が立ち直つたら……乱戦になるって言っても、あたし達だけじゃ、あつという間に擦り潰されちゃうわ」

「そこだ、この作戦が博打な理由が」

ハバキリはそれを否定できなかった。

「最低二個中隊くらいの戦力は欲しいが、無いモンねだりしてもしやーねーんだ。手持ちのカードを切っていくしかねー」

「最低でも二個中隊は要るんだよね？」

ふと、ブリーフィングルームの出入り口から声が聞こえた。

四人が声に振り向けば、コーダイとエミルがやや遅刻しながらも来てくれていた。

「ごめん、ちよつと遅れた。……でも」

しかし、ブリーフィングルームに入ってくるのは二人だけではなかった。ぞろぞろと、十数人ほどのダイバー達が次々に入室してくる。

「よう、久し振りだなハバキリ」

その内の半分ほどに、ハバキリは見覚えがあつた。

「なっ？ お前ら、何でここに……」

彼らは、元フォース・アルディナのメンバー達。

それと、エミルが元々所属していた、元フォース・コキュートスのメンバー達だった。元アルディナのメンバー達は、口々に思いの丈を述べてくれる。

「コーダイから招集を掛けられたんだよ、「俺とハバキリの一大事、力を貸してくれ」ってな」

「トーシローとも戦うんだろ？ なら、俺達がやらねえで誰がやるってんだ」

「お前とコーダイだけじゃ、頼りなさそうだからな」

ハバキリとその元仲間達の間を仲介するように、コーダイが親指を立ててサムズアップしてみせる。

「こいつらの実力は、お前だって知ってるだろう？ 戦力の勘定に入れても、問題ねえぜ」

「お前ら……」

暫し瞬きを繰り返すハバキリだが、すぐにいつもの調子を見せる。

「しゃーねーな、今だけは末席に加えてやるから、感謝しろよなー」

元アルディナのメンバー達が談笑する側を、元コキュートスのメンバー達がセアに向き直る。

「いつもエミルがお世話になってます。彼からの要請を受けて、及ばずながらご助力に参りました」

「こちらこそ初めまして。ようこそ、フォース・リヴェルタへ。あなた方のご助力、感謝致します」

礼儀に做った挨拶と、コキュートスのリーダーとセアが握手を交わす。

リヴェルタ、元アルディナ、元コキュートスの3フォースが揃ったことで、総人数は25人。ちょうどハバキリが要求していた二個中隊とプラス一人になる。

一気に人数が増えたことで、ハバキリが途中まで説明していた作戦にいくつかの方向修正を加えながら、再度作戦を組み立て直し、ハバキリとコーダイが打ち合わせていく。「よし、それじゃ説明し直していくぞ」

コーダイは項目を加えたモニターを映し直す。

「正規軍と反乱軍、両軍の間に急襲を仕掛けて混乱を誘発、その間に反乱軍の中からジルちゃんを捜して救出するってのは、さっきと変わらないが……」

一度画面が切り替わり、部隊編成表が映し出される。

「ちようど二個中隊つて戦力があるから、チームごとに人数を割り振りたいと思う」

中心となるのは、あくまでもリヴェルタのメンバーで、そこから補うように元アルダイナと元コキュートスのメンバーが加えられる。

セアとエミルを中核として、元コキュートスのメンバーで固めた『一番隊』。隊長はセア。

コーダイとサツキーを中核として、元アルダイナのメンバーで固めた『二番隊』。隊長はコーダイ。

そして、ハバキリとステラにくわえて、アルダイナ、コキュートスからエース級を選抜、少数精鋭で固めた『遊撃隊』。

「メンバーの割り振りは以上！それと最後に、この作戦のコードネームを決めたいと思う」

一度全ての画面を保存した上で新しくページを作り直す。

そして、先程からハバキリと考えていた作戦名を表示させる。

「作戦名は、『オペレーション・インテンション』!!」

自分達は己が”意思”の元にここへ集い、そしてひとつの目的のために手を取り合うのだと、コーダイは言う。

決戦は、今週末だ。

その一週間、動く者は動く。

ハバキリは自室に籠もっては、ジンライの再改造を行う。

ジンの腕装甲を分解、無理矢理組み込んでいたフレームを一度抜き出し、加工し直していく。

パテが乾燥されるまでの間に別のパーツの加工に取り掛かろうとして、ドアがノックされる。

「兄さん、お茶ですよ」

「おー、ちょうど切り良く終わったところだ。入っていいぞ」

兄の反応を確かめてから、テラスがお盆を片手にドアを開けて入り、ハバキリは部屋の窓を全て開いて換気させる。

「ジルちゃんを助けるためって言っても、根詰めすぎじゃないですか？」

テラスの手によって、急須から湯呑へ緑茶が注がれる。

コポコポと湯気が立ち昇っては消える中、ハバキリはお茶請けの紅葉饅頭の封を切りながら応える。

「今詰めてるつもりじゃねーんだが……でも休憩は大事だしな」

こし館が口の中で広がる中へ、緑茶を流し込んでいく。

「ねえ兄さん、ノーベルガンダムでも使えそうな武器って、何か持ってませんか？」

ふとテラスは、自機のことを話題に出した。

「ん？ノーベルに武器でも増やすのか」

「ほら、この間の百花繚乱は一对一のバトルでしたから、身軽

な方が良かったんですけど、今回の作戦は、敵がたくさんいるんですよ。だから、少しでも長く戦えるようにと思って……」

テラスーステラのポジションは、遊撃隊長たるハバキリの補佐と、アルディナとコキュートスのエース級ダイバーと連携して戦うことだ。

つまり、一番危険な所へいの一発で突撃しに行くのだ。

実力があるとは言え、ステラ自身はまだ素人に毛が生えた程度のルーキーダイバー。さすがに荷が重いだろうと言う意見はあったが、彼女の兄である遊撃隊長自らが「こいつは信用していい」と公言したのだ。

当然プレッシャーはある。しかし同時に、少しでも兄の助けになりたいと言う気持ち

が上回る。

「ま、実体系の武器ならエネルギーの配分は考えなくていいし、使えなくなったら途中で捨てればいいしな」

何があつたかなー、とハバキリは側に置いてあるプラケースを取り出して開ける。

ジャンクパーツの山ではなく、塗装までしっかり施された武器庫のようだ。

「バズーカはさすがに邪魔になるしな。使いやすくてすぐ捨てられるって言ったら、サブマシンガンとかアサルトライフルくらいか」

「あ、刀とかありませんか？小太刀みたいな、軽くて振り回しやすいのを」

「刀？んーと、何があつたっけなー」

セアは自室でガンプラの組み立てを行っていた。

それは、この間のオフ会の際には完成しなかった、フリーダムガンダムの改造機。

「……出来た」

完成したそれを机に立て置き、セアは息をつく。

本体そのものはフリーダムガンダムとそう変わらない。

目を引くのは、サイドからリアスカートにまで広がる、白く彩られたフリーダムガン

ダムの”翼”。

背部に装備されているのは、可変式楊翼とキャノンが一体化したバックパック。これもまた白く塗装されている。

純白のロングスカートと、同じく純白のバックパックの二つは、見ようによつては花嫁のウェディングドレスのようにも見える。

左右のマニピュレーターには、『ウイングガンダムゼロ』のツインバスターライフルを参考にしつつ、鴉野神社で大量に譲ってもらったパーツを使って完成させた、二丁のライフル。

機体銘は、暫定していた仮の名をそのまま正式採用して、『フルドレスフリーダムガンダム』とした。

「もうこれ以上は、出来ないかな……」

エンハンスドガンダムMK-IIを実験機として使い続け、得られたノウハウ全てをフリーダムガンダムの改造に注ぎ込んだ、造形、機能美、GBN上での機体性能、いずれも現時点で自分が作れる最高のガンプラ。

故に、今はもうこれ以上の加工は不要……と思いかけたが、すぐにまたフルドレスフリーダムガンダムを手にとった。

「ううん、まだ出来る……ことがあるはず……」



0. 1%でもより良くするために、セアは再び愛機と向き合った。

コウダイは、ルーズリーフにペンを走らせながら、ダイバーギアにイヤホンマイクを繋いで通話をしていた。

「……そうそう、その場合は、プランB2で対応な。それと、フォーメーションを寸断されちまった時は……」

その相手は、かつてのアルデイナのメンバー達や、元コキユートスのメンバー達。

二番隊の隊長と言う立場を預かったコウダイは、同隊のメンバー達とグループ通話で意見を交わし合い、自分達の連携を密なものにしようとしている。

慣れ親しんだ元アルデイナのメンバーはもちろん、元コキユートスのメンバーも順応性が高く、コウダイの説明をすぐに理解してくれる。

「……よし。ひとまずはこんなところだが、何か意見になりそうながあつたら、すぐに伝えてくれ。んじや、解散!」

通話を終えて、イヤホンマイクを外すコウダイ。

「(人事は万端。後は、俺自身か)」

机の上のスタンドに差し立てている、今は武装を外しているキャノパルドと、専用の

プラケースを取り出した。

ビームライフル、肩部キャノン砲、ハイパーバズーカ、脚部ミサイルランチャー、ジャイアントガトリング……だけでない、多くの武装がこの中に納められている。

キャノパルド本体の加工よりも、武装の選択が重要だとコウダイは見ていた。

元より完成度高く仕上げられたキャノパルドだ、セアのように以前から改造を進めているならまだしも、今から改造を開始して完璧に完成させ直すのは時間がかかり過ぎるからだ。

「(トーシロー、か……)」

元アルディナのフォースリーダーのことを思い浮かべる。

謙虚さと実力、そして一癖二癖あるメンバー達を纏めてきた統率力とカリスマを備えた人格者。

今はおそらく、反乱軍の一員としてこの内乱に赴くのだろう。

だが、腑に落ちないものがある。

「(思い返してみれば、あいつはハバキリばかりを狙って、同じフォースにいる俺には目もくれない……どうということだ?)」

そう。

どう言うわけか、トーシローは『ハバキリと戦うこと』に固執しているように見える。

ハバキリが反乱軍の計画の邪魔になるから、と言う理由で襲撃しているのならまだ理解できる。

だが、そのハバキリの機体が不完全ならば見逃すと言うことまでしているのだ。

本気でハバキリを邪魔だと思ふのなら、機体のコンディションに関わらず撃墜を狙うだろう。

そうでないとすれば、トーシローは一体どんな理由でハバキリを狙うのか。

「……今考えんのはそこじゃねえな」

トーシローへの疑念を一旦棚上げすることにして、コウダイはキャノパルドの武装選択に専念する。

サツキーことサツキは、自室のパソコンでGBN関連の情報を集めに奔走していた。

元ゲームマスターによる大々的な宣戦布告から数日、何かしらどこかで噂か動きはあ  
るはず。

GBNの掲示板を検索してみると、案の定と言うべきか、既に数十万件に渡るコメントが書き込まれている。

批判や誹謗中傷のオンパレードなど読んでいても気分を害するだけなので、真面目に

宣戦布告について議論を交わしていそうなものだけを探る。

いくつか閲覧してみたが、既に宣戦布告の裏側に片足を突っ込んでいる自分達よりも詳しく事を知る者はおらず、予想や憶測ばかりが並ぶのみ。

ふと、コメント件数やユニークアクセスが他のコラムと比較しても極端に少ないコラムに目を止める。

匿名投稿による、『宣戦布告のその裏側』と言うタイトルのそれをクリックしてみる。とりあえずは流し見していくが、

「っ!？」

貼り付けられた画像を見て、思わず目を見開く。

その画像とは、培養液に満たされたカプセルの中で、複数の誰かが閉じ込められている光景。

個人を特定されないためか、首から上はかなりぼやけた加工が為されており、大まかな形や色も分からなくなっている。

ハバキリやナオエから聞いた話に嘘が無いのなら、これらは恐らく『ジルのクローン体』だろう。

本当に量産されているのだと知り、画像に関するコメントはどうかと視線を落とす。

だが、書き込まれているコメントはいずれも「捏造乙」や「これ何て映画? w」「画像

の加工上手いでバエル」などと、これが実際に起きていることだとは思っていないものばかり。

だが、他に有力な情報を持っていそうなコラムは他にはない。不快さを我慢しながらもコメントを全て見ようとするとする。

すると、「これはどこで撮影されたものか詳しく」と言うコメントが出てきた。

そこから先はふざけたコメントなどは書き込まれず、ひとつひとつ確かめるようなやり取りが続く。

そして、最後の方に更新されたやり取りに、サツキはスライドしていた手を止めた。

『私はこれが本当に、元ゲームマスターの指示によって行われたことなのか疑問に思っている』

『強く同意します。もし本当に元ゲームマスターが、このニュータイプ部隊を使って戦争を仕掛けると言うなら、さらなる混乱に陥るだけだと、分からないわけがない』

『法的な問題になるのなら、ELダイバーへの名誉毀損に加え、国際的にクローニングは禁止されていることも含めて、とても許されることではない』

「……………」

サツキは数秒の思考の後に、このコラムにコメントを書き込んだ。

『途中参加ですが失礼します。ニュースで得た知識ですが、元ゲームマスターのカツラ

ギ氏は現在身柄を拘束されているはずなのに、どうしてこんな宣戦布告が出来るのか怪しいと思っています。これについてご意見をお願いします』

書き込み完了から数分後に、いくつかのコメントが返ってくる。

『!?それは盲点だった。身柄を拘束されているのにログイン出来るはずがない』

『だとすれば、あの元ゲームマスターは何者だと言うことになります』

『あまり考えたくない発想だが、カツラギ氏が裏で賄賂を回している可能性が。もしくは、この宣戦布告が何かしらの出来レースの可能性もある』

「賄賂に、出来レースかあ……」

それはもう、情報規制によって”大人の事情”として片づけられてしまうもので、自分のような子どもが首を突っ込める話では無くなる。

だとしたら。

ハバキリが言うような、『大人の都合でEシダイバーが虐殺される』と言うことだろうか。

『UC』本編でも、アナハイム・エレクトロニクスの重役である『アルベルト・ビスト』の台詞のひとつとして、「我々は戦争を食い物にしているのではない。時々で限定戦争を起こしてはコントロールし、本物のハルマゲドンから世界を守っているのだ」と言うものがある。

それは、GBNでも同じことだろうか？

今回のような叛乱だけではない、去年の今頃に起きたELダイバー動乱も、実は運営による自作自演ではないのか？

四年前の『アルス』と名乗る何者かの侵略戦でもそうだ。

六年前の第二次有志連合戦もそう、あるいはブレイクデカル事件もその一端ではないか？

運営にとっては、GBN全体をコントロールするための、都合の良い”エサ”に過ぎないのではないか？

疑い始めればキリがない。

サツキはもう少しだけ、何か裏が取れないかと模索する。

エミルことメグミは、フォース・リヴェルタの中で唯一、コキュートスと繋がりのある者として、同メンバー達と近況を伝え合ったり、今回、元アルデイナのメンバー達と手を組むに当たったっての懸念点などを確認し合ったりしている。

さらに言えば、元アルデイナのメンバー達はフォースを解散してからはそれぞれ独立していたが、コキュートスのメンバー達は、エミルが抜けた以外はフォースをもう一度

組み直しているの、リヴェルタとのアライアンスを申し込んでおり、即時締結された。

そのリヴェルタとコキュートスとの橋渡し役は、もちろんエミル。

「……本来ボク達は、この運営の内乱に関わるべきじゃないことは承知している。でも、大切な友達が囚われているのなら話は変わる」

『今回の作戦は去年の動乱事件とは全く別の意味で激戦になるだろう。撃墜されても誰かが死ぬような目に遭うわけじゃない、でも楽しくもない、只々苦しいだけの戦い……いや、それこそ、“戦争”だ』

「それでも。それでも彼女、E.L.ダイバー・ジルはボク達リヴェルタの仲間なんだ。それを、何もせずに見過ごすだけなんてのは嫌なんだ」

『エミルにとっての友達なら、俺達コキュートスにとっても友達だ。助けない理由はない』

「ありがとう。ボクはみんなのわがままを聞いてもらってばかりだな」

『何を今更。俺達みんなが、どれだけお前に助けてもらったと思ってるんだ。このくらいわがままくらい、その内に入るかよ』

「何度でも言うよ、ありがとう。みんなの力、頼りにしてる」

それからもう少しだけ言葉を交わしてから通話を終えてから、メグミは愛機の七星剣士エクシアを手を取った。



「(そうだ、これはジルちゃんを助きたいボク達だけの戦いじゃない。元アルディナと、コキユートス、みんなの戦いでもある)」

ジルを助けたい気持ちが一番。

しかし同時に、古巣の仲間達にカッコ悪いところを見せたくない、と言う気持ちもある。

それは、ハバキリやコーダイも同じかもしれない。

やるべきことの中に、ほんの少しだけ矜持(プライド)を含ませて、メグミは七星剣士エクシアのリペイントを始める。

暗がりの中、白銀のジム・クウエルージャツジムメントはハンガーに掛けられている。

そのコクピットの中で、トーシローは機体のコンソールを通じて、“ソレ”を見ていた。

何かは聞かされていないが、赤い流線型の巨大な機体のコクピットに組み込まれていく『部品』

その『部品』とは、見間違いでなければ、ノーマルスーツに身を包んだ小柄なダイバー

だ。

パイロットがMSの部品扱いされるような話は、そう珍しいものではないー否、そもそもパイロットと言う概念すらないのだ。

あの機体の性能などに興味はない。

「(そう。あくまでも僕の”本懐”はただひとつ。それを為しさえすれば、他事などどうでもいい)」

だが、と納得できない自分もまた、心の片隅にいる。

ダイバーすらも部品扱いするようなその光景は、見ていて気持ちの良いものでないからだ。

その納得できない感情は、無理矢理そのまま片隅に押し込んでおく。本懐を為すためには、別の何かを押し隠すことも必要なのだから。

そして、決戦の時――11月18日は訪れる。

「さて、時間だ」

ガンダイバーの指示により、静止していたスペースコロニーのハッチから、無数の『NPDリーオー』が出撃していく。

機体の前後にランドセルを背負ったようなそれらが、単独で地球の大気圏へ突入を開始、同時にその背負ったランドセルからパラシュートのようなもの展開し、大気の摩擦熱から機体を守りながら落下速度を減速させる。

宇宙世紀において、U・C・0087以降に見られる大気圏突入装備、『バリユート・システム』だ。

その数、凡そ2000機。

2000機近くのNPDリーオーが次々に大気圏を突破していくその姿は、地上から見上げればそれは、夜空へ降り注ぐ流星群のようで幻想的なものだろう。

しかしその実体は、I・G・B・Nを脅かす侵略者そのものである。

2000機ほどのNPDリーオーが大気圏を突破し、バリユートをパラシュートにして降下する光景は、すぐに運営本部へと伝えられる。

『反乱軍と思しきNPDリーオー、多数確認！』

『多数じゃ分かん！正確に数えろ！』

『リーダー反応でも1000機以上！真つ直ぐ極東ベース本部へ降下してくる模様！』

『各方面に回しているガードフレームを極東ベースへ向かわせろ！総合的な戦力はこちらが上だ、後から数で押し潰せる！』

この日に備えて配備されていたGBNガードフレームは、次々に降下してくるNPD

リーオーの大群を前に、ビームガンやバズーカで迎撃を開始する。

『あいつら！MS単独で大気圏を突破してきやがったのか！』

『冗談じゃねえ！増援が来るまで、俺らだけで止めろってのかよ?!』

『無駄口もそこまですろ！俺達が足止めしなくちゃその増援も間に合わん！』

『ちくしょーッ、ボーンズのひとつやふたつも貫かねえと、割に合わねえぞコレ！』

次々にビーム弾や砲弾がNPDリーオーの大群へ撃ち込まれるが、対する反乱軍のNPDリーオーは機体各部に外付けされた円盤状のユニットを展開し、それらを多数繋げてバリアを展開した。

かつての『フォース・フォートレス』が猛威を奮った、プラネイトディフェンサーだ。さらに装備だけではない、このNPDリーオーのプログラムは、フォートレスのログデータを解析した優秀なAIを組み込んでおり、冗談や誇張抜きで、SSランク級のダイバーが束になって連携していると言っても良い。

多数のプラネイトディフェンサーで固めた鉄壁の防御力は、たかだか数十機ほどの一斉射撃など簡単に無力化してしまう。

その上、NPDリーオーの攻撃オプションも豊富だった。

マシンガンやビームカノンは当然として、バズーカ砲やダブルリングガン、外付けながらミサイルランチャーなども備えており、謂わば『サーペントの重火力にプラネ

イトディフェンサーを加えたMD』である。

生半可な射撃では弾き返され、単騎での火力も向こうが上。

NPDリーオーの大群は、極東ベースの防衛ラインに瞬く間に迫り、今のところ数で劣るGBNガードフレームを一方的に蹂躪していく。

『第一防衛ライン、突破されました！』

『慌てるな、第一、第二防衛ラインはあくまで捨て石だ。絶対防衛ラインさえ抜かれなければ良い。増援を絶やすな、戦局はまだこちらに有利だ』

運営本部にはひっきりなしに報告が飛び交うものの、まだ余裕があった。

『……それと、”例の兵器 はいつでも撃てるようにだけはスタンバっておけ』

『ハッ』

例え絶対防衛ライン寸前にまで到達されても、問題のないことを確認した上で。

戦闘開始から一時間が経過した頃。

各方面からGBNガードフレームの増援が集結しつつある中、ハバキリ達はフォー・ス・リヴェルタとその助っ人達は、反乱軍のコロニーが停止している、その真反対の衛星軌道上から出撃しようとしていた。

レンタル輸送機の格納庫では、各々のガンプラが立ち並び、一機ずつそれぞれが、サーフボードのようなSFS（サブフライトシステム）に乗り込む。

ハバキリ、セア、コーダイ、サツキー、エミル、ステラ、元アルディナメンバー達、コキョートスマンバー達、総勢25名のダイバー達が、コクピットの中で出撃を待つ中。

コーダイはセアに個人通信を繋いだ。

「せっかくの決戦を前に黙（だんま）りつてのもなんです。セアさん、ここはいつちよ景気づけに……」

「何か言ってくれ、って言いたいんでしょ？もう三度目だからね」

「こほん、と咳払いをしてからセアは通信回線をオープンにする。

「今日、ここに集まってくれたダイバー全員へ。私達はこれより、GBN運営本部の正規軍と反乱軍との戦いの最中へ介入します。目的はただひとつ、『ELダイバー・ジルを救出すること』です。」

コーダイは、内心で感心していた。一度目と二度目のような拙い言葉ではない、皆を鼓舞すると言う意志の元に告げられている。

「第三勢力として介入する私達は、正規軍と反乱軍の両方と戦うことになり、非常に厳しく、そして苦しい戦いを強いられます。誰が墜されてもおかしくありません。それはもう、ここにいる誰もが承知の上でここにいますでしょう」

ステラは、ノーベルガンダムに追加装備させた武装を再々度確認しながらも彼女の声に傾注している。

「E.L.ダイバー一人の命など、どうでも良くありません。肉体が無くとも、私達生身の人間のように血が通っていないくとも、心は確かにあります」

エミルは、コンソールを叩いて最後の調整を終えつつも、「それはそうだ」と小さく呟く。

「命とは何ですか？心臓？脳？いいえ、それはただの臓器のひとつに過ぎません。命とは、目に見えない『心そのもの』であるのだと、私は”感じて”います」

サツキーは、無意識の内に右拳を胸に添えた。

「私はE.L.ダイバー・ジルがいつ、どこで生まれたのかは分かりません。ですが、私はいつか、彼女の”誕生日”をお祝いしたいと考えております」

コキュートスのリーダーは、誕生日と言う言葉に目を見開く。

「この世に生まれたことを祝福する日。それが誕生日と言う、バースデーです。友達の誕生日をお祝いする………これのどこがおかしいことでしょうか？そんなことはありません、”人”として当然のことです」

元アルディナのメンバー達は、静かに頷く。

「だからこそ、そのために………彼女の命が他者の都合で弄ばれていいはずがありません

ん！フォース・リヴェルタ、フォース・アルディナ、フォース・コキユートスの皆さん！私達の大切な友達を救うために！私達皆が笑って未来（あした）を迎えるために！どうか力を貸してください！」

ハバキリは、一度だけ長い瞬きをするだけ。

『オペレーション・インテンション』……発動!!」

セアのその号令と共に、各輸送機からガンプラが出撃していく。

「こうまでビシツと決められちゃ、燃えないわけにはいかねえよな。コーダイ、キャノパルド、行くぜ!!」

「ジルちゃんがいなきや、フォース・リヴェルタじゃないもんね。サツキー、ガンダムデスレイザー、出撃するよ!!」

「出来ることはやった、後は出たとこ勝負だ。エミル、七星剣士エクシア、未来を斬り開く!!」

「こんな無茶苦茶な作戦なのに、不思議と負ける気がしません。ステラ、ノーベルガンダム、レディ・ゴー!!」

「はー、ちゃんと言い切れて良かった……つと、まだ気を抜くのは早過ぎ。セア、フルドレスフリーダムガンダム、行きます!!」



「待つてろよジル、お前の「ありがとう」って気持ち、ちゃんと返してもらうからな。ハバキリ、『シユツルムジンライ』、出撃（で）るぞ!!」

出撃完了と同時に、SFSに乗り込んだまま大気圏へ突入していく。

これは、『鉄血のオルフェンズ』の劇中でギャラルホルンのMSが使用した、降下用グライダーだ。

MS単独での大気圏を突破、さらにそのまま作戦ポイントへ直行可能と言うモノ。

しかし、本来ならば大気摩擦を抑えるために減速するはずが、逆に猛烈な速度で加速していく。

いくら耐熱処理が施されたグライダーとは言え、速度が速すぎるとそれも意味を為さなくなってしまう。

それでも燃え尽きないのは、その上からさらに冷却シートと耐熱フィルムーRXー78に搭載されていた大気圏突入オプションを加えた超特殊仕様であり、こと限界まで耐熱処理を上乗せされている。

それを25機全機が同じオプションで出撃しており、次々に大気圏へ降下、地球の真反対から極東ベースへ向けて突入していく。――。

【次回予告】

コーダイ「よおおおおおっしやあツ、軌道上からのスカイダイビング成  
こおおおおッ！」

エミル「テンション上げてる場合じゃないよ、混乱してる内にさつさとジルちゃんを  
捜す！」

サツキー「反乱軍はリーオーばかりだけど、ジルちゃんが乗ってそうな機体はどこ  
に……」

ステラ「ねえ、なんですか？あの、赤くて大きなガンプラ。宇宙から降りてきたんで  
しょうか……？」

ハバキリ「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション、  
『裁きの閃光、根絶の業火』」

セア「こんな……こんなことが……ッ!？」

## 23話 裁きの閃光、根絶の業火

ところで、とマイマイはお冷を口に付けてから言葉を選ぶ。

「あの娘は一度デリートされちゃったのよね？一体どんなインチキ……ミラクルを起こしたの？」

「インチキとはなんだインチキとは。准将を侮辱するのならば、この俺がムーンガンダムに代わっておしおきしてやろう」

「やめなさいよ、気持ち悪い。……で、実際のところはどうかなの？」

過去に、現実世界への“罫”を希望したELダイバーの中には、『ビルドデカール』を通じてGBNからGPデュエルのシステムへ転送される際、膨大なデータの“渦”に呑み込まれてそのまま“デリート”されてしまった者もいる。

当時は、一度デリートされてしまったELダイバーは再度のサルベージが出来ないとされているし、ELバースセンターの尽力によつて確率が上がった今でも、デリート後の再サルベージはほぼ不可能である。

僅か12%の成功率以下で転送を成功させた『ファーストELダイバー・サラ』の例は、奇跡が起きたとしか言えない。

トラちゃんは自分のアイテムボックスを開き、あるアイテムを取り出してマイマイに見せてやる。

「元々、ブレイクデカールを応用したものを、ビルドデカールと呼称していた。これは、そのビルドデカールをさらに応用したもの……『Re:ビルドデカール』だ」

「リビルド……『Rebuild』ってことは、『作り直す』ってこと？」

「そうだ。ホシザキ嬢が持っていた、”例のデータの破片”を解析し、可能な限り修復したそれをビルドデカールに落とし込んで作られたものだ」

トラちゃんの掌にあるそれは、一見するとただのナノICチップに見える。

「リアルガンプラに貼り付けてGBNに読み込ませることで、ディメンション内にアクセスする、と言うところまでは、従来品と同じだ」

隣にいるケンさんは黙って『俗物』を睨り、バーテンダーも無言でトラちゃんのお冷やを注ぎ直してやる。

「彼女”の場合は、『失ってしまった電子の肉体を再構築する』と言うプロセスが必要だった。しかし、何千万、何億と言うデータの”遺伝子”をサルベージするのは、現状ではほぼ不可能だ。無論、それも出来なくはないだろうが、”御二方”が過労死する方が先だろうな」

さすがの准将もそれは出来ない、とトラちゃんは苦笑する。

「だが幸いにも、破片であるものの”彼女”のデータの一部は手元にあった。そこで作られたのがRe:ビルドデカールだ。まあ有り体に言えば、『遺されたデータを基に人工的に電子の肉体をディメンション内で”作り直す”』……先も申した、”クローニング”のそれだ」

クラサカ・カナデは、日曜日の午前中からネットカフェに居座っている。

決して、社会問題とされている『ネカフェ難民』ではない。

昨夜に、親友のセアから電話で伝えられたことがある。

『明日、大事な友達を助けるために、GBNで戦ってくる』

GBNで戦争とは大袈裟な、とカナデは呆れたものだが、セアの口調や意気込みを聞く限り、『ゲームと現実の区別が付かなくなっている』わけではなさそうだ。

セアの所属するフォースーつまりはチームには、近年にその存在が社会的に認められた電子生命体『ELダイバー』がフレンドとして加入しており、その彼女ーシルが何者かの悪意によって利用されているらしい。

同時に、GBN内で運営とその反運営勢力との武力衝突が起こるようで、恐らく有志によってその様子がリアルタイムで実況されるだろうとも聞いた。

そのリアルタイム実況を視聴するために、ネットカフェ内のインターネットを利用しているのだ。

ドリンクバーから汲んできた飲み物も添えて準備は万端。

ガン普拉バトルネクサスオンライン 実況、と検索すると、既にいくつか実況中の動画が生配信されているところだ。

その内の最上部の動画をクリック、中継動画をリンクさせた。

極東ベースの防衛ラインを守るGBNガードフレーム達は、反乱軍のNPDリーオーの大軍の進撃を必死に喰い止めていた。

『プラネイトディフェンサーにビームは効かないぞ！『レーザーガン』で対抗しろ！』  
一見すると鉄壁の守りを誇るプラネイトディフェンサーだが、実は穴がある。

原作では『トールラス』の武装のひとつとして存在するレーザーガンは、ビームライフと比較すると破壊力に劣るものの、連射力に優れる点と、何よりも『プラネイトディフェンサーを貫通する』と言う隠れた副次効果を持つ。

『W』の原作に詳しい者がそう告げると、展開中のGBNガードフレームは次々にビームガンやマシンガンから、レーザーガンへと持ち替え、反撃を開始する。

その狙い通り、レーザーガンから放たれる光弾はプラネイトディフェンサーへ干渉し、発生装置である円盤状のユニットを破壊していく。

レーザーガンによってプラネイトディフェンサーは破壊可能……しかし、その本体であるNPDリーオーを撃破するには出力が足りず、即座にダブルガトリングガンやビームカノンを撃ち返してくる。

『プラネイトディフェンサーを破壊する者と、リーオー本体を攻撃する者、二手に分かれて迎撃しろ！』

第一、第二防衛ラインの中間地点辺りで、一部のサーバーからの増援が到着し、レーザーガンを主軸とした戦術により、NPDリーオーの大群は数を減らされ、進撃の足が鈍化しつつある。

ようやく両軍のパワーバランスが拮抗するかないかの瀬戸際に到達しかけた時、事態は動いた。

本部司令部で、オペレーターの一人がそれを発見する。

『成層圏より新たな反応をキャッチ！』

「何だ？」

『識別は反乱軍とは別で、二個中隊ほどの部隊ですが、急速にこちらへ近づく模様！』

レーダー反応には、NPDリーオー達の降下とは比べ物にならないほどの猛スピード

でこの極東ベースエリアへ”落っこちて来ている”。

「所属不明部隊に伝えろ、「当局は現在厳戒態勢に入っている、至急退避しろ」と……」  
ゲームマスターがそう伝えるように指示を与えた瞬間。

凄まじいショックウェーブと砂塵嵐が、極東一帯を包み込んだ。

オペレーション・インテンションに従事する者達は、大気圏突入に成功し、極東ベースエリアの地上の様子が目視で確認出来るほどまで降下すると、その降下速度のままグライダーを地表へ蹴り飛ばした。

その結果、蹴り飛ばされたグライダー25機は、それ自体が隕石となって戦場へ降り注いだ。

全長10m少しの質量が、衛星軌道上から真つ直ぐ降ってくるようなものだ、地表にぶつかれば当然ショックウェーブは発生するし、それによって巻き上がる砂塵、その二つの要因によってセンサーやレーダーと言った索敵機器は、一時的には言えその機能を麻痺させる。

同時に、MDであるNPDリーオーは突如として戦況が変化したことに判断を遅らせ、その動きを鈍らせる。



砂煙を切り裂きながら先陣を切るのは、ハバキリが率いる遊撃隊。

「いーかお前ら！ 反乱軍はともかく、正規軍とは出来るだけ交戦を避けるよ！ まともにやったって勝ち目なんざほぼ0パーなんだからな！」

その遊撃隊長機たる、シュツルムジンライ。

本体そのものは少し前のジンライ改式とほぼ変わらないが、腕部は完全にガンダムフレームの形状に合わせたものに作り変えている。

何よりも目を引くのが、バックパックユニット。

それは有り体に言えば『ジンハイマニューバとシグーのスラスターを連結した二対の大型バーニアと、大容量のプロペラントタンク』である。

元より推進力の高いジンハイマニューバと、シグーの高機動性をミキシングさせたそれは、原典機の四倍以上のスピードを瞬時に叩き出すことに成功している。

だが……

「慣らし運転はしても、負担は相変わらずってか……ッ！」

代償として、ダイバーに掛かる負担もまた原典機の四倍以上に跳ね上がっている。

仮想現実であるGBNだからこそ、ハバキリも独り言を言えるくらいに余裕はあるが、これが現実のものであれば、乗り手すらも無事では済まないだろう。

しかも、この状態ですら『リミッター付き』なのだ。

カタログスペック上の時点で既に極めて危険であるために、リミッター解除後の慣らし運転はしていない。

一応、ハバキリの任意でリミッターを解除することは可能だが、そうなった場合どうなるのかは、彼本人にも分からない。

そんな欠陥だらけのシュツルムジンライではあるが、その基本性能の高さ”だけ”は保証されている。

アサルトライフルに代わって装備された『ビームカービン』を連射、NPDリーオーの展開するプラネットデイフェンサーの隙間を狙った射撃は、撃墜こそは出来なくとも戦闘力を削る、もしくはは体勢を崩す結果に繋がる。

そして、その隙を他の遊撃隊面々が突いて行く。

「さすがにこの数相手じゃ、まともじゃなくても勝てそうにないけどなー」

元アルディナのメンバーのヅダは、ヒートサーベルとシールドクロウの両方を駆使してNPDリーオーを切り倒していく。

「だが俺達の目的は、あくまでもELダイバー・ジルの救出だ。全部を全部相手にする必要はない」

元コキュートスのメンバーのネモは、両肩に担いだクレイバズーカを連射、近接信管によってバラ撒かれるベアリング弾は、NPDリーオーの重火器を破壊し、アイカメラ

のレンズを破っていく。

「それにしたってっ、多過ぎませんか!？」

ステラのノーベルガンダムは、右手には兄のハバキリから借り小太刀を持ち、左手にはこれもハバキリから借りた76mm重突撃銃を装備する。

76mm重突撃銃で足回りを攻撃して動きを鈍らせ、その隙に接近し、小太刀で確実にNPDリーオーの首を刎ねていく。

先陣を切った遊撃隊に続いて、セア率いる一番隊、コーダイ率いる二番隊も、極東ベアスエリアに到着するなり戦闘を開始していく。

「混乱している内に、数を減らす……!」

セアはコンソールを拡張させ、フリーダムガンダム本来の機能であるマルチロックオンシステムを起動、より多くの敵機を視界に捉え、次々にロックオンマークを固定していく。

20機近いNPDリーオーを全てロックオンすると、フルドレスフリーダムガンダムの両手に握る高エネルギービームライフル、腰部に連ねたプラズマカノン『バラエーナ』、さらにバックパックの高エネルギー砲『ナルカミ』、計六門のビーム兵装が展開、砲口に光奔が渦巻き――

『フルドレスバーストアタック』!!」

それらが一斉に吐き出される。

プラネイトディフェンサーによって防ぐNPDリーオーの大群だが、六つの重火器による多数へ向けた一斉射撃は、電磁フィールドの防御範囲外にまで及ぶ。

フルドレスバーストアタックによって揺さぶられたNPDリーオーのフォーメーションは、続いて斬り込んで来るエミルの七星剣士エクシアと、同じく一番隊のメンバー達によって掻き乱されていく。

「ジルちゃん強化人間って言うのなら、ニュータイプ専用機に乗っているはずだ……！」

GNソード「巨門」を振り降ろし、NPDリーオーの頭部から股関節を真つ二つにする七星剣士エクシア。

その背後をビームカノンで狙おうとする敵機は、元コキュートスのメンバーのソードカラムティガンダムが、腕部のロケットアンカー『パンツァーアイゼン』を射出してNPDリーオーを掴み引き寄せて、レーザー対艦刀『シユベルトゲベール』で斬り裂く。「しっかし、さつきからリーオーしか見えないな。ニュータイプ専用機、どこに隠れている……」

見渡せども見渡せども、重装仕様のNPDリーオーばかりで、ニュータイプ専用機ら

しい機体は見当たらない。

それでも手あたたったNPDRリーオーをきっちり撃破していく辺り、彼らも手練である。

その一番隊の逆サイドから展開するのは、コーダイ率いる二番隊。

「着陸成功！第一関門突破つてところか……」

今回のコーダイのキャノパルドの装備だが、肩部キャノン砲は当然として、ビームライフルはリアスカートに懸架されており、両腕には陸戦型ガンダムが装備する『180mmキャノン』を二丁抱え、さらに両足のマウントラッチにはガンダムレオパルドのものを参考にした『セパレートミサイルポッド』と、ビームライフル以外は全て実弾装備で固めている。

これらは長期戦を考慮し、撃ち尽くした火器は随時その場でパージして破棄していくためだ。

二丁の180mmキャノン砲を徐に構えると、立ち込める砂塵嵐を吹き飛ばすように放ち、プラネイトデیفエンサーの防御範囲外を狙った砲撃はNPDRリーオーの大群をさらに混乱させる。

「次の第二関門が、問題なのよ、ねっ!!」

閉じられていたアクティブクロックを広げ、サツキーのガンダムデスレイザーがビームシザースを一閃、高出力のビーム刃はプラネイトディフェンサーに弾かれることなく、それらもろともNPDリーオーの小隊を屍に変えていく。

「こりゃあ予想以上に厳しい……心して掛からんとな！」

元アルディナのメンバーのランドマン・ロディはビームカノンを装甲の厚い部分のナノラミネートアーマーで受け流し、直後にシオルダータックルでNPDリーオーを突き飛ばし、体勢を崩したところをハンマーチョッパーで頭部を叩き割る。

戦いはまだ、始まったばかりだ。

大気圏軌道上近くに静止する、廃コロニーを転用した移動拠点の司令部では、フォース・リヴェルタを中心とした二個中隊規模のガンプラが、両軍との間に乱入して来た状況が映し出されている。

『青き狂戦士』……やはりプロトオーの奪還に現れたか』

常識外れの機動性を以てMD部隊を翻弄するシユツルムジンライを見て、ガンダイバーは目を細める。

乱入の目的は当然、ELダイバー・ジルを奪い返しに来たのだろう。

「少し早い、『ニュータイプ部隊』を投入する。シークエンス02からシークエンス04へと移行しろ」

「ハッ」

オペレーターの一人が了解を示し、すぐにコンソールを打ち込んでいく。

「……それと、『私の機体』の準備を急げ。ニュータイプ部隊の降下の後に出る」

「了解」

シークエンスの移行により再び廃コロニーのハッチが開かれ、今度は十数機程度の大気圏突入カプセルが射出、極東ベースへ向けて降下していく。

その最後に、廃コロニーのMS用のハッチではなく、艦船ドック用のシエルターが開かれ、様々なチューブやケーブルに繋がれた、赤い巨駆が解き放たれ、同様に大気圏へ降下していく。

暫しの間混乱していた正規軍だが、ようやく通信網やセンサー類が回復し、立て直しを急いでいた。

「たかが二個中隊の所属不明機に何が出来るものか、恐るに足らん……ガードフレイムの集結を急がせろ。反乱軍もろとも押し潰せ」

各サーバーからも、続々とGBNガードフレームがこの極東ベースエリアに向かってきており、撃墜された機体を含めても10000機近い数がこのディメンションに配備されている。

レーザーガンによる攻撃で、プラネイトディフェンサーを装備しているNPDリーオーは次々に無力化されているのだ、反乱鎮圧はもはや時間の問題……。

だが、それは慢心だと思い直し、気を引き締めた直後に次の報告が飛んでくる。

『成層圏より、反乱軍コードの一個中隊のガンプラの降下を確認！それと、大型機の反応も捉えました！』

「大型MAとその随伴機でも投入したのか？」

NPDリーオーだけでは押しきれないと早々に判断したのか、恐らくは反乱軍は“切り札”を切ったのだと読むゲームマスター。

少しの思考の末、命令を降した。

「……『メギドフレーム』の砲門を開け。目標、敵大型MA」

『了解、メギドフレーム、スタンバイ』

極東ベース基地の施設の一部が開かれ、その内部から巨大な筒状物体が外部へと引き出される。

『熱核ハルスモーター、01から35、正常に起動開始』



『パワーフロー良好、システムオールグリーン』

『出力98%、エネルギー臨界を確認』

『最大照射時間15秒と推定、クールタイム600秒』

『照準合わせ、ポイント8900から9901上空』

『これより、メギドフレームの照射を実施する。ガードフレーム各機は送信ポイントの射線上に近付くな、即退避しろ』

ゲームマスターのコンソールから、いくつもの認証コードが入力され、警告表示に囲われた、赤いボタンが迫り上がる。

『我々は、このGBNと言う世界の管理者であり、守護者でもある。一般のユーザーから、無能の誹りを受けようとも、我々はこの世界を守ってきた。例えそれが、”曲がりなりに”も、”と言う言葉を頭に付けたとしてもだ。彼ら反乱軍はそれを良しとせず、ただ欲する所を為すだけのテロリストである。我々はテロになど屈しはしない。今日までこの世界を守ってきたのは昔日の老人ではなく、今を生きる我々であると、声高々に唱えようではないか』

一呼吸を置いてから、宣言する。

『正義は、我らに有り。メギドフレーム、発射』

”黙示録の業火”と称されたそのボタンは、いとも容易く押し込まれた。

最初に戦場の“異変”を感じ取ったのは、コーダイだった。

彼のGBN上の感覚は、ハバキリほど鋭敏なものではない。

しかし、ハバキリの感覚が前衛的な“勘”に近いものであるに對して、コーダイは自身が踏んできた場数による経験と、戦況の変化を目敏く見抜くことに関する俯瞰的な感覚を鍛えてきた。

そのコーダイの感覚は、『GBNガードフレーム達が”あるライン”から遠ざかるような動きを見せている』ことを見抜いていた。

「(正規軍のガードフレームの動きがおかしい、まさか……)」

同時に、その”あるライン”の先に大型の反応が降下してきていることにも気付く。

次の瞬間、コーダイの「まさか」は「やばい」と言う確信に変わった。

すぐにコンソールを開き、僚機や同チームにだけに繋がる共通回線に乗せて叫んだ。

「全機に告ぐツ、ポイント9901から離れる！正規軍が『デカいの』を撃ってくるぞ!!」  
その警告の数秒後に、極東ベース基地から眩いばかりの“朱い”光束が空へ向かって放たれた。

メギドフレイムと呼ばれるその戦術砲は、成層圏から降下してきた”赤い巨駆”を呑み込まんと迫る。

しかし——放たれた超高エネルギー体は、”紅い巨駆”に触れるよりも先に、見えない障壁によって弾かれ、拡散した業火の数々は死の雨となつてベースエリアへ降り注ぎ、NPDリーオーやGBNガードフレイムに関係なく余波に巻き込まれては焼かれていく。

「正規軍の奴ら、あんなもん隠してたのか」

ハバキリのシュツルムジンライは、降ってくるメギドフレイムの余波を避けつつ、それが放たれた方向——極東ベースの本部へモノアイを向ける。

「あんなもん、つて言いますけど……それを無傷で防いでいるあの紅いアレも凄いと思いますよ?」

ステラのノーベルガンダムは弾の切れたアサルトライフルを捨てて、小太刀を持ち直す。

メギドフレイムの照射が終わった頃を見計らつてか、その紅い巨体が蠢き始めた。

機首に当たる部位が”割れる”と、それが外へ外へと開いていく。

どぎついピンク色の内部構造には多数の砲門。

上か、もしくは下から見たそのシルエットは、鳥の鎖骨（ウイツシュボーン）を思わせる。

「ありやあ……『パトウーリア』か!？」

ザクマシンガンの弾倉を交換しているツダは、その紅い巨体が『X』に登場する超大型ニュータイプ専用MAの名を口にする。

「パトウーリアだけじゃない、周りに随伴機もいるぞ」

弾の切れたクレイバズーカを捨ててビームライフルを取り出すネモは、パトウーリアと共に降下してきたのだろう、大気圏突入カプセルにアイカメラを向ける。

重力下に突入成功したものから、カプセルを破ってその姿を見せる。

一見すると『キュベレイMK-II』のエルピー・プル専用機に見えるが、ファンネルコンテナは大型で、さらに背部には二門のビーム砲が外付けされているところを見る限り『量産型キュベレイ』だろう。

その数は12機ほどで、パトウーリアの随伴機と呼ぶにはあまりにも少な過ぎるよう  
に思える。

「なるほどな、アレが例のニュータイプ部隊って奴か」

ハバキリのシュトルムジンライのモノアイが、まだ遠方にいるパトウーリアと量産型キュベレイ部隊を捉える。

「それなら、あの中……って言うか、そのパトウーリアとか言う大きいのにジルちゃんがいるってことですね」

「……多分な」

確定では無いため、多分と言う不確定な言葉を使うハバキリは、原作におけるパトウーリアを思い出す。

原作では、人工ニュータイプの『カリス・ノーテイラス』を“生体ユニット”として組み込み、フォートセバーンの街並みを一瞬で火の海変えろと言う火力を発揮し、『ガロード・ラン』達フリーデンのガンダムチームを全く寄せ付けない恐ろしいまでの戦闘力を見せ付けたが、『ティファ・アデイル』がカリスの思念を感じ取り、声による呼びかけによって攻撃を止めさせ、直後にガロードのガンダムXデバイダーが取り付き、コアユニットごと引き抜いてカリスを奪還、敗北の色が濃厚になるや否や副席にいた『エニル・エル』は逃走、メインパイロットの『ノモア・ロング』も自害に及んだことで制御を失い、そのまま機能停止した。

生体ユニットとして“組み込まれて”いたカリスは、まだ自我を完全に失っていないかったために、奪還することが出来たのだ。

しかし、そもそもパトウーリアの生体ユニットとして組み込まれているのがジルとは限らないし、仮にジルだとしても既に『マシーンに呑み込まれて』いたら……

するべきではない想像を振り払う。

すると、量産型キュベレイ部隊は散開、それぞれが単騎でGBNガードフレームへ襲いかかる。

『ファンネル』『ファンネル』『ファンネル』『ファンネル』『ファンネル』『ファンネル』『ファンネル』『ファンネル』『ファンネル』『ファンネル』『ファンネル』

一斉にファンネルを展開、それぞれが意志を持ったかのように攻撃を仕掛けていく。

GBNガードフレーム達も、レーザーガンやマシンガンで放たれるファンネルを迎撃しようとするものの、それらひとつひとつはただ無造作に動くだけでなく、意図的に銃撃を躲している。

『ファンネルの数っ、多過ぎんだろ!?!』

『クソツ、クソツ、クソツ!なんでファンネルがあんなに動けるんだ!?!』

『まさか……本物のニュータイプとでも言うのかよ!?!』

ファンネルだけではない、懸命にファンネルからのビームのシャワーを回避しているGBNガードフレームの先を読むように、背部のアクティブカノンからビームが発射され、撃ち抜かれる。

一度は拮抗していた両軍のパワーバランスは、たった一個中隊の登場によって一気にひっくり返った。

「ニュータイプが戦争の勝ち負けを左右することもある、か。あながち間違いでなくてもな」

いやこの場合はE.L.ダイバーがガンプラバトルの勝ち負けを左右することもある、だな、とハバキリが率直にそう呟いた、その直後に別方向の彼方からアラートが鳴り響いた。

ついこの間にも見た、白銀のジム・クウエルージャツジムメントと、それに追従するNPDリーオーが三機。

『やはり来たか、ハバキリ！』

両腕のビームライフルを連射してくるジャツジムメントに対し、シユツルムジンライ、ノーベルガンダム、ツダ、スタークジェガンは瞬時に散開する。

ハバキリは敢えて向こうのリートーシローの通信回線に合わせて応答してやる。

「おー、トーシロー！約束通りデートに来てやったぞー！」

ビームカービンを連射しながら、ハバキリはシユツルムジンライを急加速させてジャツジムメントへ突っ込むー

「だからーーーもうデートは終わりだ、あばよ」

ーーと見せかけて、そのままその脇を通り抜けて行った。

『逃げるつもりか？逃さん！』

ジャツジムメントはすぐに反転してシユツルムジンライを追おうとするが、シールドを二枚背負った前者と、爆発的な推進力を持つ後者とは、最高速度が違いすぎた。

「ハッ、そんな邪魔くせーモン背負って追いつけるんならな！」

鼻で嘲笑ってやる一方で、身体を襲う負荷は無視出来そうになかった。

「(こりや推進剤よりも先にオレが保たねーな、小休止を挟んでも30分が限界か)」  
ハバキリは、自身のダイバーとしての体力的な限界を測っていた。

GBN上では肉体的な疲労は感じられない。

だが、「体力が消耗している」と『脳が勝手に誤認する』のだ。

五感の全ては、脳の電気信号に通ずる。

実際に疲れていれば、肉体を通じて脳が「疲れている」と判断して、無意識の内に身体動きを制限する。

脳がそう判断すれば、実際は体力消耗など起きていないにも関わらず、身体動きは制限される。

逆に言えば、脳が疲れていないと判断していれば、『体力的な負担を無視して動き続けることは出来る』

それはつまり、いくら疲労しようが負傷しようが、脳が「止まれ」と命令しないため、



『疲れていることを感じられない』

そのような場合、最終的に筋の断裂や骨折などと言った、『整体学的に動かせない状態』になるまで止まれないのだ。

現実、それも普通ならば脳が真っ先に反応してストップを掛けるので、そこまでに至ることは滅多にない。

だが、それもGBN上では話が変わる。

やろうと思えば理論上、全五感を無にする『無我の境地』に至ることも可能なのだ。

例え手足がちぎれようとも、『その部位が電子的に消えるだけで、動くことはできる』とも言える。

話を戻せば、シユツルムジンライはそのケタ違いな推進力を自在に振り回すことで超絶的な機動を可能にする代わりに、ダイバーのライフを削る、文字通りの諸刃の剣のような機体だ。

そんな機体を長時間乗り続けようものなら、エネルギーや推進剤が切れるよりも先にダイバーがライフを失って動けなくなってしまう。

何にせよ短期決戦だな、とハバキリは通信回線を合わせ直し、コーダイに繋ぐ。

「コーダイ聞こえるか！ トーシローが動いた、プランG3に移行する！」

180mmキャノン砲と肩部のキャノンによる四門の火砲による砲撃戦を継続しているコーダイは、ハバキリからの通信を耳にしてその内容を読み取った。

「プランG3か……よし、任せろ！」

了解を返すと、すぐにサツキーに通信を繋ぎ直す。

「サツキー、プランG3が発動した。ここは任せろ」

ガンダムデスレイザーのビームシザーによる一閃でNPドリオーを真つ二つにしながら、サツキーはコーダイからの通信を聞き取る。

「オツケー！任せられたけど、なるべく早く戻ってきてよ！」

「なるべくな、なるべく」

すると、キャノパルドはその場で踵を返して移動していく。

リーダー反応には、キャノパルドと向かい合う形で二つの反応が近付いてくる。

速度の速い方がシュツルムジンライ。

そしてその後ろから追い掛けているのが、トーシローのジャツジムメントだろう。

やがて地平線の向こう側から、シュツルムジンライが猛スピードで迫って来るのが見えてきた。

「コーダイ、バトンタッチ！」

「したら俺がミンチになるわアホ」

シユツルムジンライが右手を差し出して『バトンタッチ』を要求してきたが、そんな速度のシユツルムジンライに触れようものならクラツシユするのは目に見えている。

そのままキャノパルドの背後をシユツルムジンライが通過するのを見て、コーダイはさらに向こうからやって来る機影―ジャツジムメントを捉えた。

射程に踏み込んだと見るや否や、即座に180mmキャノンのトリガーを引き絞った。

対するジャツジムメントもすぐに反応して砲弾を躲した。

『そのガンキャノンは……コーダイ、君か?』

「正解だ、トーシロー」

ザンツ、と大地に脚を踏み締めて、キャノパルドとジャツジムメントが対峙する。

『そこをどいてくれ、僕はハバキリを追っているんだ』

「そうはいかねえ。ここでお前の相手をするのが、俺の役目なんぞな」

180mmキャノンの砲口と、ビームライフルの銃口が睨み合う。

『そうか。なら、押し通させてもらおう!』

トーシローのその言葉が、両者の火蓋を切り落とした。

「俺の異名を忘れたかトーシロー! この『深紅の爆炎』、コーダイ様が引導を渡してや

らア!!」

直後、砲弾とビームが交錯した。

青き狂戦士、白き聖騎士の双壁に続く、フォース・アルディナのNo. 3……それが、深紅の爆炎の異名である。

パトゥーリアと量産型キュベレイ部隊の出現は、セアとエミルの一番隊も確認している。

しかし、GBNガードフレームとNPDリーオーとの三つ巴の戦いを無視しながらは進めない、無理に押し通ろうものなら背中から撃たれるのは火を見るよりも明らか。

フルドレスフリーダムガンダムと七星剣士エクシアが背中合わせで立ち回る中、エミルは背中同士の接触通信を行う。

「セアさん、ここはボクが引き受けます。あなたはニュータイプ部隊……ジルちゃんを頼みます」

「だけど、ここで私が抜けても大丈夫？」

ただでさえ少ない戦力で、大群を相手に分散させるのは愚策。

「ボク達の目的は、あくまでもジルちゃんの奪還です。その本懐さえ成し遂げられるなら、無茶のひとつやふたつ、やってみせますよ」

「……分かった。一番隊総員！今から指揮権を私からエミルくんに移譲します！以後は彼の指示に従ってください！」

号令を聞いて「エミルに指揮権を移譲？」「分からんがとにかく了解！」と言う応答が返ってくるのを確認してから、セアのフルドレスフリーダムガンダムは、スカートユニットを翻して、パトゥーリアの方へ飛び立つ。

時を同じくして、トーシローの相手をコーダイに任せたハバキリが近付いてくる。

「セアさん、こっちはコーダイに後を任せてます」

「うん、こっちもエミルくんに任せてあるよ」

どうやら経緯の違いはあるものの、ハバキリとセアは奇しくも同じことを考えていたようだ。

シユツルムジンライとフルドレスフリーダムガンダムの二機が加速、パトゥーリアへ向かおうとするが、不意にその足を止める。

パトゥーリアの内部構造にある多数の砲口にエネルギーが集束し、想像を絶する荷電粒子となって吐き出される。

それは、ハバキリとセアに向けたものではなかった。

しかし、荷電粒子は真つ直ぐに極東ベースの本部へ向かい————

一瞬にしてその周囲を地獄絵図へと変えた。

幸いにして、シエルターシールドによって守られた司令部が崩壊するようなことはなかったものの、射線上にいた数百機近いGBNガードフレームが焼き払われ、切り札であろうメギドフレームにまでその被害は及び、さらには周りの市街地まで炎に包まれる。

パトウーリアの荷電粒子砲による被害は、控えめに言っただけであつた。

『被害状況を確認しろ！』

『ガードフレームの損耗率、全体の三割を越えました！』

『極東ベース市街地……は、破損率87%です……！』

『メギドフレーム小破、修復可能ですが、30分は必要とのこと』

『シエルターシールド強度、31%低下。パトウーリアの荷電粒子砲であればもう一発は防げます』

たった一度の射撃だけでこれほどの被害が出ているのだ。

二発目は防げて、間髪入れず三度目も来ないとは限らない。

ゲームマスターは焦燥を押し隠して、努めて冷静を装って指示を飛ばす。

『……メギドフレームの修復を急げ。20分で終わらせろ、チャージは完全でなくとも

構わん。パトウーリアではなくリーオー部隊を薙ぎ払うために撃つ』

『不完全なチャージで試射もせずに撃てど？それは危険ではありませんか？』

オペレーターの一人が純粹に疑問として訊ねた。

パトウーリアと言う巨大な目標ではなく、NPDRリーオー部隊に向けて撃つのなら、展開中のGBNガードフレーム部隊を射線上から離さなくてはならない。

そして、修復間もなく試射もせずに、なおかつ不完全なチャージで撃てと言うのだ。

下手に撃って暴発でもしようものなら、どんな被害がどこまで出るか分からない。

それでも、決断は非情にも下される。

『幸いにも、パトウーリアの注意は所属不明機に向けられている。その間にメギドフレームを修復、照射してリーオー部隊を殲滅し、ガードフレーム全機でパトウーリアを討つ。戦局の打開にはメギドフレームが不可欠だ』

『は、ハッ』

オペレーターはすぐに了解し、メギドフレームの修復を急がせる。

「こんな……これは……ッ」

フルドレスフリーダムガンダムを通じた視界の中、セアはその絶望的なまでな”破壊

”の痕を目の当たりにする。

「ビビってる場合じゃねーですよセアさん。……気持ちには分からんでもねーですけど」  
あんな巨体から、街一つを焼き払うだけの力がいとも容易く放たれるのだ。

たかがガンプラの一機や二機でどう倒せと言うのかと言いたくもなる。

それでも、誰かが止めなくてはならないのだ。

「とりあえずオレが突っ込みます。セアさんは後詰めをお願いします」

そう言うや否や、ハバキリはアームレイカーを押し上げて、シユツルムジンライをパトウーリアへ向けて突撃させた。

すると、パトウーリアの方もシユツルムジンライの接近を認めたらしく、機体の各部から触手のようなものが多数生えてくると、それらがビーム砲となってシユツルムジンライに襲いかかる。

およそ三十基による有線ビーム砲からの攻撃を掻い潜りながらも、ハバキリはビームカービンを連射、有線ビーム砲を破壊しようとするが、反撃が来ると分かれば有線ビーム砲はすぐにパトウーリア本体に引っ込み、ビーム弾はフィールドバリアによつて弾き返される。

「ビーム射撃は無理か。実弾も持つてねーし、懐に飛び込んで殴るしかねー……なつと！」



すぐさまパトウーリアの荷電粒子砲が、地表にいるシュツルムジンライへと降り注がれる。

ハバキリはシュツルムジンライの莫大な推進力によって機体を強引に回避させる。

息つく暇はない、すぐにまた多数の有線ビーム砲がシュツルムジンライ目掛けてビームを撃ちまくってくる。

シュツルムジンライがビーム砲を躲す最中、一步遅れて来たセアのフルドレスフリーダムガンダムが、ハバキリを狙う有線ビーム砲をマルチロックオンする。

高エネルギービームライフル、バラエーナ、ナルカミによる一斉射撃が放たれるが、これもパトウーリアのフィールドバリアによって弾かれる。

「……長距離ビームは、完全に効かないみたいだね」

フルドレスフリーダムガンダムの武装のほとんどは、ビーム兵器だ。

唯一の物理攻撃可能な武装は頭部のピクウスのみだが、これはあくまでも牽制やミサイル迎撃などに力を発揮するものだ、対MAでは無力に等しい。

パトウーリアの注意がフルドレスフリーダムガンダムにも向けられるのを尻目に、ハバキリのシュツルムジンライはビームカービンを納め、代わりにシースザンバーを抜き放ってパトウーリアの懐へ加速する。

有線ビーム砲からの攻撃は最低限の回避と、シースザンバーの腹で防ぎながらも肉迫

し、

ついにパトウーリアの装甲に取り付くことに成功した。

ハバキリはすぐに通信回線を切り替えて、接触通信を行う。

「ジル！そこにいるんなら聞こえてるな！オレだ、ハバキリだ！」

.....

しかし、パトウーリアからの応答はない。

「聞こえねーとは言わせねーし、オレの声を忘れたとも言わせねーぞー！」

.....

原作におけるカリスの場合は、パトウーリアに組み込まれてから間もなくだったために、まだ心は生きていた。

だが、今回のケースはどうだ？

ジルが誘拐されてから一週間は過ぎてている。

強化人間として扱われていたのなら、再調整で洗脳し直し、パトウーリアとの最適化も行われているかもしれない。

もうジルは、ELダイバーの女の子ではなく、『機械仕掛けの化物』に成り下がってしまったのか？

ハバキリの思考にそんな迷いが生じた時、不意に有線ビーム砲のひとつがシュツ

ルムジンライに巻き付いた。

「っ、しまった……っ!?」

そのまま引き寄せられ、パトウーリアの荷電粒子砲の前に晒される。

「っ、ん、のっ……!」

ハバキリはアームレイカーを押し上げて、シュツルムジンライの推進力で強引に荷電粒子砲の前から離れ、シースザンバーで機体に巻き付いている有線ビーム砲を叩き斬る。

ようやく拘束から逃れ、一度パトウーリアから距離置きながら、僚機確認画面からセアのフルドレスフリーダムガンダムの状況を見る。

有線ビーム砲からの攻撃を躲しつつ、避けきれないものはラケルタ・ビームサーベルで斬り弾いているが、やはり近付けないようだ。

「セアさんっ、大丈夫ですか!」

「私は平気。でも、これじゃ近付けない……」

通信を交わしながらも、両機はその場から飛び下がった。

直後にパトウーリアの荷電粒子砲が放たれ、シュツルムジンライとフルドレスフリーダムガンダムがいた地点を薙ぎ払った。

「接触通信でもジルの反応はありませんでした。あとはもう、ヤツの内部に進入して、コ

アユニットを直接引っこ抜くしかねーです」

「それなら、私が注意を引き付ける感じだね。ハバキリくんにはわかり負担が掛けて申し訳ないけど、お願い」

「よし、それじゃ……」

短い作戦会議を強引に終わらせるかのように、二人の周囲からビームが放たれた。

パトウーリアの有線ビーム砲によるものではない。

そのパトウーリアの護衛のために戻ってきたのか、量産型キュベレイが三機、ファンネルを放っている。

「こっちは私が相手する！ハバキリくんはジルちゃんをー」

「おー、任せました、よツと!!」

よツ、と共にシユツルムジンライはスラスターの炸裂と共に跳躍、再びパトウーリアへ突撃していく。

フルドレスフリーダムガンダムも、スカートユニットを翻しながらもファンネルからのビームを掻い潜り、イニシアティブを保つ。

「ジルちゃんのコピー体、か……可哀想だけど、加減はしてあげられないッー」

セアは腹積もりを決め込んで、量産型キュベレイ三機と対峙する。

GBNイースト・エリア、山岳地帯。

山中にあるフォースネストからは、あるフォースのガンプラが出撃準備を整えていた。

その中で、暗緑の髪のエルフがスピーカーを通じて声を張る。

「総員傾注！これより俺達は極東ベースへ突入し、正規軍と反乱軍との戦闘に介入する！目的はただひとつ、『この戦いをガンプラバトルによって終わらせる』ことだ！既に戦闘に介入している『フォース・リヴェルタ』とその関係者とは共闘する！混戦の中でそれを誤解なく伝えるのは難しいかもしれないが、俺達ならやれると信じている！」

フォースネストの格納庫には、七機のガンプラが起動し、それぞれがハンガーから降ろされてリニアカタパルトへ乗せられる。

桜色のSDガンダム

董色のケルデイルガンダム

血塗られたパラス・アテネ

メタリックブルーのガンダムアスクレプオス

深緑のゼータプラス

黒紫色のサイサリス

それらが順々に発進していく中、最後に出撃するのは、『マスラオの改造機』

『マスターガンダム』を思わせる一対のバインダー。

戦国武将の鎧や袴のような外装甲。

かの有名な『獄炎のオーガ』とはまた違う”焔”の意匠。

各部には『ブレイヴ』『オーバーフラッグ』と言ったパーツがふんだんに用いられた、旧ユニオン系のシルエット。

黒を基調とした本体に、”焔”の如し赤が派手に彩る。

赤みを帯びた黒髪を無造作に束ねた青年は、コクピットの中で目を閉じて腕を組み、心静かにシークエンスが完了されるのを待つ。

オールグリーン、出撃準備完了が告げられると同時にその橙色の眼を開き、アームレイカーを握り締める。

「ツルギ、『マスラオブレイヴレイズ』、『フォース・スピリッツ』……参るッ!!」

”勇焔”と銘打たれたマスラオはカタパルトから放たれ、戦火の中へと飛び立つ。

結末の時は近いoooooooo

## 【次回予告】

コーダイ「お前は一体何が目的で戦ってたんだ、トーシロー！」

トーシロー「分かるまい！ハバキリと一緒に戦ってきた君には！」

セア「私にはトーシローくんの戦う理由は分かかってあげられない……それでも、私達にも戦う理由はある！」

ハバキリ「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション

『ジル』

オレは必ずジルを取り戻す……何があってもだ!!」

## 24話 ジル

「デイメンション内で電子の肉体を作り直すことを」クローニング”のそれだと言うトラちゃんに、マイマイは訝しげに目を細めた。

「あんた……今さっき自分でクローニングを否定したところじゃないの。なのに、よくそんなことを言えたわね」

「ふむ、何か勘違いをしているようだが……別に俺は「クローニングは唾棄すべき技術である」とは言つとらんよ。クローニングを行うも行わぬも、それを決めるのは結局のところ、人の選択だ。……むしろ、せつかくの技術の進歩を、『悪用することによってその価値を貶めてしまっていること』こそ唾棄すべきこととは思わんか？」

モノとは得てして、扱う人間によってその価値が決まる。

刃物は正確に安全に裁断することが出来る便利な物であるにも関わらず、殺傷を与えらるるにも向いている”凶器”にも成り得てしまうのだから。

「クローニングが生命への冒涇と言うのなら否定はすまい。だが、それによって『誰かの心の隙間を埋められる』のなら、クローニングも悪いばかりではないと思うがな」

「物は言いようね。まあ、それで”あの子達”が喜んでくれたんなら、まあいっか」



マイマイもトラちゃんの発言に納得したようで、それ以上の追及はしなかった。だが、不意にトラちゃんの元より悪い目付きがさらに細まる。

「確かに、”彼女”の電子の肉体の再構築には成功し、再びGBNに生を受けることが出来た。……だが、成功後の問題が何も無かったわけではなかった」

それを聞いたバーテンダーのグラスを磨く手と、ケンさんの『俗物』を味わう手が止まる。

「元より破損したメモリーだったからな。容姿と身体付きはほぼ元通りに復元出来たが……」記憶まではどうしようもなかった」

留置所。

被疑者の身柄を一時的に拘束するこの施設に、一台のパトカーが訪れた。

ドアを開けるなり、部下を連れて施設の玄関口へ向かうのは、警官服を着こなしたイノグチ・ナオエであった。

彼は、隠居した釣具屋の店主で、GBN上ではフォース・フラワーズの二軍リーダーでもある。

隠居した、と言うのは建前と言う名の隠れ蓑。

その正体は、今尚現役である熟練の刑事。

そのような人物が慌ただしい様子で駆け込んで来ようものなら、当然受付窓口を担当していた職員は何事かと思いながらも、すぐに応対に掛かる。

「警視庁生活安全総務部、イノグチ・ナオエ警部だ。こちらに留置されている、カツラギ氏の身柄の引き受けに来た」

「は、そのような連絡は通達されておりませんが……」

あくまで「マニュアル通りにやっています」と言う反応を示す職員に、ナオエは苛立っているように見せながら早口で捲し立てる。

「悪いが緊急時につきのイレギュラーだ、通達やら令状やらは全部後回し。ようやく『カツラギ氏が冤罪である』ことが突き止められたんでな。……ほれ何やってる！ さっさと動けッ!!」

最後に語気を強めて怒鳴ってやると、職員は肩を竦めながらもすぐに行動に出た。

その狼狽えながらの後ろ姿を見つつ、ナオエは表に出さない程度にはあるが、少しだけ焦っていた。

「(後手に回ってしまったな。反乱軍が仕掛ける前に事を止めたかったが……そうは言ってられん)」

そう。

この留置所にカツラギ氏が拘束されていると言うことは、今デイメンション内に口グインしているガンダイバーは、『カツラギ氏ではない誰か』である。

その背後関係を突き止めるためにこの一週間、寝る間も惜しんで捜査を続けた甲斐があつたと言うものだ。

それも今からで間に合うかどうか、だが。

極東ベースエリアにて戦闘が開始してから、一時間が過ぎた。

フォース・リヴェルタの介入、メギドフレイムの照射、ニュータイプ部隊の出現。

この僅かな時間の内に戦局は目まぐるしく変化している。

その変化の中、エミルの七星剣士エクシアと、彼に付き従う一番隊メンバー達は孤立無援な戦いを続けていた。

ダブルガトリングガンを撃ちまくるNPDリーオーの弾幕を掻い潜り、GNロングブレイド【玉衝】を一閃、プラネイトデイフェンサーの電磁フィールドもろともボデイを斬り捨てる。

しかし、酷使に酷使を重ねていたせいか、ついにその刃が半ばから折れ、切っ先が地

面に突き刺さった。

直後に、GBNガードフレームの小隊が現れ、一斉にビームガンによる射撃を仕掛け  
てくる。

七星剣士エクシアは咄嗟にA・B・Cマントでビーム弾を防ぐが、既にマントの対  
ビームコーティングも限界を迎え、シールドに着弾し始めた。

僚機であったソードカラミティガンダムが、胴体部から複相エネルギー砲『スキュラ』  
を照射しながらも、肩部に備えたビームブーメラン『マイダスメッサー』を二丁同時に  
投擲、GBNガードフレーム小隊を撃破する。

一息つく間もなく、また別方向から現れたNPDリーオー部隊が、ダブルガトリング  
ガンやビームカノンを手に襲い掛かってくる。

「チツ、また来た……！」

ソードライフルを撃ち返しつつ、エミルは状況把握を急ぐ。

リーダーを見ても、敵対反応を示す赤いマーカーが埋め尽くすばかり。

「堪えろ……」が踏ん張りどころだ！」

元アルディナのガブスレイが、左腕を失いながらもフェダーイン・ライフルを撃ちま  
くって抵抗するが、背後からダブルガトリングガンの銃撃を浴びせつけられる。

「ぐあつ、がつ、くそつがつ……ア……」

その手からフェダーイン・ライフルを落としながら、ガブスレイは爆散していった。ガブスレイ、撃墜。

「バノンツ!!?……ちくしようつ、こんなところでやられちまう奴があるか!!」

ガブスレイとバディを組んでいたバイアランは、相棒を討たれたことに怒りながら腕部メガ粒子砲を乱射する。

消耗は交戦時間が間延びし、交戦時間の間延びは増援を呼び、やがてそれが”犠牲”の増加に繋がっていく。

「ジルちゃんはまだ見つからないのか!? もう保たないぞ……ツ」

折れたGNロングブレイド【玉衝】を捨てて、GNビームサーベル【天権】を抜き放つ七星剣士エクシア。

さらに団子状になって現れるNPDリーオーの増援。

限界か……、とエミルの中で諦めが過りかけた時、

突如、どこからか振ってきた”ビームサーベル”がNPDリーオーの頭部に突き刺さった。

一機、二機、三機……と次々に機能停止していくNPDリーオーの群れ。

「ビーム、じゃない……ビームサーベルの弓矢?」

エミルがその”ビームの矢”が振ってきた方向にアイカメラを向ければ、

『ところがちよいさあー!』

太陽を背にした逆光と共に、「血塗られたような」パラス・アテネがバスターソードを片手に急降下、ダブルガトリングガンを向けようとしていたNPDリーオーにその肉厚の剣刃を振り下ろし、頭から股関節までを荒々しく斬り潰した。

その姿はエミルにとって忘れられない、トラウマとさえ言える。

「また……またお前か!お前はまたボクを邪魔するのかわ!」

一度目はE.L.ダイバー動乱の時に。

二度目はゼダンの門で。

何度もエミルの前に現れては、邪魔をしてきた、血塗られたように紅い機体。

『んー?あれ、その機体……あの時のエクシアくんかあ!』

ゆらりと七星剣士エクシアに向き直る紅いパラス・アテネー機体銘『ブラッド・アテネ』

『この間はごめんねえ、ちよつと止むに止まない事情があつてさ……今だけは味方してあげるから、ね♪』

激しく警戒して敵意を顕にするエミルを前に、ブラッド・アテネのダイバーは悠然と背を向けると、NPDリーオー部隊に襲い掛かった。

一体どう言うつもりなのか、とエミルが戸惑う側に、もう一機別の反応が近づいて来

た。

右肩にダブルガトリングガンを備え、左手には弓矢を握る、董色のケルディムガンダムー『ガンダムマナジュリカ』だ。

『もうお姉ちゃんつてば！いきなり突っ込むんじゃないの！敵だつて誤解されたらどうするのよ！』

『その辺はユイちゃんに任せるわあ』

ブラッド・アテネとガンダムマナジュリカ。

似ず非なる機体でありながら、その連携力は機械的なフォーメーションしか取れないNPDリーオーを簡単に破壊して蹂躪して、殲滅していく。

その光景を見ながら、ソードカラミティガンダムからの接触通信が掛けられる。

「どうする、奴らは敵じゃなさそうだが」

「……ボク個人としては、あの紅い方に思うところはある。けど、今は信じよう」  
この後をどうするかは分からない。

だが今は、今だけは戦力としてアテにしていいたいだろう。

一番隊とは別方向の、二番隊による戦いも激化している。

トーシローと交戦を開始したコーダイに代わり、今はサツキーが二番隊を率いている。

「さすがにこれ以上の持久戦はキツイわね」

まだエネルギーが保っているビームシザーでGBNガードフレームを撃破したガンダムデスレイザーは、コキュートスのジンクスIVと背中合わせに立つ。

「倒すだけ倒したら脱出しろ……と言いたいが、そうも言つてられん、なッ！」

新たに現れたGBNガードフレーム小隊へ向けて、ジンクスIVはNGNバズーカを撃ち込み、それが最後の一発だったためにその場で投棄する。

ガンダムデスレイザーはミラージュコロイドを起動、その場から姿を消しージンクスIVを攻撃するGBNガードフレーム小隊の死角へ回り込んでビームシザーを一閃、三機まとめて撃破する。

しかし安堵する余裕はない、すぐさま別方向からNPDリーオー部隊が遠距離からバズーカ砲による砲撃を仕掛け、ガンダムデスレイザーの背中のアクティブクロークに着弾、爆発が機体を吹き飛ばす。

「いっつ……ッ！」

体勢を崩したガンダムデスレイザーを追い込もうと迫るNPDリーオー部隊だが、その前にランドマン・ロデイが立ち塞がる。



「やらせはせんツ！」

ハンマーチョップを片手に突撃、バズーカの直撃に怯みながらも肉迫し、一機の頭部を叩き潰す。

しかし、残る二機が挟み込むようにミサイルランチャーを発射、ランドマン・ロデイの装甲が見る内に破損していく。

「やらせ、はせ、んツ、やら、せ、……」

しかしミサイルの群れをまともに直撃したせいも、機体よりも先にダイバーが先に力尽き、制御を失ったランドマン・ロデイは機体の隙間からオイルを垂れ流しながら崩れ落ちた。

ランドマン・ロデイ、撃墜。

「おいロツキイ！返事しろよバカロツキイ！……仇は取ってやるからなツ！」

ジム・ストライカーが味方の撃墜に涙しながらもツインビームスピアを突き出し、NPDリーオーを貫く。

ようやくNPDリーオーの数が減ったと思えば、今度はGBNガードフレームがまた現れてくる。

「ツ……いい加減しつこいっての！」

吹き飛ばされた機体を起き上がらせ、サツキーはGBNガードフレーム部隊に向き直

ろうとして、

「ふと、烈風が吹き抜けた。

『スパイラル・ステップブリーダー』  
『螺旋する先駆電導!!』

烈風はGBNガードフレーム部隊を捕らえ、直後に稲妻が烈風の中を駆け巡り、機体をスタスタに引き裂いていく。

両手にビームサーベルを握るその姿は、深緑のゼータプラスー『ゼータプラスラフアーガ』

『何とか、間に合ったようだな』

「その機体、確か前にレジャーフィールドの時に……」

「サツキーは見覚えがあった。」

バラの花を集めていた最中に戦闘になり、その戦闘終了の直後に現れては、すぐに踵を返していった機体。

さらに、見覚えのある機体はもう一機現れる。

ゼータプラスラフアーガの近くに着陸してきたのは、蒼いガンダムアスクレプオスー『ガンダムアスクレプオスシャード』

『大丈夫、ボク達はあなた方の味方です!』

その証拠がこれだ、と言わんばかりに、ガンダムアスクレプオスシャードは白兵戦

モードに変形すると、手近にいたNPDリーオーをパイソクローで貫き潰してみせた。

『まずは敵の数を減らす、行くぞミーシャ！』

『はいっ、サヤさん！』

ゼータプラスラファールとガンダムアスクレプオスシャードは、瞬時に二手に分かれて展開する。

GNガードフレームにはゼータプラスラファールが、NPDリーオーにはガンダムアスクレプオスシャードが。

暫しその光景を見ていたサツキーは、顔を綻ばせた。

「よく分かんないけど、ありがとね！」

自身もまたビームシザースを構え直し、敵部隊へ立ち向かう。

トーションローの護衛機であろうNPDリーオー三機は、特別高度なAIを組み込まれているらしく、ステラのノーベルガンダム、ツダ、ネモは苦戦していた。

「時間掛けてらんねえぞ！」

「分かっている。だが、簡単に行くものでもない……！」

ネモからのビームライフルは、隙間なく展開されたプラネイトディフェンサーによって弾かれ、接近しようとするノーベルガンダムとツダには、ビームカノンの波状攻撃が迎え撃つ。

「早く兄さん達の援護に行きたいのに……ッ」

ミサイルランチャーをバルカン砲で撃ち落としながら、ステラは歯噛みする。

バルカン砲だけでは落とし切れなかったミサイルは小太刀てを斬り払い、もうなまくら同然になっていた小太刀を捨てて、ビームソードを抜刀する。

「一か八か突っ込む！援護頼む！」

ザクマシンガンを撃ちまくりながら、ツダはNPDリーオー小隊へ突撃する。

当然、容赦なくビームカノンの火線が降り注ぐが、ツダはシールドで防ぎ、防ぎ切れなくなったら左腕を犠牲に、頭部が、右足が次々に貫かれていく。

「せめて一機だけでも道連れにイッ……！」

満身創痍のツダはなおも突撃——否、特攻を止めず、中央のNPDリーオーに肉迫、その速度のまま体当たりをするように組み付き、ザクマシンガンのゼロ距離射撃を敢行し——

「わりい妹さん、兄貴によろしくな」

機体が限界を迎えたツダは組み付いたNPDリーオーもろとも爆ぜ散っていった。

ツダ、撃墜。

「……あなたの犠牲は、無駄にはしませんよっ」

ステラはアームレイカーを握り締め直す。

「ツダ乗りが自分からゴーストファイターになってどうすんだよ……バカ野郎が！」  
ネモもビームライフルを捨てて、リアスカートからビームサーベルを抜き放った。

その、直後。

ノーベルガンダムとネモのレーダー反応が、上を示した。

「増援!」

ステラが思わず上を見上げた時、逆光を反射しながら『黒紫色のサイサリス』が降つて来た。

しかしそのサイサリスの狙いは二人ではなく、NPDリーオーの方のようだ。

『おうるあアアアアツ!!』

一抱えはあるだろう巨大なマニピュレーターを握り締めて、拳を振り下ろした。

突然の増援にもすぐ反応したNPDリーオー二機はその場から飛び下がり、巨大な拳の一撃を躲す。

躲された一撃は地面を強かに捉えると、深いクレーターを穿ち、地割れを発生させてみせた。

『ちっ、外したか……』

黒紫色のサイサリスー『碎鎖裏守』は自らが穿ったクレーターから拳を引き抜いて、ノーベルガンダムとネモを守るように仁王立ちする。

「あの、あなたは……?」

モニター越しに見える、『喧嘩上等』の金刺繍がデカデカと輝くド派手な特攻服を纏ったこの女性……敵ではないようだが、ステラは一応尋ねてみると、目を合わせてくれた。『おう、いきなりでスマンな。アタシは『ヤイコ』ってもんだ。アンタらの敵になるつもりはねえから、安心しな』

それだけ告げると、碎鎖裏守は両拳を打ち付けてみせた。

『さあて、久々にでっけえ喧嘩だ……思う存分暴れさせてもらおうじゃねえかア!!』

羽織った上着を翻してアームレイカーを勢いよく押し出し、碎鎖裏守も背部のスラストパイプを推進剤を吹かして、NPDリーオーへ正面から突っ込んでいく。

思わぬところで思わぬ援軍が来てくれたことに、ステラは胸を撫で下ろす。

「こっちは大丈夫ですよ、兄さん」

遠過ぎて通信が届かなくとも、ステラはそう呟いた。

切り立った崖上の荒野では、赤と白が交錯する。

赤はコーダイのキャノパルド、白はトーシローのジャツジムメント。

フットローラーを駆使しつつどうにかイニシアティブを維持するキャノパルドは、両腕に抱えた180mmキャノンで迎え撃つが、ジャツジムメントは巧妙な機動で砲弾を躲し、牽制に放たれるバルカン砲はシールドで受け、確実にキャノパルドとの距離を詰めていく。

先程からこれが数分ほど続いているが、そう長くは続かない。

不意に右の180mmキャノンは弾切れを起こし、左の方も残弾は一発だけと言う事態に陥る。

舌打ちする余裕もなく、コーダイはウエポンスロットを切り替え、180mmキャノン二丁をその場で手放す。

温存していたビームライフルをリアスカートから取り出す、と同時にジャツジムメントからの左右のビームライフルが襲い掛かる。

致命傷を避けていくキャノパルドだが、その内の一発が左肩を掠め、それを気にすることなくコーダイはオープン回線を開いた。

「トーシロー……今更何故とは訊かねえよ。だけどな、ひとつだけ教えろ。お前は、『何でハバキリだけを狙う』んだ？」

その問い掛けを受けて、ジャツジムメントの挙動が止まり、キャノパルドもまた静止、互いのビームライフルの銃口だけが睨み合う。

『……コーダイ、君にはあるか？誰よりも頼れる男が近くにいる、その男を越えたいと思つたことが』

「何を言つてんだ……？」

『君は感じたことはあるか？本気で戦いたいと思いつながら、いつも躲されてしまう悔しさが』

誰よりも頼れる男がいて、その男を越えるために本気で戦いたいと思つても、男はいつもその本懐を叶えさせてくれない、と言いたいのだろう。

それはつまり……

「……ハバキリのことか」

思い当たる人物はただ一人。

直後、コーダイの中で渦巻いていた疑念が途端に噛み合った。

「お前……まさか、そのためだけにこんなことを？」

半信半疑……どちらかと言えば“信じられない”。

だが、トーシローはそれを肯定した。

『そうだ。機体と心構え、どちらも本気の全力でハバキリと戦うにはどうすればいいの



か？簡単だ、『彼に”怒り”を向けさせること』だ！』

「おい……なんの冗談だよ、それ」

『冗談なものか。だから、ELダイバーを排除したい強硬派のせいでもハバキリがフォースを去った時、どうすればいいと悩んださ。けれど、これはあくまでも僕の非常に個人的な”私情”だ。それよりも、フォースの存続を優先すべきとは思った。そんな時に、皆がフォースから次々に抜けて行った。もう二度と元通りにはならないだろう……そう思えば、辛く悲しく、寂しかった。だが、こうも思えた。「これはある種のチャンスなのだ」と。この状況を敢えて利用したんだ。……ELダイバーのクローン達が殺されるのを黙って見ていると言うのは、堪えるものがあつたが』

それを聞いて、コーダイは「そんなバカな」と呆れと困惑が混ざつた、複雑な心境になつた。

今のトーシローは、ハバキリと本気で戦いたいがためだけに、これまで彼と敵対するかのようない行動を取つていたと言うのだ。

たつたそれだけのことを為さんがために、

(トーシローの本意では無いにしろ)ジルと言うELダイバーの命を弄び、使い潰そうとしたのか？

「……………けんな」

ここに至ってコーダイは、困惑を怒りへと炎上させた。

「ふざけんな、トーションローツ！」

怒りと共にキャノパルドのビームライフルのトリガーを引くが、それは躲された。

「だったら尚更だつ、てめえをハバキリの元へ行かせるわけにはいかねえツ！」

ビームライフルだけではない、波状的に肩部キャノンも連射してジャツジムメントを追い詰める。

「ジルちゃんを……俺達の”友達”をつ、そんな好き勝手な理由のために、殺させてたまるか!!」

バルカンを速射して牽制し、

肩部キャノンを散発させて誘導し、

回避先を予測してビームライフルを撃ち込---

『読んでいるぞ』

避けられた。

必殺必中だったはずのその一発を。

「!？」

コーダイは、激情によってひとつ見切れていなかった。

自分と付き合いの長いヤツは、ハバキリだけではないことを。

自分がハバキリの動きの癖などを知っているのなら、トールローが自分の攻撃のタイミングの癖を知っているのは当然だった。

時にして、僅か0.2秒の硬直。

しかし、戦場でそれが命取りになるには十分過ぎた。

瞬時に距離を詰めて来たジャツジムメントのビームライフルの銃口からビームサーベルが発振され、袈裟掛けに振り抜かれた。

メガ粒子の光刃はキャノパルドの厚い前面装甲を捉え、深々と斬り裂いた。

「トールローがはっ、ア」

ビームサーベルの波動とスパークが目の前を塗り潰した時、コーダイのダイバーとしての意識は暗転した。

『行かせてくれ、コーダイ。僕はもう、止まれないんだ』

実際に、トールローの物悲しい声と、推進剤の燃烧音が聞こえた気がした。

数十基に渡るファンネルの大群と、先読みでもしているかのような正確さで放たれるアクティブカノン。

三機の量産型キュベレイを相手に、セアのフルドレスフリーダムガンダムは苦戦して

いた。

スカートユニットとウイングを翻してビームのシャワーを掻い潜り、反撃に高エネルギービームライフルやバラエーナ、バックパックのナルカミを放つても、相手は即座に反応して躲してしまふ。

ハバキリやエミルの情報が確かなものなら、この量産型キュベレイを操るのは、ジル―E.L.ダイバーのクローン。

ジルと出会った時からのこと……時折、ガンプラの感情を読み取るようなことや、他者の悪意を感じ取り、攻撃を先読みしたりすることを、これまでに何度も行ってきて、それらは一度として外れたことはない。

その能力を、ただガンプラバトルに利用するために、彼女らは「造られた」のだろう。確かに、相手の動きや攻撃を先読みするようなことが出来れば、ガンプラバトルに勝つことも容易いことかもしれない。

だがそれは、ジルと言う電子の人間が持つて生まれた才能のひとつだ。

それを、「都合が良い」と言う理由で彼女から自由を奪い、その才能を模倣しようとする。

世の中がそんな才能ひとつで左右されていいはずがない。

しかし、愚か者はそんな才能ひとつで物事を押し量つてしまふ。

才能があるから、才能があれば、才能さえあれば。

そんな透けて見えるような考えを、セアはロー「ズル」いことだと捉えた。

平然とそんな「ズル」が出来てしまうから、生命をモノとしか見ていない、見る事ができない。

この量産型キュベレイは、そんな愚かで浅はかな「ズル」から生まれた存在だ。

ならばこそ、こんな“モノ”はあつてはならない。

しかしロー生まれてきた命に罪はない。

セアは一度意図的に呼吸を行い、思考を整える。

その僅かな隙さえも、量産型キュベレイ達は突いてくる。

だが、その隙を突いてくることは『想定済み』だ。

フルドレスフリーダムガンダムはその場で跳躍してビームを躲し、そのまま上昇していく。

高度を上げるフルドレスフリーダムガンダムを追うべく、ファンネルの大群もその後に続く。

ある程度の高度にまで到達すると、フルドレスフリーダムガンダムは宙返りするようにしてファンネルと向き合いロー既にその火器群は向けられていた。

マルチロックオンシステムを起動、次々にファンネルと量産型キュベレイ部隊をロツ

クオンする。

ロックオンされた時点で、ファンネルの大群は攻撃を避けるべくその場から散開するが――

「見えてるよ。――全部ね」

いっそ冷淡とも言える声色と共に、セアはトリガーを引き抜いた。

高エネルギービームライフル、バラエーナ、ナルカミによる、フルドレスバーストアタックは放たれ、ファンネルの回避先すら見切ったように、次々に吹き飛ばしていく。

セアは先程から苦戦していたように見えたがその実、ファンネルの機動のひとつひとつを“見ていた”。

これは、空間認識能力の高さではなく、セアが持つ学習能力によるものだ。

そしてファンネルだけではない、三機いる内の量産型キュベレイの二機、片方は頭部を貫き、もう片方は下半身を焼き払っていた。

可能な限りの数のファンネルを破壊し、同時に量産型キュベレイの戦闘力も奪う。

この瞬間に限れば、セアは『キラ・ヤマト』とほぼ同等の戦闘力を発揮していたと言っても良い。

残された一機の量産型キュベレイが、袖口のビームサーベルを抜き放ち、ビームガン  
を撃ちながら接近してくるが、フルドレスフリーダムガンダムは両手の高エネルギー

ビームライフルをその場に捨てて、両手にラケルタ・ビームサーベルを抜刀、アンビデクストラス・ハルバードフォームとして連結、それを高速回転させ、ビームシールドのようにして量産型キュベレイのビームガンを弾いていく。

間合いを詰めて、ビームサーベルを振り翳す量産型キュベレイ。

しかしその光刃が届くよりも先に、フルドレスフリーダムガンダムの突き出したラケルタ・ビームサーベルの切っ先が、量産型キュベレイの頭部を吹き飛ばす。

「怖いかもしれないけど、我慢して」

連結したラケルタ・ビームサーベルを切り離し、両手両足、ファンネルコンテナを全て斬り飛ばした。

胴体以外の部位を全て失い、達磨にされた量産型キュベレイは、力無く倒れ、地面を転がった。

脅威はもう残っていないことを確認してから、フルドレスフリーダムガンダムはラケルタ・ビームサーベルを納め、高エネルギービームライフルを拾い直した。

最後にハバキリと別れた地点からだいぶ離れてしまったらしく、遥か向こうにパトウーリアの巨体が微かに見える。

「……急がなきゃ」

遣る瀬無い気持ちを胸にしまい込み、セアはフルドレスフリーダムガンダムを飛び立

たせた。

雑草が生い茂っていたはずの平原は、いつしか焦土と化していた。

パトウーリアが放つ無数の有線ビーム砲と、荷電粒子砲の波状攻撃が、ハバキリのシユツルムジンライを追い込む。

「ぎっ、……ッ！」

有線ビーム砲からの攻撃を回避すべくスラストを炸裂させるシユツルムジンライ。しかしその機動を行う都度に、確実にハバキリの身体を傷付けていく。

これが現実のものならば、ハバキリの肋骨はとつくの昔にバラバラになっているだろう。

意識を手放して楽になることも許されない、ハバキリの精神は、集中力によって擦り減らされ、激痛によって蝕まれる。

接触通信でも、パトウーリア内にいるだろうシルの声は聞こえなかった。

残された手段は、パトウーリアの内部に侵入してコアユニットごと引き抜くこと。

だが、それすらも今は難しい。

せめてあの有線ビーム砲さえどうにか出来れば、どうにでも接近出来るのだが、ここ



にいるのは自分一人しかいない、ならば自分で切り抜けるしかない。

シースザンバーを構え直し、しかしどうするべきかと鈍り始めている思考を回転させ――

事態は突然の変化を迎える。

『トランザム!!』

彼方より、紅い輝き――解放された圧縮粒子を放ちながら急激に接近してくる機体がひとつ。

クリアーオレンジ色の、戻り返ったGNビームサーベルを両手に握ったその機体は、恐らくマスラオだろう。

突如現れたマスラオー機体銘『マスラオヴレイブレイズ』に、パトウーリアは迎え撃つべく有線ビーム砲の注意をシュトルムジンライから外し、そちらへと向かわせる。

しかしマスラオヴレイブレイズは有線ビーム砲からの攻撃を避けるどころか、さらにその術中へと飛び込んでいくではないか。

「おい何してんだっ、死ぬつもりか!？」

誰かは分からないがハバキリは広域回線と呼び止めようとするが、マスラオヴレイブ

レイズはその制止を聞かず、両手のGNビームサーベルを凄まじい速度で振り回し、放たれるビームを全て斬り飛ばしながらもパトウーリアへと距離を詰め、とうとうその切っ先が有線ビーム砲を捕らえ始めた。

マスラオヴレイブレイズの攻撃により、パトウーリアの有線ビーム砲は次々に破壊されていく。

あのマスラオの改造機は敵ではないし、恐らく味方と判断してもいいのかもしれない。

だがあの機体のドライバーは、ジルのことを知っているだろうか？

パトウーリアのことを、ただの殺戮マシンにしか見ていないのではないか？

だとすれば、知らず知らずの内にジルを殺めてしまうかもしれない。

その証左として、有線ビーム砲のほとんどを破壊し、パトウーリア本体へ接近したマスラオヴレイブレイズは、何の躊躇いもなく攻撃しようとしている。

そこまで見たところで、ハバキリはほぼ無意識でアームレイカーを殴り倒し、シユツルムジンライを急加速させた。

「やめろ！そいつには手を出すなッ!!」

その速度のまま、GNビームサーベルを振り下ろそうとしていたマスラオヴレイブレイズへ体当たりし、そのままパトウーリアから遠ざけていく。

『グッ……お前、何のつもりだ!?!』

接触通信で青年の声が怒鳴ってくるが、ハバキリは音量を下げずにあのパトウーリアのことについて伝える。

「あそこにはオレ達の仲間がいるっ、あんたには悪いが手を出すな!」

『……』

すると、マスラオヴレイブレイズは構えを解き、トランザムを強制解除して元の赤と黒のトゥートンカラーへと戻っていく。

『なら、任せる』

どうやら意図が伝わったようで、マスラオヴレイブレイズはこの場から離れた。

マスラオヴレイブレイズの背へ向けて、パトウーリアは荷電粒子砲のチャージを開始するが、その前にハバキリのシュツルムジンライが立ち塞がった。

「ちよつと荒っぽくするぞ、覚悟しとけよ!」

荷電粒子砲の砲口に至近距離にまで接近すると、フィールドバリアの内側でビームカービンを撃ちまくる。

集束中だった荷電粒子砲のひとつが破壊され、沈黙する。

荷電粒子砲の破壊によって動きを鈍らせたパトウーリアに、シュツルムジンライはコアユニットがあるだろう部位へ取り付いた。

その装甲に拳を突っ込ませ、突き破った。

突き破った部分をこじ開け、その内部へモノアイを通す。

無数のチューブやパイプに繋がれたカプセルの中に、虚ろな目をしたピンク色の髪をした少女がいる。

「助けに来てやったぞ、ジル!!」

その姿を確認すると、シュツルムジンライは右手を伸ばし、ジルが収められたカプセルを引き抜こうとするが、

「ーイヤツ、来ないでツ!!ー」

”声”が聞こえた。

来ないで、と言う拒絶の声を。

直後、残り僅かながら生きていた有線ビーム砲が蠢き、取り付いていたシュツルムジンライの右腕へ巻き付いた。

「ジル!?!」

コアブロックから引き剥がされそうになるが、ハバキリは右のアームレイカーを押しさえつけ、必死に抵抗する。

「来ないで」って何だよ……お前は奴らの道具にされてんだぞ、それでいーのかよ!?!」  
ハバキリの呼び掛けに、”声”は応えてくれた。

「……だって、わたしはこんなに酷いことをして、それで助けてもらうなんて、そんなの……ずるいに決まってる——」

「パトウーリアに乗ってそんなことをしたのは、お前の意志じゃねーだろ!?!」

”声”の、後悔にも似た懺悔の言葉は続く。

「——ごめんね、ハバキリ。わたし、みんなに「ありがとう」を返せなくなっちゃった。それより、もっと大事なことをしなくちゃいけないの——」

次に放った言葉。

「——あのね……わたしを、殺してください——」

「ツ!?!」

お願いと言うにはあまりにも残酷過ぎて、あまりにも声が穏やか過ぎた。

「——わたしね、みんなに「ごめんなさい」をしなくちゃいけない。でも、こんなに酷いことしちゃったら、「ごめんなさい」って言うだけじゃ足りないよ。だから……——」

「……」

命を絶つことで謝罪をしたいのだと、ジルは言う。

そこまでを聞いてハバキリは、

「バカじゃねーのか、お前」

呆れと共に溜息をついた。

なんだそんなことだったのかと、急に頭が冷えてくる。

「お前一人が死んで、それでおしまい？それじゃ誰も納得しねーよ」

シュツルムジンライは徐にビームカービンを左手に取り、右手に纏わりつく有線ビーム砲を撃ち抜いて破壊した。

「ーじゃあ、わたしはどうしたらいいの？何をしたら赦してもらえるの？ー」

「この、ドあんぼん。お前の頭はピーマンか」

自由を取り戻した右腕を、もう一度パトウーリアのコアブロックへ滑り込ませる。

「そもそもな、お前は何も悪くねーだろ。お前のことを利用したいチンパンが、全部お前のせいにしよーとしてただけなんだよ」

キスをするために顎を持ち上げるように、シュツルムジンライのマニピュレーターが、カプセルを掴む。

「お前は誰にも「ごめんなさい」をする必要なんざねーんだよ」

「ー」「ごめんなさい」を、しなくていい……？ー」

「おー。だから、お前は黙ってオレに助けられて、そのあとでみんなに「ありがとう」を返せばいいーんだよ」

——…ツ！——

ガラス越しに見えるジルの脛に、一滴が溢れた。

開かれた瞳に、光が宿り戻る。

——いいの？わたし、「ごめんなさい」をしなくていいの…？…？——

「何度も言わせんなよ。……さてと、ちよつと揺れるぞ」

シュツルムジンライは少しだけ右手の握力を加えると、そのままジルが収められたカプセルを、チューブやパイプごと引き千切った。

「怖かったよな。辛かったよな。寂しかったよな。でも、もう大丈夫だ」

制御を失ったパトウーリアがゆっくりとその高度を落とし始めていく。

シュツルムジンライはビームカービンを納め、カプセルを落とさないようにしっかりと両手で包み込——

——ツ！ハバキリツ！！——

んだ途端、“声”が叫んだ。

直後にハバキリのコンソールがアラートを告げ、その方向からビームが放たれてきた。

「はっ！」

完全にカプセルに意識を向けていたハバキリは、その方向からの攻撃への反応が遅れ

ていた。

回避は間に合うはずもない。

ーだめエエエエー……ッ!!……

不意に、制御を失ったパトウーリアが再起動し、そのビームの前に立ち塞がった。

しかしービームはパトウーリアの装甲を容易く貫き、その動力部までもを貫通してみせた。

動力の破壊、それは即ちー爆発だ。

爆風は至近距離にいたシユツルムジンライを巻き込み、吹き飛ばす。

その拍子に、カプセルがマニピュレーターから離れ、飛んで行ってしまった。

「あつ!? ジルーー……!!」

ハバキリはすぐにシユツルムジンライの姿勢を正し、地表へ落下していったカプセルを追う。

「……………んっ、今意識飛んでたか!？」

気絶していたコーダイは、今どこかで起きた大爆発を聞いて意識を取り戻し、慌てて現状把握を急ぐ。



つい先程、確かにトーシローのジャツジムメントのビームサーベルによる一撃を受けてー、一時的な気絶状態に陥っていたようだ。

今自分は、誰かが敷いたシートの上で横になっていた。

「あ、気が付いた？」

声が聞こえたのでそちらの方へ向くと、薄紅色の和装に身を包んだ少女と、その彼女のガンプラだろう、桜色のSDガンダムがいた。

「どうやら、彼女が介抱してくれたようだ。」

「君を助けるの、大変だったよ？サーベルでまともに斬られたのかな、装甲が酷いことになっただけだから」

彼女の視線が、横たわっていた赤い機体ーキャノパルドに向けられる。

キャノパルドの前面装甲は、ビームサーベルの直撃を受けたのだろう、原型を留めていない。

それでも、コクピットにいたコーダイを守ってみせたほどの堅牢さはあったのだ。

「あ、ああ……：助かりました、ありがとうございます」

ともかく彼女が助けてくれたことに変わりはない、トーシローは頭を下げることで感謝を示す。

「(やられちゃったのか、俺。情けねえな……)」

トーシローを足止めすることが自分の役目だったと言うのに、それも果たせなかった。

しかし、今はそれに落胆している場合ではない。

「つてか、今の爆発は？」

どこかで何かが爆発したのは間違いない、その爆音で意識が戻ったのだから。

「ここからだといぶ遠いけど……それより君のガンキャノン、メンテナンスハンガーに入れないと。そのままじゃ戦えないよ」

「ここで俺だけ逃げるわけにはいかねえんですつて。俺のキャノパルドはまだ動けるんでしよう、ならライフルが撃てりや……」

『悪いが、それは無理だな』

オープン回線で声が届いたと思えば、今度はマスラオの改造機——マスラオヴレイブレイズが着陸してきた。

『ハルナ、どうやら良いならぬ事態だ。正規軍は、完全にNT部隊に気圧されているらしい』

マスラオヴレイブレイズから「ハルナ」と呼ばれた少女は、コンソールを開いて通信に応じる。

「それはまずいけど……この人のこともほつとけないよ。ツルギくん、悪いけどこの人

のガンキャノン、ハンガーに連れて行っていいかな」

『分かった。終わり次第、すぐに絶対防衛ラインに来てくれ』

それだけ伝えると、マスラオヴレイブレイズはすぐに踵を返して飛び去って行った。

通信を終えると、ハルナはすぐに自分の桜色のSDガンダムー『麗桜姫頑駄無』に乗り込んだ。

「さっ、他のみんなを助けたいなら、今は我慢して機体を元通りにしないとね」

「……分かりました」

コーダイは横たわったキャノパルドのkokopittoに乗り込む。

それを確認してから、麗桜姫頑駄無はキャノパルドを抱えて、近くのメンテナンスハンガーへ急行する。

ハバキリのシュツルムジンライは、忙しくモノアイを左右させていた。

「どっこだ……どっこ行っちゃったんだよ、ジルッ……！」

パトウーリアの爆風に吹き飛ばされてしまった時、確かにジルのカプセルの行方も見えていたが、途中で見失ってしまったのだ。

この辺りに墜ちたはずだが、とハバキリは焦燥に駆られながらも目視とレーダーを見

比べる。

ふと、シュツルムジンライの左足が何かにぶつかる。

拡大確認してみるとすぐ足元に、壊れたカプセルと、そこから放り出され、傷付いたジルの姿が見えた。

「ジルッ」

ハバキリはすぐにシュツルムジンライを片膝立ちにさせると、コクピットから降りてジルの元へ駆け寄る。

着込んでいるノーマルスーツはボロボロで、呼吸が浅い。

それでもここにいると言うことは、まだ”消えてはいない”。

「しつかりしろ、ジルッ」

ハバキリは少し強引にジルを抱き寄せる。

「……………う、は、ハバキ、……………?」

「そーだよ、ハバキリだっ」

「うん、……………うん」

存在を確かめるように頷くジル。

すると、ノーマルスーツの懐に手を伸ばし、何かを取り出した。

それは、ジルがフォース・リヴェルタのメンバー達のために作ったネックレスーオ

ブシディアンのそれは、ハバキリのための物だ。

「他のみん、なのは……無くしち、やった……けど、これ、ハバ、キリのは……持って、たか……ら。これ、あげ……る……」

覚束ない手で差し出されたそれを、ハバキリはしっかりと受け取った。

「おー、確かに受け取ったぞ……!」

「……え、へへ……せめて、ハバキ、リに……だけでも、返したか……たの……」

弱々しい笑みを浮かべるジル。

「……その電子の肉体に、”ブレ”が生じ始めた。」

「ツ、ジル!お前っ……!?!」

抱き寄せている腕の感覚が薄まる。

「……あ、のね、ハバ……キリ、」

「ジル!!」

抱き寄せるだけでなく、そのまま抱きしめてやる。

しかしその感触は弱く、透けてしまいそうだった。

「「ありがとう」を伝えなきゃいけないーのはオレだけじゃねーだろ!?!セアさんにコーダイ、サツキー、エミル、ステラ!何のために素材集めに行ったんだよ!?!」

「わた、し……わたし、ね……」

”ブレ”ていく。

彼女の命が消えていく。

「ダメだ……死ぬなつ、ジル!!」

必死に呼び掛けても、止まらない。

「生ま、れ……変わ、ら、みん、とい……しよ、n」

ジルを構成する”データ”が飛散した。

小さな光となって、消えた。

「ジ、ル……?」

ハバキリは呆然と、その消えた光を見つめていた。

彼の手にある、オブシディアンのネックレスが震えた。

ただ、膝を折るしか、出来なかった。

「冗談だろ……こんな、こんなことが……ッ」

ふと、遠くからMSの風切り音が近づいて来たが、ハバキリはそれに反応しない。

彼の近くに近づいて来たのは、セアのフルドレスフリーダムガンダム。

片膝立ちになっているシュツルムジンライを見て、フルドレスフリーダムガンダムも

近くで片膝立ちになって着陸、コクピットからセアが降りてくる。

「ハバキリくんっ」

駆け寄ってきたセアを見て、ハバキリは歯を噛み締めた。

「ハバキリくん、ジルちゃんは、……っ?」

彼の手にあるのは、ジルが作っていたオブシディアンのネックレス。

それがここにあり、ジルの姿が見えないと言うことは……

「すいませんセアさん、作戦失敗です。ジルはもう、……」

「!!」

作戦失敗。

それがこの、オペレーション・インテンションにおいて何を意味するのか、理解してしまつた。

「他の奴らはまだ戦つてますよね。なら、「作戦は失敗した、各員は随時撤退せよ」つて伝えに行きましょう」

「……ハバキリ、くん」

「どーしたんです、セアさん。早く行かねーと、みんな、みんな、なが……っ……」

ハバキリは淡々と言葉を発しているつもりだった。

だが、セアの目には『彼が泣いているようにしか見えなかった』

ボロボロ、ボロボロとハバキリの脛から熱いものが垂れ流しになる。

「あーれ、つかしーな……なんで、つなんでこんな……っ」

涙。泪。ナミダ。

ハバキリは慌てて袖で目元を拭った。

拭つても拭つても、拭った後からそれは溢れ出てくる。

「チツ……んだよっ、泣いてねーよ……オレは別に泣いてるわけじゃ、ツ……!」

頭を振る彼を、セアはそつと手を伸ばし、自身の胸に抱き寄せた。

「泣いていいんだよ」

「ツ……」

優しく囁くようなセアの声に、ハバキリは硬直する。

「辛くて、悲しくて、泣きたいのは私も同じ……だけど、君が泣いちゃいけない理由なんてないよ」

セアは、コーダイが言っていたことを思い出していた。

彼は、家族であるステラにも自分の感情を隠すことがあると。

だから、誰にも見えないところで一人で怒っていたり泣いていたりしたら、気付いて

やってくれと。

「男の子は泣いちゃいけないなんて、誰が決めたの。泣きたい時に泣かないと、辛いばつ



かりだよ……?」

「セ、アさん……でも、オレ……ッ」

不意に、セアの手がハバキリの銀髪を撫でた。

「ほんほん」

ほんほん、と。

いつかに、ジルがエミルにやっていたように。

その優しい仕草が、ジルを想起させる。

ハバキリはもう、躊躇することをやめた。

恥も外聞もなく、セアの抱擁の中でただ幼子のように、声を上げて泣いた。

言葉にするのなら、そこは『データの海』と言える場所だった。

誰かの記憶や感情が、泡沫のように浮かんで消える、光の流れの中で、一人の少女が何かを感じ取ったように瞳を開いた。

エメラルドグリーン双眸。

月の欠片と見紛う美しく長い白金色の髪は二つ結びに。

その身を包むは純白色のドレス。

「誰かが泣いてる、また……」

”自分と同じ存在の”少女が、願いを唱えた気がした。

弱くて、儚くて、脆くて、不完全で、砕けそうで、潰れそうで……それでいて、純粋な願いを。

沈み込みそうだった”ソレ”を、そつと水面へ押し上げた。

「……あなたが誰かのために頑張れるのなら、わたしも誰かのために頑張る。そうでしょう? ヒロト」

時間にして、一分だけ。

「……もー、大丈夫です。みつともねーとこ見せました」

流したいモノを流したいだけ流してから、ハバキリは立ち上がった。

「撤退準備ですね。こつからじや極東ベース周りにまで通信が届きませんし、まずはそこまで戻らねーと」

「うん。なら私は、エミルくんの一番隊から探すことにするね。ハバキリくんは……」

「オレはまず遊撃隊をまとめ直します。そこから、サツキーの二番隊と、……コーダイは無事だといーんだが」

コーディネイにはトーチローの足止めを頼んでいる。

そう簡単に撃破されるようなヘマはしないはず。ハバキリは知らないが、コーディネイは不覚を取って一時戦線離脱しているのーだ、勝てる保証もない。

「私は先に行くね。ハバキリくんも」

「了解です。合流地点で会いましょう」

フルドレスフリーダムガンダムとシュツルムジンライはそれぞれ別方向へ飛び立った。

先程までパトゥーリアと戦闘を行っていた地点にまで戻ってきたシュツルムジンライ。

目下には、爆散して原型を留めなくなった、パトゥーリアの骸が転がる。

「……」

もはや、振り向くまい。

そう振り切ろうとしたハバキリだったが、

正面よりアラートが鳴り響いた。

「前かッ」

咄嗟にアームレイカーを捻って、前方より放たれた高出力のビームがシュツルムジン

ライのすぐ側を通り過ぎた。

このビームに、見覚えがある。

と言うより、ついさつきも間近で見た。

「この、ビームは」

視界を正面へ向け直す。

目視で見えるほどに目立つ『赤い機体』

一見するとそれは、RX-78を赤く塗装した『キャスバル専用ガンダム』に見える。

だが、機体各部は丸みを帯び、V字や十字のマークは無く、どちらかと言えば、GNガードフレームに近い。

「……キャスバル専用の『GBN-ベースガンダム』だど？」

そう。

その機体は、有事の際にゲームマスタークラスが乗り込むこともある、GBN-ベースガンダムのそれだった。

ユーザー達が目にしてきたそれらは、トリコロールだったり、プロトタイプカラーだったり、モノトーンだったりするものだったが、キャスバル専用カラーは過去に例がない。

ふと、通信が届く。

『君達の活躍は実に素晴らしいものだった。だが君の”お仲間”も、間もなく撃墜されるだろう』

通信の相手は、目の前のGBN―ベースガンダムから。

『無駄な抵抗はやめたまえ。例え『青き狂戦士』と呼ばれた君でも、この私は倒せまい』

こいつか？

こいつが、ジルを殺したのか？

否、ハバキリを討とうとして、そこにジルが割り込んだだけ。

だが、

だとしても。

「……反乱軍の、大将首だな？」

ハバキリは静かに、通信に応答した。

『「そうだ」と言えば、どうするのだ？』

質問に質問で返すとは、随分と余裕があるらしい。

「そーかそーか、てめーが総大将か……」

ギチツ……とハバキリの奥歯が軋んだ。

「ブチ殺す!!!」

【次回予告】

ハバキリ「分かってんだよ、こんなことをしたって、ジルは戻って来るわけねーって」

エミル「作戦失敗か……それでも、ボク達は戦い抜いてやる!」

サツキー「そうそう!なんか援軍もたくさん来てくれたみたいだしねっ!」

ステラ「私達は、私達のために戦うまでです!」

コーダイ「遅れちまったが……」汚名挽回”と行くぜ!」

トーシロー「止まらないのさ……なら、貫き通すまでだ!」

セア「次回、ガンダムビルドダイバーズ・スピリッツインテンション

『Diver's High』

??「わたしは……誰?でも、何だか……懐かしい気がする」

## 25話 Diver's high

コーダイのキャノパルドを突破したトーシローは、シュツルムジンライーハバキリを捜していた。

「ハバキリの目的がELダイバーの奪還なら、ニュータイプ部隊と交戦に入っているはずだ」

先程に、ニュータイプ部隊の中核であるパトゥーリアが撃墜されたのは確認している。

ならばその近くにいます。

パトゥーリアの残骸のある方向へジャツジムメントを走らせるトーシロー。

ふと、センサー範囲ギリギリの所から、ガンプラの反応が二つ。

ひとつは激しく飛び回り、もうひとつは最低限の動きしかしていない。

その方向を最大望遠で視認してみると、キャスバル専用ガンダムー基、赤い『GNーベースガンダム』と、青いジンの改造機ーシュツルムジンライが戦っている。

確か、あの赤いGNーベースガンダムは、カツラギ氏の搭乗機であったはずだと記憶している。

パトウーリアが撃墜されたのを見て、総大将自ら出陣したと言うことらしい。

「……………」

その光景を見てーややはりトーシローは、己の本懐を為さんがために動く。

「ビームカービンを撃つても、それが装甲に届くよりも前に」逸らされて”しまうのは、Iフィールドを展開しているからだろう。

その辺に転がっていたNPDRリーオーの残骸が落としていたダブルガトリングガン  
を撃ちまくり、着弾はしているのだが全く効いている様子が見えないのは、PS（フェ  
イズシフト）装甲か、もしくはナノラミネートアーマーか。

同じく残骸と化していたGBNガードフレームのビームサーベルを投げ付けても、大  
したダメージも無くシールドに弾き返されるのは、表面に強力な耐ビームコーティング  
が施されているからか。

シースザンバーによる近接攻撃を叩き込もうにも、相手の機動性も恐ろしく速い、  
シュツルムジンライの馬鹿げた機動性と同等かそれ以上か。

「ハーツ、ハーツ、ハーツ……………」

ハバキリは己の存在を確かめるようにアームレイカーを握り締める。



GBN―ベースガンダムが反撃に放つビームライフルを躲す。

しかし、掠めてもないにも関わらず装甲の表面が焼け爛れている。

ビームマグナム級の破壊力に、標準並の連射力を両立させているとでも言うのか。

「……………ぐっ?」

同時に、ハバキリは自分のダイバーとしての身体に異常が起き始めていることを自覚する。

痛みを感じられなくなった。

それは決して良いことではなく、むしろ事態の悪化。

『自分の感覚が薄れ始めている』のだ。

シュトルムジンライの気狂いとも言える機動性は、ダイバーのライフを代償に与えられるものだ。

感覚が薄れるということは、『ダイバーのライフはもはや底を着きかけている』ことを意味する。

事実、アームレイカーを握る手の握力が弱まっている気がする。

だが、まだ戦える。

それを自認すると同時に、別の機体反応が背後から出現する。

「チツ……………ここぞ増援か……………」

とんだクソゲーだな、と自分で軽口を吐いて気力を振り絞ろうとするハバキリ。現れたのはトーシローのジャツジムメント。

「……てめーか、トーシロー」

よりにもよって、強敵だ。

ただでさえGBN―ベースガンダムを前にして打つ手が無いも同然だと言うのに。

しかし―ジャツジムメントのビームライフルはシュトルムジンライではなく、GBN―ベースガンダムを狙い撃った。

それはIフィールドによって弾き逸らされるが、GBN―ベースガンダムの挙動が一瞬だけ乱れた。

『シルバ、貴様……裏切ったのか?』

旧友に絆されでもしたか、と睨むカツラギ氏を前に、トーシローは堂々と答えた。

「何か勘違いしているようだな、カツラギ氏。『僕は最初からあなたの味方などしてない』さ。僕の目的はずっと『ハバキリと本気で戦う』ことだけだ。そのためにあなたを利用していたが……正直、今の”お前”は邪魔以外の何物でもない」

「トーシロー、お前」

ハバキリが何か言おうとするが、即座にGBN―ベースガンダムからのビームライフルが応酬された。

『そうか……ならば、青き狂戦士もろとも消えるがいい、『白き聖騎士』』

シュツルムジンライとジャツジウムメントは同時に飛び下がってビームを避ける。  
「今まで黙っていて悪かったな、ハバキリ」

ビームを往なしながらも、トーシローとハバキリは昔のように会話を交わす。

「トーシロー。今すぐコクピットから降りて一発ぶん殴ってやりてーところだが、それは後にしてやる。……今は、あのヤローをブチ殺すことに協力しやがれ」

「お手柔らかに頼むよ。……君と共に戦うのも久々だな」

青き狂戦士と、白き聖騎士。

フォース・アルディナの最強の双壁が再び手を取り合った。

『シナノ・トウシロウ』、ジャツジウムメント！』

ジャツジウムメントが、脚部からビームサーベル抜き放って、切っ先を向ける。

『アメノ・ハバキリ』、シュツルムジンライ！』

シュツルムジンライが、シースザンバーを一度素振りして、構え直す。

「行くぞ!!」

バギンツ、と言う甲高い音を立てて、GNソード「巨門」が半ばから砕け折れた。ビームサーベルもビームダガーもない、長短のGNブレイドは両方とも折れた。

エミルの七星剣士エクシアは、戦えるような状態ではない。  
だが、

「こ、ん、のオオオオオッ!!」

折れたGNソード「巨門」を振るい、NPDリーオーのバイタルバートへ無理矢理ねじ込ませた。

眼前の敵はどうか退けられた。

最後まで共に戦っていたソードカラミティガンダムも、ついにエネルギーが尽きたのか、シユバルトゲベルのビーム刃が切れた。

TP（トランスフェイズ）装甲であるため、外見上はPSダウンを起こしていないように見えるが、実際はエネルギーエンプティ状態だ。

離脱する他ない、と言いかけたソードカラミティガンダムだが、またもやNPDリーオーの小隊が現れた。

「もはやこれまでか……せめて、自爆装置で奴等だけでも」

「それは本当に最後の手段だ。素手になったって、ボクはやってやるよ」

倒したNPDリーオーからマシンガンを奪い取り、七星剣士エクシアは対峙する。

が、

突如、上空からビームが降り注ぎ、プラネイトデイフェンサーを展開する前だったNPDリーオーは次々に撃墜されていく。

「っ、何だ？」

上空に目を向ければ、『黒金のレガンダム』がフィンファンネルを呼び戻し、左肩へ取り付いて行くのが見えた。

随伴しているのは、デユエルガンダムに似たアレックスーブルシュヴァリエや、騎士ガンダム、ジnkスⅢ、グレイズリッター。

その中で、レガンダムーエーデルレガンダムを駆るダイバー『ノエル』は、名乗りを上げるようにビームレイピアを高々と掲げた。

「我等はフォース・ロイヤルナイツ！GBNの治安を乱す賊軍を、裁きを以て駆逐せよ！！」

「二ハッ！鉄拳制裁！一点突破！二二」

名乗りと共に、高貴なる騎士達は次々にNPDリーオーと言う名の賊を打倒さんと掛かる。

その中で、ブルシュヴァリエのダイバーたる『リヒター』は、今なお前線で戦っている、ガンダムマナジュリカと接触していた。

「ユイ！まだ戦えるな!？」

「リヒターね？私なら大丈夫、手伝って!」

「任せてくれ」

ガンダムマナジュリカが右肩のダブルガトリングガンで牽制し、動きを止めたNPDLリーオーの中へブルシュヴァリエが切り込み、ビームサーベルで斬り倒していく。

その反対側では、

「ホラホラホラホラホラア！バラされたいヤツは来なさいな！バラされたくないヤツも来なさいな！」

ブラッド・アテネがバスターソードと両足のビームサーベルを自在に振り回して、敵部隊を文字通り膺斬りにしていく。

そして、ロイヤルナイツとは逆の位置から展開を始めたフォースがもうひとつ。

ガンダムDX、グフカスタム、ストライクE、ジムスナイパーII、デルタプラスの五機。

「少々出遅れてしまったが、問題はない。全機、フォース・リヴェルタのガンプラを援護しろ!」

「了解!」

ガンダムDXローランはバスターライフルを撃ちながら、僚機達と共に戦線へと

突入していく。

彼らはフォース・サンダーバード。

元マスタイバーの烙印を押された者達であったが、今はもう誰もそれを気にすることは無くなっていった。

ビームシザースのエネルギーが減衰し始め、プラネイトデیفエンサーもろともNP Dリーオーを斬り裂くと言う攻撃が出来なくなったガンダムデスレイザーは、ビームシザースの柄尻でNP Dリーオーのアイカメラを突き破り、怯んだところを足蹴にして押し倒し、その柄尻を突き立ててコクピットに当たる部位を潰す。

それでどうにかNP Dリーオーを撃墜しても、またしても次のNP Dリーオー部隊がダブルガトリングガンを撃ちまくりながら迫り来る。

「……一休みくらいさせなさいよっ」

アクティブクロークを閉じてダブルガトリングガンの銃弾から機体を守るガンダムデスレイザー。

ダブルガトリングガンだけでなく、ミサイルランチャーまで一斉射してくるNP Dリーオー。

さすがにこれをアクティブクロークで全て受けるのは危険かもしれない。

そう判断したサツキーは、頭部のバルカン砲でミサイルを迎撃しつつ後退していく。

しかし全弾撃ち落とすことは出来ず、残った十数のミサイルがガンダムデスレイザーに襲いかかる――

その寸前、ガンダムデスレイザーの後ろからもミサイルの群れが飛び出し、それらはガンダムデスレイザーの目の前で爆発、その爆風がNPDR100からのミサイルを誘爆させていく。

「えっ、何っ?」

「下がれ!ここは任せろ!」

すると、ガンダムデスレイザーを守るようにブルーデイスティニー、ブレイズザクフアントム、ウイングガンダム、ガンダムデュナメスが躍り出る。

「無事だね、サツキーさん」

最後に現れたのは、モノトーンのゲイレール。

ナオエの機体と、フラワーズ二軍のメンバー達だ。

「ナオエさんっ、助けに来てくれたんですね!」

「ちよいとばかり遅れてしまったけど、まあそこは許してほしい。……後30分だけでいい。それまで堪えれば、この戦いも”終わる”」



「終わる？」

希望的観測ではなく、確定事項かのようなナオエの物言いに、サツキーは疑問符を浮かべる。

直後、二軍メンバー達とは逆サイドにも爆発や砂煙が巻き起こった。

立ち昇った砂煙を切り裂きながら姿を見せるは、灰色を帯びた白い装甲に、赤い装飾が彩る、ガンダムフレームの機体。

右手に握ったメイスを振り下ろし、NPDリーオーを地面に陥没させてみせたその機体は、『ガンダム端白星』

「んー、ルプスよりもこっちの方がいいねえ……」

そのガンダム端白星の近くに立ち、四丁のライフルを撃ちまくるのはガンダムグシオリバイクフルシテイ。

「親父、そのガンダム使うの初めてなんだろ？あんまり無理するなよ」

「無理はしないさ、無茶はするがな」

突如、白灰色と焦げ茶色のガンダムフレーム二機の間を猛スピードでオレンジ色のケンプファー『ファストウス』が駆け抜けて行った。

「一年ぶりの祭りだ……派手に行こうじゃねえの！」

祭装束を纏った男ーレンジは、両手のスピニングプラスチックのガトリングガンを乱

射し、銃弾のスコールがNPDリーオーに降りかかるものの、すぐさまプラネイトディフエンサーを展開して銃弾を防ぐ。

だが、そこで足を止めてしまったのが判断ミスであった。

不意に、NPDリーオーの足元に潜り込んでいたらしいファンネルから多数のビームが放たれ、ファストゥスに注意を向けていたNPDリーオーの群れは慌てたように鑪を踏む。

瞬間、ワイヤーに繋がれた三本の鉤爪の生えた腕がNPDリーオーを囲み、そのままクロローの切っ先が突き刺し、メガ粒子砲が機体を焼き切る。

「これだけ性能を高めて数を揃えようとも、やはりお人形。取るに足りせんわね」

シスターの僧服を纏う女性ーミスズは、前線へ突撃しに行くレンジを追い、その後をV2アサルトバスターガンダムと百鍊も続く。

「フラワーズも来てくれたか」

その様子を一瞥しながら、サヤのゼータプラスラファールはWR形態へ変形し、NPDリーオー部隊の弾幕へ飛び込みながらも、反撃にビームライフルとビームカノンを撃ち返していく。

ゼータプラスラファールからのビーム射撃に重火器を焼き切られたNPDリーオー部隊は慌てたように後退しようとするが、

「これなら、何とか巻き返せそうです、ねっ！」

そこへミーシャのガンダムアスクレプオスシャードが飛び込み、シザーブレードを抜刀、NPDリーオーの一機を「挟み込む」と、臂力に任せてそのまま真つ二つに断ち斬つてみせた。

極東ベースの外れで、コーダイのキャノパルドはメンテナンスハンガーに納められていた。

だが、装甲の修復、及び推進剤と弾薬の補給が完了するや否や、コーダイはすぐさまコクピットに飛び乗った。

「待つてろよみんな、すぐ行くからなっ」

機体の再起動完了、ビームライフルを手に取ると、キャノパルドはフットローラーを駆動させて戦場へ戻ろうと急ぐ。

しかし、その行く手を阻まんとするのか、NPDリーオーの中隊がフォーメーションを組んで現れた。

「ちっ、邪魔が入ったな……！」

舌打ちしながらも、指先はウェポンセレクターを回しており、ビームライフルと肩部キヤノン砲を選択し――

同時に新たな反応が別方向から接近してくる。

さすがにキツイか、とコーダイはその方向を一瞥する。

その新たな反応は、反乱軍のNPDリーオーとは異なる、『黒いNPDリーオー』が九機ほどと、黒銀に塗装されたツールギスの改造機。

「フン……私のプログラミングをコピーしたようだが、果たしてそれはオリジナルを相手に勝てるものかな？」

黒銀のツールギス――ツールギスコンダクターを駆る獣人、フルメタルシエパードはプログラミングを打ち込み、自身のMD達に命令を与える。

「所詮は猿真似だ、格の違いを見せてやろう！」

黒のMD達はフォーメーションを組みながら――それでいて生身のダイバーによる操縦と遜色ない有機的な動きを見せながら、数で勝る反乱軍のNPDリーオーを圧倒していく。

「ありがてえ、助かった！」

その光景を目にするコーダイは、フルメタルシエパードに札の通信を入れつつ、先を急いだ。

トーシローが率いていたNPDリーオーを撃破した、ステラとヤイコは、その場所から移動しながら通信を交わしていた。

「このまま絶対防衛ラインへ？」

ヤイコの目的を聞いたステラは、次の目的地を問い掛けて、上記の答えが返って来た。「おう、運営の奴さん達は、連中のニュータイプ部隊とか言うのを相手にへっぴり腰になってるそうだ。だから、アタシらで食い止めるってな」

「話は分かりませんが……」

最後に別れてから、兄ーハバキリの動向が分からないのだ。

撃墜はまだされていないため、どこかで戦っているようだが、それでも不安なものは不安だ。

すると、自分達に向かってくる反応が複数。

また敵か、とノーベルガンダムを構えさせるステラだが、ヤイコの碎鎖裏守がそれを制する。

「待ちな嬢ちゃん、アレはお仲間だ」

上空から降下してくるのは、トリコロールのリボーンズガンダムを先頭に、ガラッゾ、

ガツデス、ガラムガンダムと言ったイノベイド系の機体達と、先程にコーダイのキャノパルドをメンテナンスハンガーへ送り届けた、ハルナの麗桜姫頑駄無。

その中で、ガデツサの改造機ーメガデツサが通信を繋いでくる。

薄紫色の髪を持った中性的な容姿のダイバー、ミツキだ。

「ヤイコ、ご無事のようにすね?」

「ようミツキ、アタシなら余裕だ。こつちは今から絶対防衛ラインに向かうところだが、そつちはどうだ」

「こちらは、第二防衛ラインからの後詰め部隊を先んじて迎撃するつもりです」

二人の通信内容を聞く中で、ステラはミツキと言う名前に聞き覚えがあることを思い出す。

確かーハバキリやコーダイの口から聞いた、そのような名前のダイバーがいるのかと。

しかし今はヤイコに従って絶対防衛ラインに向かうべきか。

数巡の後、ステラは意を決して通信に割り込んだ。

「すみません、ミツキさん、ですか?」

「はい、私がミツキです。あなたは?」

突然割り込まれたにも関わらず、ミツキは嫌な顔ひとつせず受け答える。

「ステラと言います。ミツキさんは、私の兄……ハバキリはご存知ですよ？」

「存じ上げていますが……ああ、ハバキリの妹というのは、あなたのことでしたか」

ミツキの方も、『ハバキリには妹がいる』程度には知っていましたらしい。

「それなら、兄さんが今どこで、何と戦っているのか知っていますか？」

「……パトウーリアの撃墜を確認してからの足取りが分かりません、恐らくその近くだとは思いますが」

パトウーリア……ジルが乗っていると思われる巨大な機体のことだ。それが撃墜されたと言うことは、既に作戦の成否が決定していると言うことだ。

ジルの救出に成功したから破壊したのか、あるいは……

その先は考えないようにして、ステラは頷いた。

「分かりました……ごめんなさいヤイコさん。私、兄さんを捜しに行きます」

通信の先をヤイコに切り替え、ステラは小さく頭を下げた。

「おう、行ってこい行ってこい。妹が心配じゃねえ兄弟がいるわきやねえんだ、その逆があってもいいだろ」

自分にも三つ下の妹がいるヤイコにとって、ステラの気持ちは理解出来るものだった。

故に、止めはしない。

「ありがとうございます。……行きますー」

ステラはノーベルガンダムを加速させて、その場から飛び立つ。

「あの子だけじゃちよつと不安かもだし、わたしが付いていくね」

そのあとすぐに、ハルナの麗桜姫頑駄無も続いた。

ハバキリとは逆サイドから、セアのフルドレスフリーダムガンダムは、味方機の反応を探していた。

時折襲い掛かってくるNPDリーオーをラケルタ・ビームサーベルで斬り倒しながら、極東ベースの本部近くにまで戻って来る。

戦場を俯瞰してみると、GBNガードフレーム達は一箇所に戦力を集中して反乱軍を迎撃しているようだが、量産型キュベレイ部隊のファンネルやアクティブカノンによる攻撃に手も足も出せていない。

しかし——正規軍の動きがどこかおかしいことにも気付く。

「(形勢不利だと分かっているはずなのに、どうして動かないの?)」

そう、まるで量産型キュベレイやNPDリーオー達を、自分達と同じ場所に誘き寄せているように……



セアは事態を読み取り、すぐに答えは導き出される。

「さっきのあの大型ビーム砲……まさかつ、味方もろとも撃つつもりなの!」

確かに、反乱軍のニュータイプ部隊を止めるには、あの大型ビーム砲、メギドフレイムで一息に薙ぎ払う他に手段は無いかもしれない。

普通ならば、味方部隊が射線上から離れるのを確認してから放つはずだろうが、敵の目の前で不自然な挙動を見せれば、当然敵の方も警戒してその場から離れてしまうだろう。

で、あれば。

”そうするしかない”。

そしてその射線上に、オペレーション・インテンションに参加した誰かがいたら——  
「撃たせない……ッ!!」

セアはアームレイカーを押し出してフルドレスフリーダムガンダムを加速させて、極東ベース本部へ向かう。

『メギドフレイム、修復率90%に到達。発射は可能であるとのこと』

オペレーターからの報告を聞き、ゲームマスターはすぐに指示を飛ばした。

「メギドフレイムのチャージを開始しろ」

『……司令、ガードフレイム部隊への通達は、本当によろしいので?』

先程にも不審に思ったオペレーターが再確認するように問い掛けて来た。

「己を犠牲にして任務を達成出来れば、彼らとて本望だ……と言うのは詭弁だろう。我々には、守らねばならんものがあると言うことを忘れるな。……そして、そのためには犠牲を払うことを躊躇ってはならん」

『……了解。メギドフレイム、チャージ開始』

メギドフレイムを表すモニターに、エネルギーチャージの%率が高まっていく。

2%……8%……15%……

すると、不意にアラートが鳴り響いた。

「何事だ!」

『め、メギドフレイムの砲口内部に所属不明機が一機、侵入した模様!』

モニターの拡大図には、所属不明機を表す黄色のマークが侵入したと告げている。

「チャージは!」

『51%です!』

泡を喰ったように指示を飛ばすゲームマスター。

「撃て!フルパワーでなくとも構わん、砲口内にいるアンノウンを排除出来れば良い!」

『ハッ、メギドフレーム、発射シークエンスへ移行します』

セアの目の前に見える、巨大な筒状物体。

これこそが大型ビーム砲ローメギドフレームの本体だ。

フルドレスフリーダムガンダムはその砲口の内部へ侵入していく。

砲口内部には何百本と言うシリンダーが立てられ、それらは忙しなく朱光を点滅させている。

だが、この砲口内部全体が眩い光に包まれつつある。

「撃たれる!?!」

一瞬、ここから離脱することを脳裏に過ぎらせたセアだが、今に撃たれるかわからないこの状況では、もう後戻りも出来ないだろう。

破壊して止めるか、ここで蒸発するか。

セアはすぐさまウエポンセクターを開き、フルドレスフリーダムガンダムは両手の高エネルギービームライフルを重ねるように連結させ、バラエーナとナルカミも展開しー

「止まってええええええエエエエエエエー……っ!!」

広範囲ではなく、一点突破を前提としたフルドレスバーストアタックが撃ち放たれた。

眩い光の中へ、五つの火線が飛び込みー爆発。

「……………止まった？」

ー否、シリンドラーの朱光の点滅は止まっていない。

「まだっ…………!?!」

シリンドラーの点滅が早まると同時に、セアのコンソールが、正面からの高エネルギー体に対するアラートが鳴り響く。

撃たれる。

半ばそう確信しかけたセアだが、その彼女のフルドレスフリーダムガンダムの背後から、何者かのガンプラが現れる。

「いや、よくやったー！」

それは、大剣を両手に構えた漆黒のダブルオーガンダムーガンダムダブルオーカイザー。

黒翼をはためかせ、フルドレスフリーダムガンダムの前に立つ。

大剣ーバスタービームソードを一回、二回と振り回し、見事なサンライズパースを決めると、『メギドフレイムの砲口の中だと言うのに、いきなり暗雲が立ち込めて落雷が



「おのれ……どこのバカか知らんが、余計なことを……!」

これでは敵ニュータイプ部隊の撃破が困難になってしまう。

「ふむ……抑止力のためだと言う理由で黙認はしたが、やはり欠陥品だったか」

不意に、ゲームマスターの背後から声が届く。

その場にいた全員が声に振り向き、ガンダイバーのアバターのダイバーを見て驚愕する。

「なっ、あなたは……『カツラギ』氏では!? 何故ここに……」

反乱軍の総大将が何故、とゲームマスターは動揺するが、ガンダイバーは右手を押し出して「待て」と制する。

「突然ですまない。だが、まずは私からひとつ言わせてほしい。件の『反乱軍総大将であるカツラギは、』なりすましだ」

「『!??!?!?』」

どういふことだ、と司令部に驚愕と困惑が渦巻いた。

トールハンマーブレイカーなる必殺技により、メギドフレイムの破壊に成功したフルドレスフリーダムガンダムとガンダムダブルオーカイザーは、連鎖爆発の中を潜り抜けて砲口内部から脱出した。

「お前さんが攻撃したおかげで、あのクソデケえビーム砲は一瞬とは言え止まって、俺が間に合ったんだ。礼を言わせてくれや」

ガンダムダブルオーカイザーのダイバー、カイドウはセアに礼を言った。

「い、いえ、そんな……（私、あそこで攻撃した意味あったのかな……?）」

果たして、セアの放ったフルドレスバーストアタックは貢献したことになるのだろうか。

今ひとつそれが分からないままに外へ飛び出た二機に、GBNガードフレームの大軍がこぞつて待ち構えていた。

「チツ、手前の邪魔したんだから当然っちや当然か」

カイドウは舌打ちしつつ、ガンダムダブルオーカイザーにバスタービームソードを構え直させ、セアもフルドレスフリーダムガンダムに臨戦態勢を整えさせるが、

「待つてください、カイドウ先生」

彼を制止させる声が通信に届くと、赤と黒のマスラオーツルギのマスラオヴレイブレイズが降り立った。

「おうどうしたツルギ、俺の心配はしねえでいいぞ」

「先生は今さつき必殺技を使って消耗してるでしょう。……たまには、教え子の出番も取っててくださいよ」

フルドレスフリーダムガンダムとガンダムダブルオーカイザーの前に立つと、マスラオヴレイブレイズは一对のGNビームサーベル『ヘブンス』と『クラウド』を抜き放つて構えた。

「そうか。なら、任せるぜ」

それだけ頷くと、カイドウのガンダムダブルオーカイザーは踵を返してこの場から飛び去った。

「あんたもここはいいぞ。俺に任せていい」

ツルギはセアにも離脱するように諭すが、彼女は首を横に振った。

「私も戦います。援護くらいなら出来るつもりです」

「なら、好きにするんだな。……トランザム!!」

マスラオヴレイブレイズは圧縮粒子を全面に解放し、眩い真紅色に輝きながらもGBNガードフレーム部隊へ突撃、遅れながらもセアのフルドレスフリーダムガンダムも続いた。



オーストラリア・サーバー、アデレートからも、正規軍は極東ベースへの援軍に向かっていた。

場所の遠さ故に連絡も遅れていたのだが、どうにか”明らかに遅すぎる援軍”ということにはならず済んだようだ。

サーバーゲートを通過し、極東ベースエリアに着陸、まずは本部へ向かうぞと言う時、突如、GBNガードフレームの大軍の横腹を突き破るかのような攻撃が発生した。

何事かとそちらへ目を向けるGBNガードフレーム達。

そこにいたのは、A・B・Cマントを纏った一機のSDのクロスボーンガンダムX<sup>1</sup>。

「惑星エルドラはGBNからログインしているにも関わらず怪我を負う……つまり！エルドラでアレをすればGBN上であるにもすればみくちゃんの子どもを作ることができると言うことではないか!? やばいぞ！ さすが私！ 天才か!? いやっ！ 天才だ！ エルドラ万歳！ エルドラ万歳！ グッへへへッ！ さあみくちゃんを見つけて出して一刻も早くエルドラに行かねば！ みくちゃんの可愛らしさを保っていられる時間は残りわずかしかない！ みくちゃんが完全なる神である内に私の胎に神の遺伝子を残さなければ！ ええい邪魔だブタどもが！ 誰か貴様ら虫ケラどもに私と言うまくしゃ姉の行く手を阻



を奪うと言うことがどれだけの大罪であるか分からぬわけがあるまい許されるわけがないだろう罪を償え今すぐに!!!”

たつたその一振りで、その周辺にいたGBNガードフレーム部隊は”消滅”した。

「クンカクンカスーハースーハー……あつちからみくちやんの匂いがする!? そうかそうか! そこにいたんだねみくちやん! 今いくよ!!」

敵部隊の消滅など意に介することなく、クロスボーンガンダムX1は不意に明後日の方に向き直ると、その場から”消えた”。

『何故だ……?』

GBNベースガンダムと言う機体は、外観こそRX-78-2に酷似しているが、実際は『機動戦士ガンダム』シリーズには存在しない、GBNオリジナルのデータだ。

その装甲は『ゲインアーマー』と言う特殊なものが用いられており、それは『相手からの攻撃に応じて瞬時にその性質を変化させる』と言うもの。

例えば、相手からビーム弾が飛んてくれば、即座に装甲表面には耐ビームコーティングが塗布され、さらにIフィールドバリアも展開される。

実弾が飛んでくれば、データは上書きされてVPS装甲に切り替わり、さらには

ニュートロンジャマーキャンセラーの起動によつて電力―エネルギーへの問題も解決される。

『何故だ……』

極めつけは、ビームマグナム級の威力のビームライフルに、超高出力のビームサーベルまで備えた、理不尽の権化とも言える機体。

だと、言うのに。

『何故だ……!?!』

それを駆るガンダイバーは、眼前に見える事態を受け入れられそうになかった。

青き狂戦士たる、シユツルムジンライ。

白き聖騎士たる、ジャツジムメント。

多少腕に覚えのあるダイバー二人など、すぐにケリが着くと高を括っていた。

しかし、現実ではどうだ？

まるで見えない糸に繋がっているかのような、完璧なコンビネーション。

前衛と後衛が変幻自在に入れ替わり、攻防共に付け入れられない。

対する自身にはダメージこそほとんど入らないが、確実に被弾している。

このGBNにおいて絶対的な機体であるGBN―ベースガンダムを使用しているのに、

『何故、倒せんのだ!?!』

何故だ何故だと喚くばかりだった。

半ば薄れゆく意識の中で、ハバキリはコンソールを叩き、機体の状況を確認める。

さすがはコーダイと綿密に相談した末に完成されたシュツルムジンライだ、まだ機体が保つてられている。

だが、問題だらけだ。

「推進剤は残り11%、ビームカービンはあと二発しか残ってねー。ついでに言えばシースザンバーも限界か」

ハバキリはウエポンセレクターを打ち込み、シースザンバーのロックを外し、その鞘の中から斬鋼刀を抜刀した。

「ハバキリ、まだ行けるか?」

トーシローからの通信も、聞こえてはいるがそれどころか臆げだ。

「……もーなんも残ってねーな。辛うじて”コイツ”が使えるかどーかってとこだな」  
トントン、と斬鋼刀の峰で肩を叩いて見せるシュツルムジンライ。

生唾を飲み込み、腹を据える。

ハバキリの目的は、急所を狙った一発勝負の一点突破。

しかしあの機体の装甲は未知数、ビームライフルは通らない、ビームサーベルもダメージが低い、実弾は跳ね返され、物理打撃も効果が薄いと来たものだ、随分とデタラメな性能をしているらしい。

だが、他に打開策が無いのならやるしかない。

否、やるしかないのではない。

0.001%でも勝機があるなら、それを全力で手繰り寄せ、貫き通す。

「……」仕掛ける。合わせろ」

「了解」

短いやり取りだが、たったその二言だけでハバキリとトローシローは互いの役目を理解する。

が、

『少し待ちたまえ』

グツ、と脚を踏み込む一瞬前、何者かの通信が割り込んだ。

『こちら、極東ベース司令部、元ゲームマスターのカツラギだ』

発信源は、まさしく極東ベースの司令部から。

その音声 flowed 途端、GBNベースガンダムから動揺したような声が届く。

『な……何を言うかつ!? 私こそがカツラギだ! なりすましたつもりかつ!?』

『さて、”私に”なりすましてるのはどちらだろうな』

カツラギ同士(?)による通信は、当然ハバキリとトーシローにも聞こえている。

「……おいトーシロー、どゆこったこりゃ」

「どうやら……僕が今までカツラギ氏だと思っていたガンダイバーは、”偽物”だったらしいな?」

「何で疑問形なんだよ」

落ち着きを払い、悠然と構えるガンダイバーと、声が震え、慌てたように饒舌になるガンダイバー。

どちらが”元ゲームマスターらしい”のか、一目瞭然とも言える構図だ。

司令部にいる方のガンダイバーが話を切り出した。

『では、ひとつ問おう。貴様は”マスターコード”と言うものをご存知か?』

『な……何だそれは?そんなものは聞いたことがないな、私の知らないことを並べて立てて、自分のほうが上位だとも言うつもりか?』

『そうか、知らないのだな。では、今ここで実践して見せよう』

パチン、と司令部にいるガンダイバーがマニピュレーターを鳴らした。

不意に、GBNベースガンダム赤いボディが見る内に黒灰色に染められていく。

『なにつ、VPS装甲が……パワーダウンだと!』

コクピットにいるガンダイバーは慌ててコンソールを叩き、耐ビームコーティングの装甲とIフィールドバリアに切り替えようとするが、ゲインアーマーの設定切替がブロックされていることに気付く。

それだけではない、コクピット内にいるガンダイバーの姿が、いきなりゲストアバター姿の『ハロ』に切り替えられる。

『お分かりかね？ マスターコードは、私を含む開発に直接携わった者の中でも、指折りの人数しか知らない。やろうと思えば、今すぐ貴様をGBNからつまみ出し、アカウントを削除してやってもいい』

『なっ、な、な……』

『私に濡れ衣を着せて動きを拘束させ、その隙にハッキングして私のアカウントを複製、盗用する』……見事と言いたいが、違うな』

化けの皮が剥がされた。

どちらが”なりすまし”か、これで確定だ。

『……だが、私とてそこまで鬼になるつもりはない。本当に現運営陣に反乱を起こし、メスを入れる必要があったのなら、カツラギの名前と、ガンダイバーのアバターなど、好きに使えばいい』

だが、と目を細める”本物の”ガンダイバー。



『ここは、"ガン普拉バトル"・ネクサスオンライン。選択を決めるのは、いちプレイヤーの声ではない。ならば、その意思の押し通し方は知っているだろう?』

もう一度指を打ち鳴らすと、GBN―ベースガンダム of 装甲がサーモンピンクに近い赤色に切り替わる。

しかし、この装甲に耐ビームコーティングはなく、Iフィールドバリアもなければ、VPS装甲もナノラミネートアーマーもない、ただのルナ・チタニウム合金の装甲だ。

軽量で頑丈ではあるが、絶対無敵ではない。

『勝ち取ってみせろ。以上だ』

司令部からの通信が切られた。

それを皮切りに、ハバキリは回線をオープンに切り替え、とりあえず挨拶代わりに挑発した。

「おい”パチモン”。化けの皮剥がされてフル・フロンタルにされた気分はどーだパチモン。全世界にてめーの醜態が公開中だぞパチモン。だからてめーはパチモンなんだよ。分かったか、”ゲームマスターの出来損ない”」

『ぬ、ぐ、う……ッ』

「出来損ない」呼ばわりされ、GBN―ベースガンダムの中にいるハ口はその丸い機体を震わせている。

だが、すぐにそのフレキシブルアームから伸びたマニピュレーターでアームレイカーを握り直す。

『やってやる……やってやるぞ！ここで』俺が勝てば！GBNなんて”パチモン”を廃止にして、もう一度『GPデュエル』を復活させることが出来るんだ！』

GBN―ベースガンダムは徐にビームライフルを構えてトリガーを引き絞った。

ビームマグナム級ではないが、十分に高い出力のビームがハバキリとト―シローに襲い掛かってくるが、

「ハバキリ！」

「オーライ！」

示し合わせたかのように、シユツルムジンライとジャツジムメントが散開、その二機の間をビームが通り抜けた。

シユツルムジンライは残り僅かの推進剤を全力で使い切る勢いでGBN―ベースガンダムの背後へ回り込み、ジャツジムメントはシールドで身を守りつつビームライフルで牽制する。

対するGBN―ベースガンダムも、ガンダイバーから指定された機動性を駆使してビームを避けてはシールドで防ぐ。

どうやら、元はGPデュエルのプレイヤーらしく、素の実力は相応にあるようだ。

だが、いくら操作系統がほぼ同じとはいえ、それはあくまでも『GPデュエルでの実力』であって、『GBNの中で培われたものではない』

「であればー！」

トーシローはウェポンセレクターを開き、左右のビームライフルのコマンドを切り替えてから再び波状射撃を仕掛ける。

銃口から放たれるのは、ビームマシンガンのようなビーム弾の連射だ。

そして、そのビーム弾が狙っているのはコクピットではなく、四肢の関節や頭部。

『くっ!?』

GBN―ベースガンダムはすぐにシールドで機体の前面を隠して身を守る。

GPデュエルはGBNとは異なり、実物のガンプラを動かして戦わせ、その際に負ったダメージは『ガンプラの破損がそのまま実物にも反映される』と言うもの……つまり、バトルが終わっても、壊れたままの状態で返ってくると言うものだ。

そのため、大半のGPデュエルプレイヤーは反射的に被弾することを恐れ、『相手を倒す』ことよりも『自機がダメージを負わない』ことを優先するケースが多く、攻防一体の武器や、装甲を分厚くすると行った防御的な工夫を凝らしている。

一部のプレイヤーの中では『防御力は最低限に留め、攻撃に特化する』と言う”殺られる前に殺る”スタンスのものもいるが、これによってGPデュエルでは耐ビームコー

テイニングによる防御力の強化が重点される。必須条件のひとつとして数えられる。

トーシローはこれを逆手に取り、『相手を倒す』ことよりも『敵機に確実にダメージを与える』ことを優先した。

例え一撃が弱くとも、脆い可動部などに当たれば、そこを基点にどんな二次被害が出るかわからない……そんな心理的な圧力を掛けさせているのだ。

事実、彼の狙い通り、GBN―ベースガンダムは被弾を警戒してか、なかなかシールドの内側から機体を見せない。

一発辺りの出力を絞っているビーム弾では、シールドに弾かれて拡散するだけで、大したダメージは与えられない。

だが、それでいい。

『足を止めさせること』がトーシローの目的なのだから。

GBN―ベースガンダムが足を止めている間に、その背後からシュツルムジンライが、斬鋼刀を構えて迫り来る。

ジャツジムメントが囷になって注意を引きつけ、その背後へシュツルムジンライが斬り掛かると言う魂胆らしい……そう見抜いたGBN―ベースガンダムは、多少の被弾を承知で、背後を見ることなくビームライフルを放った。

『もらったぞー！』

しかし、そう来ることはハバキリの想定の内、シュツルムジンライはそこで斬鋼刀を振るい、ビームを弾き斬る。

そのまま斬鋼刀を振り上げ、GBN―ベースガンダムもまた左手にビームサーベルを抜いて迎え撃つ……

「……へっ」

その寸前、ハバキリは薄く笑った。

すると、斬鋼刀を振り下ろすはずだったシュツルムジンライは、『斬鋼刀を振り上げた姿勢のまま通過した』

『なっ?』

迎え撃つためのビームサーベルが空振りするGBN―ベースガンダム。

機体の不調でも起きたのか?

そのことに一瞬とは言え、動きが硬直する。

しかし、次の瞬間には硬直が驚愕に変わった。

「ト―シローッ!」

「おうとも!」

ジャツジムメントはシールドで身を固めてその場で踏ん張るような体勢を取った。

シュツルムジンライは一瞬だけスラスターを切って、ジャツジムメントのシールドに

フット裏を向けて、

”壁キックを行った”。

『何い!?!』

壁キックの跳躍と同時に、再びスラスターを加速させ、真つ直ぐに硬直するGBN―ベースガンダムへ突撃する。

が、

「(……あつ、ダメだこれ”外した”)」

機体ごとぶつかると同時に、斬鋼刀の切っ先がGBN―ベースガンダムの”フロントスカーフト”を貫いた。

本来なら、斬鋼刀の刃はGBN―ベースガンダムのコクピットをまともにぶち抜いていたはずだった。

あとわずかか、ほんの少しだけ、『シユツルムジンライの推進力が足りなかった』  
掛けていたリミッターが、こんなところで思わぬ足枷になっていたのだ。

つまり、GBN―ベースガンダムはまだ”生きている”。

『ハハッ……残念だったな。GBNなんてヌルゲーじゃ、推進剤の管理は出来なかった

みたいだな』

密着した状態のまま動かないシュツルムジンライへ、逆手に持ち替えたビームサーベルを突き刺そうとする。

「チツ、ここで仕留められりや……」

だが、ハバキリにはまだひとつ隠し手ージョーカーを仕込んでいた。

「こんな死ぬか死にかけるかの超スーパージャパンブルに出ねーで済んだんだけどなッ!!」

ビームサーベルがシュツルムジンライの装甲を焼く寸前、ハバキリはウエボンセレクトターの『SP』コマンドを押し込んだ。

ー瞬間、シュツルムジンライのスラストター群が爆発を起こした。

その爆発そのものが推進力となって、停止していたシュツルムジンライが突然急加速し、斬鋼刀が突き刺さったままのGBNーベースガンダムを押し運ぶ。

『んなっ……!?!』

いきなり体当たりをされて、GBNーベースガンダムはビームサーベルをマニピュレーターから落とし、無抵抗のままシュツルムジンライに押し込まれ、上へ上へと上昇して行く。

そう。

これこそがシュトルムジンライの『リミッター解除』である。

その解除とは至極単純、スラスター群を自爆させ、その爆発に推進剤を引火させることだ。

ほんの一瞬だけなら音速すらも上回る速度を叩き出せる。

が、スラスターを全て失うためそれ以降の戦闘機動が出来なくなる。

それ以前に、ダイバーの安全を完全無視した超加速は、それを行った瞬間、ライフを失って強制ログアウトされるのが関の山である。

リミッターを解除した速度の中、ハバキリはもうほとんど意識が無かった。

だが、無いに等しい感覚でコンソールを打ち込み、その中からスティック状のスイッチを取り出す。

『おいやめろーこんなことをすれば、お前だって無事じゃ済まないぞ?!』

相手のハ口からそんな声が掛けられるが、ハバキリはもう聞こえていない。

爆発に任せた超絶的な加速は、機体が耐えきれなくなっているのか、シュトルムジンライの装甲が剥がれ、砕けていく。

ハバキリはもう一度コンソールを打ち、『コクピットハッチを開き』一雲を突き抜けるかのような上空からそのまま飛び降りた。

「(わりーなジンライ。オレのために、”死んでくれ”)」



身体が宙に放り投げられ、シュツルムジンライとGBN―ベースガンダムが遠ざかっていく。

その光景を見送りながら、ハバキリは聞こえない自分の声で呟いた。

「失せろ」

その一言と共にボタンを押し込むと、バラバラに空中分解していくシュツルムジンライの内側から眩い光が漏れ始め――

『やつ、やめろおおおお……』

――大爆発した。

シュツルムジンライ、撃墜。

「(あー……なんとかなかったけど、こりやおレも死ぬな)」

パラシュートパックなんてものは装備していない、このまま地表に激突するのを待つだけだ。

「(それにこんなことまでしたって、ジルが生き還るわけでもねーし……)」

あの偽のガンダイバーを殺したわけでもなく（犯罪を犯していることは世界中に知られているので社会的には死ぬだろうが）、それを為したところでデリートしてしまったジルが再生されるわけでもない、ただの自己満足。

それでも、こうでもしなければきつとやり切れない思いがあつたことは間違いない。ふと、落下しているハバキリの元へ、ステラとノーベルガンダムと、ハルナの麗桜姫頑駄無が向かつて来るのか見えた。

「兄さー！ー！ーんツ!!」

ノーベルガンダムはハバキりに接近すると、コクピットハッチを開けながら彼の真下に回り込み、ステラはアームレイカーから手を離し、コクピット内に落ちてきた兄を抱き止め、切れずに仰向けに倒れる。

ステラの制御の手を離れたノーベルガンダムは失速していくが、麗桜姫頑駄無が機体を支え、ゆっくりと降下していく。

「兄さんっ、兄さんっ、しっかりしてくださいっ!」

ハバキりに押し倒されたような形になったステラだが、それを意に介することなく呼び掛ける。

「……うるせーぞステラ、疲れてんだから寝かせろよ……!」

「良かった……兄さんが無事で良かったあ……!」

いつも通りの兄の反応を聞いて、ステラは自分を押し倒しているハバキリの背中に手を回して抱きしめる。

「もうっ……なんで兄さんは無茶なことしかないんですかつ」

「おー……何つつたつて無茶はオレの専売特許、無理はオレの十八番だからな……」  
次第に、ノーベルガンダムと麗桜姫頑駄無が着陸した。

ふと、聞こえるはずの戦闘の爆音が急に止まった。

恐らく、反乱軍の総大将たるGBNベースガンダムが撃墜したことによって、NP Dリーオー部隊は機能停止したのだろう。

「ハバキリ（くん）ー!!」

ハバキリの名を呼ぶ声と共に、フルドレスフリーダムガンダム、キャノパルド、ガンダムスレイザー、七星剣士エクシア、僅かに生き残ったオペレーション・インテンションに参加した者達が、ノーベルガンダムの元へ集まってくる。

この戦いに、ようやく終幕が訪れたー

ー

『ハハッ、ハハハハハッ……ホント、惜しかったな』

シユツルムジンライの自爆をまともに受けたはずのGBN―ベースガンダムは、まだその機能を停止していなかった。

極東ベースから随分遠く離れた荒れ地に倒れ込んでいたGBN―ベースガンダムは、歪みへしやげた装甲を徐々に”自己修復”していた。

これは、▽ガンダムやターンXなどが持つナノマシンによる自己修復機能を持った装甲―ナノスキン装甲だ。

全権をガンダイバーに没収されたこのハロだが、咄嗟ながら辛うじてハックに成功し、ナノスキン装甲をこの機体に組み込ませていたのだ。

おかげでGBN―ベースガンダムは、徐々にその力を取り戻していく。

あともう数分もすれば、完全に回復する。

そんな時に突如、何者かのガンプラが接近してくることをコンソールが告げてくる。

『クソッ、まだ死んでないって勘付かれたか?』

機体修復を中断し、機体を立ち上げるハロ。

現れた機体は―グレーと黒紫色のツートーンに塗装されたザクIをベースに、機体各部に”黒龍”の意匠を象った、もはやザクなのかどうかも怪しい機体。

それは、かつて『ダークネスマスターザク』と呼ばれた機体であった。

ひゃーっはっはっはっ、と感情を処理出来ぬゴミのような高笑いを上げながら、腕組みした状態のまま着陸した。

「諦めが悪いぞ、大人しく縄につけい」

着陸すると同時に、ザクイー機体銘『ザクリュウ』と言うらしい機体からの通信が届いた。

『はっ、誰がこんなところで降参なんぞするか！GPデュエルを復活させるまで、俺は止まるわけにはいかねえんだ！』

GBN―ベースガンダムは、もう片方のビームサーベルを抜き放って対峙する。  
「降参しないのだな。分かった」

瞬間、ザクリュウはその場で腕組みをした状態のまま動くことなく―”その姿が六機に増えた”。

『ハアツ!?なんだそりやつ、チートか!?!』

「なんだ、分身の術も知らんのか?GPデュエリストなら、ガンダムシユピーゲルの性能くらい理解出来るであろう」

六機に増えたザクリュウは、それぞれが独立して動き始め、一斉にGBN―ベースガンダムへ襲い掛かる。

ビームサーベルを振り回すGBN―ベースガンダムだが、それも瞬く間に弾き返され

るとー四方八方から殴打と蹴脚が浴びせつけられていく。

『なっ、ふっ、ふざけんなっ……こんなっ、こんなことが……』

一際強く蹴り飛ばされ、GBN―ベースガンダムはズタボロにされて地面を転がった。

「さて、もう一度言おう。大人しく縄につけ」

『クソがあああああアアアア!!!』

スラストーもまともに機能しない機体で殴り掛かろうとする。

投降に応じるつもりは無いと見てか、ザクリユウは自身の分身体を消失させると、その場で構えを取る。

「ならば受けてみろい、東西南北中央不敗ヶ究極最終奥義！」

スラストーを使うことなく、自機の跳躍力だけで天高く飛び上がるザクリユウ。

あ、そおい！と空中でムーンサルトを決めてみせるとー

「だからお前はアホなのだ!!」ホウオアチャチャチャチャチャチャチャチャチャチャ  
チャチャチャチャチャチャチャチャチャチャチャチャチャチャチャハアツチャー……ツ  
!!!!!!!」

止まっているようにしか見えないーしかし実際には凄まじい速度で浴びせ蹴りが

放たれている。

スタツ、とGBN―ベースガンダムの後へ無駄に格調高く降り立つザクリユウ。

「俺はもう、蹴っている」

その決め台詞の直後、GBN―ベースガンダムは必要以上に派手に爆発していった。

GBN―ベースガンダム〔キャスバル専用カラーバリエーション〕、撃墜。

『カツラギ氏のなりすましダイバーによる反乱は、ここに鎮圧された。ガードフレーム各機は、全機帰投せよ』

極東ベースの現ゲームマスターから発信された宣言により、展開していたGBNガードフレーム達は次々に帰還していく。

そんな中、オペレーション・インテンションに従事していた者達は、酷く大きなショックを受けた。

それは、ハバキリ本人の口から告げられた『ジルの救出失敗』の顛末。

ジルは確かに自分の目の前で“デリート”してしまった、と。

既にそれを知っているセアは静かに涙を流し、コーダイはその場で膝を着いて「何だよ」と地面を何度も殴り、サツキーは帽子で顔を隠して嗚咽を漏らし、エミルはばつ

の悪そうに歯噛みした。

コキュートス、元アルディナのメンバー達も、各々反応は違えど『彼らの大切な人が死んだ』ことへの悲しみや、助けられなかったことの悔しさを隠さなかった。

ステラだけはハバキリに八つ当たりした。「どうしてジルちゃんを助けられなかったんですか」と。

ハバキリはただ「すまん」としか言えなかった。

トーシローのジャツジムメントは、その様子を遠巻きから見ていた。

自分の本懐を為すためだったとは言え、こんな結末になるとは思わなかった。

だが、今ここで姿を晒そうとは思わない。

自分は今、あの中に関わってはならない、関わる資格などない。

間接的にと言え、自分は彼女を殺したことに関与していたのだから。

故に何もすることなく、ジャツジムメントは踵を返して飛び去った。

現ゲームマスターの反乱終息宣言の直後、ある場所で一人の男が警察によつて逮捕された。

不正取引の捏造、犯罪行為の他人への押し付け、個人情報のハッキング、複製盗用、S



NS混乱の誘発、e t c……決して軽い犯罪ではなく、処分には時間を要した。

匿名ではあるが今回の事件の主犯者は「自分はただ、自分の好きなことをもう一度広めたかっただけだ」と容疑を自認していた。

開発陣からは、『過去のブレイクデカール事件もGPデュエルの熱狂的信者によって行われたことであり、このような事件の再発防止には、限定的ながらGPデュエルの関連商品を再販すべきではないか』と言う意見が挙げられた。

しかし、元GPデュエルプレイヤーの中には『GBNの方が良い』と言う意見もあり、やはり二分されることとなる。

アンケート調査と、それを元にした協議の末、『GBNとGPデュエルはそれぞれ別のコンテンツとし、GPデュエルの関連商品の一部再販決定』が可決された。

しかし、彼らリーフォース・リヴエルタとその関係者は戦いには勝ったが、作戦には失敗し、それ以前に『大切なものを失った』ことに変わりはない。

この事件は背後関係も含めて、後に『GM（ゲームマスター）の乱』と呼ばれるようになったが、この乱の全容を知る者は、少ないリーフォー。

それから、幾日かが経った。

フォース・リヴェルタの面々が一同に揃うことは少なくなっていた。理由は分かっていた。

ジルと言う、メンバーの損失。

彼女はもう二度と、自分達の前に現れない。

GBNにログインする度に、「ジルを失ってしまった」と言う悲しみを思い出し、まうからだ。

仮にログインしたとしても、ミッションを受けることも無く、ただ無為に過ごすことも増えた。

そんな日々の中、セアは放課後の教室で溜息をひとつついた。

「はあ……」

「幸せが光の速さで逃げそうな溜息だね」

その彼女に声を掛けるのはカナデ。

カナデもインターネットの配信動画を通じて『GMの乱がどうなったのか』の顛末は知っている。

だが、ELダイバーのフレンドージルがどうなったのかまでは分からず、セアに直接聞かなくてはならなかったが、セアの言い淀む様子見て、事を察した。

恐らく、助けられなかったのだと。

席に座ったまま動かないセアの、前の席につくカナデ。

「ELダイバーについて少し調べてみたんだけどね……ELダイバーって、デリートされた後は『データの海』って場所に残されるみたいで、”全く無かったことにはならない”みたいだね」

「……」

それを知ったところで何になると言うのか。

「それってさ、電子の身体だけが消えるだけで、記憶とか心とかは残ってるってことだよ  
ね」

「どう言うこと……?」

「素人意見だから確証は無いんだけど。そのデリートされたELダイバーの身体を復元出来れば、その子は生き返るんじゃないかなって」

一度死亡した人間は生き返らないのは、脈が止まった時点で身体機能が停止し、腐敗が始まるからだ。

だが、ELダイバーの場合はどうか。

単に肉体を構築しているデータが消失するだけで、記憶や感情などはそこから切り離され、GBNのデータ中枢に残される。

つまり、記憶や感情の”器”があれば、肉体データの差異はあれど、心はそのままに

なるのではないかと、カナデは言うのだ。

「……」

それを聞き取り、セアは頭脳を回転させ——

「……あつ！」

非現実的、だが一抹の望みはある、そんな妙案。

「何か、閃いたみたいだね」

「うんつ、うんつ、落ち込むにはまだ早かったみたい！ありがとうカナちゃん！」

こうしてはいられない、とセアは鞆を引つ掴んで教室を飛び出していく。

彼女の中には、以前にアーモリーで回収した、“ジルのデータ破片”のことが思い浮かんでいる。

通話の着信を告げ、眼鏡を掛けたエルフ型の男性が応じる。

「はい、こちらELバーセンサーです。……デリートされたELダイバーの再構築？

それは、現状ではほぼ不可能です。膨大な中から特定のデータだけをサルベージすると言うのは……、……サルベージではない？それはどう言う……、……はい、はい。……分かりました、確約は出来ませんか、ベストを尽す所存です。それと、そのELダイバー

の画像……全身が写っているものが望ましいですが……はい。……はい、確認しました、ありがとうございます。……フォース・リヴェルタの、セアさんですね。それでは、また折り返し連絡させていただきます。……はい、失礼致します」

通話を終えて、エルフの男性は、近くでコンソールを相手に格闘をしている『目付きの悪い紫色のハロ』に話し掛けた。

「ツカサ、仕事の時間だ。今回はいつもと少し違う」

コンソールの画面から視界を外さないままに、ハロは応じる。

「あん？どう言うことだコーイチ」

「今さっき頼まれたのはサルベージじゃなくて、『ELダイバーの電子の肉体の再構築』だ。少しばかり大掛かりなことになりそうだぞ」

「……詳しい説明をしろ」

……

……

……

「出来そうか？」

「……理論上は不可能じゃねえ。だが、どうやっても100%完全については無理だ。

「どんな結果になっても文句は言うな」とだけは伝えとけ」

「分かった」

言葉短く、二人は作業に取り掛かった。

12月。

学期末の戦場――期末考査も乗り越え、あともうじきもすればクリスマスと言う時。ハバキリは自室で、愛機であるシユツルムジンライに手を加えていた。

殺人的な負担をダイバーに強いることなく、本来の機動力を可能な限り追求した改良を行っているのだ。

それも、じきに終わる頃だ。

「ふー……」

作業が完了し、ハバキリは一息つく。

あとはGBNで試運転をするだけだ。

ふと、ダイバーギアにメツセージの着信が届く。

発信者は、セアからだ。

「なーんだ」

端末を手に取り、メツセージの画面を開き、その内容を目に通した。

「……、……テラスッ！」

ハバキリはダイバーギアを持ったまま部屋を飛び出し、すぐ向かいのテラスの部屋のドアを蹴破った。

「ど、どうしたんですか兄さん？」

ノックしなかったことを怒ろうとしたテラスだが、兄の鬼気迫るような顔を見て、それどころではないと察する。

「これを見ろ……っ！」

ダイバーギアの画面を見せるハバキリ。

『もしかしたらジルちゃんに戻ってくるかもしれない』

そう表示されていた。

一ヶ月ぶりに、フォー・ス・リヴェルタの面々は現実世界の方で集まっていた。

場所は以前と同じ、シーサイドベースのガンダムベースだ。

ハバキリ、セア、コウダイ、サツキ、メグミ、テラスの六人はこの日を今か今かと待ち侘びていた。

今日は『ELダイバーの器である“モビルドール”の受け取り日』の予定日だからだ。

セアが、ジルのデータの破片を手に『デリートされたELダイバーの再構築』についてELバースセンターに相談してみたところ、難しいとされながらもこれを快諾してもらえたのだ。

折り返しの連絡を受けた際は『件のELダイバーの再構築に成功しました』とのこと。それが本当なら、とても喜ばしいことだ。

「……それにしても、まさかお前まで来るとは思ってたねーぞ、トーシロー」

「旧友のよしみと思ってくれると助かる」

ハバキリやコウダイと同じくらいの少年。

彼は『シナノ・トウシロウ』、GBNで言うところの『トーシロー』である。ちょうど、

GBN上では長髪であった髪を短くしたような容姿だ。

「まあまあ、いがみ合うことはねえだろ？昔とは言え、俺達仲間だったんだからよ」

二人の間を取り持つのはコウダイ。

実は、『GMの乱』の後、トーシローは自らフォース・リヴェルタのフォースネストの戸を叩きに来たのだ。

ELダイバー・ジルのことについて謝罪をさせてほしい、と。

セアはそれを許し、サツキーとエミルは完全に納得しないながらも、過ぎたことは気にすまいとした。



が、旧友であつたハバキリとコウダイだけは少し違つた。

二人揃つて「歯あ食い縛れ」と一言置いてから、

思い切りトーシローの頬を一発ずつぶん殴つた。

トーシローが直接ジルを殺したわけではない。

だが、例え結果論だとしてもそれに協力していたことに変わりはない。

よつて、一発ずつ殴る、と言うことでチャラにしたのだ。

そして、ジルが帰ってくるかもしれないと聞いた時、コウダイはトーシローにも連絡を入れていた。

「せつかくの機会だ、ジルちゃんにも直接謝つとけ」と。

その誘いを受けて、トーシローは『シナノ・トウシロウ』として、今日のモビルドールの受け取りに馳せ参じたと言うわけだ。

色々つまらない意地や蟠りはあつた。だが、それも今日で全て清算したいと、トウシロウは言う。

予定時刻になり、七人はガンダムベースへ入店する。

受付所には、受取人としてセアが出向き、身分証明として学生証を提示し、伝票にサインを書き込む。

そして、ちょうど144スケールのガンプラが納められそうな小さなケースを受け取る。

受け取り完了後は、ダイブルームに入室する。

モビルドールをGBNに接続し、ELバスセンターから送信されるデータの受信を行うためだ。

ケースが開かれると、中にはクッション材に包まれた、手のひらサイズの”ジル”が眠っている。

「緊張するなあ……」

本当にジルと再会出来るのかと、サツキはそわそわする。

スキャナーにモビルドールが設置され、読み込まれる。

ELバスセンターとのマッチング、完了。

受信を確認。

ログアウト。

すると、

「……………」

モビルドールの”目が開いた”。

ジルは、ここに目覚めることが出来たのだ。

「ジルッ！」

それを見て、ハバキリが真つ先に飛び付いた。

「ひうっ」

飛び付いてきた彼を見て、ジルは怯えたように尻餅をついた。

「だ、”だれ”……？」

「つと悪い……オレだよ、ハバキリだよ」

いきなり驚かせてしまったかと、ハバキリは少し身体を離す。

「……”知らない”、”誰？」」

「「「「「ツ!?!」」」」」」

その場にいた全員が青褪めた。

ジル……”彼女”は、ハバキリのことを覚えていないのか？

つまりそれは、『自分の記憶が無い』のと同じだろう。

そこで「あつ」とセアが気付いた。

”完全じゃない”って、ここう言うことだったの……？」

セアは、E.L.バースセンターから注意事項を受けていた。

元よりデータが不完全であるため、100%前と同じようにはならない、と。

確かに”ジル”と言うE.L.ダイバーは再び生を受けることが出来た。――記憶を失った状態で。

「でもセアさん、記憶を失っているんじゃないか……」

メグミは声を震わせた。

これではただ虚しいだけではないか、と。

しかし――

「……ハバキリ、セア。なんか……懐かしい気がする」

その二人の名前を聞いて、ジルは懐かしきを感じていた。

知らないはずなのに、その名前に聞き覚えがある、と。

完全に”知らなくなってしまう”ではなかったのだ。

それなら、これから少しずつ思い出していけばいい。

懐かしいと聞いて、ハバキリは涙を堪えて、そつとジルに手のひらを差し出した。

「……」 おかえり”、ジル」

彼の手を見て、ジルはじー……つと見つめて、そー……つと指先に触れた。

「えーつと……た、”ただいま”、ハバキリ？」

ただいま。おかえり。

そんなありふれたやり取りが、今はひどく愛おしかった……。

「……と、言ったところだな」

トラちゃんは、ようやく昔語りを終えた。

「ひとつ、質問いいかしら？」

マイマイは問い掛けた。

「なんでE.L.ダイバー……：ジルちゃんは記憶が無かったはずなのに、みんなのことを思い出すことが出来たの？」

バーテンダーやケンさんもその辺りの顛末が知りたいようで、耳を傾けている。

「ふむ。ジル嬢のデータの破片は、あくまでも不完全なのであって、”全く記憶がないわけではない”。それでも思いだそうには情報不足のはずだが……」

そうだな、と一言置き、ある一人のE.L.ダイバーを思い浮かべる。

”誰かがジル嬢の願いを聞いて、手助けをしてやったか……と俺は考えている”

「分かんない話ねえ」

マイマイはお冷を傾けて一気に飲み干すと、カウンターの向こう側にグラスとコップを返す。

「つと……ママ、ご馳走さま。あたしそろそろ帰るわね」

「はーい、お疲れ様♪」

バーテンダーはグラスとコップを流し台に移動させつつ、ログアウトしていくマイマイを見送る。

「さて、なら私もそろそろお暇するでしょう。バカ娘が帰ってこいとどやされる前にな」

ケンさんも『俗物』を飲み干すと、それをバーテンダーに返却する。

「はいはい、1100ビルドコインよ」

「うむ」

ケンさんは手羽を数度押し込み、コンソールから端末へ送金する。

「では、失礼する」

送金を完了させてから、ケンさんもログアウトしていく。

「ふむ、すっかり長居してしまったな。俺もそろそろ帰るとするか」

ワインに日本酒、コーヒー、随分と盃を傾けたものだ。

トラちゃんはケンさんと同じようにコンソールを打ち込み、バーテンダーの端末にビルドコインを送金する。

「あらあら、急にみんな帰っちゃうわねえ」

お帰り寂しいわ、とバーテンダーは苦笑する。

「明日には、また准将からのご指示があるからな。では姐さん、ドリンクバーだ」  
「そこは、サラダバーじゃないのね」

さらばだ、と言いたいらしい。

するとトラちゃんはその場でログアウトするのではなく、戸を開けてドアベルを鳴らしながら退店していった。

夜道を歩くその最中、上空から風切り音が聞こえた。

視界を上へ向けると、複数のガンプラが通過して行くのが見える。

青灰色のジン。

純白色のフリーダムガンダム。

深紅色のガンキャノン。

暗緑色のガンダムデスサイズヘル。

S Dの蒼いガンダムエクシア。

色違いのノーベルガンダム。

白銀のジム・クウエル。

そして、『桜色のモビルドール』

その八つの機影を見送り、再び歩き出すトラちゃんー 『カゲトラ』

E  
N  
D

GBNの夜は、  
まだまだ明けそうにない。